

金色の刃

ちゃんエビ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔戒騎士　それは闇に潜み闇を切り裂く魔戒の剣士

鬼の蔓延る世界で鬼狩りを目指す少年は希望を意味する称号を受け継ぐ　闇を照らす希望の光が心を開く事を信じて

希望の少年と心を閉ざした少女

2人の兄妹が織りなす物語

目次

饗宴	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	
帰還																									
漆黒																									
輝炎																									
夢																									
暗雲																									
心滅																									
呼吸																									
選別																									
蝶屋敷																									
光明																									
柱																									
激動																									
系譜																									
影																									
兄妹																									
氷炎																									
凱旋																									
試練																									
家族																									
邂逅																									
追憶																									
煌き																									
願い																									
	465	431	382	350	319	288	261	242	220	206	184	158	136	121	108	95	82	70	53	39	26	16	5	1	

2
4

厄
災

499

鬼 それは人を喰らい、人を恐怖に陥れる異形の存在
人より優れた身体能力、不死身ともいえる再生能力
自身の血を媒介とし超常的な力を発揮する鬼特有の能力

『血鬼術』

鬼を前に人はなす術なく餌となる
鬼を人を餌としかみてないのだから
だが、そんな鬼に対抗する人もいる

独特の呼吸で鼓動を体温を血流を操作し
常人を超える身体能力を駆使し、

鬼を狩る剣士 “鬼殺隊”

鬼の唯一の弱点である太陽の光を浴びた特別な刀を振るう鬼殺の
剣士

その刃で頸を断ち切り、人を守る鬼狩りの組織

鬼の脅威から人を守る為、大切な人を、かけがえのない家族を鬼に
殺

され復讐する為、中には結婚相手を探す為と変わった理由の人
もい

るが鬼を狩る為に戦っている人々がいる。

鬼は太陽の光をその身に浴びるか、特別な刀 日輪刀で頸を刎ね
るしか殺す手段がない。

だが……例外があるとしたら……

「ザルバ……濟まないな、お前の後継者を……」

「気にするな、俺様は暫く眠るとする……お前のように

な」

「ああ……ザルバ……いつか必ず現る……闇を照らす希望が」

「その希望がこの世界の不変を変えると信じてか？」

「そうだ……人々の想い、願いを受け継ぎ未来を紡ぐと信じて」

「お前は相変わらずだな．．昔から」

「それが守りし者の、牙狼を受け継ぐ者の．．．」

「お前の願い、俺様が受け継ごう．．だからもう休め」

「ああ、今までありがとう．．ザルバ．．後はお願いします

．．．お館．．様ー」

「君の意思は私達が、繋いでみせるよ。君の言う希望が

鬼を．．鬼無辻無惨を討つその日まで」

「．．．．．」

「お館様、牙柱様が息を引き取られました」

「．．君の冥福を祈ろう、来世では鬼のいない世に産まれるように

いや、私達がその世を．．鬼無辻を必ず」

（2日後）

「皆、急に呼び出して済まなかったね。こうして皆が顔を出してくれる事を嬉しく思うよ」

お館様こと鬼殺隊現当主 産屋敷 輝夜が口を交わす。

「お館様も健常でなにより、益々の御多幸をお祈りします。」

お館様にそう返すのは、現水柱 鱗滝 左近次

柱とは鬼殺隊の最高位に位置する者 最強の鬼殺隊員に与えられる名誉である。

「ありがとう、左近次．．早速で申し訳ないが本題に入りたいのだが良いかな？」

「構いません」

「では．．皆も既に知ってると思うが2日前に牙柱 暁 大牙が天寿を全うしたよ」

輝夜がそう告げると場の空気に緊張がはしる

「彼は柱として皆を率い戦い抜いてきた立派な剣士だった

誰よりも人の命を、未来を想い．．．．．すまない、涙が」

輝夜が涙を流すと、いつしか他の柱も涙を流していた。

「あの方は我らを導き共に死線を潜り抜けてきた、立派な方でした。死と隣り合わせの中、天寿を全う出来た事を私は誇りに思います。」

涙ながらに鱗滝が告げる。

「そうだね、私も彼のことを誇りに思うよ」

「大牙先生はとても強い方でした。上弦の壺と戦い抜いて帰ってこられた唯一の……ううう」

大牙を師と仰ぎ尊敬するのは、大牙の弟子であり大牙の推薦で新たな柱に就任する予定の女性　四ノ宮　蓮花である。

彼女の言う上弦の壺とは

鬼の総大将である始まりの鬼　鬼無辻無惨

その直属の配下である12匹の鬼　十二鬼月

その十二鬼月最強の座に座る鬼の事である。

「彼はとても強く誇り高く、まさに鬼殺隊の希望ともいえる存在だったね」

輝夜が蓮花にそう告げる

「はい……ですが……私は先生が教えてくれた牙の呼吸を受け継ぎましたが……先生の本来の力、金色の鎧を受け継ぐ事が」

蓮花は落ち込みながら口にする。

「嬢ちゃん、魔戒剣は日輪刀と違って女が扱える代物じゃない。

代々男しか扱えないんだ、気にすることじゃない」

蓮花に語りかけるのは鬪髑をイメージした喋る指輪

ザルバ

「でも……」

「そもそも男でも簡単に扱えない代物だ、特に大牙の持ってた牙狼剣はな」

「……」

「だがな、大牙は未来に託した！いつの日か牙狼剣を引き抜く者が現ると信じてー！」

「先生が？」

「お前さんに頼みがある、いつの日か現る継承者に大牙の託した願いを受け継がせてやってくれ。」

「わかりました！先生の託した願いを必ず！未来へと繋いでみせます」

「嬢ちゃん任せたぞ　　輝夜、俺様はその時まで眠るとする」
「ああ、その時までおやすみザルバ」

く400年後く

希望を意味する称号を受け継ぐ少年と心を閉ざした少女
2人の兄妹が織りなす物語が始まる

「このガキ、さつきからちよこまかと動き回りやがって鬱陶しい
さつきと喰われろ」

「え？喰われろと言われて素直に喰われる人っているの？

んんんんそうだなあ？土下座してお願いしたら考えてもいいかなあ〜」

「このガキヤー調子にのってんじやねーぞ！テメエら人間なんざ只の
餌に過ぎないんだよ！大人しく喰われろ」

「……」

「ん？急に大人しくなったな、ようやく理解したか？鬼の恐ろしさを」
「いや〜無理です無理です〜wだつて君、もう頸刎ねられてるんだよ
？いくら私が可愛いからって私の事見つめ過ぎだよ〜♪」

「は？……え？……いつの間に……俺……は……まだ」

「ねえ？さつきの鬼、私に狩らせてくれてもよかつたんじゃない？」

「いやいやいや、鬼相手に遊び過ぎだし俺はさつきと帰りたいから

代わっただけ」

「わお！遊んでないし真面目だし、えくと・修行、そう修行してた
んだよ」

「修行したいなら、実戦方式で俺が相手になるけど？」

「脳筋だね〜w w それにしても疾かつたね〜私でもあまり見えな
かつたよそんなに急いで帰ってたんだね……お腹痛いの？」

「……もういいよ、早く帰るぞ桜花」

「やつぱり？お腹痛いんだよね？そうなんだよね？煌牙」

「違うわ！」

煌牙 s i d e e r

俺の名は四ノ宮 煌牙 黄金騎士 牙狼の称号を受け継ぐ魔戒騎士

政府非公認の鬼狩り組織 鬼殺隊に所属して刃を振るっている
本来、魔戒騎士はホラーという鬼とは違う化け物と戦い
人を守っているらしい

400年前、先代の牙狼 暁 大牙はエイリスというホラーと戦

い

その際に時空の狭間に飛ばされホラーのいないこの世界に
辿り着いた事

ホラーのいない世界でも鬼という異形の存在が人々を脅かし
守りし者として鬼を討滅していた事を

先代牙狼 大牙から聞いた

牙狼を継承するには歴代の牙狼継承者全てに認められなければ
ならない 俺も死んだら英霊になるんだろうか？

いや、死ぬつもりはない

生きて託された思いを受け継いでいかなければならない

俺も守りし者として……

唯一の肉親である妹もいるし

カナヲ元気にしてるかな？

「煌牙、任務だそうだ」

「内容は？俺が呼ばれるって事は厄介な鬼なんだろう？十二鬼月の可能性も」

「さあな、そこまではわからんがお前さんが呼ばれるのなら並の隊士じゃ駄目だったんだろう」

「だったら早く行かないと、まだ生きている隊員がいるかもしれない」

煌牙に任務を告げるのは煌牙の相棒である魔導輪のザルバ

ザルバは煌牙に任務の報らせや、任務地の案内をする

鬼殺隊の鏖鳥の役目をしている

ザルバ曰く、鳥が五月蠅いから自分がやった方が良さらしい

本音は鳥に役目を奪われたらポジションが危ういかw

煌牙はザルバと会話して並の隊士じゃ命が危ないと判断し早急に任務に向かおうとする

「場所はここから南西の方角だ」

「ああ、行こうザルバ」

ザルバが煌牙に方角を示し、煌牙が任務に向かおうとした時

「煌牙？任務なの？私も一緒に行くよ〜♪」

煌牙の任務に同行しようと話しかけてきた、ゆるキャラ

もとい天然少女 名は四ノ宮 桜花

煌牙と同じ四ノ宮家の者であり、煌牙の師匠 四ノ宮 花蓮の娘でもある

四ノ宮家とは、先代牙狼 暁 大牙の弟子であり大牙の編み出した

牙の呼吸を受け継ぐ四ノ宮 蓮花を先祖に持つ由緒ある鬼狩り一族である。

四ノ宮家の修行は厳しいと有名で、出稽古に出向いた隊士全員が

良くて拷問、下手すりゃ死刑レベルの修行に耐え切れず逃げ出す程

普通の鬼殺隊員ではなく、魔戒騎士としても育てあげる目的がある
為

必然的に厳しくなるのだ

1 全集中の呼吸を使わなくても鬼と渡り合えるくらい身体を鍛えろ

2 全集中の呼吸を使わないで鬼の頸を斬れ

3 日輪刀無しで鬼と戦え

四ノ宮家 3ヶ条

当然、無茶振り過ぎる内容で四ノ宮家の者でも達成出来る者はごく
僅

かであり近年で達成出来た者は 四ノ宮家現当主 花蓮 その

娘 桜花

そして煌牙の3人である

達成出来ない者は、他の育手同様に鬼殺隊員としての特訓に切り替え

いずれ最終選別へ

達成出来た者は、全集中 牙の呼吸 全集中・常中を習得した後
いずれ最終選別へ

桜花も最終選別を煌牙と共に乗り越え、今に至る

煌牙だけは、それとは別に魂鋼「ソウルメタル」とよばれる

金属で出来た小刀を振るう修行も追加で課せられていたのが

最初は持ち上げる事すら出来なかったのはいい思い出だ

「師匠には伝えてるのか？」

「んんん？お母さんなら『暇なら1匹でも多く鬼を狩って来なさい』って言うよ〜w w」

「そうだなw」

煌牙と桜花は少し笑いながらそう話す

「んじゃ、行くとするか」

「出発進行〜♪」

2人は南西へと歩き出す

「ザルバ、さつき聞きそびれたけど内容は？」

「カァー南西の森付近の村で12人の村の住民が行方不明ダヨ 癸
の隊士も3人行方不明」

「………というわけだ」

「わあ〜♪ありがと〜♪米吉♪」

「ザルバどんまいw」

ザルバの役目を桜花の鎧烏 米吉が奪う

天然の桜花に対し米吉はしっかりしてる性格なのだが空気が読めない

少し前に合同任務で蟲柱 胡蝶 しのぶと一緒にだった時は

「喋る富岡さん」と言われたらしい

「あーそういえばしのぶちゃんから煌牙に言伝頼まれてたよ？」

えーとなんだったかなあ？・・・なんだっけ？」

「いやいや、知るわけないだろ何で俺が知ってる前提で話してるの？」

「何となく？うーん・・・あ！カナヲちゃん、カナヲちゃんが最終選別に行くから蝶屋敷で激励してほしいってしのぶちゃんから言われてたよ」

「うおおい！今年の最終選別って明日から・・・（桜花に言っても無駄だ時間が勿体ない）よし、さっさと鬼を狩って帰るぞ！」

「ほーい」

柱であるしのぶからの言伝を忘れる能天気さには煌牙も頭を悩めてい

たのだが、悩むだけ時間の無駄と割り切り当初の目的へと切り換える

煌牙には妹がいる 親に捨てられ家族を失った煌牙に残された

唯一の

肉親 名は栗落花 カナヲ 互いに姓が違うのだが

真正正銘の兄妹である 大切な妹が試練を迎える為

兄としてせめて激励だけでもしてあげたいと思い、急いでいるのだ
生きているかもしれない隊士の事も忘れてはいない

煌牙と桜花の2人は、鬼の情報があつた南西の森に到着し、

二手に分かれ搜索していた

「ザルバ、何か反応はあるか？」

「ああ、ここから近いぞ！気を引き締めろよ」

「もとより油断はしないさ」

煌牙はザルバの鬼探知能力を使い森を探知していた

本来はホラー探知していたのだが、鬼の気配を覚えたザルバが

煌牙をサポートしている

更に森の奥へと進んでいると、煌牙の視界に大きな人影が目に入る
「あいつか」

推定8尺に迫る体、鋭く長い爪を立てるその異形の視線はこちらに向かい歩いてくる煌牙を捉えていた

「また獲物が来やがった、ガキの肉は柔らかくて旨いから最高だな

鬼狩り共を喰えばまた新しい鬼狩りが喰われにやっつて来やがる」

鬼は煌牙を新たな餌とみなし、煌牙に向かい飛び掛かってくる

凄まじい跳躍力で互いの距離を埋め、鬼は煌牙の身体を引き裂こうと

腕を振るう・・・事が出来なかった

煌牙が既に鬼の腕を斬り落としていたからだ

「馬鹿な？お前いつ刀を抜いた？いや、そもそも刀をいつ振るつた」

「見えなかったか？なら一瞬で終わるから楽でいい」

「舐めるなよクソガキ、斬られた腕はすぐに再生・・・しない？

何故だ！何故腕が再生しない！貴様何をした」

「斬つた、それだけだ」

「ふぎけるな！俺は鬼だ！鬼狩りから頸を斬られない限り何度でも再生するはずだ！それが何故再生しない？」

「ああ、日輪刀じゃないから俺の刀・・・いや剣か」

「お前、鬼狩りじゃないのか？」

「鬼狩りだよ、まあ只の鬼狩りではないけどな」

「・・・殺してやる、殺してやるぞ！俺の腕を斬り飛ばした罪

は重いぞ！躲せないのなら防げばいい、俺の血鬼術でな」

「罪？・・・お前今まで何人の人を喰ってきた？お前が喰ってきた人にはその人の明日が・・・未来があったんだ」

「くだらねえ！只の餌だろ、お前ら人間は俺に喰われる運命だった

それだけだ」

「ならば、俺に斬られてお前が死ぬのも運命だろ？」

「はっ！やってみな、防いだ直後死ぬのはお前だ」

「お前の陰我、俺が断ち切る」

煌牙がそう言うのと剣を頭上に掲げ弧を描く

煌牙の頭上に円形の光の空間が現れ、その光がヒビ割れる
割れた光の空間から狼を模した金色の鎧が現れ瞬く間に

煌牙に装着される

“黄金騎士 牙狼”

魔戒騎士 最高位の称号であり煌牙が纏う最強の鎧

金色の輝きを放つその姿は神々しくもあり、敵対する者には

畏怖する存在 それが今、長き時を経て降臨する

煌牙の持つ剣 “牙狼剣”

牙狼専用の魔戒剣であり、牙狼を受け継ぐ者しか持つ事を許されな
い

牙狼剣も細身の両刃直刀から大型の剣へと変わっている

「今のは一体？…!!？なっ☒何だその姿は？お前はさっきのガキな
のか？」

「…ガキ…ガキ」 ガチャ ガチャ

鬼は今まで見た事もない金色の鎧を纏う目の前の存在に驚き、驚愕
の表情を浮かべる

煌牙はその問いに答えず鬼に向かい歩き出す

「くっ、来るな！」

鬼はそう叫ぶと、牙狼に向かい殴りかかる

ーガキンー ジュウウー

「ぎやああああああ!!？手が焼ける！熱い！熱い！！」

牙狼の鎧に生身で触れれば鬼といえども皮膚が焼け爛れてしまう

「何なんだ？何なんだお前はああ!!？」

鬼の表情からさっきまでの余裕は消え失せ、最早恐怖で顔が引き
攣っている

「我が名は牙狼、黄金騎士」

煌牙はそう言うと、足に力を溜め大地を踏み抜く

眼で追う事すら出来ない疾さで鬼に近づき、鬼の胸部に強烈な回し蹴りを入れる

通常なら蹴られたところでその巨体は大して動じないのだろうが相手は魔戒騎士として闘う鬼狩り

極限まで鍛えられた肉体に全集中・常中で更に身体能力を底上げした

煌牙が放つ蹴りは鬼であろうが簡単に蹴り飛ばす

血鬼術で皮膚を固め刃を通らなくしても蹴りは蹴り

鬼が転げる結果に変わりはない

煌牙はすかさず、剣を構え跳躍する

ー牙の呼吸 壺の型 断空の牙ー

よろめきながら立ち上がった鬼に、牙狼剣を横から斬りつけ身体の捻りを利用して一気に切り裂く

牙狼の鎧を纏う時の牙狼剣であれば、頸を斬らなくても鬼を殺す事が

出来るので頸を狙う必要はないが、鬼狩りの矜持に従い頸を断つ

「グギャツ、頸を斬られたーそうか、俺は死ぬのか・・・」

ありがたい、僕はもう村の人達を食べなくていいんだね」

「人間だった時の記憶が戻ったのかーああ、君はもう誰も傷付けなくていいんだ・・・だから、おやすみ」

「うん・・・うん・・・ありがとうーありがとおお」

鬼は灰になりながら煌牙に礼を言う

鬼が灰となり散った後、煌牙は鎧を解除する

何故人が鬼にならなければいけないのか？

何故悲しみの連鎖が終わらないのか？

煌牙は考えながら拳を握る

「鬼無辻・・・無惨」

「煌牙？？煌牙？？私、迷子になっちゃったよ」

一方、桜花は鬼を探す為、森を散策していた。

探索ではなく散策だ　　鬼がいたなら頸を斬るし、いないなら引き返して焠牙と合流するつもりでいた

「う〜くん、どうしようかなあ？悩みますなあ〜」

「久しぶりの女の肉だ、女、俺に喰われろ」

「歌でも唄いながら歩けばそのうち焠牙に会えるかなあ〜？」

何唄おうかなあ〜？悩みますなあ〜」

「おい!!？聞いてんのか?」

「わぷっ!!?ビックリしたよ〜、ちよつとだけ、ちよつとだけビックリしたよ〜・私ビックリしたの?」

「俺が知るかよ(なんだこいつ?頭おかしい奴じゃねえか、ちよつと怖いんですけど)」

「あれ?よく見たら鬼さんじゃないですかあ〜wよく見なくても鬼さんなんですぞねえ〜w鬼さんも迷子ですかあ?」

「そんなわけないだろ!!?この森は俺達2人の縄張りなんだよ、迷子になんてなるか!!?(ヤバい!ヤバい!こいつマジでヤバい!イカれてやがる頭無惨だよ)」

「ほえ〜?この森は鬼さんともう1人の鬼さんの縄張りなんですわ〜」

「それがどうした?」

「え〜と、君の頸を刎ねたら残りはあと1人だよね♪もう1人は焠牙が頸を刎ねるはずだし君の頸を刎ねたら任務おしまい♪」

「あ?」

「でも〜迷子になってるから、焠牙と合流するついでに遊んであげる♪頸は合流出来たらちゃんと刎ねてあげるから安心して♪」

「このクソガキが〜」

このユルキヤラ　四ノ宮　桜花は普段はユルい句調で喋るが

真面目になればちゃんと喋る事が出来る残念な娘なのである

「とりあえず、鬼は倒したし他に鬼はいないか探るか、ついでにあの

アホも」

煌牙は付近に鬼がいなか探す為に探索を再開する

ついでに桜花もいたら合流すればいいと考えていた

探索を再開して暫くして、遠くから桜花の笑い声が聞こえる

煌牙は溜息をつき、桜花の笑い声が聞こえる方向に歩き出した

「あははははは♪鬼さんさつきから必死に追いかけてるけど全然当たらないね♪もう少し頑張つて♪ほらほら♪」

桜花もまた煌牙と同じ修行を乗り越え、煌牙程ではないが柱に匹敵する実力を持っている

煌牙より膂力の少ない桜花は力よりも機動性を重視して膂力をカバーしている

そんな桜花相手に、十二鬼月でもない鬼が相手になるはずがない

「このガキ、さつきからちよこまかと動き回りやがって鬱陶い

さつきと喰われる」

煌牙は鬼と文字通り鬼ごっこをしている桜花を呆れて見ていた

「何遊んでるんだ？あのアホは——仕方ないさつきと終わらせませるか」

——牙の呼吸 参の型 閃空の牙——

煌牙は居合斬りの構えをとり感覚を研ぎ澄ます

無駄な力を抜き、足に全ての力を入れて一瞬で最高速へと加速する

研ぎ澄ました己が刃が命を断ち切る必殺の牙となり鬼の頸を刎ね

飛ばす

鬼の頸を斬り灰になるのを見届けた後、任務完了とし

帰路につく二人

「早くカナヲちゃんに会いたいね〜？ね？煌牙」

「そうだな、お前はカナエさんに会いたいだろ？ユルさ加減が

似てるしな」

「ベストマッチ♪」

「やかましい」

「……煌牙兄さん」

「何をしているんでしょうか？あの人は。この日の為に5日前に桜花さんに言伝を頼んでたのに未だに来ないなんて……新しく開発した痺れ薬の実験台になりたいと、きつとそうゆうわけなんですわね」

「師範、兄さんに酷いことしちや駄目です。」

「カナヲも言うようになりましたね、昔は言われないと自分で何も出来なかった貴方が自分の意思でちゃんと意思を伝えられてる。姉として私は嬉しいですよ」

「はい……兄さんにまた逢えたから……もう逢えないと思ってた兄さんにまた逢えたから……！あ、もちろん、師範……いえ、しのぶ姉さんやカナエ姉さんが私を家族として迎えてくれたから……私は」

「カナヲ……」

「カナヲは昔から可愛かったもの♪喋るカナヲも可愛いわ♪」

「可愛いは正義♪」

「姉さん、空気を呼んで？桜花さんの米吉じゃないんだから」

「桜花ちゃんも可愛いわ♪もう妹にしたいくらい♪」

「カナエ姉さん……私は桜花さん……その……少し苦手です」

「どう返事したらいいか……銅貨を投げてでも決めきれません」

「カナヲ、あの人は特殊なんです。富岡さんは富岡さんで言葉が足りないから何を言いたいのかわかりませんが、桜花さんは何を言ってるのか分かりませんかからね」

「そこがまた可愛いのも♪前に不死川君の事、スケベ柱って言った時は面白かったわ♪」

「……それ、不死川さんが聞いたら大変な事に……」

「煌牙兄さんは、よく桜花さんに付き合いますね。」

「煌牙さんは、黄金騎士ですからね。精神面も鍛えてられてるはずですよ。むしろ桜花さんから鍛えられたとか……考え過ぎでしたわね」

「黄金騎士牙狼、ううん、煌牙君には今でも感謝してるわ♪」

「今こうして生きているのも煌牙君のおかげだし……ね♪しのぶ♪」

「ね♪しのぶ♪って私は別に煌牙さんの事……／／／／／

感謝はしてるけど！」

「煌牙兄さんは私の希望です」

——カナヲside——

私には名前がなかった

両親から名前をつけて貰えず、私は私を認識する事が出来なかった
ううん、私だけじゃない、私の他にも弟や妹もいたけど名前がな
かったからどう呼べばいいかわからなかった

泣けば蹴飛ばされ、踏まれたり、引き摺りまわされて水に浸けられ
たりと毎日が辛かった

朝起きると、体が冷たくなって動かない弟や妹もいた

それでも私はそんな日々を耐える事が出来た

私には兄がいた

兄は私達をなるべく両親から守ろうと庇ってくれた

そのせいで兄はいつもボロボロだった

そんな兄を見て私も兄を助けてあげたいと思うようになった

私には兄が必要だった、私の心を支えてくれたのは兄

私も兄を支えて、私を必要としてほしい

二人で支えあつて生きていきたい

でもそれは叶わなかった

兄は死んだ 幼い頃の私にはそうとしか思えなかった

兄がいなくなった事で私の心を支える術はなくなった

悲しい 虚しい 苦しい 寂しい

今まで兄がいた事で耐えられた

兄がいたから……でも、もういない

その日を境に私の心は何が切れて

何も辛くなくなった

親に売られた時も悲しくはなかった
目に映る世界は全てが色褪せていた
全てがどうでもよかった
そんな私に声をかけてくれた人がいた
私を助けてくれた人がいた
胡蝶カナエと胡蝶しのぶ
色褪せた世界に少しでも色が戻った
そしてあの日・・・私の世界に色が戻り始めた

「姉さん・・・眼を覚ますよね？」

「何日か寝てたら眼を覚ますよ♪私もあの場で施術したし、大丈夫だよ♪多分、戦線復帰は難しいと思うけど」

「うん・・・それでも、生きてくれるだけで私は・・・私はあの場で泣く事しか出来なかったから・・・ありがとう、桜花さん」

「お礼なんていいよ・・・あの時焠牙が一緒にいたからだよ・・・」

焠牙があのお母さんを抑えてくれたからカナエさん助ける事出来たんだし・・・ね♪しのぶちゃん」

「そうね・・・焠牙さんがいなかったら姉さんは・・・というかあの人は？」

「んん？焠牙ならアオイちゃんが手当てしてると思うよ・・・？」

大した傷はなかったけど、凍傷してたからね・・・」

「心配じゃないんですか？焠牙さんの事」

「私も焠牙もお母さんの継子だよ？心配なところもあるけど、そんなに気にしなくてもいいかな・・・ってw黄金騎士の継承者だからね・・・」

私の弟弟子は♪」

「焠牙さん、黄金騎士になれたんですね。あの時、俺は牙狼になるって言うてましたからね。あれからもずっと頑張ってきたんですね」

「最終選別の時は牙狼剣はまだ引き抜けなかったからね・・・、1年前だったかなあ・・・？牙狼になれたの」

「最終選別ですか、懐かしいですね。焠牙さんが負傷者を探して

私が手当てして、桜花さんが負傷者を守ってましたね。」

「え〜〜w私何もしてないよ〜w鬼が来ないか見張ってたただけだよ〜〜w」

「あの時の桜花さんは凄い威圧感ありましたよ？」

「ん〜〜？あれだよ〜霸王しよ『桜花さん・いけません』え〜」

「桜花さんは時折意味のわからない言葉を使いますね、今まで聞いたこと無いような・寧ろ聞いたらいけないような」

「気にしなくてもいいよ〜w」

「いや、貴方が気にして下さいよ」

「そういえば、さっきの女の子って誰なの〜？お人形さんみたいな娘だったけど〜？」

「え？ああ、カナヲの事ですか？」

「カナヲちゃんっていうのかあ〜」

「カナヲがどうかしたんですか？」

「ん〜〜、私の気のせいかもしれないけど〜似てるな〜って

煌牙に」

「煌牙さんに？・・・え？似てないと思いますけど？」

「カナヲちゃんって、どこで出会ったの〜？」

「親に売られて、人買いに連れられてる時に私達が保護したんです」

「そう・なんだ・煌牙もね親に捨てられてるんだ・山の中で死にかけてたところをお母さんが見つけて保護したの」

「え？桜花さんと煌牙さんって兄妹じゃなかったんですか？」

「うん・煌牙は四ノ宮家の養子、お母さんが継子にするって

引き取ったんだよ。」

「そうだったんですね」

「あ！真面目な話になっちゃったね〜w・え〜と煌牙が

俺には妹がいたって言ってたんだよ。カナヲちゃんが似てる気がしたから、もしかしたらって」

「そうですね、本当に兄妹だとしたらどうします？」

「ん〜〜、作者次第って事にしとこ〜w」

「意味がわかりません!!？」

「とりあえず傷は大した事ないようですが、どちらかというところ凍傷の方が痛ましいですね。1週間もすれば治ると思いますから蝶屋敷で安静にしてください。」

「ああ、ありがとなアオイさん。これからお世話になります。」

「いえ、これが仕事ですので・・・煌牙さん、カナエ様を助けていただきありがとうございます。」

「いや、人を助けるのは当然の事だしお礼なんて・・・俺がまだ早く到着してたらカナエさんもここまで酷い事には、ゴメン」

「謝らないで下さい、カナエ様は生きてます。貴方が居てくれたからカナエ様は生きてるんです。明日があるんです。それでいいじゃないですか」

「ああ、ありがとな」

診察室の中でアオイが煌牙という人を診察していた

カナエ姉さんが鬼との戦いで瀕死の重傷を負った、死にかけてた

カナエ姉さんを助けてくれた人

正確には桜花という人がカナエ姉さんを施術？

よく分からないけど応急処置をしてくれてカナエ姉さんは

一命を取り留めた。

後から聞いた話では鬼は上弦の弐という別格の鬼だったらしい

その鬼と戦い、足止めしてくれたからカナエ姉さんは

今、生きている

私も御礼を言いたい 私一人では決めきれないから銅貨を投げ

て

決める事にした そして私は御礼を言う為に診察室の外で

待っていた それが運命の再会になると私はまだ知らな

かった

「では大事になさって下さい」

「ああ、ありがとうゆつくり過ぎすよ」

煌牙という人が診察室から出てきた、御礼を言わないと

「……………」

(ん？誰か立っているけど、この屋敷の子かな？こつち見てる？)

1週間だけとお世話になるし挨拶しとくか)

「こんにちは」

「……………」

「えーと…(返事無し？俺怪しい奴に見られてる？いや、無口って対応厳しいな、まだ富岡さんの方が…いや、アレはアレで)」

「…………(お礼言わないと、早くしないと、どこかに行っちゃおう)」

「俺は四ノ宮 煌牙 今日から1週間お世話になります、怪しい奴じゃないから安心して？(いや、これって如何にも怪しい奴が言う事だろ？)

！
思いは胸に言葉は短く簡潔に言った方が…富岡さんじゃねーか

ああ、富岡さんもこんな気持ちだったんですね、俺初めて富岡さんの事理解しました。今なら富岡さんの真意も汲み取れそうです」

「……………ありがとう」

「え？あ、どういたしまして(ありがとうって何？俺何かした？)

もしかしてカナエさん？…いやその方が辻褃合うな、じゃないと会話が成立しない)カナエさん早く眼を覚ますと良いね」

「……………(なんだらう？この人を見てるとザワザワする

懐かしい？寂しい？嬉しい？よく分からない、分からないけど)

兄さん？」

「…………え兄さん？俺が？君の？」

(私、今なんで兄さんって言ったんだらう？兄さんはあの時…
兄さんが生きてたら煌牙さんと同じぐらいだったのかな？

煌牙さんの雰囲気と兄さんの面影が似てるから？)

兄さん、私ね、小さい時に兄さんから貰った鈴、御守りにして大事に持ってるんだよ？兄さんとお揃いで嬉かったな)

「……なんでもないの……」

(兄さん……か、昔俺にも妹がいたな、今も生きてればいいけど

あの環境だと……俺もいないし、もしかしたら……でも生きてたらこの娘と同じ年頃だったんだろうな……こんな感じに成長してたらんדרוּうな)

「えーと……俺もな、小さい時に妹がいたんだよ、他に弟や妹もいたけど、まあ……いなくなつたよ。」

「え？……それって」

「いやな、両親が殴る蹴るの毎日でき、下のチビ達には限界だったんだよ。出来る限り助けてあげたかったけど、俺も両親には敵わなくてさ……毎日ボコボコにされてたよ、まあ2つ下の妹は生きてたけどな

その妹に二人で頑張ろうって意味でお揃いの鈴を渡したんだよ。

両親に半殺しにされて山に捨てられたからその後は分かんないんだけど、生きててくれたら良いなって今も思ってるよ……って悪いな俺の不幸自慢なんて聞きたくなかつたよな？」

「……その鈴……今も持ってるの？」

「ああ、まだ持ってるよ、ほらコレだよ」チリーン

「……うううう……うええええん……」

「え？どうした？俺なんか泣かせるような事した？ゴメンなゴメンな」

「違うの……グスツ……その鈴……私も持ってる」

「……まさか……俺の妹？……鈴見せてくれる？」

「うん」チリーン

「……そっか……そっか……生きててくれたんだな、良かったホントに良かった、えーと……」

「カナヲ……私の名前」

「そっか、カナヲか、良い名前付けて貰ったな」

「うん」

「ははは、カナヲは昔から口数が少ないなwさつきなんか無口だったから、俺怪しい奴に見られてたと思ってたよ」

「・・・そんなことないけど・・・私は自分で決めれないの・・・迷った時は銅貨を投げて決めるしか出来ないの」

「・・・取り敢えず、縁側に座ろうか？積もる話もあるだろうし」
「うん」

「まあなく、あの両親の元だったら仕方ないかもな、勝手な事したら殴るし蹴るわの連続だし」

「うん」

「でもさ、カナヲは今どこにいる？カナエさんやしのぶはカナヲに酷い事する？」

「そんなこと・・・しない」

「だろ？ここにはカナヲを傷つける人なんていないし、カナヲを大切にしてくれる良い人達しかいないよ」

「うん」

「カナヲは蝶屋敷の人達、どう思ってる？」

「・・・皆、大切な人達」

「そっか、ならカナヲ、兄ちゃんからアドバイスだ。」

大切な人がいるなら、その人の心に自分の想いを届けるんだ」

「想い？」

「うん、カナヲが思ってる事、カナヲがやりたい事、カナヲの想いを

カナヲの意思で伝えるんだよ」

「・・・でも」

「カナヲは自分の意思を伝える力がまだ弱いみたいだね、けどどな

心はどこまでも強くなれる。」

「どこまでも強く？」

「ああ、俺もそうだ、沢山の人の想いを受け継ぎそしてその想いを託していかなければならないんだ」

「想いを受け継ぎ、想いを託す」

「永遠に紡がれる人の想い、その強さが俺の力の源、そして・・・

それこそが！黄金騎士 牙狼！！？」

「黄金騎士・・・牙狼？」

「はは、熱くなり過ぎたなwカナヲ、心のままに、カナヲの心に従って

みなよ。俺の想いもカナヲの心に託す、だからカナヲの想いも俺の心に託してほしい」

「……うん、私やってみる」

これが私と兄の再会と私の世界に色が戻ったきっかけ

私は兄が滞在する1週間、ずっと兄の傍を離れなかった

お風呂と廁の時は流石に無理だけど

無事に眼を覚ましたカナエ姉さん、しのぶ姉さんに

私と兄が兄妹である事を話したら涙を流しながら喜んでくれた

私もそれが嬉しくて一緒に泣いた

カナエ姉さんが眼を覚ました夜は蝶屋敷の皆、隠の人も含めてお祝いをした

皆にせがまれて、渋々、黄金騎士牙狼を召喚した兄は凄くカッコよかった

その鎧から感じた何かは、兄が言ってた託された想い、受け継いで

きた想いなんだと私は思う

黄金の鎧が放つ金色の輝きは暖かく、私の心が溶かされていくように

に
思えた

私も兄のようになりたい、私も想いを誰かに託したい

私の心に託してほしい、そう感じさせる暖かな光だった

しのぶ姉さんも何かを感じたみたいで、涙を流していた

たった1週間かもしれないけど、私は以前の私から変わったんだと
思う

桜花さんからは、カナヲちゃんはブラコンだねと言われたが

ブラコンが何か全く分からないので、ただ笑うだけでスルーした

ただ、貴方も同じブラコンなのでは？と思ってしまった

桜花さん、貴方がたまに投下する言葉の爆弾は危険な破壊力を持つ
て

いるから気を付けてください。

兄が1週間の滞在から戻る時、私は泣いて兄に縋り付きました
狼狽える兄を見て貴方はこう言いましたね

マダオだね〜

まるで駄目なお兄ちゃん、それを略して言った事は説明されて理解
しました

ですが何か聞いたらいけないような不思議な悪寒が走りましたよ

カナエ姉さんを除く全員が

兄なんか、蹲って落ち込んでましたからね。

マダオという言葉に心抉られると

心はどこまでも強くなれる

それさえも破壊する威力なんです

気を付けてください

「おい、桜花急げカナヲの出発に間に合わなくなる」

「急がないとしのぶちゃんからお説教受けちゃうよ〜煌牙が」

「俺だけかよ?・・・いや桜花に言っても無駄だからな

逆に桜花のペースに巻き込まれるな」

「そ〜ゆ〜こと♪」

「蝶屋敷まであと少しだ、全力で走るぞ」

「え〜、煌牙〜アレ使おうよアレ」

「アレってなんだよ?アレって」

「ギア!セカン『いや、使ってるからね?似たようなやつ!常に!
てか、似たようになって何だよ!ギアなんたらとか知らねーし!」

「ツツコミに突っ込むとは煌牙も成長しましたなあ〜w姉弟子とし
て〜私、姉弟子でいいんだよね?」

「流石に無理だわ」

煌牙と桜花の二人は、蝶屋敷の門の前に立っていた

煌牙の妹、栗花落 カナヲがこの日、鬼殺隊の入隊試験 最終選

別に

向かう為、激励と見送りをしてあげたいと思い蝶屋敷に来ていた。

蝶屋敷ー蟲柱 胡蝶しのぶが屋敷の主を務める、鬼殺隊の医療施設を兼ね備えた屋敷。

負傷した隊士の治療や、機能回復訓練、所謂リハビリを行う

鬼殺隊にとって重要な施設でもある。

ーコンコンー

煌牙が門を叩き、待っていたらこちらに向かって走ってくる音が聞こえ、門が開かれる。

「お久しぶりです、煌牙さん、桜花さん」

出迎えてくれた三人娘、きよ、すみ、なほが元気な声で挨拶をする

三人娘に向かって二人も挨拶を交わす

「よっ、久しぶりだな、相変わらず元気そうで良かったよ」

「わあ〜♪久しぶりだねえ〜♪これお土産だよ〜♪

皆で食べてね〜♪」

「わあ、おはぎですか♪」

「桜花さんの作るおはぎは、いえお菓子は全部絶品です♪」

「ありがとうございます♪」

桜花は手作りのおはぎを、三人娘に手渡し、きよ、すみ、なほが嬉しそうにお礼を言う。

「そのおはぎはね〜♪スケ：風柱の不死川さんにも太鼓判を押ししてもらえたからね〜♪」

「お前今、不穏な事言おうとしただろ」

「ん〜？知らないよ〜？」

桜花の作るおはぎは、風柱である不死川 実弥にも好評であり

おはぎの為にわざわざ、四ノ宮家にまで出向くまでである。

もちろん、それだけで帰るのは失礼なので、四ノ宮家の門下生に柱自らが稽古をつけたり、煌牙や桜花と実戦形式で鍛錬をしたりしている。

そんなわけで、二人は不死川と仲が良い。

桜花が不死川の事を、失礼な呼び方をするのは仲の良さからくる彼女なりのコミュニケーションなのである。

「案内しますね」

三人娘が二人を屋敷の中に案内すると、廊下の奥からこちらに走ってくる音が聞こえる。

この屋敷はよく走る音が聞こえるな、と煌牙は思いながら

音のする方を見ると、妹であるカナヲがこちらに向かって走って来ていた。

「兄さん！」

カナヲはそう言いながら煌牙に駆け寄る

「よっ、カナヲ元気そうだな、これなら最終選別も大丈夫そうだな」

「うん、師範からお墨付き貰えたし、兄さんも稽古に付き合ってくれたから」

「兄ちゃんなんだし、それくらいはするさ」

「ううん、兄さんは柱で忙しいのに私の為に時間を割いてくれて・無理してないよね？」

「いや、大丈夫だって、無理してないからさそんなに心配するなよ」

「うん」

「カナヲも無理はするなよ、無事に生きて戻ってくるだけで、それだけでいいからさ」

「大丈夫、分かってるよ。兄さんが教えてくれた言葉も忘れてないから」

「ね〜？私の事忘れてないかなあ〜？」

「あ！ごめんなさい桜花さん、兄さんに逢えたのが嬉しくてつい、お久しぶりです」

「久しぶりだね〜♪カナヲちゃん、煌牙が教えてくれた言葉ってなに？」

「はい、誰かを守りたいならまず自分を護れ、自分を護れない者には誰も護れない。です」

「なるほどね〜……まあいつかWカナヲちゃん、最終選別頑張つてね〜」

「はい、頑張ります」

煌牙 カナヲ 桜花の三人は玄関で話しながら、最終選別の激励をする

二人の後ろに並んでいた三人娘は、会話を聞きながらこう思っていた

(早くおはぎが食べたいです)

屋敷に上がり、歩き出す煌牙とカナヲそれを後ろから見つめる桜花

桜花は先程のカナヲの言葉を聞いて感傷に浸っていた

(煌牙……酷な事言うんだね……)

三人娘の案内で屋敷の中を進み、カナエ、しのぶがいる部屋へと進む

三人、部屋の中へ足を入れると煌牙と桜花は二人に挨拶を交わす

「お久しぶりですカナエさん、元気そうでなりよりです、しのぶも久しぶり」

「カナエさん、しのぶちゃん、お久しぶりだね〜♪」

二人の挨拶を聞き、笑顔のカナエと張り付いた笑顔を見せるしのぶが挨拶をする

「あら〜♪久しぶりね、カナヲの応援に来てくれて嬉しいわ二人共ゆっくりしていつてね♪」

「お久しぶりです桜花さん、相変わらず元気そうで良かったです

……煌牙さんもついでお久しぶりです、今日はどんな用件で来たんですか？ああ、新しく調合した薬があったので被験体をお願いしてましたね、いえ、私がついでとかそんな事気にしてるんじゃないま

せん。ええ、私は気にしてませんよ?」

二人に寛ぐように優しく声をかけるカナエと、桜花を除いて辛辣な言葉を焠牙にかけるしのぶ

焠牙のしのぶにたいする挨拶がついでのように聞こえたしのぶは笑顔を見せながら内心、かなり怒っていた。

何故焠牙に怒っているのか、しのぶ自身も理解していないが何故か腹が立つ、それ故に辛辣な態度をとっていた。

「焠牙、やらかしたね〜w」

「兄さん・・・はあ」

「あらあら〜♪」

焠牙にたいするしのぶの態度を見て、桜花は笑い、カナヲは溜息を吐き、カナエは微笑んでいた。

「俺何かやらかした?え?待って、被験体とか怖いんですけどしのぶさんすいませんでした〜、あ!後で一緒に茶屋に行きましよう

美味しい餡蜜があるんですよ、勿論奢ります」

「え〜〜?私が持つて来たおはぎは〜?食べないの〜?」

(ちよっ、桜花やめろ、お前のおはぎに勝てる甘味なんてないだろ。

察して?ねえ?察して俺まだ死にたくない)

被験体怖さに必死に取り繕う焠牙と、おはぎを食べてほしい桜花

桜花の発言に焦る焠牙は、必死に被験体回避を願うのだった。

「・・・新薬の研究で籠もりきりでしたので気分転換も兼ねて外出するの悪くないですね」

「え〜?しのぶちゃん、おはぎ食べないの〜?」

「焠牙さんがどうしても私と一緒に餡蜜を食べたいらしいので、仕方ないから私もついていってあげます。どうしても言うから仕方ないんです」

「そっか〜、じゃあ私はカナエさんとお話ししてるね〜」

(どうしてもとか言っていないぞ?いや、怖いから言わないけども触らぬ神に祟りなし)

煌牙の提案に、言い訳をしながらも了承するしのぶと、あつさりと聞き流す桜花、桜花はしのぶの心情を察して二人きりにしてあげよう

と氣を利かせてカナエと留守番する事にした

「カナヲ、氣をつけてな」

「カナヲなら大丈夫」

「カナヲは可愛いから大丈夫よ♪」

「可愛いは正義だよ〜」

カナヲが最終選別に向かう際、煌牙、しのぶ、カナエ、桜花がカナヲに声をかける

「・・・帰って来たら・・・おかえりって言ってほしいです」

カナヲがしのぶ、カナエ向かってそうお願いする。

「カナヲ、当たり前じゃない。私達は家族なんだから」

「カナヲ、ちゃんと帰ってくるのよ」

しのぶ、カナエがカナヲの手を握りながら、カナヲに返事をする

「はい、いつてきます」

カナヲは嬉しそうに答えた後、煌牙を見つめながらお願いをする

「兄さん・・・ちゃんと帰ってくるから、待っててね」

「ああ、待ってるからな」

煌牙はカナヲの頭を撫でながら、カナヲに優しく返事をした

「兄さん、桜花さんいつてきます」

カナヲは二人にそう告げると玄関の戸を開け、最終選別の地

“藤襲山”へ向かい歩き出した。

藤襲山、麓から中腹にかけて鬼が嫌う藤の花が1年を通して咲いており

山頂付近には鬼殺の剣士が生け捕りにした鬼が閉じ込められている

最終選別はその山の中で七日間生き残ることが合格条件なのである

(結構集まってる、20人くらい?)

カナヲは集合場所で、他の子供達を見渡す

(見込みのありそうな人は・・・二人?というか何で既にボロボロなの? ううん、自分の事に集中しなきゃ)

カナヲが見つめる先に、金髪の少年が死地に赴くように、佇んでいて

既にボロボロな状態だったのが気になったが自分の事に集中する為

思考を切り替えてると、狐の面をした少年がやって来てカナヲは少年に目を向ける。

(この子も見込みありそう・・・どこことなく兄さんに似てるような・・・不思議な感じ)

カナヲは狐の面をした少年を見ながら、少年の纏う雰囲気焔牙の雰囲気にも似たような不思議な気配を感じていた。

「皆様、今宵は鬼殺隊最終選別にお集まりくださってありがとうございます」

白髪の童女と黒髪の童女が、最終選別開始の案内を告げ、

カナヲは他の参加者達の後から山へ入って行く。

(とりあえず、東へ向かう方がいいかも)

カナヲは日の昇る東の方向に足を進めながら、周囲の気配も感じ取っていた

(鬼の気配はするけど、近付いて来ない? どうして?)

カナヲは鬼が襲って来ない事に疑問を感じていたが、鬼はカナヲから

放たれていた気配から本能で殺される事を察知して近付けないでいた

カナヲは結局鬼と遭遇する事なく、1日目のが終了した。

2日目も同様に鬼が襲ってくる事はなく、カナヲは退屈していた為
3日目からは自ら鬼を探そうと考えていた。

最終選別3日目、カナヲは今までにない強い鬼の気配を感じていた
鬼の気配を辿りつつ、木々を飛び越えながら鬼の元に向かうカナヲ
その先には、全身をいくつもの腕で包んだような巨軀の鬼が見える

カナヲは異形の鬼を見つめながら呟く

「あの鬼、普通じゃない今までに何人の人を食べてきたの？」

カナヲが鬼に近付いていると、鬼の向かう先に一人の少年が必死に
鬼から逃げている姿を見つけた。

少年は逃げているが、木の根元に足をとられ転んでしまい異形の鬼
に

捕まってしまい、食べられようとしていた。

「助けないと」

カナヲは少年を助ける為に、抜刀し鬼に近づく

だが、カナヲが鬼に斬りかかる前に、木の陰から別の少年が現れ
異形の鬼に斬りかかる

――水の呼吸 弐の型 水車――

少年は自身の身体を縦方向に回転させながら鬼の腕を斬り落とす

血飛沫を上げながら斬り落とされた腕に掴まれてた少年は異形の
鬼に怯え動けないでいた。

腕を斬り落とした少年と助けられた少年に目をやる異形の鬼

腕を斬り落とした少年を見た鬼はその少年が頭に付けている狐の
面を

見て、ニヤリとほくそ笑む。

その直後、少年二人の前にカナヲが降り立ち二人に話しかける

「あの鬼は私が斬るから、狐の面の人はその子連れて逃げて…それ
とありがとう先に助けてくれて」

カナヲは二人に逃げるように声をかけた後、狐の面の少年に向かい
お礼を言う。

「それは駄目だ、また俺の可愛い狐がやって来たんだ」

「また？」

異形の鬼、手鬼が少年を逃すまいと少年に向かい喋り出す

「狐小僧、今は明治何年だ？」

「今は大正だ」

「大正くくく？え？うえくくくくく」

手鬼は少年に年号を聞いたが年号が変わってる事に気付き叫び出した

(この場に桜花さんがいたら面白そうな気がする)

カナヲは手鬼と桜花の組み合わせが面白そうと考えるが

手鬼本人は、カナヲが失礼な事を考えている事は当然知らない

「年号が、年号が変わってる」

手鬼は年号が変わってる事に激怒し、閉じ込められた話をする

手鬼は少年の師である鱗滝という者に生け捕りにされ、藤の牢獄に閉じ込められ47年が経ち、未だに恨んでいた。

手鬼は少年にこれまでに50人、人を食べてきた事、そのうち狐の面をした鱗滝の弟子を13人食べ少年が14人目だと告げた。

少年が修行中に稽古に付き合ってくれた二人の少年少女も既にこの鬼に殺され食べられていた

鱗滝の彫った狐の面が目印で、そのせいで弟子が全員死んだ為

鱗滝が殺したようなものと言われた少年は激昂し鬼に斬りかかる

「あ！駄目、呼吸が乱れてる」

カナヲは少年の呼吸が乱れてる事に気付き、声をかけるが少年は怒りでカナヲの声が届いていない。

迫り来る無数の腕を斬り落としながら、間合いを詰めるが少年の横から腕が迫り、少年を殴り飛ばそうとする。

「私も兄さんみたいに」

カナヲはその光景を見て、手鬼に向かい走り出す

兄である焔牙のように誰かを助けられるような人になりたいと思
いながら。

(兄さんも同じような型使ってた、確か壺の型 断空の牙)

ー花の呼吸 陸の型 渦桃ー

カナヲは空中に飛び出し、体を大きく捻りながら手鬼の腕を斬り落とす。

「このガキ、お前は狐小僧の後から相手して・・・ひっ」

手鬼はカナヲを後回しにしようとするが言葉の途中で喋る事が出来なくなった。

カナヲから放たれる殺気に当てられ、本能で恐怖に固まっている手鬼

先程まで怒り狂い、少年しか見てなかったのでカナヲの事まで気が回らなかった為、気が付くのが遅れていたのだ。

「このガキ、今まで相手にしてきたガキ共とは違う、まるで5年前のガキ共と同じようだ」

手鬼はカナヲが他の参加者とは別格である事を悟り、5年前の参加者の事を口にする。

(5年前? 師範や兄さん達が5年前に、やっぱり兄さんは凄い)

カナヲは鬼からとはいえ、兄が褒められてるような気がして少しだけ微笑んだ。

「君、手を貸してくれてありがとう、おかげで助かったよ」

狐の面の少年がカナヲに助けて貰った礼を言う。

「気にしないで、先にあの子を助けてくれたし・・・あの子は?」

「え? あれ? もしかして逃げたとか」

「そう、元から逃げてもらうつもりだったから、貴方も一緒に逃げていいよ」

「それは駄目だ、皆の仇を取るんだ! じゃないと皆が帰れない・・・

それに女の子一人残して逃げ出すなんて、そんな事出来ないよ」

カナヲと少年は、もう一人の少年がいるか見渡すが少年は既にいない

先程、カナヲが動き出した直後に少年もまた逆方向へと走り出した逃げる為に。

カナヲは逃げてもらう前提だったので気にしてないが、狐の面の少年も一緒に逃げてもらう予定だったので少年にも逃げる事を提案するが

少年は仇を討つ目的とカナヲを残して逃げるつもりはないのでそれを拒否する。

「仇を取る？それならどうして呼吸を乱すの？呼吸が乱れたら鬼に殺されるだけ、仇なんて取れないし無駄死にするだけ」

「それは・・・」

カナヲは少年に非情な言葉をかけ、少年は口籠る。

「兄さんが言ってたの、誰かを守りたいならまず自分を守れ、自分を守れない者には誰も守れないって」

「っ・・・」

カナヲは煌牙がカナヲに教えてくれた言葉を少年に話し、少年は思い当たる節があるのか、悔しそうな表情をする。

「仇を取りたいのなら、まずは貴方が自分を守らないと、怒りは心の原動力でもあるけど、周りが見えなくもなるの。」

「俺が俺自身を守る」

カナヲは少年を諭すように話し、少年は自身を省みるように呟く

「そう、まずは落ち着いて呼吸を整えて・・・皆の想いは貴方が受け継いでいくの、皆が貴方に託してくれた想いを貴方が繋いでいくの」

「鑄兎・・・真菰・・・皆・・・俺、俺」

カナヲの言葉を聞いた少年は涙を流しながら、今は亡き兄弟子達を想う。

「もう大丈夫だよね？私も一緒に戦うから、私の想いも貴方に託すから」

「もう大丈夫だ、ありがとう俺は竈門炭治郎、君は？」

「栗花落 カナヲ」

「カナヲ、二人であの鬼を倒すんだ」

「うん」

カナヲは少年に想いを託し一緒に戦うと少年に告げると、少年も落ち着きを取り戻しカナヲに礼を言う。

少年、竈門炭治郎はカナヲに名を教え、カナヲの名を教えてもらい二人で手鬼を倒すと誓い、カナヲもそれを了承した。

「炭治郎、私が腕を斬り落とすから炭治郎は頸を狙って？」

「わかった、でもカナヲ大丈夫なのか？」

「私なら大丈夫、任せて」

炭治郎とカナヲはそれぞれの役割を話し、鬼に向かう

「あのガキは厄介だが、俺の頸は硬いどちらが来ても、一人ずつ握り潰してやる」

手鬼は自身の頸の硬さを誇っていたが、それが慢心だという事に気付いていない。

――花の呼吸 弐の型 御影梅――

自身の周囲に無数の斬撃を放ち、迫り来る手鬼の腕を全て斬り落とす

カナヲ。

――花の呼吸 伍の型 徒の芍薬――

斬撃の軌道が芍薬の花を彷彿させる高速の9連撃で手鬼の残りの腕を全て斬り落とし、カナヲは炭治郎に向かって叫んだ。

「炭治郎、後はお願ひ」

「カナヲ、ありがとう」

炭治郎はカナヲに礼を言いながら跳躍し、刀を構える

「腕がなくとも頸さえ斬られなければ問題ない、腕は後から再生される」

手鬼は頸は斬られないと思ひ、避ける事すらしなかった

――水の呼吸 壱の型 水面斬り――

腕を交差させて勢いよく横一閃に刀を振るう炭治郎、その刃は手鬼の頸をあつさりとはり落としした。

頸を絶たれた手鬼は崩れゆく体と、自分を斬った炭治郎を見ながら過去を振り返る。

手鬼も昔は人間だった、怖がりな性格で夜は兄に手を握って貰わないと眠れない、そんな少年だった。

炭治郎は崩れゆく手鬼の体に向かい歩き出し、手鬼の手を優しく握る

手鬼は涙を流しながら、その手を優しく握り返し、塵となった。

(優しいんだね、炭治郎は)

カナヲは炭治郎の行動を見ながら、微笑んでいた。

カナヲと炭治郎は、最終日まで生き残る事を約束してその場で別れそれぞれ別行動をとった。

そして最終選別最終日を迎えた朝、カナヲと炭治郎は初日の集合場所に集まっていた。

「カナヲ、無事で良かった、まあカナヲだったら大丈夫か」

「うん、炭治郎も無事で良かった」

カナヲと炭治郎はお互いの無事を喜びつつ、集まった合格者を見渡す

「四人？あれだけいたのに」

「あの時逃げた子もいない」

炭治郎は参加者にたいし合格者が少ない事に驚き、カナヲは手鬼から逃げた子がいない事を気にしていた。

「死ぬ死ぬ、ここで生き残ってもどうせ死ぬんだ俺は」

金髪の少年がボソツと呟くのを見てた炭治郎、だが声をかける事はなかった。

「「おかえりなさい」」

初日にいた、白髪と黒髪の童女が合格者を出迎える。

合格した四人に隊服の支給と鎧烏、階級を与え刀の材料となる玉鋼を

選ぶように告げると、合格者の一人でモヒカンの少年が白髪の童女の頭を驚掴みにした。

「んな事より刀だ刀、鬼殺隊の刀、色変わりの刀」

乱暴な振る舞いをするモヒカンの少年を見た炭治郎はその少年の腕を掴み上げる。

「やめろ、離さないなら折る」

「炭治郎、折る必要はないから、貴方もその手を離してあげていくら暴れても刀がないのだからどうしようもないよ？」

「チッ」

炭治郎は本気で折るつもりだったが、カナヲが二人を諫めモヒカンの少年は舌打ちをしながらもその手を離し、炭治郎も掴んだ手を離す。

「お話はお済みでしょうか？」

黒髪の童女が何事もなかったように話を進め、全員が玉鋼を選ぶ

炭治郎は見た目が同じような玉鋼を匂いで選び、カナヲはとりあえず目の前の玉鋼を選んだ。

最終選別が終了し、カナヲも炭治郎もそれぞれ帰りを待つ人の元に帰る事にした。

「カナヲありがとう、カナヲのおかげで皆と一緒に鱗滝さんの元に帰る事が出来るよ。」

「うん、炭治郎なら大丈夫だから」

「カナヲ、また会おうそれまで元気で」

「うん、炭治郎も・・・またね」

カナヲは帰路の途中、炭治郎や家族のことを考えていた。

（炭治郎、やっぱり兄さんに似てる。いつか兄さんに会う時が来たら・・・兄さん、カナエ姉さん、しのぶ姉さん今帰ります）

カナヲは家族の待つ蝶屋敷へ、その足取りはいつもより軽く感じた。

カナヲが最終選別へ向かった後、煌牙としのぶは二人で茶屋に来ていた。

「女将さん、餡蜜とよもぎ餅、それからおしるこを頼むよ」

煌牙は茶屋の女将に甘味の注文をして、淹れたての焙じ茶を口にしながらしのぶに話しかける。

「しのぶと二人でいる事って今までなかったな、任務も一緒にしたことないし」

「そうですね、お互い柱同士受け持つ管轄も違いますからね」

二人で他愛もない会話をしていたが、しのぶが疑問に思っていた事を煌牙に質問する。

「煌牙さんがいつも使ってる牙狼剣って何故、鬼の頸以外を斬っても有効なんですか？」

しのぶは牙狼剣が鬼の頸以外にも致命傷を与える事が出来るのか気になっていたが今まで煌牙に聞けずにいたのでこの機会に聞く事にした

「そうだな・俺も詳しくはないけど、先代の牙狼、暁 大牙って人はしのぶも知ってるよな？」

「鬼殺隊の歴史上最強の柱だったって記録は資料で」

煌牙はしのぶに先代の牙狼大牙の話を持ち出し、しのぶも資料で読んで得た知識しか知らない事を明かした

「その事は俺様から話してやろう」

突如、煌牙の左中指に嵌めてるザルバが喋り出す・・・のを見て思考が停止したのか、しのぶが無表情のまま固まっていた。

「ザルバ、急に喋るから」

「煌牙、お前さんが予め教えておけば良かっただけの話だ」

煌牙はザルバに向かって注意するが、ザルバに反論されて返す言葉もなくなり、しのぶに声をかける。

「しのぶさくん？生きてます？」

煌牙はしのぶに話しかけ、それに反応したのかようやくよく思考が戻り

しのぶが喋り出す。

「勝手に殺さないで下さい・・・というより今はなんでしようか？」

煌牙さんの指に嵌めてる装飾が喋ったように見えましたが」

「ああ、紹介するのが遅くて悪かった、こいつの名はザルバ俺の相棒で俺のサポートをしてくれる魔導輪だ」

「ヨロシクな嬢ちゃん」

煌牙がしのぶにザルバを紹介し、ザルバがしのぶに挨拶をすると

しのぶは、動揺を隠しきれないのかいつもの笑顔を忘れ真顔で

ザルバに質問をする。

「ザルバさん・・・で良かったんですね？何故喋れるのでしょうか？」

「それについては、今から話す事に関係してる事だ、まずは俺様の話を聞いてからだ」

しのぶの質問にたいし、ザルバは今から話す内容で答えるので話を進める事にした。

「嬢ちゃんはホラーという存在を知っているか？」

「ホラーですか？聞いたこともありませんね」

ザルバはしのぶにホラーの質問をするが、しのぶは当然知らないの
で

聞いたこともないと返答する。

「鬼とは違う、人の陰我に引き寄せられ魂を喰らう闇の魔獣それがホラーだ。ホラーは喰った人間に憑依して人の姿で人に解け込みまた人を喰らう。ある意味鬼より厄介だ」

ザルバはしのぶにホラーの性質を説明し、それを聞いたしのぶは僅かながら顔を引き攣らせ、ザルバに質問する。

「見た目が人だという事は、鬼とは違い見分けがつかませんか？

もしかして・・・いるんですか？そのホラーが」

「その心配はない、今までにホラーの気配は感じなかったからな」

（俺様が話してられるのも、牙狼の鎧を召喚出来るのも魔界とこの世界が繋がっている事だという事は言わないほうが嬢ちゃんの為だろう）

しのぶは鬼以外の異形の存在が人に紛れて潜んでいるのか心配に

なり

ザルバに質問したが、ザルバはホラーの気配はないと答えたが、魔界と繋がっている事は、しのぶが余計な心配をしてしまう為に言わなかった。

「そうですか・もしかしてホラーと先代の牙狼だった大牙さんは何か関係が？」

しのぶは、それを聞いて安堵の表情を浮かべ、ザルバにホラーと大牙の関係を聞いた

「大牙は、いや魔戒騎士は古よりそのホラーと戦い人々を守り抜いてきた守りし者。ホラーは普通の武器じゃ太刀打ち出来ないからな、日輪刀じゃなければ鬼を殺す事が出来ない様に、ホラーもまた魔戒剣で斬るしか討滅する事が出来ないからな」

ザルバはしのぶに、鬼を殺す為に日輪刀が必要な様にホラーもまた魔戒剣の様な特別な武器が必要と話し、説明を続けた。

「大牙はエイリスというホラーと戦っていたが、奴が開いた時空のゲートに吸い込まれここに飛ばされてきた。ホラーが現れる事は無かったが代わりに鬼がいたからな、大牙は守りし者として鬼殺隊で鬼を狩って生涯を終えた。」

「そこまでは本人から聞いたな」

ザルバが大牙の経緯を説明していると、煌牙が既に知っている事を話し

しのぶが煌牙に疑問をぶつける。

「本人って何を言ってるんですか？大牙さんは昔の人ですよ？」

「ああ、牙狼の継承の時にな・牙狼ってさ歴代の牙狼継承者全てに継承を認めて貰わないと駄目なんだ、四ノ宮の敷地に英霊の塔って建物があるんだけど、そこで先代と話した事あるんだよ」

煌牙はしのぶに、牙狼継承の際に先代と話した事がある事を伝えて焙じ茶に口をつける。

そこへ先程注文した甘味が運ばれてきて煌牙は、よもぎ餅へと手を伸ばす。

「程よい甘さと、餅の食感これと焙じ茶の組み合わせは最高」

煌牙はよもぎ餅を食べながら焙じ茶を啜り、幸せそうな表情を浮かべていたが、しのぶは先程の話が気になるので餡蜜には手をつけずに煌牙に話しかけた。

「先程の続きですが、ホラーと先代の関係は分かりました。」

煌牙さんは本来ならホラーと戦う魔戒騎士であり、その力を鬼殺隊で振るっているという事も」

しのぶは、先程までの話を要約して、煌牙に語りかけ煌牙はちよつと違うとしのぶに返す。

「そう言われたらそうなんだけどさ、俺ホラーは見た事ないし鬼しか知らないからな、つまり本来は鬼殺隊でありながら魔戒騎士の力を鬼狩りで振るっているって感じかな？」

煌牙はホラーを見た事がない為、本来は鬼殺隊であり鬼狩りに魔戒騎士の力を使っていると答えた。

「どちらにせよ守りし者としての使命を忘れなければ問題ない」

ザルバが守りし者としての使命を忘れなければ大丈夫と話し、しのぶは当初の疑問をザルバにする。

「先程の話のホラーと鬼がどういった関係にあるんですか？」

「魔戒剣には斬ったホラーを浄化して封印する力がある。おそらく斬られた鬼の血が浄化されて鬼本来の能力が発揮出来ないのだから。」

もともと鬼無辻の血が濃い鬼だとそれほど浄化出来ないが再生能力の阻害にはなるはずだ。」

ザルバはしのぶに、魔戒剣の浄化の力が鬼の血を浄化して、鬼の特性を阻害していると答えた。

「鬼の血の浄化ですか・・・!!?もしかしたら鬼を人に戻す手掛かりになりませんか？」

しのぶは浄化の力が鬼を人に戻す手掛かりにならないか考えザルバに聞いてみたが、ザルバからの回答はしのぶの満足する内容ではなかった。

「嬢ちゃん、そいつは無理だ。魔戒剣は斬った者を浄化する力だ

仮に鬼を浄化出来てもそいつはもう絶命している。」

しのぶはザルバからの回答に、すこしだけ表情を曇らせるがすぐに切り換えて笑顔を見せる。

そんなしのぶを見て煌牙はしのぶに話しかける。

「でもさ、しのぶの言ってた事諦めたくないよな。鬼を人に戻す方法があるなら探したいよな、俺はたとえ無理だったとしても諦めたくない、あ！おしるこ冷めちゃう」

煌牙はしのぶを励ますように話し、自身も諦めたくないと言いつつおしるこが冷めるのを気にしていた。

おしるこを頬張る煌牙を見て、しのぶは作り笑いの笑顔ではなく本心からの笑みを煌牙に向けるのだった。

その頃、蝶屋敷で留守番をしていた桜花はカナエとアオイ、きよ、すみ、なほの三人娘とおはぎを食べていた。

「桜花さんの作るおはぎはとても美味しいです。作り方とか教わってもいいですか？」

アオイが桜花におはぎの作り方を教わろうと桜花に聞くと、三人娘の

視線が桜花に集中する。

（（桜花さんのおはぎがいつでも食べれます、お願いします））

三人娘は期待の眼差しを桜花に向け、目を輝かせている。

「いいよ〜♪アオイちゃんなら簡単に作れちゃうからね〜♪皆に作って食べさせてあげてね〜♪」

桜花はアオイに作り方を教えて、蝶屋敷の皆に食べさせてあげてほしいと思いき受け、三人娘は喜びながらおはぎを食べていた。

「あらあら〜♪皆良かったわね♪桜花ちゃんもありがとう♪」

カナエは微笑ましい光景を見つめながら桜花に礼を言い、煌牙としのぶ二人の話をしだす。

「しのぶと煌牙君、二人きりでどんな話をしてるのかしら？」

しのぶが煌牙君に告白でもしてるのかしら？だとしたら煌牙君も

私の弟よね〜♪」

カナエはしのぶが煌牙に告白をしてさらに弟になるといふつ飛んだ想像をしていたが、当の本人達はそんな話をしてる訳ではないので

カナエの想像だけで無駄に終わった。

「だとしたら〜しのぶちゃんも私の妹だよ〜♪あれ？私、煌牙より一つ下だからお姉ちゃんだよ〜♪」

桜花はカナエの発言で自分も煌牙と義兄妹である事からしのぶも妹になると思っていたが桜花は煌牙の姉弟子であり、年は一つ下なのでしのぶがお姉ちゃんになると気づき、言い直した。

が桜花もまたぶっ飛んだ想像であり、無駄に終わった。

「しのぶを応援する立場にある私が言うのもなんだけど、桜花ちゃんは煌牙君の事どう思ってるの？」

カナエは桜花が煌牙の事が好きなのでは？と思いついて質問を桜花にしてみた。カナエの知る限り桜花は煌牙といつも一緒にいるのできつとそうなんだろうと思っていた。

「煌牙〜？うん、大好きだよ〜♪今はね」

桜花は煌牙が好きと答えたがそれは今は好きであり、前はそうじゃないとそういう意図を含ませた言い方をした。

カナエはそれを聞いて、疑問になった発言について質問をした。

「桜花ちゃん、今はって、昔は嫌いだったの？なにかあったの？」

桜花はその質問にたいし、遠くを見ながら質問に答えた。

「うん、昔から嫌いじゃなかったけどね、嫉妬心？でもないか：対抗心かな？それがあつたからね・・・だから好きって気持ちじゃなかったよ」

カナエは桜花を見つめながら、顔を曇らせ桜花に謝る。

「桜花ちゃんゴメンナサイ、嫌な話させちやつたよね？」

桜花はカナエに振り返る事なく未だ遠くを見ながら返事を返す

「そんなことないよ、今の私がいるのも煌牙がいるおかげだし

今は対抗心とかないから、純粹に尊敬してるよ」

カナエは桜花の表情がスッキリしてるように感じ話を続ける

「もしよかつたら話を聞かせてくれるかしら？」

カナエの発言に、アオイや三人娘も視線を桜花向け

桜花からの発言を待つ。

「いいよ、ちよつと長くなるけどね」

桜花は目を閉じて昔を振り返りながら語り出した。

「お母さん、その子だ〜れ？」

まだ幼い頃の桜花は母が抱えて来た、ボロボロの男の子を見ながら母に聞いた。

「この子は、山に捨てられて死に掛けてたから私が保護して連れてきたのよ」

桜花の母であり、煌牙の師匠兼母でもある花蓮が桜花に語りかける。

「桜花、この子は貴方のお兄ちゃんになるの仲良くしてあげてね？」

花蓮は桜花に仲良くするように言う。桜花はボロボロの男の子を見ながら否定的な返事をした。

「嫌、私より弱そうな子なんて仲良くなんてしたくない、なんでボロボロなの？弱いから？私のお兄ちゃんなんて・・・そんなのいらぬ」

桜花はボロボロの男の子を見て弱いと判断し、弱い子とは仲良くする気も兄と認める気もないと母に返す。

「そうね、今はまだ弱いかもしれない。だけど頑張れば強くなれるわでもね桜花、この子は強い、体じゃなく心が・・・私がこの子を見つけた時、死に掛けてたこの子の眼は生きていたわ、誰よりも強く生きる事を諦めてなかったの」

花蓮は桜花に男の子の心の強さを伝え、桜花は少し考える。「でも・・・私より弱い・・・心が強いと私より強くなれるの？」

桜花は母に男の子が自分より強くなれるか疑問に思い聞き返す。

「きつとね、心が強ければいずれ課される四ノ宮の試練も乗り越える事が出来ると私は思うわ」

花蓮は男の子がいずれ訪れる四ノ宮家の地獄の試練を乗り越えようと信じて桜花に語る。

「お母さんが乗り越えた試練？あの試練私もやらないといけないの？」

桜花は地獄の試練を自分もやらないといけないのか不安になり花蓮に聞き返す。

「そんな事ないわ、本当に嫌なら別の道もあるもの。その時はお父さんのお仕事手伝ってあげてね？」

四ノ宮家は代々牙柱を受け継いで来た鬼殺隊の中でも名門の家柄でもあるがそれは裏の顔であり表では昔から商人として財を成してきた

事実上の名門の家柄であり江戸の末期に開国をして以来、貿易も営み

さらに財を成し今では財閥と呼ばれる程の権力を持っている。

桜花の父が会長を務めてるが、裏では鬼殺隊の隊士でもあり給金や隊服などの支給品や経費を産屋敷と賄っており、鬼殺隊の中でも発言力のある一族でもある。

桜花は花蓮の示した別の道を否定して、決意をした目で花蓮に話しかける。

「ううん、私は鬼殺隊になるから、誰よりも強くなって・・・牙狼にはなれないけど牙狼を支える魔戒法師になるから」

桜花は花蓮に強くなり鬼殺隊の隊士になり牙狼を支える魔戒法師になると宣言をした。

魔戒法師、魔戒騎士が誕生する以前にホラーから人を守ってきた守りし者であり、法力を駆使した術で騎士をサポートしたり、中には体術を駆使してホラーと戦う法師もいたりする。

花蓮は桜花の宣言に喜びと不安の混じった複雑な心境になるがそれを表情には出さずに桜花に語りかける。

「桜花その道は凄く辛い道よ、法師にはならず普通の鬼殺隊の隊士を目指しても良いのよ？」

花蓮は桜花に魔戒法師の道は過酷であり、法師の修行までしなくていい鬼殺隊員の道を示すが桜花はキツパリと断り再度宣言する。

「お母さん、私は決めたの！鬼殺隊の隊員も立派な守りし者だよ？」

「ただ、その隊員を守るのも守りし者の使命だよ？私は誰にも死んでほしくない！だから皆を助けられる法師にもなるの」

桜花の決意の満ちた眼差しに花蓮も覚悟を決め、決意した。

「桜花、分かったわ貴方が本気なら私も母としてではなく、牙柱として守りし者として貴方に接します、それでも貴方は大丈夫？」

花蓮は桜花に厳しくする事を伝え桜花の心配をするが、覚悟を決めた桜花には余計なお世話だったようで、花蓮に返答した。

「お母さん・師匠私の心配はいらないよ、この子も一緒に修行するんですよ？この子は心が強いんですよ？私はこの子に負けたくない

この子よりも私の方が強いって事を教えてあげるから」

桜花は男の子より強い事を証明したくて、ヤル気を見せるがその前に男の子を休ませようと花蓮に話しかける。

「師匠」

「桜花、今はまだお母さんでいさせて・・・修業の時だけ、修業の時だけ師匠って事にしてね」

桜花は花蓮を師匠と呼ぶが花蓮は修業の時以外は師匠じゃなく母として桜花に接したくて桜花に伝える。

「・・・もうこう、さっきまでの緊張感が台無しだよ・・・お母さんそれより、その子寝かせてあげないと駄目だよ・・・」

「そっそうね、早く休ませてあげないとね」

桜花も先程まで緊張してたが、それが解け句調がダラシなくなるが男の子を休ませる為に花蓮を急かし、花蓮は男の子を休ませる為に屋敷の中に姿を消した。

「もしかしたらあの子が牙狼を？・・・」

桜花は花蓮が姿を消した後、一人で呟き屋敷の中へ入って行った。

「此処は？俺は山に捨てられてそれから・・・」

男の子が眼を覚まし辺りを見渡した後、自身の記憶を探り状況を把握しようとしてる時、不意に横から声が出て声の方向に眼を向けた。「あっ！眼を覚ました、君ね、ここに來てから一週間寝てたんだよ」

「・・・君は？」

男の子は声の主に話しかけ、声の主は自分の名を名乗る

「私は四ノ宮 桜花、この家に住んでるの、私のお母さんがね君をここに連れてきたんだよ？山の中で死に掛けてたって」

桜花は男の子にここに連れてこられた経緯を話し、名前を聞いた。「君の名前ってなんなの？」

桜花にとつて当たり前のような質問だがそれは男の子にとつて拷問に近い質問だった。

男の子は苦虫を噛み潰したような表情で桜花に答えた。

「無いんだ・・・名前・・・俺には生まれつき名前なんか無いんだ・・・ゴメン」

男の子は申し訳ないのか、悲しいのかどちらとも取れる表情をして俯きながら桜花の返答を待った。

「え？・・・えつと・・・四ノ宮・・・君の苗字四ノ宮だから」桜花は予想外の回答に言葉を詰まらせ、暫く考え込み男の子に苗字を教えた。

「四ノ宮？え？それは君の苗字だよね？どうゆう事？」

男の子は桜花の発言の内容が理解出来ないでいた。

「えくと・・・君はこの家に引き取られてこの家の子になったのだから四ノ宮なの」

桜花は男の子がこの家の子になった事で、苗字が四ノ宮になった事を伝えた。

「え？・・・え？」

男の子は突然の出来事に未だに理解出来ないで戸惑っていたが

桜花が追い打ちにも似た発言をして更に混乱を深めることになる。

「私・・・君をお兄ちゃんなんて認めてないからね」

「……え？」

「とりあえずお母さんに眼を覚ましたって言うてくるからね〜」

桜花は花蓮に眼を覚ました事を伝えるため部屋を後にした。

「……四ノ宮？お兄ちゃん？……そうだ妹、妹が心配だ早く帰らないと」

男の子は妹の存在を思い出し、妹の元に帰る事にしたがそこへ花蓮がやって来て男の子に話しかける。

「眼が覚めて良かったわ、怪我は治したからもう痛くないと思うけど痛かったら教えてね？」

「え？あ、はい、ありがとうございます」

花蓮から怪我を治したと聞き、男の子は頭を下げてお礼を言い質問を花蓮にする。

「あの此処は？俺はどうして此処に？」

「此処は四ノ宮の屋敷よ、貴方は山の中で死に掛けてた、覚えてる？」

花蓮は男の子に山の中での出来事を聞いて、男の子の返答を待つ。

「あ、はい……両親に半殺しにされて……それで山の中に捨てられて……あの時の！あの、助けてくれてありがとうございます。」

男の子は山の中で、花蓮に助けられた事を思い出し花蓮にお礼を言
い
頭を下げる。

「気にしなくていいの、あの時貴方の眼は生きる事を諦めてなかった、誰よりも強く輝いていたわ、今もいい眼をしてるわよ？」

花蓮は男の子の眼が強く光り輝いている事を告げ、これからの事を男の子に伝えた。

「貴方は私が引き取って、この四ノ宮の子にしたの……貴方の意思を聞かずに勝手な事をしたのは謝るわ、嫌なら元の家にも送るし」

「妹が……妹がいるんです、俺と同じ境遇にあつてると思うと」

男の子は妹がいる事と自身と同じ境遇に妹が晒される事を心配していた。

「そう、妹がいるのね。心配よね？でも今の貴方じゃ妹を守れないわ何故なら貴方は弱いから、自分の命を守れないのに、どうやっ

て妹を守るの?」

花蓮は男の子に残酷な言葉を投げかけ、男の子はそれに反論出来ずに俯き、涙を流す。

「貴方が妹を守りたいのなら、まずは貴方が自分を守りなさい

貴方が自分の命を守れもしないで、妹を守るのは無理があるわ」

「俺は強くなれるんですか?強くなって妹を守れるんですか?」

花蓮の言葉に、男の子は強くなりたいと願う花蓮に聞き返す。

「ええ、貴方が諦めない限り強くなれるわ、貴方は既に誰よりも強い心を持っているもの」

花蓮は男の子に、貴方の心は強いと伝え優しく諭す。

「願わくば貴方が、闇を照らす希望の光とならん事を」

花蓮は男の子にそう呟き、男の子はその言葉に疑問を持つ。

「あの、闇を照らす希望の光って?」

「・・・ついて来てくれるかしら?」

花蓮は男の子にそう伝え、男の子と一緒に部屋を出る。

「此処は?おつきな建物ですね」

男の子は花蓮に連れられ、装飾が施された建物の中には入っていない。く。

「此処は英霊の塔、人を守り抜き希望の光となった偉大な方達が眠る塔と言えいいのかしら」

花蓮は男の子に建物の事をそう説明しながら、男の子を建物の奥に佇む像の前に案内する。

「カッコイイ像ですね、狼?かな?金色に輝いてとても綺麗ですね

像の前に刺してる剣がああ像の武器なんですか?」

男の子は眼を輝かせながら花蓮に感想を述べて、金色の像を見つめる。

「あの像は黄金騎士牙狼、かつて希望の光となり人々を守った英雄なの」

花蓮は男の子に牙狼の説明をして、男の子を牙狼の前に近づける

「この剣・鳴いてる？よく分からないけどなにか呼んでるような、不思議な音がする・・なんだろう？」

男の子は剣から不思議な音がすると呟くと花蓮は眼を開いて驚き男の子に問いかける。

「声が聴こえたの？牙狼剣の声が聴こえたのね？」

男の子は勢いよく質問され少し驚いながらも質問に答える。

「あ、はい声かどうかは分かりませんが、なにか呼んでるような不思議な音は聞こえました・・どうしたんです？」

花蓮は男の子の回答に、涙を流し男の子を抱き締めた。

「牙狼、貴方は牙狼。闇を照らす希望の光なの。」

男の子は勢いよく抱かれたのと自分が牙狼という発言に戸惑いを隠せないでいた。

「えっと・・その・・どういう意味ですか？」

男の子は意味が分からないので花蓮に意味を質問して、花蓮は今の世の中の事を語り出した。

「貴方はお伽話でしか知らないかもしれないけど、昔から人を喰べる人喰い鬼が実際にいるの。私達はその鬼を狩る鬼殺隊という組織に所属して戦っているわ、牙狼はね私達鬼殺隊にとっての希望でもあるの」

長い間、誰一人としてその剣を引き抜く事が出来なかった。牙狼剣の声なんて聴こえた人も今まで居なかった、貴方はその牙狼剣の声を聴いた初めての子なのよ」

男の子は、初めて聞く情報の多さに全てを理解する事は難しかったが、人喰い鬼が実際にいるという事は理解し、花蓮に質問を投げかける。

「人喰い鬼は誰でも見境なく人を喰べるんですよね？もし妹が鬼に襲われたりしたら妹は死んでしまうんですよね？だったら俺は誰よりも強くなって妹を守ります。」

男の子の決意にも似た発言に花蓮は嬉しそうに、だが厳しい質問を男の子に投げかける。

「鬼との戦いは命懸けよ、いつ命を落とすか分からないそれでも貴方

は妹を守る為に戦うの?」

「はい、だからこそ誰よりも強くなります。大切な人を守る為に俺は生き抜きます。大切な人を守りたいから、俺は誰にも負けません。」

「家には戻らなくて良いのね? 後戻りは出来ないわよ?」

「はい、覚悟は決めました。」

花蓮は男の子の強く輝く眼差しを見つめ、微笑みを浮かべ男の子に語りかける。

「ようこそ四ノ宮家へ、今日から貴方も私達の家族よ、えーと、名前は」

「ありません、生まれつきなかったの」

花蓮が男の子に名前を聞こうとしたが、男の子は名前をなかったの

で
無いと答えた。

「名前どうしよつか? 付けないとね?」

花蓮は予想外の展開に戸惑い、名前付けようと考えていた時、

桜花が現れ、男の子の顔をじつと見つめる。

「……煌牙……この子の名前、煌牙だよ」

目がね、煌めいてるようだもん。」

桜花が男の子に煌牙という名前を提案し花蓮もそれにしようとか快諾すると、男の子は初めて名前を貰った事が嬉しくて涙を流しながら

二人にお礼を言い、四ノ宮家の家族として迎えられた。

煌牙が四ノ宮家に迎え入れられて半年が過ぎ、煌牙は修行の日々に明け暮れていた。

「煌牙、今日の修行は終わりだぞ。早く風呂に入ろうぜ」

「煌牙最初に比べたら動きにキレが出て来たよね？この調子だよ」

煌牙に語りかける二人の少年少女、少年の名は日比谷 辰巳、少女の名は小鳥遊 春、煌牙と共に修行する兄弟子と姉弟子の二人が修行の終わりを告げ煌牙は修行を切り上げる。

「ああ、辰巳と春は凄いな。今の俺にはまだ無理だよ」

煌牙は辰巳と春に感嘆し、自分はまだ二人についていけないと語ると辰巳が笑いながら煌牙に話す。

「俺達の方が修行してる時間長いからな、すぐに追いつかれたら兄弟子の面目が潰れるぞ」

「そうだよ、煌牙は飲み込み早いし私達も追いつかれないよう結構必死なんだから」

春は煌牙の成長速度の早さに若干の焦りを覚えている事を煌牙に話しながら、結っていた髪を解く。

「まあ、俺達も桜花様には敵わないけどなくははは」

「あの子は花蓮様の継子だし私達とは違うわよ」

辰巳と春は桜花には敵わないと、若干諦めた口調で話す、それを聞いた煌牙は二人を鼓舞するように話します。

「俺は誰よりも強くなるから、桜花にも必ず追いついてみせるよ」

それを聞いた二人は笑いながら煌牙の肩を叩き煌牙に語りかける。

「ははは、お前も四ノ宮の子だもんな負けられないよな」

「ふふふ、さすがお兄ちゃんね」

煌牙は二人に笑われているのが居心地悪いのか、切り返しその場を後にする。もちろん馬鹿にされてるわけでもないし、からかわれてるわけでもないのは理解しているが。

「辰巳、あの子ならきつと追いつけるよね？」

「いや、追い越すさ。あいつなら必ずな」

辰巳と春は静寂とした修練場で煌牙なら桜花をも超えると語り修練場を後にするのだった。

それから1年後、煌牙はあれから更に成長を遂げ辰巳と春の二人よりも強くなっていた。

辰巳と春は煌牙との最後の修行を終えて、修練場で話します。

「お前の成長速度の速さには負けるよ、兄弟子の面目潰れたな、ははは」

「煌牙が人一倍修行頑張ってたからじゃない？誰よりも気迫が凄かったしね」

辰巳と春の二人は煌牙の成長を褒め、煌牙を見つめながら煌牙に話します。

「煌牙も花蓮様の継子かく、四ノ宮地獄の試練が始まるんだな」

「うええ、あれは試練というより拷問だよ、私達師範代の弟子で良かったと思うよ」

辰巳と春は煌牙が花蓮の継子となり地獄の試練を受ける事に苦い顔をしながら話します。

花蓮の継子、つまり現牙柱の継子は地獄の試練と称される修行を課せられる。四ノ宮家3ヶ条を乗り越えなければいけないのだから、春は

継子ではなく、師範代の弟子で良かったと心から思う。

師範代とは四ノ宮家に常駐してる育手で風の呼吸の使い手であり

四ノ宮家の弟子達に師事している。

牙の呼吸も風の呼吸からの派生であり、型の一部に雷、炎の要素を取り入れ大牙が編み出した呼吸である。

継子になれば花蓮が師事し、地獄の試練を経て牙の呼吸の継承、試練を乗り越える事が出来なかった時は、風の呼吸の継承と最低でも鬼殺隊の基礎は叩き込む育成をしている。

春の苦い顔を見た辰巳は苦笑いをして、煌牙に話しかける。

「煌牙死ぬなよ」

煌牙は辰巳からの安直な言葉に苦笑いをしながら辰巳に話し返す。

「率直にきたな、死ぬつもりもないし必ず乗り越えるからさ」

焠牙は決意を新たにした顔付きで二人を見返していると、修練場に桜花がやって来て焠牙に話しかける。

「焠牙、明日から私と一緒に修行だね、私は焠牙に負けるつもりもないからね、でも凄く強くなったね、焠牙」

桜花は焠牙に負けるつもりはないと対抗心を燃やしながらも、焠牙の成長を認め褒める。

「まあな、明日からよろしくな桜花」

焠牙は桜花への対応を簡単な返事だけで済まし、修練場を出て行く。

それを見つめる桜花は、辰巳と春に声をかける。

「ねぇ、辰兄と春姉、焠牙どうしちゃったのかな？なんだか避けられてるみたいだし」

「……さあな、気になるなら後で本人に聞いてみるよ。桜花様が気にする事じゃないと思うけどな、ははは」

辰巳は桜花に本人に聞いてみるのがいいと答え、笑い出すと桜花は辰巳に若干怒り気味に話します。

「聞けないよ、焠牙に避けられてるんだよ？怖くて聞けないよ」

桜花は辰巳に話しながら涙目になり、それを見かねた春が桜花に語りかける。

「桜花様……聞かなくてもいいから……黄金の騎士の像の所へ行けば焠牙はいるから」

春は桜花に英霊の塔に行けば焠牙はいると答え、桜花の頭を優しく撫でる

桜花は頷きながら、涙目になった目を擦り英霊の塔へと駆け出す。

「辰巳はいじわるだね、何も本人に聞けなんて言わなくても」

「ははは、桜花様が焠牙に構ってほしそうに見えたからさ、ついな」

春は桜花がいなくなった後、辰巳に先程のやり取りを咎め、辰巳は笑いながら返事を返す。

「そうね、最初は焠牙と仲良くする気はないって言った桜花様が今じゃ逆だもんね、お兄ちゃんに構って欲しい妹だもんね」

「対抗心全開だけどな、それも焠牙に構って貰いたい口実かもな」
二人はそんなやり取りをしながら座り込み、お茶を飲んでいた。

焠牙は修行を終えた後にいつも英霊の塔へと向かい、ソウルメタル製の小刀を振るう鍛錬を己に課していた。

誰よりも強くなる為、大切な者を守る為に毎日この場で鍛錬に励んでいた。

「俺、強くなるから強くなって牙狼になるから……闇を照らす希望の光になるから」

当初、持ち上げる事も出来なかったソウルメタル製の小刀、修行の日々で心身共に鍛えあげ、今じゃ小刀なら難なく振るう事が出来るようになっていた。

まるで舞を舞うかのような軽やかな体捌きで小刀を振るう焠牙、その様子を桜花は隠れながら伺っていた。

「焠牙凄い……でもどうしてそこまで頑張るの？」

桜花は聞こえないように小さな声で呟くが、焠牙は耳が良くて桜花が英霊の塔に来ていた事を既に知っていたので桜花に声をかける。

「桜花なんで隠れてるんだ？何か用があるんだろ？」

桜花は焠牙に気付かれてた事に動揺を隠せずに、ぎこちない仕草で姿を現わす。

「どうして私がいるってわかったの？気付かれないようにしてたのに」

桜花は焠牙に何故分かったのか疑問になり焠牙に聞いてみる事にした。

「昔から耳が良いんだよ小さい音でも聞こえるし、物に触れたらその記憶や人の想いも声として聞こえるんだよ」

焠牙は自身の特異性を桜花に語り、桜花が感嘆の表情をして焠牙に返す。

「ほえ〜焠牙って凄いんだね〜」

焠牙は桜花の感想に答えずに、桜花に用があるのか聞き返す。

「それで？俺に用があるんだろ？どうしたんだ？」

桜花は焠牙に聞かれた事に上手く答えれずに沈黙して黙ってしま
い

無言の時間が過ぎていく。

「用がないなら早く戻れよな、まだ鍛錬の途中だし」

焠牙は鍛錬の途中なので、桜花に用がないなら戻るように促すが

桜花は涙を流しながらそれを否定する。

「やだ・・・やだ」

突如泣き始めた桜花に焠牙は狼狽えながら、桜花を慰める。

「今のは言い方が悪かった、桜花ゴメンなホントにゴメンな」

謝る焠牙に泣きながら抱きつき桜花が喋り出す。

「焠牙と一緒に修行した事今迄無かったし、焠牙ずっと私の事避けて
るもん」

桜花は鬼殺隊の修行とは別に魔戒法師の修行もしていた為に焠牙
達とは別の場所で修行していたので今迄一人で修行していたから焠
牙と話す時間は修行以外の時間しか無かったが、桜花は焠牙が避けて
るように感じていた為、なかなか話せずにはいた。

「修行に関しては仕方ないだろ師匠の指導の一環だし・・・避けてる：
つもりはなかったんだけどな、そっかゴメンな桜花」

焠牙は師匠である花蓮の指導で辰巳や春と修行していたので仕方
ないと割り切るが、桜花が避けられてると思った事は桜花に謝った。
「ならどうして？」

桜花は焠牙にどういうつもりだったのか気になる為、焠牙に聞いて
みる。

「嫌われてると思ったんだ、俺は余所者だし・・・桜花対抗心全開だった
から余計にさ、だからなるべく馴れ馴れしくしないようにって」

焠牙は自分が余所者であることから、桜花に負い目を感じており
対抗心剥き出しの桜花に気を遣っていたと自分の心情を桜花に打
ち明ける。

「嫌ってなんかないよ？お願いだから余所者だなんて言わないで。

焠牙は余所者じゃない、家族だよ」

桜花は焠牙の事を余所者じゃなく家族として認めており、焠牙が自身を余所者と蔑む事が悲しくて、焠牙に縋るようにしがみつく。

「私ね、誰よりも強くなりたかった。強くなって皆を助けたいの。牙狼のような守りし者に。だから焠牙にも負けたくなかったの。」

でもそれが焠牙を傷付けちゃったんだね、焠牙ゴメンなさい」

桜花は自分が誰よりも強くなりたからこそ、焠牙に対抗心を燃やしていたが、それが焠牙の負い目を増長させていた事に気づき焠牙に謝る。

焠牙が四ノ宮に来た時は、弱いから仲良くしないと云っていたが焠牙が強くなっていく様を見て、焠牙と同じ時間を過ごしていくにつれそんなわだかまりは消え、家族として仲良くなりたいたいと思っていたが対抗心故に上手く接する事が出来ずにいた。

「そっか・桜花ありがとう。それとゴメンな、俺も桜花の気持ちに気づかなくて。俺も誰よりも強くなって皆を守りたいんだ、守りし者として」

焠牙は桜花の頭を撫でながら、お礼と謝罪そして自身の決意を桜花に語る。

「なあ桜花、俺達の力は誰かを守る為の力だ、大切な人達を守る為に桜花の力を貸して欲しい。俺達で強くなろう、悲しみの連鎖を断ち切る為に俺と桜花二人が誰よりも強くなって皆を守るんだ。」

焠牙は悲しみの連鎖を断ち切る為に、大切な人達を守る為に自分自身だけじゃなく桜花と二人で強くなりたいと思ひ、桜花の力を貸して欲しいと桜花に話し出す。

「うん・うん、私も焠牙と一緒に強くなりたい・焠牙は牙狼になれるから、絶対なれるから私も焠牙を支える魔戒法師になるからね」

桜花もまた焠牙と一緒に強くなりたいと、焠牙は絶対に牙狼になると信じて牙狼を支える魔戒法師になると焠牙に誓った。

翌日、焠牙と桜花は地獄の試練を受けるため、四ノ宮家が管理する山、白蓮山に訪れていた。

断崖絶壁に囲まれたその山は足場が悪い上に酸素濃度も薄くまと

もに呼吸も出来ないくらい過酷な環境で、その山で半年過ぎさなければならぬ。

足場の悪い岩山を越え、山の山頂付近に差し掛かると藤の花が山を囲むように咲いていて、藤の牢獄の中には鬼が放り込まれている。

地獄の試練はその山を毎日往復して、鬼と対峙しなければならぬ。日輪刀を持たされて登る日もあれば、持たされない日もあり、その時の状況に応じて鬼とやり過ぎす試練であり、全集中の呼吸は使用してはいけないという鬼畜な内容である。

花蓮は二人に試練の説明をして、日輪刀を渡し二人を見つめる。

「二人共いい眼をしてるわね、貴方達ならこの試練を乗り越えたと信じてるわ、でも無茶はしないでね生きて戻る事が何よりも大事だからね」

花蓮は二人が試練を乗り越える事を信じてるが、試練を乗り越える為に無茶をして命を落とすくらいなら試練を乗り越えなくてもいいと思っていた。

「師匠大丈夫です、俺達は無茶はしませんから生き抜く事を最優先して頑張ります。」

「師匠大丈夫だよ〜♪私も無茶はしないから煌牙と一緒に、煌牙と一緒になら私は大丈夫だから」

二人は花蓮に生き抜く事を約束してして、白蓮山へと向かい歩み出す

「やっぱ、酸素薄いから岩山登るのちよつとしんどい」

「だね〜♪でも煌牙と一緒にだから楽しいよ〜♪」

煌牙と桜花の二人は岩山を登ってる途中で少しだけ息が切れ始めるが

桜花は初めて煌牙と修行が出来る事が嬉しくて、楽しそうに登って行く。

岩山を登りきると、同じ山とは思えないほど景色の違う景観に二人は傍観して一旦、この場で休息を取り辺りを見渡す。

「落ち着くね〜♪マイナスイオンを感じるよ〜♪煌牙〜♪」

「そうだな〜．．．え？マイナスイオンって何？」

桜花が落ち着く空間で寛ぎながら煌牙に話しかけ煌牙も同意するが

桜花の言ったマイナスイオンの意味がわからずに聞き返す煌牙に桜花は説明をする。

「ん〜？なんとなくそんな感じかな〜って思ってた」

説明になっっていなかった。

少しの間休息を取った二人は山頂付近を目指して歩き出し、先に見える藤の花を見て、この先に鬼がいるという緊張感が出て顔付きが変わりだす。

藤の花の牢獄を通り抜け、森の中に差し掛かる前に二人は打ち合わせを始める。

「桜花、近すぎず遠すぎずお互いの距離を把握しながら対処していきましょう」

「うん、鬼の数や距離も考えて動かなきゃね」

二人は考えうる鬼との戦闘パターンを予測して状況に合わせた戦術を示し合わせ森の中には入っていく。

「桜花、まだ日が沈むまで時間あるから先に森の状況を把握してた方がいいかもな、ヤバイ時は藤の花の中に逃げるから森で迷ったら死ぬかも」

「あはは♪煌牙逃げる事まで考えてるんだね〜♪やつぱり煌牙って凄いな、尊敬してるよ♪」

「全集中使用禁止だからな、簡単に頸を刎ねる事は難しいだろ？」

最優先するのは生き抜く事、桜花もヤバイ時はすぐに逃げる事」

煌牙の最優先は生き抜く事であり、無理して鬼の頸を刎ねる事ではないのでヤバイ時は逃げる事を考えて森で迷わないように日の昇る今のうちに森の状況を把握しようとして桜花に提案していた。

桜花は煌牙が逃げる事まで考えている事に尊敬の念を込めて笑い出し、煌牙が桜花に再度念を押す。

やがて日が落ち、森の中に独特の静寂と夜の闇が広がり二人は周囲の気配に気を配り神経を研ぎ澄ます。

「……ガサガサー」

森の中を駆け抜ける何かの足音、それはまだ小さくその存在との距離は遠いが耳の良い焔牙には、はっきりと聞こえていた。

「桜花、10時の方向と3時の方向、鬼が向かってくるぞ、迎撃準備」

「3時の方向は任せて……♪焔牙もよろしくね♪」

焔牙は10時の方向へ、桜花は3時の方向へ体を向け鬼との接触を待つ

互いに鬼との戦闘は初めてだが、守りし者としての覚悟とそれに伴う精神面での鍛錬も欠かさずに行っていた為に物怖じしないで鬼に向かえていた。

「久しぶりの肉だ……二人纏めて喰らってやるからな」

10時の方向から、涎を垂らしながら焔牙に向かい走って来る鬼が叫びながら焔牙に向かい飛びかかり、焔牙は涎を垂らす鬼を見て汚いと顔をしかめながら、鬼に向かって側中で体を蹴り出し、体を捻りながら勢いよく鬼の顔面に蹴りを放つ。

「うん、日輪刀無しでの戦闘を見越して体術で迎撃したけど、悪くないな」

焔牙は日輪刀を使わないで鬼に対処する日に備えて初撃は体術で対応したが、予想に反して鬼が蹴り飛ばされたので手応えを感じていた。

「このクソガキ、絶対に喰い殺してやる」

勢いよく蹴り飛ばされた鬼は、口と鼻から鮮血を流しながら焔牙を睨み、鋭利な爪を立て焔牙に襲いかかる。

3時の方向からは少し小太りの鬼が桜花に向かい襲いかかる。・が桜花は軽やかな足取りで旋回し鬼の背後に回り、懐から八卦符を取り出し鬼の背中に貼り付ける。

「鬼さん、ちよつと太めだから躲すの楽だったよ？あとその背中の札はね、少しの間動けなくなるからね♪」

札を貼られた鬼は体を動かさそうと、もがくが札の効力で体を動かす事が出来ず桜花を睨みながら叫ぶ。

「小娘風情がふざけやがって、四肢を腕いで喰い散らかしてやるからな」

鬼の叫びに反応する事なく桜花は日輪刀を抜刀し、鬼の頸に斬りかかる・・・がその刃は頸を断ち切る事が出来ずに鬼の頸で止まっていた

「あ、やっぱり？ 焠牙くやっぱり斬れなかったよくく？ とりあえず逃げよ？」

桜花は予想通り頸を刎ねる事が出来ないと分かると焠牙に撤退を促し

焠牙に眼を向けると、血塗れで倒れ込んでいる鬼と余裕そうに鬼を眺める焠牙がいた。

「あくやっぱりすぐには斬れないか、よし今日はまだ実力不足という事が分かっただけで撤退するか」

焠牙もまた、全集中を使わないで頸を刎ねる事はまだ無理と予想していた為、余裕を持って撤退を決意する。

二人が撤退した後、2匹の鬼は少し困惑していた。人間は餌か若しくは

決死の覚悟で自身の頸を刎ねようとする人間しか知らない。

だがあの二人は違った、餌になるわけでもなく決死の覚悟で頸を斬りにかかるわけでもなく、まるで実験をしてるような、遊ばれているような感覚に2匹は陥っていた。そしてそれは激しい憎悪となり、二人を必ず喰い殺すと執念を燃やしていた。

翌日、焠牙と桜花は昨日の反省をして今日からの修行内容について話していた。

「鬼の頸を斬れないって事は、今までの基礎代謝じゃ駄目だろうな

全集中を使わないで、全集中と同じくらいの動きが出来ないとこの先も同じ結果かもな」

「そうだねくく、日輪刀無しで鬼を捌く時も今までよりも体力は必要

だし」

二人は話し合った結果、日中は岩登りの往復を繰り返し基礎代謝の向上を図り、その日の最後に鬼と対峙して駄目なら即撤退という修行内容を考えていた。

その様子を見ていた花蓮に二人は内容の是非を問う為、花蓮に話しかける。

「師匠、修行内容を自分達で考えてみたんですがどうですか？」

花蓮はその問いに微笑みながら、喋り出す。

「そうね、いいと思うわよ。この試練は貴方達の試練どう乗り越えるか貴方達で考えて実行したらいいと思うわ」

花蓮は二人にそう答えておもむろに立ち上がり二人が半年間寝泊まりする山小屋を後にする。

花蓮は柱としての任務と半年に一度の柱合会議に出席する為、今朝に出発しようとしていた。

「それじゃ私はこれで、後は二人で頑張ってるね」

花蓮は山小屋を出発して、焔牙と桜花の二人きりになった山小屋

桜花は焔牙と二人きりになった今の状況を見て考え込んでいた。

(あれ?!) 飯って誰が作るの? お母さんもないし、ここにはシェフの中山さんもない... まずくない?)

焔牙は二人きりになった現状で飯当番は自分だろうと考えて、炊事場に立ちそこで更に考え込む。

(待てよ? 食材の確保ってどうすんだ? 半年だぞ? 備蓄するのも限界がある。あ、これ詰んだわ)

地獄の試練2日目にして、二人は試練とは別の試練で窮地に立っていた

「桜花さん、非常にまずい状況です」

「はい、まさに地獄の試練ですね」

二人は何故か敬語で話し、少しおかしなテンションになっていた。

そこへ二人にとって救いの女神ならぬ救いの隠がやって来て、1週間分の食材を運び込んできた。

それを見た焔牙は、隠に土下座をして御礼を言う。

「ありがとうございます、ありがとうございます。貴方は命の恩人です。救いの隠様」

それを見た隠は、慌てて焠牙の頭を上げさせ一礼をしてその場を去って行く。

「助かった、これで当面は凌げる。良かったな桜花」

「いえ・・・まだです焠牙さん、私達はご飯を作れません、私はおはぎしか作れません。」

焠牙は食材の確保が出来て安心したが、桜花は誰もご飯が作れない状況でまだテンションがおかしかった。

「いや、ご飯なら俺作れるから。中山先生にも調理教わってたからそこそこのモンなら作れるから」

焠牙は四ノ宮家のシェフ中山さんにこっそり弟子入りして調理法

や知識を学び、料理が出来るようになっていた。

四ノ宮家の夕餉の一部の献立には焠牙の作った料理が混ざることもあり、腕前は中山シェフお墨付きを貰えた程に上達していた。

「・・・さすがお兄ちゃん♪桜花はもうお兄ちゃん無しじゃ生きていけません♪」

桜花は焠牙の有能ぶりに感嘆して、普段言わない兄という言葉を使

い褒めちぎる。

「大袈裟だって、てか初めて言われたぞお兄ちゃんとか」

焠牙は桜花が兄と呼んだ事にツツコミを入れながら、食材を捌いて調理を開始する。

「お兄ちゃんか・・・なあ桜花、俺さ妹がいたんだよ。いたって言い方も変だけどさ・・・妹がいるんだ、最初四ノ宮に来た時にな師匠に言われたよ、俺は弱いから妹は守れないって、まさにその通りだ。あの時俺は弱かったから自分の命すら守れない、それでも妹だけは守りたかったから俺は強くなりたかった、誰よりも強くなって妹を守りたかったから・・・それが俺が強くなりたかった理由なんだ」

桜花は焠牙が初めて自身の事を話してくれて、強くなりた理由も

話してくれて嬉しくなり思わず焔牙を後ろから抱き締める。

「うん、それが焔牙の原点なんだね。私も焔牙の妹を守るから焔牙と一緒に・・・ねえ？焔牙？私も焔牙の妹だよ？焔牙は私の事も守ってくれる？」

桜花は焔牙と一緒に妹を守る事を誓い、自分も義理とはいえ妹だから焔牙が守ってくれるか気になり焔牙に聞いてみる。

「当たり前だろ？守りし者として当然だ」

「そうゆう事じゃないんだけどなあ・・・焔牙の馬鹿」

焔牙は守りし者として当然だと胸を張って答えるが、桜花はその答えに不満なのか少し不貞腐れていた。

「・・・春、帰ろうあの雰囲気の中に俺は入れない」

ーガラガラー

「えっ？もう扉開けちゃったけど・・・そうね後はごゆっくり♪」

ーガラガラーボタンー

ーガラガラー

「ちよつと待って・・・、今は違うの、あの・・・その」

「おお？辰巳と春二人ともどうしたんだ？」

桜花が焔牙を抱きしめて会話してる最中、辰巳と春の二人は一昨日の件もあり二人が心配で様子を見にきていた。

辰巳は家にいるか確認する為、小窓から中の様子を伺うと、桜花が後ろから焔牙を抱き締めている光景を目撃してしまう。

辰巳は春にこのまま帰る事を勧めるが、春は御構い無しに扉を開き辰巳に返事するが、中の光景を見て扉を閉め、そそくさと帰ろうとする。

先程の光景を見られた桜花は慌てて飛び出し、言い訳にならない言い訳を繰り出し、焔牙は二人が来た事を呑気に質問していた。

桜花は先程の状況を説明してなんとか二人の誤解は解けたものの、辰巳と春の二人は焔牙と桜花の二人が仲良くしている光景を見て安

心したのか、居間に座って寛ぎ始める。

「焔牙、朝餉もう出来るのか？俺腹減った」

「もうちよっと待ってる鯛大根に味が染み込むまで後少しなんだ」

辰巳は焔牙に朝餉の催促をして出来上がりを待つが、焔牙は中山先生直伝の鯛大根の味の染み込むタイミングを見計らっていた。

「それにしても焔牙って鈍感というかなんとというか」

「春姉どうしたのくく？」

「抱き締められてる状況でなんで鯛大根に集中してたのか・神経を疑うわよ」

「わぷっ！春姉恥ずかしいから言わないでくく」

春と桜花は先程の光景の出来事を話していたが、鯛大根に集中して全く動じていなかった焔牙の神経はおかしいと春が言うと桜花は恥ずかさから顔を赤くして顔を伏せる。

そんなやり取りが行われて、朝餉が出来上がり皆で楽しく食べながら

朝餉を終える事ができた。

辰巳と春の二人は心配してた要因がなくなり、修行の為に帰るので焔牙と桜花も岩山を往復する修行を開始した。

週一の割合で隠からの食材提供と辰巳と春の訪問そんな修行の日々が続き、5ヶ月目が過ぎようとしていた。

「ホップステップジャンプ♪」

焔牙と桜花の二人は岩山を全集中を使わないで軽快に登れるようになり基礎代謝も向上し、日輪刀を使わない鬼との対峙も鬼を軽くあしらう程に強くなっていった。

今日は修行の集大成として日輪刀で鬼の頸を刎ねる試練を行おうとしていた。

「さてと、久しぶりの日輪刀ですが感想はどうですか？桜花さん」

「そうですね、修行の成果が発揮されるかオラ、ワクワクすつぞくつて感想です、どうぞ」

修行の集大成と久しぶりの日輪刀を持ちテンションがおかしな方

向にいつてる二人だがこれまでに課してきた努力は確実に実っており

後は鬼の頸を刎ねるだけになっていた。

日の木漏れ日が差し込む森に夜の静けさと漆黒の闇が訪れた瞬間

二人の周りを鬼が取り囲み二人は逃げ場を失っていた。・・ようにみえたが、この状況は想定済みであり寧ろ好都合だった。

鬼の数は12匹、煌牙と桜花は今回の試練はお互いに距離を置き一人に対処する方針で臨んでいた。

これまでに二人があしらっていた鬼全てが二人に怨みを抱いており、

煌牙に6匹、桜花に6匹の鬼が二人を取り囲み今まさに二人を八つ裂きにしてやろうと、爪を立て飛び掛ろうとしていた。

「桜花、師匠から特別に教わったあの型が使えそうだな」

「だね♪本当は試練乗り越えないと教えて貰えないけどね♪」

花蓮が使う牙の呼吸、一撃決殺を基本とした壺の型から参の型までは伝授されてる二人だがその先の型は試練を突破しないと伝授出来ないが、子に甘い花蓮は特別に一つだけ二人に型を伝授していて、今の状況はその型が発揮される状況と判断し二人は抜刀し腰を捻り上げ日輪刀を地面と平行に構える。

それと同時に鬼達が飛び掛かり鋭い爪を突き立てようと二人に腕を振るう。

――牙の呼吸 肆の型 空谷の蹙音――

轟音と共に鋭い風を巻き起こしながら体を一転、巻き起こる風が刃となり鬼の爪と腕を斬り落とし、回転で勢いがついた日輪刀が鬼達の頸を横一闪に薙ぎ払い二人の周囲に灰と化した鬼の残骸だけが取り残される。

二人は頸を刎ねた事で試練を達成したが、まだ日輪刀は納刀出来ずにいた。初日にあしらった鬼達が現れていない、必ず自分達を殺しに来ると周囲に気配を張り巡らせていた。

その予想は意外にも早く訪れ、鬼が背後から煌牙に爪を突き立て斬

り裂こうと襲うが煌牙はしやがみ込んで体を反転、振り向きざまに日輪刀を振るい鬼の胴体を切り裂き回し蹴りで追い打ちをかける。

――牙の呼吸 壱の型 断空の牙――

煌牙は大きく跳躍して鬼との距離を詰め、日輪刀を横一閃に斬りつけながら空中で体を大きく捻り鬼の頸を刎ね飛ばす。

桜花の下にも小太りの鬼が現れて桜花に喰い掛ろうと、鋭い牙を剥き出しにして桜花に噛み付く・・・がその刹那

――牙の呼吸 弐の型 虚空の牙――

まるでなにも起きなかつたかのような静寂の後、鬼の頸が突如跳ね飛ばされ桜花は日輪刀を納刀する。

煌牙も日輪刀を納刀し、森をあとにして山小屋へと戻り反省会を開く

「桜花・・・鬼全滅させたよな？明日からの修行どうしよう？」

「あ〜〜やっちゃったね〜wとりあえず更に基礎代謝を上げようよ」
♪

こうして二人は残り一カ月の間、基礎代謝を上げる修行だけをやり続け四ノ宮家に帰還する。そして一年の歳月を経て花蓮から牙の呼吸の型の伝授と全集中・常中を会得した二人は最終選別の地、藤襲山へと

向かい歩き出す。

煌牙が四ノ宮家に来てから3年目、そして牙狼を継承する2年前の話である。

「まあ、こんな感じかな〜私と煌牙の最初の頃は」

桜花はカナエ達に昔の話を語り、少し照れ臭そうな顔をする。

「桜花ちゃん話してくれてありがとう」

カナエは桜花に話してくれたお礼をいい、桜花に質問を続ける。

「桜花ちゃんも煌牙君の事好きなんだね、家族として？男の子として？」

カナエは桜花の好きが家族愛なのか、恋愛感情なのか気になってつい聞いてしまう。

桜花と煌牙二人の間には他人が入り込めない絆があり、家族愛ならまだしも恋愛感情だとしのぶは桜花に勝ち目が無いと思いいかなエは桜花に質問したのだ。

「家族としてかな？多分・じゃなきやしのぶちゃんと二人きりなんてさせないよ〜w」

カナエは桜花の言葉を聞いて安堵の表情を浮かべ、しのぶを思いやる

(しのぶ、頑張って)

蝶屋敷での女子会が終わった頃、煌牙としのぶは蝶屋敷に戻り

煌牙と桜花は一旦自宅に帰る事に、そしてしのぶはカナエに

煌牙との茶屋の話を掘り葉掘り聞かれ、説明していたが

カナエの期待した話は全く出てこないで、カナエは落胆しながらおはぎを食べる。

しのぶが幸せになる日を想像しながら。

「どうしてこんな事に」

少年は少女の手を引きながら、必死に森の中を走っていた。

「お兄ちゃん、私もう駄目」

少年に手を引かれて走る少女は少年にそう告げる。

「小夜子、後ろを向いちゃ駄目だ」

少年は少女に話しかけながら必死に森の中を走る。いや逃げている

少年達は夜の闇に跋扈し人を喰らう鬼から必死に逃げていた。

少年達は先程まで、家族と一緒に家で眠っていた。

決して裕福ではないが厳しくも優しい父、笑顔で頭を撫でてくれる母

面倒見の良い姉、少年達は大好きな家族に囲まれて幸せな日々を送っていた。

だがその日々は突如として理不尽に奪われた。

家族が寝静まり静寂に包まれた夜、両親が寝てるはずの居間から聞き慣れない異音が響き渡る

―バキン―ゴリゴリ―グチュー―

少年は両親が夜中に何かやってるのかと気になって目を覚めますがそれと同時に鉄のような匂いが漂っている事に気付き、表情を強張らせる。

父が生業としている、猟で採れた獲物を捌いた時と同じ匂い

血の匂いだと理解した少年は部屋の戸を恐る恐る開け、僅かな隙間から血の匂いのするその場所を覗き見る。

少年が覗き見た光景は、目を疑いたくなるような痛ましい光景だった

部屋中に血が飛び散り、床や壁にはまだ新しいであろう鮮血が滴り落ちていた。

異音のする方へ視線を動かすとそこには四肢が挽がれ、頭部を失った父の姿があった。

少年は信じられない光景に、息をするのも忘れていたが父の横で蠢めく存在を見た瞬間、身体中から汗が止まらなくなっていた。

人間とは思えない眼、鋭い爪や牙を持つ存在が母の胴体を食い破つて

口の周りを鮮血に染めている光景を目の当たりにした。

少年は気付かれないように息を潜めていたが、異音で眼が覚めたのか

姉が少年に声をかける。

「修也？そんなところで何してるの？」

姉が少年に声をかけると、両親を咀嚼していた存在が咀嚼をやめ少年達のいる部屋の方向を見て不気味な笑みを浮かべる。

「なんだまだいやがったのか。しかもガキの声だ。固い肉は食い飽きてたからな、ガキの柔らかい肉を頂くか」

その存在は少年達のいる部屋の戸を蹴破り部屋の中に進入して、子供達を数えながら口から涎を垂らし喋り出す

「ひいふうみい、三人か。ギヒヒ！どいつから喰ってやろうか？」

戸を蹴破った衝撃音で妹の少女も飛び起き、侵入者を見て叫び出す
「きゃああああ！！？鬼！お姉ちゃんお兄ちゃん！助けて！」

少女は鬼を見て姉と兄に助けを求め叫び、少女の叫びに反応したのか

鬼は少女を見つめニヤリと笑いながら少女に近づく。

「先ずはお前からだ」

鬼は少女に手を伸ばすが、鬼が少女を捕まえる前に姉が少女を掴み少年に引き渡す。

「修也、小夜子を連れて逃げて！少しでも遠くへ逃げて！」

姉は少年と少女の前に立ち塞がり鬼から弟と妹を守ろうとする。

「姉ちゃんも一緒」

少年は姉も一緒に逃げようと言いかけるが、鬼が姉の首を掴み上げる光景を見て言葉が途切れる。

「お願い・・・逃げ・・・て」

姉はなんとか声を出して少年に逃げるように言うのがやっとだった

た。

少年は妹の手を引きながら必死に我が家から飛び出し近くの森の中へと逃げて行く。

（姉ちゃん・・ゴメン！ゴメン！小夜子は守るから・・姉ちゃん）

少年は自らを犠牲にして自分達を逃してくれた姉に謝りながら妹を守ると誓い、姉に思いを馳せる

「お兄ちゃん！お姉ちゃんは？お姉ちゃんはどうなったの？」

少女は少年に鬼に捕まった姉の安否が心配になり尋ねるが少年の悲壮な表情に状況を察し、口籠ってしまう。

少年達は森の御神木が立っている社まで逃げ、社の中に隠れて鬼から身を隠しやり過ぎそうとしていた。

「お兄ちゃん、私達鬼に食べられちゃうの？」

少女は自分達が鬼に喰われる心配をして少年に話しかけるが、少年は

少女に心配はないと、安心させるように語りかける。

「ここは神様のいる場所だから大丈夫、鬼も入ってこれないから」

少年は神を祀る社だから、鬼は入ってこないと少女に言うが

それは気休めだった事に気付かされる。

「ギヒヒヒ、じゃあなんで俺はこの中にいるんだろうな？」

二人の背後から鬼の声がして二人は恐怖と驚愕の表情に包まれる

神様を祀る社の中に鬼がいるはずがない、そう信じていた二人の

絶望に満ちた表情を見て鬼は歓喜の叫びを放ち、少年と少女を睨む

「それだよ！その絶望に満ちた表情その顔が見たかったんだよ」

鬼は二人を品定めするような目付きで睨みながら、二人に言い放つた

「お前らの姉ちゃんは美味かったぞ、骨一つ残らず喰ってやったからな」

少年と少女は姉が鬼に喰われ、既にこの世にいない事を知り顔を青ざめながら涙を流す。

「ギヒヒ！たまらねえなその表情！俺は絶望に満ちたガキを喰うのが大好きなんだよお」

鬼は不気味な笑みを浮かべ二人に歩み寄るが、少年は妹の手を引きながら社を飛び出して鬼から逃げ出した。

「ギヒヒ！逃げる逃げる、逃げてても無駄だと理解した絶望の表情を見せてくれよ」

鬼は二人の逃亡を見逃すが、自身の瞬発力ですぐに追いつく事が出来るので余裕を見せていた。むしろ逃げれないと分かった時の絶望感を見たいが為に敢えて逃していた。

先程、鬼が社の中にいたのも先回りして社の中に潜んでいたからであり、緊迫した状況で助かる為に社に縋り付く事を想定して先手をうっていた。

「どうしてこんなことに」

妹の手を引きながら必死に逃げる少年と走り続けて息の切れかかった少女、少女は体力の限界なのであろう走る速度が落ちてきていた。

「お兄ちゃん、私もう駄目」

少女は後ろから追ってくるであろう鬼がいないか振り向くが、兄である少年に後ろを振り向かないように言われる。

「小夜子、後ろを向いちゃ駄目だ」

体力も限界に近い中必死に走る二人の先に人影が見え、助けを求めようと人影に近いていく二人、だがその人影こそが二人が逃げていた相手、鬼だった。

「ギヒヒヒ！残念だったな、助かったと思っただろ？ああ、いい表情だ！ガキお前の眼の前で妹を喰えばお前は更にいい表情をするんだろうな？ギヒヒ！」

鬼は助けを求めて近付いてきた二人の表情に満足し、少年の眼の前で妹を喰らえば少年の絶望に染まった顔を見れると思いき笑い出す。

鬼は少女の頭を鷲掴みにしながら少年に視線を向けニヤリと笑うと

少女の首筋に噛み付こうと鋭い牙を剥き出しにして口を開く。

「やめろー」

少年の悲壮な叫びも虚しく、鬼は少女の首筋に噛み付く……

が突如眼の前から少女の姿が消え去り、鬼も少年も呆然とする。

「は？小娘が消えた？・・・いったい何が？」

鬼は眼前の出来事が理解出来ずにいたが、少女だけではなく自身の両腕も共に消えていた事に気づく。

「ギィヤァァァァ俺の腕がー」

鬼の双方の腕から鮮血が滴り落ち、鬼の足元が赤く染まる

鬼は自身の腕が消えたのではなく、斬り落とされたと理解すると

怒号の混じる声で叫ぶ。

「俺の腕を斬りやがったのはどいつだ？出てこい」

鬼が喚き散らすと、鬼の後ろから声が聞こえてきた。

「いや、さっきから後ろにいたんだけど・・・早く気付けよ」

鬼が声のする後方へと振り返るとそこには先程喰らおうとした少女を抱えた少年がいた。

「お前か俺の腕を斬って食事の邪魔をしたのは・・・なるほど、お前鬼狩りだな」

鬼は少女を抱えた少年が先程の出来事の原因と認識すると、その少年が鬼殺隊の隊員だと気付く。

「ギヒヒ！お前俺が十二鬼月の一人だと知っての狼藉か？」

鬼は鬼殺隊の少年に自身が十二鬼月の一人だと告げると少年は鬼に向かい呆れたような口調で返す。

「いや、お前眼に数字ないだろバレル嘘吐くなよ」

少年は十二鬼月の特徴である、眼の刻印が刻まれてないことを鬼に返すと鬼は焦りの表情を見せる。

（クソが、十二鬼月だと言えば鬼狩りが怯むと思ったがコイツには通用しねえ）

鬼狩りの少年は少女を解放すると少女に隠れるように言い、鬼と対峙すると懐から日輪刀を引き出し柄を掴みながら鞘を地面と平行に向ける。

朱色一色に染まる鞘から少年は刀を引き抜くと峰が翡翠色に染まる刀身が現れ、刀身に刻まれた悪鬼滅殺の文字が鬼の眼にとまる。

「お前柱か！なんで柱がここに」

鬼は眼の前の鬼狩りの少年が鬼殺隊の最上級剣士 柱である事に
気付き

狼狽え始める。

「俺の管轄下だし、巡回中に鬼の気配がしたから」

鬼狩りの少年 牙柱 四ノ宮焯牙が鬼にあっさりとした返事を返すと鬼は血鬼術を発動して爪に自身の血で固めた刃を纏い、焯牙に構えをとる。

「俺の名は切我魅、お前を斬り裂く鬼だ」

切我魅と名乗る鬼は焯牙に名乗り出し、焯牙は面倒くさそうに返事を返す。

「はあく御丁寧にどうも、でも斬り裂かれるのは俺じゃないお前だよ」
焯牙は鬼に斬り裂かれるのは鬼の方だと告げると鞘を真上に放り投げ構えをとる。

切我魅は素早い動きで焯牙に近付いて刃を振るうが、焯牙は僅かな動きで切我魅の攻撃を紙一重で躲して、切我魅の頭部に渾身の上段蹴りを放ち切我魅は錐揉みしながら蹴りとばされる。

蹴り飛ばされた切我魅は牙を折られ口から鮮血を流して蹲り、狼狽していた。

（俺の攻撃が当たる気がしねえ、あいつ俺の攻撃を見切つてやがる・・・かくなるうへは）

切我魅は起き上がると血鬼術の刃に更に血を集めて刃を巨大化して

焯牙に振りかかる。

「血鬼術・爪刃乱凱」

巨大化した十本の刃が一斉に焯牙を斬り裂こうと牙を剥くが

焯牙は冷静に構えをとりなおし、スウ〜と息を吸い込み型を繰り出す

ー牙の呼吸 伍の型 猛虎爪襲牙ー

猛る虎の如く荒々しい風と共に刃を横薙ぎに振り、猛る風が爪となりて切我魅の血鬼術の刃をバラバラに引き裂く。

「俺の血鬼術が・・・そんな」

切我魅は自身の血鬼術が簡単に破られ、力量の差を叩きつけられるが

煌牙の猛攻は絶望してる切我魅に構うことなく攻撃を繰り返す。

ー牙の呼吸 捌の型 六根清浄・舞天狼ー

穏やかな風を纏いながら、舞を舞うような体捌きで神速の六連撃を放ち切我魅の両手足、胴体、頸が断ち斬られる。

頸を斬られた切我魅は安らかな顔をしながら灰と化し森の中に静寂が訪れる。

煌牙は日輪刀の切っ先を真上に掲げ、上空から落ちてくる鞘を刀身に収める・・はずが鯉口が微妙にずれて刀身に収まらず煌牙の頭に直撃する。

「痛っ！牙狼剣だと上手く収まるのに、やっぱり刀が反ってるせいだ
カツコつけるんじゃないよ」

煌牙は普段は牙狼剣を使用しているが、自身の日輪刀を所持していないわけではない、今回は花蓮が牙狼剣の浄化を行う為に屋敷に預けて巡回任務に赴いていた。

煌牙の相棒ザルバ曰く、鬼の血を浄化すると少なくとも穢れは牙狼剣に溜まるらしく定期的に浄化を行うようにしていた。

煌牙は頭をさすりながら、少年と少女に声をかけ鬼は居なくなつたから大丈夫だと安心させる。

近くで煌牙と切我魅の戦いを見ていた少年と木の陰に隠れていた少女は泣き始め二人一斉に煌牙にしがみついていた。

暫く泣いたあと、少年と少女は鬼に家族を喰い殺された事や煌牙に助けられる直前までの出来事を煌牙に話す。

「二人共、ホントにゴメンな俺がもう少し早ければ家族も助けられたかもしれないのに」

煌牙はこの山に来るのが早ければこの兄妹が不幸な出来事に会わなかったと自身の失態を責める。

「違うよ、悪いのは鬼だよ！お兄ちゃんがいなかったら妹まで鬼に喰われてたんだ、妹が生きてるのはお兄ちゃんのおかげだよ」

「お兄ちゃん助けてくれてありがとう、ホントにありがとう」

二人は焯牙に助けられたお礼を言うと、焯牙は二人を抱きしめ二人にお礼を言う

「ありがとう、生きててくれてありがとう」

焯牙が二人にそう言うのと二人は緊張が解けたのか再び泣き出し焯牙に抱きついて離さなかつた、やがて朝日が差し込み始め森に明るさが戻り始めると焯牙は二人を連れて兄妹の家族を埋葬して二人に話し始める。

頼る親戚の事や、二人のこれからについて焯牙は二人に聞くと

頼る親戚もいなく焯牙は藤の家に預けようと考え二人に聞く

二人は焯牙にしがみついで、焯牙に付いて行くと言い出した。

焯牙は懐から八卦符を取り出し、花蓮に連絡を入れると花蓮から応答が来て通信を始める。

焯牙は事のあらずじを花蓮に説明をして二人が自分に付いて行くと説明すると花蓮はそれを了承して通信を切る。

焯牙は花蓮からの了承を得た事で二人を四ノ宮の屋敷に連れて帰る事にした。

あれから2日後、焯牙は桜花と共に蝶屋敷へと赴いていた

カナヲの最終選別が今日で終わり出迎える為に蝶屋敷に来ていたが

2日前の出来事を話していると、カナヲが蝶屋敷に帰って来て話を中断してカナヲを出迎える。

「カナヲ、無事で良かったホントに良かった」

焯牙がカナヲの頭を撫でながら笑顔でカナヲを出迎え、カナヲは焯牙に抱きついて喜びを表した。

「うん、兄さん私ちゃんと帰ってきたよ」

カナヲが焯牙に抱きついでいる後ろからしのぶとカナエがカナヲの頭を撫でながら嬉しそうにカナヲの語りかける。

「カナヲ、無事で良かった」

「カナヲく良かった〜」

しのぶとカナエの嬉しそうな声にカナヲも笑顔で返事を返す

「しのぶ姉さん、カナエ姉さんただいま戻りました」

カナヲの笑顔を見た二人は心からの笑顔でカナヲに言った

「おかえりなさい、カナヲ」

「カナヲちゃん、合格おめでとう〜私からカナヲちゃんに合格祝いの贈り物だよ〜♪」

桜花はカナヲの合格祝いに、ある物を持って来ていた

「ありがとうございますいます桜花さん、羽織ですか？」

「ただの羽織じゃないよ〜♪煌牙や私と同じ魔法衣の羽織だよ〜♪」

魔法衣とは魔法騎士や法師が纏う戦闘服で素材となる霊獣の加護や法力を編み込んだ魔法衣は鬼殺隊の隊服と同等以上の防御力を誇り

熱気や冷気などの攻撃も緩和出来る程である。

2年前煌牙がカナエを助けた際、冷気を操る上弦の式と対峙した時、深刻な凍傷を負わなかったのもこの魔法衣のおかげである。

「兄さんと同じ・・・お揃い」

カナヲは煌牙とお揃いだという事に内心嬉しく思うが、デザインが煌牙と違い丈が腰辺りまでしかない羽織だが、煌牙の魔法衣は所謂ロングコートのようなデザインとなっており丈も足元まである仕様になってなっている。

「カナヲちゃん、羽織の内側に手を入れてみて〜♪」

桜花はカナヲに羽織の中に手を入れるよう勧める

「はい・・・あれ？この羽織何かオカシイです」

カナヲは羽織の内側に手を入れると羽織の生地を貫通して手が消える事がオカシイと桜花に告げる、

「うんうん♪魔法衣の内側はね〜♪某ネコ型のアレみたいに四次元に繋がってるんだ〜♪日輪刀も仕舞えるから街中でも便利だよ〜♪」

桜花は魔法衣の内側が四次元に繋がっていて、荷物や道具、日輪刀も収納出来る事から街中でも手ぶらで歩けるから便利だとカナヲに

教え上機嫌になる。

「……（某ネコ型？四次元？……銅貨で……裏でも表でも無理……意味がわからない）」ニコツ

カナヲは桜花の発言の意味が分からず、笑顔でその場を誤魔化した。すると煌牙がカナヲに魔法衣について話し出した。

「カナヲ、某ネコ型は気にしなくていいからな。とりあえず魔法衣はな防御が凄いい、収納に便利な服だと思えばいいから」

煌牙がカナヲに簡単に伝えるとカナヲは納得したようで二度頷いた。

「白い羽織なのね♪カナヲに似合ってたて可愛いわ♪」

「突っ込み所がありすぎて……カナヲ良かったわね」

カナエが白い羽織に袖を通したカナヲを見て可愛いと褒め

しのぶは桜花が説明した話の突っ込み所が多すぎて考えるのをやめて

カナヲに話しかけた。

「カナヲ、隊服にも袖を通してみたら？」

しのぶはカナヲに隊服にも袖を通すように促してカナヲは隊服に着替え出し、煌牙は一旦部屋から出て着替えが終わるのを外で待っていた

「兄さん着替え終わったから」

カナヲが煌牙に着替え終わった事を伝えると煌牙が部屋に入ってきて

カナヲの隊服姿を見つめる。

「カナヲ、普通の隊服にして貰いましょう？それは燃やしていいから♪」

カナエはカナヲの隊服が一般の隊服とデザインが違う事に静かに怒り、隊服は燃やしていいと言い放つ。

「……前田さん、覚悟しておいてくださいね♪一番苦しい毒で苦しませてあげますから、いえ死にはしませんから大丈夫ですよ♪」

しのぶは隊服を担当する隠、前田に毒を盛り込むと物騒な事を言い出す。

カナヲの隊服は下がスカートで白いブーツという一般隊服とは違うデザインだが煌牙はそれを見てカナヲに似合つて可愛いと言いつつ出した

「いや、前田さんはともかくカナヲに似合つて可愛いと思うけど」

「可愛い・・・私の隊服がいい・・・この隊服がいい・・・です」

カナヲは煌牙に褒められた事でこの隊服がいいとたどたどしくしのぶとカナエに告げる。

「カナヲが良いなら・・・うん、可愛いから問題なし」

「カナヲが良いのなら反対はしないけど、前田さんにはちゃんとお話ししないとけませんね♪」

カナエとしのぶはカナヲの判断に委ねるが、前田だけは許せないしのぶは後日お話しと称した小言を前田に語るのだった。

「・・・さすがに広すぎだと思いますよ、蝶屋敷の敷地が小さく見えますから」

「あらあら♪大豪邸ね♪敷地も広くて・・・広すぎるわね♪」

「ここが兄さんの住んでるところ」

しのぶ、カナエ、カナヲの三人は煌牙、桜花の自宅である四ノ宮家の屋敷に来ていた・・・正確には屋敷に入る敷地の前に立っていた。

煌牙は巡回中に鬼に家族を殺された天涯孤独となった兄妹の話を蝶屋敷で話していたが、蝶屋敷に来る前に二人の兄妹、修也と小夜子に

カナヲという妹がいるという話を二人にしていた。

修也と小夜子は兄と慕う煌牙の妹、カナヲにも会いたいと言い煌牙は

蝶屋敷で日輪刀が出来上がる暫くの間、カナヲを四ノ宮家に案内したいとしのぶ、カナエに説明していた。

しのぶは四ノ宮家なら休息だけじゃなく稽古も問題ないと判断して承してカナエは面白そうという理由で自分も付いて行く事にした

が、カナエが四ノ宮家で粗相しないか心配になり、しのぶも同行する事になった。

煌牙と桜花は先導して三人を案内し、屋敷の扉を開けて屋敷の中に入ると

「二「おかえりなさいませ煌牙様、桜花お嬢様」二」

そこには四人のメイドと一人の執事が立ち並んで煌牙と桜花の二人に

頭を下げ出迎えをしている光景が三人の目に焼きついた。

「ただいま倉橋さん、今日はお客が来てるんですけど」

煌牙は執事の倉橋にしのお、カナエ、カナヲを紹介すると倉橋は既に知っているらしく三人に向かい挨拶をする。

「初めまして私、四ノ宮家及び煌牙様桜花お嬢様に仕えております

倉橋ゴンザと申します、蟲柱であられる胡蝶しのぶ様、元花柱であられる胡蝶カナエ様、そして煌牙様の妹君であられる栗花落カナヲ様でございますね、以後お見知りおきを」

執事の倉橋は三人に頭を下げ丁寧な挨拶をして三人を屋敷の中へと案内する。

しのぶ、カナエ、カナヲの三人はあまり馴染みのない洋館の屋敷を見渡しながら屋敷の応接間へと案内される。

そこには先代牙柱 四ノ宮花蓮とその夫であり四ノ宮財閥の会長

四ノ宮 泰三が座っており、三人を待っていた。

「初めまして、蟲柱を就任してます胡蝶しのぶと申します」

「花蓮さん、お久しぶりです2年前の柱合会議以来ですね」

「初めまして・・・栗花落カナヲです」

しのぶ、カナエ、カナヲの三人は花蓮と泰三に向かい挨拶をすると花蓮と泰三も三人にたいし挨拶を返す。

「カナエちゃん久しぶりね、元気になって良かったわ。しのぶちゃんとカナヲちゃんは初めまして、色々聞いてるわよ」

「僕は皆さんとは初対面だね。初めまして四ノ宮財閥の会長と鬼殺隊運営を務めてる四ノ宮泰三です、今後共よろしくお願いします」

花蓮は三人にソファアに腰掛けるように促し、しのぶ、カナヲ、カナヲは一言挨拶をしてソファアに腰掛ける。

花蓮は三人を見つめながら、何から話そうか迷いながら三人に話しかける。

「何から話しましょうか?・・・うん、まずはカナヲちゃんね煌牙の妹だと聞いてるわよ、だとすると私の娘でもあるのよね♪」

花蓮はカナヲが煌牙の妹であるなら自分の娘でもあると嬉しそうにカナヲに話します。

「・・・え?お母さん?・・・娘?」

カナヲは突然の出来事に思考が追いつかずいたがしのぶは心の中で

花蓮に突っ込みを入れていた

(この親にして子ありとはこの事ですな)

しのぶは桜花のぶっ飛んだ・・・飛躍しすぎた発想が花蓮からの遺産だとわかり割と辛辣な評価を花蓮にしていた。

「花蓮、話が飛躍しすぎだよ?カナエさん、しのぶさんが困るから気を付けようね?」

泰三は花蓮に諭すように話し、その場を和ませようとする。

その泰三を見てしのぶは再び心の中で突っ込みを入れる。

(桜花さんと花蓮さんがぶっ飛んでいて、泰三さんと煌牙さんが抑え

る・四ノ宮家も大変ですね)

「ふふ♪(めんなさいね、カナヲちゃんに初めて会えたのが嬉しくて
つい」

花蓮はカナヲに会えたのが嬉しくて上機嫌になり先程の発言をし
たと答え、カナヲも内心嬉しいのか笑顔を花蓮に見せていた。

「しのぶちゃんと会うのは初めてね、今は蟲柱を就任してるのよね

柱の任務は色々忙しいから大変でしょう？無理をしないでね？」

花蓮はしのぶに柱の任務は多忙で大変だから身体に気をつけるよ
うに優しく話しかけるとしのぶも、穏やかな表情で花蓮に言葉を返し
た。

「はい、大変な事ではありませんけど私は一人ではありませんから♪

姉さんやカナヲ、アオイにきよ、すみ、なほ蝶屋敷の皆がいます♪

それに桜花さんや煌牙さんも私を支えてくれますから♪」

しのぶは花蓮に自分は一人ではなく、蝶屋敷の家族や桜花、煌牙と
いう大切な仲間がいると笑顔で答える。

「そう、それなら大丈夫ね♪貴方は一人じゃない、辛い時困った時は
誰かに話すだけでも心が軽くなるもの、それを忘れないでね」

花蓮は諭すように語ると優しく微笑みながらしのぶを見つめる。

しのぶは花蓮の優しい笑みを見て、自身の心境を打ち明け出した。

「私は、いえ私達は両親を鬼に殺されました、今でも鬼は憎いです

姉さんはそんな鬼も哀れんでいます、以前の私には理解出来ません
でした。人を殺しておいて可哀想？鬼は平気で嘘を吐きます。何故
鬼を哀れむ必要があるのでしょうか？・・・姉さんはそれでも鬼と仲
良く出来ると信じていました。でも・・・でも鬼はそんな姉さんの想い
など関係なく姉さんに手をかけました。上弦の弐、アイツだけは絶対
に許しません今でもこの手で殺してやりたいと思ってます。・・・だ
けど

煌牙さんに、牙狼に教えられた気がします。人の想いが重なり受け
継がれ、また繋いでいくと。私も姉さんの夢を受け継ぎ、姉さんのよ
うになりたいと思いました。今でも鬼は憎いと思う心と仲良く出来
るといふ心が葛藤しています。でも、姉さんが託した想いを私も誰か

に託したい、私一人じゃなく皆などと、煌牙さんと一緒ならきつと出来る。私は信じています。」

しのぶは自身の心境を打ち明かすと、どこかスッキリした表情をしていた。

カナエはしのぶの思ってた内情を聞いて涙を流し、しのぶを抱きしめながらしのぶに話し出した。

「しのぶ、ゴメンなさい貴方がそこまで思い詰めてたなんて、私の夢がしのぶを苦しめてたなんて、私姉さん失格だわ」

カナエは自身の夢がしのぶを苦しめ、思い詰めさせてたと思いのぶに泣きながら自分は姉失格と責める。

しのぶはカナエを抱きしめ返し、微笑みながらカナエを諭し出す。「姉さんそれは違うわ、私も煌牙さんのようになりたい、煌牙さんのように色んな想いを受け継ぎ、その先へと繋いでいきたいの。これは私の夢でもあるの、だから姉さんが自分を責める必要はないから、姉さんも私の夢を応援してね？」

しのぶはカナエに、自身の夢だと話すとカナエは泣きながらも微笑み返ししのぶの夢を応援すると誓う。

「うん・うん応援するわ、私に出来る事なら何でもするから・・しのぶ、姉さんを頼ってね？」

カナエがしのぶに夢を応援すると言うと、しのぶ、カナヲ、花蓮、泰三も笑顔になり、しのぶに話し出した。

「しのぶ姉さん、私もしのぶ姉さんの夢応援します、私の想いもしのぶ姉さんに託します」

「そうね、いつかその日が来るように私も貴方に想いを託します。だから、貴方の想いも私に託してね？貴方は一人じゃないのだから」

「鬼殺隊として表立って協力は出来ないかもしれないけど僕個人は君達に協力するよ」

カナヲ、花蓮、泰三の三人もしのぶの夢を応援すると言うと

しのぶは笑顔でお礼を言い、運び込まれた和菓子と抹茶を

美味しそうに頬張りながら幸せそうな顔をするのだった。

花蓮は話を切り替え、二年前カナエが上弦の式と遭遇、戦闘の末重傷を負った話を切り出しカナエは上弦の式との話を語り出す。

月明かりが照らす夜、カナエとしのぶはその日の任務を終え合流して帰ろうとしていた。

「しのぶは大丈夫かしら？早く合流しないと」

一人呟くカナエはしのぶと合流する為に歩き始めると、カナエの後方から不気味な気配を感じカナエは振り返る。

振り返った先には四肢を腕がれ頭部と脚だけになった女性を喰らいながらカナエを見てる鬼の姿が見えた。

「やあやあ〜こんばんは、今夜は月が綺麗だねえ君みたいな娘を喰うにはぴったりの夜だと思わないか？」

白椽色の髪に血を被ったような模様の頭をした鬼がカナエに近づきながら、不気味な笑顔を見せ喋りかけてくる。

これまでカナエが斬ってきた鬼とは比べ物にならない威圧感にカナエは日輪刀を反射的に抜刀し構えをとる。

「貴方とは仲良く出来そうにありませんね」

カナエは鬼に仲良く出来そうにないと言うと、鬼は巫山戯るような話し方でカナエに喋り出す

「うう〜可哀想に、でも大丈夫♪俺に喰われる事で君は俺と一つになれる、仲良く出来るから心配はいらないね♪」

鬼は涙を流したり笑ったりしながらカナエに仲良く出来ると吐き棄てる。

カナエは得体の知れない不気味さに警戒を緩める事なく、鬼を観察していると今まで笑みで瞳を見せる事なかった鬼がカナエを見つめ出す

カナエが見た鬼の眼には右目に式、左目に上弦と数字が刻まれてい

て
て
目の前の鬼が十二鬼月の上弦の鬼と理解すると最大級の警戒をし
て

息を吸い込み、彼女が修めてる花の呼吸の型を繰り返す。

――花の呼吸 弐の型 御影梅――

カナエを中心に周囲に無数の斬撃を放つが、上弦の鬼は鉄扇を取り出してその斬撃を全て防ぎ、カナエの頸を狙い鉄扇を振るう。

カナエは鉄扇の攻撃を日輪刀で弾きながら後退し、再度型を繰り返す為息を吸い込み型を繰り返す。・がカナエは口から血を吐きその場に倒れ込む。

「おや？俺の血鬼術吸っちゃたねえ、肺胞が壊死してるから辛いよね俺の血鬼術、粉凍りを吸ったら皆こうなるんだ、呼吸はもう使えないよ」

上弦の鬼はカナエに自身の血鬼術で肺を壊死させたと笑いながら喋り出すと、カナエが気力を振り絞って立ち上げ日輪刀を構える。

「貴方を見逃せば悲しい思いをする人達が増え続けます、柱として引くわけにはいきません」

カナエは悲しみを増やさない為、自身の柱としての誇りの為に自分の命と引き替えにしても上弦の鬼の頸を斬る覚悟を決め、日輪刀を構える。

「素晴らしいよ♪無駄だとわかってても尚諦めない愚かさ、君も俺が救済してあげるから安心して俺に喰われなよ♪俺の名は童磨、君を救う救済の教主さ♪」

上弦の鬼・童磨は不気味な喜びの表情をしながらカナエに鉄扇を振るいカナエの胴体を斬り裂く。

――牙の呼吸 参の型 閃空の牙――

視認出来ない速度で童磨に詰め寄り、高速の居合斬りで童磨の鉄扇を弾きカナエの窮地を救う少女が童磨の目の前に現れ、童磨はその少女を見つめる。

「今夜はいい夜だねえ♪ご馳走が自らやってくる♪」

童磨は鉄扇で口元を隠しながら不気味な笑みを少女に向ける。

黒髪をポニーテールで結った頭髮、桜模様の薄紅色の羽織

上下共に丈の短い隊服を纏う少女 四ノ宮 桜花は童磨に向かい

一言だけ喋る。

「キモい」

桜花は一言だけ童磨に喋ると、懐から魔戒法師が使う魔導具 魔戒筆を取り出し空中に印を描き、八卦懐を媒介にした結界を作り出す。

童磨は罵られても気にしてないらしく、桜花に近づき桜花に掴みかかるが結界に阻まれそれ以上近づく事が出来ないでいた。

「いやあく面白い初めて見るよお、呼吸じゃないね俺達と同じ血鬼術じゃなさそうだし」

童磨は初めて見る魔戒法師の術に興味を示し、好奇心の目で結界を眺め鉄扇で結界を壊しにかかる。

童磨の繰り出す鉄扇の連撃を阻む結界だが、上弦の鬼からの一撃は重くそれほど長く耐えられるわけではないので桜花は八卦符・翼の札を取り出しカナエを引き連れてその場を離脱する。

八卦符・翼の札、予め別の場所に貼っている陰の札を出口として陽の札を入り口に札から札へ瞬間移動出来る八卦符である。

「大丈夫ですか？今治療しますから」

桜花はカナエをその場に寝かせ、魔戒筆で印を描き術を発動させる。

ちようどそこにカナエと合流しようとしてたしのぶが現れ、カナエの惨状を見て慌ててカナエに駆けつける。

「姉さん？姉さん？！しっかりして姉さん？」

しのぶはカナエの状態を見て泣きながらカナエに呼びかけるがカナエはまともな呼吸も出来ず、しのぶに手を伸ばすのが精いっぱいだった

「しのぶちゃん、まずは治療が先だから私に任せて」

桜花はしのぶに治療を行うと告げると術を生み出した光の球をカナエの体と同化させる。

先程まで呼吸もまともにも出来ず虫の息だったカナエの呼吸が安定して顔色が戻り、しのぶに笑顔を見せるとしのぶは号泣してカナエに

抱きつく。

カナエはしのぶの頭を撫でながら微笑み、桜花へ視線を移して桜花を見つめる。

「助けてくれてありがとう、私は花柱　胡蝶カナエよ貴方は？」

カナエは桜花に助けてくれたお礼と自分の名を名乗り、桜花の名を聞く。

「私は四ノ宮　桜花、カナエさんはしのぶちゃんのお姉さんなんです
ね♪」

桜花も自分の名を名乗り、カナエがしのぶの姉だと分かると嬉しそうな表情になる。

「四ノ宮？もしかして花蓮さんの娘？しのぶから聞いてるわ、最終選別で一緒だったって」

カナエは桜花の苗字が四ノ宮であることから同じ柱である花蓮の娘と判断し、しのぶから同期でもあると聞かされた事を話した。

「俺は悲しい、救済の道から外れ自ら外道に堕ちるなんて…俺は優しいから放っておけないぜ、今度こそ救済してあげよう」

カナエと桜花が話していると突如、童磨の声が聞こえ桜花カナエしのぶの前に現れる。

「鬼さん…キモい！もうね存在がキモいの！モラハラが服を着て歩いてるの！近づかないで！」

桜花は童磨に容赦ない罵声を浴びせ、童磨も流石に堪えたのか真顔になり桜花を見つめ話しだした。

「何でそんな事言うのかな？可愛い顔して辛辣過ぎるよ？よく分からない発言もしてるし」

童磨は罵倒されてる事と意味不明な言葉を発言してる旨を桜花に問うと桜花から再び罵声を浴びせられる。

「これ以上喋らなくて結構です、耳が腐りそうです今度はバイオハザードですか？モラルハザードとバイオハザード、そんなにハザードレベル上げてどうしたいんですかあ？ハザードトリガー使いたいですか？」

桜花は童磨に罵声を浴びせるが、童磨は言っている意味が分からず

困惑した表情になる。

「……君の救済は無理そうだね、出来れば関わりたくないなあ」
桜花は童磨との舌戦？に勝ち、ある意味上弦が負かされた瞬間でもあった。

童磨は気を取り直して、三人に近づき血鬼術を放とうとする。

——血鬼術・散り蓮華——

童磨は鉄扇を振るうと砕けた花のような氷を飛ばし三人を凍らせようとしますが、その場に煌牙が駆けつけ童磨の血鬼術を吹き飛ばす
「桜花悪い、遅くなった」

——牙の呼吸 肆の型 空谷の登音——

轟音と共に風を巻き起こし、体を一転させ巻き起こした風で散り蓮華の氷を吹き飛ばす煌牙、童磨は煌牙を見て少し怠そうな表情で喋り出す。

「ご馳走が来たと思えば男だったよ、女の肉がいいから君帰っていいよ」

童磨は煌牙の相手をする気がないのか、煌牙に帰るように言うが
煌牙はこの場を引く気は無いので牙狼剣を構え童磨に対峙する。

「上弦の式……鬼無辻の血が濃い鬼……ここでお前を倒せば不変の歴史が変わる」

煌牙は童磨を倒すことで長らく変わらなかった上弦の歴史が変わると言って、童磨に型を繰り出す。

——牙の呼吸 伍の型 猛虎爪襲牙——

猛る虎の如く荒々しい風と共に刀を横薙ぎに振り猛る風が爪となりて童磨に斬りかかり童磨は鉄扇で煌牙の斬撃を受け止めるが風の爪を相殺出来ず胴体から鮮血が噴き出す。

「あれえ？防いだと思ったのに、それに呼吸も……そうか風で飛ばしたのかあ、でも残念♪傷はすぐに治っちゃうぜ♪」

風で爪で裂かれた童磨の傷は瞬時に再生して、余裕の表情を煌牙に見せつける。

「だったら、直接斬るだけだ」

煌牙は牙狼剣の構えを変えて息を吸い込み、型を繰り出す

――牙の呼吸 式の型 虚空の牙――

何も起きなかったと思わせる程の超神速の斬撃を童磨の頸目掛けて放つが、放つ直前に嫌な予感を感じた童磨は鉄扇で頸を守り焠牙の斬撃を防ぐ――は？が想像以上の速さと、速度の乗った斬撃の威力を殺す事が出来ず頸に僅かながら刃を通され、少し驚いた顔をしながら

焠牙を褒め出す。

「俺の頸に刃を通した人間はお前が初めてだよ、良かったねえ嬉しかったねえでも無駄だよ、ほら♪すぐに・・・あれ？」

童磨は自身の頸に僅かながらでも刃を通した焠牙を褒めるが、傷はすぐに完治するため無駄だと言いかけて言葉が止まる。

「傷の再生が遅い、お前何したの？」

童磨は裂傷の再生が瞬時に再生しない事に疑問を持ち焠牙に問いかけると焠牙は童磨を無視して童磨に斬りかかる。

「再生させる時間を与えるつもりはないよ」

焠牙は童磨に再生させる時間を与えないように頸を狙い牙狼剣の連撃を繰り出す。血鬼術による迎撃で童磨から距離を置く。

――血鬼術・枯園垂り――

童磨は鉄扇に冷気を纏って鉄扇による連撃を放ち焠牙を下がらせると更に血鬼術を発言して焠牙に襲いかかる。

「あの方のためにもお前はここで始末しないと」

――血鬼術・冬ざれ氷柱――

童磨は焠牙の頭上に巨大な氷柱を多数発生させて焠牙目掛けて落とす

焠牙は後方に飛んで氷柱を回避するが童磨が後ろに回り込んでいて鉄扇を焠牙の首に振るう。

咄嗟にしゃがみ込んで鉄扇を回避した焠牙は体を捻りながら前方宙返りで童磨との距離を開き童磨を見据える。

童磨は先程まで余裕のある態度で焠牙で遊ぶ気だったが、頸を斬られた際に傷の再生が遅かった事から、何かしらの特異性があり危険な存在になりうると判断し早々に始末しようとしていた。

「ヤル気になったのはいいけど、結構厄介だな」

煌牙は童磨が余裕の態度をとってるのをみて遊ばれてると感じていた為、油断してるうちに頸を刎ねようと式の型で斬りつけたが、それが童磨の本気を出させる事になり警戒心を引き上げる。

――血鬼術・凍て曇――

童磨が鉄扇から氷の煙幕を撒き散らし煌牙の視界を奪うと煌牙の目の前に飛び込み鉄扇を振るい煌牙に斬りかかる。

視界が悪く反応が遅れた煌牙は反射的に牙狼剣で鉄扇を防ぐが、もう一振りの鉄扇が煌牙の腹部に迫り、煌牙は錐揉みしながら跳躍し鉄扇からの致命傷を避ける。

「今の避けるなんて、面白い動きするねえ♪動けなくなったらどんな反応するのかなあ♪試してみようよ」

童磨は先程の煌牙の回避が奇抜だったのか楽しそうに笑い、新たな思いつきを試そうとする。

――血鬼術・寒烈の白姫――

氷の巫女を二体作り出した童磨は更に血鬼術を発動して煌牙の動きを止めようとする。

――血鬼術・蓮葉氷――

鉄扇を振るい煌牙の周囲に蓮の花の氷を発生させる童磨は逃げ場を失くした煌牙に寒烈の白姫の息吹を吹き掛ける。

周りを血鬼術で囲まれた煌牙は、寒烈の白姫の息吹を浴びながら型を繰り出す。

――牙の呼吸 陸の型 龍穿の罅――

真空の刃を作り出しその刃を突く事で龍を彷彿させる巨大な竜巻を発生させ寒烈の白姫を消し飛ばした煌牙は竜巻に飲まれた童磨に型を繰り出し頸を斬りにかかる。

――牙の呼吸 壺の型 断空の牙――

童磨目掛けて跳躍して、体を大きく捻りながら童磨の頸に刃を振るうが鉄扇に阻まれる。

「今の連撃凄かったねえ、俺の血鬼術消し飛ばすとは思わなかったよでもお前じゃ俺の頸は斬れないよ」

童磨は先程の型を褒めるが決して自分の頸は斬れないと煌牙に言い放つと、煌牙は牙狼剣を頭上に掲げながら童磨に言い返す。

「斬り裂いてやるよ」

煌牙は頭上に掲げた牙狼剣で弧を描き、黄金騎士 牙狼の鎧を召喚して

身に纏う。

金色の輝きを放つ黄金の鎧を見た童磨は身の危険を感じ、血鬼術を発動する。

——血鬼術・結晶の御子——

童磨に似た小型の氷人形を3体作り出し、共に攻撃を仕掛ける童磨「お前が黒死牟殿が言っていた牙狼かい？綺麗な鎧だねえ俺の部屋に飾らせたいな」

童磨は上弦の壱 黒死牟が昔言っていた牙狼なのか問いながら自分の部屋に飾りたいと言い出した。

童磨と血鬼術の攻撃をまとめて受け止めた牙狼は、童磨の戯言に耳を貸さずに童磨に話しだす。

「お前からは嫌な音が聞こえる。お前に喰われていった人々の悲しみが聞こえる」

牙狼は童磨に喰われていった人々の悲しみが聞こえ、それを童磨に告げると童磨は笑いながら語り出した。

「違うよ、哀れな人間は俺が喰らう事で救われるんだ、俺に喰われる事で俺と永遠に一つになれる、俺に喰われた奴は皆幸せの中で死ぬんだ」

童磨は自分が喰らう事で人間が幸せで救われると言い出すと、牙狼は牙狼剣を振り抜き童磨と結晶の御子をまとめて弾き飛ばす。

「殺されて幸せな奴なんかいない、いや俺は認めない」

牙狼は童磨に反論すると、一つ目の装飾を施した着火装置型の魔導具を取り出し

魔導具に火を灯す。

翡翠色の幻想的な炎が燃え上がり牙狼はその炎を牙狼剣にかざすと

牙狼剣が翡翠色の炎に包まれ燃え上がり、牙狼は炎を纏う牙狼剣でクロスを描くと牙狼剣の軌道に翡翠色の炎が灯りその炎を童磨に向けて押し飛ばす。

童磨は鉄扇で炎を防ぐが炎は童磨を貫通して弧を描き牙狼に向かってくる。

牙狼はそのまま炎を浴びると牙狼の鎧全体が翡翠色の炎に包まれ燃え上がり、牙狼剣を童磨に向けて構える。

――烈火炎装――

魔界の炎 魔導火を全身や武器に纏い攻撃力や防御力を飛躍的に向上させる代わりに体力を激しく消耗する諸刃の剣でもある魔戒騎士の奥義

その烈火炎装を纏った牙狼は迫り来る血鬼術に型を繰り返して迎撃する

――牙の呼吸 肆の型 空谷の跫音――

魔導火を纏った風を巻き起こし牙狼の周囲に展開する血鬼術を全て斬り飛ばすと牙狼は童磨に向かい牙狼剣を突き出す。

「悲しみの連鎖を断ち切る為にここでお前を斬る」

牙狼は童磨にこの場で斬り伏せると告げると童磨は空を見上げて牙狼に向かい残念そうに喋り出す

「お前の相手楽しそうだけど、じきに夜が明けるここまでだね」

童磨は牙狼に撤退することを告げ、その場から離脱しようとするがふと足を止め、牙狼に一言話し出した。

「お前の相手はいずれ斬吼狼殿がするはずだよ、お前じゃ足元にも及ばないけど」

童磨はそう告げると、牙狼の前から姿を消し朝日が差し始める。

牙狼は鎧を解除して送還すると、桜花達の元に駆け寄る

カナエは朝日が昇り緊迫した空気が解けた瞬間に眠りだし煌牙はカナエを背負いながら、桜花しのぶと共に蝶屋敷へと歩き出す。

カナエは二年前の顛末を話すと、ふと立ち上がり屋敷の外で修也、小夜子と共に遊んでいる煌牙、桜花、辰巳、春の六人の輪に加わり共

に遊び出すのだった。

カナエが席を外した後、しのぶは花蓮に四ノ宮の試練の事を花蓮に聞いていた。

「花蓮さん、昔、煌牙さんや桜花さんが乗り越えた試練ってどういう内容なんですか？」

しのぶは最終選別当時、煌牙や桜花が最終選別の内容が自分達が乗り越えた試練と似てると話していた事を思い出し花蓮に聞いてみる

と

花蓮はしのぶに試練の内容を話し出す。

「そうね、最終選別の内容と似てるわ、日輪刀の使用制限と全集中の呼吸使用禁止の原則があるくらいかしら？」

花蓮はしのぶに試練の内容を話し出すと、しのぶは試練の意味を見出せずに花蓮に質問をした。

「日輪刀も全集中も禁止だとすると鬼殺隊としての意味がない気がするんですが、どのような意図があるのでしょうか？」

鬼を狩る為に日輪刀と全集中の呼吸は必須であり、その常識を根底から覆すような試練にどのような意味があるのか疑問になったしのぶ

花蓮はその意味をしのぶ、カナヲに問いかけるように話すのだった。

「しのぶちゃん、カナヲちゃん日輪刀も呼吸も使えない、そのような状況になった時貴方達は どうする？」

「それでも、私達は鬼殺隊ですから最期まで諦めません」

「私も同じです」

花蓮からの質問にしのぶ、カナヲは鬼殺隊として諦めないと答える

と

花蓮は真剣な眼差しで二人にその意味を話し出す。

「そうね、私も同じよ。だからこそ意味があるの。全集中の呼吸や日輪刀がなくても最期まで諦めないその意思を貫く為に、その命を明日へと繋げる為に」

花蓮は鬼殺隊として致命的な弱点になりうる全集中の呼吸や日輪刀が使えない状況でも生存率をあげる為に、そのような試練があると説明すると、泰三が付け加えるように話し出した。

「元々は先代黄金騎士 大牙様が考案したらしいんだ、ホラーを狩る魔戒騎士は呼吸を使わず鍛え上げた体一つで戦ってきたと伝えられてるからね」

泰三は魔戒騎士は呼吸を使わず、ホラーと戦ってきたと伝えるところ、カナヲはホラーという初めて聞く言葉に疑問を持ち泰三にホラーの事を聞いてみた。

「あの、ホラーってなんですか？鬼とは違うんですか？」

カナヲは泰三にホラーと鬼の違いを聞いてみるが泰三はあまり詳しくはないようで花蓮が代わりにカナヲに話し出した。

「私達も伝えられた事しか分からないけど、人の心に邪心がある限り陰我は生まれその陰我を入りに魔界と呼ばれる別の場所から現れる鬼とは違う異形の化け物と聞いているわ」

花蓮がカナヲに説明していると、しのぶがザルバから聞いた内容を話し出した。

「人の魂を喰らう闇の魔獣、先代の太牙さんはホラーとの戦いで飛ばされたザルバさんから聞きました」

しのぶはザルバから聞いた内容を掻い摘んで話すとカナヲはザルバとは何か疑問になったのでしのぶに聞くことにした。

「しのぶ姉さん、ザルバってなんですか？」

カナヲからの問いかけに、しのぶは上手く説明する言葉が見つからないのか、分かる事だけ簡単に答えた。

「焠牙さんの左手に嵌めてる装飾の事よ、何故喋れるのか教えてもらえなかったけど」

しのぶはカナヲに簡単に説明したが、何故喋れるのか茶屋での話では結局教えてもらってないので未だにわからずにいた。

「そう、ザルバと話したのね・ザルバもホラーよ、人と共存を望む友好的なホラー、そのホラーの意識を宿したのが魔導輪ザルバ、今は焠牙と契約を結んで焠牙のサポートをしてるわ」

花蓮は二人にザルバがホラーでありその意識を宿したのが魔導輪ザルバだと告げるとカナヲ、しのぶは驚いた表情になり花蓮に詰め寄る。

「兄さん・・・大丈夫なんですか？」

「友好的なホラーと聞きましたけど、本来は魂を喰らう存在なんですよね？」

二人はホラーであるザルバと契約してる煌牙が心配になり花蓮に詰め寄るが花蓮は一呼吸置いて二人に話し出す、

「大丈夫よ・・・煌牙は今も生きてる・・・そうでしょ？」

花蓮は少しぎこちない返答になるが、しのぶとカナヲの二人は煌牙の心配をしてるせいか花蓮のぎこちない違和感に気付かずその言葉を受け入れる。

ザルバとの契約には煌牙が払う代償もあるが、二人に話しづらいのか

あえて言わずにいた。

それが後に大騒動になるとは誰も予想していなかった。

一方煌牙と桜花の二人は辰巳、春と一緒に修也小夜子の兄妹と蹴球で遊んでいた。

煌牙、春、小夜子、桜花、辰巳、修也の編成で遊んでいたが、鬼殺隊の四人がやり出すと、無駄に高度な遊びへと変貌していき、修也と小夜子とはもはや曲芸となった蹴球を観て楽しんでいた。

辰巳からのパスを空中でヒールトラップした桜花は一旦着地して再度跳躍し宙に舞うボールを脚で挟み回転を加える。

「煌牙♪いくよ♪エターナルブリズ『それ言っちゃダメ！』わお」

春は桜花の発言を止めながら、両手を地につけ、体を回しながらボールを奪うとその勢いのまま回転を続け煌牙にパスを送る。

「煌牙、兄弟子の名誉挽回させてもらうからな」

辰巳は兄弟子の面子の為にボールを保持した煌牙からボールを奪おうと脚を伸ばすが煌牙は緩急をつけた動きで辰巳を躲すとシュートを放つが、参の型を使った桜花が回り込んでボールを蹴り返す。

ボールは明後日の方向に飛んでいくのだが、丁度そこにタイムリングが良いのか悪いのか屋敷から出てきたカナエがやって来てボールがカナエへと迫る。

カナエは迫るボールを見て、落ち着いた表情をしながら一言発した。

「はなぶぶき」

カナエは一言発したのだが何も起こらずボールはカナエの顔面へと吸い込まれカナエは顔を抑えながら蹲る。

「痛い・・・」

カナエの一部始終を見ていた六人は慌ててカナエに駆け寄り声をかける。

「カナエさん大丈夫ですか？　というか普通に避けられましたよね？」

「カナエさん大丈夫？　キーパー技出なかつたね？」

「大丈夫ですか？　てかキーパー技って何？」

「あわわ、元花柱様に失礼な事を」

「お姉ちゃん大丈夫ですか？」

「痛そう」

煌牙、桜花、辰巳、春、修也、小夜子はカナヲを心配しながらも

それぞれ思った事を口にする。

「桜花ちゃんが某サッカー技使ってたから私も出来るかと思ったの

でも駄目だったわ」

カナエは桜花が某サッカー技を使ってたから私も使えるという独

自の謎理論で自滅してしまい痛い目をみていた。

「桜花、お前の謎発言がカナエさんの勘違いを引き起こしたんだぞ」

煌牙は桜花の謎発言が事の発端だと桜花に告げるが、桜花は更なる

謎発言で反論した。

「え？　私ノリで言ったただけだよ？　超次元サッカーじゃないんだし

実際に技なんて出るわけないよ〜♪」

「超次元サッカー？　」

桜花の謎発言にカナエを除く五人が一斉に口を揃え、カナエはどこか納得したような表情で桜花と話します。

「やっぱり超次元サッカーじゃないと技は出ないのね〜」
「そうだよ〜♪実際に出来るなら吹雪君みたいに吹き荒れろって叫ぶもん♪」

((今(のうちに逃げよう)))

桜花とカナエが話してる間に五人はこの場から離れないといけな
い気になりそそくさと退散した。

屋敷の中に逃げてきた五人は、花蓮との話を終えたカナヲとしのぶ
と合流し、煌牙の自室へと向かっていった。

「蟲柱様と対面するのは初めてですね、俺は日比谷 辰巳、階級は乙で
す。」

「同じく乙の小鳥遊 春です、よろしくお願いします。」

辰巳と春の二人は蟲柱であるしのぶに挨拶を交わし、しのぶも二人
に挨拶を返す。

「初めまして、蟲柱の胡蝶しのぶです。辰巳さんと春さん：もしかし
て不死川さんが話してた煌牙さんの兄弟子と姉弟子って」

しのぶは辰巳と春の二人が煌牙の兄弟子と姉弟子だと不死川から
聞いていた事を思い出し二人に聞いてみると二人は不死川の事を話
しだした。

「はい不死川さんからよく扱かれています、ははは」

「任務も一緒だったりしますからね、口は悪いけど実は優しくかったり」

辰巳と春は風の呼吸の使い手である事から風柱 不死川実弥と任
務を共にする事もあり、不死川の指導のおかげか実力も上がり階級も
乙まで

登りつめていた。

「まあ、そうなのですね〜頑張ってくださいね。」

しのぶは不死川と随伴する二人を応援すると煌牙にカナヲの紹介
をけしかける。

「煌牙さん、ほらちゃんと煌牙の口から紹介しないと」

「ああ、えーと皆・・・この子が前に話してた俺の妹のカナヲだ。」

昔生き別れたけど、今でも大事な妹なんだ、皆よろしく頼むよ」

煌牙は皆にカナヲの紹介をすると、カナヲも続けて挨拶を始める。

「栗花落 カナヲです」

挨拶を交わすカナヲだがその口数の少なさに、辰巳が思わず突っ込みを入れてしまう。

「え？そんだけ？煌牙の妹だったらもつとお喋りかと思っただけど」

辰巳の突っ込みに煌牙はカナヲの頭を撫でながら辰巳に語り出す。

「あまり言いたくないけど昔色々あったんだよ、辰巳にも心開けばちゃんと喋ってくれるからさ、あまり触れないでやってくれ」

煌牙はカナヲの口数の少なさを庇うように辰巳に切り出すと、辰巳も察してそれ以上言及はしなかった。

「お姉ちゃんが煌牙兄ちゃんの妹なんですネ、僕は橘 修也、妹の小夜子と一緒に鬼から助けてもらったんです」

「煌牙お兄ちゃんのおかげなの」

修也と小夜子の兄妹は、カナヲに自分達の事を煌牙から助けてもらったを含めて名乗ると、カナヲは修也と小夜子の兄妹に返事をする。

「そう・・兄妹だから仲良くしてね、ちゃんと二人で支え合うの」

カナヲは幼い頃、自分達が出来なかった願いを託すように二人に話すと、修也と小夜子も理解していたのかそれに応えるように頷く。

「はい、たった一人の妹ですから僕が守ります」

「私もお兄ちゃんに迷惑かけないように頑張る」

カナヲは二人の決意を見て、煌牙を見つめると煌牙もカナヲを見て頷く。

「俺達も頑張らないとな」

「私も兄さんを支えるから」

煌牙とカナヲは改めて兄妹の繋がりを確認すると、鈴を取り出して互いに見せ合う。

二人のやり取りを見ていたしのぶは、カナヲが煌牙とゆっくり過ごせるようにしてあげたいと考え、二人に話しかける。

「カナヲ、日輪刀が打ち終わるまで時間があるから暫く煌牙さんと一緒に過ごしたらどう？煌牙さんもカナヲと積もる話もあるでしょう

し」

しのぶが気を利かせると、カナヲはしのぶはどうするの気になり、しのぶに聞き返す。

「しのぶ姉さんはどうするんですか？」

しのぶは蝶屋敷にいるアオイや三人娘の事が気になる為、カナエと共に蝶屋敷へと帰るつもりでいたので焔牙にカナヲを任せるとをカナヲに告げた。

「私は姉さんと一緒に蝶屋敷へ帰るつもりよ、それに兄妹水入らずで過ごすのも大切な事だから焔牙さんに任せるつもりよ」

「しのぶ、こっちの都合は考慮してないだろ？まあいいけどさ」

しのぶの考えが自分の都合を考慮されてないと感じた焔牙はしのぶに口を挟むがカナヲを拒む気も理由もないのでしのぶの提案を受け入れる事にした。

「それに任務に就くとなると、他の隊士や隠との連携も増えてくるし蝶屋敷以外の人達との交流も必要ですから、まずは焔牙さんのそばで

交流を図ってもらおうかと」

今まで焔牙や桜花を含めて蝶屋敷の中でしか人と関わる事のなかったカナヲにとってこれからの事を考えたら、他者との交流は必要であり焔牙がいてくれるならカナヲも安心だろうと、しのぶは考えていた

焔牙もしのぶの提案はカナヲにとって必要であり焔牙自身もカナヲの為に何か力になりたいと思っていた。

「カナヲ、兄ちゃんと暫くの間一緒に過ごすからさ、少しでもいい屋敷の人達と仲良く出来るように頑張ってみようか？兄ちゃんも一緒にいるし、皆良い人達だから」

「うん、花蓮さんも泰三さんも良い人達だったし兄さんと一緒になら私も頑張れるから」

焔牙とカナヲの会話を見ていた辰巳と春は、まずは自分達から始めようとカナヲに話しかけ、自身の事を紹介し始める。

「カナヲちゃん、よろしくな俺は日比谷辰巳って名前だよ、焔牙とは昔

から一緒に修行した仲で大事な友人でもあるんだ」

「私は小鳥遊春よ、カナヲちゃん初めましてだね私も焔牙の友人で一緒に修行したんだよ」

「辰巳さんと春さん・新しく入隊する事になりました栗花落 カナヲですよろしくお願いします。」

辰巳と春はカナヲからの返事が入隊の挨拶である事に、思わず笑いだすとカナヲに固くならずにもう少し砕けていいと話す。

「ははは、今は鬼殺隊じゃなく焔牙の友人として話してるからね

そんなに緊張しなくていいよ」

「ふふ、カナヲちゃん面白いわね」

焔牙としてのぶは三人のやり取りを見ながら、これから他者との交流を経てカナヲが成長出来るようになればと思いにふけていた。

カナヲが滞在してから1週間後、屋敷の人達と過ごしていくにつれカナヲは徐々にだが次第に打ち解けていき、自ら話しかけるようになっていた。

「ゴンザさん、今日のおやつは何？」

「はいカナヲ様、今日のメニューはホットケーキとワツフルのキャラメルソース掛けでございます。」

カナヲは四ノ宮家で出される洋菓子が気に入り、こうして毎日執事のゴンザにおやつのお立を聞いて、出されるおやつを楽しみにしていた。

「ホットケーキとワツフル、ホットケーキとワツフル：ありがとうゴンザさん」

カナヲは本日の献立をゴンザから聞くと繰り返し呟きながら、桜花との稽古に向かう。

カナヲの稽古は焔牙、桜花、辰巳、春の四人が順番で回していたが焔牙と桜花との稽古は二人の変則的な動きも相まって未だにカスリも出来ないでいたカナヲ、特に桜花はより多く動く為、動きを読み切れないでいた。

「桜花さん、体勢崩した状態から予想外の攻撃してくるからそこをどうにかしないと反撃にもつていけないかも、桜花さんに対応出来ない」と兄さんに太刀打ちすら出来ないし」

桜花の柔軟かつ変則的な攻撃にカナヲはなんとか防ぐ事は出来てもそこから反撃に繋げるまでに至らない為、焠牙と対峙した時はあっさりと負けてしまうカナヲ、まずは桜花の攻撃を捌いて反撃出来るように

これから行う稽古にヤル気を出していた。

四ノ宮家での稽古を続けて更に1週間が経ち、カナヲは桜花に反撃まで至らないにしろ反撃に繋がる捌き方を徐々に覚えていき最終選別の時よりもより実戦的な戦い方を出来るようになっていた。

そして、鏖鴉よりカナヲの日輪刀が打ち終わったと報告を受けて明日蝶屋敷へと帰る事になったカナヲは焠牙の自室へと足を運んでいった

「兄さん、私明日蝶屋敷に戻るから・・・今日は一緒にいてもいい？」

焠牙もそうだがカナヲもこれからは任務に邁進する事になる為、暫く会えないだろうと思いい焠牙と色々話をする為に焠牙の自室へと赴き

窓から見える月を見つめながら焠牙に喋り出す。

「明日、日輪刀が届くから私も兄さんと同じ鬼殺隊の隊員として任務に就く事になるの、だから暫く会えなくなるよね？」

「お互い任務中だとそうだけど、別に会えないわけでもないよ任務が終われば会いに行けるしさ」

カナヲは焠牙と会えなくなるのが寂しいのか焠牙に問いかけるが焠牙は任務が終われば会いに行けるとカナヲに返すとカナヲは嬉しそうな表情を焠牙に見せ、しのぶの語った夢を焠牙に問いかける。

「ねえ兄さん？兄さんはしのぶ姉さんの夢、鬼と仲良くなれるって叶うと思う？私は信じたいの、しのぶ姉さんの夢・・・カナエ姉さんから受け継いだ夢を」

カナヲはしのぶがカナエから受け継いだ夢を信じたいと焠牙に話

すが焠牙自身がどう思うのか知りたくて聞いてみるが焠牙から予想外の返答が返ってきて眼を丸くするカナヲ、焠牙は続けてカナヲに話しかける。

「しのぶの夢か・・叶うと思うよ・・人を喰わない友好的な鬼なら既に三人知ってるからさ」

「えっ☒」

「あっ！これ内緒な、誰にも話してないからさ・・・まあ今更か・・」

焠牙は人を喰わない鬼がいる事とその鬼達と面識がある事をカナヲに告げるとカナヲは驚きのあまり口が塞がらずに焠牙を見つめる事しか出来なかった。

「まあそんなわけで鬼とは仲良くなれるよ、しのぶの夢は既に現実に取り出してるんだ、絶対叶えられるはずだよ」

焠牙は人を喰わない鬼がいる事を目の当たりにしている為、しのぶの夢は叶うとカナヲに告げるとおもむろにベッドへと腰掛け牙狼剣を取り出して眺める。

「偽りの牙か・・」

焠牙はカナヲに聞こえないくらい小さく呟きながら牙狼剣を見つめ

意識を牙狼剣に集中していると、耳元でカナヲの呼び掛けが聞こえ振り向くと心配そうな顔で見つめるカナヲが焠牙の隣に腰掛けていた。

どのくらい集中していたのだろうか、カナヲは何度も呼び掛けていたが焠牙からの反応がなく耳元で呼び掛けないと気が付かないでいた。

「やっと気が付いた、ずっと呼んでたのに反応無かったから・・その剣がどうかしたの？」

「あ、いや・・なんでもないよ、それよりカナヲ顔が近いもう少し離れて」

耳元まで近づいて呼んでいたカナヲはそのまま焠牙と話している為、必然的に焠牙との距離が近いのだが気にするわけでもなく焠牙と喋っていたが、焠牙にとっては唐突な出来事で思わずカナヲに離れる

ように促すとカナヲは少し離れて煌牙に話しかける。

「何もないわけないよ、兄さん昔から何かあつたらすぐく考え込むから」

「・・・そっか・・・んんまあカナヲにならいつか」

悩み事があれば集中して考える癖のある煌牙、カナヲはそれを指摘すると煌牙は暫く黙り込み、カナヲにならと自身の胸中を打ち明けた。

「月に届かぬ偽りの牙、研ぎ澄まし襲し時、月をも砕く真髓へと至らん・・・この言葉の意味を考えてただけどさっぱりでさ、ちよつと悩んでたんだよ」

「どういう意味だろう？兄さんでも分からない事あるんだね」

「いや、なんでも知ってるわけじゃないし・・・ザルバなら知ってるかも」

まるで暗号のような言葉の意味を考えて悩む煌牙、カナヲに打ち明けてもその意味を理解する事が出来ず、逆に煌牙でも分からない事があると知りカナヲはそのまま煌牙に伝えるが、当然煌牙はなんでも知ってる訳ではないと答えると、物知りなザルバなら知っているかもと、ふと思いつきザルバに尋ねてみる事にした。

「ザルバ、今の言葉の意味だけど何かわかる事ってないか？」

「・・・知ってはいるが今はまだ語る時じゃない、一つだけ教えてやるが、お前が使っている呼吸は本来の呼吸じゃないという事だ」

「・・・え？本当に喋ってる・・・え？」

ザルバに意味を尋ねてみると、ザルバはその意味を知っているが煌牙に教えるにはまだ未熟と言わんばかりに告げるが、煌牙の使っている牙の呼吸は本来の牙の呼吸ではないとだけ伝える。

カナヲはしのぶからザルバが喋ると聞いていたが、普通に考えると喋る事自体が不可思議な事であり、ましてやホラーという未知の生命体がいるのも信じられない出来事なので、実際に喋るまで半信半疑でザルバを見ていたが、喋るザルバを見たら動揺しながらも目の前の現実を認識する。

「・・・なるほど、今の呼吸は本来の呼吸ではないが、何かを経て本来

の呼吸へと至るって事か、でも月つてのがわかんないんだよな」

「焠牙お前は物分りが良い奴だな、あれだけでここまで導くとは・・
実際に月を見るまでに本来の呼吸へと至らないとお前でも死ぬか
もしれん」

ザルバから教えられた言葉を解釈した焠牙は先程まで分からな
かった言葉に当てはめ、独自に言葉の意味を導きだしてザルバを驚か
せるも

月の意味までは理解できずにいた。

ザルバは月の意味までは言わないが、焠牙が本来の呼吸へと至る前
に月を見ると死ぬ可能性があるかと不吉な事を告げる。

「嫌だ・兄さんが死ぬ？そんなの絶対嫌！あの時みたいなの思いついて
したくないよ、どうして本来の呼吸を兄さんに教えてくれないの？」
「俺様は意味を知っているだけだ、それを教える事は出来ても呼吸を
教える事は無理だ、悪いな嬢ちゃん」

カナヲは焠牙が死ぬという言葉に敏感に反応して自身が無気力に
なった過去の経験、また兄がいなくなるという悲しい思いを拒絶する
ようにザルバに詰め寄るも、ザルバは知識は教える事は出来ても呼吸
という実技までは教える事が出来ない為、詰め寄るカナヲに謝るしか
出来ないでいた。

「兄さん絶対駄目だから！兄さんが死ぬなんて絶対嫌だから！」
「わかってるよカナヲ、死ぬつもりもないしちゃんと帰ってくるから
さ」

焠牙がいなくなる事を頑なに拒むカナヲは焠牙に自分の思いを伝
えると焠牙もそのつもりはないとカナヲに話し帰ってくる事を約束
する。

焠牙とカナヲの二人は暫く他愛のない会話をしながら一緒に就寝
して朝を迎える事にした。焠牙はカナヲを蝶屋敷へと送り届ける為
に一緒に屋敷を出ると持参していたおむすびを二人で頬張りながら
歩き出す。

カナヲの鬼殺隊としての日々が始まる新たな日は陽射しが焠め
く

朗らかな日であった。

「私はな、奴が脅威となる前に潰しておきたいのだ」

「・・・ああ黄金騎士は俺の獲物だ、任せておけ」

「お前には期待しているぞ斬吼狼」

「フハツ期待とは・・・あんたらしくもない」

「口を慎め・・・と言いたいがお前は特別だ多少の無礼は許そう」

「そいつはどーも、じゃ俺行くわ無惨さん」

「・・・忌々しい金色の光また私の邪魔をするつもりか」

カナヲが蝶屋敷へと戻ってから数日後、煌牙は休暇を貰い浅草へと訪れていた。

「え〜〜煌牙、一人で浅草行っちゃうの〜？私も私も一緒に行くから〜」

「悪い桜花、個人的な用があつて今回は連れていけないんだ。それに俺がいない間の管轄を桜花に任せたいし、任務の伝令が来るかもだろ？」

「米吉？伝令来ないよね？うん来ないと言つて〜」

「既に来てるかもヨ、ペツタンコにはまだ言つてないだけダヨ？」

「・・・は？・・・え？米吉君♪よく聞こえなかったからもう一度いいかなあ〜？」

（あ、ヤバイ桜花がキレた米吉いいか絶対俺に振るなよ、いいな絶対だぞ）

「任務の伝令は届いてるヨ、ペツタンコ・・・煌牙君が言えつて言つたんだヨ？ペツタンコだつて言つてタヨ？」

（米吉〜！俺に振るなつて言つただろー、いや言つてないけども

空気読めよ、ネタ振りじゃねえからな！そもそも桜花の体型とか全く興味ないからな、ペツタンコとか初耳だからな）

「煌牙はそんな事言わないもん、朴念仁だし」

（何気に貶されてるよね俺、まあ矛先がこっちに向かなくて良かった

けども)

「とりあえず後はよろしくな桜花、んじゃ」

「んくくわかった、お土産よろしくね♪後米吉は覚悟してね♪」

「煌牙君助けてヨク、裏切り者」

(自業自得だろ？俺は知らないからな)

浅草に来る前そんなやり取りが行われ逃げるように屋敷を出た煌牙は

都会の喧騒を煩わしく思い、人気の少ない路地で一休みしていた。

「あく疲れた。相変わらず浅草は賑やかだなくよし、豊さんのうどんでも食べにいきますか」

煌牙は浅草でいきつけのうどんを食べて気力を養おうと、知り合いの店主の元に歩き出した。

煌牙の知り合いである店主、豊さんは屋台でうどん・そばの商いをしていて偶然通りかかった煌牙がうどんを気に入り、それ以来浅草に来るたびに豊さんの店に訪れていた。

「うどんもいけど蕎麦も捨て難い、どっちに・・・」

「煌牙」

「ああ、鬼の気配がするな」

うどんか蕎麦か悩みながら屋台へと近づく煌牙は屋台の方向から鬼の気配を感じると口を閉じ、同じく鬼の気配を感じたザルバの呼びかけに頷くと、急いで屋台へと走り出す。

やがて屋台が見えてくると店主の豊さんと客であろう一人の女性が椅子に腰掛けているのがわかる。

女性は少女だろうか、遠目からでははつきりと分らないが煌牙はなんとなくそんな風に捉えていたものその少女から感じる気配は鬼の気配・・・だが今まで斬ってきた鬼とはどこか違うような――

煌牙は妙な感覚に少し戸惑いながらも屋台へと向かう。

「豊さん久しぶり、うどん食べに来たけど今大丈夫？」

店主の豊さんに声をかける煌牙、他の鬼とは違う気配とはいえ鬼である少女がいる為、豊さん自身を含めて大丈夫なのかという意味を先程の言葉に込めていた。

「おう焔牙久しぶりじゃねえか、うどん食いに来てくれたのか

とりあえず座って待つてろ」

「そうするよ、とりあえず月見うどんで」

豊さんから返答がくるとそのまま客席へと座るように言われ、うどんの注文をして腰掛ける焔牙は鬼である少女に目を向ける。

（鬼の気配なんだけど、どこが違うようなくん・あの人達と同じようなくん・というかなんで口枷付けてるんだ？これ桜花いなくて良かったわ、猿轡系ヒロインとか言い出しそうだし・あれ？俺が言ってるよ、俺も桜花に毒されてきたな）

焔牙が頭の中で色々と考えていると鬼の少女が焔牙のいる方向に振り向き、視線の先にいる焔牙を見つめ出した。

（ん？俺を見てる？なんだろう？敵意は感じないな、それに眼が）

焔牙を見つめる鬼の少女からは敵意を感じることはなく、見つめる瞳もどことなく優しいげな、そんな雰囲気纏う鬼の少女は突如立ち上がり焔牙の元へと駆け寄ると頭を撫でてほしいのか、そんな仕草を焔牙に見せる。

鬼である故に多少の警戒心はあるものの敵意は感じない為、戸惑いながらも鬼の少女の頭を撫で始める焔牙、鬼の少女は喋る事はないが意志や思い等が声として焔牙の頭に流れ込んでくる。

「そっか・・・君は優しいんだな。うん、お兄ちゃんがいるのか

戻って来るのを待つてる？そっかそっか」

鬼の少女から聞こえる心の声と会話するような焔牙、その焔牙を見つめる鬼の少女は自身の声が届いたのが嬉しいのか目を細めてそのまま頭を撫でてもらっていた。

「へいお待ち、焔牙お前さつきから一人で喋ってんだ？」

豊さんが注文したうどんを渡しながら独り言を言ってる焔牙に話しかける、鬼の少女は喋っているわけではないので焔牙が一人で喋っているようにしか見えない豊さんは焔牙に聞いてみるも焔牙もそう見えた事は仕方ないにしろ、恥ずかしいのか言葉を濁しながら目の前のうどんへと箸を伸ばす。

「むーむー」

頭を撫でられて微睡んでいた鬼の少女は突如焠牙の手が離れた事に不満を持ち抗議と思わしき声を出すも、うどんを出された焠牙は箸を持ってゐる為撫でてあげる事は出来ない。

「ちよつと待っててな、そういやお兄ちゃんっていつ戻るんだろ？」
鬼の少女に少し待ってほしいと告げる焠牙はうどんへと箸を伸ばし

食べ始めると、美味しそうな表情をしながら頬を緩め舌鼓をうって
いた。

（あくやっぱり豊さんのうどんは美味いなあく・・・そういやあの娘のお兄ちゃんって鬼？でもあの娘がアレだし人間って可能性も・・・というか俺鬼殺隊だよな？柱だよな？このまま放置って訳にはいかないよな？）

うどんを食べながら考え事をしていた焠牙、ふと鬼である少女の兄が鬼か人間かを考えていたが自身の立場を思い出し、鬼である以上少女を放置出来ない事を考えていた。

「禰豆子く」

ふと誰かを呼ぶ声が聞こえ、声のする方へ視線を向けると一人の少年がこちらに走って来るのが見える。

少年がこちらに近づいて来るにつれ焠牙はその少年の服装が見覚えのある服装だと気付き、うどんへと伸ばした箸を止める。

（鬼殺隊員？この娘の頸を斬りに？にしては雰囲気・・・それに禰豆子ってこの娘？）

こちらに走って来る少年が鬼殺隊である事が分かると、隣にいる少女を斬りに来たのかと思うがその割には殺気もなく寧ろホツとしたような穏やかな雰囲気纏う少年、先程禰豆子と呼んでいた事から隣にいる少女がそうなんだろうと考え、この少年が少女の兄であるかもと予測していた。

「禰豆子く、他所様に迷惑かけちゃ駄目だろ？すいませんすいません、妹がご迷惑をおかけしました」

少年はやはり少女の兄らしく、隣にいる焠牙に迷惑をかけてると思
い

頭を下げて煌牙に謝る。

「いや、迷惑なんてかかっていないから謝らなくていいよ、気にしないで」

（鬼を連れだした鬼殺隊員？いや、隊律違反だろ下手すりゃ打ち首だぞ

この娘が普通の鬼とは違う事は分かっているけど他の柱達が、はいそうですかって納得するわけがない・育手が誰かは知らないけどこの事は知ってる筈・お館様ももしかしたら・はあく俺今見逃したら隊律違反だよね？休暇中なのに隊律違反とか・仕方ないとりあえずもう少し様子見てから考えよ）

少年からの謝罪に対応している最中に頭の中で少年が隊律違反を犯している事、育手やお館様がこの事態を把握している可能性、自身の鬼殺気隊としての対応等を考えていたが、結論がすぐに出る筈もな

く
様子を見てから二人の対応を考えることにした。

少年は煌牙から気にするなど言われていたが、彼から困惑の混じる匂いが漂っていた為、匂いで相手の感情を嗅ぎ分ける事の出来る少年は

煌牙が本当は迷惑していたが気を遣って、気にするなど言ったのだろうと思いい謝る事を続けた。

「いえ、妹が貴方に迷惑をかけたのは事実です、長男である俺が謝らな

いと示しがつきません」

「そっか・いやこちらこそありがとな、家族思いの良い妹さんだな」
少年からの謝罪を受け取る事にした煌牙、鬼としての本能に抗い人としての理性を保ち家族を想う少女に出会えた事は煌牙には嬉しい誤算であり、その意味を込めて少年にお礼を言おうと、豊さんが出てきて

少年に向かい怒鳴り始める。

豊さん曰く、うどんを食べてる途中で少年が妹を残してその場からいなくなり、お金じゃなく自分のうどんを食べないという心積もりが許せないらしく、少年にその旨を告げる。

少年も申し訳ないらしく、うどんを頼むも豊さんが本当に食べるの

か少年に聞くと、少年も食べます！と大きな声で主張する。

豊さんはそれを聞くと禰豆子という少女に向かい、うどんを食うなら竹を外せ、箸を持ってと詰め寄るも少年が庇うように出てきて妹の分も含めてうどんを二杯豊さんに注文すると、出てきたうどんを物凄い勢いで食べ始める。

その様子を見てた豊さんと煌牙の二人は、少年の食べっぷりに衝撃を受けたかのような表情になり、煌牙は妹の為に頑張る少年を好ましく思っていた。

うどんを食べ終わった少年は、屋台から出て何処へと歩き出して妹の禰豆子も少年の後を付いて行く。・が煌牙の腕を掴んで一緒に連れて行くとうと引つ張っていた。

「ちよ×まだうどん食べてるんだけど、まあ溢れたんだけどね」

少年が振り返るとむーむー言いながら必死に煌牙の腕を掴んで引つ張っている禰豆子を見て慌てて煌牙から禰豆子を離そうと禰豆子の腕を掴む。

「禰豆子？一体どうしたんだ？迷惑かけちゃ駄目だ手を離すんだ」

少年が言い聞かせながら手を解こうとするも、頭を横に振り頑なに抵抗する禰豆子。少年と煌牙の二人は彼女に一体何があったのかわからず困惑してしまい、顔を見合わせる。

「妹が本当にホントくすにすいませんでした。」

「はは、一体どうしたんだろな？」

少年は再び煌牙に頭を下げて謝るが煌牙は苦笑いしながらこの状況に困惑していた。

煌牙は二人の様子を見るつもりでいたが、一緒に付いて行く気は無かった。少年と少女の二人は信用出来る、ほんの僅かだが少年と接した際に感じた少年の真つ直ぐな性格、少女の頭を撫でた時に流れ込んで来た彼女の心、それを直に感じた煌牙は監視する必要もなく様子を見て二人の対処を決めようと決めていた。

そもそも浅草に用があり訪れていた煌牙はうどんを食べてから用を済ます筈だったのだが、その予定も二人の対処も禰豆子が煌牙を連れて行くという予想外の行動により実行出来ないでいた。

煌牙なら禰豆子の手を解く事は簡単なのだが、煌牙を見つめる瞳はどこか寂しげでそれ故に無理やり解くのは気の毒だと思つた煌牙は仕方ないと諦め少年に少しの間、自分が同行する案を尋ねてみる。

「このままじゃ埒もあかないし、少しの間一緒に付いて行こうか考えてるんだけど駄目かな？」

「えっ☒・・・これから人と会う予定なので同行は・・・」

「だよなく、悪かつたな変な事言つて」

「いえ、迷惑かけてるのは俺達ですし。ほら禰豆子いい加減離れるんだ」

煌牙と少年のやり取りで同行は出来ない流れになり、少年は再び禰豆子の腕を解こうとして、少年の手が煌牙の手に触れる。

（・・・は？珠世さんに愈四郎？この子、二人に会つたのか・・・待て！無惨？嘘だろ？無惨と遭遇してる？浅草にいるのか・・・）

少年の手を介して少年の記憶や心の声が聞こえた煌牙、少年の記憶から煌牙の知人である珠世と愈四郎の二人に会つている事そして、鬼殺隊が血眼になって追つている鬼の首魁、鬼無辻無惨と偶然だが遭遇している事が煌牙に声として流れ込んでくる。

「少年、君達がこれから会う人にコレを渡してほしい。ちよつと急用が出来てね、行かなきゃいけないんだ・・・禰豆子ちゃんもまたね」

煌牙が浅草に訪れた用件、知り合いである珠世という女性にあるモノを渡す用があり浅草に来ていた。

珠世という女性・・・鬼ではあるが人に仇なす鬼ではなく寧ろ協力的な鬼である為、煌牙は彼女を鬼として頸を斬る事を良しとせず密かに連絡を取り互いに協力しあつていた。

鬼殺隊である煌牙はこれが隊律違反にあたる事も承知していたが煌牙の矜持、悪鬼滅殺――人に仇なす鬼は迷わずに斬るが、人としての理性を保つ鬼、本能に抗う鬼はその心に守るに値する光があると自身の課した守りし者としての矜持に従い黙認していた。

ついさつき会つた禰豆子という鬼の少女もまた鬼としての本能に抗い

人としての理性を保っている故に、煌牙は禰豆子を鬼ではなく人と

して扱おうと考えていたが、会ったばかりで情報が少な過ぎる為に
急な決断は出来ないと考え保留する事にした。

焠牙は少年に自身の用件を頼むと、彌豆子の手を優しく解き頭を撫
でながら別れの挨拶をする。

少年の記憶から聞こえた無惨との遭遇、人が多すぎて焠牙もザルバ
も音や気配を察知出来ないでいたが目の前の少年は確実に遭遇して
いる

時が過ぎ無惨の痕跡は辿れないかもしれない、だが何かしろの手掛
かりでもあればと、その場へと急いで向かう焠牙。

振り返り走り出す焠牙を少年は呆然と見ていた。

唐突に何かを渡されて、自分がこれから会いに行く人に渡すように
言われると妹の手を解き、頭を撫でてから走り去る。

少年は質問も出来ないまま流されるように事が進んだ為、疑問に
思った事を解決出来ないまま時が過ぎてゆく。

「あの人まるで俺が誰と会うか分かってたような・・・それにあの匂い
何処かで・・・最終選別・・・カナヲ？」

「むー」

少年は焠牙がこれから会う人を分かってたような口ぶりをしてい
た事が不思議に思っ焠牙の事を考えるも名前も聞いてないので何
もわからずにいたが、少年が嗅いだ焠牙の匂いは以前嗅いだ事のある
匂い、或いは似た匂いだと気付くと、記憶を辿り最終選別で一緒に
戦ったカナヲを思い出す。

焠牙とカナヲ血の繋がった実の兄妹であることから匂いが同じ、も
しくは似た匂いなのだが、今の少年には二人の関係が分かるはずもな
く

答えが出ないままでいた。

彌豆子は手を解かれ焠牙が走り去った事から、不満の声を漏らし焠
牙の去った方向を眺めていた。

彌豆子は初対面だが焠牙に懐いていた、少年の育手である元水柱

鱗滝から人間を家族として見えるよう暗示を掛けられていて、焠牙
も家族の一員として見ていた。

カナヲが最終選別後に言っていた、炭治郎と兄さんは似ている。彌豆子もまた焠牙が纏う雰囲気が自分の兄である炭治郎と似ていると感じ尚更親近感が湧き懐いていたのだった。

二人はそれぞれ思いを馳せていたが、まだやるべき事がある為振り返ると手を繋ぎ歩き出す。

無惨の手掛かりを探す為に繁華街を歩く焠牙、人の多さからくる様々な音が焠牙の耳に届くと煩わしそうな表情を浮かべ、苦言を漏らす。

特別耳が良い焠牙ではあるが、この時ばかりはそれが仇になり頭を悩ませる、普段なら耳に意識を持つていかなければただ聴こえるだけで

やり過ごせるが手掛かりを探す為に目で見える範囲だけではなく耳から届く情報も合わせていた。

「こんな人混みの中に紛れ込むなよ、耳が痛い」

人混みの中から手掛かりを探す焠牙は無惨へと愚痴を零すも、それが聞こえるわけもなくただ時が過ぎてゆくだけで手掛かりを見つけれないでいた。

「焠牙僅かだが鬼の気配を感じるぞ、恐らくはもうその場にはいないだろうがな」

「だとしたら無惨の可能性はあるな、ザルバ案内してくれ」

しばらく歩いてしているとザルバから僅かながら鬼の気配がすると教えられるも、鬼がその場にはいない可能性を示唆される。

先程まで、少年・炭治郎が遭遇するまでは誰一人として無惨の手掛かりさえ掴めなかつた事から、痕跡すら残さない無惨の可能性があると焠牙は判断する。

焠牙だけなら残された僅か気配を感じることは出来ないが、ザルバなら僅かな痕跡でも感じる事が出来る為、焠牙はザルバを信頼していた

とはいえ人が多すぎて、色んな人の気配が混じる為とその場に近づかないと感じ取れない事はこの様な場では不利であったが、それでも痕跡を辿れるだけマシである。

本来無惨なら痕跡を残さないのだが、今回は何かしらの理由で僅かながら痕跡を残していた、ザルバでなければ気付かないのかもしれない。

だがその今回の時にザルバがいた。

それ故にその気配をザルバに覚えられ、無惨は知らずのうちに鬼殺隊へ自身に繋がる手掛かりを与えてしまっていた。

「・・・死んでるな・・・一人は跡形もない・・・ザルバ」

「ああ、この液体から感じるぞ。僅かだがそれでも今までの鬼よりも濃い、恐らくは」

「無惨」

煌牙は僅かな気配を察知出来ないでいたが、女性だと思われる着物に手を触れて着物に残る記憶を聞き出す。

（・・・そんな理由でこの人達を・・・何が限りなく完璧に近い生物だふざけるな・・・追っ手？花札の様な耳飾り？・・・あの少年が危ない）

着物から記憶を聞き出した煌牙は、無惨の傲慢さに怒りを露わにするも先程の少年に追っ手が差し向けられた事を聞いて急いで少年の元へと駆け出す。

少年は恐らく知人である珠世と会っているはず、だとしたら珠世と愈四郎も危ない。焦燥感に駆り立てられながらも、心を呼吸を乱す事なく全速力で走る煌牙。

人混みの中を掻き分けて走ると嫌でも時間がかかる為、建物の屋根へと飛び込み、屋根伝いに駆ける――

――呀の呼吸 参の型 刹那の呀――

急ぐ煌牙向かって黒い影が一瞬見えるが直ぐに影が消える・・・が突如煌牙の頬から鮮血が飛び散り、煌牙は急ぐ足を止めて振り返る。

「へえ、今のを避けるか、流石は黄金騎士ってどこか？まあお前が死

ねば黄金騎士の系譜はまた途絶えるだけだな」

黒い影は掠めたとはいえ自身の攻撃を避けた事で黄金騎士である煌牙を褒める・・・が煌牙が死ぬ事で黄金騎士の系譜はまた途絶えると告げ

煌牙の前に立ちはだかる。

「・・・嘘だろ？何で鬼が・・・いや魔戒騎士が鬼に・・・」

煌牙の前に立ちはだかる黒い影はその影を解くとその正体を煌牙に見せる。だがその正体を見た煌牙は目を疑う程信じられない出来事に

動揺を隠せずにいた。

影の正体、鬼が影を解くとその姿は鬼の姿であるものの鬼が着ている物は紛れもなく魔戒騎士と同じ魔法衣、そして手にしているのは魔戒騎士の象徴でもある魔戒剣、守りし者である魔戒騎士が鬼へと堕ちた

その事実を目の当たりにした煌牙はその現実についていけずに、呼吸を乱してしまう。

「この程度で呼吸を乱すとはな、鬼狩りとしても魔戒騎士としてもまだまだだな。だからこそお前はここで死ぬ・・・じゃあな」

魔戒騎士の鬼は煌牙は未熟と告げると、魔戒剣を煌牙に向けて突き刺す・・・がその剣が煌牙に届く事は無かった。

「はあくやっぱりやめた、今のお前殺しても満足出来ねくし、戦っても滾らねえ、所詮お前は牙狼になれただけの未熟者、かつての大牙のよくな魔戒騎士には程遠い、お前じゃ誰も守れねえよ」

魔戒騎士の鬼は自身の欲望を満たせない事から煌牙に手をかけることをやめ、煌牙が先代牙狼とは程遠く誰も守れないと指摘する。

「そうだな・・・俺は牙狼になれただけの未熟者だ、大牙さんにも及ばないし牙の真髄にも至ってない、だけどそれでも誰かを守りたい

俺は死ぬつもりもないし、系譜も途絶えさせない」

「フハッ！挑発したんだが、お前冷静だな」

「俺が弱いつて事は自分でも嫌って程分かるよ」

「へえく次会う時が楽しみだな、せいぜい楽しませてくれよ黄金騎士

さんよ・・・俺の名は斬吼狼、お前は？」

「四ノ宮煌牙」

「煌牙か・・・じゃあな」

斬吼狼と名乗る鬼は影を纏うと、夜の闇に溶けるように消え去り

その場に煌牙一人が残される。

「あいつの言う通り俺はまだ弱い・・・牙狼になれただけかく痛いところ突いてくるなあいつ、斬吼狼って言ってたっけ？上弦の弐が言ってた奴ってあいつの事か・・・でも最初から敵意は感じなかった、魔戒騎士の鬼、大牙さんも師匠も何も言ってなかったけど」

「花蓮はともかく大牙も知らない事だからな、奴は昔死んだと思っていたがまさか鬼として生きていたとはな、俺様も驚いた」

「ザルバ何が知っているのか？」

「ああ、奴は400年前大牙と共に飛ばされた魔戒騎士だ・・・あのババア何か噛んでやがるな。煌牙、朔弥の所に向かうぞ」

「・・・えっ、俺あの人苦手なだけど？」

「奴は斬吼狼の真相を知っている筈だ、寧ろ関係している」

「はいはい分かりましたよ、行きます行きます。その前にあの少年の所に向かうからな」

煌牙は斬吼狼から言われた事を噛み締めながら、斬吼狼が何者なのか考えていた。二年前上弦の弐から告げられた斬吼狼という名、その事から斬吼狼は無惨の配下或いは協力者だと考えるのが妥当なのだが

斬吼狼から敵意が感じなかった為、不思議に思っていた。

鬼ではあるが魔戒騎士でもある斬吼狼、師匠の花蓮や先代牙狼の大牙からもそのような話は聞いた事がない為、わからずにいたがザルバが斬吼狼が鬼となる前の事を知っていると煌牙に告げるも、斬吼狼の背後に煌牙やザルバの知り合いである朔弥という、ザルバ曰くババアがいる事を察し煌牙に朔弥の元に向かう事を告げる。

煌牙は朔弥という人が苦手らしく行くのを躊躇うがザルバから斬吼狼に關係していると言われ、半分ヤケになりながら行く事を決めた。

朔弥の元に向かうと決めたがその前に当初の目的、少年達を助けるその事をザルバに話すと、煌牙は再び走り出し少年達の元に向かう。

「新しい牙狼はどうだった？ 斬吼狼ちゃん♪」

「あいつはまだまだだな、だがいつか大牙をも超える牙狼になるそんな気がする・・・てか斬吼狼ちゃんって呼び方やめろよ朔弥」

「だよねだよね♪あの子眼がキラキラって♪可愛いんだから♪」

「煌牙って言ってたな・・・こいつに気に入られて大変だな」

「そ・れ・よ・りく無惨ちゃんの情報は？ 斬吼狼ちゃんプリーズプリーズ♪」

「ウゼー・・・無惨は牙狼が再び脅威になる事を恐れてるぞ、俺に討伐命令しやがったからな、無惨が呼び出す度に呪いかけ直すの面倒なんだがな」

「うんうん♪新しい魔導具作ったからさく試してみてよ♪その名も愛しの無惨様♪イエイ♪」

「お前ぶざけてるだろ？」

「またまたく♪説明するね♪それ付けてたら思考が無惨様万歳、無惨様フォーエバー♪って無惨ちゃんに読み取られるから♪居場所もどっか適当に点々と♪」

「・・・ないよりマシか、不本意だがな！」

「斬吼狼ちゃん？ 煌牙ちゃん真髄に至るかな？」

「さあな、アイツ次第だろ？ まあその為に俺がいるんだがな」

「うん、斬吼狼ちゃんも煌牙ちゃんと一緒に月を・・・ううん黒死牟をやっつけてね？」

「無惨の追っ手は2匹いたな、少年持ち堪えてくれよ」

「焔牙わかってるな、あまり時間はかけられないぞ」

「わかってる」

少年、炭治郎の無事を祈りながら走る焔牙。ザルバから急ぐように急かされるが焔牙自身も理解している為、一言だけ返すと脚に力を込め

急速に加速して炭治郎の元へと向かって行く。

走ること数分、愈史郎の血鬼術により隠蔽された珠世の屋敷に辿り着く焔牙、ザルバの探知で入口を探し中へと入って行く。

「・・・え？少年が飛んでる？いや、飛ばされてるのか」

珠世邸の敷地に入った焔牙が目にしたのは、少年が宙を舞い縦横無尽に駆け回っている光景だった。

辺りを見渡すと頸を斬られた鬼が、徐々に消えかかりながらも最期の足掻きとして少年を血鬼術で道づれにしようとしていた。

「なるほどね、型を繰り出して衝撃を緩和してるのか」

少年が衝突する間際に型を使い衝撃を緩和して抵抗している光景を見た焔牙は咄嗟に駆け出し鬼の頭を踏み潰す。

「少年を死なせるわけにはいかないからな、悪いけどさっさと終わらせてもらおうよ」

灰になりつつある鬼の頭部があっさりと踏み潰され急速に灰と化すと

血鬼術も解け、炭治郎が重力に引っ張られるように地に向かい落ちていく。

「少年〜!!?力抜いてろ!受け止めるから!」

「え?・・・あ!はい!」

型を繰り出し衝撃を緩和する事に精一杯だった炭治郎は、焔牙がいる事に気付かず自身に向かい叫ばれた事でようやく気づき、一瞬戸惑

いながらも言われた通りに体の力を抜き、身を任せていた。

脚に力を込め一瞬で炭治郎との間合いを詰めた焯牙は落ちてくる炭治郎を受け止めると炭治郎を抱きかかえたまま、炭治郎に話しかける。

「少年、よく頑張ったな無事・ではないけど生きててくれて良かったよ」

「ありがとうございます．．．その．．．恥ずかしいので降ろして下さい」
焯牙は炭治郎に鬼の頸を刎ねた事、炭治郎が無傷ではないもの生きている事に安堵し炭治郎を褒めるが、炭治郎は助けてくれた事にお礼を言いつつも自身が置かれてる状況、所謂お姫様抱っこの状態が恥ずかしく焯牙に降ろしてもらおうよう頼む。

「ああ、悪いな．．．って歩けるか？」

「あれ？身体に力が入らない．．．肋も折れてます」

「ならこのままだな」

「いや、恥ずかしいから！せめて担いでもらいたい！」

「いやいや肋折れてるんだから、我慢しなよ」

焯牙は炭治郎を心配して聞いてみるが炭治郎は先程の戦闘で疲弊しておりまともに動けないでいた、それならとこのまま抱きかかえていくつもりでいたが、炭治郎は担いでほしいと叫ぶも焯牙は肋が折れてる炭治郎を担ぐのは炭治郎にとって苦痛になるため担ぐことを拒否してこのまま珠世の元へと向かって歩き出した。

焯牙が珠世の元へと歩いていると、腕が六本生えてる鬼の口や腹から太い腕が飛び出している光景を目にした焯牙と炭治郎、異様な光景を見て足を止める焯牙は近くにいる珠世に話しかける。

「珠世さん、何が起きてるんですか？」

「四ノ宮さん？．．．あれは呪いです。その名を口にした鬼を破壊する鬼無辻の呪い」

珠世は焯牙に現状を説明すると、呪いの腕が鬼の頭を鷲掴みにして握りつぶし肉が潰れていく音だけが響き渡る。人を食い殺してきた

鬼とはいえ鬼無辻に利用された挙句、最期は呪いにより死んでいく鬼に同情にも近い感情を覚えた焔牙は近くに転がっている鞆を拾おうとしやがみ込むと抱えていた炭治郎が焔牙の代わりに鞆を拾う。

珠世は炭治郎にあの鬼は十二鬼月ではない事と、自身の血鬼術の影響と葉が禰豆子に作用している事を謝まると鬼の手首から血を採取して屋敷に戻り始める。焔牙と炭治郎の元に愈史郎が走ってくる姿が見えると、炭治郎の口に布を押し当て珠世の術は人間に害があるから吸うなど告げ、愈史郎は珠世の元へと走り出して行った。

焔牙には何も渡してない愈史郎だが、焔牙ならそんなに害にはならないだろうと判断しあえて渡さずにいた。

珠世が禰豆子を連れ愈史郎も珠世の元へと向かった為、その場には焔牙と炭治郎、そして原型を留めていない鬼だけとなるがその鬼から、か細い声で鞆という声が聞こえ、焔牙は鬼の傍に歩み寄ると炭治郎が手にした鞆を優しく置くと鬼は「遊ば」と人間だった頃の記憶なのか

繰り返し呟くが朝日が昇り始め、その身が焼けるように消え去ると着物だけがその場に残っていた。

(人を食い殺してきた鬼とはいえ、あいつに利用された挙句最期は呪いで殺される。救いようがない！鬼無辻、お前の陰我は俺が絶対に断ち斬るからな)

「さてと、少年そろそろ行くか」

「はい・・・(この人から悲しみと怒りの混じった匂いがする)」

焔牙と炭治郎の二人はそれぞれの思いを馳せつつ珠世の屋敷の中へと入る焔牙と炭治郎。

炭治郎が珠世の名を呼ぶと愈史郎の声が聞こえ地下へと続く階段から地下へ降りると目を覚ました禰豆子が炭治郎に気付き、走り寄ってくるのを見て焔牙は炭治郎を降ろし一歩後ろに退がる。

(そういうえば俺戦ってないよな、さっきの鬼は呪いだしもう片方は少年が・・・まあいつか)

助けにきた筈が炭治郎や呪いにより鬼が死滅した為、戦わずに終

わった焠牙は自分の出番がなかった事を思い出すも自身が戦わないといけない状況にならずに済んで良かったと切り替え、炭治郎と禰豆子に目を配る。

炭治郎は珠世と話をしている最中だったが禰豆子が珠世と愈史郎の元へと走り珠世に抱きつくのと、それを見た焠牙は目を見開く。

炭治郎曰く暗示により二人が家族の誰かに見えてるらしく、焠牙も家族の誰かに見えてると炭治郎から言われると、顎に手を当てながら竈門兄妹の事を考える。

(家族を大切に想う鬼か・大切なのは人か鬼ではなくその心、少年と禰豆子ちゃんを信じて賭けてみるか。)

「少年、まだ名を聞いてなかったな俺は四ノ宮焠牙よろしくな」

「俺は竈門炭治郎です、四ノ宮さん」

「焠牙でいいよ、堅苦しいのは苦手だしさ」

「はい！よろしくお願いします焠牙さん」

焠牙と炭治郎の二人は互いに名を名乗ると、焠牙が炭治郎に右手を差し出し炭治郎もそれに応えるように右手を握り返し互いに握手を交わす。

「それはそうと炭治郎、手当てしてもらったほうが良さそうだな

珠世さんお願い出来ますか？」

「焠牙！いくらお前でも珠世様に気安くお願い出来ると思うな！」

「愈史郎」

「冗談です！」

(愈史郎は相変わらずだなく、そこが良いんだけども)

焠牙が珠世に炭治郎の手当てをお願いするも愈史郎が口を挟み珠世が諫める、二人のやり取りを見て焠牙は口元を緩めながら二人に好感を抱いていた。

炭治郎が珠世から手当てを施してもらっている傍ら、禰豆子は胡座をかいて座っている焠牙の脚を枕代わりにして眠りだし、焠牙もそれ

を気にする事なく受け入れると珠世が手当てをしながら焠牙へと話しかける。

「挨拶が遅れましたね四ノ宮さん、まずはアレを届けてくれてありがとうございます。炭治郎さんに託けていたようですが、何か急用でも？」

「ええ、珠世さんなら既に分かっているかと思えますけど」

「そうゆう事ですか、成果は得られましたか？」

「ん〜とりあえず凄く傲慢な奴だつて事は分かったよ」

「そうですか」

本来なら焠牙が珠世へと直接渡す筈だったが無惨の足取りを掴む為届け物を炭治郎に預けた焠牙、その訳を珠世は薄々気付いていたものの

念のためにと聞いてみると、焠牙からの返答は珠世の予想通りだった為、その後の進捗を確認するが無惨の足取りまでは掴めずにいた焠牙の返答に少し残念そうに返事をする。珠世は炭治郎に包帯を巻きつけて手当てを終わらせる。

「炭治郎さん、応急処置は施しましたが無茶をしてはいけませんよ」

「珠世さんありがとうございます」

炭治郎と珠世は焠牙を交えてこれからの事を話すと、二人とも焠牙へと振り返り

珠世が焠牙へと話しかける。

「先程も話したとおり私達はこの地を離れ別の場所に身を隠します、

落ち着き次第また連絡します」

「なるほど、確かにその方が良いけど当てはあるんですか？…この後行かなきゃいけない所あるんですが、良かったらご一緒しませんか？」

「??どうゆうことですか？」

「おそらく身を隠すならこれ以上の場所はないかと思えます」

「詳しくお願いします」

無惨に悟られる可能性がある為、浅草を離れ身を隠す事を告げる珠世に焠牙も同意するが、当てがあるのか気になり焠牙は珠世にこの後

向かう場所へと同行する案を提示するも、その意図がわからない珠世は焠牙にその意図を聞き返す。焠牙は珠世と愈史郎が身を隠すならこれから向かう場所が最適だと言うと、珠世も悪い気はしないのか焠牙から詳しい話を聞く事にした。

「焠牙さんちよつといいですか?」

「ん?炭治郎どうした?」

「焠牙さんは一体何者なんですか?鬼の事を知ってるみたいだし

珠世さんや愈史郎さんとも知り合いだし、普通の人ではない気がします」

これまで二人の会話を聞いていた炭治郎は話の輪に割って入り焠牙に疑問に思っていた事を話し出すと、焠牙は炭治郎の疑問に思っている内容を話し出した。

「まだ話してなかったな、俺も炭治郎と同じ鬼殺隊の一員だよ今日は休暇取ってたから隊服は着てないけどね。珠世さんと愈史郎とは一年前に知り合ったんだ。任務の途中で珠世さんと遭遇してな、あの時は愈史郎の殺気が凄かったな」

「当たり前だ!珠世様に危害を加える奴だと思ったからな、ましてや鬼狩りだ殺気立つのも無理はないだろ」

焠牙は自分が炭治郎と同じ鬼殺隊の一員だという事、珠世と愈史郎との出会いを炭治郎に話していると愈史郎もその話に加わり出した。

「焠牙さんも鬼殺隊の人?もしかして禰豆子の事も・・・」

「え?ああ、禰豆子ちゃんが鬼だって事は最初から知っていたよ」

「あの!禰豆子は誰一人として人を喰ってません今までもこれからだから!」

「炭治郎!今までは喰ってないとして、これからも喰わないという保証がお前に出来るのか?言葉で語る事は誰でも出来る」

「・・・それは・・・」

「炭治郎、お前は どうしたい?」

「・・・禰豆子を人間に戻したいです、その方法を探すために俺は鬼殺隊に入りました。俺のたった一人の家族なんです」

「・・・そっか・・・炭治郎、禰豆子ちゃんは確かに鬼だ。でも心は人間

だよ家族想いの優しい子だ、俺はそれを知ってるし信じてる。心配するな、少なくとも俺は鬼だという理由だけで斬る事はないからさ」

煌牙が鬼殺隊だと知った炭治郎は禰豆子を守る為に煌牙に懇願するも煌牙はあえて厳しい言葉を投げかける。

思わず口籠る炭治郎だったが煌牙からの問いかけに炭治郎は自身の願いを話すと煌牙は禰豆子を認めてる事を口にする、

それを聞いた炭治郎は目に涙を浮かべながら煌牙に頭を下げて話す。

「煌牙さんありがとうございます」

「いや、試すような事言つて悪かったよ禰豆子ちゃんの事は分かってたけど炭治郎の覚悟が知りたかったからさ」

「覚悟ですか？」

「まあ、保証なんてすぐに証明出来ないけどさ炭治郎のこれからの行動で示していけばいいと思うよ。炭治郎が傍にいる限り禰豆子ちゃんは大丈夫だと俺は思う。だから炭治郎、禰豆子ちゃんを守りたいならまずは自分を守れ、炭治郎が自分の命を守れないのなら禰豆子ちゃんも守れないからな」

「え？・・・あ！はい！・・・最終選別の時にも煌牙さんと同じような事言われました、あの時はカナヲのおかげで助かったんです」

「なるほどね〜炭治郎、カナヲと同期だったんだな。そっかカナヲも成長したな」

「煌牙さんカナヲの事知っていますか？」

「カナヲは俺の妹だよ」

「そうか！それでカナヲと匂いが似てるのか。カナヲのあの言葉は煌牙さんの言葉だったんだ煌牙さんありがとうございます」

「まあ俺のは師匠の受け売りだけど・・・匂いって・・・え？俺なんか臭う？てかカナヲの臭い嗅いだの？」

「へ？あア〜違うんです！俺、人の感情とかさうゆうの匂いで分かるんです、煌牙さんとカナヲの雰囲気というか匂いが似てて・・・決して嗅いだ訳ではありませんから！」

「俺の耳と似たようなやつか。俺もな、触れた人や物の記憶とか想い

が声として聞こえるんだよ、だから彌豆子ちゃんの事も信じられるんだよ」

「焠牙ーいつまで珠世様を待たせる気だ！炭治郎！珠世様が話されている時に割り込むな！」

二人で会話していると愈史郎が怒り出し拳骨をお見舞いする。

「愈史郎暴力はいけません、炭治郎さんは怪我してるんですよ四ノ宮さんは……まあいいでしょう」

「はいー」

「マジかよ」

珠世が愈史郎を諫めるも焠牙に関しては許容したら愈史郎も返事を返す。それを聞いた焠牙は落ち込み肩を落とした。

「四ノ宮さん、今のは冗談です」

「いや、割と本気でしたよね？」

（冗談を言う珠世様も美しい）

珠世は冗談だと話すも焠牙は雰囲気から冗談じゃなかったと感じ突っ込みを入れる中、愈史郎は心の中で珠世を崇めていた。

「話の続きがまだでしたね、俺がこれから『焠牙ちやくくん』向かう：あんだなんでいんの？」

「ふっふっ♪焠牙ちゃんそろそろ私に逢いたくなってきたんじゃないかなっつて♪だ・か・ら・私が来たー！そゆことー♪」

珠世に話の続きをしようと話し出した焠牙だったが、途中で名前を呼ばれ話が途切れ、突如現れた朔弥に何故ここにいるのか若干冷たく聞く焠牙。

朔弥は斬吼狼と対面した焠牙が自分の所に来るだろうと思い、待つのではなく自ら焠牙に会いに来たのだが妙な言い回しをして焠牙の反応を楽しむ朔弥。

「行こうと思ったよ聞きたいことあるしさ」

「だよねっ斬吼狼ちゃんの事だよねっ」

「四ノ宮さんこの方は？知り合いのようですが」

「珠世さんすいません、この人が迷惑かけて。この人は朔弥

珠世さんと話してた件に関わる人です」

「あつ！勝手にお邪魔してまゝす♪」

「貴方は？・・・鬼のようですがそうじゃないような、一体」

煌牙と朔弥が話していると珠世が煌牙に朔弥の事を尋ねだし、煌牙は朔弥が迷惑かけたと謝りだす。朔弥も一応は挨拶をすると珠世は朔弥から鬼の気配を感じるもどこか違うことから少し困惑していた。

「俺も気になってました鬼だけど嫌な匂いがしない、でも鬼というにはどこか違う匂いも」

「ちゃんと話すからまずは落ち着こ〜」

炭治郎も朔弥から鬼の匂いがしていたが人を喰ってきた嫌な匂いがしなないと感じるも鬼と断言出来る匂いではなかった為気になっていた。

朔弥はみんなを落ち着かせ、話し出す。

「とりあえず私は鬼だよ、他の鬼とは違うけどね♪昔、無惨ちゃんの血と細胞を手に入れて私がそれを色々改良して作った薬で鬼になったんだよ♪ウエイ♪」

「私、魔戒法師っていう術を使う人なんだけど術を重ね掛けて作ったから鬼だけど人でもあるの、鬼の良いところだけ頂いたからね〜」

お日様？気持ち良いね♪ご飯？美味しいよ♪そゆことだよ♪」

「・・・・・・・・・・」

朔弥が自分の成り立ちを話しているが、鬼の根底を覆す朔弥の体質に珠世と愈史郎は言葉を失い黙って聞いていた。

「どこかで私を知った無惨ちゃんは私を取り込んで、ウキウキハツピー鬼ライフでも考えたんだろうね、もうね来たよ興奮しながらさ〜発情期ですかこのヤロー！とりあえずキモかったから逃げたの

術でピョンとね♪」

「あつまだまだ続くよ〜♪一旦休憩入れる？とりあえず煌牙ちゃん膝枕ゴチになりまゝす♪」

話を続ける朔弥だったがまだ長くなるからと一度休憩を挟むか聞きながら彌豆子とは反対側の、もう片方の煌牙の膝を枕にして寝転んだ。

「えつとど〜まで話したっけ？煌牙ちゃんが私の事好きってとこまで

「？ねえ煌牙ちゃん？」

「いやそんな話してないだろ？そもそもそんな事言っていないからな

見た目子供のくせに、相当な婆さんじゃねえか！」

「またまた♪照れなくてもいいのにな♪」

「はいはい、話の続きよろしく。無惨のウキウキハッピー鬼ライフからの続きだよ」

「つれないな、でね無惨ちゃんなんだけどここの後もしつこいの

私を探してえんやこら、朔弥を尋ねて三千里つてくらい。まあ無惨ちゃんが姿現すならこつちも好都合だったから、大牙ちゃんと斬吼狼ちゃん・まだ鬼じゃなかったけど、その二人が無惨ちゃんと戦ったんだけど大牙ちゃんの一撃が激ヤバだったから無惨ちゃん逃げたの、そしたら無惨ちゃん次は上弦の壺を出してきてさくしつこいよね」

「私？術でしか入れない隠れ家作ったからそこに隠居だよ、昼間外出出来るから問題ないけどね♪うん、私の方がウキウキハッピー鬼ライフだね♪血鬼術使えないけど法術使えるから問題ないし」

「でねでね、斬吼狼ちゃんが一人の時に上弦の壺、黒死牟っていう名前なんだけどそいつにやられちゃったの、斬吼狼ちゃん死んだくつて思ったけど、それから時が過ぎて大牙ちゃんもいなくなったら私一人だくつて時に斬吼狼ちゃんが現れたの鬼になつて」

「魔戒騎士の鬼とか無惨ちゃんにとつて有難い手駒だよね♪でも魔戒騎士だよ？無惨ちゃん舐めすぎ、斬吼狼ちゃんのパートナーのアルヴァのおかげもあつて斬吼狼ちゃん自我残つてたからね♪」

「んで私が作った薬飲ませて、斬吼狼ちゃんを無惨ちゃんから解放したの。斬吼狼ちゃん何故か無惨ちゃんの呪い操作出来たからこの状況を利用して斬吼狼ちゃんをスパイとして無惨ちゃんの情報を集めようつて作戦を考えたの。大牙ちゃんの願い、いつか現る牙狼の新たな系譜の為に」

「はい！とりあえず話はここまで♪突っ込みどころ満載だよね♪」

質問はく？もちろんあるよね？答えるよ♪」

「はい！朔弥さんは昔からと言つてましたが、貴方は一体何歳なんですガア」

「前にも言ったが女性に年齢を聞くな〜！」

朔弥の長い話の後、質問を聞くと言われ真っ先に炭治郎が真っ先に手を挙げ朔弥に年齢を聞く・・・が愈史郎が突っ込みを入れ最後まで言えずにいた炭史郎だった。

「愈史郎」

「殴ったのではなく叩いただけです」

「それもいけません」

「はい！」

「朔弥さんと仰いましたね、私は珠世、鬼です。ですが」

「珠世ちゃんだね〜♪うん、私と同じって事だよね？ここは診療所って感じだし聞きたいのは私が作った薬の事？」

「はい、鬼を人に戻す薬を研究しています」

「話は読めた！協力しろって事だよね？無惨ちゃんの血はもうないけど私の血ならあげるよ？ここ襲撃されてるし危ないから私の隠れ家で一緒に研究しようよ♪煌牙ちゃんもそのつもりだったんでしょ？」

「そうだけど、理解が早いな伊達に歳を食ってないというわけか」

「お・う・が・ちゃん♪」

「すいませんでした」

珠世は愈史郎を諫めて朔弥と話し出すと、朔弥は珠世の考えを察して

共に研究をすると言言する。

煌牙は話を振られたので肯定するも余計な事まで言い出し、朔弥から威圧され素直に謝る。

「朔弥さんありがとうございます、愈史郎もそれでいいですね？」

「珠世様の傍ならどこでも構いません」

「ふっふ〜♪隠れ家に仲間が増えたよ〜♪斬吼狼ちゃんはあまり帰ってこないし、煌牙ちゃんは一緒に住んでくれないし寂しかったんだよ〜♪」

珠世と愈史郎は朔弥の隠れ家に拠点を置く事にして朔弥が喜ぶ。

「えーと耳飾りの・・・」

「竈門炭治郎です、それと妹の禰豆子です」

「炭治郎ちゃんと禰豆子ちゃんね♪炭治郎ちゃん、待っててね？禰豆子ちゃんを人間に戻す薬頑張るから♪炭治郎ちゃんも頑張ってるね、

あ！炭治郎ちゃんこれ飲んで？」

朔弥は炭治郎と禰豆子の名を聞くと炭治郎を励まし、懐から薬の入った小瓶を取り出し炭治郎に飲ませる。

「まさか鬼になる薬とかじゃ？」

「炭治郎ちゃん違うよ♪炭治郎ちゃんの怪我を治す薬だよ♪」

「あ、はいありがとうございます」

炭治郎は先程の話から鬼になる薬かと思いついてみるが朔弥は炭治郎の怪我を治す薬だと言い、それを聞いた炭治郎はお礼を言つて薬を飲み干す。

「ふっふっ♪じゃいくよ♪Are You Ready？」

「えっ？えっ？」

「メデイカル・マジック・ベストマッチ!!？」

「えっっ！」

薬を飲み干した炭治郎に魔戒筆を取り出し術を発動させる朔弥

聞きなれない言葉に炭治郎は取り乱すも朔弥は御構い無しに術を飛ばし炭治郎の体が淡い光に包まれる。

その光景と朔弥の意味不明な発言に声をあげて叫ぶと、炭治郎の怪我が全て完治しており炭治郎は驚きながら体を動かす。

「凄い！さっきまで痛かったけど全く痛くない！体も軽いくらいに動かせます！」

「でしよでしよ？煌牙ちゃんどう？少しは見直した？私に惚れた？」

「もう帰っていいかな？」

「朔弥さんありがとうございました、俺はずっと我慢してたんです

凄く痛いのを我慢してたんです。俺は長男だから我慢出来たけど次男だったら我慢出来ませんでした！」

「え？何？その謎理論・・・」

「うんうん♪わかるよ♪だんご三兄弟でも次男は自分が一番だしね
♪」

「謎理論といい謎発言といい桜花のような輩が増えていくのキツイん

「だけど？」

「焔牙ちゃん？桜花って誰？まさか！・・・酷い私というものがありながら他の女に手を出すなんて、私の事は遊びだったのね」

「・・・冗談は見た目だけにしてくれ、相手にするの疲れるんだよ」
「焔牙ちゃんはつれないなく、まあ冗談はさておき桜花ちゃんも魔戒法師だったよね？今度連れてきてね？修行とか色々教えてあげたいことあるし」

「・・・最凶の組み合わせじゃねえか！絶対嫌だ」

「じゃあ私から行くから〜♪Are You Ready？」

「ベストマッチじゃねからな！むしろエボルマッチだよ！えっ何なの？魔戒法師ってこんなのばっかなの？」

「焔牙さん突っ込みになるとキャラが変わるんですね」

「キャラ言うなし、こんな奴らの相手してたら自然とこうなるんだよ」
炭治郎の回復からの謎理論と朔弥の謎発言から始まった焔牙の突っ込みを見ていた珠世と愈史郎、二人は話の輪から外れていて良かったと

安堵の表情を浮かべながら焔牙を見ていた。

「焔牙ちゃん、ここからが本題だよ？前に言ってた偽りの牙って意味もうわかった？」

「えっ？唐突だな、今の牙の呼吸と本来の呼吸が違うって事はわかったけど」

「月に届かないって意味まではわかんなかった？」

「まあ」

「ザルバちゃん悪いけどもう話すね、焔牙ちゃん死なせたくないし無惨ちゃんも牙狼を危険視してるから」

「朔弥お前が良いのなら俺様からは何も言うまい」

「二「なんか喋ったー!!?」」

焔牙と朔弥の会話中、ザルバが喋りだし炭治郎・珠世・愈史郎の三人が驚きのあまり同じ口調で叫ぶ。

「ザルバちゃんは喋るの、今大事な話してるからゴメンね？質問は後から聞くから」

朔弥は焠牙と大事な話をしてる為、三人からの質問は後から聞くと
言い焠牙に話を戻す。

「月っていうのはさつき話に出てた上弦の壱黒死牟の事、黒死牟は月の呼吸っていう呼吸術を使う剣士の鬼なの」

「上弦の壱黒死牟・月の呼吸・・・」

「焠牙ちゃんいい？今の焠牙ちゃんだと一対一だと正直キツイかも」

「だから本来の牙の呼吸が必要だって事か」

「うん・牙の呼吸って風の呼吸の派生でしょ？あれは大牙ちゃんの弟子、蓮花ちゃんが風の適正だったから大牙ちゃんが蓮花ちゃんの為に編み出した呼吸なんだよ、魔戒騎士ではなく鬼狩りの為の呼吸、

本来の牙の呼吸は牙狼の呼吸、黄金騎士牙狼の為の呼吸なんだよ」
「なるほど」

「焠牙ちゃんの日輪刀って代々受け継いできた刀だよ？焠牙ちゃんの本来の適正って何なの？」

「えっ？あー黒だった」

「焠牙さん、俺も刀が黒なんです」

「炭治郎もか、お互い苦労するな」

「そんなことないよ？大牙ちゃんも黒だったし。それに焠牙ちゃんは努力して今があるんでしょ？」

「まあそうだけど」

「焠牙ちゃんの目標は本来の牙の呼吸の会得、炭治郎ちゃんは・・・頑張ってる」

「はい!!？よくわからないけど頑張ります！」

「まあ頑張るけどさ、方向性が掴めないんだよ」

「大丈夫だよ♪斬吼狼ちゃんもいるし♪あー無惨ちゃんのスパイはもういいや♪」

朔弥と焠牙は話を進めてこれからの方針を決めると、焠牙は禰豆子を起こさないように優しく足を退け、寝転んでる朔弥を起こすと立ち上がって珠世邸から出る為に出口へと振り返る。

「とりあえず斬吼狼は味方って事がわかっただけで収穫だな、朔弥さん珠世さんと愈史郎の事よろしくな。炭治郎、何か困った事があれば

力になるからな。もし鬼殺隊関係で彌豆子ちゃんの事聞かれたら俺の名前出しなよ、俺は二人を認めてるから」

煌牙は朔弥と炭治郎に話すべき事だけ話すと珠世邸を出て帰路につく

炭治郎と彌豆子二人の兄妹との出会い、自身の新たなる目標を考えながら歩く煌牙は桜花への土産を買う為に繁華街へと訪れ色鮮やかな着物を数点購入し家へと向かった。

「牙の呼吸は牙狼の呼吸かゝ型つてあるのか？んゝまあ自分で考えるしかないよなく、それに炭治郎達にも会えたし良い休暇だったな」

後日、炭治郎達と再会するのだがまさかあの場所で再会するとは今の煌牙にはわからなかった。

「炭治郎ちゃんかく♪煌牙ちゃんも可愛いけど炭治郎ちゃんも可愛いなあ〜♪それにあの耳飾り、もう一つの系譜も受け継がれているんだね」

「煌牙ちゃん全ての呼吸は一つの呼吸から始まってるとだよ」

他の誰でもない煌牙ちゃんだけの牙、闇を照らす光・金色の刃」

先日煌牙に会い来た朔弥はそこで出会った炭治郎の耳飾りを見てとある人物を思い出し、煌牙へと思いを馳せながら一人呟いていた。

「師匠、折り入ってお話があります」

「改まってどうしたの？煌牙」

「言いくいんですが、俺が師匠から受け継いだ日輪刀、師匠に返そうかと・・・すいません」

「・・・どうして？」

「煌牙？急にどうしたの？」

「師匠は朔弥という魔戒法師をご存知ですか？」

「ええ、私達魔戒法師の祖であり、とても強い法力を持っていたと（今度来るとか言ってたし話してもいいかな？むしろあの人交えて説明したら絶対とんでもないことになりそう、ホントは来ないで欲しいけど・・・マジで）」

「えーとですね、師匠に返す経緯にあたり話しておきたい事が二つ程あります」

「何かしら？」

「まず一つ、その朔弥って人：人？鬼でもあるんですがまだ生きてます」

「えーと・・・どうゆう事かしら？」

「煌牙？頭大丈夫？」

「桜花程じゃないから大丈夫！その人曰く、無惨の血や細胞を元に作

り出した薬で鬼になって今も生きてるんです。日光浴びたり普通に飯食べたりしてますが鬼なんです、俺も意味わかりませんが」

「まだ理解が追いついてないけれど、今も生きてるのね」

「なんで焠牙はその人の事知ってるの？」

「ザルバが教えてくれたんだ、俺はその人に会う必要があるって。」

ホントは口止めされてたけど今度桜花に会いに来るって言ったし

先に話しておこうかと思って」

「花蓮・桜花悪いな。奴は無惨から狙われている、情報漏洩阻止の為に必要最低限の者にしか接触してこなかったからな」

「その方が何故今になって接触を凶ろうとしているのかしら？」

「焠牙に試練の時が来たからだ、焠牙はホラーじゃないが鬼をこれまでに100体狩ってきたからな」

「ザルバく？なんの試練く？」

「黄金騎士牙狼の呼吸、本来の牙の呼吸を会得する試練だ」

「んくく？私達の呼吸とは違うのくく？」

「お前達の呼吸は蓮花から受け継がれてきた呼吸だ、牙狼が受け継ぐ呼吸はまた別の呼吸、焠牙だけの呼吸だ」

「焠牙、私に刀を返す理由はその試練が関係しているのね？」

「はい、俺の最初の日輪刀は漆黒に変わりました。俺が受け継ぐ呼吸はこの日輪刀じゃないといけない気がして」

「そうね、焠牙がそう決めたのなら仕方ないわね。わかりました

刀を預かるわ」

「師匠・・すみません」

「それはそうと、お母さんって呼んでくれないのかしら？貴方に教えることはないのだし、もう師匠ではないのだけれど」

「師匠は師匠ですから」

「・・・桜花く焠牙がお母さんって呼んでくれないの」

「私も焠牙の事お兄ちゃんって呼んでないよ？今更だし」

「まあ今更だよな」

焠牙は受け継いだ日輪刀返却から始まった朔弥の存在、試練や呼吸

の話ザルバと交えて花蓮・桜花に話していた。

花蓮も焠牙の話聞き、日輪刀の返却を認め刀を預かると

自分の事を母と呼んでくれない焠牙に不満を言っていたが、焠牙や桜花に今更と言われ落ち込んでいた。

それから数日後く

「那田蜘蛛山で先遣隊が壊滅寸前の報告と私達柱の応援要請が届きました、カナヲ準備はいい?」

「私は大丈夫です、しのぶ姉さん」

那田蜘蛛山と呼ばれる山にて鬼の討伐任務で赴いていた先遣隊が壊滅寸前との報告を受けた鬼殺隊本部は急遽、蟲柱のしのぶ・水柱の富岡義勇に応援要請をかけ、先行してもう一人柱を送り込み事態の解決を図ろうとしていた。

しのぶは継子のカナヲを連れて那田蜘蛛山へと向かう途中、カナヲから話しかけられるとカナヲの方へと振り向く。

「しのぶ姉さん、招集された柱の中に兄さんはいりますか?」

「誰が要請されたかまではわからないけど、管轄も近いからもしかしたらいるかもしれないわね」

「私兄さんと一緒に任務を受けた事ないから、居てくれたら」

「私も焠牙さんと同じ任務に就いた事ないわよ?桜花さんとならあるのだけだ」

「しのぶ姉さんもそうなんです」

「焠牙さんが鬼と戦っている姿を見たのは最終選別の時と姉さんを助けてくれたあの時だけだし、今の焠牙さんの実力は私にも把握しきれないの」

「兄さんに稽古付けてもらったけど、私は兄さんに一太刀も当てる事出来ませんでした」

「焠牙さんは柱だから、そう簡単にはいかないわよ」

「はい・・・強くなりたいです」

「そうね・・カナヲ山が見えてきたわ気持ち切り替えて」
「はい」

道中、焠牙の事を話しながら進んでいた二人だがその先に那田蜘蛛山が見えてくるとしのぶはカナヲに気持ちを切り替えるよう促すと自らも気を引き締め、山の中へと入っていった。

「焠牙くく！山で隊員が危ないから急いで応援に来てくれって米吉がく」

「ザルバから聞いた。柱数名が要請される事態だ、急いで向かうぞ」
「うん」

焠牙と桜花、この二人にも鬼殺隊本部から応援要請がかかり先行して

那田蜘蛛山へと向かっていた。

「ねえ？焠牙く？柱って誰が来るのかなあ？しのぶちゃんかなあ？
？スケ・・不死川さんかなあ？それとも富山さんかなあ？」

「富岡さんな、お前間違っても不死川さんの前でソレ言うなよ」

「わかってるよく」

「どうだかな・・まあ誰が来るにしろ俺達がやるべき事は一つだろ？」
「そうだね」

那田蜘蛛山へと急ぐ二人は、道中どの柱が来るのか話していたが

誰が来てもやる事は変わらないと焠牙が告げると桜花もその言葉に同意して、二人は眼前にそびえ立つ那田蜘蛛山へと入っていった。

「うわあゝ森の中不気味だねゝそれに臭いよゝ焠牙く」

「それはわかるけど俺にくつつくなよ」

「焠牙の臭いで中和してるの」

「ちよつと待て！この強烈な臭気が俺で中和出来るはずないだろ？

俺どんだけ臭気出してるんだよ！」

「え〜〜！この臭いの中で呼吸とか嫌だよ？腐敗の呼吸の使い手じゃないんだし」

「腐敗の呼吸の使い手なんかいないからね？てかどんな呼吸だよ」

「フシュー！フシュー！腐敗の呼吸壺の型 納豆」

「納豆は発酵だからな？納豆に謝れ！」

「も〜〜！フシューと腐臭をかけた私の駄洒落を無視するな〜〜」

「てか任務中にこんなふざけた事してる鬼殺隊って俺達だけだろ」

「そうだね〜」

不気味な雰囲気と強烈な臭いを放つ森を歩く二人、桜花は焠牙へと擦り寄り臭いを誤魔化そうとするが突っ込みを入れられ、会話がふざけ始めると焠牙が諫め出し桜花もふざけるのをやめて、気を引き締める。

森の奥へと踏み入れると焠牙の耳に金属音が届き、焠牙は音のする方向へと駆け出していく。

「桜花、金属が打ちあう音が聞こえる。おそらく鬼殺隊の誰かだ」

「先遣隊の人かな？」

「多分な」

二人はその場に辿り着くとそこには一人の隊員が他の隊員に襲われながらも食い止めてる光景が広がっていた。

「大丈夫か？」

「貴方達は？」

「応援要請を受けて助けに来た四ノ宮焠牙だ」

「私は四ノ宮桜花だよ」

「四ノ宮 柱が・柱が来てくれた」

「他の隊士達は意識がない・これ操られてるのか？」

「はい背中に糸が張り付いているんですそれを斬れば」

「私に任せて〜」

隊員に声をかける焠牙や桜花が現れた事で、その場に倒れ込んでいた複数の隊員達が起き上がり二人に向かって日輪刀で斬りかかりながら向かってくる。

二人は襲ってくる隊員達を体術で捌きながら、声をかけた隊員に名

乗り出すと隊員はその名を聞いて緊迫した表情から安堵の表情へと移り

目に涙を浮かべながら煌牙からの質問に答え出す。

隊員から現状の対処の仕方を聞くと桜花が日輪刀を抜刀し、隊員達を軽快に躲す度に日輪刀を一閃、背中の糸を斬られた隊員達はその場に倒れ伏せ起き上がる様子を見せない。

「ねえ？これ何度やってもまた同じ事繰り返すんだよね？」

「あ、はい！何処かに操っている鬼がいる筈です。少し前に癸の隊員と猪があの方角へと向かいました」

「癸と猪・猪？まあいいや、その方向から嫌な音がしてるしな。

桜花ここからは別行動だ、俺は鬼の元へと向かう。桜花は」

「煌牙わかってるから、ここは私に任せて」

「よろしくな、それと君は・・・」

「む、村田です」

「村田か、ここまで持ち堪えてくれてありがとな。この一件が片付いたら何か美味しいものでも食べに行こう奢るからさ」

「え？・・・あ、はい！ありがとうございます！」

桜花からの質問に村田は操っている鬼の存在と鬼のいる方向に癸の隊員と猪が向かったと答え、煌牙は何故猪が？と一瞬戸惑うがすぐに切り替え桜花に別行動の指示を出し鬼のいる方向へと振り返る。

桜花も煌牙が言いたい事は理解しているので指示を出し終わる前に

返事を返し、煌牙は桜花に後を任せると隊員に声をかける。

隊員は村田と名乗ると煌牙は村田に持ち堪えた事に対し礼を告げ、任務が終わったら何か食べに行こうと話しかける。

村田はまさか柱から礼を言われ食事の誘いを受けるとは露にも思っておらず、その旨を言われた村田は少しの間思考が固まるが理解すると煌牙に礼を言いながら頭を下げると、煌牙はその場を離れ鬼のいる方向へと駆け出していった。

「さつきよりも嫌な音が増えたな、耳障りなんだけど」

鬼のいる方向へと向かう程ギチギチと軋むような音が増え煌牙は苦言を漏らしながらも進んでいくと先程と同じように糸で操られた女性隊員が佇んでいて煌牙を見つけると獲物を見つけたかの如く駆け出してくる

「駄目〜これ以上殺したくない！お願い逃げて〜！」

体を無理矢理動かされ、意志とは関係なく刀を仲間に向ける。

肉体的にも精神的にも残酷な現状から彼女を解放すべく煌牙は魔法衣から日輪刀を出して居合いの構えを見せる。

「うん、師匠から受け継いだ日輪刀よりやっぱりこっちの方がしっくりくるな」

煌牙が鬼殺隊に入隊した時初めて受け取った日輪刀、牙狼剣を引き抜くまでの二年間、柱を襲名し花蓮から日輪刀を受け継ぐまで命を預けてきた煌牙の愛刀を再び握り煌牙は眼前を見据えながら鯉口を切り

迫り来る女性隊員の刀を斬り落とし、すかさず彼女の周囲を瞬時に斬り払う。

操っている糸を斬られ、その場に倒れ込む女性隊員を庇うように受け留めると煌牙は魔法衣から小瓶を取り出し女性隊員に小瓶の中身を飲ませようと差し出す。

「はあくはあく、解放してくれてありがとうございます。あのそれは？」

「鎮痛剤だよ、無理矢理動かされたんだ。どこか痛めてるだろうし」

「肩の関節が外れて・・・その」

「そうか、ほらこれで飲めるだろ？」

女性隊員は煌牙に礼を言うのと差し出した小瓶について質問すると

無理矢理操られ体を痛めてる事と小瓶は鎮痛剤だと返答する。

女性隊員は肩の関節が外れている事を煌牙に言うと、煌牙は腕が動かない事を察し手に持つ小瓶を女性隊員の口元に近付け鎮痛剤を飲ませる。

「ありがとうございます、四ノ宮さん」

「あれ？俺に乗ったっけ？」

「私も四ノ宮さんと同じ最終選別にいたんですよ？あの時も助けてくれて・・・今も」

「ん？最終選別？・・・あっ！あの時の！乱れ刃の尾崎さん！」

「何ですか？その乱れ刃って？」

「え？ああ、尾崎さんあの時無茶苦茶に刀振りわしてたじゃん、だから乱れ刃」

「思い出してくれるのは嬉しいですが、余計な事まで思い出してもらわなくていいですから！」

「同期とまた再会出来て嬉しいよ、それとゴメンな日輪刀斬り落として」

「同期の中で四ノ宮さんと胡蝶さんは柱にまで登り詰めましたからね 私も同期として誇りに思います。日輪刀は気にしないで下さい、おかげで仲間を斬らずに済みますから」

女性隊員は鎮痛剤を飲み干すと、煌牙の名を言いながら礼を告げ煌牙は名乗った覚えがないので疑問に思うと女性隊員は煌牙と同じ最終選別に参加していて今も合わせて助けてくれたと煌牙に話す。

煌牙は最終選別の事を思い出すと、脳裏に刀を必死に振り回しながら鬼を払っていた少女、尾崎さんの事を思い出した。

その事を尾崎さんに話すと、煌牙が自分の事を思い出したのは嬉しいが彼女にとって恥ずかしい出来事まで思い出したのは余計だと顔を赤らめて恥ずかしげに話し、煌牙は尾崎さんと同期の話をしながら日輪刀を駄目にした事を謝り尾崎さんも仲間を斬らずに済むと言つて気にしないでいた。

「そういえば嫌な音がしなくなったな、癸の隊員と猪？が斬ったのか？・・・尾崎さん多分これ以上操られる心配はないと思う、俺が来た方向に桜花、妹がいるから治療してもらおうといいよ」

「妹？最終選別の時も一緒にいましたね、彼女変な人に纏わりつかれて機嫌悪かったような」

「ああ、あれな、誰だったかなあ？名前知らんけど俺は安全に最終選別を突破したいからなとか言ってたっけ？あいつも突破したから同

期だったな、名前知らんけど」

「四ノ宮さんもですか、私も名前知らないんですよ。私達と同じ任務に就いてたから今も山にいますと思うんですが、名前知らないけども」
「あいついるのか！安全重視な慎重派だから多分大丈夫だと思うけど
・・・まあいいや」

「どうでしょうね？誰も聞いてないのに突然自分語りしだし、出世欲剥き出しだし案外危ないのかもしれないよ？自分語りするのならせめて名前くらい名乗ったら良いと思うんですよ」

「ははは、尾崎さん結構辛辣だな。とりあえず尾崎さんは撤退して治療な、後は任せろ」

「はい、お願いします四ノ宮さん」

「煌牙でいいって。同期なんだし堅苦しいのは無しで！」

「あ、はい！しの・煌牙さんもご無事で！」

隊員達を操っていた糸から発する嫌な音が聞こえなくなり煌牙は鬼が死んだのだと判断すると尾崎さんに撤退を促し桜花から治療をしてもらおうように話していると、尾崎さんが最終選別で桜花に付き纏っていた人物を思い出し、その事を話し出した。

煌牙も当時の事を思い出すもその人物の名前は知らないが、当時言っていた言葉だけは思い出し同期だったと言うが、再度名前は知らないと言加える。

尾崎さんも名前を知らないらしく、煌牙も知らないと言っていると同じ任務でこの山にいますと話し、再び名前を知らないと言い出した。

煌牙は名前を知らない同期がこの山にいますと知ると、同期は慎重派であり大丈夫だろうと考えるが、尾崎さんは同期が突然自分語りを始め

自身の出世の話をしだすあたり危ないと言いながら名を名乗らない事に不満をあらわにする。

煌牙は尾崎さんが案外毒舌だった事に苦笑いをしながら、尾崎さんに再度撤退を促し治療するよう告げ、任務に戻ろうと森の更に奥を見据えると尾崎さんから後を頼むように言われた煌牙は尾崎さんに苗字じゃなく名前がいいと話すと、ぎこちない口ぶりで尾崎さんが名前

を呼び煌牙の無事を祈る。

煌牙は振り返りその場を離脱すると他の隊員達を探すべく山の中を駆け回る。

「今雷の音したよな？六回も、そんな天気じゃないし……そつか……いい弟子がちゃんといたんだな鳴柱の爺さん」

煌牙と桜花、四ノ宮の試練を終え最終選別へと向かう一年間の間、花蓮の計らいで各地の育手の元に訪れ稽古を付けてもらう日々を過ごしていた。

牙の呼吸、風の呼吸から派生された呼吸ではあるが、参の型には雷の呼吸壺の型、玖の型には炎の呼吸玖の型から着想を得ており型を極める為に出稽古へと赴き、元鳴柱の桑島慈吾朗ともその時に知り合っており稽古を付けてもらっていた。

「!!?次は地面を砕く破碎音か、忙しい山だなここは」
遠くから激しい音が聞こえ煌牙は気持ちを切り替え音のする方向へと駆け出していった。

「……何コレ？顔面が蜘蛛の鬼と……えーと鬼？猪人間？……やばそうだな」

音の発生源へと近づく煌牙は顔面が蜘蛛の巨体の鬼と頭を掴まれて動かない猪人間を視界に捉えるも、猪人間の姿に少しの間思考が停止するが状況が状況なので考えるのをやめて、助ける為に日輪刀を抜き

壺の型を繰り返そうと跳躍するが、煌牙の反対方向からこちらに走ってくる音が聞こえ煌牙は型を途中で止めて身体を捻りながら着地する。

煌牙が着地する直前、反対方向から駆けて来た水柱 富岡義勇が煌牙とすれ違うように交差し眼前の鬼の腕を両断しながら駆け抜ける。

(富岡さん、来てくれたのは良いけどタイミング)

煌牙は柱の増援が来た事を好機とみるが、義勇が来たタイミングが煌牙と重なり出番をなくした事が少し残念に思っていた。

「四ノ宮（俺の到着がもう少し遅れていたらお前が鬼の頸を斬り終わっていたのだろう。済まなかった本来なら）お前が斬るべきだった」

「じゃあ、鬼の頸は俺が貰いますね（富岡さんわかります、貴方の言いたい事がわかります。後は任せて下さい）」

義勇は自身が斬るより焠牙に任せた方が良かったと思い、心の中で謝るも口にした言葉が足りず、端から見れば焠牙に文句を言っているように聞こえるが焠牙は以前カナヲとの再会の時に、何故か義勇の真意を読み取る読心術を会得しており、義勇の真意を理解していた為に義勇に抗議する事なく鬼へと振り返り日輪刀を構える。

義勇が腕を両断した事で解放された猪人間は起き上がり義勇のいる方向へと振り返ると先程まで居なかった焠牙に気付き、焠牙を凝視する

（さっきの奴も凄かったが、あいつはヤベー、あの鬼なんか比べ物にならないねえ気配だ、全身が牙で噛み砕かれそうな感覚だ）

猪人間が焠牙から放たれている気配を感じ取り、思考を巡らせていると義勇に腕を両断された巨体の鬼が呻き声を上げながら立ち上がり

斬られた腕を再生させて圧倒的な速度で焠牙との間合いを詰め焠牙に殴りかかろうと腕を振り下ろす。

（あいつやっぱ速え、あのヤロー構えたままで反応出来てねえじゃねえか！）

猪人間は巨体の鬼の速度が速すぎて、焠牙が反応すら出来てないと思っていたが、それが思い過ぎしだと知る事になる。

――牙の呼吸 捌の型 六根清浄・舞天狼――

穏やかな風を纏いながら舞うように鬼の拳を躲しすり抜け様に、日輪刀で頸・胴体・両腕・両脚を断ち斬り焠牙は日輪刀を鞘に収める。頸を斬られた鬼はバラバラに斬り裂かれ灰と化しながら消えていき

周囲に静寂が訪れる。

(スゲー！格が違う！太刀の威力が違う！天地程の差がある。あの硬い化け物を豆腐みたいに斬っちゃまった！スゲー！スゲー！スゲー！なんだコイツ、ワクワクが止まらねえぞ！)

鬼を斬り裂いた煌牙を凝視する猪人間の羨望の眼差しに気付いた煌牙

その視線から嫌な予感を感じた煌牙は義勇に後を任しその場を離脱する。

「富岡さん、後はお願ひします」

(危ねー！見た目だけで桜花の同類かと思うだろ！あの手の輩に絡まれると精神がかなり削られる。富岡さんいるし逃げてもいいよね？)

富岡さん今度鮭大根作りますんで〜お願ひします)

煌牙は離脱しながら、鮭大根をお詫びに義勇に面倒事を押し付け逃げた事を言い訳のように内心考えていた。

突如目の前から煌牙が消えた事で、猪人間は憤慨するも矛先を義勇に向け絡み出すが、義勇は猪人間を縄で縛り付けるとそそくさとその場を離れていった。

「(四ノ宮、お前はこうなることがわかってたから俺に押し付け逃げたのか。今回の事は鮭大根で手を打とう、お前の鮭大根は) 美味しいからな」

義勇は心の中で煌牙が面倒事を押し付け逃げた事を鮭大根で手を打つと考えていたが、口にした言葉は少なく脈絡のない事を言い出したのだが周りに誰もいない為、理解される事も咎められる事もなかった時が過ぎていった。

一方で桜花は煌牙に助けられた尾崎さんが合流し治療を経て山からの撤退を促すと村田と別れ、他の隊員を捜すべく山の中を駆け回っていた。

「ん〜？誰かいる〜？箱を背負った隊員？なんだろう〜？」

桜花は視線の先に箱を背負った隊員がいる事に気付きその隊員の

元へと駆け出す。

ガサツ

「おー丁度いいくらいの鬼がいるじゃねえか。こんなガキの鬼なら俺でもやれるぜ」

「☒誰だ」

「お前は引つ込んでな、俺は安全に出世したいんだよ。出世すりやあ上から支給される金も多くなるからな。隊は殆ど全滅状態だがとりあえず俺はそこそこの鬼一匹倒して下山するぜ」

箱を背負った隊員、炭治郎は2匹の鬼と対峙していた。

緊迫した空気の中、突然草を掻き分ける音と共に別の隊員が現れ一人で勝手に自身語りをしだし刀を構え走り出す。

「ダメだよせー君では」

隊員は炭治郎の言葉に耳を傾ける事なく鬼に向かっていく。

「桜花ちゃん必殺の型、いきなりステーキ！」

「グハツ!!？」

鬼に向かい駆け出した隊員が突如現われた桜花から飛び蹴りを浴びせられ転げまわる。

「ふう〜、危なかつたね〜。危うくサイコロステーキにされるとこだったんだよ〜？」

「ええ〜？今の助けてたんですか？普通に蹴り飛ばしてたような」

「結果オーライってことにしようよ〜♪」

「いや、失神してるんですけど」

桜花の呟きに炭治郎が突っ込みを入れるも桜花は有耶無耶にしようと誤魔化し、蹴り飛ばされた隊員を見た炭治郎は失神していることを告げながら若干引いていた。

「誰？君・・・僕はこの子に用があるんだ邪魔するなら斬り刻むよ」

「私は四ノ宮桜花、用があるのは構わないけど私は君の頸を斬り落とすつもりだからね鬼さん♪」

「威勢が良いな、出来るものならやってごらん？十二鬼月である僕に

勝てるならね」

十二鬼月の一人である下弦の伍 墨は突如現われた桜花を目障りに思い

邪魔をするなら斬り刻むと警告するも桜花は自分の名を名乗ると墨の頸を斬ると墨に挑発して返す。

挑発された墨は憤慨することなく余裕の態度で桜花を見下し髪をかきあげながら自身の左目に印された十二鬼月の証を見せる。

「十二鬼月でもなんでもいいよ、私に斬られる事に変わりはないんだし♪」

十二鬼月の証を見せられた桜花はその態度を崩すことなく日輪刀を抜刀し式の型の構えを見せる。

――牙の呼吸 式の型 虚空の牙――

目で追うことすら敵わない神速の斬撃を墨の頸へと放とうとする

桜花

だが墨の頸に桜花の刃が届く事はなかった。

――呀の呼吸 式の型 殲空の牙――

式の型 虚空の牙と同等の速度で放たれた神速の斬撃が桜花の斬

撃と日輪刀を斬り裂く。

「間一髪だったな下弦の伍、お前じゃこの女には敵わなねえよ」

「誰？あんた、鬼のようだけど。僕の邪魔はしないでくれるかな？」

「俺はこの女に用があるんだ、お前はそっちの小僧の相手でもしてろよ」

「何言ってるの？その女は僕が殺すんだ邪魔するならあんたも」

「あ？俺の邪魔をするならテメーから殺すぞ」

し 墨と桜花の間に突如現われた斬吼狼、斬吼狼も同じ式の型を繰り出し

桜花の斬撃を日輪刀ごと斬り裂き墨の窮地を救う。

斬吼狼は墨へと話しかけると墨から邪険に扱われるも、斬吼狼は気にすることなく自身の用を告げ墨にもう一人の相手をするよう促すと

墨の反感を買い殺氣を向けられる。

殺氣を向けられた斬吼狼は墨に殺氣を向けながら睨みつけると

尋常ではない殺氣に周囲が圧倒され緊迫した空気が流れる。

(あーこの鬼さんヤバイよ、前に見た上弦の式と同じ・・・うんそれ以上・・・刀も斬られたし・・・術だけで凌ぐ事出来る?・・・やるしかないよね)

(匂いが変わった?今までにない強烈な匂いだ、十二鬼月だと言っていたあの子よりもずっと・・・匂いだけで分かる今の俺じゃ勝てない殺される)

斬吼狼から放たれる殺氣に押され桜花と炭治郎の二人は力量差を実感し、桜花はどう凌ぐか、炭治郎は今の自分では敵わないと考えてながら斬吼狼の出方を窺っていた。

「わかった、好きにしたらいいよ。僕は元々その少年に用があったし」

「ならあの女は頂いていくからな」

墨は斬吼狼から放たれる殺氣で斬吼狼の実力が自身の實力より遙かに上だと感じると、これ以上の抵抗は無意味と考え桜花の相手を斬吼狼に譲り、当初の目的である炭治郎へと視線を移す。

斬吼狼は墨の言葉を聞くと少しばかり笑みを浮かべ桜花を凝視しながら自らの血鬼術を発動し、桜花へと向かい出す。

――血鬼術 潜影落下――

影を操る斬吼狼の血鬼術、夜の闇の中では効力を発揮しないが僅かな光さえあればその影を操ることが出来る。

月明かりに照らされ、僅かながらだが桜花の影が映り斬吼狼は桜花の影の中に桜花自身を沈め、桜花を封殺する。

「はっ・・・これで一人片付いたな、下弦の伍後はお前がやればいい

邪魔はしねえよ」

斬吼狼は桜花を片付けた事でこの場での用をなくし、墨に後を任せてその場を立ち去る。

「これで邪魔者はいなくなったね」

(人が影に呑み込まれた!あの鬼を追わないと、勝てないのはわかつ

てる、でもあの人だけは助けないと！)

斬吼狼が去った事で墨は炭治郎に向き直し話し出すが炭治郎は影に呑み込まれた桜花を助けようと考えていて墨の言葉が耳に届いていなかった。

「ねえ？聞いてるの？」

「そうだ！まずは目の前の事に集中しないと」

墨は自分の言葉が聞こえていないのか斬吼狼の去った方向を見つめる炭治郎に再度話しかけると炭治郎は墨の事を思い出し墨へと視線を移しながら気持ちを切り替え、墨と対峙する。

「まあこの辺でいいか、ほら出してやるよ」

「んんん？あれ？…急に視界が真っ暗になったと思ったたらさつきと違う場所にんんん…そっか！ボソソジャンプが成功したんだんんん」

「いや、ボソソジャンプって何だよ？あれか？朔弥と同じ残念な思考回路なのか？」

「うん？…あつ！さつきの鬼さん！今の鬼さんの仕業なの？」

「鬼さん？まあいいや、俺の血鬼術でお前を影の中に引きづり込んだんだ、ボソソジャンプじゃないからな」

「うわあ！その血鬼術ヤバイね！厨二病？」

「…お前、猛烈に貶してるよな？少なくともお前みたいな残念娘に言われたくはねえよ、胸も小さい残念娘」

「…は？ねえ鬼さん♪今なんて言ったのかなあ！♪残念娘の頭じゃ理解出来なかったからもう一度いいかなあ！♪」

「だから！頭も残念、胸も残念な残念娘だっ！」

「桜花ちゃん必殺の型 乙女の純情ギリギリチヨップ！」

「痛つて！お前の殺気とんでもねえな！上弦に匹敵するぞ」

「気にしてる事言うからだよ！それで！なんで鬼さんは私の事殺さなかつたの？鬼さんなら私なんて簡単に」

「ああ、俺はお前たちの敵じゃないからだよ。無惨の元で情報収集し

てたからさつきはあんな態度とってたけどな・・・悪かったな日輪刀を駄目にして」

「ん〜？敵じゃないの？私じゃ勝てないしその方が有難いけど信じられる根拠もないし」

「まあそうだよな、いきなり信じられるわけないよな。とりあえずこれでもいいか？」

墨から離れた場所で斬吼狼は桜花を血鬼術から解放すると桜花が現われ意味不明な発言を呟く。

その呟きに斬吼狼は突っ込みを入れると桜花が斬吼狼の存在に気が付き

斬吼狼に話しかける。

斬吼狼も桜花に返答をすると桜花から貶される発言をされ批判するも桜花の逆鱗に触れる発言をしてしまい、桜花から手痛い制裁を受ける斬吼狼。

桜花は斬吼狼に自身の処遇について質問すると、斬吼狼から予想外の返答を返され半信半疑になり、斬吼狼は魔戒剣を取り出し自らの鎧を召喚して桜花に見せ始める。

「わお！鬼さんも魔戒騎士だったんだ〜♪」

「まあな、詳しい事は朔弥から聞いてくれ。アイツ近々お前に会いに行くと言ってたからな。」

「それ焔牙から聞いた〜。朔弥さんってどんな人〜？」

「・・・お前以上に残念な奴だ、見た目も中身もな」

「桜花ちゃん必殺の型・・・」

「すまん、俺が悪かった！てかさつき仲間の隊員にも使ってたかったか？」

「うん！危なかったから咄嗟にね、なんかね自分語りしたり無謀に突っ込んでたから昔の嫌な記憶思い出してムカツてきたの」

「俺アイツの影の中に潜んでただけど・・・名前知らないな」

「そういうえば私も名前知らないよ、知る必要も無いし」

斬吼狼の鎧召喚を見た桜花は斬吼狼が魔戒騎士だと知り喜びながら

斬吼狼に視線を向ける。

斬吼狼は桜花が信じてくれた事にホッと一息つきながら詳しい話は朔弥から聞くように告げると桜花から朔弥の事を聞かれる。

朔弥の事を桜花以上の残念な奴と説明すると桜花が殺気を出し始め斬吼狼は慌てて桜花に謝り、話題を変える為に先程の隊員の話の切り出す。

桜花は隊員の言動を見て最終選別での嫌な記憶を思い出して機嫌が悪くなり助ける為とはいえ、八つ当たりで隊員を蹴り飛ばしていた。

斬吼狼はその隊員の影に潜んでいたが、名前を知らないと話すと桜花も名前を知らないと返し、冷めた目付きで知る必要も無いと呟いた。

炭治郎は禰豆子を抱えながら走っていた。

墨と対峙していた炭治郎、劣勢の中自らの死を予感した炭治郎は走馬灯のような光景の中から父が生きていた頃の記憶を思い出し、父から受け継いだ呼吸を用いて墨に迫りその頸に刃を斬りつけていた。

妹の禰豆子の血鬼術の助力も相まって墨の頸を跳ね飛ばすも、直前に自ら頸を刎ね九死に一生を得た墨。憤慨した墨の血鬼術で殺される寸前に義勇から助けられ、墨は義勇に頸を刎ねられ灰となりつつ消えていく。

炭治郎は墨の着物を踏みつける義勇に抗議していると背後からしのぶが現われ禰豆子を斬ろうと向かってくる。

咄嗟に義勇はしのぶの攻撃を捌き、禰豆子を庇うとしのぶから非難されるが、視線をしのぶに向けたまま炭治郎にこの場を離れるように告げる。

禰豆子を抱え必死に走る炭治郎、激しい戦いで疲弊している体を気持ちで支え少しでも遠くへと、禰豆子を守る為にと走っていた。

そんな炭治郎を追いかけようように木々を飛び移りながら迫る人影
炭治郎に追い付いたその人物は飛び降りながら炭治郎の背中へと
飛び移る

(しまった！何だ！走るのが精一杯で・・・禰豆子)

炭治郎を追っていた者に踏まれ転んだ炭治郎は禰豆子を探してい
ると

目の前に鬼殺隊の隊服を纏った隊員が現われ禰豆子へと斬りかか
ろうと刀を振りかざす。

炭治郎は咄嗟に隊服を掴みながら引つ張ると隊員は炭治郎の背中
で尻餅をつき、炭治郎はその隙に禰豆子を逃す為に必死に禰豆子に叫
び出す。

「逃げる禰豆子！逃げろ走るんだ！絶対捕まるな！」

「え？その声・・炭治郎？」

「え？・・もしかしてカナヲ？」

「うん・炭治郎どうして鬼を庇っているの？私達鬼殺隊は鬼を狩るの
が仕事。炭治郎どうして？」

「カナヲ違うんだ！いや違わなくはないけど、禰豆子は妹なんだ！

たった一人の家族なんだ！」

「炭治郎の妹？」

「禰豆子は誰一人として人を食べてない！カナヲ信じてくれ！」

「・・・人を食べない鬼・炭治郎の妹・・うん・私、炭治郎を信
じる」

「カナヲ！ありがとう！ありがとう！」

「鬼と仲良く・カナエ姉さんやしのぶ姉さんの夢だから、私もその夢
に託したから・炭治郎さつきはゴメンね？痛かった？」

「・・・痛い、物凄く痛い！ずっと痛いのを我慢してたんだ」

「あつ！私炭治郎の上に座ったまま、ゴメンね！すぐに退くから」

「カナヲ・鬼を庇う事は隊律違反だと言われたよ。俺、鬼殺隊辞めな
きゃいけないかもしれない」

「そう・兄さんならなんて言うのかな？」

「兄さん？そうだ！カナヲ！俺カナヲのお兄さんに会ったよ！煌牙さ

ん、焔牙さんが俺に言っただんだ！俺と禰豆子を認めてるって！鬼殺隊で困った事があれば力になるって言ってくれたんだ！」

「炭治郎、兄さんに会ったの？そっか・・兄さんも認めてるんだ・・

炭治郎私も力になるから・・兄さんと同じように私も炭治郎の力になるから」

「カナヲ・・ありがとう！本当にありがとう！」

「うん・・これで良かったんだよね？・・兄さん」

「むー？」

「禰豆子ちゃん・・さつきはゴメンね？私はもう禰豆子ちゃんを傷付けたりしないから」

「むー♪むー♪」

炭治郎とカナヲ、二人は互いを認識するとカナヲは炭治郎に何故鬼を庇うのか問いかける。

炭治郎はその鬼が妹である事、今まで誰も人を食べない事をカナヲに告げるとカナヲは少し考えて炭治郎の事を信じ、炭治郎に話しかける。

炭治郎はカナヲの言葉に涙を流しながら感謝の言葉を伝えるとカナヲは姉の夢とその夢に自身の気持ちも託したと呟き、炭治郎を踏みつけた事を謝り炭治郎の身を心配する。

炭治郎は戦いで満身創痕になりその体で無理をしていた為、全身に激痛が走っていたがずっと我慢をしていたのでカナヲに心配されると

本音を漏らし、カナヲは炭治郎の上に座ったままだったのを思い出して謝りながら炭治郎の上から降りて、炭治郎と向かい合う。

炭治郎は自身が隊律違反を犯し鬼殺隊にいられないかもとカナヲに告げるとカナヲは残念そうに一言漏らし兄の焔牙ならどうするかと呟くと炭治郎が焔牙に会った事、自分と禰豆子を認め力になると言ってくれたら事をカナヲに話す。

それを聞いたカナヲは、自分も兄と同じように炭治郎の力になると約束を交わし、焔牙の事を想い浮かべる。

炭治郎に逃げるように言われていた禰豆子は二人が仲良く話している光景を見て炭治郎の元へと戻り一声発するとカナヲが禰豆子に近付いて先程の事を謝り、禰豆子を傷付けないと約束して禰豆子も嬉しそうにご機嫌の声を漏らす。

そうしてうちに鎧鴉から伝令が届き炭治郎と禰豆子の二人を鬼殺隊本部へ連行するよう告げられ、隠によって炭治郎と禰豆子は鬼殺隊本部へと連れて行かれる。

「炭治郎この山にいたんだな、やっぱり禰豆子ちゃんの事ばれたか

まあ本部へ連れて行かれるから向こうで何とかしますかね！

とりあえず隠もいるし桜花探して戻るとしますか、結局十二鬼月も見つからなかったし・・多分富岡さんが斬ったんだらうけど」

煌牙は一人呟きながら山の中を歩き回り桜花を探す。

「煌牙~~~~~♪」

「よっ！無事だったみた痛っ！」

暫く歩いていると桜花が走りながら煌牙へと向かっていて煌牙は安心して声をかけようとするが桜花が煌牙へと飛びつき煌牙は最後まで喋る事が出来ず、痛いとだけ漏らす。

桜花はそのまま煌牙を抱き締め頭を煌牙へと擦り付けながら幸せそうな表情を浮かべ煌牙へと話しかける。

「煌牙~~~~一人で寂しかったよ~~~~。斬吼狼って魔戒騎士に会った時凄く怖かったんだから~~~~味方だったけど~~~~」

「斬吼狼に会ったのか？そっか・・とりあえず無事で良かったよ

桜花。俺たちも戻るとするか」

「うん、早く帰ろ~~~~この山凄く臭いもん！腐敗の呼吸なら平気なんだけどね〜」

「お前まだ引つ張るのかよ、そもそもそんな呼吸存在しないからな」

「え~~~~？案外いるかもしれないよ~~~~？例えばサイコロステーキ先輩とか？」

「誰だよそれ！」

「さあ？私にも分かんない♪」

煌牙と桜花はふざけた会話をしながら那田蜘蛛山を下山する。

そして煌牙は炭治郎禰豆子の裁判が行われる鬼殺隊本部へと向かう事になる。

「今回は手柄を立てられなかったが、次は手柄を立てて出世してやるからな！もちろん安全にな」

とある隊員が誰もいない場所で一人勝手に語り出す。

そんな彼の名を知る者は誰もいなかった。

「よく来てくれたね、こうして話が出来る事を嬉しく思うよ」

「ご無沙汰してますお館様、元氣そうで何よりです」

「ありがとう煌牙、柱合会議の前に呼び出してしまつて悪かつたね」

「いえ、お氣遣いなく」

「会議の前に煌牙に聞いておきたい事があつてね、良かったら話してくれるかい？」

「お館様の頼みとなれば、それでどのような事を」

「御影 総悟、かつての黄金騎士暁大牙と肩を並べた魔戒騎士。そして鬼殺隊の現在の根幹を成した魔戒法師 朔弥。今も生きてるようだね」

「お館様はお見通しつてわけか」

「煌牙に接触するまでは私にもわからなかつたよ」

「それでお館様聞きたい事とは？」

「彼等は鬼無辻に関する情報を持っている、煌牙にも伝えられてると思つてね」

「申し訳ありませんお館様、鬼無辻に関する情報は何も伝えられてなくて……ただ浅草で鬼無辻に殺害された者の遺留品から少しだけ声が聞こえました」

「些細なことでも構わない教えてくれるかい？」

「奴は自らを完璧に近い生物だと、傲慢で冷酷な性格をしています」

「教えてくれてありがとう」

「……お館様……炭治郎と禰豆子ちゃんをどうするつもりですか？」

「煌牙はどうしたいのかな？」

「俺はあの二人を認めています。隊律違反に当たる事は承知していますが禰豆子ちゃんの心には守るに値する光があり俺はあの二人の味方として裁判に出席します……まあ俺も既に隊律違反犯しているから偉そうな事言えませんが」

「それが煌牙の意志なんだね？」

「はい！あの二人を信じていますから」

半年に一度柱達を招集して鬼殺隊の方針や現状の報告などを話し合う柱合会議、鬼殺隊現当主 産屋敷耀哉は柱合会議に集まる柱達よりも一足先に煌牙を呼び出し煌牙の知り得る情報を聞き出そうとしていた。

鬼を引き連れた鬼殺隊員 竈門炭治郎、鬼を庇う行為は鬼殺隊の隊律違反に当たり炭治郎は裁判にかけられ産屋敷邸へと運び込まれていた。

知り得る情報を話した煌牙は裁判にかけられる炭治郎、鬼である少女禰豆子の処遇を耀哉がどうするのか気になり耀哉に聞いてみるも逆に質問で返され煌牙は自らの意志を耀哉へと話し、炭治郎と禰豆子を信じている事を耀哉に伝えた。

煌牙は珠世・愈史郎、朔弥・斬吼狼と接触し頸を斬らないどころか報告すらせずあまつさえ協力関係にある為、自身も隊律違反を犯している自覚があり心の中である覚悟を決め裁判へと臨もうとしていた。

「起きろ・・・おい起きるんだ！起き・・・おい！おいコラ！やいテメー！やい！何時まで寝てんだ！さっさと起きねえか！」

「・・・!!？」

裁判にかけられ産屋敷邸へ運び込まれた炭治郎、庭先で隠の1人である後藤の呼びかけにより目を見開くように目を醒ます炭治郎。

炭治郎の眼前に立ち並ぶ六名の鬼殺隊員、鬼殺隊の中で最も階級の高い柱、その柱達が炭治郎へと視線を向けていた。

「なんだあ？鬼を連れた鬼殺隊員一つーから派手な奴を期待したんだが地味な野郎だなオイ」

「・・・」 ジャラジャラ

「うむーこれからこの少年の裁判を行なうと・・・なるほど!!？」

（鬼になった妹をずっと庇っていたなんて、素敵な兄妹愛、健気だわ）

目を覚ました炭治郎に目を向けた柱達、音柱 宇髄 天元・岩柱

悲鳴嶼 行冥・炎柱 煉獄 杏寿郎・霞柱 時透 無一郎・恋柱 甘

露寺 蜜璃

五人の柱達は各々に喋る者、手を合わせ拜む者、無言な者、心内で思う者とそれぞれいたが、炭治郎は柱達を見て口を開き始める。

「なんだこの人」

「また口を挟むな馬鹿野郎！誰の前にいると思ってるんだ！柱の前だぞ」

（柱？柱ってなんだ？何の事だ？この人達は誰なんだ？・・・ここは何処だ？）

「ここは鬼殺隊の本部です、貴方は今から裁判を受けるのですよ竈門炭治郎君」

鬼殺隊に入隊して月日の浅い炭治郎が目の前にいる者達を分かるはずもなく、口を開いた炭治郎だったが後藤が即座に炭治郎の頭を押さえ

炭治郎に目の前の者達が柱だと告げるのだが、柱の意味を理解出来ずにいた炭治郎は目の前の柱達が何者なのか？いる場所が何処なのか？と思考を巡らせる。

そんな炭治郎にしのぶがいる場所が鬼殺隊本部だという事、炭治郎がこれから裁判を受けるという処遇を炭治郎へと伝え出した。

「裁判を始める前に君が犯した罪の説明をして『裁判の必要などないだろう！』・・・え？」

「鬼を庇うなど明らかな隊律違反！我等のみで対処可能！鬼諸共斬首するー！」

「ならば俺が派手に首を斬ってやろう、誰よりも派手な血飛沫を見せてやるぜ、もう派手派手だ」

（えー！こんな可愛い子を殺してしまうなんて、胸が痛むわ苦しいわ）
「あー何というみすぼらしい子供だ可哀想に、産まれてきた事自体が可哀想だ」

（何だっけ？あの雲の形、なんていうんだっけ？）

しのぶが炭治郎に説明を始めていると炎柱 煉獄 杏寿郎が遮る形で

口を開き裁判の必要はなく、鬼を庇う事は隊律違反でありこの場に

いる者達で対処出来る事から、炭治郎と禰豆子の首を斬ると話し出すと

続けるように音柱 宇髄 天元が派手に首を斬ると喋り出す。

炭治郎が殺される事に胸を痛め同情の眼差しを浮かべる恋柱 甘露寺

蜜璃と違う意味で同情の涙を流す岩柱 悲鳴嶼 行冥、炭治郎に興味がないのか空を見上げ雲の形を思い出そうとする霞柱 時透 無一郎

そんな柱達を前に炭治郎は禰豆子を探すべく周りに視線を移しているると後藤から注意を受ける。

「お前・柱が話をしているのに何処を見ている。このお方達は鬼殺隊の中でも最も位の高い十名の剣士だぞ」

「・・・柱」

後藤から柱の意味を聞かされた炭治郎、その意味を理解したのか恐縮した面持ちで柱達を見ていた炭治郎に向けて裁判を待つ気がないのか

行冥・杏寿郎・天元の三人が炭治郎を裁こうとする発言をしだした。

「殺してやろう」

「うむー！」

「そうだな、派手にな」

柱三名からそのような事を言われた炭治郎は動揺しながら妹の禰豆子やこれまでの任務で一緒に行動した仲間の隊員を探そうと必死に呼びかけながら辺りを見渡す。

「禰豆子、禰豆子何処だ？禰豆子！善逸、伊之助、村田さん！」

必死に叫ぶ炭治郎など気にしないのか、木の枝に寝そべりながら炭治郎と同じように隊律違反を犯した水柱 富岡 義勇の処遇を指摘しだす蛇柱 伊黒 小芭内はネチネチと話し始めた。

「そんな事より富岡はどうするのかね？拘束もしてない様に俺は頭痛がしてくるんだが。胡蝶めの話によると隊律違反は富岡も同じだろ？」

どう処分する？どう責任を取らせる？どんな目に遭わせてやろう

か？

何とか言つたらどうだ富岡」

少し離れた場所に一人佇む義勇へと指を差しながら義勇へと話しかける伊黒、炭治郎もまた義勇へと振り返り自身の事で義勇に迷惑をかけたと考えていた。

「俺の所為で富岡さんまで」

(伊黒さん相変わらずネチネチして蛇みたい、しつこくて素敵♪)

(富岡さん離れたところに独りぼっち可愛い♪)

殺伐とした雰囲気の中、伊黒・義勇へと好感度を上げ一人場違いな考えに及んでいた蜜璃、そんな中しのぶが伊黒の発言にたいし返事を返していた。

「まあいいじゃないですか大人しくついてきてくれましたし、処罰は後で考えましょう。それよりも私は坊やの方から話を聞きたいですよ？坊やが鬼殺隊員の身でありながら鬼を連れて任務に当たっている

その事について当人から説明を聞きたい。もちろんこの事は鬼殺隊の隊律違反にあたります。その事は知っていますよね？」

しのぶから隊律違反について問われ口籠り何も返せないでいた炭治郎にしのぶは更に質問を投げかける。

「竈門炭治郎君、何故鬼殺隊員でありながら鬼を連れているのですか？」

「聞くまでもねえ」

「ゆつくりで大丈夫ですから話してください」

天元は質問は無意味とばかりに日輪刀に手をかけるが、しのぶは炭治郎の目の前で屈み込んで話しかけ炭治郎からの説明を聞こうとしていた。

「鬼は俺の妹なんです。俺が家を留守にしてる時に襲われ帰ったら皆死んでいて・・・妹は鬼になったけど人を喰った事ないんです。今までもこれからも！人を傷付ける事は絶対にしません！」

しのぶからの問いかけに炭治郎は鬼になった経緯や禰豆子が今ま

で人を襲ってない事、これからも人を襲わないと必死に語りだす。

「くだらない妄言を吐き散らすな、そもそも身内なら庇って当たり前
言うこと全て信用出来ない、俺は信用しない」

「ああ、鬼に取り憑かれているのだ。早くこの哀れな子供を殺して解
き放ってあげよう」

「聞いて下さい！俺は禰豆子を治す為に剣士になったんです。禰豆子
が鬼になったのは二年以上前の事で、その間禰豆子は人を喰ったりし
てない！」

「話が地味にグルグル回ってるぞ阿保が、人を喰わない事これからも
喰わない事口先だけじゃなくド派手に証明してみせろ」

炭治郎の説明を信用しない伊黒や鬼に取り憑かれ炭治郎を解放し
ようとする行冥、炭治郎は自らの思いを必死に語りだすも天元から口
先よりも証明しろと指摘を受ける。

炭治郎や隊律違反に興味を示す気配のない無一郎、空を見上げ鳥を
見ている横で蜜璃から今回の裁判について疑問を投げかける。

「あのくくでも疑問があるんですけど、お館様がこの事を把握してな
いとは思えないです」

「勝手に処分しちゃって良いんでしょうか？」

炭治郎を処分しようと考えていた杏寿郎・天元の二人は耀哉が把握
している事を考えると判断を仰がずに処分するのは早計すぎるのか

蜜璃からの問いかけに反対を出せずにいた。

「いらっしやるまでとりあえず待ったほうが」

「妹は、妹は俺と一緒に戦えます！鬼殺隊として人を守る為に戦える
んです！だから」

蜜璃が耀哉が来るまで待つように提案をしていると禰豆子を守る
為に必死の思いを柱達に伝えようとしていた。

「おいおい、なんだか面白れえ事になってるなあ。鬼を連れた馬鹿隊
員ってのはそいつかい？」

「そうだけどき、俺も馬鹿隊員って言われてるのと同じなんだけど：
否定はしないけども」

「テメーは馬鹿じゃねえ大馬鹿だあ！」

「ですよー」

炭治郎が叫んでいる最中、最後の柱である風柱 不死川 実弥・牙柱の四ノ宮 焔牙が現れ、実弥は炭治郎へと視線を向けながら焔牙を問いただす。

焔牙は目の前の炭治郎が鬼を連れた隊員である事を肯定するも馬鹿呼ばわりされた事で焔牙自身も否定こそしないものの同類だと実弥に言い返したのだが、実弥から焔牙は馬鹿ではなく大馬鹿だと言われた焔牙は遠い目をしながら実弥の言葉を受け入れた。

耀哉との対話が終わった後、禰豆子が匿われている場所に行こうとした焔牙、その途中で実弥と鉢合わせになり焔牙は今回の裁判の前に炭治郎達と邂逅し二人を認めて黙認していた事を実弥へと伝え、実弥はその事実には激昂するも柱の中でも信頼し一目置いている焔牙の覚悟と

焔牙から聞かされた禰豆子の想いを知ると、悪態をつきながらも禰豆子への嫌悪感を軟化させ、実弥は禰豆子を背負わせた焔牙を引き連れて柱達の元へと歩き出した。

「皆久しぶり！しのぶとはそうでもないか・あと富岡さんも」

「焔牙さん!?!?」

「よっ！炭治郎、また会えたな」

柱達の前に現れた焔牙は柱達に一言挨拶をすると炭治郎が驚きながら焔牙の名を口にするると焔牙は炭治郎に軽く一声かけて炭治郎の横に立つ。

（不死川さんまた傷が増えて素敵だわ）

（焔牙君黒い羽織が似合ってるわ、渋くて素敵）

「困ります四ノ宮様、どうか箱を降ろして下さいませ」

最後に現れた実弥と焔牙、二人を見て蜜璃は胸をキュンキュンさせていたが隠の一人が現れ焔牙に背負っている箱を降ろすよう困惑しながらも伝えると炭治郎の前に屈んでいたしのぶが立ち上がり焔牙を睨みつける。

（しのぶちゃん怒ってるみたい、焔牙君へなら珍しくないけどカツコイイわ）

「焔牙さん勝手な事はしないで下さい」

「お館様の判断も無しで処分されちゃ裁判の意味ないからな、手出し出来ないよう預からせてもらおうよ。炭治郎悪いな」

「あ、いや・・・ありがとうございます焔牙さん」

禰豆子が収まっている箱を勝手に背負っている焔牙にしのは怒りを堪えるかのように静かに淡々と注意をするも、焔牙は柱達に威嚇するような口調でしのぶへと言い返し、炭治郎に禰豆子を預かっている事を一言詫び、炭治郎も焔牙なら大丈夫だと安心した表情で頷く。

「焔牙、鬼を庇うとは随分と派手だな」

「うむー」

「四ノ宮までも鬼に取り憑かれるとは、早くその鬼を殺して解放してやろう」

「柱が二人も鬼を庇う事実には俺は目眩を起こしそうなんだが、意味がわからない理解出来ない説明しろ」

「・・・」

(焔牙君、鬼を庇ってる？優しくて素敵だわ)

(四ノ宮お前も気付いていたのか)

「焔牙さん」

「つたく、馬鹿焔牙が！」

鬼である禰豆子を庇おうとする焔牙に天元・杏寿郎・行冥・伊黒・無一郎・蜜璃・義勇・しのぶ・実弥の柱の面々が口々に話し出すも

焔牙は表情を変える事なく柱達に向かい自身の想いと覚悟を話し出した。

「鬼殺隊は鬼を狩る組織、それは俺も理解してるし人を襲う鬼は今まで通り容赦なく殺すさ。だがな！俺は今まで鬼だという理由だけで刃を向けた事はないよ、俺が思う鬼は見た目じゃない！心だ！俺は禰豆子ちゃんに触れてこの子の心の声を聞いた、家族を大切に想い守ろうとするこの子が俺達と何が違う？人だったら人を殺さないのか？違うだろ！少なくとも俺の親は違った・・俺も妹も・・いや、弟や妹達は親に殺された！俺から見たら親の方が鬼だよ・・鬼に家族を殺された、鬼が許せないそれが理由で鬼殺隊として鬼を狩る。それもい

いさ

それが生きる為の糧になり戦う為の信念ならさ、俺もそうだ！家族を

大切な人達を失いたくない、だから守る為に戦っている。その中には禰豆子ちゃんのような心を持つ鬼も含まれている。禰豆子ちゃんには守るに値する光がある！それが俺の悪鬼滅殺、守りし者としての信念だ！」

「それに炭治郎が隊律違反なのは知ってるし、それを黙認したのは柱である俺だ！炭治郎の罪は俺の罪でもある、罰を受けるのなら俺が受けるよ」

「焠牙・さん」

禰豆子をも守ると柱達に向かい宣言した焠牙の言葉、自らの罪も背負う焠牙の覚悟を目の当たりした炭治郎の目には自然と涙が溢れ頬を伝いながら地面を濡らしていた。

「派手に言いやがる。そこの小僧より柱であるお前が言う方が説得力があるな」

「だがどうする？その鬼が絶対に襲わない保証はない隊律違反を犯してるのは事実だどう処分する？そもそも俺は信じない」

「蛇柱テメーは黙ってる！」

「不死川、鬼を憎むお前が何故四ノ宮の肩を持つ？あの鬼を認めたくはじゃないだろう？」

「あ？俺が鬼を認めることなんざありえねえ！だがな！あの馬鹿がテメーの命を賭けてあいつ等の事信じてんだ！他の奴等が命賭けようが保証にはならねえが焠牙が命賭けてんなら話は別だ！」

「おい坊主!!？焠牙はな、テメー等を信じて命賭けてんだ！俺はお前等を認める気はねえが他の連中を認めさせたいなら死ぬ気で証明しろ！」

その鬼が人を襲わない、鬼殺隊として戦えるって事をな！テメー等を信じた焠牙を裏切るような真似したら俺がお前等を殺す！いいな!!？」

炭治郎の言葉より柱である焠牙の言葉は説得力があると頷くと口

を挟むように伊黒が否定的な意見を述べ焠牙の隊律違反を指摘する。

その伊黒にたいし睨みつけながら怒鳴る実弥、鬼を憎み鬼を狩る事に執念する実弥が鬼を庇う焠牙の肩を持つ事に不可解な伊黒はその疑問をぶつけるも実弥は他の誰でもない焠牙が命を賭けて炭治郎・禰豆子を信じてる事を伊黒に話すと炭治郎に怒鳴りつけ禰豆子が人を襲わない証明を約束させて炭治郎を睨みつける。

「必ず！俺は必ず証明してみせます！禰豆子が人の為に戦える事を！」

禰豆子を人間に戻す為、俺達を信じてくれた焠牙さんの為にも必ず！」

実弥からの脅迫にも近い約束に炭治郎は臆する事なく証明する事を宣言し焠牙に振り向くと頭を下げて感謝の意を示した。

「不死川さんありがとな」

「テメーは鬼殺隊の筆頭戦力だからな、つまんねー理由で死ぬんじやねえぞ！」

「うむ！俺も四ノ宮に負けないよう精進せねばなるまい」

「あー金色に輝く眩い光、仏の如し」

「ド派手だなありゃ」

「うん、僕もあの狼は忘れてないよ」

焠牙の意を汲んだ実弥に笑いかけながら礼を言う焠牙に呆れた眼差しで返事を返す実弥、続けざまに杏寿郎・行冥・天元・無一郎も焠牙や牙狼について話し出した。

「お館様様の御成りです」

柱達が話している最中屋敷から声が聞こえ柱達は即座に並び跪くと

突然の出来事に炭治郎が焠牙に理解を求めるよう振り向くが焠牙によって跪かされ小声で話しかけられる。

「炭治郎、お館様がお見えになる時はこうするんだ」

「はっ」

炭治郎を含め全員が跪いている中、屋敷から童女二人を伴った現鬼殺隊当主 産屋敷耀哉が現れ柱達の前に姿を見せる。

「おはよう皆んな、今日はとてもいい天気だね。顔触れが変わらずに

半年に一度の柱合会議を迎えられた事嬉しく思うよ」

(怪我？病気の痕？この人がお館様)

柱達の面々に挨拶を交わす耀哉、炭治郎は心の中で怪我もしくは病気の痕が残っていると考えながら耀哉を見ていた。

「お館様におかれましてもご壮健で何よりです。ますますの御多幸を切にお祈り申しあげます」

「ありがとうございます」

(私が言いたかった、お館様に御挨拶)

(早いもん勝ちだからなお館様への挨拶は、俺一足先に挨拶したしもう一度言うのもアレだしな)

耀哉に一番最初に口を開いた実弥、丁寧な言葉使いで挨拶を述べる

挨拶を言いたかった蜜璃が少し落ち込む表情になり、傍らで煌牙は挨拶は早いもん勝ちで一足先に耀哉と話していた為、二度も挨拶を述べるのも変だと考えていた。

「恐れながら柱合会議の前にこの竈門炭治郎なる鬼を連れた隊士について御説明いただきたく存じますがよろしいでしょうか？」

(ちよー炭治郎その顔！驚きすぎだろ？不死川さん知性も理性もなさそうなのに凄くキチンと喋り出したって思ってるだろ？流石に失礼だからな、口は悪いし荒っぽいけどホントは優しいんだからな、不器用なだけなんだからな)

元々炭治郎や禰豆子については煌牙から話を聞かされていた実弥だったが当主である耀哉からの説明と判断を聞きたい実弥は丁寧な言葉で

耀哉へと質問すると、見た目に反して丁寧な言葉を使う実弥に驚きを隠せない炭治郎、それを見た煌牙は心の中で炭治郎を諷めつつ不死川を擁護していた。

「そうだね、驚かせてすまなかった。炭治郎禰豆子は私が容認していた、今回は皆んなにも認めてもらいたくてね」

「たとえばお館様の願いでも私は理解しかねる」

「信じない信じないそもそも鬼は大嫌いだ、認める訳にはいかない」

「私は全てお館様の望むままに従います」

「俺も派手に反対だ！と言いたいが焠牙の野郎が派手にやったんだ

鬼じゃなく焠牙なら信じてやるさ派手にな」

「僕も焠牙さんが認めてるならそれで」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「四ノ宮の熱い想いが無かったらたとえ心より尊敬するお館様だとしても全力で反対していた！四ノ宮を信じよう！」

「鬼を滅殺してこそその鬼殺隊、俺は認めるつもりはありませんが焠牙が信じてる以上否定はしません」

炭治郎と禰豆子、二人を容認し柱達に認めてほしい耀哉の願いに否定的な行冥・伊黒に対し懐疑的ながらも焠牙ならと二人を容認する柱が半数を超えていた。

「反対意見が多いと思つてたけどこれは予想外だったね。焠牙のおかげかな？手紙を預かつてたけど・・・いや読もうか」

「これは元水柱である鱗滝左近次から預かったものです、一部抜粋して読み上げます」

――炭治郎が鬼の妹と共にある事をどうかお許し下さい。

禰豆子は強靱な精神力で人としての理性を保っています。

飢餓状態であっても人を喰わずそのまま二年以上の歳月が経過しました。

俄かには信じ難い状況ですが紛れもない事実です。

もしも禰豆子が人に襲い掛かった場合は竈門炭治郎及び

鱗滝左近次富岡義勇が腹を切つてお詫び致します――

鬼殺の要である柱ならば当然反対意見もあり、寧ろ半数以上が否定するだろうと考えていた耀哉だったが焠牙の主張も手伝つて予想外の結果となり、預かつていた手紙を読もうか悩んでいたが折角だからと

読みあげる事にした耀哉、その手紙の内容を聞いた炭治郎は自分と禰豆子二人の為に鱗滝と義勇が命を賭けてくれている事実に涙を流

していた。

「お館様、俺も『煌牙の言いたい事は理解しているよ、実はもう一つ手紙があるんだ読んでもいいかな?』あ、はいお願いします」

「では読み上げます。これは元牙柱であり現四ノ宮家当主である四ノ宮花蓮様より預かったものです」

「師匠!?」

「はい、全文読むようにと記されておりませぬ。読み上げても?」

「え?あ!どうぞ」

——現牙柱である四ノ宮煌牙が鬼を連れた隊士と鬼の少女兩名を黙認した事実、柱という上に立つ立場でありながら隊律違反を犯した事を師であり母でもある私四ノ宮花蓮がお詫び致します。

息子は鬼殺隊としては間違った選択だったのかもしれませんが、さすが黄金騎士牙狼の称号を受け継ぐ者として、守りし者として息子のとった選択を私は誇りに思っております。

息子が信じた少女禰豆子が仮に人に牙を剥いた場合、四ノ宮煌牙及び

四ノ宮花蓮胡蝶しのぶ栗花落カナヲが共にお詫び致します——

追伸 息子が命を賭けて信じてるのなら母である私も命を賭けて信じています。煌牙これからはちゃんとお母さんと呼んでね♪

「・・・え!??ちよつと待て!師匠もただけどなんでのぶも?カナヲまで」

「煌牙さん私の夢はご存知ですよね?」

「それは知ってるけどさ」

「カナヲが言ってたんですよ?竈門君達を助けてほしいって、あの子竈門君達を信じてるんです。煌牙さん貴方が二人を信じて力になるって言ったからあの子も貴方と同じように力になると」

「カナヲ」

「カナヲは私の夢に想いを託してくれました、花蓮さんもです。」

カナヲが二人を信じてるのなら私も二人を信じてみようと思ったんですが竈門君の事知りたくなりまして、つい質問しちゃいました。

この事は那田蜘蛛山から降りた際に花蓮さんに手紙を送りましたから」

「俺聞いてないけど」

「ええ、今言いましたから。一言相談して欲しかったですか？だったら竈門君達の事相談してくれても良かったんじゃないですか？相談してくれてたら那田蜘蛛山で富岡さんに首絞められそうにならずに済んだんです。可笑しいですよ？何故正当な任務に当たっているのに首を絞められないといけないんでしょうか？煌牙さんそう思いませんか？だいたい煌牙さんは大事な事を話してくれませんからね、言葉足らずを通り越してますからね。富岡さん以上に分かりませんよ。あーでも不死川さんには話してるんですよ？不死川さんには話せても私には話せませんそういう事ですか？不死川さんどう思いますか？私嫌われてるのでしょうか？」

「おい煌牙、お前の嫁が派手に暴走してるぞ何とかしろよ」

「宇髄さん嫁って何ですか？私がいづ煌牙さんの嫁になったのでしょうか？いえ別に嫌という訳ではありませんよ、何も言わない唐変木が見事に何も言いませんからね。やはり嫌われてるのでしょうか？」

「おい煌牙！このままじゃ皆んな巻き込まれるぞ！責任持って何とかしろ」

「わかってるよ・・・しのぶ！相談しなくてゴメンな！それと別にしのぶの事嫌ってないからさ、寧ろ好きだぞ、同期だしな」

「・・・不死川さん、馬鹿煌牙って言い得て妙ですね」

「あいつは大馬鹿だ！」

「そうですね。まあいいですよ、煌牙さんとりあえずそうゆうわけですから」

「わかったよ、相談しなかった俺も悪いしカナヲが自分の意志で決めたんなら俺からは何も言えないな」

「煌牙さん俺のせいで、すいませんでした」

「いや炭治郎のせいじゃないからな、俺達が炭治郎と禰豆子ちゃんを信じてるから命賭けたんだ。謝る必要はないし、これから証明していけばいいよ」

「はっ」

読みあげられた手紙の内容に驚く焔牙、しのぶが焔牙に説明をしようとして話しているが焔牙が炭治郎達について何の相談もしなかった事に怒っていたしのぶは愚痴を零し始めて実弥までも巻き込もうとする。

柱達はしのぶの焔牙への反応はいつもの事だと静観するつもりだったがお館様の前という事もあり天元が焔牙にしのぶを落ち着かせるように言うと言元にも食いついてきたしのぶ、巻き込まれたくない実弥は焔牙にしのぶを落ち着かせるよう若干引いた顔で言っていた。

焔牙はしのぶを落ち着かせようと相談しなかった事を謝り、嫌ってないと話すもしのぶは焔牙の鈍感さに呆れ実弥に愚痴を零し実弥もまた焔牙の鈍感さに呆れていた。

しのぶは呆れながら焔牙にさうゆうわけと簡単に話を切り終え相談しなかった事もあり自分の意志で炭治郎を庇うと決めたカナヲの行動に何も言えない焔牙は仕方ないと受け入れ、カナヲまでも巻き込み大きな事態になった事を兄である焔牙に謝る炭治郎に焔牙は炭治郎の頭を撫でながら謝る必要はないと優しく説きこれから証明すればいいと告げる。

「四ノ宮、どう証明する気だ？そもそも証明など出来るはずがない

俺は認めない」

「さうだねこの先も人を襲わない確かに証明は簡単にはいかないかもしれないね、だが人を襲うという事もまた同じだよ。二人の為にこれ程の命が賭けられている、否定するのならそれに見合うものを差し出さねばならない」

「・・・ったく、俺が証明してみせますよお館様。焔牙付いて来い」

容認に否定的な伊黒、禰豆子が人を襲わない証明は出来ないと言っても

耀哉はどちらも証明は難しいが炭治郎と禰豆子の為に命が賭けられているのだから否定するにはそれに見合うものを差し出さねばならないと告げると実弥が証明すると話し焔牙を連れて屋敷の中へと入

ろうとする。

「お館様失礼つかまつる」

「えっ!??あの人を?」

「なるほどね、炭治郎安心しろ不死川さんはああ見えて優しいんだ。

本人は認めないと言ってるけど・まあそうなんだけどさ、禰豆子ちゃんが人を襲わないその証明をしようと手を貸してくれるんだ。

炭治郎不死川さんを信じてくれないか?」

「・・・わかりました焔牙さんが言うのなら」

「焔牙!ぼけつとしてんじゃねえ!」

「はいはい今行きますよ、お館様お邪魔しますね」

耀哉へと一言告げると即座に屋敷へと上がり込む実弥、咄嗟の出来事に炭治郎は狼狽えるも焔牙から諭され実弥を信じる事にした炭治郎

実弥から急かされた焔牙は軽く返事をした後耀哉に一言告げると

屋敷の中へと上がり込む。

「先に言つとくけど禰豆子ちゃんに手荒な真似は駄目だからな不死川さん」

「んな事すると思ってるのか?その為にテメーも呼んだんだろうが」

「いや不死川さんならやりかねない」

「テメー」

「はいはい、落ち着いて落ち着いて。ほら桜花の特製おはぎあげるからさ」

「テメーどこに忍ばせてんだ!渡すにしろ時と場所を考えろ!・まあ貰つといてやるよ」

「素直じゃないな」

「いいからさっさと始めるぞ」

「わかったよ、うし!箱開けるからな・禰豆子ちゃんゴメンなちよつと出てきてくれるかな?」

屋敷に上がり込んだ焔牙は背負っていた箱を降ろし実弥に手荒な真似はしないように忠告すると実弥はその為に焔牙を呼んだと返すも焔牙は実弥ならやりかねないと反論する。

実弥は焠牙を睨み付けるが焠牙は軽くあしらうように懐から桜花が作ったおはぎを差し出し実弥へと渡す。

魔法衣の内側が別の空間に繋がっている事を知っている実弥だったが

まさかおはぎを忍ばせてるとは思わなかった実弥は声を荒げて突っ込むも好物であるおはぎを受け取ると満面の笑みで素直じゃないと焠牙から言われ話を逸らす為に当初の予定である禰豆子の証明へと動き出す。

焠牙は箱の解錠をすると蓋を開け中にいる禰豆子へと呼びかけると

禰豆子がヒョコつと顔を出し辺りをキョロキョロしていると目の前の焠牙を見つけ嬉しそうに飛び出してくる。

「む〜♪」

「うんうん、元気が良いなく。不死川さんほらチビ禰豆子ちゃんだよ」

「あ？知るかボケ、さっさとその鬼を引き離せ」

「え〜」

「え〜〜じゃねえよ！」

焠牙に寄り添いご機嫌な禰豆子を実弥に紹介する焠牙、実弥は自身の日輪刀を引き抜きながら禰豆子を引き離すように焠牙に言うが、焠牙はこのままでも良いんじゃないか？と思っていたので子供みたく不満の声をあげると実弥から突っ込みを入れられる。

「あつ！不死川さん、畳に何か敷かないと！そのままやるのは失礼すぎる」

「焠牙私は構わないよ、実弥も遠慮はいらないよ」

「いや構いましょうよ？」

「ーズバツ

「あー！このスケベ柱やりやがった」

実弥は自身の血をもつて証明しようとかざした日輪刀を腕に当て、傷を作ろうとするそのままじゃ畳が汚れるからと焠牙が懐から何か敷くものを探していたが耀哉は気にしない素振りを見せ、焠牙はつい耀哉にも突っ込みを入れてしまう。

その隙に実弥は自身の腕に切り傷を入れ滴り落ちた血が畳を汚し、普段桜花を諫め絶対に言わないかなり失礼な呼び方で煌牙は叫んでしまう。

煌牙のかなり失礼な呼び方に実弥を除く全員が目を丸くし「えっ?」

とでも言いたげな表情をして煌牙を見ていた。

「桜花さんならともかく・・・あの馬鹿煌牙」

煌牙の失礼な発言にしのは溜め息をつきながら額に手を当て呆れ果てていた。

「おい煌牙!今のはどういう意味だあ!後でお前を叩き斬ってやるから覚悟しとけえ!」

「まあまあ、さつきつまんねー理由で死ぬなって言ってくれたじゃん俺嬉しかったんだぞ?あれ嘘だったの?」

「ぐっ・・・調子の狂う野郎だなあテーマは」

煌牙の失礼な発言にキレやすい実弥は当然キレて、煌牙を叩き斬ると言うも実弥は本当に斬るつもりはなく一発殴る程度に考えていたが

煌牙に言われた言葉で勢いをなくし文句を言いながら血が滴り落ちる腕を禰豆子へと近づける。

「?..む..」

実弥から流れる血を見た禰豆子は実弥を凝視し息を荒げていく

鬼としての本能に抗っているのか小さな体を震わせ必死に我慢している様子を見た煌牙は禰豆子の頭を撫でながら禰豆子へと語りかける。

「禰豆子ちゃんゴメンな、俺達の都合で辛い思いをさせて。俺達は禰豆子ちゃんを信じてる、勝手だよな?勝手に期待を背負わされて辛い思いをさせて・・・でもみんな禰豆子ちゃんを守りたいんだ、禰豆子ちゃんが家族を守るように俺達も禰豆子ちゃんを守りたい。一緒に守ろう大切な人達を」

煌牙の言葉が届いたのか実弥を凝視していた禰豆子が煌牙へと振り向きコクンと頷くと実弥へと近づいていく禰豆子。

「あ？俺を喰おうって事かあ？所詮鬼は・・・どういっつもりだあ？」
自身に近づいてくる禰豆子を見て実弥は鬼が本能に従い食らいつくと思っていたが禰豆子の意外な行動に戸惑いを見せ禰豆子を凝視する。

「ははは、禰豆子ちゃん凄いわ！ほら不死川さん禰豆子ちゃんが握手求めてるんだから応えてやらないと」

「おい煌牙、これはどういう事だ！」

「ん？禰豆子ちゃんも人の為に鬼殺隊として戦えるって、一緒に戦おうって意味だと思うよ」

「鬼が鬼殺隊として戦える？そんな事は・・・ありえねえ・・・」

「その有り得ない現実が目の前で起きている、認めるしかないんじゃないかな？不死川さん」

「・・・クソが！煌牙テメーが絡むといつも碌な事が起きねえ！

・・・とりあえず認めてやるよ、だがな信用したわけじゃねえからな

その事を忘れんな」

「碌な事が起きないのは桜花のせいだろ？俺は無実だし！ほらほら握手しないと締まらないよ」

「あいつはおはぎでチャラだ！ほらよ、これで良いんだよな？」

「むくく」

実弥から流れる血に目もくれず握手を求める禰豆子、煌牙は禰豆子の行動に感嘆し笑いながら実弥に握手に応えるように言うと、禰豆子の行動の意味を理解出来ない実弥がその意味を煌牙に求める。

禰豆子が人の為に鬼殺隊として戦える、共に戦う意思を実弥に見せていると説明する煌牙だったが本来鬼に対し否定的な実弥には受け入れ難い現実であり渋っていたが目の前の光景が現実だと煌牙に諭され

煌牙に悪態をつきながら仕方なく禰豆子を認めるが、信用したわけではないと付け加える。

悪態をつかれた煌牙はその原因は桜花であり自分じゃないと言うも

桜花の作るおはぎが好きな実弥は桜花に対する評価が甘くおはぎでチャラだと言いながら、禰豆子の握手に応じその手を握り返す。

握手に応じてくれた実弥にご機嫌な禰豆子は焔牙の元へと駆け寄り頭を撫でてくれと言わんばかりの仕草を見せ焔牙もそれに応じる。

「炭治郎も上がって来いよ、禰豆子ちゃん待ってるぞ」

「炭治郎、構わないよ行っておやり」

「はい！ありがとうございます」

焔牙・実弥、禰豆子の様子を心配そうに見ていた炭治郎、禰豆子と実弥が握手を交わした際にこれ以上にならない安堵の表情をした炭治郎を見た焔牙は炭治郎を呼び耀哉も炭治郎へ許可を出すと嬉しそうに返事を返し走って禰豆子の元へと駆け寄る。

「禰豆子く〜！」

「むむく〜♪」

「良かった禰豆子、お前頑張ったんだな。兄ちゃん禰豆子なら絶対大丈夫だって信じてた、ホントにホントに良かった」

駆け寄る炭治郎に嬉しそうに抱きつきご機嫌な禰豆子、炭治郎は泣きながら喜び禰豆子を褒める。

「良かったな炭治郎、お館様縄解いて良いですよね？」

「そうだね。私が容認してる以上炭治郎の隊律違反を咎める必要ないのだから解いてくれて構わないよ」

「んじゃ・・・これキツく縛り過ぎだろ？もういいや斬る」

縛られたままの炭治郎を不憫に思った焔牙は耀哉に縄を解く許可を確認し許可を貰うと炭治郎の縄を解こうとするが結び目が固くなかなか解けそうにないので面倒くさくなつた焔牙は懐から牙狼剣を取り出し

縄を斬っていく。

「焔牙さんありがとうございます！焔牙さんがいなかったら俺達はもしかしたら」

「気にしなくていいよ、な！不死川さ・・・おはぎ食ってるよあの人」

裁判で味方につき庇ってくれた焔牙にお礼を言う炭治郎に焔牙は気にしないよう言うと同意を求め実弥へと振り向くが先程焔牙から

渡されたおはぎを美味そうに食べている実弥を見て同意を求めるのをやめた

「焠牙は牙狼剣を鞘に収め懐に戻すと炭治郎と共に一足先に柱達の横に並ぶ。」

「焠牙、不死川もだが派手にやったな。一つ気になるんだがスケベ柱ってどういう事だ？」

「宇髓さん派手に忘れましょうか、アレ桜花が言い出したんですよ」

「あの天然娘か、なら派手に意味はなさそうだな」

「桜花？・・・四ノ宮・・・!!？焠牙さん！あの四ノ宮桜花って人は焠牙さんの知り合いですか？」

「ん？炭治郎桜花の事知ってるのか？桜花は俺の妹だよ、義理だけどな」

「あの・・・俺・・・桜花さんを助けられなくて、那田蜘蛛山にいた鬼に、影に呑み込まれて桜花さんは・・・その・・・すいません」

「ああ、桜花なら無事だよ。心配してくれてありがとうとな炭治郎。」

「一緒に下山したからさ大丈夫だった」

「ホントですか？良かった生きてて良かった」

天元の横に並ぶ焠牙と炭治郎、天元は焠牙と実弥が禰豆子の証明を示したと言い焠牙の失礼な発言について言及しだす。

焠牙はこの話題をしたくないのか忘れるように言うと言の主が桜花だと天元に教えると、何処か納得した表情で天元が頷く。

桜花という名前を聞いた炭治郎は那田蜘蛛山での一件を思い出し

桜花と焠牙は知り合いではないのか？と考え焠牙に桜花の事を尋ねる。

桜花は義理の妹だと炭治郎に教えた焠牙に炭治郎は那田蜘蛛山で斬吼狼の血鬼術に呑み込まれた桜花を助ける事が出来なかった事を恐る恐る焠牙に謝るが、桜花は無事だと焠牙から言われ炭治郎はホッとした表情で桜花の生存を喜び、焠牙もまた炭治郎が素直で真っ直ぐな少年だと思いつながら頬を緩めていた。

おはぎを食べ終えた実弥も柱達と合流し再び耀哉と向き合い耀哉の話が再開される。

「焠牙・実弥ご苦労だったね。少なくとも禰豆子が人を襲わなかったという証明が出来た。この事実は二人にとつて大きな一歩だと私は思っているよ」

「それと私の子供達に伝えておきたい事がある、その炭治郎はね鬼無辻無惨と遭遇しているんだよ」

「なっ！そんなまさか、柱ですら誰も接触した事がないというのに！こいつが!?？どんな姿だった、能力は、場所は何処だ?」

「戦ったの?」

「鬼無辻は何をしていた?根城は突き止めたのか?」

耀哉から芳いの言葉をかけられる焠牙と実弥、今回の事で炭治郎と禰豆子が信用を得て次に繋がる大きな一歩だと耀哉が話すと続けて炭治郎が無惨と遭遇している事を話し出す。

無惨と接触したという驚愕の内容に焠牙を除く柱一同は驚きを隠す事なく天元・無一郎・実弥が次々に質問をするが耀哉から口を止められ

再び耀哉から話の続きを聞かされる。

「鬼無辻はね炭治郎に向けて追っ手を放っているんだよ、その理由は単なる口封じかもしれないが私は初めて鬼無辻が見せた尻尾を掴んで離れたくない。恐らくは禰豆子にも鬼無辻にとって予想外の何が起きてると思うんだ」

「焠牙済まないけど炭治郎達と暫くの間共に行動してほしいんだが頼めるかな?花蓮には私の方から伝えておくよ」

「わかりました、炭治郎これから宜しくな」

「はい!焠牙さん宜しくお願ひします」

「それから炭治郎、まずは十二鬼月を一人倒してごらん。結果を示せば炭治郎の言葉の重みが違ってくるからね」

「言葉の重み・・俺の言葉は届かなくても焠牙さんの言葉は届きました。俺は・・俺と禰豆子は鬼舞辻無惨を倒します!!俺と禰豆子が必ず!!悲しみの連鎖を断ち切る刃を振るう」

「今の炭治郎には出来ないからまず十二鬼月を一人倒そうね」

「はい」

耀哉からの提案で炭治郎達と共に行動する事になった焠牙、炭治郎と話していると耀哉が炭治郎に十二鬼月を一人倒し炭治郎の言葉に重みを加えろと提案すると炭治郎は決意を決めた顔で無惨を倒すと宣言する。

そんな炭治郎に耀哉は笑みを浮かべながら今の炭治郎には無理だから

十二鬼月を一人倒すように言うとは恥ずかしさで顔を赤面させた炭治郎が一言だけ返事を返し、場の空気が固まる。

(だめよ笑ったら だめだめだめ!) プルプルプル

「・・・っ!」プルプルプル

勢いよく宣言した炭治郎がやんわりといなされた事で笑いのツボに入った蜜璃・天元・しのぶ・行冥は笑いを堪えようと体を震わせ我慢していたが焠牙は炭治郎が自分と同じ事を言っていると感心して笑わず炭治郎を見ていたが、場の空気に居た堪れなくなり炭治郎を援護しようと話しかける。

「炭治郎その決意は大事だぞ! 悲しみの連鎖を断ち切る為に刃を振るう、俺も同じだよ! 奴の陰我は俺が断ち切るそれが牙狼を受け継ぐ俺の使命だから」

「焠牙さん・・・あの、牙狼って何ですか? 前にも聞きましたけど」

「一体何の事か分からなくて」

「ああそうか炭治郎はまだ見た事なかったな、俺が受け継いだ想いの力、闇を照らす光ってとこかな? まあ説明するより見た方が早いかな」

炭治郎を庇うように焠牙も自分が背負う使命を語ると、牙狼という言葉に反応した炭治郎、珠世邸で朔弥から聞いた牙狼という言葉の意味が分からずにいたが焠牙から再度聞かされその意味が知りたい炭治郎は焠牙にその意味を問いかける。

焠牙もまた炭治郎の前で牙狼を召喚した事はおろか戦った事もないので当然知っている筈もなく、簡単に説明をするが見た方が早いと切り替え懐から牙狼剣を取り出し真紅の鞘から牙狼剣を引き抜くと牙狼剣を頭上に掲げ弧を描く。

牙狼剣で弧を描いた事により焠牙の頭上に光の円が現れ光がひび割れるように別の空間が開くと狼を模した金色の鎧が召喚され瞬時に焠牙に装着される。

「………凄い……これが牙狼」

「まあね」

牙狼の鎧を初めて見た炭治郎は目を輝かせながら牙狼を見つめていたが焠牙は炭治郎に一言だけ返事を返すと即座に鎧を送還し牙狼剣を鞘に収める。

「あつ！焠牙さん鎧脱ぐの早過ぎですよ。もう少しくらい」

「悪い炭治郎、鎧は長い時間着れるものじゃないんだ制限時間があったらな頑張って99.9秒が限界なんだよ」

「それを過ぎたらどうなるんですか？」

「心滅する」

「心滅？何ですか？それ」

「鎧に魂を喰われ始めて制御が出来なくなる」

「え？それ凄く危険じゃないですか」

「まあね、だから直ぐに鎧を召喚して戦うって訳にもいかないんだよ
ここで決めるって時にしか使わないようにしてるよ」

牙狼の鎧をまだ見ていたかった炭治郎は早々と鎧を送還した焠牙に不満の声を漏らす
が焠牙は鎧は長く装着出来ない事を説明し炭治郎に

制限時間を過ぎた場合鎧に魂を喰われ始めて制御が出来なくなると話す。

鎧を危険視した炭治郎に焠牙は鎧は直ぐに装着せずいざという時まで使わないようにしてると話す。

柱である焠牙の現在の實力は十二鬼月の下弦程度なら簡単に始末する事が可能であり、牙狼剣の特異性も重なって鎧を装着する場面は限られ柱との合同任務、焠牙が隊を組んだ複数での任務等仲間の命を守る為、物理ではない特殊な血鬼術を打ち破る時等に限り鎧を召喚し鬼になす術を与える事なく始末していた。

焠牙が任務で率いる隊は生存率が極めて高く柱と同じ任務に就く

なら牙柱と隊士達から言われる程であり、牙狼の圧倒的な実力も相まって柱最強とまで言われていた。

「牙狼を見ていると何処か安心するよ、牙狼なら必ず鬼無辻を倒してくれるそう思わせてくれる何かがあると私は思っているよ」

「相変わらず派手だな、もう派手派手だ」

「牙狼は我ら鬼殺隊の希望！全力で支援する！」

「南無阿弥陀南無阿弥陀」

「金色の狼キラキラしてて素敵」

「牙狼・・・かっこいいね」

「上弦の式でも苦戦しそうでしたからね、逆に日光に助けられたんじゃないでしょうか？」

「・・・四ノ宮・・・許さん」

「蛇柱、嫉妬すんじゃないやねえ！牙狼はカブトムシの次にかっこいいんだからよお」

「不死川は（カブトムシが好きなのか、俺は牙狼の方がかっこいいと思う）が好みは人それぞれだからな、今度探して持って行ってやろう（カブトムシ）」

「おいコラア!!？水柱！誰がカブトムシだあ！」

「富岡さんは言葉が足りないんですよ、そんなだから嫌われるんですよ」

「俺は嫌われてない」

「まあどっかの誰かさんよりはマシかもしれませんが、どっかの誰かさん富岡さんの通訳お願いしてもいいでしょうか？」

「はいはい、どっかの誰かさんが富岡さんの真意を語りますよ。」

不死川はカブトムシが好きなのか？俺は鮭大根が好きなんだ、おはぎも好きらしいがさつき食べてたからな、あいにく四ノ宮妹のおはぎより美味いおはぎを俺は知らない、だから今度探して持っていくよカブトムシ」

「・・・違う・・・いやそれでいい」

「どっかの誰かさん、微妙に違うそうですよ？」

「うん・・・今日の富岡さんは難しいな」

「水柱！余計な真似すんじやねえぞ」

牙狼に対する感想を次々に語りだす耀哉と柱一同、義勇の言葉足らずの発言から妙な流れになり話が逸れていく中、炭治郎は何だかんだで柱達は仲が良いんだなと思っていたが、実際は焯牙が間に入っているからであり焯牙がいなかった場合実弥は義勇と険悪な雰囲気になっていた。

「いつの間にか裁判から流れが変わってるけどとりあえず裁判はここまですべて柱合会議を始めたいけどみんなも良いかな？炭治郎はもう下がっていいよ」

「なら竈門君達は蝶屋敷で預かりましょう、怪我もしてますしね」

こうして炭治郎達の裁判は終わりを迎え炭治郎は治療の為に隠に連れられ蝶屋敷へと運び込まれる。

そして耀哉柱達を交えた柱合会議が始まり鬼殺隊にとって一つの光明が見え始める事になる。それが焯牙の死に繋がる事は知らずに――

産屋敷邸の一室では鬼殺隊当主 産屋敷耀哉と柱の面々が向かい合い

報告、今後の方針、議論が交わされ焔牙は炭治郎とは別の隊律違反 魔戒法師朔弥との一件を話そうとしていた。

「皆んなに聞いてほしい事があるんだ。炭治郎達とは浅草で会ったんだけどさ、炭治郎の記憶から無惨を辿ったけど手掛かりになるような事は見つからなかったよ、まあ奴の声と自らを完璧に近い生物と自称してる傲慢な性格だつて事はわかったけど」

「奴の気配なら俺様が覚えてる。だが妙だ、昔の気配と違うようなもしかすると奴は気配を変える事が出来るのかもしれん。厄介な奴だ」

「焔牙、ザルバそうだとしても貴重な手掛かりだよ、私達は鬼無辻に関する情報を持ち合わせていないのだからね」

「ザルバ」

「わかっている、俺様が既に話をつけておいたじきに来るだろう？」

「ザルバ誰か呼んだのかい？」

「ああ、とある魔戒法師をな。奴なら無惨の情報を掴んでいるはずだからな」

無惨に関する情報を持ち得ない鬼殺隊、僅かな情報でも欲しい耀哉に

ザルバは思いもよらない助っ人を呼び寄せようとしていた。

「魔戒法師つて事は焔牙の知り合いだよな？どんな奴なんだ？」

「んんん色々と残念な人ですよ。いや鬼でもあるか。規格外過ぎて

説明が難しいから本人から聞いてください」

魔戒法師と繋がりのある焔牙なら知り合いの筈だと考えた天元は焔牙に聞いてみるが規格外過ぎて説明出来ないと焔牙は天元に答える

ザルバを見つめながら柱達の反応を待つ。

「鬼だど？焔牙お前鬼をここに呼んだというのか？」

「まあそうと言えばそうなんですけどね、実際のところホントに鬼かどうかかわからないんですよ。本人は鬼だと言ってるけど美味そうに飯食べてるし日光浴もしてるし、俺達の知る鬼の常識から外れてるんで」

「いやそれ普通に人間だろ？日の光が平気な鬼なんて聞いたこともねえよ」

「まあそうなんだけど、それが原因で無惨から狙われてるらしいんですよ。無惨ちゃんのウキウキハッピー鬼ライフとか何とか言ってたし」

「は？何だそりゃ？派手に意味が分からねえぞ」

「大丈夫ですよ俺もわかりませんから」

「焠牙さん、その方とはいっ知り合ってたんですか？」

「三年前かな？牙狼を継承した後にザルバから知らされたんだよ」

「三年ですか、その間焠牙さんはまた誰にも言わずに秘密にしてたんですね？」

「嬢ちゃん、焠牙を責めないでやってくれ。俺様が口外しないように焠牙に頼んだんだ、焠牙はそれを守っていただけだ」

「なら仕方ないですね、ですが何故今になって私達に話す事にしたんです？」

「時が来たからだ」

「どういう事でしょうか？」

「長きに渡り不在だった黄金騎士を受け継ぐ者が現れた、無惨を完全に討滅するには牙狼の存在は必要不可欠だったからな」

「ふむふむ、今がその時というわけですか」

天元に続きしのぶも質問をするが焠牙の代わりにザルバが答え出す。

ザルバ曰く無惨を討滅するには牙狼の存在は必要であり、焠牙が継承した今だからこそ表舞台から姿を消した朔弥の存在を教え、接触させようとしていた。

「焠牙、奴がここに到着したみたいだ」

「あっそうなの？」

「焠牙お前さんが迎えに行かないとおそらくここまで来ないだろう」
「さすがにあの人でも鬼殺隊本部に勝手に入れないって事か、お館様ちよつと席外しますね」

「いや、私も一緒に行こう。当主である私が出迎えなければ失礼だからね」

「わかりました」

朔弥が鬼殺隊本部である産屋敷邸に到着した事を感知したザルバはその事を焠牙に教え、焠牙がいなくてこの場まで一人で来ないだろうと予想したザルバは焠牙に迎えに行かせようと焠牙に喋りかける。

基本無遠慮な朔弥だがさすがに鬼殺隊本部には勝手に入れないだなと

少しだけ朔弥を見直した焠牙は迎えに行こうと耀哉に一言告げると当主である耀哉が出迎えないのは失礼だと焠牙と共に部屋を後にする。

屋敷を出て正門の前に立つ焠牙と耀哉、隠が正門を開くと幼さの残る

あどけない少女が二人の前に立っていた。

見た目こそ幼い少女なのだろうが、齡400歳を超える所謂ロリババアであり自身の強力な法力の影響で肉体の成長が止まっており鬼化も相まってこの400年もの間変わらずにいた稀代の魔戒法師朔弥、その朔弥は正面に立つ焠牙と耀哉に目を向けると頭を下げ耀哉に実に丁寧な対応をでした。

「お初目にかかり光栄至極存じます。御当主様自ら出迎えて下さる事に感謝と共に愛好の意を表します」

「こちらこそ初めまして、私も貴方に会うことが出来て凄く嬉しく思うよ」

「マトモに喋ってる!? かつてない衝撃なんだが」

耀哉に対し丁寧な挨拶をする朔弥と朔弥に会えた事に喜びを表す耀哉

二人の挨拶を見ながら焠牙は朔弥の言動から予想出来ない丁寧な対応に衝撃を受け、つい口に出してしまっていた。

「焔牙ちゃん私もちゃんと挨拶出来るんだよ？見直した？見直した？ねえねえ」

「うわーさっきの台無しだろ」

「朔弥さんは面白い方だね、かしこまらなくて構わないよ。その方が話しやすいからね」

「ふっふうく♪耀哉ちゃんがそう言うならそうするねえく♪」

「切り替え早っ!?？」

「焔牙構わないよ朔弥さんは最古参の鬼殺隊の方だし寧ろ私の方が敬意を表さなくてはいけないのだからね」

「そうだよ焔牙ちゃん♪私は焔牙ちゃんのパイセンなんだよく♪」

「いやあんた先輩の威厳ないからな？」

「二人のやりとりを見てると仲の良さが伺えるね、しのぶが嫉妬してしまうかもしれないね」

「いやいや、しのぶもツッコミ属性ですがこの人にツッコミ入れるのキツイですよ？」

「・・・しのぶも大変だね」

「あつ耀哉ちゃん！体調良くなってるみたいだね？完治までは難しいかもだけど普通に生活するなら問題ないかな？」

「やはりあの薬は貴方が送った物だったんだね、おかげ様でこの通り視力も回復してこうして歩けるのだからね。感謝してるよ」

「うんうん♪焔牙ちゃん♪私凄いでしょ？ねえねえく♪褒めてく♪」

「朔弥さんありがとう！お館様が回復したの朔弥さんが裏で何かしたのかなって思ってたけどやっぱり朔弥さんだったんだな。ホントに凄いよ、マジでありがとう！」

「え？・・・あ・・・うんありがと・・・焔牙ちゃん（またあしらわれるって思ってたけどホントに褒めてくれた、嬉しいな〜♪）」

朔弥を迎えてから三人でやりとりをしていたが、本題へ移る為柱達の元へ向かう三人、朔弥は最古参の鬼殺隊員ではあるが顔見知りの鬼殺隊は焔牙だけしかいないので鬼である自身が柱達の元に向かうのは心細くそれを誤魔化すように焔牙にしがみつき歩き出した。

「どうしたんだ？朔弥さん」

「えつとね、私って見た目は人だけど一応鬼だし柱達の前に行くのちよつと怖いかなって、煌牙ちゃんゴメンね」

「そっか、朔弥さんゴメンな俺達が呼んだんだし無理して怖い思いをさせる気はないよ」

「ありがと煌牙ちゃん、でも大事な事だしちゃんと話をしないとけないから・・・ねえ煌牙ちゃん？抱っこして？煌牙ちゃんが抱っこしてくれたら大丈夫だから」

「朔弥さんがそれで安心するなら別にいいけど」

不安がる朔弥を安心させようとする煌牙、朔弥の提案を受け入れた煌牙は朔弥を抱き抱え歩き出すと耀哉もまた朔弥を安心させようと話しかける。

「朔弥さんは私が既に容認しているからね今回は皆の是非を問わず認めて貰わなければならぬ。私が説得するから安心してくれないかな？」

「ありがとね、耀哉ちゃん」

耀哉の発言に礼を言う朔弥、三人は柱達の待つ部屋へと向かうと

耀哉は部屋の戸を開け朔弥を部屋に迎え入れる。

「魔戒法師だと聞いたが派手に小さな子供じゃねえか」

「うむ！鬼だとも聞いたが見た目は人間と変わらない！不思議だ！」

「でも何となく鬼のような気配も、でも可愛いわ」

「嗚呼、魔戒法師でありながら鬼になるとは嘆かわしい」

「だが鬼にしては妙な気配だ、意味がわからない俺には理解出来ない」

「何で煌牙さんに抱きついてるの？」

「・・・四ノ宮（お前は面倒見が良い、炭治郎達の時もそうだ。お前のおかげで炭治郎達は救われたと言ってもいい感謝している）」

「こいつが人間だろうが鬼だろうが関係ねエ！無惨の情報を知っているか知らねえかが大事だろお！」

「そうですね、私達の最大の目的は無惨を倒す事その為に彼女を呼んだのですから（何故煌牙さんが彼女を抱えているのかは後で煌牙さんから聞く事にしましょう。私としては此方の方が大事なんですけどね）」

耀哉と共に煌牙に抱えられた朔弥が入室すると朔弥を見た柱一同、天元・杏寿郎・蜜璃・行冥・伊黒・無一郎・義勇・実弥・しのぶの順に喋り出すと耀哉は煌牙を自分の隣に座らせ話し出す。

「皆んな彼女が先程話に出ていた魔戒法師の朔弥さんだ、彼女は40年も前から鬼殺隊に貢献してくれた方なんだ失礼の無いようにね」
「彼女はね病に冒されていた私を救ってくれた方でもあるんだよ、彼女のおかげで私は今こうして皆の顔を見て話す事が出来る、これ程嬉しい事は無いよ」

柱達に朔弥を紹介する耀哉、昔から鬼殺隊として貢献していた事、自身を救ってくれた事を柱達に話すと煌牙に抱きついていていた朔弥は抱きついたまま顔だけを柱達に向けニコツとはにかんだ笑顔を見せる。

「親方様を救うとは派手にやるじゃねえか！」

「鬼だとしても親方様が救われた事に変わりはない！感謝する！」

(キヤー！何あの笑顔とつても可愛いわ、もう一度笑ってくれないかしら？可愛いわ)

「嗚呼、親方様を救うとは神の施しの如し」

「だがどうやって助けた？仮にも鬼だろう？人間に与する意味がわからない」

「煌牙さんの知り合いつて凄いな」

「魔戒法師だからな」

「あの坊主達の事もそうだが、煌牙が信用する鬼つてのはよくわからねえ！」

「良いじゃないですか、親方様が救われてるんです。私は彼女と仲良くしたいと思いますよ」

朔弥が鎧鴉を通して耀哉に送った薬、その名も〈産屋敷バスター〉
一見怪しい薬にしか見えないのだが耀哉は自身の勘で安全だと察し

薬を飲み始め次第に侵攻していた病は縮小していき今では額の一部にその病状が表れているまでに治っていた。

その耀哉が柱達に話をしようと一声掛けると柱達は全員鎮まり返

り耀哉の話に耳を傾ける。

「朔弥さんはね確かに鬼かもしれない、だが鬼殺隊にとつてとても貴重な戦力でもあるんだ、何より我々が知る事が出来ないでいた鬼無辻の情報を掴んでいるのだからね」

耀哉が柱達にそう話すと柱達は皆、朔弥へと視線を移し朔弥が話し出すのを待っている、視線を感じた朔弥は煌牙から手を離し体勢を反転すると正座で座っている煌牙の膝上に座り直し柱達に話し始めた。

「チャオっす♪柱の皆んな初めましてだね魔戒法師の朔弥だよ♪一応皆んなのパイセンなんだよ♪そゆことでヨロシク♪」

「「「「「うん?」「「「「「」」」」」」」」

(さつき柱達の前だと少し怖いっていったよね?何コレ?いつも通りじゃん)

煌牙に話す時と同じように気軽に挨拶をする朔弥、まさかこんな喋り方するとは思ってもなかった柱達は耳を疑い思わず聞き返してしまふ

そんな朔弥に対し煌牙は先程の発言はなんだったのかと頭を抱えていた。

(なるほどな、色々と残念とはこうゆう事か煌牙)

鬼とはいえ人間にしか見えない朔弥、400年経っても幼い子供の容姿をしている朔弥、見た目と年齢が噛み合わない事と喋り方が年齢に対し余りにも幼いというか桜花に近い事から天元は煌牙の言っていた色々と残念の意味を察し心の中で一人呟いていた。

「早速だけど皆んなが知っていたらっている無惨ちゃんの事話しちゃおうよ♪えくとねくまは無惨ちゃんの根城?あれは場所の特定は無理かもね、鳴女ちゃんって言う鬼がいてね空間を操る血鬼術を使うんだけどそれがないと無惨ちゃんの根城、無限城に入れないと思うよ」

「次は無惨ちゃんの目的で良いかな?無惨ちゃんはね太陽を克服したんだよ、もうね夏に海で日焼けする気なんだよ、黒い無惨ちゃんになりたいんだよ。ブラック無惨ちゃんになりたいんだよ。えっ?既にブラック上司?うん知ってる♪それとね青い彼岸花つての探し

てるみたいだよ、なんの事か分からないけど無惨ちゃんにとって大事な事らしいよ？」

「あつ、それとね無惨ちゃんは始まりの呼吸と牙狼を恐れているよ

煌牙ちゃんが牙狼を継承して鬼や下弦を一杯斬ってるからいつか牙狼に無惨ちゃんが斬られるんじゃないかって」

「最後に無惨ちゃんの秘密、無惨ちゃんはね脳が五つ心臓が七つあるんだよ？」

「無惨ちゃんの事で知っているのはこれくらいかな？ついでだけで上弦の壱の事も話しくね名前は黒死牟、月の呼吸を使う剣士の鬼だよ煌牙ちゃんの他にもう一人魔戒騎士がいるんだけど昔黒死牟に負けちゃったの」

朔弥は無惨に関する情報をこの場にいる全員に話すと疲れたのか煌牙にもたれかかり髪を弄り出す。

朔弥から無惨に関する情報を聞かされた一同、情報を整理しつつ内容を理解しようとしているが一部理解出来ない内容があり、実弥が朔弥に問い詰め出す。

「無惨の目的が太陽を克服するって事は分かったが海で日焼けってどいういう意味だあ！黒い無惨とかブラック無惨とか意味がわからねえ！」

「うんうん♪いい質問だね♪でもね特に意味はないよ？テキストに言ったただけだし、あつ！日焼けしなくても既に日に焼ける体だったね♪」

「煌牙さん？魔戒法師ってこんな人達しかいないのですか？」

「師匠はマトモだからな？桜花とこの人が残念なだけで」

実弥の問い掛けに適当に答えた朔弥、魔戒法師ってこんなものばっかなの？と思わずにいたしのぶは煌牙に少々失礼な質問をするが、少なくとも花蓮はマトモであり桜花と朔弥この二人が残念なだけと煌牙は答えた。

「少々話が逸れてしまったようだけど鬼無辻や上弦の壱に関する情報を集める事が出来たのは我々にとつて大きな一歩になると私は思っている。鬼無辻が太陽を克服した場合今以上の脅威になるのは目に

見えているからね、何とかして根城への侵入経路を確保したいものだね」

「私の術で空間を固定したり、同調したりして侵入経路を作れそうなんだけど鳴女ちゃんの術の出現箇所が不特定だからね」

「なあ？ 斬吼狼は無惨の元で情報を集めていたんだろ？ 何とかならぬいの？」

「そっか斬吼狼ちゃんが呼ばれる時に鳴女ちゃんの術が発動するね

斬吼狼ちゃんに頼んでみるよ♪新しい魔導具作らないとな」

「斬吼狼、本名は御影総悟だったね彼も私達に協力してくれるのかい？」

「さすが耀哉ちゃん♪よく知ってるね♪魔導騎士は守りし者、人を守るのが使命だし鬼になった今でも私達の味方だよ？」

「なあ、あんたらは鬼なんだろう？ 煌牙が言ってたが普通に飯食うし日に当たっても平気だったのは本当なのか？」

「ホントだよ♪美味しいご飯食べてると幸せだよね、鮭大根食べてるとホッコリするもん♪あつ煌牙ちゃん後で鮭大根作ってね」

「……」ピク

「それに日の光を浴びても平気だよ♪無惨ちゃんは私を取り込んで太陽を克服したいみたいだし日頃は日中に活動して夜は寝てるよ♪とは言っても斬吼狼ちゃんは日の光は駄目だけどね」

「一つ気になるのですがどうやって太陽を克服したんですか？」

「ふっふっ♪昔ね無惨ちゃんの細胞や血を手に入れる機会があって、それを元に色々な材料を混ぜ合わせて私の術を重ね掛けして鬼になる薬を作ったの。まあ無惨ちゃんの血だけで鬼になるから正確には鬼になっても人間のままいられる薬ってところかな？ だから克服したというより最初から日光は平気なんだよ？」

「薬……あの！ 鬼を人間に戻す事って出来るのでしょうか？」

「出来るよ♪とっておきの材料があるし♪出来れば無惨ちゃんの血が一番だけど無惨ちゃんの血の濃ゆい十二鬼月、上弦の血が集まれば作る事出来るからね」

「……朔弥さんをお願いします」

朔弥の来訪により鬼殺隊に光明が見え始めた今回の柱合会議、耀哉は朔弥からもたらされた情報を元に今後の方針を定め柱達に話し終わると解散となり柱達は各自帰路に着く。

朔弥も今後は鬼殺隊に本格的に復帰する事を決め、しのぶからの強い要望で蝶屋敷で共に治療と薬の開発を行う事になり朔弥はしのぶと共に蝶屋敷へと歩き出す。

「これから宜しくねしのぶちゃん♪」

「こちらこそ宜しくお願ひします朔弥さん」

「なあ？何で俺も蝶屋敷に向かう事になってるの？帰りたいんだけど」

「煌牙さん、お館様から頼まれたじゃないですか？竈門君達と共に行動してくれって」

「いやそうだけどさ、炭治郎の怪我治ってからじゃないの？」

「まあ良いじゃないですか、怪我が治ったら機能回復訓練もありますし煌牙さんが手伝ってくれたら私達も助かります」

「もしかして・・・泊まり込みじゃないよね？」

「いえ、暫くの間蝶屋敷が煌牙さんの帰る家ですよ？何ならずと居てくれても構いませんよ？」

「うんうん♪しのぶちゃん良い事言った♪煌牙ちゃんずっと居てね？一緒に寝よ♪」

「却下、婆さんの介護じゃないんだし。それに任務はともかく管轄の方はどうするんだよ」

「そんなに離れてないじゃないですか、カナヲも一緒に巡回しますから煌牙さんも楽になると思いますよ」

「うっくんまあ良いけどさ・・・それよりもだ！何で富岡さんも一緒にいるの？」

「四ノ宮が鮭大根を作るからな、那田蜘蛛山での借りを返して貰おうと思っていた」

帰りの道中しのぶと朔弥に捕まった煌牙は半ば無理矢理のような形で連行され歩きながらしのぶに不満を言っていたが、しのぶに言いくるめられて渋々納得すると煌牙達の数歩後ろを歩く義勇に何故義

勇も一緒にいるのか気になり義勇に聞いてみる事にした。

会議の最中朔弥は焠牙に鮭大根を作ってもらおうと言っていたのだが

その言葉に誰にも気付かれることなく一人反応した義勇、焠牙の作る鮭大根を気に入っていた義勇は那田蜘蛛山での一件を理由に鮭大根にありつこうと考え共に行動していた。

「那田蜘蛛山での借り？あ！あの猪か！」

「え!?？猪ですか？」

「あ、いや猪だけど人間というか…うん！絡まれなくなかったから富岡さんに押し付けたんだ」

那谷田蜘蛛山で出会った猪の被り物をした隊士、見た目から厄介事に巻き込まれると予想した焠牙は義勇に押し付け逃げ出した事を思い出すと反応したしのぶにその出来事を説明しながら四人は蝶屋敷へと向かって行く。

「フハハハ！今宵の肴は別格よのお」

とある集落で賑やかな音色と共に住民が踊りそれを楽しそうに見つめる男がいた。身の丈10尺を超える筋骨隆々のその男は踊りの中心に突き刺さる一本の柱を見つめ舌舐めずりをすると近くにいる初老の男性に声を掛ける。

「村長よおこの村にあんな別嬪がいたとはなあ儂は早くあの娘を喰いたくてのお」

「もう少しもう少しだけお待ち下され、この地をお護りくださる守り神様に捧げる儀が終われば直ぐにでも」

村長と呼ばれた初老の男性は筋骨隆々の男にそう答えると怯えた表情で逃げるようにその場を後にする。

村長が守り神と崇めるその男は鬼でありこの地を護る代わりに月に一度生贄を捧げる、用心深いこの鬼はこのやり方で食糧である人間を確保し鬼殺隊に見つかる事なく長年生き抜いてきた。

その鬼は柱に括り付けられた生贄である少女を品定めするように

見つめると早く喰いたくて仕方なく口から涎を垂らして踊りが終わるのを待っていた。

柱に括り付けられた生贄の少女、もうじき鬼に食べられ命を落とすと理解しているのか怯えた表情をして体を震わしていた。

この少女は元々この村の住人ではなく偶々この村に用事があり訪れていただけの少女だったが、訪れた時期が悪かった。生贄を捧げる時期でなければ少女は無事に帰れたのかもしれない、だがその時期に来てしまった。鬼に捧げる生贄を決めようと集まっていた村人に何も知らない少女は用事を済ます為に近づき話しかけると村人達はこの少女を今回の生贄にしようかと画策し少女を縛り上げると柱に括り付け夜が来るのを待っていた。

やがて踊りが終わり儀式が終わると同時に鬼はおもむろに立ち上がり

興奮しながら少女に近づく。

「見た所齡十二か十三ってどこか、まだガキだが極上の贄には変わりねえ」

鬼は巨軀から伸びる太い腕で少女を掴もうと手を伸ばすと少女は目を瞑り深く息を吸い始める。

「全集中」

少女がそう言うと同時に縛られていた縄が解け鬼の前から姿を消す。

「ガキが消えた？」

突如目の前から消えた少女を見失ない混乱する鬼は辺りを見渡しながら少女を探そうとするが少女の姿が見当たらない。

「あのガキ何処に消えたあ！」

「消えてないよ、貴方の死角に回り込んでいただけだし」

少女を見失ない苛立つ鬼が叫ぶと後ろから少女の声が聞こえ鬼は少女へと振り返る。

そこには先程まで怯え震えていた少女が凜とした表情で立っていた。

村娘のような格好をしていた少女はいつの間にか鬼殺隊の隊服を

纏い

手には真珠色に染まる日輪刀を持ち目の前の鬼を斬らんと日輪刀を構え始める。

「このガキ！鬼狩りだったのかあ！だが何故だ？儂は鬼狩り共に見つからないよう人を喰ってきたはずだ！」

「そんなの知らないよ、私に伝令が来たんだもん。お兄は忙しいお姉も動けないし仕方じゃんか」

鬼殺隊に見つからないよう村人に崇めさせ慎重に生きてきた鬼は何故鬼殺隊に見つかったのかわからず狼狽えるが、少女は鬼に文句を言う息を吸い込み型を繰り出す。

――雲の呼吸 肆の型 流れ雲――

掴みどころのない雲の如く独特の歩法で緩急をつけ鬼の死角に回り込む少女、先程鬼から消えたように動いた時もこの型を使い鬼の死角に回り込んでいた。

死角に回り込んだ少女は鬼の首を斬ろうと跳躍しすかさず次の型を繰り出す。

――雲の呼吸 壺の型 断ち雲――

日輪刀を右手に持ち腕を交差する少女、水の呼吸壺の型と酷似しているが左腕は右腕の肘裏に添え刀を振るう瞬間、左腕で右腕を弾き出し斬撃の速度を加速させて鬼の首に刃を振るう。

だがその刀が鬼の頸を跳ね飛ばす事は敵わなかった、鬼殺の剣士とはいえまだ腕力の少ない少女、巨軀の鬼の頸を跳ね飛ばすにはまだ力が足りなかった。

それを理解していた少女は足りない力を補う為に壺の型を使ったのだが巨軀の鬼の頸を跳ね飛ばすには跳躍しなければならず踏み込むむによる力の伝達がうまくいかず鬼の頸半分で刃は止まってしまふ。

「ほう？ガキにしては良い動きだ、だが残念だったなあ所詮は非力なガキ小細工をしようが儂の頸を斬る事は出来なかったなあ！」

鬼は少女に振り返る事なくそう言うと言わすの血鬼術を発動し少女に襲いかかる。

――血鬼術 舞踊蛇骨――

自らの血を硬度の骨に変える血鬼術を操る鬼 骸武 骸武は血鬼術で蛇のようにうねる骨を生成し後ろにいる少女へ骨を振りかざす。少女は縦横無尽に暴れまわる骨を肆の型で躲し骸武との距離を開けると

はっ！と骸武の周囲を見渡す。

少女の見渡す光景は暴れまわる骨によってグチャグチャになり原型を留めてない村人達の血で辺り一面が真っ赤に染まっていた。

「うっ・・・村の人達関係ないじゃん！なんでこんな酷い事」

「鬼狩りが来た時点でこの村は用無しだあ！それにお前を生贄に出した村人をお前は恨まないのかあ？」

「縛られようがどうとでもなったし、下手に事を荒立てたら貴方逃げたででしょ？だからこの状況を利用する事にしたから別に恨んでないよ」

少女は凄惨な光景に一瞬気持ち悪くなるが気を取り直し骸武を問い詰めると骸武は村は用無しと村人を始末し少女に村人を恨んでないのかと問い返す。

少女は縄で縛られてもどうとでもなると鬼が現れるまで生贄の振りしようと考えていた為村人の事を恨んではいなかった事を骸武に告げると再び日輪刀を構え呼吸を整え始める。

「儂を斬るつもりか？お前のようなガキじゃ儂を斬る事は出来ん、さつきも斬れなかったじゃろ。儂の血鬼術はこれだけじゃない」

骸武は少女にそう言うのと新たな血鬼術を発動し骨を鎧のように纏わせていく。

――血鬼術 武骨骸殻――

血鬼術で骨を鎧のように展開した骸武、その鎧から刺々しい骨が無数に突き出ており間合いに近づく事も容易ではなくなっていた。

「小娘お前はもう儂に近づく事も出来ない、仮に近付けてもこの鎧ごと頸を斬る事は出来まい！大人しくしてれば苦しまずに喰ってやろう」

骸武は少女に諦めるように言うと言いつつ骨を鞭のようにしなら

せ少女に襲いかかる。

少女は肆の型を駆使して躲し続けるが、呼吸が続かずに躲す勢いが落ち始めうねる骨が遂に少女の小さな体を捉える。

少女は力を振り絞りギリギリのタイミングで骨を躲すが完全に避けきれず足に深い裂傷を負いその場に倒れこんでしまう。

(足をやられた！あの鬼を倒すには伍の型を使うしかないのに、これじゃマトモに型を使えない)

少女は唯一鬼を倒す可能性のある伍の型を使おうと考えていたが足に裂傷を負い伍の型が使えないと分かるとよろめきながら立ち上がり日輪刀を構え骸武を見据える。

「まだ立ち上がるか？ 頸を斬れず儂に近づく事も出来ずにいるというのに諦めないとは・・・なんと愚か！ 可哀想な娘だ、鬼狩りに儂を殺す事を強要され諦めることも出来ないとは」

「違う！ 私は私の意志で戦っている、誰にも強要なんてされてない」
深い傷を負ってもなお立ち上がる少女に哀れみの言葉を投げかける骸武、少女はそれを否定するように叫ぶが骸武は少女の言葉に耳を貸すつもりはなく、骨をしならせて少女を殺そうと腕を振るう。

――水の呼吸 肆の型 打ち潮――

少女の背後から突如、義勇が現れ流麗な太刀捌きで迫り来る骨を斬り落とし少女の危機を救う。

「動けるか？ 動けなくても根性で動け、じきに他の柱が来る」

「は、はいありがとうございます水柱様」

義勇は少女に振り返る事なく鬼を見据えながら少女に何とかしてこの場を離れように告げると少女は義勇にお礼を言い足を引きづりながらその場を離れようと歩き出す。

「お前儂の馳走を逃しやがったなあ！ 許さんぞ！ 今すぐ殺してあの娘を喰らってやるわ」

「俺も頭に来ている、お前のせいで鮭大根が遠のいたからな」

義勇と骸武、互いにとって好物は違えどこれから食べる事が出来ると思っていた矢先邪魔が入り互いに腹を立てあい睨み合っていた。

時を遡る事半刻前、蝶屋敷へと向かう四人に突如として伝令が下さ

れる。

任務に就いていた己の隊士からの報告が途切れ現場に一番近い四人に鬼の討伐令が下されて鮭大根を楽しみにしていた義勇は一目散に走りだしこの場に来ていた。

己の隊士とは少女の事であり、捕まっていた事から連絡が出来ず本部から応援要請を出されていた。その少女は義勇から少し離れた場所ので動けなくなり蹲って他の柱が到着するのを祈っていた。

程なくしてしのぶと煌牙、煌牙に背負われた朔弥が到着ししのぶは少女を見るや応急処置をしようと少女に近付き止血剤を打とうと手持ちの注射器に手を伸ばす。

「しのぶちゃん待って待って、この子は私が治すから」

朔弥はしのぶに待ったをかけると煌牙から飛び降り少女に自作の薬を飲ませようと懐から小瓶を取り出す。

「ねえこれ飲んで？すぐに怪我治るからね」

「はい」

少女は朔弥から手渡された薬を疑う事なく一気に飲み干すと朔弥は魔戒筆を取り出し少女の足に術を施す。

朔弥の薬と術の効果で少女の傷は塞がり少女は元気に立ち上がると朔弥にお礼を言つて頭を下げる。

「ありがとうございます、魔戒法師つてやっぱり凄いですね」

「ふっふうく♪それほどでも・・・何で私が魔戒法師つて知ってるの？」

「ふえ？あつその・・・蟲柱様もありがとうございます」

「え？私は何も・・・私ここにいる意味あるのでしょうか？」

少女からお礼を言われた朔弥はご機嫌な口調で自身を褒めようとするが少女が何故自分が魔戒法師だと知っているのか疑問になり少女に聞くと少女はしまったと言わんばかりに慌てて誤魔化すようにしのぶにもお礼を告げその場を凌ごうとする。

お礼を言われたしのぶだがしのぶ自身何もしていない上に専売特許である治療も即完治させる朔弥に軍配が上がりしのぶは自信をなくし落ち込んでいた。

「しのぶ、この治療は即効性がある代わりに生命力を消費するんだ
とてもじゃないが一般の人には使えないし、本当なら時間をかけて
治すのが一番だよ、だから俺はしのぶが絶対にはいないと困る」

「焠牙さん・・・貴方って人は・・・でもありがとうございます」
落ち込むしのぶを見かねた焠牙はしのぶを励まそうと声をかける
が

しのぶは最後の言葉を何気なく言う焠牙に呆れるも嬉しく思いお
礼を言うと焠牙を見つめる。

「後は任せろ」

その焠牙の視線は既に鬼の方を向いており、今までにない激しい殺
気を鬼へと放ちながら少女の頭をひと撫ですると一言掛け鬼へと掛
け出して行く。

その頃義勇は骸武の猛攻を避けつつ間合いに飛び込むタイミング
を伺っていた。

少女とは比較にならない実力を持つ柱、その危険性を感じ取った骸
武は最も強力な血鬼術を発動し義勇に迫り猛攻を仕掛けていた。

――血鬼術 八岐の蛇骨――

骸武が生み出せる最大の血鬼術 八岐の蛇骨 空想上の怪物八岐
大蛇を彷彿するするような八本の蛇骨が鎧を展開した骸武と一体化
し凄まじい速度と手数が多さしなる軌道で義勇を近付けまいとして
いたが義勇は必要最低限の動きで蛇骨を躲し隙を見て本体である骸
武の頸を斬ろうと型を繰り出す動作に入りだした。

「富岡さん！コイツは俺が消し去るから変わって」

「四ノ宮・・・任せた」

義勇が型を繰り出す瞬間凄まじい勢いで向かって来る焠牙が義勇
に交代するよう話すと焠牙の激しい殺気を感じた義勇は刀を鞘に収
めると

その場から離脱して焠牙に視線を向けこれからの戦いを静観して
いた。

義勇ならば刀を鞘に収めた状態でもその場にいるのは問題ないの
だが

煌牙が繰り出す型のほうが問題なので巻き込まれまいとその場を離脱していたのだった。

「次から次に鬱陶しいわあ！儂はあの娘を喰らうと決めとるんじや邪魔をするなあー!!？」

少女を喰らいたくてたまらない骸武は怒りに任せ八本の蛇骨を煌牙に差し向け一思いにカタをつけようとする。

「お前誰に手を出したのか分かってるのか？」

煌牙はそう言いながら骸武へ激しい怒りを見せ、迫り来る蛇骨を跳躍して躲すと次々に襲い来る蛇骨をも足場にして軽快に躲し続け空中に飛び上がると牙狼剣で召喚陣を描き骸武の間合いへと着地する。

煌牙が立ち上がると同時に牙狼の鎧が装着され煌牙の激しい怒りに反応してか魔導火が燃え上がり瞬時に烈火炎装へと変わっていく。

「黄金の鎧嘘だ！何故こんな化け物が儂の前に」

牙狼の黄金の鎧を見た骸武は恐怖で震え上がりその場から離れようと

牙狼目掛けて再び八本の蛇骨を突進させる。

「お前はもう黙ってる」

牙狼がそう告げると型を繰り為に力強く大地を踏みしめ渾身の力で牙狼剣を振り抜く。

ー牙の呼吸 玖の型 大蛇薙ー

炎の呼吸玖の型煉獄を参考に編み出された牙の呼吸玖の型、大蛇を薙ぎ払うかの如く凄まじい轟音と共に暴風と巨大な真空の斬撃刃が周囲の大地ごと抉り斬り薙ぎ払う。

烈火炎装状態の牙狼が放つ玖の型、魔導火を纏ったその斬撃は迫り来る八本の蛇骨ごと骸武本体も文字通り消し飛ばし、煌牙は牙狼の鎧を送還すると牙狼剣を鞘に収め義勇と共にしのぶ達の元へと歩き出す。

「煌牙さんが戦っている姿二年ぶりに見ましたよ」

「私も煌牙ちゃんが実際に戦う姿見るの初めてだよ♪」

「だが（四ノ宮のあの凄まじい殺気は今までに感じた事はなかった

俺も頭にきていたが四ノ宮はいつたい・もしかしたら）鮭大根が

好きなのか？」

「富岡さん少し空気を呼んでくれませんか？何故牙狼の話から鮭大根に繋がるのでしょうか？言葉足らずも度が過ぎると皆さんに『俺は嫌われていない』」

（富岡さん！分かりません！今日の富岡さんは分かりません擁護出来なくてすみません！）

（俺は嫌われていない・・・うん、似てるなく名前なんだったかなあゝ金髪ツンツンのイケメン意外と豆腐メンタルだった事は覚えてるんだけどゝあのゲーム面白かったなゝ）

（この微妙な空気は何ですか？もしかして水柱様と蟲柱様ってあまり仲がよろしくないのでしょうか？私この空気居た堪れないです先に帰っても・・・無理ですよね・・・お兄助けて）

しのぶと朔弥が牙狼の鎧を纏って戦う煌牙について話し出していると

義勇は煌牙の怒りの理由を考えていた事を口にするがまたしても言葉が足らずしのぶから指摘を受けると義勇はしのぶの発言より先に自ら嫌われていないと反論をする。

この発言により場の空気に変な事になり、煌牙は今日の義勇の真意を上手く掴めず擁護出来ない事を謝り、朔弥は義勇の言葉から某RP Gの主人公を思い出し名前を必死に思い出しており、少女は場の空気に居た堪れなくこの場から逃げ出したい気持ちで一杯だったが元々は自分の任務だった為無理だと悟ると自分の兄に助けを求めていた。

「富岡さん、私は富岡さんが思っている事考えている事をちゃんと知りたいんです。富岡さんにも何か事情があるのでしょうか全てを話して欲しいとは言いません、少しずつでもいい富岡さんの想いを皆さんに託して欲しいんです、富岡さんも誰かの想いを受け継いで今があるんじゃないでしょうか？」

（鑄兎・・・）俺は・・・俺はお前達とは違う」

「富岡さん」

「しのぶ！富岡さんにも事情があるんだ今はまだ無理かもしれないけどいつか富岡さんもきつと・・・とりあえず帰ろう、鮭大根作らない

とだしな」

「そうですね、帰りまじょうか煌牙さん……何をしているのでしょうか？」

しのぶは義勇を諭すように自分の想いを打ち明けると義勇は自身の過去を振り返り、自分は他の柱達と違うと話す。

しのぶは再度説得しようとして話しかけるが義勇の事情を考慮した煌牙に止められ諭されると帰ろうと告げる煌牙へ振り向き一緒に帰ろうとするしのぶだったが、煌牙の現状を見てしのぶは渴いた目線で煌牙を問いただす。

煌牙の隣には少女がいてその少女は煌牙に縋り付くように体を寄せ煌牙に抱き付いていた。

「ん？何って妹が俺に抱き付いてるだけだろ、そう怒るなよ」

「へ？妹？ちよつと待って下さい！煌牙さん桜花さんの他に妹がいたんですか？私聞いてませんよ？」

「あれ？言っただけだったっけ？六つ違いの妹がいるって……まあいいや」

「いやよくありませんよ、何しれつと流してるんですか？」

「悪かったよ、ほら溜花皆んなに挨拶しような」

「うん……えつと、あのその……四ノ宮溜花と言います！一年前に鬼殺隊に入隊しました階級は己です。お兄のように強くはないしお姉みたいに魔戒法師ではありません！いきなり柱達の前で挨拶させられて」

何かの拷問かと思っただけですがよろしくお願いします。」

「煌牙さん……まともな妹がいて良かったですね、拷問はいささか正直過ぎると思いますが自分の意見をハッキリと言えるのは素晴らしいと思いますよ。溜花さんでしたね私は蟲柱を就任している胡蝶しのぶです、今後ともよろしくお願いしますね」

「はっはい！よろしくお願いします蟲柱様」

「そんなにかしこまらなくても大丈夫ですよ？なんなら名前で呼んでくれても」

「いえ滅相もございませぬ、恐れ多くて」

「そうですか、いつか呼んでくれる事に期待してますね。富岡さんも自己紹介ぐらいしたらどうですか？」

「富岡義勇」

「・・・あつはい！お兄からよく聞かされてます、先程は助けて頂きありがとうございました」

「そうか（四ノ宮があれほど激怒していたのは妹が絡んでいた為か）」

「ふおおく♪煌牙ちゃんの妹キターー!!？私はね魔戒法師の朔弥だよ♪」

♪ こう見えてスツゴローーイ魔戒法師なんだよ♪えへへ♪」

「朔弥ちゃんですね、先程はありがとうございました」

「うんうん♪一応溜花ちゃんより年上なんだよ♪」

「お兄そうなの？」

「まあ400年は生きてるし物凄く年上だな」

「・・・魔戒法師って色々と規格外過ぎるよ、主に残念な方向に」

「いや流石に師匠はマトモ『お姉に比べたらでしょ？お兄お姉と一緒にいるから感覚が麻痺してるんだよ、四ノ宮家でマトモなのはお父さんとお兄だけだよ』はい、そうですね」

少女が煌牙の妹だったと衝撃の事実を知らされた一同、一悶着ありながらも自己紹介を経て蝶屋敷へと帰る事にしたが、煌牙がいない四ノ宮家で花蓮と桜花の相手は不可能と判断した溜花は父の泰造に二人を押し付け煌牙に付いて行く事を決め五人は蝶屋敷へと歩き出した。

柱業務で忙しい煌牙、溜花もまた任務で家を空ける日もあり煌牙に甘える機会が少なかった溜花はここぞとばかりに甘え足が痛い理由を口実に煌牙におぶさり嬉しそうに顔を埋める。

朔弥も煌牙に甘えだすが煌牙から自分で歩けと厳しい言葉を投げられる。桜花や朔弥には比較的厳しい煌牙だが小さな頃から可愛がっている溜花には甘い煌牙、しのぶはおぶさっている溜花を見て密かに羨ましいと思いつつもおぶさりたいたいと考えていた。

そんな中義勇は好物である鮭大根がようやく食べられると僅かに頬を緩め笑っていた。

義勇が笑う。鬼殺隊の中でも一大事なこの珍事は誰にも気付かれることなく密かに幕を閉じたのだった。

柱会議からの帰り道応援要請を受けた煌牙達は妹の溜花と合流して

蝶屋敷へと帰り着く。

帰り着いた時刻は既に深夜を回っており蝶屋敷の者達は寝静まっていたと思っていたが那田蜘蛛山の件もあり数多くの隊員がこの蝶屋敷に運び込まれ、治療や介抱に明け暮れていたアオイ・きよ・すみ・なほ達はこの時間になつてようやく落ち着きを取り戻していた。

縁側で体を休めていると帰宅したしのぶ達が顔を出しアオイ達に労いの声をかけると煌牙は腹が減っているだろうと炊事場に直行し賄いの調理に取り掛かる。

「煌牙さん私達もお手伝いします」

煌牙一人に任せるのは可哀想だときよ・すみ・なほの三人が手伝いを申し出るが先程まで働き詰めだった三人に手伝ってもらおう訳にはいかない煌牙は三人にゆっくり休むよう諭すと再び調理に取り掛かる。

きよ・すみ・なほの三人は申し訳なきそうに引き下がるが、実は煌牙が可哀想だというのは建前であり、本音は煌牙の自宅がアレな為料理なんてやらないと思っていたので下手な品が出るくらいなら私達ごと手伝いを申し出たのである。

そんな事を思われていたとは知らない煌牙は三人に対し良い子達だなと感心しながら調理をしていた。

「……富岡さん見てるだけじゃなく少しは手伝って下さい、てか向こうで休んでいいんですよ?」

「胡蝶達がいる場に俺が居ても邪魔になる」

「だからこつちに逃げて来たんですね……富岡さん鮭切り分けてくれないませんか?」

「ー水の呼吸 拾壺の型 『富岡ー!!?』」

「はあはあーいや・あんた何しようとしているの?何で鮭切るのに型を使おうとしてるんだよ!しかも拾壺の型とか、それ鮭細切れになつ

ちやうからね？ 鮭フレークになつちやうからね？」

「そうか・・・拾の型『それも駄目!!？ 鮭切るのに回転いらぬ！ 威力もいらぬ！』・・・」

「煌牙ちゃん！ 大きな声出してどうしたの？ 何があつたの？」

「・・・・・・（ここであんたまで来るのかよ？ 無口な天然と喋る天然の組み合わせとか・・・面白そうだな） 朔弥さん、富岡さんの相手してあげて？」

「ふっふうふう♪ 煌牙ちゃんの頼みなら♪ よろしくね義勇ちゃん♪」

「・・・・・・」

「はっはーん♪ なりきつてるんだね♪ 金髪ツンツンのくく名前くまあいつか、義勇ちゃんこの場合こう言うんだよ《興味ないね》って」

「・・・・・・」

「私達はく・・・負けないし！・・・倒れないし！・・・挫けないし！・・・揃わなくても泣かないし」

「・・・・・・」

「喋らなくても泣かないし・・・泣かないし・・・ウルツ

「うわああん！ 煌牙ちゃん！ 義勇ちゃんが喋ってくれないく」

「よしよし（富岡さん見事なスルー見せてもらいましたよ、俺も今度から参考にさせていただきます）」

「煌牙ちゃん私皆んなの所に戻ってるね？」

「了解了解（富岡さんあんたスゲエよ朔弥キラーの称号あげたいわ）」

「・・・・・・（済まない何と返事しようか考えていた、泣き出すとは思わなかったが・・・俺は嫌われていない・・・筈だ）」

煌牙と共に炊事場にいた義勇、煌牙の手伝いをしようとしたが型を繰り出そうとして慌てて煌牙に止められるのだが更に別の型を繰り出そうとしてまたも止められると朔弥が煌牙の声を聞きつけやって来るのだが煌牙の悪戯心で義勇と朔弥の会話？ が始まる。

朔弥の一方的な発言に義勇はスルーという返し技を放ち見事朔弥を撃退した義勇、義勇の活躍に煌牙も感嘆していたが、義勇自身は返

事をするつもりでどう返事しようか考えていたのだが返事をするよりも早く朔弥が泣き出してしまい義勇から逃げるように炊事場を後にした朔弥、義勇はそれでも自分は嫌われていないと少し自信なさ気に言い聞かせるのだった。

義勇は夜風に当たって来ると煌牙に告げると炊事場を後にし一人縁側で物思いに耽け、炊事場で一人になった煌牙は本格的に調理を開始するのだった。

「・・・さん・・・兄さん！」

「うお☒カナヲいたのか、ゴメン気づかなかった」

「うん、さつきから呼んでたけど反応無かった・・・また考え事？」

「まあな・・・なあカナヲ、カナヲはどうして炭治郎を信じようと思っただんだ？」

「・・・兄さんに似てるから・・・」

「え？それだけ？・・・いや似てる？」

「雰囲気似てる」

「そう・・・なのか？まあカナヲがそう感じたんならそうなんだろうな

・・・カナヲゴメンなお前まで巻き込んで」

「ううん、私も相談しないで勝手に・・・兄さんゴメンね」

「俺達兄妹なのにな、昔一緒に頑張ろうって誓ったのにな」

「うん・・・私も兄さんを支えるって誓ったのに結局何も」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「だったらカナヲを煌牙さんの継子にしちゃえば良いんじゃないですか？」

「しのぶ」

「しのぶ姉さん」

「私はこれから薬の開発に尽力したいと思いますし、カナヲも煌牙さんと一緒にいるのが一番だと思いますから、お互い唯一の血縁なんですしもつと歩み寄るべきなんです」

「焔牙さんもこれから蝶屋敷で暮らすんですから良い機会じゃないですか」

「兄さんホントなの？」

「まあ、炭治郎が回復するまでだけど」

「・・・嫌」

「え？カナヲどうした？」

「ホントは離れたくなかった、兄さんに迷惑かけちゃ駄目だって我慢してた。でも・・・私・・・兄さんと一緒にいたい」

「そっかカナヲゴメンな、一緒に居てやれなくて」

「これで決まりですね、実の妹の切実な願いを無下にする非情な兄なんてこの世にいますでしょうか？いるとしたら鬼ですよ焔牙さん」

「兄さん」

（コレ断れない空気だよね？いや俺もカナヲとは一緒にいたいけどさ）

「分かったよ、でも一旦四ノ宮の屋敷に戻るからな。ちよつと確認したい事もあるし」

「それは構いませんが、ちゃんと帰って来て下さいね」

「兄さん私も一緒だからね？」

「分かった、戻る時はカナヲも一緒に行こうな」

「うん」

しのぶ達が帰宅した事を知ったカナヲは炊事場に焔牙がいる事を聞かされ早急に焔牙の元へと駆け寄る。

そこで焔牙とカナヲ久々に二人で話す事ができ、炭治郎の事や二人の誓い等の話をしてるとしのぶが炊事場に現れカナヲを焔牙の継子にすると話し出す。

炭治郎が治るまでと決めていた焔牙だったがカナヲが秘めた想いを焔牙に打ち明けると、焔牙もそれを受け入れざるを得ず蝶屋敷に暮らす事になってしまう。

そんなやり取りが行われながら料理は進み、出来上がった料理を

食卓へと運び込む焔牙・カナヲ・しのぶの三人

焔牙の料理を初めて食べる蝶屋敷の一同はあまりの美味しさに

誰も口を開く事なく一心不乱に食べ続け、義勇は鮭大根の味を噛み締めながら微かに微笑んでいた。

「そういえば前から気になってたんですが四ノ宮家って鬼殺隊においてどの様な役割を担っているんですか？鬼殺隊屈指の名門だとかお館様に次ぐ発言権があるとかは知ってはいますが」

「ああまあ聞いていて気分の良い話じゃないな、表向きの役割と裏の役割があるんだけどさ」

「それについては私から説明します、良いよねお兄？」

「まあいつか？溜花よろしくな」

「では表向きの役割から説明します。蟲柱様が仰る通り私達四ノ宮家は代々牙柱を輩出してきた名門の家柄だと言われています。世間一般から見れば四ノ宮財閥が表の顔でありその裏で鬼殺隊として活動し牙柱を筆頭とする前線の補助、資金援助等の経済面での補助が四ノ宮家の表の役割となっております」

「ふむふむ、それが表の役割というわけですね。それで裏の役割とはどのような」

「はい、皆さんは何故鬼殺隊が政府非公認なのかお考えになった事はありませんか？」

「そうですね私的な見解ですが、鬼の存在自体がお伽話や迷信の一種だと思われ世間一般に鬼の存在が浸透していないのが理由だと思っていますが」

「はい、それは概ね正しいですね。政府は鬼の存在を認知しています。が公表せず裏で鬼殺隊に討伐させて事態の收拾を図っています。故に鬼殺隊は政府非公認な訳ですが、まあ建前ですね」

「どういう意味なんです？」

「この国は今軍備増強路線に注力し他国に攻めていこうという姿勢をとっています、その国が国内で迷信やお伽話の類に翻弄され混乱している様を他国に知られたらこの国に付け入る隙を与えてしまいます。それを露呈したくないのが本音ってところですね」

「なるほど、それで裏の役割と一体どのような繋がりがあるのですよ」

うか?」

「はい、四ノ宮家は財閥としてこの国の主要人物達と強い繋がりがあ
ります。政府や軍の中には鬼や私達鬼殺隊を軍の戦力に加え戦力増
強を考えている人達が少なからずいます。そうならないように政府
と交渉し非公認を維持し続けるのが四ノ宮家の裏の役割なんです」

「私達が軍の戦力・・・考えた事なかったですね」

「だろ? 胸糞悪い話だよ、鬼を含め俺達を生物兵器として人殺しの道
具にしようとしてるんだ」

「そうですね・・・私が余計な事聞いたばかりに、すみません」

「気にするなよ、知っていて損はないだろうし」

「食事中、しのぶがふと気になっていた事を質問すると瑠花が四ノ宮
家の役割を説明するがその内容に場の空気が重くなってしまいしの
ぶは余計な事を聞いたと謝りを入れる。

「焯牙は重くなった空気を交える為に話題を切り替えようと、自分の
部屋の割り当てをしのぶに聞こうと思いいしのぶに話し掛ける。

「そうだししのぶ、俺って何処に泊まればいいの?」

「そうですね、空き部屋がありますしそこに『兄さんは私と同じ部屋で
す』・・・へ?」

「兄さんは私と同じ部屋で暮らすの、兄妹だし何も問題はないから」

「問題ですよ!一緒に暮らすって何?お兄私聞いてない」

「瑠花落ち着け」

「焯牙ちゃんは私と一緒になんだよ?」

「あんたは黙れ」

「あらあらくく♪焯牙君は人気者ねく♪間をとってしのぶと一緒にって
のはどうかしら?」

「ちよつと姉さん☒」

「間の要素が見当たらないんだけど?」

「とりあえず何でお兄と一緒に暮らすのか経緯を話してくれませんか
?家族と引き離されて、はいそうですね。お兄さんには話さなければいけません」

「そうですね、瑠花さんには話さなければいけませんね。焯牙さんで

すがお館様の依頼で隊士の竈門炭治郎君としばらく行動を共にして欲しいと言われたのが始まりです」

「えっ？兄さんそうなの？」

「まあな、お館様から直接言われたし」

「当初焠牙さんは竈門君が完治して復帰した際に行動を共にする予定でしたが、先日の討伐の件で負傷者が多数運び込まれてるので人手不足の補充と機能回復訓練に参加して欲しいと思い私がお願いしました」

「そうですか・・・仕方ありませんね」

食事中そのような会話が聞こえる中、義勇は一人黙々と鮭大根を頬張り続けていた。

焠牙はカナヲが要望を強く通し続けた為、カナヲと同室という事になるが、人手不足の事もあり溜花も手伝いとして蝶屋敷に滞在する事になり焠牙カナヲと共に過ごす事になる。

カナヲに案内された焠牙と溜花の二人は部屋に入ると、体を休める為に寛ぎ始め、疲れが溜まっていた溜花はすぐにウトウトしだす。

「溜花さん寝るなら布団で」

カナヲに声をかけられた溜花は重くなっていた瞼を開くと羽織を脱ぎだし溜花に用意されていた寝間着へと着替え出す。

焠牙は仮眠を取る前に風呂に入ろうと部屋を後にすると風呂場へ向かい始めるが途中で同じく風呂に入ろうとするしのぶに出くわし二人で軽い話をしだす。

「焠牙さんも今からお風呂ですか？」

「うん、寝る前に入ろうと思ってさ」

「先にお風呂いただいてもですか？」

「しのぶの屋敷だしそれは構わないよ」

「すみません、あ！私から頼んでおいて失礼ですが焠牙さんの着替えを用意してませんでしたね、申し訳ないですが患者用の寝間着でも構いませんか？」

「いや、貸してもらえらなら助かるよ」

「じゃあ今用意してきますね」

そう言うとしのぶはその場から引き返し、寝間着を用意して焔牙に手渡すと風呂場へと向かい焔牙はしのぶが風呂から戻るまでの間縁側で

待つ事にした。

縁側で寛いでいる焔牙は空を見上げながら寛いでいたが、焔牙の元に義勇が現れ焔牙に話しかけ出す。

「四ノ宮、炭治郎達の事よろしく頼む」

「出来る限りの事はやりますよ、富岡さんはどうするんです?」

「帰って寝る」

「ここで仮眠とって炭治郎達の顔を見てからでも遅くはないと思いますが」

「……」スタスタ

炭治郎達の事を焔牙に任せた義勇はその旨を焔牙に伝えると足早にその場を去り、一人残された焔牙は義勇が去った方向を見つめながら呟いた。

「マジで飯食いに来ただけじゃん」

焔牙はそう呟きながらしばらく待っているとしのぶが風呂からあがり焔牙も風呂に向かいその日の疲れを取るとカナヲの部屋に向かいそのまま寝てしまうのだった。

「ふあゝゝ良く寝たゝゝ、今何時だろ?」

「もうお昼過ぎてるよお兄」

「え?寝すぎだろ俺・あ、溜花おはよう」

「おはようって時間じゃないけどね」

「確かに、溜花はさつき起きたのか?」

「そんなわけないじゃん、さつきまで蟲柱様達のお手伝いしてたんだからね。少し休憩もらったからお兄の様子を見に来たの」

「なんかすいません」

連日の疲れからか熟睡していた焔牙は目を覚ますと既に昼を過ぎ
ており様子を見に来た瑠花と軽く話をすると起き上がり自分も手伝
う事はないかと瑠花と一緒に蝶屋敷の中を歩きだすのだった。

歩いている途中、焔牙は蝶屋敷で治療を受けている炭治郎の事を思
い出すと瑠花に炭治郎が使っている病室を聞きながらその部屋へと
向かうも瑠花は露骨に嫌そうな顔になるがそれでも焔牙に着いてい
く事は止めず焔牙の後を追うように歩きだす。

炭治郎がいるだろう部屋に着くと焔牙はなるべく音を立てないよ
うにゆっくりと戸を開け部屋の中を見渡す。

その部屋は個室ではなく数人が共同で使う病室になっており、そこ
に設置されているベッドの真ん中に炭治郎はいた。

炭治郎の両隣にも炭治郎と同じ隊士が世話になっているのだろう、
焔牙は炭治郎の両隣のベッドにいる隊士を見渡す。

(炭治郎から見て右側の隊士は・・・蒲公英みたいだな・・・え？なんで頭
黄色いの？異国の隊士？そんな話聞いたことないぞ・・・まあそれは置
いといて・・・猪く!!？なんでここにいるんだよ!!？あいつも鬼殺隊
だったのかよ！あの時の状況みたらそうなんだだろうけども、違っ
てほしかった)

病室の中を見渡す焔牙、炭治郎の両隣にいる隊士に強烈な印象を受
けた焔牙は心の中で突っ込みを入れつつそつと戸を閉めようとして
いた

「あつ焔牙さん！」

「・・・よつ炭治郎、昨日よりは元気そうだな(そーいやコイツ、匂い
でわかるって言ってたな迂闊だった)」

「焔牙さん昨日はありがとうございました！」

「ああ、気にしなくていいから」

「焔牙さんどうして部屋に入って来ないんですか？」

「え？いや、今入ろうと思ってたところだから、うん(猪がいる部屋に入
りたくなかったんだよ！炭治郎には悪いけど)」

そつと戸を閉め立ち去ろうとした焔牙だったがその前に炭治郎に

気付かれ声をかけられる焠牙、炭治郎に軽く挨拶をするも部屋の中に足を踏み入れようとしない焠牙を見て炭治郎は何故部屋に入らないのか疑問を焠牙にぶつけると、心の中で突っ込みを入れながらぎこちない返し渋々部屋の中へと足を踏み入れる焠牙であった。

「炭治郎この人誰なの？炭治郎の知り合い？」

「善逸は知らないんだっとな、この人は四ノ宮焠牙さん俺と禰豆子の恩人なんだ」

「そうなんだ、炭治郎と：禰豆子ちゃんの恩人!!？ままままかさか!!？」

禰豆子ちゃんの恩人である事をいい事にあんな事やこんな事を禰豆子ちゃんに要求したり、拳句には禰豆子ちゃんに結婚を迫ったりする気なんだあゝ!!？この下衆野郎、禰豆子ちゃんは渡さないからな

「善逸！焠牙さんに向かって何て事言うんだ！善逸みたいに気持ち悪い事焠牙さんが考えるはずないだろ！焠牙さんに謝れ」

「気持ち悪いって、正直過ぎるだろ」

「焠牙さん善逸がすみません」

「へ？ああ、いや気にしてないから・・・うん（ごめん、ホントは気にしてる下衆野郎とか初めて言われたよ）」

「焠牙さんだっけ？俺は我妻善逸、焠牙さんも鬼殺隊の人なんだよね？」

「善逸か、俺は四ノ宮焠牙って名前だ。もちろん鬼殺隊の一員だよ」

蒲公英のような黄色い頭をした鬼殺隊士、我妻善逸は同期である炭治郎に焠牙の事を聞くと突如取り乱し、禰豆子を渡さないと焠牙に言いつけると炭治郎から諫められ落ち着きを取り戻すが、唐突に善逸から

下衆野郎と言われた焠牙は内心ショックを受け落ち込んでいた。

その後善逸が自己紹介をすると焠牙も自己紹介をして善逸を交えて炭治郎と話し出した。

「なあ、ずっと気になってたんだけど・・・隣の猪はゝ」

「ああ、あれは被り物でちゃんと人間ですよ、伊之助ゝ」

「・・・よろしくね」

「あ、ああよろしくな。(え?・しおらしい、喉が潰れて上手く喋れないのか)」

「伊之助は喉が潰れてるから上手く喋れないんです、すいません」

「だろうな、蜘蛛顔のゴツイ鬼に掴まれてたし」

「そういえば焠牙さんもあの山にいたんですよね、あの鬼は焠牙さんが?」

「猪・じゃなかった伊之助を助けたのは富岡さんだよ、まあ鬼を斬ったのは俺だけだ」

「なんであんた無事なんだよおっく!俺なんかこんなちくりんにされて苦い薬飲まされるわ、飲まないと怒鳴られてももうだよ」

「ああ善逸どんまい、頑張つて飲んでくれとしか言えないな」

「あんた自分が飲まないからそんな事言えるんだあ!飲め!あんたもこの苦い薬を今すぐ飲めっく!!?」

「いやいや、それ飲んだら俺アオイさんに怒られるからさ遠慮しとくよ」

「飲めつつてんだよおっく!!?」

「善逸いい加減にしろ!なんでそんなに恥を晒すんだ」

「炭治郎・・・お前それ・・・ブフツ!・・・直球すぎ・・・あはははは」

猪の被り物をした鬼殺隊士 嘴平 伊之助、焠牙は部屋に入つてからずっと伊之助が気になっていて炭治郎に伊之助の事を聞くと炭治郎は伊之助に呼びかけ、伊之助はしゃがれた声で焠牙に喋りかけると焠牙も伊之助に返事を返し、伊之助の声がしゃがれてるのは喉が潰れてると

察する。

炭治郎は伊之助の喉が潰れてる事を焠牙に教えるが、焠牙はそのことを知っているかのように伊之助の喉が潰れると原因である鬼の事を口にしだすと炭治郎が焠牙があゝの鬼を斬ったのか気になり聞いてみると

伊之助を最初に助けたのは義勇であるが、鬼を斬ったのは自分であると焠牙は説明をする。

その会話を聞いていた善逸が焠牙が無傷である事に腹を立て、自らの現状を嘆き始めると焠牙が善逸を励ますが八つ当たりで焠牙に薬を飲めと騒ぎ出す善逸、善逸の為に調合した薬を焠牙が飲むと自分がアオイに怒られると飲む事を拒否した焠牙だったが、拒否された善逸は更に騒ぎ出すと今まで黙っていた炭治郎が善逸を叱り始め、炭治郎が言った言葉に笑いを堪える事が出来なかった焠牙が笑い出す。

ーガラガラーバタンー

焠牙が病室に入って炭治郎達と会話してる中、溜花は病室には入らず廊下で一人待機していたが、善逸の騒ぎ出す声や焠牙の笑い声が聞こえると溜花も病室の戸を開け焠牙の元へと駆けつける。

「あ〜♪溜花ちゃん俺の事心配してまた来てくれたんだね〜」

「そうですねー心配だから我慢して薬飲んで下さいねー」

「飲むよ飲むよ♪溜花ちゃんの為に薬ちゃんと飲むよ〜」

「溜花、善逸に塩対応だな」

「ん？普通だよ？」

「焠牙さん、溜花ちゃんとも知り合いなんですね」

「溜花は俺の妹だぞ炭治郎」

「焠牙さんの妹…ん？焠牙さんの兄妹って溜花ちゃんにカナヲ、桜花さん…は義理の妹…あれ？カナヲは栗花落、桜花さんは四ノ宮

焠牙さんも四ノ宮…意味がわかりません」

「え〜とな、カナヲとは実の兄妹だけど昔色々あつて生き別れなんだ、その後俺は四ノ宮家に迎え入れられて四ノ宮を名乗っているって事だよ、桜花も溜花も四ノ宮だから俺とは義理の妹の間柄だな」

（昨日柱の人達の前で親に弟や妹を殺されたって焠牙さん言ってたな俺は鬼に家族を殺されたけど、実の親に家族を殺されるって俺には想像つかない、焠牙さんもカナヲも悲しい過去を背負ってるんだ）

「焠牙さんすいません!!？変な事聞いちゃって」

「炭治郎が気になるのも仕方ないさ、気にするなよ」

「お兄はお兄だから!…血の繋がりとかそんなの関係ない!」

わたしにとつてお兄はホントのお兄だから!」

「そうだな、溜花も桜花も俺の家族だよ」

煌牙、炭治郎、善逸、溜花の四人で会話をしている中、一人残された伊之助、件の鬼との戦いから自信をなくし元気がなくなった彼は四人の会話を聞きながらも参加出来ずにいた事を密かに悔しがっていた。「そういえば溜花ちゃんも鬼殺隊だよね？俺達と同じ最終選別にはいなかったし・・・いつからいたの？」

「私は一年前の最終選別を受けて入団しましたよ？階級は己です」

「ええええ☒俺達より先輩だよ炭治郎、階級も俺達より上だよお」

「そうだな、俺達も頑張ろう善逸」

「無理だから！俺死んじゃうから！」

「やる前から諦めるな善逸、善逸はやれば出来る奴だ」

「やる前に殺られるんだあゝゝ!!？いやだ死にたくないゝ」

「ははは、善逸は面白いなゝ」

「笑い事じゃねえから！俺の命がかかってるんだよお！あんたの階級はなんなんだよ？」

「俺？俺は柱だな、牙柱を就任してるよ」

「・・・は？・・・柱？ぎいやああああああ!!？俺柱相手に失礼な事言ってたよお！殺される！柱に殺される！お願いだから殺さないでえゝゝ!!？」

「善逸は大袈裟だな」

「炭治郎ゝゝ!!？知ってたなら教えろよおゝゝ!!？俺ただの恥晒しじゃん」

「善逸が恥晒しなのは元々じゃないか、何を言ってるんだ？」

「ちよっ！炭治郎・・・善逸悪い・・・笑いを堪えるのキツイ」

「そこ笑うところじゃないからな！あ、いや笑うところじゃありませんから」

「いやゝ悪いな善逸、別に言い直さなくてもいいぞ？さつきみたいに気軽に話してくれていいから、俺もその方が楽だし」

「え？俺の事殺さない？俺生きてて良いんだよねえ？」

「当たり前だろ？善逸、何があっても最後まで生きる事を諦めるな」

「はい！俺は死にたくありません！」

「あはははは！善逸は大丈夫そうだな」

善逸が騒ぎながらも会話は進み、焯牙は久方ぶりに楽しく他の隊士と話が出来て満足そうにしていた。

柱である焯牙は任務の最中他の隊士と話す事はあるが、焯牙が柱という事で隊士達は話し方や対応に気を遣い、気軽な会話が成立しなかったが敬語ながらも萎縮しないで話してくる炭治郎、時折焯牙に突っ込みを入れる善逸、二人と話してる焯牙は時間を忘れ他愛もない話を続けていた。

会話が続く中、焯牙は伊之助の事も気にしており話をしてみたいと思っていたが伊之助の状態では会話は辛いだろうと声をかけるのは控えていたが、ふと立ち上がり伊之助の元へと向かうと一言だけ声をかける。

「元気になったら一緒に強くなろうな」

そう伊之助に言いながら伊之助の頭を軽く撫でると炭治郎、善逸に顔を向け二人に向かって当初の目的を話し出す。

「炭治郎、怪我が治ったら機能回復訓練つてのがあるんだけどさ、そこで手伝いする事になったからその時はよろしくな。善逸も一緒に頑張ろうな」

二人とそう告げながら溜花と共に病室を後にする。

「ねえお兄・・・その訓練実戦形式も組み込む気でしょ？」

「ん？まあ訓練の段階を踏んでからな」

「私にも実戦形式の稽古付けて？」

「・・・そうだな、なら一緒に訓練受けるか」

「うん」

それから数日後、一足先に炭治郎が回復すると機能回復訓練へと赴くがそれは炭治郎にとって試練の日々の始まりでもあった。

炭治郎が蝶屋敷に滞在して数日後、怪我が癒えた炭治郎は機能回復訓練を受ける為蝶屋敷の道場へと来ていた。

「あ！炭治郎、怪我はもう大丈夫みたいだね」

「ああ！おかげさまでバツチリだよカナヲ」

「うん、良かったね炭治郎」

「あつ！そうだ、カナヲ！俺と禰豆子の為にカナヲまで命を：ありがとう！俺達を信じてくれたカナヲの為に俺頑張るから！」

「うん！頑張ろうね炭治郎」

炭治郎が道場に姿を見せると既に待機していたカナヲが炭治郎に話しかけて二人で話をしだす。

「いつまでも話してないで訓練を始めますよ、焔牙さんも待っているんですからね」

「俺はもう少しゆっくり『待ってますよね！』待ってます！」

アオイが訓練を始めようと二人を急かすように告げ、焔牙に話を振るが焔牙はもう少しゆっくりしてもいいんじゃないかとアオイに言いかけるがアオイの剣幕に押され意見を切り替えてしまう焔牙、そんな焔牙を見てた溜花は何かを言いたげでジト目で焔牙を見つめた。

まず炭治郎が最初に受けるのは、寝たきりで凝り固まった体を解す柔軟だったが、三人娘が炭治郎を解し始めると炭治郎は痛みを必死に我慢しながら耐え抜き柔軟が終わると既に事切れたかのようにその場に倒れこんでしまう。

「休んでないで次いきますよ」

そんな炭治郎に発破をかけるようにアオイは次の訓練の説明をします

次に炭治郎が受けるのは反射訓練、机に並べられた湯呑みの中には薬湯が入っており互いに掛け合うのだが、持ち上げた湯飲みを相手に抑えられるとその湯呑みを動かせず、いかに早く反射して薬湯をかけ

るかを鍛える訓練だが、炭治郎と向かい合う相手はカナヲであり開始の合図と共に薬湯をかけられる炭治郎は一瞬の出来事に呆然とするも

れ 気を取り直しよう一度やり直すが、炭治郎が掴んだ湯呑みを抑えられ

またしてもカナヲに薬湯をかけられる。

その後何度もカナヲに挑む炭治郎だが結局薬湯をカナヲにかける事は出来ないままだった。

「炭治郎全敗だな、反射からの動き出しや動作がカナヲに比べて遅い」
今までのやり取りを見ていた焠牙は、カナヲと炭治郎の動きを比較していて炭治郎はカナヲに薬湯をかけるのは無理だと判断する。

「お兄、私もアレやりたい」

「そうだな、溜花もカナヲに相手してもらいな」
「うん」

訓練の様子を見ていた溜花も反射訓練に参加したいと焠牙に申し出ると

焠牙はカナヲに溜花の訓練に付き合ってくれよう頼み、カナヲもそれを引き受けると溜花はカナヲと対峙し互いに開始の合図を待つ。

結局溜花も炭治郎と同様にカナヲに薬湯をかける事は出来ないでいたが、炭治郎より動き出しが早くカナヲも溜花の行動に注意しながら薬湯をかけるといった訓練が続いていた。

その頃炭治郎は全身訓練、所謂鬼ごっこをしていたのだが引き受けるカナヲが溜花と反射訓練をしていた為、代わりに焠牙が炭治郎の訓練相手を引き受ける事にし炭治郎は必死に焠牙を捕まえようと走り回っていた。

「炭治郎、もう少しだ！もう少しで捕まえられるぞ！頑張れ頑張れ」
（嘘だ！焠牙さんには余裕がある、ワザと捕まえられそうな距離を保って俺の出方を見ている）

炭治郎から逃げる焠牙は炭治郎が触れそうで触れない微妙な距離を保ちつつ炭治郎から逃げていたが、余裕の表情から炭治郎はワザと

距離を保っていると判断しどう捕まえようか思考錯誤しながら煌牙を懸命に追っていると反射訓練を切り上げたカナヲと瑠花が煌牙と炭治郎の全身訓練を眺めていて瑠花が全身訓練に参加したいと言いつ出す。

「お兄私も参加したい」

「うし、炭治郎と瑠花・ああそれからカナヲも参加な」

「え？私も？」

「カナヲは俺の継子でもあるんだろ？これも稽古だと思ってやってみなよ、まあ捕まる気は更々ないけどな」

「絶対捕まえるから」

瑠花の参加表明に煌牙は炭治郎と瑠花に加えカナヲも全身訓練に参加するよう話すとカナヲはまさか自分も一緒に訓練に参加するとは思っておらずキョトンとした表情になるが煌牙は自分の継子でもあるから

これも稽古のうちだと話しカナヲに挑発をかけるとカナヲも煌牙の挑発に乗り本気で捕まえようと煌牙に駆け出す。

「はあはあーやっぱりさっきの煌牙さんは本気じゃなかったんだ

動きがまるで違う、俺達とは比べ物にならない・あれが柱」

「はあ〜、でもあれでも本気じゃないんですよ、凄いのはカナヲさんです。」

本気じゃないとはいえお兄から余裕の表情が少し消えました」

炭治郎、カナヲ、瑠花の三人は煌牙を捕まえようと走り回っていたが

煌牙の動きに翻弄された炭治郎と瑠花は次第に体力がなくなり一足先に脱落し煌牙とカナヲの追いかけてっこを眺めながら呟いていた。

「本気で走ってるのに兄さんに少しも触れない」

「簡単には触らせないさ、言っただろ？捕まる気は更々ないって」

「・・・絶対捕まえる」

一人残ったカナヲだったが炭治郎、瑠花がいなくなった事で思う存分に動き回る事が出来るようになり自身の持てる最大限の動きで煌牙を追いかけるがカナヲの動きを見て距離を詰めさせないように動

く焠牙を追い込む事すら出来ず、悔しそうに呟くとまだ余力のある焠牙がカナヲをけしかけるように返すと余程悔しいのか絶対捕まると呟くと

訓練の趣旨を無視して実戦さながらの動きで焠牙に迫る。

「ちよーマジか！」

「絶対捕まえるって言ったから」

「カナヲがその気なら俺もマジでやるからな」

カナヲの急激な変化に驚きを隠せない焠牙だったが絶対捕まえる
と意地になつてるカナヲを見た焠牙も絶対捕まらないと意地になり
実戦さながらの動きで迫り来るカナヲを躲し続ける。

「凄い・・・カナヲも焠牙さんも・柱ってあんなに凄いのか、焠牙さ
んに迫るカナヲも凄いけど焠牙さんはそれ以上に」

「まあ柱ですからね、お兄は魔戒騎士でもあるから身体能力だけなら

柱随一だと思えますよ」

実戦さながらの動きで目紛しく動き回る二人を見て驚愕の表情を
浮かべながら凄いと感想を漏らす炭治郎に普段見慣れてるからと冷
静に説明をする溜花、その隣にはアオイや三人娘が二人の攻防に目を
見開きながら座っていた。

「カナヲ！今日はここまでだ」

「はあはあー兄さん私はまだ」

「息切れしてるし汗たくさんかいてる？また明日も稽古付けるから今日はここ
までな」

「・・・うん」

焠牙は今日の訓練をここまでと切り上げるもまだ悔しさの残るカ
ナヲはまだやれると食い付くが焠牙にまた明日もやるからと諫めら
れ渋々頷きその日の機能回復訓練は終わりを迎えた。

翌日も同じ訓練を繰り返すのだが、伊之助も加わり全身訓練は逃げ
る焠牙に対し炭治郎、伊之助、カナヲ、溜花の四人が追いかけるのだ
が

昨日と同様に焠牙に触れる事すら出来ない日々が続いていた。

炭治郎が機能回復訓練に参加してから二週間後、回復した善逸が加

わりアオイが善逸に説明を始めるが善逸の表情は緊張からか強張っていた。

炭治郎と伊之助が訓練から帰って来る度にゲツソリとした顔で帰って来る為訓練が怖いと思っていた善逸、その為強張っていたのだが伊之助が三人娘から柔軟を受け悶絶していると急に静かになった善逸が炭治郎と伊之助を外へ連れ出そうとする。

善逸の突然の行動に疑問を持つ炭治郎だったが善逸の怒鳴り声と怒りの表情に気圧されついて行く事にした炭治郎と伊之助、取り残された焠牙達はどうしたんだ？と疑問を浮かべる表情で待っていたが外から炭治郎や伊之助の怒る声と善逸の騒ぐ声が聞こえ始める。

善逸曰く、女の子達に触れて天国なのに地獄にいるような表情をするなどか訓練にかこつけて身体を触れるとか破廉恥な内容を恥ずかしげもなく叫び、嫌でも聞こえていた女性陣はその内容に顔を引き攣らせ

焠牙は顔を手を当て残念な表情をしていた。

そんなやり取りがありつつも、訓練は行われ三人娘から柔軟を受ける善逸は実に楽しそうに笑顔を浮かべ幸せな表情になり伊之助は善逸を見て感嘆とじていた。

反射訓練もアオイを相手に紳士的な対応で勝ちを得るもアオイに引かれ、全身訓練もアオイに抱きつき殴られるという善逸の女好きな一面が表れる訓練になっていた。

だが一見楽しそうな訓練もここまで、反射訓練にカナヲが参加すると

全員カナヲに薬湯をかけられ一勝も出来ないまま、焠牙の待つ全身訓練が始まる。

カナヲの意地から始まった実戦さながらの鬼ごっこは炭治郎、伊之助、瑠花も真似をして焠牙を捕まえようと躍起になるが未だ触れる事は出来ず初参加となる善逸はその目紛しく動く焠牙を見て絶対無理だと騒ぎ出し渋々参加するが結局触れる事は出来ずにいた。

翌日、朝から蝶屋敷に訪問客が訪れカナエが対応しに玄関に向かう

と

玄関で楽しそうな会話が聞こえ始める。

「お久だね〜カナエさん♪」

「久しぶりね桜花ちゃん♪ゆっくりして行ってね♪」

「うん♪煌牙は〜？溜花もいるみたいだけど〜」

「朝餉の支度中じゃないかしら？桜花ちゃんも一緒に食べましょう」

「うん♪煌牙の作るご飯美味しいからね〜♪」

朝から蝶屋敷に訪問した桜花、煌牙と溜花の様子を見に来たのだが本来の目的は別にあり、今日はその目的を果たす為に蝶屋敷に来ていた。

「みんなきたよ〜お久だね〜♪」

「お姉☒」

「よっ桜花、久しぶりに桜花の顔見れて安心したよ」

朝餉の時間は皆で一緒に食べる為、居間に集まっていた蝶屋敷の面々

桜花は今の戸を開け元気な挨拶をすると溜花は驚くが煌牙は安心した表情で煌牙に話しかける。

「あ〜〜煌牙〜久しぶりに煌牙に逢えたよ〜、溜花もしばらく見てなかったから心配してたんだよ〜〜？」

「あつうん、そうだね．．久しぶり」

煌牙、溜花の姿を見た桜花は嬉しそうに二人に話しかけるが、溜花はぎこちない返事を返してしまう。

溜花は桜花の事を嫌っていないのだが、桜花のぶっ飛んだ性格から出る意味がわからない謎発言に煌牙みたくツツコミが出来ない溜花、真面目な性格の溜花は桜花を苦手としておりそれゆえぎこちなくなっていた。

「ふお〜〜♪煌牙ちゃんの妹集結だよ〜♪」

「んん〜？貴方が朔弥さん？私は桜花だよ〜〜よろしくね〜♪」

「うんうん♪私も会いたかったよ〜♪合い言葉は〜〜♪」

「ベストマッチ♪」

「あー！！？そうだった！！？こいつら最悪の組み合わせだった！しの

ぶ！二人でこいつらを抑えるぞ！柱二人での合同任務だ」

「え？．．すみません焔牙さんあの二人を抑えるには私は力不足です
柱としてなんとかしたいのですが、申し訳ありません、いえ決して
面倒くさいとは思ってませんよ？」

「．．．終わった．．．平和な日常が崩れ去る」

「あらあら♪焔牙君そんなに落ち込まなくても良いじゃない♪きつ
と楽しいわ」

「カナエさんはね！溜花協力してくれ」

「お兄私は無理！」

「ザルバ！」

「．．．俺様は寝ている、寝ているから起こさないでくれ」

「アオイさん！キヨちゃん、スミちゃん、ナホちゃん！」

「二「無理です！」」

「カナヲだけが最後の頼みだ！」

「えっと．．その」

「カナヲちゃん♪銅貨で決めるのはどうかしら♪」

「うん．．え？」

「はい！アルトじゃくくないとくく!!？」

「．．．．．は？」

「．．．．．プルプル」

「焔牙♪今のは銅貨とどうかをかけた小粋なギャグだよ♪」

「だよねだよね♪焔牙ちゃんはわかってないなあ♪」

「知らぬが仏ってこうゆう事なんだな♪」

桜花と朔弥、二人のやりとりを見た焔牙は忘れてはいけない最悪の
組み合わせを思い出しカナエ以外に協力を求めるがあゝの二人を抑え
る事は不可能と協力を拒否されるが最後の頼みとしてカナヲに協力を
を申し出る焔牙、カナヲは無理だと思いつつも焔牙に協力してあげた
いと迷っていたが桜花が銅貨をかけたギャグを言い出すと桜花と朔
弥のだが二人が口を合わせて謎の発言を繰り返す。

謎すぎてツツコミが出来ないでいた焔牙にギャグの説明をする桜
花と

ギャグを理解出来ない煌牙に皮肉を言う朔弥、あまりの展開に煌牙は

明後日の方向を眺めながら諦めたように呟いていたが、煌牙の後ろでは何かツボにハマったのかしのぶが蹲りながら必死に笑いを堪えていた。

そんなドタバタした朝を迎えた蝶屋敷だったが、なんとか朝餉を終えると煌牙は逃げるように炭治郎達の病室に向かい炭治郎達に一連に出来事を話すと、桜花の事が気になっていた炭治郎は挨拶をしようと桜花の元に駆け出し、煌牙の妹を一目見ようと善逸もまた炭治郎の後を追うのだった。

「あっ！あの、桜花さん」

「ん？あれ？箱を背負った子だ？♪無事だったんだね？♪十二鬼月って言ってた鬼さん君が斬ったの？」

「あ、いや頸を斬ったと思うってたんですが直前に自分で頸を飛ばして

・・結局頸を斬ったのは富岡さんです」

「なるほどね」

「あの！あの時助けに行けなくてすいません！助けに行きたかったんですが十二鬼月の相手で精一杯で・・無事で良かったです！ホントに良かったです！」

「気にしないで♪君は素直な子だね♪もしかして竈門炭治郎君って君？」

「はい！竈門炭治郎は俺です」

「そつかく♪煌牙やお母さんが命を懸けた子がどんな子か気になってたんだよ♪」

「すいませんでした!!？俺達のせいで煌牙さんや他の人達にも迷惑かけて」

「・・そうだね、皆君達の事を信じてるからね、君はその信頼に応えないと！だから！絶対に死んじや駄目だよ？」

「はい！」

「おねえさ〜くん、俺すぐに死んじやいそうだよ〜、俺を守ってえ〜」

「大丈夫だよ〜♪そうゆう子に限って案外しぶといからね〜♪

「というか君は誰〜?」

「俺は我妻善逸です、おねえさん」

「善い・・蒲公英君よろしくね〜」

「なんで言い直したのー!!? 言い直す必要なかったよねえ! ねえ!」

桜花を探し回っていた炭治郎は、縁側で一人寛ぐ桜花を見つけ大きな声で話しかける。

炭治郎の声に反応した桜花も炭治郎に話しかけ二人で色々な話をしている。善逸も話に加わり三人で会話を続けていた。

話題は機能回復訓練に切り替わり炭治郎は反射訓練でカナヲに手も足も出ない事や全身訓練で煌牙に近づく事すら出来ない事を桜花に話していた。

「君達はカナヲちゃんを見てどう思う」

「可愛いし、煌牙さんを追ってる時太ももがチラチラ見えるから目の保養に『うわ〜下衆眼鏡と同類だね〜』」

桜花からの質問にいの一番に答えた善逸、カナヲの容姿や訓練の最中邪な目でカナヲを見ていた事を自ら喋る善逸を可哀想な目で蔑む桜花と炭治郎、二人の視線に居た堪れなくなった善逸は炭治郎に文句を言い始める。

「やめろー! 何でそんな別の生き物見るような目で俺を見てんだ、炭治郎お前も男だろ! 男なら可愛い女の子に目がいくのは当たり前だろ! 太ももが見えたら釘付けになるだろ! 炭治郎よく考えてみる、ドサクサに紛れて女の子を触る絶好の機会なんだぞ!!? 何が悲しくて毎日野郎を触りに追いかけてなくちゃいけないんだよ!!? 女の子を触る為に俺は頑張ってるんだ・・何か言えよ!!?」

言い訳じみた事を炭治郎に話し同調を得ようとする善逸だったが、ひたすら終始無言で憐れむ炭治郎に逆ギレしだす善逸、桜花は自分もそんな目で見られてるのかと思い、身を振ると善逸は桜花を安心させようと一言呟く。

「あ! 大丈夫ですよ、おねえさん胸ないから」

「・・・は？・・・蒲公英君今何て言ったのかなあ？生涯まな板って聞こえたけど、違うよね？そんな事言っていないよね？」

「あばばばつ！そんなごど一言も言っていないですうーっ!!？怖いつ!!？おねえさんが怖すぎるー!!？炭治郎助いで、何でもするからーっ!!？」

「今のは善逸が悪い！いくら桜花さんが貧乳でも言っちゃいけない事を善逸は言ったんだ！ちゃんと謝るんだ！」

「・・・へえ〜炭治郎君もそうなんだ〜そっかそっか〜」

「へ？あ！いや、今のは違うんです！いや違くないけどそうじゃないんです」

「・・・はあ〜炭治郎君変なトコで馬鹿正直だよね？おかげで気が抜けちゃったよ」

「すいません」

「炭治郎ー!!？ありがとうー!!？俺生きてるう〜？死んでないよねー!!？」

安心させるつもりが桜花にとつて言っただけいけない事を言ってしまった善逸、桜花の逆鱗に触れた善逸は恐怖で腰が砕け必死に炭治郎に助けを求めるも炭治郎は善逸が悪いから謝るように言うが炭治郎もまた言っただけいけない事を言っただけ桜花の逆鱗に触れる。

慌てた炭治郎は必死に取り繕うと、毒気を抜かれた桜花は溜息をつきながら怒りを鎮め、炭治郎と善逸は事なきを得て再度質問に答える。

「見た目じゃないけどあの子は俺達と音が違うよ、上手く説明出来ないけど煌牙さんに近いような。兄妹だからと思ってたけど」

「俺もカナヲは俺達と匂いが違うって、どちらかと言うと柱の人達に近いような、それに目が良いのか」

「なるほどね〜君達とカナヲちゃんの違いはわかってるわけか」

「俺達とカナヲは何が違うんですか？」

「君達は四六時中全集中の呼吸使ってる？」

「え？やってないです、やった事ないです、というか出来るんですか？」

「もちろん♪朝も昼も寝る時も常に全集中を維持するのとしなないのじゃ天地程の差があるからね〜♪」

「でも！全集中は少し使うだけでもキツイのに、それを四六時中」

「うん♪柱は当たり前として既に習得してる人達もいるしカナヲちゃんもそうだしね♪」

「それがカナヲと俺達の違い」

「だね〜♪」

「それを習得したら煌牙さんに」

「近づく事は出来るよ〜♪」

自分達とカナヲの違いを善逸は耳で、炭治郎は匂いで違う事を話すと

桜花は少し考えながら、二人に常中の事を話し始める。

柱は当たり前としてカナヲも常中を習得している事を話し、桜花の話聞いた炭治郎は納得した面持ちでカナヲとの違いを理解するとやる気に満ちた顔で習得へと意欲を燃やすのだった。

その日に昼、やる気に満ちた炭治郎は訓練を受けに行くところ、煌牙の姿はなく代わりにしのぶが道場に立っていた。

「今日は用事があるそうなので煌牙さんはお休みです、代わりになるかは分かりませんが今日は私がお相手しますね」

桜花本来の目的、同じ魔戒法師であり桜花達魔戒法師の祖でもある朔弥に会いに来たのだが魔戒関連の事もあり煌牙、ザルバも話に加わる為、それをしのぶに話すと今日はお休みという事でしのぶが煌牙の代わりを務めるのであった。

「しのぶさん!!?よろしくお願いします!!?」

「今日はいつにも増して元気ですな竈門君」

「はい！今より強くなれる事が分かりましたから」

「今より強く?ああ、常中の事ですな頑張ってください」

「常中?桜花さんが言ったのは常中っていうんですね」

「ええ、全集中の呼吸を常に、それが常中です」

「カナヲも常中を習得してるんだよね?」

「うん、最終選別を受ける時も常中を使ってたよ」

「だからあの時、あんな動きが」

やる気に満ちた炭治郎は元気よくしのぶに挨拶をすると、今日はいつにも増して元気だと笑顔で返事をし、常中という今より強くなれる方法を知った炭治郎が嬉しそうに話し出す。

カナヲに話を振ると最終選別の時も常中を使ってたと話すカナヲ、最終選別の時を思い出しながら炭治郎はカナヲに感嘆の目を向けたいた。

「最終選別ですか、煌牙さんや桜花さんもあの頃既に常中を習得してましたね」

「しのぶさんは煌牙さんや桜花さんと同期なんですか？」

「はい、同期ですよ」

「しのぶ姉さん、私兄さんやしのぶ姉さん達の最終選別の話を聞いてみたいです」

「俺も聞きたいです」

「そうですね、なら話しちゃいましょうか」

最終選別と聞いたしのぶは当時、同期である煌牙や桜花が既に常中を習得していたと思いつぶやいているとしのぶの言葉に反応した炭治郎が興味ありげに聞き返してくる。

カナヲもしのぶや煌牙達の最終選別の話は今まで聞かされた事無かったのでこの機会に聞いてみようとしのぶにお願いすると炭治郎も同じだったようで、しのぶは話せない内容でもないのだからこの場にいらる全員に当時の話をする事にした。

藤の花が咲き乱れ幻想的な雰囲気漂う藤襲山、石段を登り切ると開けた場になっており、そこには今年の参加者であろう少年少女達が既に集まっていた。

参加者は様々で中には緊張して表情の固い者、己の実力に自信があるのか堂々としている者、自身の刀を大事そうに抱えてる者等数えで十

五人の参加者がこれから始まる最終選別を待っていた。

「この中で一体何人の人が生き残れるのかしら」

つい先程到着したしのぶは一体何人の人が生き残れるか考え、参加者達を見渡していた。

しのぶは姉であるカナエに最終選別がどのような内容なのか事前に聞かされており出来る限りの準備をしてこの選別へと来ているのだが

見渡す限り他の参加者は刀一本と最低限の荷物を包んだ風呂敷程度の者ばかり、この先の七日間を自力でどうにか出来ないようじゃ鬼殺隊に入っても命を落とす、それを見越しての選別なのだろうか必要なのは最大限準備することもまた生き抜く為の手段であるとしのぶは考えていた。

「到着〜♪煌牙〜私が一番のり・・・じゃなかった〜多分煌牙がドベだよ〜♪」

「だろーうな、途中で桜餅食べたって桜花が言い出したからこうなる事はわかってた」

「それ言っちゃう〜？煌牙が言っちゃう〜？おっちゃんよもぎ餅に桜餅、あとおしるこも。焙じ茶も急須で出してって堪能してたのは誰ですか〜？」

「俺ですね、はい。食べ過ぎた感はありません」

恐らく最後の参加者であろう二人組の少年少女、煌牙と桜花は他の参加者に比べ緊張感のかけらも感じられない話をしながらこの場へとやって来て到着した二人を見たしのぶは呆れた眼差しを二人に向けていた。

（あの二人は何なの？緊張感のかけらもないじゃない、荷物はおろか刀一本も持ってないなんて、ここは観光で来る所じゃないわよ）

緊張感のかけらもなくまるで観光で訪れたような煌牙と桜花の態度に

内心苛立ちを覚えたしのぶ、この先の選別ですぐに命を落とすだろうがそれは本人の自業自得、最終選別は遊び半分で参加していいものじゃないと割り切ると二人から目を背けしのぶは自分の日輪刀を見

つめ出すのだった。

(たとえば鬼の頸が斬れなくても私は・・・)

小柄故に筋力の少ないしのぶ、鬼の頸を斬る事が出来ないしのぶは斬る事より突く事を重きに修行を重ねこの選別に参加していて、たとえ頸を斬れなくとも鬼狩りになると意気込み刀を見つめていた。

「皆さん今宵は鬼殺隊最終選別へとお集まりいただきありがとうございます
います。私は最終選別を案内します産屋敷あまねと申します」

煌牙達が到着してから間も無く、最終選別の案内人が現れ参加者達に向かつて話を始め出し、参加者一同は一斉に案内人へと振り返る。

今回やって来た案内人、産屋敷あまねは鬼殺隊現当主 産屋敷耀哉の妻であり彼女は今回の参加者の一人に鬼殺隊の希望になる可能性を秘めている者がいる事を耀哉から聞かされておりこの場に赴いていたのだった。

あまねは参加者達に最終選別の説明を話すと、ようやく選別が開始され参加者達は意を決して山の中へと向かつて行く。

煌牙達は説明を聞きながら何か考えていたようで、山の中へと向かう前にあまねに質問をするのだった。

「あの、この選別生き延びる事が条件で鬼を絶対に倒さないと駄目とかじゃないんですよね？」

「そうですね。生き残る事が条件、鬼を殺さなくても生き延び七日後にこの場に戻る事が出来れば」

「わかりました。ありがとうございます」

煌牙の質問に答えたあまねは山の中へと向かう煌牙達を優しく見守りながら呟いていた。

「あの子が私達の希望」

煌牙と桜花は山の中へ歩きながらこの選別の事を話していた。

「煌牙、この選別ってやつぱりアレだよ」

「俺達が過ごしたあの山の試練とほぼ同じだな、七日間ずっと籠るつてのが違う所ぐらいか？」

「生き残るだけなら楽勝だね♪」

「仮にそうだとしても油断はするなよ、生き残るなら目の前の脅威は

潰さないといけないし何かあるか分からないからな」

そんな話をしながら山に入る二人、山に入る途端二人に向かって話しかけて来る者がいた。

「ちよつと貴方達―此処からは遊び半分で立ち入っていいとこじやないわ！」

二人に向かつて忠告してくる少女、しのぶは遊び半分で参加したような二人の前に立ちはだかりこの先に行かせまいと再度忠告をする。

「貴方達何を考えてるの？刀一本も持たないでこの先に行くつもり？」

此処から先は鬼が出るの、死にたくないのなら今すぐ引き返して！」

忠告するしのぶの表情は二人に対する怒りが表れており、今すぐ引き返すようお願いしながら睨みつける。

二人を最初見た時は私には関係ないと割り切っていたがいざ選別が始まると心配になり無駄に命を落とす必要はないとこうして二人がやって来るのを待っていたしのぶ、そんなしのぶの背後から鬼が現れしのぶに襲いかかろうと迫り来る。

迫り来る鬼に対し向かい合う形になっていた二人は即座に動き出し煌牙はしのぶを庇い桜花は鬼に飛び蹴りを放つ。

「え？今何が・・・」

「ちよつと鬼さん〜今煌牙が怒られてるとこなんだから邪魔しないで〜」

「桜花、今良いこと言ったと思ってるだろ？怒られてるのお前もだからな」

咄嗟の出来事に事態を掴めないしのぶをよそに余裕のあるやり取りをしている煌牙達、鬼を目の前に臆する事もなく佇む二人にしのぶは啞然とした表情で二人を見ていた。

「俺を蹴った小娘―！貴様から喰い殺してやる！」

蹴り飛ばされた鬼は起き上がると桜花を睨み付けながら激しく怒り桜花を喰らうと叫び出して走り出してくる。

「鬼さん静かにして!!？」

そう言いながら桜花は自身が着ている羽織の懐から日輪刀を引き

出すと抜刀せず鞘ごと日輪刀を鬼に叩きつける。

「があっ☒」

「へ？今何処から刀出したの☒」

頸へと直撃した衝撃で呻き声を上げ足を止める鬼、一連の流れを見てたしのぶは桜花の懐から日輪刀が出てきた事に驚き目を見開く。

「ん？何処からって、懐からだよく♪」

「懐って、そんな刀仕舞えないわ！」

「あんたの言いたい事は分かる、とりあえず目の前の鬼を片付けてからな」

懐から出したと言う桜花に対し、しのぶは子供の身長で日輪刀を懐に仕舞うには無理があると否定するのだが、しのぶを遮るように煌牙が前に出ると煌牙もまた羽織っていた羽織から日輪刀を引き出し抜刀すると一瞬で鬼に近づきその頸を斬りつけ目の前の鬼を片付ける。

「貴方も☒一体貴方達は何なの？刀一本すら持たないで参加したと思えば何処からか刀を持ち出して・・・意味が分からないわ」

「俺達は何なの？って鬼殺隊に入る為に参加したんだから皆と同じ『同じじゃない！貴方達が日輪刀を引き出したのは明らかに不自然よ、普通じゃないわ』」

「普通じゃないよ♪私達は守りし者だから♪」

「守りし者？・・・確か前に姉さんが言ってた古の」

「古から受け継がれてきた人の想い、私達はそれを受け継いでいくの♪煌牙はまだ魔戒騎士見習いだけどね」

「そうだな、でも必ず認めてもらう！牙狼になって悲しみの連鎖を断ち切る」

煌牙も懐から日輪刀を引き出すのを見てしのぶは現状を理解出来ず混乱していると煌牙から皆と同じだと言われ、すかさず煌牙達は普通じゃないと言いつ返すしのぶ。

そんなしのぶに桜花は自分達は守りし者であり普通ではないと答えるとしのぶは以前姉であるカナエに鬼殺隊に古から伝わる守りし者の話を聞いていた事を思い出す。

煌牙と桜花もまた守りし者としての使命を語り煌牙は必ず牙狼に

なるとこの場で誓うのだった。

「ちよつと待って！貴方達が他の参加者達と違うのは分かったわ、でもどうやって日輪刀を出したのかしら？」

「ああ、俺達の羽織は特別なんだ。俺が持つてる日輪刀があるだろ？」

この刀を羽織の内側に」

煌牙達が他の参加者と違う事は理解したしのぶだが、どうやって日輪刀を出したのか分からないしのぶはその謎を突き止めたく煌牙達に食い下がると煌牙は自分達の羽織は特別だと言い、手に持つ日輪刀を羽織の懐に収めると日輪刀は羽織に飲み込まれるかのように消えていく。

その様を見ていたしのぶだが、その常識を超えた不可解な現象に我を忘れて固まり立ち尽くしていた。

「固まったな、俺も最初見た時はこうなってたな」

煌牙もしのぶと同様に初見で同じ反応をしており当時を懐かしむように呟いていた。

暫くしてしのぶが我に帰ると先程の不可解な現象は忘れたいのかこの先の七日間の行動予定を二人に話始める。

夜は日の出の方角の東に向かい、昼は日が傾く西に向かい少しでも安全な時間を稼ぐ事を考え行動すると二人に話すと煌牙は自分の考えをしのぶに話すのだった。

「だったらさ俺達と一緒に行動しないか？一人より二人、二人より三人の方が負担も分散出来るし生き残る確率は上がるだろ？」

「確かにそうね、七日間一人で行動するより協力した方が安全だわ、でも相応の実力があってこそその話、足手まといじゃ逆に危険だわ」

「それも一理あるな、とりあえず俺達の『私は鬼の頸を斬れないの』『貴方達の実力は先程の動きで理解出来るわ。足手まといは私、私は鬼の頸を斬れないの、腕力が少ないから鬼の頸を斬れない……だから』なら俺達を守る、足手まといだから置いてけって俺達は認めない』

「でもさつき一理あるって」

「言ったけど何だ？だからと言って見捨てるようじゃ守りし者として失格だ」

「そうだよ♪それに鬼の頸を斬れなくても別の方法があるんだよね？鬼の頸を斬れません、別の方法ありません、でも最終選別には参加しますってそれこそ遊び半分だしね〜♪」

「遊び半分って言った事根に持つてるのね、それについては謝るわ」
「端から見れば俺達が遊び半分に見えたのは仕方ないよ、俺達も自覚してたし」

「まあ日輪刀無くてもやり過ごす事出来そうだけどね〜♪同じような山で半年間過ごしたし〜♪」

「向こうの方が酸素濃度薄いけどな」

「・・・貴方達って規格外ね、どんな修行を・・・いえ聞きたくないわ。私が悩んでたのが馬鹿みたいじゃない」

こうしてしのぶは焠牙達と行動を共にする事にし一同は山の奥へと進んで行くのだった。

道すがら自己紹介をした三人だったが、鬼殺隊でも有名な四ノ宮の名を聞いたしのぶは二人が四ノ宮の者である事に驚いていたが四ノ宮ならば二人の修行がどんな修行だったのかを理解して苦い顔をしていた。

暫くの間歩進めてといると焠牙はふと立ち止まり、耳を澄ますと進んでいる方向とは別の方向を振り向き、桜花達にここで待つように言うとその方向へと一目散に駆け出していく。

「焠牙さんどうしたのかしらっ？」

「焠牙は耳が凄く良いんだよ♪何か聞こえたんだろうね〜♪」

焠牙の突然の行動を不思議に思うしのぶと行動の理由を理解している桜花、二人は焠牙が戻るまでその場で待っていると一人の参加者を連れて焠牙が戻って来た。

先程焠牙が聞いた音、参加者の助けを求める声と下卑た鬼の声だったのだが助けを求める声を聞いた焠牙は即座に動き出し、日輪刀を引き出しながら声の聞こえた場所へとたどり着く。

その勢いのまま日輪刀を抜刀しすれ違い様に鬼の頸を刎ねると助けに求めていた参加者に振り返り話をしながら負傷した参加者を抱えると桜花達の待つ場へと戻り負傷した参加者の手当を桜花に頼む。するとしのぶは荷物の中から医薬品や治療に必要な道具を取り出し参加者の手当を始め、それを見ていた煌牙や治療をやるうとしていた桜花もしのぶの手際の良さに見惚れ治療の一部始終を見守っていた。

「しのぶは凄いな、医学の心得があるのか？」

「ええ、一応薬学と医学は多少心得てますが」

「ならこの七日間は安泰だな」

「えっ？」

「いやさ、この七日間鬼を斬り続けて生き残る実力があつたとしても

自分の体調を常に万全に保たないと厳しいんじゃないかって、俺達は人間だし鬼みたいに傷がすぐに治るわけでもないからしのぶのよくな人が居てくれたら心強いなって」

「それはそうだけど、半年間山で過ごした貴方に言われたら複雑だわ」「そうか？半年間とはいえ安全な場所で寝泊まりしてたからな、安全な場所が分からないこの山の方が危険だと思うけどな」

煌牙としてのぶが会話してる中、桜花は辺りを歩き回り何かしらの準備をして煌牙達に声をかける。

「煌牙♪安全な場所がないなら作れば良いんだよ♪」

そう言うとき桜花は懐から魔戒筆を取り出し、宙に印を描き始める。すると桜花達の周りの木々達を起点に光の膜が結成され簡易的な結界が施される。

先程桜花が歩き回り結界の起点となる魔戒符を木々を貼りつけていて

木々の周りにはいつの間にか採取していた藤の花を添えて鬼避けの結界を作った桜花はドヤ顔で二人に話しかける。

「ふふっくん♪煌牙っくん♪しのぶちゃん♪どやあっくん♪」

「ははは、桜花最高だ！」

「凄いけど・・・なんかこう・・・反則だわ」

勝ち誇り自信に満ちた顔でドヤる桜花に最高だと笑う焠牙、いとも簡単に安全地帯を作り出す桜花に最終選別とは何なのかと頭を抱えるしのぶ、負傷した参加者もこの状況について行けず啞然としていた。

焠牙達はこの場を拠点にする事にして、参加者を探し生存者を増やすことに注力し山を駆け回っていた。

それから三日後、拠点に集まった参加者は十人になり既に参加者の半数を超えていた。

焠牙が助けた参加者には尾崎さんがいて、鬼に囲まれ一心不乱に日輪刀を振り回していた時に焠牙に助けられ拠点へと案内され事なきを得るが、焠牙が助けた参加者には癖の強い者もいてコイツ助けなくても良かったんじゃないかと焠牙は内心思っていた。

「丁度良い所に安全な場所があるじゃねえか、俺は安全に最終選別を突破したいからな、これなら俺でも突破出来るぜ。鬼殺隊に入れば安全に出世してそれなりの金を貰いそれなりの暮らしが出来るぜ」

「……安全な出世って何だよ、鬼殺隊以外で出世目指せよ」

癖の強い参加者の自分語りにも、焠牙は聞こえないようこっそりと突っ込み関わらないようその場を後にする。

そんな参加者は結界を張った者が傍にいれば自分は安全だと桜花に付き纏い桜花はそのウザさから物凄く不機嫌になって殺気を辺りに撒き散らしていた。

その結果藤の花の効果もあって鬼が結界の周りに近付く事すら無く最終選別は終わりを迎える事になる。

最終選別最終日、焠牙は念の為に参加者を探し回っていたがこれ以上参加者を見つけない事はないでいた。

生存している参加者は十人、焠牙達を含めて十三人が生存しているが

残り五人は最終日の夜を迎えても見つかからない事からすでに鬼に喰われているのだろうと拠点へと引き返そうとした瞬間、今までにない鬼の気配を感じ取った焠牙はその気配のする方向を見据え殺気を

飛ばしてみる。

殺気を飛ばした瞬間、鬼の気配は霧散し焠牙は深追いする必要はないと拠点へと足を進める。

焠牙の殺気を当てられた鬼、後に炭治郎と相見える手鬼は放たれた殺気に自分の頸が跳ね飛ばされた錯覚に陥り慌ててその場から逃げ出していた。

拠点に戻った焠牙は参加者達と朝を迎え七日間に渡る選別も終わると

全員揃ってあまねの待つ集会所へと歩み出す。

「お帰りなさいませ」

集会所で待つあまねが合格者達を迎え、隊服の支給や鏖鴉の手配日輪刀の原料である玉鋼の選別等必要な手続きを済ませると合格者達は生存と合格の喜びを実感し焠牙達にお礼や握手など友好に意を示すとそれぞれ帰る場所へと足を進め始める。

「焠牙くしのぶちゃん、わたし達も帰ろ〜♪」

「そうですね、焠牙さん桜花さんありがとうございます。次会うときはお互い鬼殺隊同士、無事を祈ってます．．．それから焠牙さん．．．牙狼になれるよう応援しますよ」

「ああ、ありがとうございます」

参加者達が居なくなると桜花も帰ろうと二人に促し、しのぶは二人にお礼を言って二人の無事と焠牙に声援を送る。

しのぶの激励にお礼を返し桜花と二人で引き返そうとした瞬間あまねに呼び止められ不思議そうな顔をしてあまねに振り向く焠牙。

「俺に何かご用でしょうか？」

「はい、まずは合格おめでとうございます。次期黄金騎士継承者四ノ宮焠牙様。貴方が合格したらお館様の元へお連れするよう仰せつかっております、御同行願えますか？」

「．．．．へ？．．．俺何か粗相を．．．」

「あつ、心配なさらないでください。お館様はただ話がしたいだけだと思いますから」

「あつ・・・そうですか・・・はい」

お館様である耀哉の願い、黄金騎士牙狼の称号を受け継ぐ可能性のある唯一の存在、煌牙と話をしたいとあまねに頼みこうして煌牙は合格早々産屋敷邸へと足を踏み入れる事になる。

「じゃあ煌牙またね〜♪」

「では失礼します」

そんな煌牙をよそに桜花としのぶはそれぞれ帰宅して煌牙はあまねに連れられて産屋敷邸へと歩き出した。

「今年は半数を超える合格者が出たみたいだよ、これもあの子のおかげなのかな？そうは思わないかいザルバ」

「さあな、仮にそうだととしても牙狼に認められてもいない小僧など俺様は認めないがな」

「というわけなんです」

しのぶは自分達の最終選別の話を締めくくると、炭治郎達は自分達の最終選別は何だったのかと頭を抱え一同顔を見合わせると苦笑いをして本日の訓練を開始するのだった。

炭治郎達が機能回復訓練を行なっている中、煌牙達は蝶屋敷から魔道を開き朔弥の隠れ家へと足を運んでいた。

「さてと、本題に入る前に煌牙ちゃん、あれから何か掴めたかな？」

「いや、あれから色々試してみたけど未だに掴めないな」

「そっか〜・・・煌牙ちゃん、昔の事を思い出しみて？」

「昔の事？・・・嫌な思い出しかないんだが」

「いいからいいから〜♪とりあえず煌牙ちゃんは瞑想の間に行つて、私は桜花ちゃんと話があるから〜♪」

「気は進まないけど仕方ないか」

煌牙の課題である呼吸の進捗を尋ねる朔弥は、その結果がいまいちである事を聞くと何か考えがあるのか煌牙に幼い頃を思い出すよう促すと煌牙を退室させ桜花と話をしだした。

「さてと桜花ちゃん『朔弥さん煌牙の昔つて何か知ってるの？』ふえ？・・・あ〜その〜・・・少しだけ知ってる」

「朔弥さん教えて！」

「煌牙ちゃんが思い出したらね〜♪」

「え〜〜」

「桜花ちゃんの目的はそれじゃないよね？」

「うん：四ノ宮に伝わる魔戒指南書、あれ書いたの朔弥さんだよね？」

「まあね♪こう見えて私元老院付きの魔戒法師だからね〜えっへん♪」

「元老院つて？」

「んん〜鬼殺隊という柱みたいな感じだと思つて♪」

「ほえ〜朔弥さんつて凄いななんだね〜♪」

「まあそれは置いといて、桜花ちゃんは残りの指南書も見たいつて事でOK?』

「うん♪」

「じゃあついて来て？桜花ちゃん」

桜花の目的、朔弥が記した魔戒指南書の術を会得しようとする朔弥につ

いていく桜花、朔弥も桜花に修行をつけるつもりだったので二人は魔戒指南書を保管している書物庫へと向かうのだった。

その頃煌牙は瞑想の間で自身の過去を振り返っていた。

「オイ!!?その反抗的な目はなんだクソガキ!!?」

そう言いながら煌牙の父親は煌牙を何度も殴り家の外に放り出す。

「・・・俺達がなにしたんだよ」

何度も殴られ痛む体を引きづりながら煌牙はこの理不尽さを嘆き、近くの扉に寄り掛かるとそのままズルズルと座り込み体の痛みを堪えていた

暫く座り込んでいると煌牙の前に座り込み心配そうに顔を覗き込む少女がいた。

「ああ、お前かそんな顔するなよさつきは大丈夫だったか?」

「・・・」コクン

「そっか、なら体張った甲斐があつたかな俺もお前もボロボロだけど」
「・・・うん」

煌牙が話しかける少女、妹のカナヲは両親の度重なる虐待で煌牙同様ボロボロになりながらも自らを庇ってくれる兄の煌牙を心配していたが

煌牙はよろめきながらもなんとか立ち上がるとカナヲに食べる物を探して来ると告げふらつきながらも歩き出した。

そんな日々を過ごしながら煌牙はその日も食べる物を探しに森に入っていくと木の実や山菜を探しながら奥へと進んで行く。

暫く進んでいたが思つてより収穫はなく引き返そうとしていた煌牙だったが満身創痍の体で無理していた為少し休んでいこうと近場の木にもたれかかり体を休めていた。

少し休むつもりだったが木漏れやそよ風の心地良きで次第に眠くなりウトウトとしていた煌牙は次第に近づいてくる人の気配に気づかずにはい

「ねえ、君大丈夫?全身ボロボロだよ何があつたの?」

「わっ!!?ビックリしたー!急になんだよ:ああコレね、別に何でも
ないよ」

突如声をかけられて驚くも煌牙は声の主に素っ気なく返事を返すと声の主に視線を向け始める。

その声の主は煌牙と同じ位の歳であろう少女でありその少女は煌牙の素っ気ない返事に表情を暗くし煌牙に話しかける。

「何でもないならそんな怪我しないよ?話せない?」

「見ず知らずのあんたに話す必要ないだろ?」

「それはそうかもしれないけど」

「悪いけど他人に関わる気はないんだよ、じゃあな」

煌牙は少女を冷たくあしらうと少しフラつきながらその場を後にする

そんな煌牙の後ろ姿を見つめる少女は誰にも聞こえない小さな声で静かに呟いていた。

「やっと見つけたよ大河ちゃん」

翌日、煌牙は昨日と同様に森へ散策に向かうと昨日出会った少女が煌牙を待っていたようで煌牙を見つけるやはにかみながら話しかけてきた。

「あく来た〜♪待ってたんだよ〜♪」

「またあんたか、昨日も言ったけど他人と関わる気はないからな」

「もう既に関わってるじゃ〜ん♪」

「・・・じゃあな」

「ちよちよちよ!!?待って待って!話があるの」

「俺はない、じゃあな」

嬉しそうに話しかけてくる少女に対し煩わしそうにする煌牙は少女を躲すと来た道を戻ろうとしていた。

「少っだけ!少っだけでいいから聞いて〜」

「・・・」

「聞いて!聞いて!聞いて!聞いて〜!聞・い・て〜!!?」

「はあくわかったから何度も連呼しないでくれよ、しつこい」

「ふっふっ〜♪」

「んで？話つて？」

「唐突だけど強くなりたくないかなって」

「は？」

「強くなつて誰かを守りたいって思わないかな〜って」

「別に：俺は他人に興味はないよ、それになんで俺が他人を守らないといけないんだ？自分の事は自分でどうにかしろよ」

「そうだね〜自分の事は自分で何とかしなきゃ〜♪でもねそれでもどうにもならない時は？」

「今は無理でも：諦めなければ『無理だよ！今は無理でも諦めなければ？』今何とか出来ないとその先はないの！みんな死んじゃうの」

「死ぬって・・・あんた何の話をしてるんだ？」

「君は傷だらけだよ？それはどうして？」

「これは別に」

「弱いから、君は弱いから自分を守れない自分でどうにも出来ないから

きつと、きつといつかって現実から目を逸らしてるんだよ」

「あんたに！あんたに俺の何がわかるんだよ!!？」

「だから教えて君の事、さっきはキツイ事言つてごめんね？」

少女にそう言われると、激昂していた煌牙は一呼吸置き落ち着きを取り戻すと少女に自分を生い立ちを話し始めるのだった。

「そつかく中々に悲惨な状況だね〜、唯一残ってるのが君と妹ちゃんだけか〜」

「ああ、せめて妹だけは守らないとこれ以上家族を失うのは嫌だ」

「そうだね〜」

「俺帰るよ、妹が心配だ」

「そつかく気を付けてね〜」

「ああ・・・ありがとな」

「ん？」

「あんたに話したら少しスッキリした気がする」

「お役に立てたようでも何より何より♪あつ！そうだ！コレ渡そうと思つてたんだよ」

少女はそう言いながら懐から二振りの鈴を取り出すと焠牙に手渡し満足そうな表情をする。

「鈴？何これ？」

「ん？御守りだよ♪君と妹ちゃん二人のね」

「そっか、ありがとう」

「ほら、妹ちゃんのところに戻るんでしょ？」

「ああ、またな」

焠牙は少女に礼を言うと言いで家路へと走り出す、そんな様子を見つめる少女は先程の焠牙の言葉を思い返し嬉しそうに微笑んでいた。『またな』か・・・うん、君が牙狼になれた時また逢おうね。さてと久しぶりに鬼殺隊に伝令飛ばすとしますか♪」

少女はそう告げると森の奥へと姿を消していくのだった。

「・・・おかえり」

「ただいま」

「・・・いい事・・・あつた？」

「ん？」

「なんでも・・・ない」

家に辿り着くとカナヲが家の前で焠牙を待っていたようでも焠牙を見るや

少しだけ表情を緩め焠牙に駆け寄り二人で話をしていた。

「あつ！そうだ！コレ渡すよ」

「・・・何？」

「御守りの鈴、二人でひとつずつ持つてような」

「お揃い」

「だな。なあ兄ちゃん頼りないけどさお前だけは助けてやりたんだ俺頑張るから」

「・・・私も・・・頑張る・・・一緒に頑張ろ？」

「そうだな」

鈴をカナヲに渡し共に頑張ろうと誓い合う二人、煌牙は先程の少女とのやりとりを思い返していた。

（今何とか出来ないとその先はないか、その通りだな。あの時何とか出来てたらチビ達は・・・ごめんな、兄ちゃん弱くて）

弟や妹達を守れず自責の念に駆られる煌牙は強くなりたいたいと思いはじめていた。

それから数日後

「この糞餓鬼また痛い目にあいてえのか!!？」

「ひっ」

「いい加減にしろよ糞野郎!!？」

「あ？なんだテメエ！親に向かって舐めやがって!!？」

「あんたらなんか親でもなんでもねえよ！ただの人殺しだろ？」

「そうか、お前は餓鬼共の中で一番利口だと思って大目に見てやったがやめだ！ぶっ殺す」

「そうやって気に入らない事があればすぐに暴力かよ、どうしようもない屑だな」

いつもの如くカナヲに暴力を振るう父親に我慢の限界がきた煌牙、今まで抑えていた感情を曝け出すとカナヲを守ろうと父親に対立するが大人の子供の体格差には抗えず抵抗虚しく瀕死寸前まで殴られる続ける。

今まで以上に激しく暴れる父親を見て恐怖で固まるカナヲはその一部始終を呆然と見ていたが殴られ続けピクリとも動かなくなつた煌牙を見て

煌牙が死んだと思つたカナヲ、僅かだが今まで煌牙にだけは見せていた感情の起伏が消え去り虚な目で何処かに連れて行かれる煌牙を見つめ続けていた。

「すっかり夜になつちまつたな、まあ此処まで来ればコイツ捨てても問題ないだろ、じゃあな糞餓鬼」

とある山奥、父親に運ばれた焔牙はそう言われながら投げ捨てられる。

瀕死で息も絶え絶えの焔牙だったが僅かながらに意識は残っていたのだが体が動かず自らの死を悟るとカナヲの事を想い始める。

（ごめんな、兄ちゃん駄目だった。諦めたくないけどどうにも出来ないよ。あの人の言う通り、今どうにか出来なければ先はない俺もこのまま死んじゃうんだな、強くなりたい、強くなりたかった・ホントにごめんな）

そう思いながらやがて訪れる死を迎えようと静かに目を閉じていった。

「まだ僅かだが息はある・目を覚ますんだ君はここで死んではいけないよ」

あれからどのくらい経ったのだろうか、誰かが呼びかける声が聞こえ焔牙は朦朧とする意識を呼び起こし声の主に僅かながら視線を向ける。

「意識が戻ったか、そのままでもいいから聞いて欲しい」

意識が戻ったとはいえ瀕死の重症である焔牙、その言葉に反応を示す事なくただ声の主に耳を傾けるのであった。

「息の仕方を変えてごらん、きつと今よりはマシになるはずだよ」（・・・息？）

「息の仕方があるんだよ、まずは息を整えて呼吸を意識するんだ」

ヒノカミ様になりきれば君も」

（息の仕方・・・呼吸・・・ヒノカミ様）

そう告げられ心の中で反復する焔牙、声の主は静かにそして優しくその方法を教え焔牙はゆつくりと少しずつ息の仕方を変えていく。

「そう、それで良い。ゆつくりで良いからその呼吸を続けるんだ」

声の主は焔牙にそう言いながら焔牙を担ぎ歩き出す。

介抱する為に運び込む声の主だったが瀕死の重症である焔牙が途中で事切れるのは時間の問題、その為延命措置として声の主は代々受

け継がれてきた呼吸法を煌牙に伝えていた。

「そのご主人、夜の山は危険ですので早く家に戻った方が懸命ですよ」

煌牙を運ぶ声の主に声をかける一人の女性、黒の詰襟に白い羽織を纏う

女性は艶やかな長い黒髪を靡かせ声の主の前に降り立つ。

「そうですね、早くこの子を家に連れて帰れねばなりませんので」

「!!? 酷い怪我・・・まさか鬼に・・・少し待って下さい」

女性は詰襟の袖口から小瓶を取り出すと煌牙の口に近づけてその中身を飲ませる。

「失礼だが今のは」

「回復薬ですよ、少なくとも命の危機は脱するはずですよ」

「そうですか、助かります」

「いえ、この子は貴方の子ですか?」

「家に戻る途中で瀕死のこの子を見つけて、我が家で保護しようかと」

「そうですか・・・!!? いえ、この子は私が保護します。お願いします、

この子を私に預けてくれませんか?」

「何か理由がありそうですが」

「詳しくは話せませんが、でもこの子は私達の希望なんです、私達が長年探し続けた・・・絶対に悪いようにはしません!大切に育てます、どうかお願いします」

声の主と女性はそう会話すると女性は声の主に土下座をし煌牙を預からせてほしいと懇願する。

「貴方からは悪い匂いはしないしこの子を大切に想う気持ちが伝わります。わかりましたこの子をよろしくお願いします」

「ありがとうございます、本当にありがとうございます」

そう話すと声の主は煌牙を女性に渡し、煌牙の頭を撫でる。

「君はきつとヒノカミ様になれる、それを忘れちゃいけないよ」

声の主はそう煌牙に告げ、煌牙と女性と別れ歩き出していく。

「あの一貴方の名前を教えてくださいませんか? 私は四ノ宮花蓮です」

「竈門炭十郎、代々炭焼きを営んでる者です。それでは」

花蓮と炭十郎との出会い、焠牙にとって急死に一生となる経験であったがこの経験が焠牙の心境を一変させる経験となる。自らの家庭の状況で自分と妹の事で精一杯だった焠牙、それ故に他人に無関心であったが

他人であろうと助けようとしてくれる炭十郎や花蓮に触れ焠牙もまたあの人達のように他人でも助けてあげたいと思うようになる。

そして四ノ宮家での修行、数々の戦いを経て今に至る。

「……俺、色々と忘れてるじゃん」

瞑想から我に戻った焠牙、過去の記憶を失っていたわけではないが嫌な思い出、朦朧とした意識での記憶などが抜け落ちており瞑想により

ハッキリと思い出すとつい自分にツツコミを入れたくなる焠牙、座禅を解き立ち上がる焠牙の表情はどこか満足した表情であった。

「そつそ〜♪んでこ〜がこうでこれがこうで〜♪」

「なるなる〜♪それじゃこれがこうであれがこうだね〜♪」

「oh〜yes♪桜花ちゃんパネエっす〜♪」

「伊達にあの世は見てねえぜ！見た事ないけども〜♪」

「ねえ桜花ちゃん、俺と一緒に地獄に行かない？」

「わっわっ！朔弥さん今のはナツシング〜なんか凄い鳥肌が立ったんですけど〜背筋もゾクゾク冷や汗ダラダラ〜」

魔戒指南書の術を教えて貰っていた桜花は飲み込みの早さを朔弥に褒められ調子に乗ると悪ノリした朔弥の一言により急にテンションを下げ始める、桜花の本能が危険と判断したのだろう急激に体調が悪くしていた。

「二人とも何やってんの？桜花に至っては体調悪そうだし大丈夫か

「？」

「あつ！焯牙ちゃんおかえり〜♪」

「焯牙〜！！？なんかね〜上弦の式が脳内に出てきて〜」

「なんで上弦の式が出てくんだよ？なんて言ったの？」

「俺と一緒に地獄に行かない？つて」

「・・・桜花さんいつてらっしやい」

「やだ〜やだ〜！！？焯牙も一緒！！？焯牙も道連れだから〜！！？」

「はい！そこ〜ストーツプ！！？それ以上言っちゃうとフラグだから！

桜花ちゃん上弦の式と地獄巡りの旅のフラグ立っちゃうよ〜」

「もう喋りません！！？」

瞑想の間から戻ってきた焯牙に弄られる桜花はフラグが立つと言われ口を閉じると焯牙をジト目で睨み仕返しとばかりに焯牙の頬をつねり出す

「桜花ちゃん必殺の型、取れたらいいなきび団子」

「痛っ！桜花無理だつて！ポールデブかよ」

「焯牙ちゃん、それを言うならホールデムだよ〜♪」

「どつちでもいいわ！てかポールデブもホールデムも俺知らねえし！！？」

「なんであんなツツコミしたんだろ？お前ら怖いわ」

「ふっふ〜♪旦那〜もうコツチ側ですぜ？今更アツチには戻れませんぜ〜♪」

「そうだよ〜♪ベストマッチの組み合わせに焯牙合わせてスーパーベ
ストマッチなんだから〜♪」

「いや！お前らエボルマッチだからな？なら俺はエボルトリガーつて
か？喧しいわ！！？」

「さすが焯牙（ちゃん）他の人には出来ないツツコミを簡単にやって
のけるそこに痺れる憧れる〜♪」

「ならお前らがやれよ、ツツコミ」

「無理ポ」

「ですよ〜」

こうして三人でふざけた会話をしているのだが、仮に他の者がいて

桜花は焠牙にそう言いながら涙を流していたが、朔弥は珍しく真面目な顔で考え事をしていた。

「焠牙ちゃん・花蓮ちゃんが焠牙ちゃんの元に来たのは私が鬼殺隊に伝令を送ったからだと思う、牙狼の系譜を受け継ぐ者がいるって報告したから、ホントは焠牙ちゃんとカナヲちゃん一緒に保護してもらえるとと思ってただけど結果的に引き離す事になってごめんなさい」

「朔弥さんが謝る事じゃないだろ？あの時俺が弱かったからカナヲと離れ離れになったんだ、誰のせいでもない。それに今はカナヲも俺と一緒にいる、それで良いさ」

「うん・・ありがと焠牙ちゃん」

焠牙と朔弥の話が終わると今度は桜花が焠牙に話かけてくる。

「ねえ焠牙、呼吸を覚えてもらってたって言ってたけどどんな呼吸？」

「さあ？記憶は戻ったしその呼吸はこれからだな、確かあの時ヒノカミ様がどうか言ってたような」

「ヒノカミ様？」

「ヒノカミ・・焠牙ちゃん！名前は！その人の名前!!？」

「え？ああ・・確かあの時、竈門炭十郎って・・あつ!!？悪い二人とも俺帰るよ」

焠牙は慌てながらその場を後にし急いで蝶屋敷へと帰っていった。

「朔弥さん、竈門って炭治郎君の」

「うん、焠牙ちゃんを助けたのは炭治郎ちゃんのお父さんだと思うよ」

それに炭治郎ちゃんの耳飾り、だとすれば・・うん、問題なし♪」

「この展開を読んだの？」

「んにゃ？想定外というか想定以上だよ♪」

一人納得した朔弥は満足げに頷き桜花と共に魔戒指南書を読み漁っていくのだった。

一方蝶屋敷で機能回復訓練に勤しむ面々は各々が常中を会得すべく努力を重ねていた。

「努力！努力！努力く!!？」

「うおお〜!!?」

「ふしゆ〜!!?」

「三人とも煩いです!!?」

四人が張り切る中、その様子を見ていたしのぶとカナヲ、しのぶはカナヲも一緒に参加してはどうかと尋ねるが、瑠花の言う通り煩い三人と一緒に走るの嫌だと参加を拒否すると、一人その場を離れ中庭へと移動する。

「うし、蝶屋敷に到着くやっぱ魔道って便利だよなー」

カナヲが中庭へ到着すると同時に煌牙が魔道から現れてカナヲと目が合う。

「兄さんおかえりなさい」

カナヲが煌牙に話しかけると煌牙はカナヲに近づきカナヲを抱きしめ安堵の表情を浮かべる

「えっ☒兄さん?あの」

煌牙の突然の行動に戸惑うカナヲだったが煌牙の抱擁を拒む事なく受け入れると煌牙に話しかけた。

「兄さんどうしたの?」

「ああ、急にごめんな。カナヲの顔見たら抱きしめたくなくなった」

「そっか兄さんがそばにいるとなんだかほっとする」

煌牙はこうしてカナヲを抱きしめているとたまたま通りかかった三人娘にその光景を目撃され騒がれてしまう。

「はわわ!大人の情事です」

「禁断の兄妹愛です」

「昼間からいけません」

不埒な事を想像した三人娘は口々にそう言うと、煌牙は呆れた眼差しで三人娘に話し出した。

「君達は何を言ってるのかな?それは断じてないから」

「うん、兄さんは兄さんだから」

煌牙の話にカナヲも合わせてくると三人娘は残念そうに肩を落としながら屋敷の中に戻って行った。

「でも急にどうしたの?」

「いや、昔の事を思い出してな・カナヲが生きててくれて良かったと思つて」

「そう・私も兄さんが生きててくれて本当に良かった」

そう二人で話していると焔牙は用を思い出し、カナヲに炭治郎に話があるかと伝えその場を離れ駆け出して行った。

「善逸！伊之助！溜花ちゃん！頑張れ！努力は決して裏切らない！」

「炭治郎さん！静かに走って下さい！暑苦しいです!!？」

「もうやだよおく何でこんなに走んなきやなんないのおく！」

「善逸さん同感です！でもやるしかないんです！」

「俺が糞長羽織より強いって事を証明してやらあゝ!!？真の山の王は俺のもんだ!!？」

「伊之助さんはよくわかりません!!？山の王は貴方です」

常中を会得すべく走り込む四人は騒がしくも必死に走っていると駆けつけて来た焔牙が現れ、しのぶは焔牙と話を始める。

「焔牙おかえりなさい、もう用事は済みました？」

「それなんだけど、炭治郎に話があつてなちよつと借りてくぞ」

そうしのぶに告げると焔牙は炭治郎に呼びかけ、走っていた炭治郎が焔牙の元へと駆けつけてくる。

「焔牙さんどうしたんですか？」

「悪いな炭治郎、ちよつと話があつて」

一体何の話なんだ？と疑問を浮かべる炭治郎、そんな炭治郎を連れて焔牙は蝶屋敷の外へと歩き出した。

「それで話つて何ですか？」

「えくとな・・・竈門炭十郎って炭治郎のお父さんで合ってる？」

「え×・ああいや！合ってます！俺の父さんは竈門炭十郎で間違いないです・・・知ってるんですか？」

「そっか・炭治郎、俺な昔炭治郎のお父さんに命を救われたんだ

死にかけてた俺に呼吸を教えてください・・そのおかげで命を繋ぐ事が出来た」

「そんな事があつたなんて、父さん何も言つてなかったから知りませ

「んでした」

「出来れば炭十郎さんにお礼を言いたかったけど炭治郎の家族は・・・」

「父さんは何年か前に病気で」

「悪い、変なこと聞いちゃったな」

「いえ、父さんの知らない一面が知れて良かったです」

「そっか・炭治郎ありがとう、炭十郎さんのおかげで俺はこうして生きています、本当にありがとう」

「煌牙さん顔を上げて下さい！俺も彌豆子も煌牙さんのおかげで今ここにいます。感謝するのは俺達の方です」

「別に気にしないでいいって・・・はは、炭十郎さんに助けられた俺が炭十郎さんの子供を助けるこれも何かの巡り合わせなのかな？」

「想いは繋がるってやつですね。それが煌牙さんの、牙狼の力なんですよね」

「そうだな」

「そう言えば呼吸を教えて貰ったって言ってましたけど煌牙さん、ヒノカミ神楽は舞えるんですか？」

「へ？ヒノカミ神楽？何それ知らない」

「え？」

「え？」

「えーとですね、竈門家に代々伝わる舞がありましたしてそれを舞う時に使う呼吸が煌牙さんが教えて貰った呼吸なんです」

「そうなんだ」

「下弦の鬼との戦いで死を覚悟した時その呼吸を使う事で切り抜ける事が出来たんです」

「なるほど・・・炭治郎そのヒノカミ神楽っての見せてくれないか？」

「ここでやるんですか？」

「あーいや一旦戻ろうか」

流石に道端でやるのはいかがかと思ひ、煌牙は炭治郎と蝶屋敷へと戻ると

炭治郎にヒノカミ神楽を披露してもらったのだった。

「この呼吸を使うと水の呼吸以上に負担が掛かって長くは続きません

が

出来るだけやりますね」

炭治郎は焠牙にそう告げると息を吸い始め、ヒノカミ神楽を舞い始めると焠牙はその神楽の美しさに魅入られていた。

「はあはあはあ・・・焠牙さん、これがヒノカミ神楽です」

息を切らしながら炭治郎が焠牙に話かけると今まで神楽に魅入られていた焠牙がハツとした表情で炭治郎に振り向き喋り出した。

「凄いな、なんかこう神秘的というか上手く説明出来ないけど綺麗な舞だったよ」

「俺なんかより父さんの方が凄かったですよ、あの舞を一晩中舞い続けてましたから」

「それは凄いな、ヒノカミ神楽か」

「俺の家は炭焼きを生業にしましたから、火の仕事をやるから年の初めに怪我や災いが起きないようにヒノカミ様に舞を捧げてたんです」
「竈門家伝統の神楽なんだな・・・もしかして門外不出だった？神楽はともかく呼吸教えて貰ったけど良かったのかな？今更だけど」

「いえそういうわけでは無いと思います、父さんが焠牙さんに呼吸を教えたのはきつと意味があるんだと思いますよ」

「そっか」

「というわけで、ヒノカミ神楽を焠牙さんにも舞ってもらいます」

「何で☒」

こうして焠牙は炭治郎の提案により神楽を習う羽目になり蝶屋敷での生活がより多忙となるのであった。

そして焠牙はこう思った、炭治郎説明が下手くそ過ぎて逆に難しい、そして何より暑苦しいと。

そんな日々を過ごしたとある夜

「あーしんどい、あの時の呼吸思い出したのは良いけど普段慣れない呼吸使うと疲れるわー、あれで神楽とか炭十郎さんって凄い人だったんだな」

そんな事を言いながら一人寛ぐ焠牙、同室のカナヲや溜花は既に

眠っていて煌牙は瑠花の枕元に近づくと瑠花の寝息が全集中の呼吸になりつつある事を確認すると軽く微笑み就寝の準備を始め出す。

そんな中、ザルバが突如煌牙に話しかける。

「煌牙明日はあの日だぞ」

「あーそうだったな．．．ヤバっ！皆んなに話してないぞザルバ！」

「全く、肝心なところが抜けてるなお前さんは俺様は知らんぞ」

「てか日付け変わるのって後少しじゃん！マジで時間ないぞ！」

「煌牙書き置きでもしておけ、もはやそれしか打つ手はないぞ」

「そうだな、それしかないよな。後は瑠花なら何とか説明してくれるかも」

そう話すと煌牙は書き置きを残し眠りにつくのだった。

「んん、もう朝？起きなきゃ．．お兄朝だよ起き．．あーあの日かなら今日はくってカナヲさん☒廃人みたいになってますよ！カナヲさん！」

「．．．兄さん．．．兄さんが．．．」

「カナヲさんしつかりして下さい！」

「．．．兄さんが死んじやった．．．兄さんが」

「あゝもう!!？お兄皆んなに説明してなかったんだ！ってカナヲさん？いつの間になくなったの？騒動の予感がするよ、お兄の馬鹿!!？」

寝起き早々瑠花の愚痴が炸裂する中、屋敷から慌ただしい足音が聞こえ

蝶屋敷の面々が煌牙の元へと集まってくる。

まさか寝起き早々煌牙が死んでいると言われるなんて思ってもなかった蝶屋敷の面々は慌てて煌牙の元にやってくる。煌牙を見て絶句する。

「．．あ．．煌牙さん？冗談にしては度が過ぎてますよ？流石に笑えませんが起きて下さい．．起きて．．下さい」

「煌牙君、私もこれはいけないと思うわく起きてくれたらお姉さん嬉

しいな」

「昨日まであんなに元気だったじゃないですか！焠牙さん！」

「焠牙さんと一緒に遊びたいです」

しのぶ、カナエ、アオイ、三人娘がそう話していると騒ぎを聞きつけた炭治郎、善逸、伊之助がやって来て焠牙に目を向ける。

「焠牙さん？起きて下さい！また一緒にヒノカミ神楽を舞いましょう！」

彌豆子も焠牙さんと一緒にいたいんです！焠牙さん！」

「変な冗談止めろよな！あなたの訓練めっちゃキツイし、馬鹿なんじゃないの？って思ってるけどさ、あなた爺ちゃんみたいに最後まで付き合ってくれるじゃんか！また付き合ってくださいよ」

「いつまで寝てんだ糞長羽織！おめえがいなくなったら真の山の王になれねえじゃねえか！勝ち逃げは許さねえぞ!!？」

炭治郎、善逸、伊之助の三人が涙ながらに語っていると虚な表情をしたカナヲがやって来て焠牙の側に座り込み焠牙の体に触れる。

「兄さん・嫌だよ・またいなくなるなんて、もう二度と離れないって言ったのに・兄さんの嘔吐き」

そう言いながら大粒の涙を流すカナヲ、その様を見せつけられていた瑠花も既に泣きそうになっていた。

（無理！絶対無理！私こんな状況で説明なんて出来ない!!？お兄の馬鹿！）

そんな状況の中遅れてやって来た二人組、桜花と朔弥が焠牙を見つけると、状況を察して皆んなに事の顛末を話し始めたのだった。

「焠牙ちゃんの事なら心配しなくていいよ♪死んでるけど」

「えくとね〜これ毎月恒例なんだよ、焠牙ってさザルバと契約してるでしょ？しのぶちゃんやカナヲちゃんはお母さんから聞いたと思うけどザルバってホラーなわけで契約の代価として一月に一度、契約者の命を1日分だけ貰うんだよ、今日がその日！焠牙は今日一日この状態で明日になったら普通に起きてくるよ？」

そんな桜花の説明に朔弥、瑠花を除く全員が意味が分からないと言うような顔になり桜花はどう説明しようか悩んでいると、カナヲが机

の上に置いてある手紙を見つけその手紙を読み上げる。

「――先に一言だけ、ごめん!!?皆んなに説明してかなったな、マジでごめんなさい!!?ザルバとの契約で月に一度一日分の命をザルバに与えている間俺は仮死状態で眠ってるけど心配しないでほしい。明日になればまた普通通りだから。後、怒らないでね。特にしのぶさん――」

手紙を読み上げるとカナヲは再度大粒の涙を流し安堵の表情を浮かべ煌牙に抱きついた。

「兄さん良かった、ホントに良かった」

そんなカナヲに同調するかのように炭治郎、善逸、伊之助も喜び、カナエ、三人娘も安心した様子を見せ始める。

「全く人騒がせな！そうならそうと事前に教えて欲しかったですよ」
事前に教えて欲しかったと怒り気味のアオイだったが、その表情はどこか嬉しそうでその口調もいつもより優し目だった。

「私に怒られるってわかってるなら、ちゃんと説明して欲しかったですよ。いつも肝心な事は言わないんだから。ホントに心配したんですからね！」

しのぶも怒り気味だが、いつものような小言はなく本気で心配した様子が伺え桜花はそんなしのぶを暖かい目で見守るのだった。

翌朝

「ふあゝゝ！朝か――！いやゝよく寝た…なんでカナヲが布団に入ってるの？」

「んん、兄さん」

「まあいつか」

こうして一日ぶりに煌牙が目覚め、蝶屋敷での日々が続くと思っていたがその日々は突如崩れ去る。それは煌牙にとって思わぬ出会いであった

ーカアアアア！伝令！伝令！牙柱四ノ宮煌牙ア！隊士栗花落力ナヲオ！鬼ト交戦中

柱ハ至急応援ニ向カエエエ！鬼ハ十二鬼月、上弦ノ壱ノ可能性アリ！至急四ノ宮邸へ向カエエエー！

鎧鴉が柱達に応援要請を出したその夜！煌牙は命を、そして牙狼の称号を失った

時は遡り三日前

煌牙の騒動から数日が経ち炭治郎達の怪我も癒えた事から機能回復訓練に実戦形式の訓練を加え、炭治郎達は煌牙と対峙していた。

「今日から実戦を模した訓練を始めるぞ、機能回復訓練で身体能力は戻ったとしてもここ数ヶ月実戦から遠退いてたからな、鈍った勘を取り戻すんだ」

煌牙はそう言いながら木刀を肩に担ぎ炭治郎達を見渡す

「煌牙さんよろしくお願いします!!?」

「柱と戦うのおく☒死んだ俺死んだわ、死んだからもう休ませて」

「よっしゃあ!!?俺が真の山の王だって事を証明してやるからなあ!」

ヤル気を見せ気合を入れる炭治郎と伊之助に対し既に戦意喪失している善逸、煌牙はそんな善逸を一番手に指名し善逸は悲鳴を上げながら逃げようとする。

これじゃ訓練にならないと見兼ねた溜花は善逸の手を握り笑顔で語る。

「善逸さんのカツコイイ所見てみたいです、頑張ってください」

溜花のお膳立てに興奮してヤル気になった善逸は勢いそのまま煌牙へと突っ込んでいく。

「うん、ヤル気になって結構結構、んじゃやりますか」

煌牙は突っ込んでくる善逸に戦闘態勢に入った事を教える為に殺気を飛ばし木刀を構え出すが

「は?善逸☒嘘だろ?」

煌牙の殺気に当てられ瞬時に気絶し倒れ込む善逸、まさかの出来事に動揺を隠せない煌牙だったが、その動揺はすぐに警戒へと切り替わる。

気絶した善逸から放たれる気配を感じ取った煌牙、立ち上がり居合の構えを取る善逸を見て煌牙は目を見開く。

（あの構えあの呼吸・鳴柱の爺さん、良かったな）

蒸気が噴き出すような独特の呼吸音、構えから善逸が雷の呼吸の使い手だと悟り今は亡き鳴柱 桑島慈悟郎に想いを馳せる煌牙、そんな煌牙に向かい善逸は型を繰り出す。

――雷の呼吸 壱の型 霹靂一閃――

神速の踏み込みから一瞬で煌牙に迫る善逸、木刀を振り煌牙に斬りかかるが煌牙は善逸の右手を抑え斬撃の初動を封じ込める。

「やっぱり霹靂一閃は速いな、木刀なのが惜しい」

霹靂一閃の速さに感嘆する煌牙はその分木刀なのが惜しいと告げる

本来の居合斬りならば鞘走りにより刀身を加速させるものだが鞘もない木刀による斬撃はその加速を得られない、それ故に煌牙に止められるのだが霹靂一閃の速度は凄まじく、それに対応出来る煌牙の身体能力は柱随一と呼ばれるにふさわしいものであった。

善逸を掴んでいた手を離すと煌牙はすかさず後退し善逸に対し構えを取り直す。

善逸もまた型を繰り出そうと居合の構えを取り始め、さつきと同じ型を使うのか？と煌牙は疑問になるも構えは崩さず善逸を見据える。

――雷の呼吸 壱の型 霹靂一閃 六連――

神速の踏み込みを繰り返し煌牙を翻弄すべく動く善逸、霹靂一閃ならば

同じ型を使う煌牙は対応出来たのだが、六連全ての動きに対応するのは流石にキツいと即座に判断した煌牙は目を閉じて耳を澄まし善逸の音に耳を傾ける。

常人より動体視力が優れている煌牙でも全ての動きを捉える事が難しい六連だが目で見るのではなく音で聞き分ける事により翻弄さ

れる事なく

斬り込んでくる音を察知すると式の型を駆使して善逸の木刀を弾き飛ばす。

時を同じくして善逸が目覚め、現状を見るや喚き声を上げ降参すると

煌牙も構えを解き善逸を誉め出す。

「善逸凄いな！霹靂一閃を六連か、鳴柱の爺さんも喜ぶぞ」

ー

「へ？六連？何それ？それより爺ちゃんの事知ってんの？」

「ああ俺の型にも霹靂一閃と同じ型があるんだ、昔それで世話になつてな」

「ふーん」

煌牙と善逸はそう話すと、伊之助が鼻息を荒くしながら今か今かと待ち侘びていて今にも煌牙に突っかかりそうな態度を見せていた。

「オイ！紋逸いつまで話してんださっさと変わりやがれ！糞長羽織

は俺がぶつた斬る」

「糞長羽織・糞長羽織☒ちよつと待て！俺は煌牙だ！変なあだ名付けるなよ」

伊之助にそう返すとちよつとイラツとした煌牙は大人気なく参の型を使い一気に伊之助の懐へと飛び込むと伊之助の木刀を弾き飛ばす。

「コイツめちやくちや速え〜！それにこの威圧感、コイツは間違いなくヤバい奴だ」

「いいか伊之助！俺は煌牙！糞長羽織じゃないからな、ちゃんと覚えろよ」

「オーガだな！ちゃんと覚えなせ」

「それ和訳すると鬼つて意味なんだけど：はあくまあいいや面倒だしそれで良いよ」

「オーガ！次はぜってえ勝つからな！覚えとけよ」

「ああ、伊之助はもつと強くなれる次頑張ろうな」

大人気ない煌牙によってあつさりと終わってしまった伊之助との

訓練、次は勝つと意気込む伊之助に焠牙は激励を送ると矛先を炭治郎へと向けるとようやく自分の番だと意気込み、元氣よく焠牙の元に走ってくる炭治郎。

善逸、伊之助との訓練で初めて見た焠牙の実戦、まだほんの少ししか見れてないのだが自分とは明らかにかけ離れたその実力を目の当たりにした炭治郎は努力次第でここまで強くなれると焠牙と剣を交える事に胸を昂らせていた。

「炭治郎、俺を鬼だと思つて全力でかかつて来な。まあオーガだし？」
「はい！」

「突っ込みは無しか・・・まあわかつてたけどね、はは」

ちよつとした冗談をスルーされた焠牙、乾いた笑いを浮かべるが氣を取り直し炭治郎に向き合う。

(これが焠牙さんの匂い対峙して分かる、あの時戦つた下弦の鬼なんかよりも強い！でもあの場に現れた鬼はもつと・・・いや今は焠牙さんとの戦いに集中しろ)

焠牙との戦いに集中する為考える事をやめた炭治郎はどうやって焠牙の間合いへと入ろうか思考を巡らせ、善逸や伊之助との戦いを振り返っていた。

善逸の霹靂一閃ならば瞬時に間合いに入る事は出来るがそこで抑えられ

伊之助のように一瞬で間合いを詰められる事もあると想定し炭治郎は参の型 流流舞いでうねる様に動きながら焠牙へと近付いて行く。

更にその流れから拾の型 生生流転へと切り替え回転による斬撃の強化を図りながら焠牙の間合いに入り込むと重みを増した一撃を焠牙目掛けて振り下ろす。

焠牙は炭治郎の動きを冷静に見極め、木刀を反転させると切っ先を地に擦り付けながら円を描き木刀を振り上げる。

――牙の呼吸 漆の型 荒狗鷲――

円回転により勢いをつけた斬撃は上昇氣流を巻き起こしながら炭

治郎の生生流転と激突する。

生生流転の威力を増した一撃ならば善逸のように止める事は出来ないだろうと炭治郎は考えていたが、焯牙が巻き起こした気流は炭治郎の勢いを削ぎ落とし回転により威力を増した一撃も減退する。

そんな炭治郎の一撃は、焯牙の斬撃を上回る事が出来ずに弾き飛ばされ

炭治郎は焯牙に降参を告げる。

「炭治郎、流流舞いから生生流転へと繋げる流れは良かったよ！」

「はい！それでも通じませんでしたけど、あれしかないと思いました」

「そこから更に滝壺へ繋がたらまだ威力上がったんじゃないか？」

「それだ！あの時も生生流転から円舞に繋がったんだ！焯牙さん次は同じようにいきませんよ」

「楽しみにしてるよ（円舞ってヒノカミ神楽の舞だよな？水の呼吸にそんな型無かったし）」

焯牙と炭治郎はそうやり取りすると炭治郎は何かを考えながら戻って行き、焯牙は一休みしようとするが既に準備万端とご機嫌な溜花に手を引かれ再び木刀を握り直すと今度は溜花との稽古に突入する。

「お兄！私の型ちゃんと見ててね！ちゃんと見てくれないと嫌だよ？」

「溜花！兄ちゃん溜花の型ちゃんと見てるから悲しそうな顔するなよ」

「うん！じゃあ行くよ」

溜花はそう言うと、大きく息を吸い始め焯牙を一目見て笑うと、その場から消えるように動き出し焯牙の間合いへと一気に踏み込む。

——雲の呼吸 肆の型 流れ雲——

緩急を付けた独特の歩法で焯牙の間合いに入る溜花は間合いに入った途端一瞬動きを止めると同時に軸足を交差させながら急激に横方向へと旋回して一気に焯牙の後ろへと回り込む。

——雲の呼吸 参の型 乱れ雲——

腕を鞭のようにしならせ不規則かつ変幻自在の斬撃を焯牙に放つ

溜花だったが、肆の型を防御に回した焠牙によつてあと一步届かず、木刀を弾かれて稽古は終わる

「うん、前より型の精度は上がってるぞ！動きがいまいち掴みにくい」
と焠牙は溜花の型を評価するが溜花は焠牙に届かなかったことを不満がり

「でも届かなかつたじゃん！お兄とやるなら捌の型使わないと」

と溜花が言う。焠牙は焦り気味に

「いやアレはマズイ、俺もヤバイ」

と焠牙は溜花に話して最後の稽古相手、カナヲを呼び今まで以上に集中を高める

「カナヲ！本気で来い！」

焠牙はカナヲにそう言う。木刀を構えだしカナヲも焠牙を見て息を吸い集中を高めると

「よろしくお願いします」

カナヲはそう返すと焠牙に向かう事なくその場から動かず隙を見せない焠牙にどう打ち込もうか思索していたが焠牙の方からカナヲに迫り鋭い

一撃を叩き込む

カナヲは咄嗟に横へと飛び退き上段から叩き込まれる一撃を躲すとすぐ様反撃に出ようと体勢を整えるが、カナヲを追った焠牙の鋭い眼光に気圧され体を硬直させてしまう

（兄さんに近付けない！どうにか隙を作らないと）

隙を見せない焠牙の気迫に押され思考を巡らせるカナヲ、焠牙の隙を作る為にカナヲは型を繋ぎ攻撃の手を止めない手段を選ぶと花の呼吸を駆使して焠牙に連撃を叩き込んでいく

（連撃で俺の隙を狙うのは良い考えだけど）

カナヲの猛攻を飄々と躲し続けながら焠牙はカナヲの意図を褒めるが

そう簡単に隙は作らないといつても反撃が出来るような体勢をとっていた

（カナヲは眼が良いからなく・・・よし！アレ試してみるか）

動体視力に優れたカナヲを翻弄しようと考えた煌牙は自身が改良した型を使うべく大きく後退すると型を放つ構えをとりカナヲを見据えた

――牙の呼吸 参の型・改 閃空鳴御雷――

霹靂一閃と同じく神速の踏み込みでカナヲに迫る煌牙、カナヲも煌牙に反応して身を構えるが煌牙が眼前に近づいた途端、視界から煌牙が消えてしまう

(え×兄さんが消えた？どこにいったの？)

突如煌牙が消えたことで一瞬戸惑ってしまうカナヲだったが背後から感じる鋭い威圧感に反射的にその場から離れようとするカナヲだったが

時すでに遅し、カナヲの首筋には煌牙が突き付けた木刀が添えられおり

カナヲは降参を認めるが先程の出来事が理解出来ず煌牙に詰め寄る

「兄さん今の型は何？目の前から消えたと思ったらいつの間にか後ろにいて・・・眼で追えなかった」

そんなカナヲの質問に煌牙は上手くいったと少しドヤ顔になりながら

先程使った型をカナヲに説明しだした

「えーとな、牙の呼吸参の型に溜花の使う雲の呼吸肆の型を取り入れたんだよ。ほら善逸が六連使っただろ？あの技の応用みたいな？至近距離で小回りしたら簡単に背後取れるかなって」

そうカナヲに話す煌牙、いとも簡単に説明するが煌牙が使った参の型改は扱いが難しく常時使える型ではなかった、霹靂一閃同様爆発的な加速を生かして瞬時に敵を斬る参の型、唯一の欠点といえば直線的な動きしか出来ない事だったが何とか改良出来ないかと試行錯誤を重ねた末溜花の使う歩法を合わせる事で煌牙独自の参の型が完成した

爆発的な加速の中一瞬踏み止まり瞬時に方向転換するとともに再加速それを瞬間的に繰り返す事で神速の移動速度を維持したまま緩

急自在に動けるようになるが瞬間的な加速を無理矢理止め再加速を繰り返すこの型は身体能力の高い焔牙とはいえど負担も大きく使用頻度はそれほど多くはなかった

「兄さんのやってる事は凄いいけど、凄すぎて逆にわからないよ」

「簡単に見切られたら使った意味ないからな、まあ鬼相手にどこまで通用するか分からないけど」

そう会話しながら実戦訓練を終えた焔牙は一休みすると再び実戦訓練を再開し全員満身創痍になるまで追い込むと今日はここまでと切り上げ場所を移しヒノカミ神楽の呼吸の訓練へと移っていった

「はあく・強いつてわかってたけどいざ実戦で戦ってみたら俺達と全然違った」

「柱つてのは皆人間辞めてるんだよ!!? なんなの☒何である後一人で訓練行くんだよ! 馬鹿なの?」

「オーガのヤロー!!? 一人で強くなるうとしやがって! 抜け駆けは許さねえぞ!」

「善逸さんお兄の事馬鹿って言うのやめて下さい! お兄は強くなる為の努力は惜しみませんから!」

「・・・兄さんは・・・誰よりも強い・・・だけど・・・誰よりも弱い」
「カナヲ?」

「ううん、今のは気にしないで炭治郎：私兄さんに用があるから行くね」

焔牙が去った後炭治郎達は焔牙について話していたがカナヲの放った意味深な言葉に炭治郎は疑問を持つがカナヲは何でもないと告げ焔牙の元へと走っていった

（ふう〜〜! 呼吸も安定してきたけど常中となるとちよつとキツイな!）

まだまだ鍛錬が足りないか・にしてもヒノカミ神楽かく単純に舞を舞う為だけにこの呼吸って必要なのか? 牙の呼吸より負担もデカいし）

場所を移し一人でヒノカミ神楽の呼吸の訓練に没頭していた焔牙、呼吸の訓練もひと段落したところで大きく息を吐きながら思考

を巡らせていく

そんな焔牙に近づいて来るカナヲ、焔牙に声をかけるが考え事に集中している焔牙にはカナヲの声が届かず、カナヲは何とか気付かせようと背後から焔牙を抱きしめ焔牙に囁き出した

「兄さんまた考え事してる、昔から一人で抱え込むの悪い癖だよ」

「カナヲ☒どうしたんだ？ビックリするから後ろから抱きつくの辞めてほしいんだけど・・・」

「嫌・戦ってる時は触れる事出来ないけど、今ならこうして兄さんに触れられるから」

「お・お・おう、まあいいや、俺に用があるんだろ？」

「ないよ、ただ兄さんと一緒にいたかっただけだから」

「ははは、カナヲは可愛いな」

「ふえ☒・あ・えと・その言葉しのぶ姉さんに言っただけだよ
がいいと思う」

「しのぶに？・・・いや！なんか隠し事を疑われて白白剤盛られそうだから・・・うん！やめとく」

「兄さん隠し事してるの？」

「どうだろうな？カナヲはどう思う？」

「兄さんは隠し事してる、いつも一人で背負い込むし・兄さん私じゃ駄目？桜花さんみたいに私にも頼ってほしいよ」

「カナヲ・約束したろ？二人で支え合おうって、だからさ俺が困った時はカナヲに助けてほしい、頼りにしてるよ」

「うん・兄さんのそばにいるから、もう離れないから、ずっと一緒だからね」

「そうだな」

「ところで隠し事って何？」

「え？・・・ないよ？」

「・・・怪しい」

そんな会話をした後焔牙は再び呼吸の鍛錬をやり始めカナヲは焔牙を暖かく見守るのだった

そんな日々を過ごした焔牙達は三日後、花蓮に用があると告げ四ノ

宮邸へと向かう

「しのぶ！前にも言ってたけど師匠に用があるからちよつと戻るわ」

「わかりました、煌牙さん気を付けて下さいね。ちゃんと帰ってくるんですよね？」

「俺の今帰る場所はここだろ？ちゃんと帰って来るよ」

「・・・約束ですよ」

「ああー！」

しのぶとそう交わした煌牙はカナヲと一緒に歩き出すと、慌てた様子で溜花が追って来て一緒についていくと言うと煌牙にしがみ付き無理矢理付いて来るのだった

「お父さん、お母さんただいまあゝ！」

「おやっさん、師匠ただいま帰りました」

「お邪魔します」

四ノ宮邸へと帰って来た煌牙達は帰ってすぐに泰造と花蓮の元に向かい戻って来た旨を伝えると泰造達は煌牙達に微笑みかけ話しました

「やあ、三人共お帰り！煌牙は色々大変だったね、溜花も見ない間に少し変わったかな？カナヲちゃん久しぶりだね」

「カナヲちゃんゆっくりしていつてね、溜花は急に帰ってこなくなつたからお母さん寂しかったわ、煌牙は・・・知りたい事があるから帰ってきたという訳ね」

二人がそう話す間に煌牙達はソファーに腰掛け花蓮の話に続くよう話出した

「師匠！炭治郎達の事ありがとうございます！師匠が炭治郎達の為に命を賭けたのは俺が命を賭けたからだけじゃないですよ？あの時は分からなかったけど今なら分かります！炭治郎達が炭十郎さんの子供達だから！ですよね？」

「そう・・・覚えていたのね、というより思い出したのかしら？...そうね、私があの子達を助けたいと思ったのは煌牙だけが理由じゃないわ、煌

牙の言う通りあの子達が炭十郎さんの子供だからよ！不思議な縁ね、炭十郎さんに助けられた煌牙が炭十郎さんの子供達を助ける・・・きつと偶然じゃない気がするわ」

「炭治郎も同じような事言っていましたね・・・それと師匠！おやつさん！ヒノカミ神楽ってご存知ですか？」

「知らないわ」

「僕も聞いた事ないな」

「ん〜やっぱ知らないかあ〜」

「そのヒノカミ神楽がどうかしたのかい？」

「最近炭治郎にヒノカミ神楽を教わってるんですが、その呼吸が昔炭十郎さんから教えてもらった呼吸法で師匠達なら呼吸について何か知ってるんじゃないかって」

「そうね、今まで鬼殺隊が使っていた呼吸の中にヒノカミを連想する呼吸はなかったわ、炎の呼吸に近いようだけどおそらくは別の呼吸だと思っわ」

「花蓮！炎の呼吸は火の呼吸と呼んではならない！と聞いた事あるだろう？もしかするとだよ？ヒノカミ神楽の呼吸というのはそれに由来する可能性があるのかもしれない」

「それはつまり炎の呼吸より前に編み出された呼吸という事かしら？」

「確証はないよ、ヒノカミが火の神なのか日の神なのか分からないけど」

もし炎の呼吸より先に編み出された呼吸であるならば炎の呼吸は火の呼吸とは呼べないだろうって思ったただだよ」

「おやつさん！それってもしかして・・・」

「ああ！ヒノカミ神楽の呼吸は始まりの呼吸！全ての呼吸の原点かもしれない」

「始まりの呼吸・・・呼吸の原点」

「黄金騎士牙狼、煌牙だけの呼吸はもしかするとその呼吸が関係してるかもしれないわね」

「俺も考えてました、牙の呼吸より負担の大きいこの呼吸を使いこな

せれば俺は今よりも強くなれる！必ず俺だけの呼吸を見つけます」

煌牙、花蓮、泰造の三人は熱心に話をしていの中カナヲや溜花もその話に聞き入っていたが執事のゴンザがお茶と菓子を運んできたのでみんなで休憩を取ると煌牙達はそれぞれの自室に戻って行った

自室に戻り自分のベッドに座る煌牙とその隣に座るカナヲ、カナヲは先程の話で気になった事を煌牙に伝えた

「ねえ兄さん？炭治郎から教えてもらってるヒノカミ神楽、それが前に話してくれた真髓に至るって事なのかな？」

「うくん・どうだろうな？仮にヒノカミ神楽の呼吸がそうだとしても多分それだけじゃないと思う」

「研ぎ澄まし襲し時月をも砕く真髓に至るだったよね、呼吸だけじゃ足りないって事？」

「まあ・そんな気がしてな、そもそも呼吸を極めてないからそれ以前の話だけだな」

「うん、兄さん私に出来る事ってないかな？」

「そうだな・次はヒノカミ神楽の呼吸を実戦訓練に取り入れたいしまた付き合ってくれよ」

「うん！私も頑張るからね！」

煌牙とカナヲの二人はそう話しながら次の訓練に向けての方針を決めると煌牙は一休みしたいとベッドに寝転び仮眠を取るとカナヲも煌牙に続くように仮眠を取り始め二人が起きたら辺りは既に夜になっっていた

「うし、よく眠れたし俺は英霊の塔に行くけどカナヲはどうする？」

「私も兄さんについて行く」

寝起き直後、煌牙は英霊の塔に行くとかナヲに告げるとカナヲも煌牙について行くと言うと二人で四ノ宮邸の敷地の奥にそびえ立つ英霊の塔へと向かい出した

「兄さん・敷地広すぎだよ、なんで敷地内に森があるの？」

「俺も思った、無駄に広い敷地内に森がある意味が分からない」

英霊の塔へと向かう二人だったが、敷地面積が無駄に広く英霊の塔へと続く森に入ってしまったカナヲは煌牙に愚痴を零すが煌牙も同じ事を思ってたようで愚痴を零す

「そうよね無駄に広いのよねこの土地、私も同感だわ」

「師匠☒」

「花蓮さん☒」

煌牙達の会話に同意を示す花蓮だが突如現れた事により煌牙達は驚きを隠せないでいた

「師匠！来るなら来るで普通に歩いてきて下さいよ！術使つて出てくるのは驚きますから」

「ふふ♪貴方は耳が良いから普通に現れたら面白くないじゃない」

「術の無駄遣い!!?」

「兄さん・花蓮さんも桜花さん達みたいに思考がヤバい人なの?」

「炭治郎もだけどカナヲって素直な反面、サラッと心を抉る一言言うよな?・師匠落ち込んでるぞ?」

「え☒あつ!その・花蓮さんごめんなさい!」

「カナヲちゃん気にしないで、溜花にもよく言われるのよ」

「お母さんとお姉は色々残念って言われてますね!ってそれより師匠はどうしてここに?」

「煌牙蝶屋敷にいる間牙狼剣の浄化はしてないでしょ?貴方が英霊の塔へと向かうならついでに浄化もしちゃおうって」

「そういえば!師匠お願いします」

歩きながらそう話す煌牙達は森を抜けると開けた場所に辿り着く

英霊の塔が眼前に見え始めたところで煌牙と花蓮は歩みを止め周りの気配を感じ取りながら花蓮は煌牙に話しかける

「煌牙もういいんじゃないかしら?」

「そうですね・・コソコソと隠れてないでさっさと出てこいよ!!?」

煌牙がそう言うした後方の森から四つの人影が現れ、そのうちの一つが凄まじい速度で煌牙達に向かい飛び込んで来る

「まずはその女からだああ!!?」

そう言いながら花蓮に突っ込んで来る人影、花蓮を殺すべく迫るが

花蓮は慌てる事なく日輪刀を構え一閃

――牙の呼吸 式の型 虚空の牙――

人影の正体、鬼が迫る瞬間神速の一閃を振るう花蓮、頸と胴体が別れ視界が傾く鬼は何が起きたのか理解出来ない顔になり叫び出した

「女！何をした？何で俺の体がそこにあるんだ！」

「あら？貴方はもう頸を斬られたのよ？分からなかったかしら？」

「馬鹿な!!？十二鬼月であるこの俺が！」

十二鬼月下弦の参病葉は未だ理解出来ないまま徐々に灰になりながらそう叫ぶ

「引退したとはいえ元柱よ？下弦の鬼相手に遅れをとるわけにはいかないわ」

花蓮はそう言いながら日輪刀を鞘に収めると消えゆく病葉から視線を外し煌牙に視線を移すと煌牙は既に臨戦態勢に入っており煌牙から放たれる鋭い気配を感じると残りの鬼は煌牙に任せ鏖鴉を飛ばす

「そんな☒下弦の参がやられた！」

下弦の参病葉があっさりと頸を斬られた事に驚愕する下弦の陸釜
鶴

その横で下弦の肆零余子が震え出し逃げたい衝動に駆られていた

「あ．．そんな．．あの男！黄金の鎧を纏う柱．．この男を殺さないと私達はあの御方に始末される．．でもあの化け物には勝てない！殺される!!？」

目の前にいる柱、煌牙を殺さないと鬼無辻に始末される、だが煌牙には勝てないと取り乱す零余子は涙を流し死を覚悟していた

「落ち着くんだ下弦の肆！私達は下弦とはいえ十二鬼月、その十二鬼月が三人もいるんだ！あの御方にもう一度認めてもらおう為に今こそ力を合わせるべきだ」

そう言いながら自分を鼓舞する下弦の式轆轤は零余子と釜鶴と共に煌牙を始末しようとするがその瞬間

――牙の呼吸 玖の型 大蛇薙――

渾身の一振りで周囲の大地を抉り斬りながら迫る巨大な斬撃刃が

轆轤の体の大半を抉り、抵抗する間も無く倒れ伏す轆轤

「ありえん！私は十二鬼月だぞ！」

体の大半を失い取り乱す轆轤だったが失われた肉体も再生し始め立ち上がるとしたが

「それは良かったな！」

轆轤に対しそう言うとう煌牙は居合の構えを取り大地を力強く踏み抜く

――牙の呼吸 参の型 閃空の牙――

一瞬のすれ違い様に日輪刀を一閃した煌牙によって轆轤は頸を刎ね飛ばされ、宙を舞う轆轤の頭部が零余子の目の前に転げ落ちる

「こんな・こんなはずじゃなかった！下弦の鬼全員でたった一人の柱を殺すだけのはずだったのに・何でこんな事に！」

下弦の鬼達が鬼無辻から言われたのは黄金騎士牙狼の称号を持つ柱を殺す事、鬼無辻の命により別行動している下弦の壺、死亡した下弦の伍を除く下弦の鬼全員でかかれれば柱といえど殺せるだろうと踏んでいた

だが焦るあまり先走ってしまった病葉が元柱にあっさりと殺されてしまい有利だと思っていた状況が傾き始め下弦の式轆轤が下弦を纏めようとするがそんな轆轤も標的である柱にあっさりと殺されもうどうする事も出来ない諦め地に膝をつく

「どうせ俺達は死ぬんだ！せめてあの女だけでも殺してやる」

下弦とはいえ自分より上の階級の鬼があっさり殺され自暴自棄になった釜鷯はせめてカナヲだけでも殺そうと叫び出すがその直後体を硬直させ冷や汗を流しながら震え出した

「なあ？誰を殺すんだ？もう一回言ってみろ」

「あ・あ・あ・あ」

煌牙から明確な殺意を向けられた釜鷯、尋常ならざるその気配に身が竦みまともに喋る事も出来ない釜鷯は煌牙を凝視する事しか出来なかった

(なんなんだコイツは☒おかしい、明らかに普通じゃない！まるであなたの方に睨まれたような)

釜鶴が畏怖する存在、鬼無辻無惨に睨まれたような感覚に陥る釜鶴
それ程までの殺気を放つ焠牙は冷徹な眼差しを釜鶴に向け慈悲な
ど与えるつもりはないといわんばかりに、ただ淡々と日輪刀を振るい
釜鶴の頸を斬り落とした

全く動く気配を見せず人形の首を斬るかのような一連の流れ、下弦
の陸とはいえ十二鬼月を葬った事で鬼狩りとして喜ばしい事だがカ
ナヲは十二鬼月を斬った焠牙を見て不安に駆られていた

(ずっと考えないようにしてた・兄さんに再会出来たのが嬉しくて：
言えば兄さんが消えてしまいそうで怖くて言えなかった・兄さんは
昔より凄く強くなった！だけど心は弱いまま！兄さんは今でもあの
時の事を引きずってる、だから自分を追い込むように強くなるうとす
る・兄さんは信頼してるって言うってくれたけど私に弱音は吐かな
い・心はどこまでも強くなれる！あれは私だけじゃなく自分にも言
い聞かせてたんだよね？あの人達から守れなかった弟や妹達の事、自
分の弱さに押し潰されないように必死に守ってたんだよね？・・・小
さな時から兄さんを見てた、兄さんだけをずっと見てたから・・・苦し
いよ！)

カナヲが心の中で思っていた心情、釜鶴が焠牙の殺気は普通じゃな
いと感じた事は間違いではなかった

鬼に家族を殺された者が鬼を恨み憎しみ怒り復讐する為、仇を討つ
為に鬼狩りになる。それならば強い殺意を抱くのは分かる。

だが焠牙は鬼に家族を殺された訳ではないし鬼に恨みや憎しみを
持って戦っている訳ではない、それを知っているカナヲはだからこそ
焠牙の殺気は異常だと感じ心配していた

焠牙を失い心が壊れたカナヲと同様焠牙もまた心が壊れていた
両親に弟や妹を殺された！自分が弱いから守れなかった！その重
圧が焠牙の心には常に重くのし掛かっていた、普段の焠牙から感じ取
れないその重圧は四ノ宮家の者では気付かないが小さな頃から焠牙
を見てたカナヲだからこそ気付けた違和感だった

大切な者を失う恐怖、それを奪う者は容赦しない！

それこそが心の壊れた焠牙の放つ異常な殺気の正体だった。

「残る鬼はお前だけだ！下弦の肆！命乞いはするなよ？散々人を喰い散らかしてきたお前らが自分の命は惜しいとか言う資格はないからな！」

恐怖に怯え座り込む零余子に冷徹な眼差しを向ける焠牙、焠牙の放った慈悲のない言葉に絶望し涙を流す零余子

（怖い！怖い！！？あの御方よりも目の前の柱の方が怖い！！？逃げきれない！！？逃げてもあるの御方に始末される！嫌！死にたくない！死にたくない！）

そんな零余子などお構いなしに日輪刀を構え今にも斬りかかろうとする焠牙、だがそんな焠牙を花蓮は引き止めた

「焠牙！待ちなさい！」

引き止めた花蓮に何の用だと睨む焠牙、花蓮は焠牙のそばに寄ると焠牙を諭すように話しかける

「焠牙何があったか分からないけど憎しみに囚われちゃいけないわ、貴方は魔戒騎士、守りし者それを忘れないで」

それを聞いた焠牙は目を瞑ると深呼吸し昂っていた気持ちを落ち着ける

「師匠ありがとうございます」

花蓮に一言礼を言う焠牙は零余子に向き直し話しかけた

「下弦の肆！今まで人の命を奪ってきたお前が命乞いをして俺は助ける気はない！命を奪うつてのは逆に自分も命を奪われる覚悟がないといけないんだ！」

「・・・はい・・・貴方の言う通りです・・・」

「もし俺達がお前を見逃せばお前はまた人を喰う、だからこそ俺達はこれ以上命を奪われない為に鬼を斬る！分かるよな？」

「はい！もちろんです！！？あ！いえ！私はもう二度と人を襲いません！誓います！！？絶対に人を襲いません！！？」

「いや、そうじゃなくてだな！・・・そもそも十二鬼月は信用出来ない」「それはごもつともです！ですが！私達下弦はあの御方に用済みとされ解体されかけたんです」

「それで？」

「どうせ始末するのなら最後に貴方を殺してこいと言われました！返り討ちにあえば手間が省ける、仮に殺す事が出来れば再び下弦として認めると言われ・・・申し訳ございません!!？申し訳ございません!!？」

煌牙と零余子はそう会話すると煌牙は再び眼を閉じ深呼吸して零余子の頭を触り始めた

「なるほどね、どうやら本当らしいな！・・・下弦の肆！お前名前は？」

「へっ・・・零余子！零余子と言います！」

「零余子か・・・お前これから人の為に生きてこれまでの罪を償うって約束出来るか？」

「・・・助けてくださるのですか？・・・許してくださるのですか？」
「許すのは俺じゃないし、これからのお前次第だろ？それにムカつくんだよ!!？テメエの都合で鬼に変え、テメエの都合で始末するなんてな！」

鬼無辻の思い通りになんかささせたくない結果俺はお前を斬らない！別に助けた訳じゃない」

「・・・ありがとうございます！ありがとうございます!!？私は貴方様に忠誠を誓います!!？」

「胡散臭っ！別に信用した訳じゃないからな！」

零余子の頭に触れ記憶を読み取った煌牙は零余子とそう会話すると花蓮とカナヲに振り返り

「これで良かったんだよな？」

「そうね、鬼にもやり直せる機会があるのなら」

「カナエ姉さん、しのぶ姉さんの夢の実現の一步かな？」

煌牙の問いかけに頷く二人、カナヲは煌牙が落ち着いた事に安心したが

一つ疑問が浮かび上がった

(でもどうして？あれ程殺意を振り撒いていた兄さんが落ち着いた

魔戒騎士としての、守りし者としての誇り？でももしその誇りさえも捨ててしまうような事があれば・・・その時兄さんは・・・)

カナヲがそう考えていると背後から下弦とは比べ物にならない重厚な威圧感が押し寄せ煌牙達は戦慄する

「やはり下弦如きでは手も足も出ないか」

そう聞こえると煌牙達は日輪刀を構えながら振り返るが誰もいな
い事に気付く

「下弦の肆、まさかあの御方を裏切る訳じゃあるまいな？」

振り返った煌牙達の背後からまたもや声が聞こえ再び振り返ると

そこには侍のような出で立ちの六つ目の鬼が零余子を睨みながら
威圧していた

「あ……あ……そんな……何で上弦の壺がここに」

十二鬼月最強の鬼、上弦の壺黒死牟に睨まれた零余子は震えながら
何故上弦の壺がここにいるのか問うと黒死牟は

「わからぬか？下弦の肆！貴様ら下弦は最初からただの捨て駒、あの
方は私に黄金騎士を殺すよう命じられたのだ」

黒死牟は零余子にそう言うと言とうと煌牙達に視線を移し

「まさか鬼狩りが鬼を、それも十二鬼月を庇うとはな！」

黒死牟は呆れた眼差しを向けながらそう言うと言とうと花蓮が

「あの子は罪を償いやり直そうとしているの！殺す必要なんてないわ」

花蓮が黒死牟にそう反論すると

「奴はあの方を裏切ったのだ！鬼が罪を償うなど笑止千万！！？私が貴
様らごとと葬ってやろう！」

黒死牟がそう叫ぶと

――月の呼吸 壺の型 闇月・宵の宮――

血鬼術による斬月刃を伴う高速の横一閃が花蓮に襲いかかると咄
嗟に後退し刃による裂傷を避けるが血鬼術による斬月刃が腹部を切
り裂き跪いてしまう花蓮

「師匠！！？」

そう叫びながら黒死牟を睨みつける煌牙、一度は落ち着いていた殺
意が再び増幅し黒死牟へと斬りかかる

「ほうーその若さでよくここまで練り上げた、私を殺そうとするその
殺意も今まで葬ってきた柱以上！だが！貴様の先代の黄金騎士には

及ばん！」

煌牙の斬撃を受け止めた黒死牟はそう言うのと刀を振り抜き煌牙を弾き飛ばす

「黒死牟――!!?」

怒りで我を忘れ黒死牟の名を叫びながら再び斬りかかる煌牙

「怒りで己を見失うと攻撃が単調になるぞ」

そう言いながら黒死牟は再び型を放つ

――月の呼吸 壺の型 闇月・宵の宮――

――牙の呼吸 式の型 虚空の牙――

黒死牟の型に対し煌牙も型を放つ事で黒死牟の斬撃を食い止める

「なるほど！刀を振り切らせぬ事で私の術を封じたか」

そう関心する黒死牟をよそに煌牙は視線を黒死牟から逸らさずカナフに

「カナフ!!?師匠を連れてここから離れろ!!?」

そうカナフに言うがカナフは首を縦に振らず

「でも！兄さんが」

煌牙を心配し離れる事を躊躇うカナフだったが煌牙は黒死牟へと斬りかかりながら

「これは柱命令だ！カナフ！師匠を助けてくれ！」

カナフに花蓮を託し共に逃げてくれる事を願う煌牙は黒死牟をカナフ達の元に行かせまいと足止めし一人留まる事を決意する

「私がこのまま見逃すと思うか?」

そう言うのと黒死牟は鏑迫り合いのまま

――月の呼吸 伍の型 月魄災禍――

刀を振るう事なく無数の斬撃を発生させる黒死牟、直前に嫌な予感がした煌牙は瞬時に後退し斬撃を辛うじて躲すと

「厄介だなその斬撃！」

そう言うのと煌牙は居合の構えと取り深く呼吸をする

――牙の呼吸 参の型 閃空の牙――

神速の踏み込みで黒死牟を一閃しようとするが

「お前の動きは全て視えている」

黒死牟はそう言いながら煌牙の斬撃を受け止め

――月の呼吸 式の型 珠華ノ弄月――

刀を振り上げながら煌牙を弾き飛ばし煌牙へ三連の斬撃を放つ

足場のない煌牙は日輪刀を地面に突き刺し無理矢理着地すると体を捻りながら跳躍し斬撃による致命傷を避けるが月輪の斬撃まで躲し切れず至るところに裂傷を負ってしまう

「ホントに厄介だな！今までの鬼なんか比べ物にならない、これが上弦の壱」

黒死牟に対し決め手が無い煌牙はそう呟きながら呼吸による止血をしようと日輪刀を構え直す

「兄さん!!?」

煌牙の名を呼びながらカナヲが並び立ちと日輪刀を構え黒死牟を見据える

「カナヲ！お前何で来たんだ!!?俺は『兄さんを一人にさせない!もう離れないって決めたから!それに花蓮さんが兄さんを助けろって』」

「・・・ふうく・・・零余子!!?最初の人助けだ!師匠を連れてここから離れる!お前なら出来るだろう?・・・俺はお前を信じる」

「・・・はい!やれます!必ず逃げ切ってみせます」

カナヲの決意と花蓮の願いを汲み取った煌牙は零余子に花蓮を連れて離れるよう促す、先程まで敵であった零余子に全幅の信頼は寄せていないがこの状況下で頼めるのは零余子だけである為悩みながらも託すしかなかった

「兄さん?」

「カナヲ、鴉を飛ばせ!」

「うん」

煌牙はカナヲに鎧鴉を飛ばさせ鬼殺隊本部に報告すると

「私は言った筈だ!貴様らを逃さんと」

黒死牟はそう言いながら

――月の呼吸 陸の型 常夜孤月・無間――

黒死牟が刀を一振りするだけで広範囲に縦横無尽かつ無数の斬撃

が放たれる

――牙の呼吸 肆の型 空谷の跫音――

轟音が響きながら風が吹き荒れ焠牙が一転、瞬間的に放たれた斬撃を躲しきれないと判断した焠牙は致命傷を避けるべく肆の型を防御に回し

黒死牟の斬撃と撃ち合う

「兄さん」

焠牙が防いだ事でカナヲに届く斬撃が減り辛うじて躲す事が出来たカナヲは焠牙を見て眼を見開く

致命傷を避けたとはいえ向かってくる無数の斬撃を全てを相殺する事は出来ず、避ければカナヲに斬撃が届くと踏んだ焠牙はその身に斬撃を受け血塗れになっていた

「カナヲ大丈夫だ！深い傷は負ってない」

焠牙の纏う魔法衣の強度、下に纏う隊服の強度が重なり比較的傷が浅い焠牙はそう言いながら深呼吸をすると

――牙の呼吸 陸の型 龍穿の罅――

――牙の呼吸 玖の型 大蛇薙――

高速の二連で生み出した真空刃を撃ち抜き巨大な竜巻を黒死牟にぶつける焠牙、竜巻に吞まれた黒死牟に追い討ちをかけるべく玖の型を放つと

一度後退し警戒しながら刀を降ろす

「カナヲ！まだ終わってない！集中を切らすなよ」

「分かってる」

焠牙の忠告に頷き警戒するカナヲ、焠牙は次の型を放つべく居合の構えを取りながら警戒を続ける

「良い技だ！流石は牙を冠する呼吸、故に惜しい！呼吸がお前に合えば私も少しは危うかっただろう」

竜巻が消えると黒死牟がそう言いながら姿を表す

竜巻と巨大な斬撃によって袴が破れ右腕と刀を消失した黒死牟は焠牙の技量を褒めるも牙の呼吸が焠牙に合っていない事を見抜きそう告げる

「しかし！たかが右腕と刀を奪った程度、私には何も支障はない！」
黒死牟はそう言いながら瞬時に右腕を再生させ刀も新たに精製させる

刀身を伸ばし七支刀のような形状に変化させる

「兄さん！」

「……カナヲ……黒死牟はここで終わらせる」

黒死牟から放たれる重厚な威圧感が増し思わず焠牙の名を呼ぶカナヲ

焠牙はそんな威圧感など最早どうでもいいと割り切りある決心をする

――月の呼吸 漆の型 厄鏡・月映え――

黒死牟は刀を斜めに一闪すると先程より巨大化した複数の斬撃と
うねる月輪の斬月刃が焠牙達に迫る

優れた動体視力でその斬撃を躲すカナヲと焠牙、瞬時に焠牙は日輪
刀としまうと牙狼剣を取り出し抜刀、切っ先を頭上に掲げ召喚陣を描
こうとする

――月の呼吸 玖の型 降り月・連面――

焠牙に向かって複雑な軌道の斬撃が無数降り注ぐ

――牙の呼吸 漆の型 荒狗鷲――

それに対し焠牙は牙狼剣を巻き上げるように斬り上げ上昇気流を
伴う斬撃で黒死牟の型を相殺する

「私が黄金の鎧の召喚を許すと思うか？私がああの御方から言われたの
は貴様の殺害！万が一等起こらぬよう黄金の鎧は纏わせん」

牙狼の召喚を阻む黒死牟はそう言う焠牙は

「だったら止めてみるよ！」

そう挑発する焠牙は牙狼剣を鞘にしまうと居合の構えをとる

「先程の型か、その型は既に見切っている」

やるだけ無駄だと言いたげな黒死牟は刀を構え返り討ちにしよう
とするが

――牙の呼吸 参の型・改 閃空鳴御雷――

神速の踏み込みから強制的に方向転換、緩急をつけた歩法で一瞬で

黒死牟の背後に回る焠牙に黒死牟も反応が遅れ振り向きざまに刀を振るい焠牙を斬ろうとするが

――牙の呼吸 壺の型 断空の牙――

参の型から壺の型に切り替え跳躍しながら黒死牟の斬撃を躲すと空中で召喚陣を描き牙狼の鎧を纏う焠牙

牙狼の鎧を召喚された事に内心苛立つ黒死牟は牙狼を早々に始末すべく型を放つ

――月の呼吸 捌の型 月龍輪尾――

巨大化した横薙ぎの一閃が牙狼に迫るが牙狼は牙狼剣を構えその斬撃を受け止める

「黒死牟！俺の刃がお前に届かなくても！俺は必ずお前を殺す！例え俺の命が尽きようとも!!？」

そう言いながら牙狼は牙狼剣を振り抜き黒死牟を弾き飛ばすと

――牙の呼吸 玖の型 大蛇薙――

焠牙に宿る黒死牟への怒りが反応し牙狼が烈火炎装を纏うと魔導火を纏った大蛇薙が黒死牟へと迫る

――月の呼吸 拾の型 穿面斬・蘿月――

回転鋸のような斬撃を複数横並びに放つ黒死牟、牙狼の放つ大蛇薙とぶつかり合い対消滅すると

――花の呼吸 伍の型 徒の芍薬――

黒死牟の型が消滅した隙を狙ってカナヲが高速の九連撃を放ち黒死牟に斬りかかる

――牙の呼吸 捌の型 六根清浄・舞天狼――

牙狼もカナヲに続くように流麗な軌道を描きながら高速の六連撃を放ち黒死牟に斬りかかる

――月の呼吸 拾陸の型 月虹・片割れ月――

牙狼とカナヲに向けて上空から三日月のような斬撃を振り降ろす
黒死牟

魔導火を纏った牙狼剣で斬撃を受け止め斬り上げて消し飛ばした

牙狼

回避が間に合わず肩口から裂傷を負い倒れ込むカナヲ

「カナヲ☒・・・カナヲ!!?」

カナヲが負傷した事で即座に近寄り心配する牙狼にカナヲは

「兄さん、私は大丈夫だから! そんなに深くないから心配しないで」

痛みを堪え無理して気丈に振る舞うカナヲ、そんなカナヲを見て牙狼は

「・・・・・・・・殺してやる・・・・・・・・俺の家族を奪う奴を・・・・・・・・殺す・・・・・・・・殺す・・・・・・・・」

その声はあまりに静か、だが激しい憎悪が溢れる牙狼の左半身に亀裂が生じ亀裂から焔牙の憎悪が生み出した炎が噴き出す

怒りに満ちた焔牙に反応し橙色に輝く牙狼の瞳が深紅に染まりその視線が黒死牟へと向けられる

「何だ☒あの姿は! 暁大牙の時でさえあのような姿は見た事がない! それにこの身が震えそうな程の殺意! 一体奴に何が起こったのだ!」

牙狼のあまりの変わりように驚く黒死牟、焔牙から放たれる殺意に気圧され思わず震えそうになる黒死牟はこれ以上牙狼を野放しにすると危険だと判断し牙狼を殺すべく型を放つ

――月の呼吸 拾肆の型 兇変・天満織月――

巨大かつ無数の斬撃と月輪の新月刃が広範囲に放たれ牙狼とカナヲに襲いかかる

――牙の呼吸 拾の型 星牙一天――

一瞬のうちに無数の斬撃を広範囲に放ち黒死牟の斬撃を撃ち消す牙狼

焔牙は無意識のうちに牙の呼吸からヒノカミ神楽の呼吸に切り替えると

――ヒノカミ神楽 日暈の龍・頭舞い――

炭治郎から教わったヒノカミ神楽の演舞を無意識のうちに模倣する牙狼

――ヒノカミ神楽 斜陽轉身――

続けてヒノカミ神楽の演舞を模倣する牙狼、急激な呼吸の変化と型に黒死牟も反応が鈍り牙狼剣による裂傷を負わされる

「まさか奴もあの呼吸を使えるというのか忌々しい!!? 縁壹! 暁大牙!!?」

牙狼がヒノカミ神楽の呼吸使うのを知り苛立ちを隠せない黒死牟
そんな黒死牟など気にも止めず再度攻撃を仕掛けようとする牙狼
だが! 牙狼の動きが急激に止まり微動だにしなくなる

「奴の動きが止まった・・奴は何を考えている」

牙狼の不可解な行動を理解出来ない黒死牟はそう言うが牙狼は未だに動かない

(殺す・・殺す・・黒死牟を殺す・・)

(そうだ! 奴を殺す為に力に身を委ねろ! 家族を! お前の大切な者を奪う奴らを皆殺しにするんだ! お前の中の炎を燃やせ!!?)

自らの怒りに吞まれた焠牙、そんな焠牙の心に話しかけてくる声は力に身を委ねろと焠牙に言う薄ら笑いをしながら焠牙の中へと戻っていった

「焠牙!!? 早く鎧を解除しろ! このままじゃ鎧に魂を喰われるぞ!」

この時既に鎧を纏う制限時間は過ぎており焠牙は牙狼の制御が出来なくなっていた、怒りに吞まれた焠牙はザルバの警告を無視し鎧の解除を解かないでいると

ーードクン!!?ーードクン!!?ーー

牙狼から心音のような音が響くと牙狼の鎧が肥大化し始めやがて本能のままに暴れ狂う巨大な金色の狼のような怪物へと変貌していく

心滅獣身牙狼 焠牙の制御出来る限界を超え鎧が焠牙を蝕みながら本能の赴くままに暴れ狂う破壊の化身、目に見えるもの全てを敵とみなす牙狼は黒死牟を睨み突進

ー月の呼吸 捌の型 月龍輪尾ー

迫り来る牙狼を斬り払う黒死牟、直撃を受け僅かに怯むもその鎧に傷を付ける事は叶わず突進する牙狼の鋭利な爪による一撃を受けてしまう黒死牟

思いの外深い傷を負った黒死牟は跪き牙狼を見上げると牙狼は力ナヲの方へと向かって突進しだす

「グオオオオ」

咆哮を上げならカナヲに迫る牙狼に黒死牟は

「あの娘は奴の・・奴は妹にまで手をかけるのか」

敵味方見境なく暴れ狂う牙狼に困惑を隠しきれない黒死牟はそう
呟くが無情にもその凶刃はカナヲへと振り降ろされようとしていた

「お兄！カナヲさん無事でいて！」

焦りながらそう呟く瑠花、鏖鴉からの伝令を聞いた瑠花は現場に最
も近い事から真っ先に焠牙達の元へと向かっていた

本来柱への応援要請だったが焠牙達が危険な為、いてもたってもい
られずにいた

「辰巳お兄や春お姉が居てくれたら心強いけど」

そう呟く瑠花、辰巳と春の二人は任務で不在の為今はいないが階級
が高い二人がいたら心強いと思いつながら森の中を駆け抜けていた

「わあ！黒死牟殿が面白そうな事やってるから混ぜてもらおうと思っ
てたけどこんな可愛い娘が目の前にいるならこっちの方が楽しそう
だね、ねえ？君俺と遊ばない？」

瑠花の目の前に現れた鬼、上弦の式童磨は瑠花を見つめてほくそ笑
む

上弦の壱と上弦の壺、暴走する焠牙、混迷する戦況は更に加速して
いくのだった。

数ヶ月前

とある場所に十二鬼、下弦の鬼達が集められていた
部屋や廊下が複雑に入り組んだ異様な空間を見渡す釜鵠はその場
に下弦の伍がまだいない事に気付く

琵琶の音色が鳴り響き散らばるように集められていた下弦達が同
じ場所を集められると下弦達の前に着物を着た女が現れる

「頭を垂れて蹲え！平伏せよ」

そう言う女の言葉に下弦達は反射的に蹲り頭を下げる

（無惨様だ・無惨の声、分からなかった姿も気配も以前と違う凄まじ
い精度の擬態）

着物の女が無惨だったと冷や汗を流す釜鵠

「申し訳ございません、お姿も気配も異なっておりますので」

緊張しながらも取り繕う零余子だったが

「誰が喋って良いと言った、貴様共のくだらぬ意志でものを言うな、私
に聞かれた事のみ答えよ」

無惨は下弦の鬼達にそう言う

「罌が殺された・下弦の伍だ！私が問いたいのの一つのみ、何故に下
弦の鬼はそれ程まで弱いのか、十二鬼月に数えられたからと言ってそ
れで終わりではないそこから始まりだ、より人を喰らいよりより強く
なり

私の役に立つ為の始まり、ここ百年余り十二鬼月の上弦は顔ぶれが
変わらない、鬼狩りの柱共を葬ってきたのは常に上弦の鬼達だ、しか
し下弦はどうか？何度入れ替わった？」

そう長々と愚痴を零すように話す無惨、十二鬼月になって長い年月
が経つてもいない下弦の陸釜鵠は

（そんなことを俺達に言われても）

釜鵠にとつてそれは前任の下弦の話、それを持ち出されて返答に困
る釜鵠は直接抗議出来るわけもなく心中でそう思うが

「そんなことを俺達に言われても なんだ？言ってみろ？」

釜鶴の思考が読み取れる無惨、釜鶴に釈明を求めるが

(思考が・・読めるのか?・・・まずい!)

まさか自分の思考が読み取られるとは露にも思っていなかった釜鶴は

そう焦るが

「何がまずい?言ってみろ」

そう言う無惨の顔は既に怒りに満ちており、釜鶴は無惨から産み出される触手のようなものに拘束されると

「お許しください鬼無辻様!どうか御慈悲を!申し訳ありません!申し訳ありません!申し訳ありません!申し訳ありません!申し訳ありません!」

必死に謝り許しを懇願する釜鶴、そんな釜鶴など最早要らぬと言葉途中で喰らいにかかる触手

「つたく!馬鹿か!」

そう声が聞こえると触手のようなものが真つ二つに裂かれ釜鶴は一命を取り留める

突然の出来事に十二鬼月の面々が唾然としてる中、無惨の背後に現れた鬼「斬吼狼」は無惨を哀れむような目で見ながら話し出した

「処分するには少し早いんじゃないか?下弦とはいえ十二鬼月、その辺の雑魚よりはマシだろ?それにな!上弦の顔ぶれが100年余り変わらない?そりやそうだろ?奴らは黄金騎士と相対してないんだからな!上弦の式だったか?朝日が昇らなきゃ牙狼に斬られてた筈だ!」

そう話す斬吼狼に無惨は

「斬吼狼!お前は私に口答えする気か?」

怒りを露わにしながらそう言う無惨だが

「お気に入りの下弦の伍が殺されたからって他の下弦共に当たるなよ、

まあ下弦共が処分されようが俺には関係ないけどな」

鬼である前に魔戒騎士である斬吼狼は下弦達が処分されようが関係ない

寧ろ狩るべき対象が勝手に減っていく分手間が省けるのだが、無惨

の癩癩で理不尽に殺されるのは釈然としない斬吼狼は釜鶴を助け無惨に文句を言っていた

「斬吼狼！私はお前に黄金騎士の殺害を命じていた筈だ！何故殺さなかった？何故見逃した？」

無惨は下弦達の事より斬吼狼が煌牙を殺さなかった事の方が重要で話を切り替えてそう斬吼狼を問い詰めるが

「はあくく馬鹿か？お前は！俺が斬るのは黄金騎士じゃねえ！お前と上弦の壺だよ！」

そう啖呵を斬りながら魔戒剣を引き抜く斬吼狼に無惨は

「斬吼狼!!？」

完全に頭に血が昇り斬吼狼を始末しようと触手を差し向けるが

――呀の呼吸 玖の型 大蛇八重裂き――

牙の呼吸玖の型大蛇薙と同様の斬撃を八連撃する牙の呼吸玖の型の上位互換のような型で触手諸共無惨に仕掛ける斬吼狼

「ハッ！じゃあな無惨！お前らの頸は俺と牙狼、あと鬼狩り達が必ず断ち切るからよ！せいぜい頸を洗って待ってな！」

そう言うのと斬吼狼は下弦達に視線を移したが興味ないと振り返ると自らの鬼鬼術で影を生み出しその影に潜り消えていった

鬼無辻の根城 無限城 斬吼狼の型により一部が全壊、その全壊した部屋の奥からゆらりと起き上がり今まで以上の怒りを露わにする無惨が現れる

驚異的な再生力で斬吼狼から受けた斬撃は完治しているが着物はすでに衣服としての機能を果たしておらずほぼ全裸に近い姿をした無惨は怯え固まっている下弦達に目を向けるとその怒りをぶつけるように話し出した

「使えぬ下弦共よ！お前達下弦の鬼は解体し十二鬼月は上弦のみと良いと思っていたが気が変わった！黄金騎士を受け継ぐ牙柱 四ノ宮煌牙 を始末してこい!!？殺す事が出来れば再びお前達を下弦の鬼として認めてやろう！」

そう下弦達に告げると下弦達は怯えながらも頷き煌牙を殺す事を

無惨に誓う

そんな中、下弦の壱「厭夢」は無惨をうっとりとした表現で見つめていると無惨が

「下弦の壱、何か言いたい事があるのか？」

そう厭夢に聞くと厭夢は

「私は夢見心地でした、貴方様直々に手を下してくれるなんて素晴らしいと、他の鬼の断末魔も聴けるなんて私にとってこれ以上ない幸せでした・・・でもあの鬼は邪魔をした・・・私はあの鬼の断末魔が聴きたい」

そう話す厭夢、斬吼狼の断末魔が聴きたいとうっとりする厭夢に無惨は

「いいだろう！お前は耳飾りの鬼狩りを殺せ！あの裏切り者は必ず鬼狩りに共に接触する筈だ！斬吼狼諸共鬼狩りを殺せ！」

そう言うくと無惨は厭夢の頸に爪を突き立て血を流し込む

無惨の血が流れ込んだ事で悶絶する厭夢をよそに無惨は他の下弦達に視線を移し

「四ノ宮煌牙を殺してこい！」

そう一言言うくと琵琶の音色が鳴り響き厭夢を含む下弦達はその場から消えていった

下弦達が消えた無限城、無惨は琵琶の鬼「鳴女」の琵琶により無限城の中を移動すると

「黒死牟・・・お前に頼みがある・・・黄金騎士である牙柱四ノ宮煌牙を殺せ！下弦共など黄金騎士の障害にもならん！」

無惨の命を黙って聞いていた黒死牟は座り込んでいた状態から立ち上がると刀を抜刀し

「四ノ宮煌牙・・・暁大牙の後継者・・・その系譜は私が断ち切らねばなるまい」

そう言う黒死牟に無惨は

「斬吼狼が裏切った」

無惨の発言に黒死牟から強烈な怒気が迸り周囲の空気が震えだす「ならば斬吼狼諸共黄金騎士を殺すまで」

黒死牟はそう言うのと無限城から立ち去っていった

時は戻り蝶屋敷へ

カナヲの鏖鴉からの報告を受けて鬼殺隊本部は柱達に上弦の壱討伐及び焠牙達の応援要請を出し、しのぶは迅速な出撃準備を終えると四ノ宮邸へ向かおうとしていた

「あのーしのぶさん！焠牙さんやカナヲは・・・」

「・・・分かりません！相手は上弦の壱、これまでの鬼とは違います！一刻も早く向かわないと取り返しのつかない事になるかもしれません」

焠牙達を心配している炭治郎達は出発しようとしていたしのぶにそう聞くが相手が上弦の壱、しのぶは早く向かわないと取り返しのつかない事になると焦り炭治郎達にそう告げると足早に四ノ宮邸へと向かっていった

「怪我はほぼ完治したとはいえ今の俺には日輪刀がない！俺達も焠牙さん達の救援に行きたいのに！」

「いやー俺達って何だよ!!？何で勝手に俺も含まれてるの☒そりや俺も焠牙さん達の事は心配だけどさ、上弦の壱とか無理!!？助けに行くどころか死に行くのと同じじゃん！」

「善逸は焠牙さん達が死んでも良いのか？それで良いのか？」

「良いわけないだろー！でも今の俺達に何が出来るんだよ！信じてろよ！焠牙さんを！今の俺達に出来る事はそれしかないんだからさ！」

「ゲハハハ！オーガは強え！俺は強くなつてオーガみたいに暴れてやるぜ」

そう話す炭治郎達、炭治郎は善逸の話を聞いて自分と焠牙との今までの出来事を振り返ると

「そうだなー善逸の言う通りだ！焠牙さんは俺や禰豆子を信じてくれた
た

俺が焠牙さんを信じなくてどうすんだ！ありがとう善逸！」

そう話す炭治郎は続けて

「それに煌牙さんは魔戒騎士！牙狼なんだ！負けるはずがない！」

「は？魔戒騎士？牙狼？何それ？」

「ああ善逸達は知らないんだったな、煌牙さんは魔戒騎士といって鬼殺隊とは違う役割があるみたいなんだ！その煌牙さんが纏う黄金の鎧が牙狼！黄金騎士牙狼！狼の姿をした鎧だったよ」

「鎧？え？鎧着て戦うの？」

「狼だと？オーガのヤロー！山の王は譲らねえつもりだな」

炭治郎達はそう話しながら煌牙達の帰りを信じ今の自分達に出来る事をやろうとしていた

「桜花ちゃん準備はいい？」

「うん！日輪刀はないけど私は魔戒法師だから！アレもあるし大丈夫だよ」

桜花と朔弥、二人の魔戒法師もまた煌牙達を救うべく四ノ宮邸へと向かおうとしていた

「四ノ宮」

鏝鴉からの伝令を聞いた義勇、鏝鴉から案内を受けながら四ノ宮邸へと向かおうとしていた

「煌牙ア！！？絶対死ぬんじゃないぞ！！？上弦の壱は俺がブツ殺してやる！！？」

煌牙と親交のある実弥はそう叫びながら四ノ宮邸へと全速力で向かっていた

四ノ宮邸へ

「旦那様！溜花お嬢様が！」

「全く！困った娘だ！僕は裏方であって鬼とは戦わないんだけどな！ゴンザ後は頼んだよ」

「かしこまりました旦那様」

瑠花が屋敷から飛び出し慌てた執事のゴンザは泰三を呼びに行く

と
泰造は自分は鬼殺隊の裏方であり鬼と戦う隊士ではないと言いな
がら

瑠花を追う為に屋敷を出て行った

英霊の森へ

「そんなに怯えなくて良いよ、俺は優しいから君を救ってあげるよ」

「別に怯えてなんかいませんよ！勘違いしないでください！」

「ムキになっちゃって可愛いなく♪ねえ？どうやって遊ぼうか」

「私は貴方と遊んでる暇はありません！」

そう言ううと瑠花はその場から逃げるように走り出し童磨から離れ
ていく

「あれ？もしかして嫌われちゃった？」

そうとぼける童磨、余裕の表情を崩さない童磨の眼は獲物は逃がさ
ないと走る瑠花を捉え不気味な笑みを漏らす

（怖い！体が凍り付きそうな威圧感！あれがお兄達が言っていた上弦
の式！呼吸を使えば肺が壊される！今は逃げないと！）

瑠花は蝶屋敷に来てから強くなった、以前より心肺機能も増し常中
の習得もあと一歩というところまで成長していたが相手は上弦の式、
初見殺しともいえる粉凍りを撒く童磨を相手に呼吸を使う事が出来
ない瑠花は

その実力を発揮出来ないまま逃げるしかなかった

「ねえ？そんなに逃げなくてもいいだろ？俺傷付いちやうぜ」

そんな瑠花を追って来た童磨は瑠花を捕まえようと手を伸ばす

「やるなら今！」

――雲の呼吸 肆の型 流れ雲――

瑠花は童磨が手を伸ばした瞬間そう言ううと走る勢いを殺し慣性を
利用して軸足に力を溜め込んだ瑠花は軸足を起点に後方へと方向転

換、緩急を付けた歩法で童磨の背後に回り込むと

――雲の呼吸 伍の型 群青雲母――

初撃の抜刀による居合斬りから回転による遠心力で威力の増した二撃目を同じ箇所につ放つ高速の二連撃を童磨の頸に叩き込む溜花

「アハハ！君面白い動きをするね、でも残念♪俺の頸は斬れないぜ」

背後から放たれた斬撃を鉄扇で防いだ童磨は余裕を崩さずに笑いながら溜花にそう言う

「ですよね」

そう一言だけ言つて溜花は再び走り出した

「溜花は童磨から逃げてはいるが、ただ逃げているわけではない

童磨との距離が開いた隙に呼吸を行い童磨と戦う、粉凍りを警戒した溜花がとれる唯一の対抗手段だった

「あれ？また逃げちゃうの？そうか！鬼ごっこで遊びたいんだね、文字通り俺が鬼で君を追いかけるよ、捕まえたら美味しく頂いちゃうかな♪」

そう言うのと童磨は走る溜花を追いかけ始めた

「アハハ！楽しいね、そういや君名前は？」

「私は楽しくありませんから！名前？教えません！」

「じゃあ捕まえて無理矢理聞いちゃうかな？」

童磨は笑いながらそう言う

――血鬼術・蓮葉氷――

鉄扇を振るつた童磨は走る溜花の前方に蓮の氷を作り出し溜花を足止めを狙う

「わわわっ！」

走る前方に氷の障害物が現れた事で勢いを削がれた溜花はその場で跳躍

前方に見える木の枝に手をかけると軽快な動きで枝の上に飛び移り枝から枝へと移り渡りながら童磨から逃がれていた

「ホントに面白い動きをするね、でもそんなに必死に逃げられちゃう俺傷付いちゃうぜ」

童磨はそう言うよ

――血鬼術・散り蓮華――

鉄扇を振るい氷の破片を大量に撒き散らす童磨、急激な気温の低下と強烈な冷気が逃げる溜花の足取りを重くし軽快な動きを封じるとそのまま後ろから溜花を羽交い締めにして捉える

「やつと捕まえたよ」

溜花を捕まえて機嫌が良さそうな童磨はそう言うが、溜花は童磨から逃れようと必死に抵抗を見せる

「もう捕まえられたんだから大人しくしなよ、抵抗出来ないよう動きを封じちゃおうか」

童磨はそう言うよと冷気で溜花の体温を奪っていき、溜花は体温の低下で体の自由が利かなくなり意識も薄れつつあった

「もう抵抗出来ないね、大丈夫！君は俺の中で永遠に幸せになるんだ」

童磨は抵抗出来ない溜花にそう言うや鋭い牙を剥き出しにして溜花に喰らいつこうとしていた

英霊の森付近

「零余子ちゃんも面白いわ、降ろしてくれないかしら」

「駄目よ！上弦の壱からの傷が深くないとはいえ血を流し過ぎよ！それに私はあの方に頼まれたの！貴方を助けろって！」

「ふふ♪私も今まで柱として十二鬼月を見てきたけれど、まさか助けられる日が来るなんて思いもしなかったわ」

「まだ助かってないわよ！早く手当てしないと！人間は私達みたいに傷が直ぐには治らないんだから！」

「そうね、でも心配しないで！完治は無理でも傷を塞ぐ事なら出来るわよ」

煌牙の頼みで花蓮を担いで逃げていた零余子は森に入る手前で花蓮にそう頼まれ話をしながら走っていた

花蓮の発言に驚くも傷が治るならと花蓮を降ろすと花蓮はその場で術を行使し傷口を塞ぐと花蓮は森を抜け屋敷を指す

「傷が治った☒ってどこに向かっているの？」

花蓮の傷が塞がった事に驚く零余子だが花蓮が走り出した事で慌てて追いかけながらそう聞くと花蓮は

「私達の屋敷よ？特殊な結界を張ってるから貴女の安全を確保出来るわ」

そう花蓮が言うとき零余子は

「どうしてそこまで・・・私は鬼！十二鬼月よ？信用してくれる事は嬉しいけど本当なら私達は」

「殺し合わないといけない？確かに私達鬼殺隊と鬼はそうゆう関係かもしれない、でも違う関係があっても良いんじゃないかしら？」

「・・・あの方も煌牙様もそれを望んでるのかしら？」

「あの子はそうゆう子よ、ちよつと前に鬼の女の子を庇う為に隊律違反まで犯した子だもの」

「・・・煌牙様は変わってるわ」

二人はそう会話すると屋敷を指し森を駆け出した

「零余子ちゃん！この先鬼がいるわ！今までにない気配：まさか上弦？」

森の中を進んでいると先の方から濃密な鬼の気配を感じた花蓮は零余子に呼びかけ警戒しながら進むと異様な寒気を感じた花蓮と零余子

二人の先にいたのは鉄扇をヒラヒラと仰ぎながら座り込む鬼、上弦の式童磨が二人を見据えていた

「あれ？可笑しな組み合わせだね、人間と鬼が一緒にいるなんてそれも十二鬼月・・・お前あの方を裏切るの？」

ヘラヘラと笑いながら喋る童磨は急に鋭い目付きをしながら零余子を問いたです

「そんな事より！貴方の周りに散らばってるのは何かしら？」

童磨の問いかけを遮り質問する花蓮、童磨の周りには夥しい血が飛び散っておりバラバラに散らばった赤紫の衣類と隊服らしき黒の衣類が目についた、それは花蓮にとって既視感のあるものだった

「ああ、これかい？凄く可愛い子がいたから遊んでたんだよ♪もういなくなっちゃったけど知り合いかい？」

童磨はニヤリと笑いながらそう言う

「溜花は私の娘よ」

と花蓮は答えると童磨は悲しげな表情を浮かべて

「そうかあの子は君の娘だったんだね、残念だけどあの子ならもういないよ」

童磨は花蓮にそう言うのと花蓮は静かに日輪刀を引き抜き

「そう・・・もういないのね・・・」

花蓮は静かにそう言うのと童磨は

「やる気のところ悪いけど俺はもう遊ぶ気はないぜ！裏切り者もいるみたいだし戻ろうかな？」

童磨はそう言うのと翻しその場を去ろうとする

「このまま貴方を見逃す気はないわ」

花蓮は童磨は見逃す気はないのでそう言うのが童磨は

「アハハ！それ君が言う？逆だよ、俺が君を見逃してあげてるんだよ！

童磨は笑いながらそれは逆だと言うと

「その裏切り者は見逃さないけどね」

童磨は表情を一転させ鋭い目付きで零余子を睨みつけるとまた笑い出し

零余子に告げる

「だって面白いだろ？十二鬼月が裏切るなんて、ねえ？何を考えて裏切ったの？俺はこんな面白い事思いつかなかったよ」

そう言いながらヘラヘラとした童磨、童磨にとつて零余子が裏切った事はどうでもよく、それが面白いかで判断していた

「何も面白くないわよ！」

声を荒げてそう反論する零余子に花蓮は寄り添い、童磨を睨みながら

「ええ！何も面白くないわね、命を弄ぶ事に罪悪感を感じないの？」

花蓮はそう言うのが童磨はヘラヘラと笑いながら

「罪悪感なんてあるわけないだろ？人は俺に喰われる事で永遠に俺の中で生きるんだ！俺は死に縛られた奴らを救ってるんだぜ？」

童磨は悪びれもせずになんか言うとなんか花蓮が怒気を含ませながら

「そんなもの永遠と言わないわ、貴方が死ぬば終りよ」

花蓮はそう言うとなんか童磨は更に笑いながら

「アハハハハハ!!? いや〜君面白いね!俺が死ぬ?殺せるものなら殺してくれて構わないよ」

そう言いながらへらへらとする童磨、花蓮は日輪刀を握る力を強めながら童磨を睨み深く息を吸い込む

「そうやって溜花も弄んだの?」

花蓮は今にも斬りかかりそんな勢いで童磨に聞くと

「弄ぶなんて人間が悪いな!俺はあの娘を救おうとしたんだぜ?寧ろ感謝してほしいな」

童磨はニヤリと笑い花蓮になんか言うとなんか

「牙の呼吸 捌の型 六根清浄・舞天狼」

流麗な太刀捌きで童磨に斬りかかる花蓮、童磨も鉄扇で防ごうとするがその太刀筋を見切る事が出来ず腹に刃を通されてしまう

「いい太刀筋だね!全て防げなかったよ!でもいいのかい?呼吸を使っても」

花蓮の太刀筋を褒める童磨はそう言うとなんか花蓮は

「牙の呼吸は風を纏うの、貴方の初見殺しは意味を成さないわ」

童磨の血鬼術・粉凍りを風で防ぎ吸い込む事を防いだ花蓮、二年前焠牙達が童磨と戦って得た情報が花蓮の身を守っていた

「牙の呼吸?...ああ!思い出したよ!牙狼と凄く残念な娘が使っていた呼吸だね!」

二年前焠牙達が牙の呼吸を使っていた事を思い出した童磨はそう言うとなんか

「あの時は結局誰も喰べられなかったから、君を喰べてあの時の腹を満たそうかな」

童磨はそう言いながら鉄扇を構えると

「溜花を追って来てみたら何やら騒がしい事になってるようだね」

そう言いながらその場に駆けつけて来た泰三は辺りを見渡しなごら

「瑠花の姿が見えないけど、君達は何か知らないかい？」

泰三はそう聞くと

「瑠花はもういないわ！目の前の鬼に喰われたの」

花蓮は沈痛な面持ちで泰造にそう言うと言うと童磨の周りに散らばった瑠花の衣服に目を向ける

泰三も視線を童磨の周りに向け瑠花の羽織りや隊服の切れ端が散らばってるのを見て童磨を睨み付けると童磨は

「アハハハ！君は何を言ってるんだい？俺は『黙れ！お前は僕達の娘に手を出したんだ！それ相応の報いは受けてもらうよ』：話は最後まで聞きなよ、俺傷付いちやうぜ」

童磨は花蓮に何か言いかけるが泰造に途中で遮られ泣き真似をしながら

そう言う

「仇討ちのつもりなら無駄だよ？俺を殺すなんて無理だし、そんな事する意味がないと俺は思うけどな」

そう挑発する童磨に泰三は

「無駄ではないよ、少なくともお前が消えればお前に喰われる人がいなくなる、僕達鬼殺隊はその為にいるんじゃないか」

童磨の挑発にそう返す泰三は

「まあ僕は裏方の人間だから鬼と直接戦う役割ではないんだけどね」と自分の立場を話すと

「可哀想に・・・弱いから鬼と戦う事も出来ないんだね！男だけど君は特別に俺が救ってあげるよ、俺優しいからほっとけないないぜ」

そう言つて泰三を煽る童磨だったがその泰三が突如視界から消えるように動き出し、童磨は泰三の動きを捉えようとするが泰造の動きを捉え切れずに懐の侵入を許してしまふ

「あれ？お前弱いから戦えないんじゃないか？」

童磨は泰三にそう言いながら気付けば胴体を両断され上半身と下半身が泣き別れていた

「鬼と戦うだけが鬼殺隊じゃないんだよ！まあ適材適所ってやつさ！それに・・・誰が弱いつて？元雲柱舐めんな！」

泰三は童磨にそう吐き捨てる。と童磨を両断した二対の剣を鞘に収め

「花蓮！焠牙達が心配だ！僕は焠牙達の所へ行くよ、後は任せてもいいかい？」

泰三は花蓮にそう言う。と花蓮はコクリと頷き泰三は焠牙達の元へと走り出した

「いや〜やられたよ！まさか元柱だったなんて！しかも傷が中々治らない、厄介だね！あの男」

童磨はそう言いながら内心焦っていた、自分をあっさりとは斬り裂いた上に傷の再生が遅い！これはまるで牙狼のようだ！動きだけというならあの時の牙狼を超えていると認識した童磨は泰三を哀れむ人間ではなく自分を脅かす敵と判断し早々に殺さなければと考えていた

「・・・あの！さっきの人は一体？元柱と言ってたけど」

零余子は泰三を見送り花蓮に泰三の事を聞いてみると

「泰三さんは私の夫よ、昔は雲柱として鬼と戦ってたけど四ノ宮に婿入りして柱は引退したのよ」

花蓮は零余子にそう言いながら懐から八卦符を取り出す

花蓮と泰三は元々幼馴染みの間柄だった、花蓮は四ノ宮家の次期当主として育てられ厳しい修行を課せられていたのだがそんな花蓮と共に修行をしていたのが泰三だった

当時の花蓮は時期当主である自分と同じ修行を何故彼がやっているのか不思議でならなかった、勿論厳しい修行を一人でやるより二人の方がやる気も出る。ので嬉しいのだが泰三は牙の呼吸を修める気はないと言ったので自分と同じ修行をやる意味が分からなかった

だが先代当主である花蓮の父親は泰三に目をかけ花蓮と共に修行を付けていた

「ねえ？父様？どうして泰三君は私と同じ修行をしているの？泰三君は牙の呼吸を覚えないって言ってるのに」

「確かに泰三は牙の呼吸を修める気はない！だが!!？奴もまた守りし

者、鬼殺隊の歴史に現れなかったもう一人の魔戒騎士！泰三の家系はその魔戒騎士の血筋を受け継いでるのだ」

「魔戒騎士・・・なんで父様がそれを知ってるの？」

「泰三の父親と俺は昔からの友人でな、あいつから言われたんだ！」

『時代は変わった、俺達の一族も守りし者として今の世に蔓延る鬼を狩り守りし者としての使命を果たそう』とな」

「どういう意味なの？」

「守りし者の本来の敵はホラー！魔戒騎士はホラーを狩る事が使命！そう言つてその魔戒騎士はホラーを狩る事に執着し大牙様達と袂を分けたそうだ、だが時代は移り鬼が蔓延る今の世にこそ魔戒騎士が必要とあいつは言っていた！泰三はな！その魔戒騎士の鎧を受け継ぐ守りし者！」

私の元で鬼狩りとしての技術を学ばせて欲しいと頼まれたんだ！」

「泰三君つて凄い人なんだね！じゃあ！泰三君の使っているあの呼吸もその魔戒騎士が？」

「いや！泰三の使う雲の呼吸は泰三が編み出した呼吸だ！・・・全く！鎧を受け継ぐ魔戒騎士でありながら独自の呼吸まで編み出すとは！花蓮！俺は婿にするなら絶対に泰三だな！」

「え×父様は泰三君のような男の子が好みなの？」

「は？・・・花蓮何か勘違いしてないか？」

零余子に泰三との関係を話した花蓮は魔戒符に術を込めながら子供の頃の思い出を振り返り、軽く笑みを浮かべると八卦符を近くの木に投げ付ける

「わお！流石お母さん！あつと言う間に帰って来たよ〜♪」

「名付けて！空間翔転移だね♪」

八卦符から発動した術により誰よりも先に到着した桜花と朔弥の二人

はそう言いながら辺りを見渡すと

「・・・朔弥さん！フラグ？フラグが立っちゃった×へし折れないかな〜？」

「桜花ちゃん！ドンマイ!!?」

そう話す桜花と朔弥、桜花が見た先には童磨がいて以前のやり取りを思い出した桜花に朔弥は無駄な励ましを送った

「急に人が現れたと思ったら残念な娘じゃないか!」

「は?どの辺が残念なのかな?胸?胸の事言ってるんだよね?そうだよね?絶対そうだよね?」

「いや!俺は頭の方が残念だと言ったんだけど」

「はい!ブーメラン!今の発言ブーメラン!」

そんな会話をする桜花と童磨、花蓮は徐々に再生されていく童磨を見て桜花に話しかける

「桜花!上弦の式は溜花を喰らったわ!」

「ふえ☒...溜花が?...お母さん...さつさとあの鬼を消し去ろ?」

桜花はそう言うのと羽織りの中から魔導具の一つである大型の拳銃、魔戒銃と八卦符を手に取り童磨に魔戒銃を向ける

「桜花...どんなに憎くてもそれに捉われては駄目よ!」

「分かってるよ!私達守りし者は陰我に捉われないよう心を強く!でも上弦の式はこれ以上野放しに出来ないよ!」

「その通りだよ!辛くても今は上弦の式を何とかしないと!悲しみの連鎖はここで終わらせよう!」

そう話してる間にも童磨は再生していき胴体が繋がりはじめたところのようにやく立ち上がろうとしていた

「おチビちゃん面白い事言うね」

そう朔弥に話しかけた童磨、朔弥は童磨に向かって

「別に面白い事言ってるよ?」

そう言うのと朔弥は八卦符を童磨に投げつけるが童磨はそれを鉄扇ではたき落とすと

ードカー

はたき落とされた八卦符が爆発し爆炎に包まれる童磨

「桜花ちゃん!花蓮ちゃんがいる今なら出来るよね?」

「うん!お母さん!陸の型を!」

そう話すと桜花は八卦符を数枚放り投げると花蓮は爆炎に包まれる童磨へ走り出す

――牙の呼吸 陸の型 龍穿の罅――

龍を模した竜巻を童磨にぶつける花蓮、桜花の投げた八卦符も竜巻に巻き込まれると桜花は魔戒筆に法力を込め圧縮した炎の球を作り出す

「驚いたよ！おチビちゃんのくせに生意気な事するじゃないか！」

そう言いながら爆発の衝撃で失った腕を再生する童磨は陸の型に巻き込まれながらも血鬼術を発動する

――血鬼術 霧氷・睡蓮菩薩――

童磨は鉄扇を振るい巨大な氷の菩薩像を作り出すと菩薩像が放つ凍てつく冷気の風が竜巻の勢いを削いでいく

「あの時は吹き飛ばされたけど、もうその型は通じないよ」

余裕の笑みを浮かべる童磨だったがそれをよそに桜花は圧縮した炎を陸の型に向けて飛ばすと炎は巻き込まれた八卦符により竜巻と融合し巨大な火炎竜巻となつて菩薩像を焼き尽くす

「あははは！俺の血鬼術を焼き払うなんて面白い事するね」

未だ余裕の表情を崩さない童磨、そんな童磨の背後から

「じゃあね」

そう言いながら魔戒銃を童磨の頭に突きつける桜花、躊躇なく引き金を引くと装填していた魔導力が籠った銃弾が童磨の頭部を貫く

「あれ？君いつの間に俺の背後にいたんだい？」

「教えないよ！それに別れの挨拶は終わったから」

知らぬ間に背後に回っていた桜花にそう聞く童磨に対し桜花は素っ気ない態度をとると同時に童磨の頭部が破裂する

「お母さん!!？」

桜花がそう叫ぶと花蓮は壺の型を放つ動作に入り桜花は頭部を失った童磨の背に八卦符を貼り付け動きを封じる

「いくら攻撃してもすぐに再生するから無駄だぜ！……あれ？動かない！お前何したの？」

「質問が多い！私達は魔戒法師！ただの鬼狩りじゃないから」

童磨の問いにそう答える桜花、体が動かない童磨は花蓮の壺の型によりその頸を断ち切れようとしていた

ーベベーンー

花蓮の刃が童磨の頸を捉えたと同時に琵琶の音が鳴り響くと空間が歪み童磨はその歪みに吸い込まれるようにその姿を消し去っていった

「鳴女ちゃんの血鬼術！この時を待ってたよ！」

朔弥はそう言うと言自信の纏う羽織りから杭が繋がっている鎖を飛ばし歪んだ空間を固定させる

「術式展開！血鬼術解析！」

鳴女の血鬼術による空間を固定した朔弥はその血鬼術を解析しながら

魔戒筆で魔導文字を描き八卦符に魔導文字を収めると黒色に染まる八卦符が出来上がる

「出来たよ！無惨ちゃんの根城、無限城に繋がる八卦符！花蓮ちゃん
と桜花ちゃんが頑張ってくれたおかげ！溜花ちゃんがいなくなつて
辛い中協力してくれてありがと・・・ホントにありがと・・・溜花ちゃん
・・・うええええん!!？」

無限城に繋がる八卦符が完成し花蓮と桜花にお礼を言う朔弥だったが

溜花がいけない悲しさが込み上げて泣き出した朔弥、そんな朔弥に桜花は

「朔弥さんまだ終わってないよ！煌牙達が上弦の壺と戦ってる！私
もう誰も失いたくない！上弦の壺も次は絶対逃がさないから！」

桜花はそう言うと言零余子を見るがすぐに視線を戻し煌牙達がいる英霊の塔へと走り出した

「なんでお母さんが鬼と、しかも下弦の鬼と一緒にいるのかは後で聞かせてもらうからね！」

桜花は走りながら花蓮にそう言うと言花蓮も事情は後で話すと返し英霊の塔を目指し森を駆け抜ける

「グオオオ!!?」

「兄さん?なの?・・・牙狼の鎧どうしたの?」

心滅獣神となりけたたましい咆哮をあげる牙狼、カナヲは焠牙を心配して声をかけるもその声が焠牙に届く事はなく鋭利な爪がカナヲに襲いかかる

「兄さん!うっ!」

迫り来る爪の攻撃を辛うじて躲したカナヲだったが直後に牙狼の尾による追撃を受けて弾き飛ばされてしまう

「兄さん!!?お願い返事をして!!?」

悲痛な叫びをあげるカナヲだが心滅獣神と化した牙狼は無慈悲にも再びカナヲにその鋭い爪を振り下ろす

カナヲは必死に牙狼の爪から逃れようとするも先程の追撃で上手く力が入らずその爪によって隊服を裂かれ胸元にぶら下げたお揃いの鈴を落としてしまう

ーチリリンー

「あっ!鈴が!」

その鈴をすぐに拾い大事そうに握りしめ牙狼を見つめると迫り来る牙狼の全てを敵とみなし暴れ回る勢いはなくカナヲを凝視しながら立ち止まっていた

「兄さん?」

カナヲがそう呟くと牙狼から微かに焠牙の声が聞こえカナヲはその声に耳を澄ます

「カ・・・ナヲ・・・逃げ・・・ろ・・・もう俺じゃ・・・牙狼を・・・抑えられない」

既に侵食されつつある焠牙の精一杯の言葉にカナヲは

「嫌だ!兄さんを置いて逃げるなんて絶対にしない!ずっとそばにいるって約束した!私達がまだ小さい頃この鈴の誓ったよ!」

泣きながらカナヲはそう言うと言うと牙狼に鈴を見せつけ鈴の音を鳴らす

ーチリーン チリーンー

「グオオオ」

鈴を見せつけられ鈴の音色を聞いた牙狼は咆哮をあげるとその場に沈黙し動きを止める

「抗うな！この力を受け入れろ！この力こそお前が求めた全てを蹂躪する力だ！」

「違う・・・俺は・・・俺は」

「何も違わないさ！お前は弱い！だから力が求め牙狼を切望した」

「確かにそうだ！俺は弱かった！だから牙狼になって『牙狼になって何だ？皆んなを守りたいって？違うな！お前が守りたいのはお前だ!!？あの時誰も守れなかった弱い自分から逃れようとするお前だ！牙狼になって昔の俺とは違う、弱かった俺はもういないと自己満足に浸ってな！』

『お前に・・・お前に俺の何が分かる!!？』

「分かるさ！お前の事は俺が一番知っているからな」

「なんなんだよ！お前は！」

「なんなんだよって、そんな事聞かなくてもお前はわかってるんだろ？

俺はお前自身だって事に」

「・・・」

「どのみち俺達は牙狼の鎧に喰われて死ぬんだ、このままじゃ無駄死にだぞ」

「・・・でも！カナヲが泣いてたんだ・・・俺はカナヲを泣かせる為に力を求めたわけじゃなかった」

「だがお前は力を求めた！その結果がこれだ！お前の弱さがカナヲを！

そしてお前自身を殺すんだよ」

「俺の・・・弱さ」

「俺と代われ!!？お前はもう駄目だ！」

もう一人の煌牙、それは煌牙自身が生み出した心の闇

過去に囚われ弱さを嘆き、強さを求め力を渴望する煌牙に芽生えていった闇は次第に煌牙の中で膨れ上がり、カナヲを傷付けられた事をきっかけに表面化してしまった

そのもう一人の煌牙は煌牙から体の支配権を奪い、沈黙した牙狼は再び動き出す

「グオオオ!!?」

咆哮をあげる牙狼は黒死牟を標的として見定め一気に飛び掛かりその鋭利な爪で切り裂かんと腕を振り下ろす

「本能のままに暴れ狂う破壊の化身、最早人にあらず」

傷の癒えた黒死牟はそう言いながら後退し牙狼の攻撃を避けると

――月の呼吸 捌の型 月龍輪尾――

――月の呼吸 玖の型 降り月・連面――

――月の呼吸 拾の型 穿面斬・蘿月――

怒涛の勢いで月の呼吸を駆使し連撃を浴びせる黒死牟、だがその強力な斬撃は牙狼を怯ませる事は出来ても斬り裂く事は叶わず黒死牟は苦い顔付きをしながら呟く

「許せぬ!このような理不尽な存在など世にいてはならぬ」

牙狼を睨みながらそう言う黒死牟は更に勢いを増して連撃を浴びせ続け

牙狼にその怒りをぶつける

「グオオオ!」

黒死牟からの連撃を浴びながら突進して来る牙狼は黒死牟に詰め寄ると爪による刺突を繰り返そうとするが、黒死牟に直撃する瞬間に牙狼の挙動が突如止まる

「お前!さつきも言っただろうが!俺達はこのまま死ぬんだと!上弦の壱を殺す為に力を求めたんなら俺の邪魔をするな!!?」

「カナヲが泣いている...もう一人にはしないと約束したんだ!

ずっとそばにいて約束したんだ!だから!このまま死ぬわけにはいかない!」

「……馬鹿が！まあせいぜい無駄に足掻いてみせろ！」

煌牙の内面で再び対話した煌牙、もう一人の煌牙は煌牙にそう言う
と

黒い影のような形状になり煌牙の中に溶け込んでいく

「忘れるな！俺とお前は一心同体だということに」

もう一人の煌牙はそう言うのと体の支配権が煌牙に戻り煌牙は意識
を現実へと意識を戻す

(カナヲ・ごめんな！それとありがとう！鈴の音が怒りの奔流に吞ま
れてた俺を気付かせてくれたよ)

煌牙は心の中でそう思うと静かに目を閉じて精神を統一させる

「グオオオオオ」

咆哮をあげる牙狼は黒死牟に向けた爪をゆつくりと引き下げると
牙狼は苦しむようにもがきだし、やがて金色の光を放ちながらその巨
大な金色の狼は光となって消滅していった

「兄さん!!？」

カナヲは煌牙の名を呼びながらその場に倒れ込む煌牙に駆け寄る

奇跡的にも心滅獣身牙狼を強制送還した煌牙だったが魂を侵食さ
れつつあった煌牙はそれに抗った為、体力も精神力も底をつき意識を
保つだけで精一杯だった

「カナヲ……ごめん……兄ちゃん……またお前を守れなかった」

「そんな事ないよ、兄さんは『何があったか知らぬが忌々しい鎧が消え
て好都合！貴様だけは何としてもこの場で殺さねば！』……上弦の壱」

カナヲの言葉を遮り黒死牟は煌牙に詰め寄ると煌牙の首を掴み宙
吊りにする

「兄さん!!？」

「ぐっ☒……黒……死牟」

「四ノ宮煌牙、今の貴様ではその牙が私の頸に届く事はない！だが！
先程の呼吸！そして牙狼！あの方の命がなくとも生かす事など言語
道断！

「忌々しいその力は根絶やしにしなければならぬ」

黒死牟はそう言うと言を構えて焠牙に斬りかかろうとする

「兄さん！駄目！」

咄嗟に焠牙を庇い黒死牟に斬りかかるカナヲだったがその攻撃は黒死牟に阻まれ切り払われるとカナヲは弾き飛ばされ日輪刀も折られてしまう

「案ずるな小娘、離れ離れにならぬよう貴様も葬つてやろう」

黒死牟はカナヲに向かいそう言う

「届いたぞ・・・お前の頸・・・」

黒死牟に掴まれていた焠牙は渾身の力を振り絞り日輪刀を取り出すとその刃を黒死牟の頸に向かって振り抜く

「そんな弱々しい斬り込みなど私には通じん」

そう言いながら黒死牟は焠牙の斬撃を頸で受け止めると

――月の呼吸 伍の型 月魄災禍――

焠牙を掴んだまま伍の型を放つ黒死牟、まともに身動きが取れない焠牙は至近距離でその斬撃を浴び大量の血を流し出す

「ふむ、その黒い羽織りはたいしたものだ、これほどの斬撃を浴びて尚四肢を失わないとは」

至近距離で斬撃を受けた焠牙、霊獣の加護が施された魔法衣の防御力で四肢の切断は免れたもののその身に深い裂傷を負い瀕死になりつつあった

黒死牟は焠牙の魔法衣に感嘆するも、息も絶え絶えの焠牙を見て息の根を止めるべくカナヲの元に焠牙を投げ捨てる

「兄さん！兄さん！！？嫌！死んじや嫌だよ！」

瀕死の焠牙に必死に呼びかけるカナヲだったが返事はおろか反応すらしない焠牙、既に意識は遠退きこのまま死を迎えるだけの焠牙は微かに聞こえるカナヲの声を聞きながら

（カナヲ・・・兄ちゃん弱くてごめん・・・泣かせてごめん・・・約束守れなくて・・・ごめん）

心の中でカナヲへの想いを馳せる焠牙、薄れつつある意識を必死に繋ぎ止めようとするがその抵抗も虚しく遂に焠牙はその意識を手離した

「小娘、悲しむ必要はない！貴様もすぐに後を追わせてやろう」

動かなくなつた焔牙を抱き寄せ涙を流すカナヲに黒死牟は非情な宣告をすると刀を構えカナヲを葬ろうとする

――月の呼吸 拾の型 穿面斬・蘿月――

黒死牟から放たれる非情なその斬撃がカナヲに迫りつつある中カナヲは焔牙を抱きしめながら黒死牟を睨み付ける

「恨むのなら貴様の兄を恨むのだな！」

そう言いながら黒死牟は更に追撃として型を放つ

――月の呼吸 拾陸の型 月虹・片割れ月――

「忌々しい黄金騎士！日の呼吸！万に一つなど起きぬよう肉片一つ残らず切り刻んでやろう」

――月の呼吸 拾肆の型 兇変・天満織月――

黒死牟から放たれる型の連撃がカナヲを襲い斬撃の余波で地は抉れ辺り一帯に大きな斬撃痕が無数に残る

「ふむ力が入りすぎたか、だが！もう縁壺や暁大牙のような忌々しい存在が現れる事はない」

黒死牟はそう言いながら刀を鞘に収め用は済んだとばかりにその場を立ち去っていった

同時刻く蝶屋敷では

「ムー！ムー！ムー！ムー！！？」

「彌豆子落ち着くんだ！一体どうしたんだ☒」

「炭治郎く彌豆子ちゃんどうしちゃったんだよ」

「分からない、急に起き出して何処かに行こうとしてるんだ」

「何処かって何処だよ」

「ムー！ムー！！？ムー！ムー！！？」

「彌豆子頼むから落ち着いてくれ！」

四ノ宮邸近辺く

「富岡さん不死川さん急いで下さい」

「……」

「胡蝶！焦りすぎだあ！」

「煌牙さんとカナヲが戦っているのは上弦の壺ですよ！一刻も早く向かわないと！」

英霊の塔前へ

「煌牙ちゃん！カナヲちゃん！」

「煌牙達いないよ……あ！お父さん！お父さん煌牙達は？」

「……桜花」

「うわわわ!!？何これ？……煌牙達と上弦の壺の戦闘痕……だよね……これ普通じゃないよ……煌牙は？煌牙達はどこ？」

英霊の森を一足先に抜けてきた桜花と朔弥の二人は煌牙達を探すも見当たらず先に見える泰三を見つけると泰三の元に駆け寄り辺りを見渡す

目の前に広がる光景に驚く桜花、地面が大きく抉れ広大な斬撃痕が夥しく広がる光景に桜花はそれが戦いの痕だと察すると焦り気味に煌牙達を探し出す

「桜花……煌牙達は……」

泰三は桜花にそう言いながらある場所に視線を移す

桜花も泰三の視線を追ってその場所を見ると、凄まじいまでの斬撃痕と夥しい血が飛び散る場に折れた煌牙とカナヲの日輪刀、そして牙狼剣が突き刺さっていた

「煌牙達はどこ？何でいないの？ねえ!!？何で!!？」

「煌牙ちゃん……カナヲちゃん……そんな……」

珍しく声を荒げる桜花は煌牙達を探そうと辺りを走り回り、朔弥は煌牙達が死んだのだと悟りその場に座り込んでしまう

「泰三さん、煌牙達は？」

遅れてやって来た花蓮と零余子は泰三達に合流すると煌牙達の安否を伺うが泰三は静かに首を振り煌牙達が死んだと伝える

「・・・瑠花だけじゃなく煌牙達まで・・・」

「煌牙く!!?カナヲちゃん!!?どこにいるのく?」

「桜花・・・煌牙達はもう」

「ヤダ!死んだとか言わないで!!?煌牙達は!・・・煌牙は・・・」

そう話す花蓮と桜花、煌牙達が死んだと認めたくない桜花は否定しようとするが次第に元気をなくし俯きだす

「・・・桜花・・・認めたくないが、僕達は現実を受け入れて前に進むしかない、どんなに辛くても打ちのめされても、受け継いだ想いを繋いでいかなくってはならないんだよ」

「分かってる・・・分かっているよ!そんな事!でも私はそんなに強くない!瑠花が!カナヲちゃんが!煌牙が死んですぐに受け入れる程割り切れないよ!」

落ち込む桜花を励まそうと泰三は声をかけるが桜花はそう簡単に割り切れないと言うと拳を強く握り締め悲しみを堪えながらその場所に膝をついた

「桜花さん!花蓮さん!」

「・・・四ノ宮は何処だ?」

「上弦の壱はどこにいやがる!煌牙達は!」

そう言いながらようやく到着した三人の柱、しのぶ・義勇・実弥は周りを警戒しながら桜花達に合流すると

「・・・アレを見て・・・」

花蓮が三人にそう言つて視線を移すと三人もそれを追い視線を移す

「・・・そんな・・・煌牙さん・・・カナヲ・・・花蓮さん!煌牙さん達は!どこにいるんですか?」

「・・・四ノ宮」

「・・・上弦の壱はどこにいやがる!!?ぶっ殺してる!!?」

「私達が駆けつけた時にはもう上弦の壱も煌牙達もいなかったわ」

「それじゃこの日輪刀と煌牙さんの牙狼剣は・・・嘘・・・ですよね?」

「・・・私達も認めたくないわ・・・」

「・・・四ノ宮達は上弦の壺に負けた」

「富岡!!? テメエ!!?»

「辛くてもこれが現実だ! この状況を見れば分かるだろう!」

「っ! クソが!!?»

しのぶ達がそう話していると朔弥と義勇の二人が日輪刀を鞘から引き抜き零余子を睨み付ける

「ひっ!」

柱二人に殺気を向けられた零余子は怯え悲鳴を上げるが朔弥と義勇の二人は零余子を睨みつけたまま喋りだす

「何でこの場に鬼がしかも下弦の肆がいやがるんだ!!? ぶっ殺してる!」

朔弥は声を荒げて零余子に斬りかかろうとするが

「斬っては駄目よ! 不死川君!」

「花蓮さん、あんた自分が何を言ってるのか分かってんのか!!? コイツは鬼だ、十二鬼月だぞ!!? あんたコイツを庇おうってのか!!?»

「そうよ! 零余子ちゃんは今までの罪を悔い改めやり直そうとしてるの、その機会を私達が奪うわけにはいかないわ」

「ぶざけるなよ!!? 鬼は問答無用でぶっ殺す! 俺達鬼殺隊の存在意義は何だ!!?»

「文字通り鬼を殺す為よ、不死川君の言う通り人を喰らう鬼を斬るのは間違っではないいわ、でもね? 悔い改めている鬼まで問答無用で斬るのは早計だと思うの」

「だから何だ!!? コイツは坊主の妹とは違う! 人を喰らった悪鬼だ! 殺されて当然だあ!!?»

「そうね・・・不死川君の言い分はわかるわ・・・なら私も一緒に斬りなさい! 貴方の憎い鬼とその鬼を庇い隊律違反を犯した私を斬りなさい!」

「っ! アンタは俺に斬られたいのか☒」

「不死川君が斬りたいのならそれも仕方ないわ」

「・・・クソが! 鬼はともかくアンタは斬れねえ!」

零余子を庇う花蓮と斬り殺そうとする朔弥の意見がぶつかり合い、

花蓮の下した決断に朔弥は不満をぶつけながらも刀を降ろし零余子を睨み付ける

「零余子ちゃんについては一度お館様に判断を『ハッ！十二鬼月を庇うとかアンタ頭ぶっ飛んでんな！元牙柱さんよお！』：どなたかしら？」

零余子の処遇について花蓮は輝哉に判断を仰ごうと提案しようとするが

それを遮る声が響き渡り一同は周りを見渡すも誰もおらず警戒を強めると零余子の影から別の影が分離してその影が実体を現す

「よお！朔弥と桜花はともかくお前らと顔を合わせるのは初めてだな！」

俺の名は斬吼狼、一応鬼だが煌牙と同じ魔戒騎士だ！」

そう言いながら皆の前に姿を現した斬吼狼、斬吼狼は零余子に視線を移すと哀れむような目線で零余子に話しかけた

「ざまあねえな下弦の肆！無惨の野郎に用済みの役立たずだと捨て駒にされ命惜しさに鬼狩りに下るとはな！」

斬吼狼にそう言われ苦い顔つきになる零余子、文句の一つでも言いたいところだが斬吼狼の放つ圧倒的な威圧感に慄き口籠ってしまいう零余子

そんな中失意の中にいたしのぶが顔を上げ斬吼狼に話しかけた

「あの！それはどういう意味なんでしょうか？」

「あ？…まああれだ！お前らが下弦の伍を始末したから癩癩を起こした無惨が下弦の鬼を解体しようとしたんだよ！唯一生き残る条件が牙狼の称号を持つ煌牙の殺害！簡単に言えば処分する手間を牙狼に丸投げしたって訳だ！下弦如きに牙狼の始末は不可能だと知ってな！」

「随分と身勝手ですな鬼無辻は」

「まあな！…おい！朔弥！いつまでへたり込んでんだ!!？さっさと俺についてこい！」

「…え？斬吼狼ちゃん？…ゴメンね気付かなかった」

「落ち込みすぎだろ！まあいい！早くしろ！時間がない！」

「あ……うん……どこに行くの？」

「話は後だ！それから下弦の肆！お前も来い！！？」

「……っ！私は……」

「お前このままじゃどのみち死ぬぞ？運良く鬼狩り共に認められても無惨がお前を許さねえ！分かったらさっさと来い！」

「あ……ああ……」

しのぶの質問に答えた斬吼狼は時間がないと急ぎめで朔弥を連れて行こうとして零余子にも付いてくるよう呼びかける、急な呼びかけに戸惑う零余子だったが斬吼狼から脅しにも近い事を言われて震え出す

そんな中、斬吼狼の行動に納得のいかない朔弥は

「おい！ちよつと待て！テメエ何勝手に鬼を連れて行こうとしてんだ！」

「あ？コイツを連れて行くのにお前の許可がいるのか？保護者かよ！

お前は！」

「テメエ！ぶつ殺してる！！？」

「あーはいはい！悪かった！俺が悪かった！時間がないからもう行くな！」

激昂する朔弥の発言に挑発とも思える返しをする斬吼狼、案の定ブチ切れる朔弥に時間がない斬吼狼はまともに相手をせず零余子と朔弥を抱え血鬼術で生み出した影の中に沈んで行くとその場から姿を消し去っていった

「あー！言い忘れてたけど俺も鬼殺隊に復帰するからな！それと下弦の肆は無惨に近かった鬼だ！お前らにとつて有益な情報もあるだろ？無惨を討つ為に鬼を利用するって考えたらお前らも少しは納得出来る筈だ！」

斬吼狼は影の中でそう言うと、その影も次第に消え完全にその場からいなくなり重厚な威圧感から解放された一同はふと溜息を吐く

「あれが斬吼狼……かつて大牙様と肩を並べた魔戒騎士！」

「……心強い味方が増えたわと言いたいけど失ったものもまた大きすぎるわ……」

「そうだね．．カナヲちゃん．．瑠花．．煌牙．．僕達にとってかけがえない子供達．．そして牙狼もまた」

「ちよつと待つてください!!? 瑠花ちゃんって! 瑠花ちゃんに何が」

「．．瑠花はね．．上弦の式に喰べられてしまったわ」

「．．上弦の式?．．姉さんを傷付けたあの鬼が瑠花ちゃんを．．それに煌牙さんもカナヲももういない．．．」

「瑠花．．あの時の四ノ宮妹．．」

「．．何だよそれ! 瑠花まで鬼に殺されたつてのか!!? ふざけるなよ!!?」

「不死川君．．瑠花の事妹のように可愛がってくれたものね．．」

「上弦の式は!!? 上弦の式はどうなったんですか?」

「上弦の式は私と桜花、朔弥さんの三人で頸を跳ねる直前まで追い詰めたのだけど空間を操る血鬼術で逃げられたわ」

「．．そう．．ですか．．上弦の式を追い詰めた事はとても凄い事なんですがこの状況では喜べませんね．．私達が失ったものがあまりにも大きすぎて」

「そうね．．桜花．．桜花?」

「．．．．そつか．．そゆこと．．．．じゃあ今もあの時も．．．．こうしなきやいけない訳が?．．．．瑠花も?．．．」

「桜花!!? しつかりしなさい!!?」

「ふあ☒え? 何お母さん?」

「桜花．．お願いだから貴方までいなくならないで!!? お願いだから．．もう子供達がいなくなるのは．．耐えられない」

「花蓮」

「．．．．お母さん! 私は大丈夫だよ♪それに．．．うん♪今度斬
吼狼に会ったらブツ飛ばす♪」

「うん?」

こうして激動の一夜は終わり、鬼殺隊本部に牙柱四ノ宮煌牙・栗花落力ナヲ・四ノ宮瑠花の死亡報告が伝えられる

牙柱四ノ宮煌牙の死は鬼殺隊全体に衝撃を与え、後に緊急柱合会議
が開かれる事になる
そして炭治郎達もまた任務に復帰する時が近付いていた

牙柱四ノ宮煌牙達の死亡報告から一週間後、柱達は鬼殺隊当主〃産屋敷輝哉〃に呼び出され緊急の柱合会議が行われようとしていた

産屋敷邸に続々と集まる柱達、この会議が開かれる理由を知っている柱達の顔付きは全員妙に険しかったり浮かない顔をしていて、誰も口を開く事なく輝哉が現れるのを待っていた

「急な呼び出し済まなかつたね、牙柱の不在で色々と大変な時に足を運んでくれた事を嬉しく思うよ」

柱達が集まる部屋に輝哉は足を踏み入れると柱達に向かい合つて座り込み柱達に挨拶をすると

「お館様におきましてもご壮健で何よりです！これから変わらぬご多幸をお祈り申し上げます」

「ありがとう義勇」

義勇が他の柱よりも早く挨拶を返し、輝哉も返事をする他柱達はまさかの義勇かと唾然とするも気を取り直し輝哉に頭を下げだした

「皆も既に知っている事だが、牙柱である煌牙が上弦の壺との交戦の末に死亡したよ。血縁の妹、隊士栗花落カナヲも煌牙と共に・・・しぶは両者との繋がりが強かつた分この痛みは計り知れないだろうね」

「・・・お氣遣いありがとうございます」

「だが私は煌牙達は密かに生きているんじゃないかと睨んでるんだ、しぶ・義勇・実弥君達はあるの場において何か感じた事はないかい？」

「・・・煌牙さん達が・・・あつ！申し訳ありません！私が見て思つた事は煌牙さん達は凄まじい程の斬撃を浴びて斬り刻まれたのかと・・・それ程までに酷い有様でしたが」

「・・・だが四ノ宮達の肉片は見当たらなかった・・・お館様・・・俺は四ノ宮達は生きています」

「富岡！テメエ良い事言うじゃねえか!!？お館様！宜しければ推察の御説明を聞かせてもらえないでしょうか」

「その前に君達に紹介しなければならぬ者がいるんだ、私の推察は

彼女の推察でもあるからね」

輝哉・しのぶ・義勇・実弥を中心に話が続く中、輝哉がそう言うとお襖が勢いよく開かれ

「……………もしかして……………お通夜？」

その一言に実弥は

「んなわけねえだろ!!? 馬鹿な事言ってるじゃねえ！」

そう実弥が言うとお

「良いツツコミだね♪スケ・不死川さん♪」

「お前かなり失礼な事言おうとしなかったか？」

「まさかく♪スケベ柱とかおはぎ大好き顔面ヤクザとか私が不死川さんに言うわけないよ♪」

「……………桜花!!? 言ってるじゃねえか!!? しかも悪口追加されてんぞ! この貧乳が!!?」

「……………桜花ちゃん必殺の型! 永久不全! 漢狩り！」

輝哉の紹介でやって来た桜花、実弥とのやり取りで禁句を言われた桜花は実弥に金的を狙った蹴りを放つが慌てて回避した実弥は顔を青ざめて桜花に文句を放つ

「ダメエ! ガチの必殺じゃねえか!!? それに自業自得だろうが！」

「不死川さんなら絶対避けると思ったんだよ、それに私が言った事は悪いと思ってるよ? でも不死川さんあれから元気なかったから私なりに元気付けようかなって♪」

「お、おう……………ならまたおはぎ……………余計なお世話だ! 気を遣ってんじゃねえ！」

「へへ♪いつもの不死川さんだね♪」

そう会話していると

「桜花、そろそろ続けてもいいかな？」

「あつ! お館様! 挨拶するの忘れてた♪」

「構わないよ桜花」

「じゃ! お言葉に甘えて♪、新しく牙柱になりました四ノ宮桜花です! とりあえず焔牙の代理って形だけどよろしくね♪」

柱就任の挨拶を気軽に話す桜花、桜花は焔牙は生きているという意

味を含め代理という言葉をつけ加えたとしのぶはその言葉に反応して

「桜花さん！代理って！桜花さんは煌牙さん達が生きています！そう思う根拠があるんですね！」

「確証はないよしのぶちゃん！実際煌牙と上弦の壱の戦いを見た人はいないし！でもね、煌牙達は多分生きてる！あの時現れた斬吼狼が怪しいんだよ♪」

「私も桜花と同じ意見だよ、煌牙と上弦の壱との戦いを機に斬吼狼が現れ朔弥さんを連れて行った、きつと煌牙達に関わる何があると私は思う」

魔戒騎士や法師について細かい事は私も分からなくてね、皆に理解出来る言葉を持ち合わせていないのが残念だよ」

「魔戒法師でも分からないよ？あれから一週間何の音沙汰もないし斬吼狼が何処に行ったのかも分からないし、煌牙達が生きているとして連絡がないのはそうしなきゃいけない理由があると私は思うの、だから煌牙達は死亡扱いのまま様子を見ようってお館様に相談したの」

「煌牙達の生存が確定ではない以上、皆に淡い期待を持たせるのも酷だからね。この話はここだけにして他言無用でお願いするよ」

桜花達がそう話すと柱達はそれに頷き皆の了解を得ると輝哉は

「それともう一つ、十二鬼月の一人下弦の肆が鬼無辻を裏切り私達についた件だが君達はどう思う？」

輝哉から衝撃の発言が出た事であの場になかった柱達は驚きを隠せずにはいたが十二鬼月だという事もあり零余子を認める意見など出る筈もなかった

「確かに相手は十二鬼月、君達が言う通り私もすぐには信用は出来ない
い

それに斬吼狼が連れ去ってしまい行方知らずだからね」

輝哉がそう言うのと桜花が続け様に

「私も十二鬼月を信用出来るかと言われたら信用出来ない！けどお母さんは命をかけて下弦の肆を庇った！やり直す機会を奪ってはいけないって」

「花蓮らしいね・・・それに十二鬼月を煌牙が見逃すとは思えない、賛否両論はあると思うがこの件は一時保留とし再度改めて処遇を決めようと思うが皆もそれでいいかい？」

「煌牙が見逃したってんなら何か理由があるんだろ？十二鬼月を認める認めないは別として理由くらいは聞かないとな！」

「うむ！四ノ宮の真意を確かめてから処罰しよう！俺は一時保留に賛成する!!？」

「煉獄さん処罰するんじや真意を確かめる意味ないと思うけど・・・そこがまた素敵♪」

「・・・俺も四ノ宮の真意を確かめてから十二鬼月を処罰しよう！」

「僕はどっちでも・・・煌牙さんの方が気になるし」

「嗚呼！四ノ宮！南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏！」

「悲鳴嶼さん！勝手に煌牙さんを殺さないで下さい!!？まだ生きてる可能性もあるんですよ！」

「・・・(南無阿弥陀仏・・・四ノ宮は成仏しなさそうだが・・・牙狼の鎧にしがみついているような気が・・・)」ムフフ

「悲鳴嶼さんは微妙だが皆煌牙の生存を信じてんだな！あと富岡急に笑うんじやねえ！」

輝哉の提案に柱達が各々意見を出すと桜花は

「ねえ！私の柱就任って話皆賛成でいいのかな？」

と桜花は柱達に尋ねると

「いいんじやねえか？てか牙柱を継ぐならお前しかいねえだろ」

「四ノ宮妹は過去に十二鬼月の討伐実績もある！実力は問題無い！」

「桜花ちゃんが柱なんて可愛い上にカツコいいわ」

「俺も甘露寺と同じ意見だ」

「僕も良いと思うよ、面白い術もあるし」

「私も四ノ宮桜花の柱就任に意義はない」

「私は勿論賛成ですよ！」

「やるからにはしっかりとやれよ」

「四ノ宮が戻れば(柱を降りるのか？お前達は魔戒騎士と魔戒法師、二人で牙柱を継ぐのはどうなのか、それはそれで)面白い」

「富岡さん、煌牙さんがいないから通訳はいないんです！ちゃんと意味が分かるよう喋って下さい」

「しのぶちゃん♪富山さんは煌牙が戻ってきた時に私が柱就任してらって反応が楽しみなんだよ♪そうだよね？富山さん♪」

「・・・富岡だ・富山じゃない・・・俺の言った事と違うがそれはそれでアリだな」

「いや言葉足らずで何が違うのか分かりませんか？富山さん」

「・・・胡蝶・俺は嫌われるのか？」

「と富山さんが仰ってますが皆さんどうなんでしょうか？」

柱達の会話が続く中しのぶの一言に柱達は押し黙り反応に困っている

「俺は嫌われてない」

義勇の呟きに柱一同は可哀想な眼差しを向けると

「柱合会議って面倒臭いよ〜！」

場の空気に居た堪れなくなった桜花はそう言う柱一同はギョツとした顔で桜花を見て輝哉は苦笑いをしながら

「そうだね面倒臭い会議はこれで終わりにして今日は解散としようか」

会議が面倒臭いと言われると思っていなかった輝哉はそう言っているのを締め桜花を連れて部屋を後にした

「お館様まだ話があるの？皆の前じゃ駄目なやつ？」

鬼殺隊当主の輝哉に失礼な話し方で何の用かと尋ねる桜花、輝哉はそんな桜花の態度を気にしてないのかそのまま用件を伝える

「桜花に預けておきたい物があるんだ、付いてきてくれないかい」

そう言っ輝哉は桜花と共に屋敷の奥へと向かっていくのだった

それから一週間後

「今までお世話になりました！」

「俺がいなくて寂しいよね？俺残った方がいいよね」

「寂しくありません!!？」

「ガハハハ！ウメー！」

「ちよ×お前今食うなよ！」

蝶屋敷に滞在していた炭治郎達、焔牙達の死亡報告を聞いて泣き崩れるも強くなって焔牙達の意志を繋いでいくと決意を新たにするとより一層訓練に身を費やし今では常中を維持出来るようになっていた

炭治郎達の新しい日輪刀もなんだかんだありながら届き、怪我が完治したことによりしのぶから退院を認められると鴉から任務の報告が届く

そして炭治郎達は今出発しようとしてしのぶ・きよ・すみ・なほ達に見送られていた

「竈門君、これから君達が向かう任務には炎柱の煉獄さんが合流します
す

竈門君の使う呼吸について何か分かると良いですね」

「はい！しのぶさんありがとうございます！任務が終わったらまた来ますね」

「そうですね、その時は怪我で運び込まれないようにして下さいね♪」
「はは・・・気をつけます」

炭治郎達はしのぶ達と別れると任務へと向かう為に歩き出すが少ない先に義勇が炭治郎達を見送る為に待っていて炭治郎は義勇の元に走り出した

「富岡さん！わざわざ来てくれたんですか？」

「怪我はもういいのか？」

「はい!!？バツチリです！」

「そうか」

義勇はそう言うと言が済んだのかさつきと歩き出し炭治郎達の前から消えていってしまう

義勇との短すぎる会話の後炭治郎達は任務の地へと向かう為に列車に乗る事になり駅に訪れていた

「・・・おい！おい!!？おい!!？な・・・な・・・なんだこの生き物はく!!？」

コイツはアレだぜ！この土地の主！この土地を統べる者！この長さ威圧感間違いないねえ！今は眠ってるようだが油断するな！」

「いや汽車だよ、知らねえのかよ」

「シツ！落ち着け！まず俺が一番に攻め込む」

「待つんだ伊之助！」

「あん」

「この土地の守り神かも知れないだろう？それから急に攻撃するのも良くない」

「いや汽車だつて言ってるじゃんか、列車！分かる？乗り物なの、人を運ぶ、この田舎モンが！」

初めて列車を見た伊之助と炭治郎に突っ込みを入れる善逸、そんなやり取りをしていると

「猪突猛進!!？」

伊之助が鼻息を荒げ列車に向かって体当たりをしだす

「止めろ！恥ずかしい！」

善逸が伊之助に注意をしていると、

「何をしている貴様ら！」

「コイツら刀持ってるぞ」

「警官だ！警官を呼べ」

伊之助の奇行に駆けつけてきた駅員は炭治郎達の格好を見て警官を呼ぼうとする

「やばいやばいやばい！逃げろ〜！」

善逸は慌てて炭治郎と伊之助を抱え必死にその場から逃げ出すと

「駅員さん警官を呼ぶ必要はありません、この場は私に任せてくださいませんか？」

「誰だ！……あ……貴方は……失礼しました！」

「構いません！では私はこれで失礼しますね」

「はい！お気をつけてお嬢様！」

駅員はそう声をかけられてその場を引き返すと

「さてと……あの三人はどこに逃げたのかしら？」

そう言いながらお嬢様と呼ばれた者は逃げた炭治郎達を探しだし

た

「伊之助のおかげで酷い目にあつたぞ！謝れ！」

「はあ☒だいたい何で警官から逃げなきやいけねえんだ！」

「政府公認の組織じやないからな俺達鬼殺隊、堂々と刀持って歩けないんだよホントは、鬼がどうの言つても中々信じてもらえんし混乱するだろ」

「一生懸命頑張つてるのに」

「まあ仕方ねえよ、とりあえず刀は背中に隠そう」

駅の構内に隠れた炭治郎達はそう話していると伊之助は誇らしげに笑いドヤ顔をしながら背中を見せるが、上半身が裸であり日輪刀が隠れていない為丸見えであつた

「丸見えだよ、服着ろ馬鹿」

そんな伊之助に突つ込む善逸、それと時を同じくして列車が発車する汽笛が鳴り響き

「ヤバっ！もう出発だ警官いるかなあ？」

「いても行くしかないよ」

「勝負だ！土地主〜！」

そう言いながら三人は動き始めた列車を追いかけ伊之助・炭治郎が一足先に乗り込み乗り損ねた善逸が必死に列車を追いかける

「炭治郎〜伊之助〜」

そう言いながら手を伸ばし炭治郎達に引き上げてもらおうとする善逸

炭治郎達も善逸に手を伸ばし引き上げようとする

「まさかの駆け込み乗車ですか！警官は呼ばないよう手配したんですから心配しなくても良かったのに」

そう言いながら手を伸ばし炭治郎達と善逸を引き上げると炭治郎達は

手伝つてくれたお礼を言おう振り返る

「手伝つてくれてありがとうござ〜・桜花さん☒」

「え？桜花さんってあの？・・・いやそっくりだけどき！違う人だよ！

こんな清楚なお嬢さんが桜花さんのはずないって」

「あいつはなんかポンコツ臭がしてたからな!」

「なるほど!私にそっくりのその桜花って方は清楚感ない上にポンコツ臭が漂っているんですね!」

「善逸!伊之助!失礼だろ!この人も桜花さんと同じポンコツ臭がするんだ!この人に謝れ!」

「いやお前が一番失礼だろ」

「でも無自覚で煽ってくるところが炭治郎君らしいと私は思いますよ」

「すみません!そんなつもりはなかったんです!!?・・・あれ?俺名前前教えたっけ?」

「ええ!随分と前にお互い自己紹介はしてますよ?」

「・・・やっぱり桜花さんだ!善逸!伊之助!この人は桜花さんだよ!臭いも同じだし間違いないよ」

「嘘だろ!顔はそうだけど見た目とか雰囲気とか全然違うじゃんか!詐欺だよ!これは詐欺だ!」

「あの女猫被ってやがったのか!」

列車の最後尾で炭治郎達はそう会話していると

「まあここには私達しかいないしもういいや♪普段の私からは想像付かなかったでしよ♪」

「はい!でもどうしてこんな事を?」

「お仕事だよ?鬼殺とは違うお仕事、まあ食事会なんだけどね!お国がどうかお偉いさんの難しい話が飛び交う堅苦しい食事会に行ってたんだよ、んでそのまま任務に合流したからこんな格好なの」

「お国?お偉いさん?桜花さんあんたいったい何者なんだよ」

「ん?私は四ノ宮桜花だよ?それ以外の何者でもないよ♪」

「いやいや!そんな筈は・・・四ノ宮・四ノ宮ってあんたまさか!」

「急にどうしたんだ?善逸」

「炭治郎!四ノ宮だよ!四ノ宮財閥!!?聞いた事くらいあるだろ」

「いや、俺は聞いた事ないな」

「ちよ☒お前どんだけ田舎モンだよ!」

「蒲公英君♪そつちの話は鬼殺とは関係ないし説明しなくていいよ♪」

まあそうゆるー場では四ノ宮家の令嬢として振る舞わなくちゃいけないから喋り方も変えなくちゃいけないんだよ♪面倒臭いよね♪」

「桜花オメーさつき警官がどうか言つてたよな」

「うん♪この鉄道も四ノ宮財閥が運営してるからね♪駅員さんに呼ばないよう頼んだんだよ♪『警官を呼ぶ必要はありません、この場は私に任せてくださいませんか?』つてね♪」

「おお!オメー実はスゲエ奴だったんだな」

「良い!・・桜花さんのお嬢様口調凄く良いよ!桜花さん俺と結婚してくれ♪」

「無理♪」

「即決で振られた!!?」

「ん〜とね、私達は鬼殺隊、明日の命の保証もないのに将来の約束なんて出来ないよ♪」

「っ!!?・・あの桜花さん!煌牙さんは・・」

「・・・・とりあえず着替えてもいいかなあ?この格好堅苦しいんだよ♪」

「あつすいません!」

桜花は炭治郎達と一旦会話を切り上げると煌びやかな衣装をその場で脱ぎだし

「ちよ☒桜花さんどこで脱いでるんですか☒」

まさかこの場で着替えるとは思ってなかった炭治郎は赤面しながらそう桜花に言う

「ほほう♪炭治郎君はムツツリだね♪でも残念♪衣装の下には魔法衣を着用してるのだ♪」

桜花は炭治郎をからかいながら楽しげにそう言うどヤ顔でいつもの格好を見せつける

「・・何で・何で衣装の下に隊服着てるんだよお!!?違うだろ!衣装脱いだらなんかこう!眼の保養みたいな!!?そうゆるーの期待す

るだろ!!?返せ!俺の期待を返せ!!?出来ないなら隊服を脱いで期待に応えろ〜!」

桜花のあられもない姿を期待していた善逸はそう言いながらキレ出すと

「……………」

炭治郎から哀れみというか何か違う生き物を見るような眼差しを向けられ

「いや!お前も期待しただろ!顔真っ赤にしてさ〜!この期に及んで掌返しとかなんて炭治郎だ!」

炭治郎を巻き込んで共犯にしたかった善逸は炭治郎の裏切りを受け憤慨していると

「期待させて申し訳ないけど人前で下着姿とか裸とかありえないよ?私もそうゆうところ見せたくないし・・・焯牙は見た事あるけども」

「ええええ☒」

「は?・・あのヤロー!!?何で一人だけ羨ましい事してるんだよ〜!もぅいいないけど謝れ!!?俺に謝れ!」

「まあ私達の修行時代の話だけどね♪半年間焯牙とほぼ二人きりで暮してたからさ♪変な遠慮は疲れるし焯牙なら見られてもいいかなって♪」

「焯牙さんの事信頼してるんですね」

「うん♪家族だし口に出して言わないけど私のお兄ちゃんだからね♪」

「半年間って言っちゃいましたけどどんな修行だったんですか?」

「え〜とね〜♪鱗滝さんが住んでる狭霧山みたいに酸素濃度が薄い山で藤襲山の最終選別みたいな事を半年間」

「え?・・・それ修行なんですか?寧ろ自殺しに行くような」

「嫌だ〜!羨ましいと思ったけど地獄じゃんか!爺ちゃんが育手で良かったよ〜」

「山の王ならそれくらい当然だ!オーガはそこで野性を磨いてたんだな!」

「野性は知らないけど心肺機能とか身体能力の上昇は間違いないよ♪」

でも全集中の呼吸や日輪刀を使わないで鬼の相手するから意外と危ない修行だったかもね〜♪」

「いやいやいや！意外でもじゃなく危険です！全集中の呼吸を使わずに鬼と対峙するなんて！それも鬼殺隊に入る前の子供が」

「でもこうして生きてるし〜♪たまたまに隊士の特訓の場として修行してる時あるから炭治郎君達もやって見たら〜？」

「いや・・・それは遠慮します」

「うんうん！俺に死ねって言ってるようなもんだし絶対行かないからな」

「ウオオオ!!？そこで鍛えれば俺はまた一つ山の王に近づくんだな！ワクワクが止まらね〜ぞー！」

「あつ！列車内に煉獄さん待たせてるんだつた！皆も煉獄さんと合流しようよ〜♪」

列車の最後尾で未だに話し込んでいた炭治郎達は桜花の一言でようやく列車の中に入る事にし、桜花は魔法衣で艶やかな着物姿に変装すると炭治郎達の後に続き列車内に入っていった

「桜花さん、煉獄さんはどこに？」

「ここから四両先の客車に座ってましたよ？お弁当を差し入れしましたので今頃食事をなさってるかもしれないですね」

「え？桜花さん見た目と口調が」

杏寿朗の居場所を桜花に尋ねる炭治郎に桜花はお嬢様口調で返事をする。突然の様変わりに驚く炭治郎、そんな炭治郎の耳元に近いた桜花は小声で呟く

「列車内には四ノ宮財閥に関わる人達も乗ってたりするの、車掌さんとかもそうだしね。私達四ノ宮家が鬼殺隊と繋がってる事を知っているのは財閥の中でもほんの僅かだし、鬼殺隊としての私が表に出るのはあまり良くないの」

「どうしてなんです？」

「簡潔に言うとうと鬼殺隊が将来的に鬼じゃなく人を殺す為の組織にならない為かな？」

「え？人を殺す？意味が分かりません！」

「・・・分かんなくていいよ？そうならない為に四ノ宮家があるんだし炭治郎君は禰豆子ちゃんの為に頑張ればいいと思うよ」

「・・・？」

「まあそうゆー事でよろしくね」

桜花は炭治郎にそう説明すると煉獄のいる車両へと歩き出し炭治郎達もそれについて行くのだった

「美味しい！美味しい！美味しい！」

桜花達が向かった四両先の客車、そこにはひたすら美味いと連呼しながら弁当を貪る杏寿郎の姿が見えた

その杏寿郎の周りには食べ終えた弁当の空箱が山のように積み重なっており炭治郎達はそれを見て唾然とする

「・・・煉獄さんの食欲が旺盛なのは重々承知してましたがいくら何でも食べすぎだと思えますよ？」

「この弁当が美味くてな！それにまだ足りないくらいだ！」

「そうですか・・・私は席を外しますのでごゆっくりどうぞ」

「む？隣に座ればいいだろう？遠慮は無用だ」

「いえ、こちらの事情で遠慮させていただきますね」

「ならば仕方ない！それにしても馬子にも衣装とはこのことだったのだな」

「褒め言葉として受け取らせていただきます、では失礼します」

桜花と杏寿郎はそう会話すると桜花は少し離れた座席に一人で座り残された炭治郎達は杏寿郎と対面する

「煉獄さんお久しぶりです」

「うむ！弁当は美味いぞ！」

「はあ、それはこの空箱を見れば分かります」

「そうか！ならばよし！」

「・・・え？・・・あの・・・」

「美味しい！美味しい！」

「・・・あの！煉獄さん!!？」

「美味しい!!? 久しいな! 美味しい! 裁判の時以来か! 美味しい!」

「食べるか喋るかどちらかにして下さい!」

弁当を貪り続ける杏寿朗と話をしたい炭治郎、両者の話が噛み合わず炭治郎は杏寿朗が弁当を食べ終わるのをひたすら待つ羽目になってしまった

「俺に聞きたい事があると胡蝶から聞いたぞ!」

「あ、はい! そうなんです! 俺の家に代々伝わるヒノカミ神楽という神楽があります、那田蜘蛛山での戦いで死を覚悟した時に父さんが舞っていた記憶が頭に浮かんで、その神楽の呼吸に切り替えたなら斬れないと思つた糸が斬れたんです」

「その呼吸と禰豆子のおかげで十二鬼月を追い詰める事が出来て、炎柱の煉獄さんならヒノカミ神楽について何か知つてるんじゃないかと」

「うむ! そういう事か! だが知らん! ヒノカミ神楽という言葉も初耳だ! 君の父がやっていた神楽を戦いに応用出来たのは実にめでたいがこの話はこれでお終いだな!」

「えっ☒ちよつともう少し!」

「俺の継子になるといい、面倒を見てやろう」

「待って下さい! そしてどこ見てるんですか」

「四ノ宮妹だ!」

「いや! 桜花さんを見ながら喋らないで下さい!」

「四ノ宮がいなくなり四ノ宮妹も色々抱え込んでいるだろう! 普段の言動から想像付かないがな!」

「そう! ですね!」

「炎の呼吸は歴史が古い」

「話が変わつた☒」

「炎と水の剣士はどの時代でも必ず柱に入っていた、炎・水・風・岩・雷が基本の呼吸だ、他の呼吸はそれらから枝分かれして出来たもの、霞や雲、牙は風から派生している」

「はい! 煌牙さんの型は風を巻き込んでいました」

「溝口少年! 君の刀は何色だ!」

「☒俺は竈門ですよ！色は黒です」

「黒刀か、それはキツいな」

「キツいんですかね」

「黒刀の剣士が柱になったのは四ノ宮、遡れば初代牙柱しか存在しないからな、両者共に黄金騎士牙狼の称号を得た者達、つまり牙狼にならない黒刀の剣士は柱になれない！更にはどの系統を極めればいいのかもわからないと聞く、牙の呼吸にしても四ノ宮より四ノ宮妹の方が型が冴えてるからな！」

「焔牙さんでも呼吸を極められないのか」

「同じ黒刀同士、本来なら四ノ宮の継子が望ましいのだが四ノ宮はいないからな！俺が鍛えてあげよう、もう安心だ」

（焔牙さんとは違うけど面倒見のいい人だな・・・焔牙さん・・・俺焔牙さんと一緒に強くなりたかったです）

杏寿朗と話をした炭治郎、求めていたヒノカミ神楽の情報は得られなかったものの杏寿朗から稽古をつけてもらえる事になった炭治郎は杏寿朗の面倒見の良さに焔牙を重ね思いを馳せる

そんな中走る列車の速さに興奮した伊之助が窓から身を乗り出し競争しようとする

「危険だぞー！いつ鬼が出てくるかわからないんだ」

杏寿朗の忠告に善逸は顔を青ざめて

「え？嘘でしょ☒鬼が出るんですかこの汽車」

「出る」

「出んのかい！嫌アーーーーッ！鬼の所に移動してるんじゃないここに出るの嫌アーーーーッ!!?」

「短期間のうちにこの汽車で四十人以上の人が行方不明になっている、数名の剣士を送り込んだが全員消息を絶った！だから柱である俺と四ノ宮妹が来た！四ノ宮妹はこの汽車を運営している大元でもあるからな」

「はーーーーっ！なるほどね!!?降ります!!?」

杏寿朗からこの汽車で鬼が出ると言われ泣きながら降りたがる善逸、そんな折に背後からこの汽車の車掌がやって来て切符の確認を行

いだす

「切符拝見します」

「何ですか？」

「車掌さんが切符を確認して切り込みを入れてくれるんだ」

初めて汽車に乗った炭治郎は車掌が切符の確認をすると知らないでいたが杏寿朗が説明をしている折に車掌は切符に切り込みを入れる

(ん？何だろう？嫌な臭いがする)

鼻のきく炭治郎は客車内に漂う嫌な臭いを嗅ぎ取ると

「拝見しました」

切符の確認を終えた車掌がそう言うとかかの気配を感じた杏寿朗が立ち上がり車掌に下がるよう伝えると共に非常時だから帯刀してると言ってる

客車内に出現した鬼を見据える

「その巨軀を隠していたのは血鬼術か、気配も探りづらかった、しかし！罪なき人に牙を剥こうものならばこの煉獄の赫き炎刀がお前を骨まで焼き尽くす!!？」

日輪刀を鞘から引き抜きながら杏寿朗はそう言う

——炎の呼吸 壺の型 不知火——

力強い踏み込みで鬼に突進し日輪刀を一閃する杏寿朗、出現した鬼は杏寿朗によってあっさりと頸を斬り落とされると

「すげえや兄貴！見事な剣術だぜ！オイラを弟子にしてくださいええ！」

「いいとも！立派な剣士にしてやろう」

「おいらも」

「おいどんも」

「みんなまとめて面倒見てやる」

「煉獄の兄貴！」

「兄貴！」

杏寿朗の見事な剣術に感動し弟子入りを志願する炭治郎・善逸・伊之助

みんなまとめて面倒見ると引き受ける杏寿朗を兄貴と祭り上げ

る・・・夢を見ていた

「切符を拝見します」

「切符持つてませんよ、その必要はないので」

「・・・そんな・・・お嬢・・・様・・・なんで」

「ここ最近無限列車にて行方不明者が多数います、このままだと我が四ノ宮財閥の沽券に関わりますので、四ノ宮財閥を代表して私が無限列車の調査に来ました」

「・・・降りて下さい・・・お嬢様を巻き込むわけには」

「巻き込む・・・なるほど！乗客の皆様が眠っているのは貴方の仕業という訳ですね、切符を切る音と同時に眠ったように見えたので・・・鬼と繋がってますね」

「どうして・・・それを」

「それはこちらの事情なのでお教え出来ませんが、鬼がいる事くらいは知ってますよ」

切符を拝見する車掌とそう話す桜花、狼狽える車掌に鬼の存在を突きつける

「へえくまだ眠ってない乗客がいたんだ、なら俺が直接眠らせてあげよう、君にも幸せな夢を」

「待つて下さい！この方は・・・この方だけは」

「君死んだ妻と娘に会いたいんじゃないの？君にとってこの娘がどうか俺には関係ないよ、それじゃあおやすみ」

「そんな・・・お嬢様」

「君もよくやってくれたね、家族に会えるいい夢を」

車掌の後ろから口の生えた手が蠢き、血鬼術の力で桜花を強制的に眠らせると車掌にも術をかけ昏睡させると眠りにつかなかった数名の男女が手だけの鬼に話しかけ炭治郎達に縄をかける指示や注意事項を説明する

鬼は先頭車両にいて暫く動けないと言うと数名の男女に時間を稼ぐよう言い残しその場を後にした

「どんなに強い鬼狩りだって関係ない、人間の動力源は心だ精神だ、精神の核を破壊すればいいんだよそうすれば生きる屍だ、殺すのも簡

単、人間なんて皆同じ硝子細工みたいに脆くて弱いんだから」

列車の先頭車両の屋根に立ちそう言う鬼、 “下弦の壺 魘夢 ”

魘夢は薄ら笑いをしながら列車の走る先を見つめながら呟く

「幸せな夢を見ながら死ぬるんだから幸せだよね」

「……皆寝ちゃった……煉獄さん起こさなきゃ」

魘夢の血鬼術で炭治郎達を含め全員眠ってしまった列車内で即座に目を覚ます桜花、辺りを見渡し眠る炭治郎達を見て真つ先に杏寿朗を起こそうと動き出す

「私達は沢山の人の想いを背負いながら戦ってるんだよ、甘い夢に浸ってなんかいられないの！」

桜花はそう言いながら杏寿朗のそばに寄ると杏寿朗の肩を揺らしながら呼びかける

「煉獄さん起きてー！大変なんだよ！煉獄さんの大好きなお芋が食べられてるよ!!？早く起きないとお芋なくなっちゃうよ!!？」

桜花は杏寿朗の好物の芋で釣れば起きないかと試してみるが杏寿朗は起きる反応もなく未だに眠ったままだったが密かに腹の音だけが反応していた

「お芋で起きないとは重症ですな、それに変な縄結んでるし知らない人と繋がってるし……斬ったらマズイかな？」

眠りから覚めない杏寿朗に困っていた桜花は杏寿朗の手首に巻き付いていた縄が知らない乗客と繋がっている事を見て日輪刀で斬れば起きるかもと考えていた

そんな時に

ガタ ガタガタ バタン

「むー？」

炭治郎のそばに置いていた箱の中から目が覚めた禰豆子が顔を出して箱の中から出てくる

「むーー」

『むー♪』

「むむ☒」

『むむむむー♪』

「むーむー！むむむー！むむむむー！」

『むー♪むむー♪むむむむむ、いやゴメン何言ってるか全く分かんない』

「むむ☒・・・!!?むむむーむー」

「禰豆子ちゃんだよね？炭治郎君の妹の、私は四ノ宮桜花！煌牙の妹だよー分かる？煌牙」

「むーむむーむ♪」

「ふふ♪禰豆子ちゃん!!?皆の事任せていいかなあ？私は鬼を探す、禰豆子ちゃんは皆を起こす、皆を守る為に一緒に頑張ろう？」

「むーむー!!?」

そんな禰豆子の真似をして意思疎通を図る桜花だったが結局言葉が通じず意思疎通は諦めると自己紹介に移り桜花は炭治郎達を禰豆子に任せて

鬼を探すべく別の車両へと移っていった

「さてと素敵な夢を見せてくれた鬼さんにはちゃんとお礼しないと」

そう言いながら先頭車両方向に歩く桜花は花蓮から譲り受けた日輪刀を魔法衣から取り出すと腰に挿し車内の気配を探る

「さつきよりも鬼さんの気配が濃くなった、気を引き締めないと」

先頭車両に近付くにつれ鬼の気配が濃くなったのを感じとった桜花は日輪刀に手をかけながら

「趣味が悪いよ？様子見なんてしないでさつきと出てきたら？斬吼狼」

前方に注意を払いつつ桜花は背後から感じる気配にそう言うど気配の主斬吼狼が桜花の目の前に影を生み出しその影の中から姿を見せる

「へえ？気配を感じ取る感覚が敏感なんだな、良いじゃねえか」

影の中から出てきた斬吼狼は桜花の気配探知能力が優れている事に感心しそう話すと桜花は斬吼狼を睨みながら話し出す

「煌牙達は？生きてるんだよね？何か知ってるんでしょ？」

煌牙達の生存が気になる桜花は斬吼狼にその事を尋ねると斬吼狼からの返答は

「・・・さあな・・・そんな事よりまずは下弦の壺をどうにかした方がいいんじゃないか？」

斬吼狼は煌牙達の事には触れず列車内に潜む下弦の壺を先にどうにかした方が良くと桜花に言うも桜花はその答えに納得がいかず斬吼狼に詰め寄る

「何で☒どうして教えてくれないの!!？」

そう声を荒げる桜花だったが斬吼狼は桜花の反応に応える様子もなく

「いずれ分かるさ・・・アイツらはもう」

そう小声で呟く斬吼狼、その声が桜花に聞こえるはずもなく桜花は「この任務が終われば絶対教えてもらおうからね！」

そう斬吼狼に言うと言いつつ桜花は今やるべき任務に集中し先頭車両に向かい歩いていくのだった

「さてと俺も久しぶりにやりますかね」

斬吼狼はそう言いながら桜花とは反対方向に歩き出し後方車両へと移っていった

桜花と斬吼狼のやり取りが行われてた同時刻

下弦の壺魘夢の術により眠らされていた炭治郎達、幸せな夢の中で家族と過ごしていた炭治郎は危険を知らせる自分自身の幻覚により夢の中だと認識し禰豆子の血鬼術と自害という決死の手段で夢から醒めると慌てて飛び起き車両内を見渡す

「はあはあ・・・生きてる・・・禰豆子!!?ありがとな禰豆子のおかげで助かったよ」

慌てて飛び起きた炭治郎の大声に驚いた禰豆子は座席の影に隠れながら炭治郎の様子を伺っていたが炭治郎に声をかけられヒョコヒョコと近付くと炭治郎に頭を撫でなれ嬉しそうな顔をして身を任せ

「むくむく」

そんな炭治郎と禰豆子だったが前方の車両から凄まじい気配を嗅ぎ取った炭治郎は座席の下に隠していた日輪刀を引き出し臨戦態勢に入りだす

「禰豆子気を付けろ!!?とてつもなく強い鬼の臭いがする!この列車に巢食う鬼かもしれない」

そう言いながら警戒する炭治郎、気配が近付くにつれより一層と濃くなる鬼の臭いに炭治郎は自分の今の力量より圧倒的に格上の鬼だと察すると緊張で体が強張り冷や汗が滲み出してくる

「落ち着け!呼吸を乱すな!自信を持って!俺はあの時より強くなった!

煌牙さんが鍛えてくれたんだ!俺は出来る奴だ!頑張れ俺!頑張れ!」

そう大声で自分自身を鼓舞する炭治郎、日輪刀を構え此方に向かってくる鬼を迎えていると車両の戸が開き鬼が車両内に入ってくる

「・・・おい!自分を鼓舞するのは勝手だが声がデカイ!!?」

炭治郎にそう言いながら近付く鬼「斬吼狼」は車両を見渡している

「お前はあの時の☒まさかお前がこの列車の乗客を」

そう斬吼狼に詰め寄る炭治郎は警戒を更に強め斬吼狼を凝視している

「逆だ小僧!俺は乗客を守りに来たんだ、鬼ではあるが俺も煌牙と同じ魔戒騎士だ!」

炭治郎の問いかけにそう答える斬吼狼は一瞬で炭治郎との距離を詰めると炭治郎の頭に手を置きクシャクシャと頭を撫で出す

「前に見た時より強くなったな、あれから必死に頑張ったんだろ?」

お前のその努力はお前を裏切らない!」

炭治郎にそう言いながら斬吼狼は軽く笑うと炭治郎は涙目になりながら

修行の出来事を話し出す

「煌牙さんが!煌牙さんが鍛えてくれたんだ!強くなって煌牙さんと一緒に戦えるように必死に頑張った!けど煌牙さんは!・・・煌牙さ

んはもう・・・」

「むくく」

そう言いながら泣き出す炭治郎と禰豆子、それを見た斬吼狼は居た堪れずに炭治郎と禰豆子の肩を掴むと

「その想いを糧にして更に強くなれ！」

そう言いながら斬吼狼は炭治郎と禰豆子の顔を交互に見つめる

「はい！俺は！俺達は強くなります！誰かに悲しい思いをさせない為に！大切な人達が笑えるように」

炭治郎は袖で涙を拭うと斬吼狼に強く宣言し斬吼狼はフツと笑みを浮かべて炭治郎に語りかける

「良い面構えだ！それはそうとお前、さっきまで俺を警戒していたが急に警戒を解いたな！信用してくれるのは有り難いが俺が嘘をついてる可能性もあるんだぞ？鬼だからな」

出会い頭に警戒していた炭治郎が安心しきって警戒を解いた事が不思議に思う斬吼狼は炭治郎にそう聞くと炭治郎は自信ありげに斬吼狼に答えだした

「俺は臭いで嘘をついてるかわかるんです！貴方から嘘の臭いはしなかったし人を喰った嫌な臭いもしませんでした！それに！煌牙さんと同じような臭いがするんです！だから！俺は貴方を信じます」

斬吼狼にそうハッキリと言う炭治郎、その炭治郎の真っ直ぐな目に斬吼狼は笑い出し炭治郎はキョトンとした顔で斬吼狼を見ていると

「面白いなお前！まだ名前を聞いてなかったな！俺は斬吼狼、人間の時の名前は御影総悟だ！」

「俺は竈門炭治郎！こっちは妹の禰豆子です！」

「むーむー」

そう言いながら互いに自己紹介をすると

「妹は鬼か・・・だが他の鬼とは違う優しい気配だ！炭治郎、可愛い妹だな」

「はい!!？ありがとうございます!!？」

「むーむー」

禰豆子から感じる鬼の気配が他の鬼達とは違う優しい気配だと感

じた斬吼狼は優しく炭治郎に語りかけると禰豆子を認めてもらえて嬉しい炭治郎は元気よく礼を言い禰豆子もご機嫌にむーむー言っていた

「さてと、状況が状況だ！のんびり話してる場合じゃないな」

「はい！皆鬼の術で眠らされて起きないんです！それに早く鬼を見つけて倒さないこのままじゃ」

「そうだな、このままじゃ乗客達は鬼の餌、さっさと鬼をぶった斬らないな」

「鬼は一体何処に・・・」

「炭治郎・先頭車両に向かえ！恐らく下弦の壱は先頭車両にいる！桜花も一緒にな」

「下弦の壱×桜花さん？」

「俺は最近まで無惨の糞野郎の元で諜報活動してたからな、下弦の連中の気配は覚えてる。この列車から感じる気配は下弦の壱の気配だ、一足先に目覚めた桜花が先頭車両に向かっていたから今頃下弦の壱と対峙してるかもな」

「鬼無辻・無惨!!?・・・あの！鬼無辻は！『炭治郎、奴の話なら後で聞かせてやる、今は下弦の壱の討伐と乗客の安全が優先だ』：はい！今は目の前の人達を守らないと」

「炭治郎、俺は万が一に備え車両に残る、炭治郎は桜花と合流して下弦の壱を頼む」

「分かりました！総悟さんが味方でいてくれて凄く心強いです！禰豆子！禰豆子は善逸達を起こしてくれ！」

「むー」

斬吼狼と炭治郎はそう会話すると二手に分かれ炭治郎は下弦の壱を倒す為に先頭車両へ、斬吼狼は乗客の安全を考え車両内で待機している。禰豆子は炭治郎から言われた通り善逸達を起こす為に血鬼術で縄を燃やし始める

「むー」

「鬼の血鬼術を燃やす炎か、魔導火みたいだな」

そう言いながら斬吼狼は禰豆子の血鬼術を見つめると眠っている

乗客達を見渡し

「総悟か・・・その名で呼ばれたのは久しぶりだな」

斬吼狼は炭治郎に人間だった頃の名前を呼ばれ感慨にふけると魔法衣から魔戒剣を取り出し車両内で待機するのだった

その頃桜花は先頭車両まで辿り着き車両内に鬼がいないと感じると車両内ではなく車両の外、屋根にいと察し窓から身を乗り出して強引に屋根へと登っていく

「ふう〜窓から屋根に登るなんて良い子は真似しちや駄目だからね」

恐らく誰も真似しないだろう芸当に一人突っ込みを入れる桜花、そう言いながら桜花は鞘から日輪刀を抜刀し背後から感じる鬼の気配に振り返り車両の屋根に立つ下弦の志魔夢を見据える

「さっきは素敵な夢を見せてくれてありがとう！おかげでなんの躊躇もなく斬ることが出来るよ」

桜花はそう言いながら魔夢を睨みと魔夢は少し驚いた顔をしながら桜花に話しかける

「もう夢から醒めたんだ、折角幸せな夢を見せてあげたのに」

魔夢はそう言って左手の甲を桜花に向けながら再び眠りにつかせようと術を発動する

「もう一度お眠り！今度は幸せな夢じゃなく悪夢だけど」

そう言いながら魔夢の術が発動すると桜花は強制的に眠りにつくが眠りについた瞬間、覚醒すると咄嗟に前傾姿勢になり更に身体を倒して転倒寸前まで傾け地面と顔が平行になった瞬間体重移動を利用して足に力を入れると一気に魔夢へと踏み込む

踏み込みによる加速と高速で走る列車の相対速度を利用した桜花の突進

は一瞬で魔夢に肉薄し、桜花は低空から体を起こしながら日輪刀を振り上げる

――牙の呼吸 漆の型 荒狗鷲――

踏み込みの勢いと低空から体を起こした勢いを利用した遠心力の

効いた下方からの斬り上げで魘夢に斬りかかる桜花

高速で走る列車の追い風をも利用した風の巻き起こしでもともに身動きが出来ない魘夢は桜花の斬撃をまともに受けて真つ二つに斬り裂かれ体が左右に分かれると桜花はその場から後退し玖の型を放つ構えに移る

「桜花さーん!!?」

「えっマジ」

車両の継目を利用して車両の上に登ってきた炭治郎が桜花と魘夢が立つ車両の後方から現れ桜花は慌てて玖の型の発動を止める

「桜花さん!!?俺も加勢します!!?」

「あ・・うん・・ありがとう」

ヤル気十分な炭治郎の言葉とは裏腹に一人でも良かったと思う桜花は微妙な返事をする。炭治郎は気合いを入れ直し真つ二つに裂かれた魘夢と向かい合う

「あれ?君も起きたんだ、おはよう!幸せな夢の中に浸っていれば幸せなまま死ねたのに」

そう言いながら魘夢は左手をかざし再び桜花と炭治郎を眠らせようと囁く

――血鬼術 強制昏倒催眠の囁き――

魘夢の囁きにより再び眠りにつく二人だが眠りについた瞬間に再び覚醒すると炭治郎は日輪刀をかざし魘夢に向かって走り出す

――水の呼吸 拾の型 生生流転――

回転する度に威力が増していく拾の型を放ちながら魘夢に近付いていく炭治郎、桜花も炭治郎に合わせるように魘夢に向かって走り出す。日輪刀を構え型を放つ動作に入る

――牙の呼吸 捌の型 六根清浄・舞天狼――

桜花と炭治郎、二人が両方向から魘夢に迫る中魘夢は再び二人を眠らせようと血鬼術を発動し囁く

「眠れ」

その囁きを聴く度に二人は睡眠状態に陥るが瞬時に覚醒、再び魘夢へと駆け出し魘夢へと迫る

(俺の術が効いてない☒いや、確実に効いている！この二人は俺の術を見破り夢の中で覚醒の為の自決を繰り返しているんだ・・・夢の中とはいえ何度も自分で自害するなんて普通じゃない・・・コイツらは異常だ)

術で何度も眠らせても覚醒し迫ってくる二人に驚異を感じた魘夢は必死に術で抵抗するもその度に覚醒し次第に距離を詰める二人に怖れを抱く

「眠れ」

そう言いながら術で眠らせる魘夢、その夢で炭治郎は家族からなじられ疎まれる悪夢を見せつけられ家族を侮辱された怒りを爆発させる

「そんな事言う筈がないだろう!!?俺の家族が!!?俺の家族を侮辱するなあああ!!?」

覚醒した炭治郎はそう叫びながら怒りの一撃を魘夢へと叩き込む

桜花もまた炭治郎と同様に家族から見放され、焠牙にも嫌われるという夢を見せつけられ怒りが込み上げていた

「私と焠牙の絆はそんな簡単に切れる絆じゃない!!?私は黄金騎士牙狼を支える魔戒法師、四ノ宮桜花、私の誇りを侮辱しないで!!?」

そう言いながら桜花は流麗な太刀捌きで魘夢へと斬り掛かる

そんな二人の刃は魘夢に差し迫り桜花の斬撃は魘夢の全身を、炭治郎の刃は魘夢の頸を斬り裂き魘夢はバラバラに斬り裂かれた全身と頸が泣き分かれる

(手応えが殆ど無い☒これも夢か?)

魘夢の頸を斬った炭治郎は斬った際に違和感を感じそう言うと頸を斬られた魘夢の頭部が嘲笑うかのようにニヤリと笑みを浮かべ炭治郎達に告げる

「あの方が柱や裏切り者に加えて耳飾りの君を殺せと言った気持ち凄くよくわかったよ存在自体がなんかこう、とにかく癩に触ってくる感じ」

そう言いながら魘夢は頸から肉を生やし蠢き出すと炭治郎は驚愕の表情で魘夢に釘付けになる

(死なない☒)

「素敵だねその顔そういう風を見たかったんだよ、うふふふ、頸を斬つたのにどうして死なないか教えてほしいよね、いいよ俺は今気分が昂揚してるから」

驚く炭治郎の顔を見て魘夢は気分が昂揚し饒舌になりながらその理由を話し出す

「赤子でもわかるような単純なとき、うふふ、それがもう本体ではなくなっていたからだよ、今喋っているこれもそうさ頭の形をしているだけで頭じゃない君がすやすやと眠っている間に俺はこの列車と融合した！この列車の全てが俺の血であり肉であり骨となった！うふふ、その顔いいねいいね、わかってきたかな？つまりこの汽車の乗客二百人余りが俺の体を更に強化する為の餌、そして人質、ねえ？守りきれぬ？君達は二人でこの汽車の端から端までうじやうじやとしている人間達全てを

俺におあずけさせられるかな？」

そう言うのと魘夢は薄笑いを浮かべながら融合した列車に潜り込むと炭治郎は慌てて魘夢に斬りかかるが間に合わず魘夢はその場から消えていく

「桜花さん☒」

「分かってる、でもちよつと厄介かも」

「え？」

「牙の呼吸の型は風を己が刃とする型が殆ど、乗客のいる狭い車内だと迂闊に使えないんだよ」

そう話す桜花、風を巻き込み刃を生み出す牙の呼吸、その特性故に列車内のような閉鎖的な空間だと乗客を巻き込んでしまう為、桜花は今の状況を厄介だと感じていた

「俺一人で守れるのは二両が限界です！それ以外は安全が保証出来ません！型が使えなくても桜花さんは俺なんかよりずっと強い！桜花さんの力を貸して下さい！！？」

炭治郎は型が使えなくても桜花は自分より強いと桜花は鼓舞し一瞬に乗客を守ろうと頼み込むと

「言われなくても最初からそのつもりだよ？型が使えないから戦えないなんて牙柱失格だし煌牙に呆れられるからね、それに車内には斬吼狼がいる！」

「そうだ！列車内には総悟さんや禰豆子がいるんだ！それに煉獄さんや善逸、伊之助が起きれば乗客の皆を守る事が出来る！」

二人はそう話すと車内に戻ろうとするが、後方車内から伊之助の雄叫びが聞こえ始めやがて伊之助が屋根を突き破り現れる

「ついて来やがれ子ども！ウンガアアアア！！？猪突猛進！伊之助様のお通りじゃあああ！！？」

気合十分とばかりに張り切る伊之助、禰豆子の血鬼術「爆血」の炎で縄を燃やした事で覚醒した伊之助はこれまでの鬱憤を晴らそうとやる気を漲らせていると車内前方にいる炭治郎の叫びが聞こえてくる

「伊之助ーッ！！？この汽車はもう安全な所がない！眠っている人達を守るんだ！この汽車全体が鬼になってる、聞こえるか！！？この汽車全体が鬼なんだ！！？」

伊之助にそう叫ぶ炭治郎、その叫びに伊之助は納得した様子でいた「やはりな・・・俺の読み通りだったわけだ、俺が親分として申し分なかったというわけだ！！？」

伊之助はそう言う就先程突き破った穴から車内に戻り、列車内の乗客を襲い始めた魘夢の肉塊に突撃する

ー獣の呼吸 伍の牙 狂い裂きー

「どいつもこいつも俺が助けてやるぜ！須く平伏し崇め讃えよこの俺を

伊之助様が通るぞおお！！？」

そう叫びながら四方八方に二対の日輪刀を振り回し乗客に絡みつく肉塊を斬りつけていく伊之助、

その後方車内では禰豆子が乗客に襲いかかる肉塊を爪で引き裂きながら奮闘しているが蠢き出す肉塊の多さに必死に対応するのが精一杯な禰豆子は坊主頭の少年に迫る肉塊に僅かばかり反応が遅れ必死に手を伸ばすがそんな禰豆子の腕を肉塊は絡め取り動きを封じよ

うとする

禰豆子は残ったもう片方の腕で肉塊を引き裂こうと鋭利な爪を伸ばすもその腕さえも絡み取られ、両足も拘束されてしまい完全に身動きがとれなくなってしまう

禰豆子の両手足を封じた肉塊は禰豆子の手足を引き千切るべく力を加えていくと禰豆子の体はミシと音を立て悲鳴をあげ始めると禰豆子はその痛みから思わず目を閉じてしまう

そんな時禰豆子の後方車内から稲光のような光が迸ると同時に落雷が落ちた音が鳴り響き禰豆子を拘束していた肉塊が斬り裂かれる

目を閉じていた禰豆子はその目を見開くと禰豆子の目の前には拘束していた肉塊を斬り禰豆子を助けた善逸が既に次の型を放つべく構えていて

禰豆子はそんな善逸の姿をつい見つめてしまう

――雷の呼吸 壱の型 霹靂一閃六連――

狭い車内にも関わらず善逸は視認出来ない速度で縦横無尽に駆け回り車内に蠢く肉塊を斬り裂いていく

「禰豆子ちゃんは俺が守る」

型を放った善逸はそう言うのと禰豆子は善逸に魅入ったように善逸に視線を送るが善逸は鼻提灯を膨らませながらフガフガと寝言を言いながら寝ていたので禰豆子は目が点になりながら一瞬思考が停止してしまう

「ハッ！ 姑息な手段を使うと思ったらコレが狙いだったわけか、随分と手間のかかるやり方だな、まあ阻止するがな」

善逸達がいる車両の更に後方では斬吼狼が蠢く肉塊を次々に細切れにしながらか乗客を守っていると

「何よこれ！ 私達こんな聞いてない！」

車両内が蠢く肉塊によって覆われた事で狼狽る一人の女性、魘夢の指示で炭治郎達と夢で繋がっていた者達は魘夢の指示の先にある目的など知る由もなくこの状況に怯えていた

この者達は炭治郎が覚醒した際に目を覚ましていたのだが、車両に

近付いて来る斬吼狼の威圧感に気圧され気を失い、少しして目を覚ますとこのような状況で半狂乱気味に斬吼狼に問いかける

「ねえ☒あの人は私達に幸せな夢を見せてくれる筈だったのよ？なんなのよ！これは！これじゃまるで地獄じゃない」

そう言いながら膝をつき項垂れる女性、斬吼狼は騒がれると邪魔だとはかりに女性の首に軽く手刀を入れ気絶させると他の者達も同じように気絶させる

「悪いな騒がれると邪魔だから大人しく眠っている、お前達は悪い夢を見ているんだ！起きた頃には全て終わっているさ」

そう言うのと斬吼狼は不敵な笑みを浮かべ背後に立つ人物に話しかける

「ようやくお目覚めか、当代の炎柱さんよ」

「うむ、うたた寝している間にこんな事態になつていようとは！よもやよもやだ、柱として不甲斐なし！穴があつたら入りたい!!？」

そう言いながら日輪刀を引き抜き踏み込む構えを見せる杏寿朗、寝ている隙に鬼の策略を許してしまった事を恥じ杏寿朗はこの事態を解決すべく気合いを漲らせる

「話は聞いている！斬吼狼とやら、俺は前方車両三両を守る、君は後方の三両を頼む」

「任せておけ」

斬吼狼と杏寿朗はそう話すと斬吼狼は後方車内に移動しようとするが

杏寿朗は斬吼狼の肩を掴むと

「この件が片付いたら四ノ宮について聞きたい事がある！四ノ宮は同じ志を持つ仲間でもあり同じ釜の飯を食べた家族でもある！それに失意に沈んでいた父上を救ってくれた恩人なのだ！」

そう力強く話す杏寿朗、その目に宿る熱い視線に斬吼狼は少し間を置くと

「桜花にも同じような事聞かれたな、まあ教える事なんざないけどな！

アイツらは・・・まあいざれわかるさ」

そう言いながら斬吼狼は足早に後方車両に移ると魔戒剣で肉塊を斬り裂いていくのだった

「いずれわかるか・俺は信じている！四ノ宮は必ず戻って来る！不可能と言われても諦めず可能にした男だ！牙狼に選ばれた男だ！四ノ宮に恥じないよう俺も責務を全うしよう!!？」

そう言いながら杏寿朗は力強く踏み込み前方車両へと駆け抜けるのだった

善逸、杏寿朗達が目覚めた頃炭治郎達は

(落雷のような音☒後方車両から・状況がわからない！善逸や煉獄さんは起きたのか？)

そう考えながら刀を振るう炭治郎、狭い車内で懸命に乗客を守る炭治郎はふと桜花を見つめる

(なんだ☒あの戦い方は☒この狭い車内であんな戦い方を考えつくなんて)

桜花を見た炭治郎はそう思いながら桜花の戦いに目を凝らしていた

「炭治郎君！余所見厳禁！」

そう言いながら炭治郎を叱咤する桜花、その桜花は座席の縁を足場にしながら飛び回り宙空から日輪刀を振るっていた

座席が並ぶ通路より座席の縁より上の空間が広い為それを利用して桜花は自分なりに戦いやすい戦法を見出していた

「はい!!？」

桜花の叱咤により自分のやるべき事に集中し直すと再び刀を振るうべく構え直す炭治郎、そんな時車両が大きく揺れ炭治郎は体勢を崩して転んでしまう

(なんだ☒今の揺れは！鬼の攻撃か？桜花さんは無事なのか？)

そう思いながら桜花の様子を見ようと顔を上げて見渡そうとする

「竈門少年！この車両は全部で八両編成、後方三両は斬吼狼という者が、中二両は黄色い少年と君の妹が守っている！俺は前方三両を守る！

ここに来るまでに細かく斬り刻んで来たから直ぐには再生しない筈だ！

君と猪頭少年と四ノ宮妹は鬼の頸を探せ！」

車両が揺れ動く程の踏み込みで駆け抜けてきた杏寿朗が炭治郎の前に現れ、炭治郎にそう告げると再び踏み込み車両を駆け抜ける

(判断が早い！それに今の揺れは煉獄さんの踏み込みだったのか：桜花さんは☒桜花さんどこに)

そう考えながら炭治郎は姿の見当たらない桜花を探し始め、座席の影を覗き込む

「桜花さん☒大丈夫ですか！」

そう心配しながら叫ぶ炭治郎、杏寿朗の踏み込みによる車両の揺れで縁から足を踏み外した桜花は頭から床に転げ落ち静かに横たわっていた

そんな桜花は何事もなかったように立ち上がり炭治郎に勢いよく掴みかかると

「炭治郎君は何も見ていない・・いい？何も見ていない」

「え？あ、でも」

「何も見てないの！炭治郎君は何も見ていない」

「わ、分かりました！桜花さんが足を踏み外して無様に転げ落ちた姿なんて俺は見ていません!!？」

「桜花ちゃん必殺の型！飛んでけ忘却の彼方へ！」

自分の失態をなかつた事にしようとする桜花の念押しに炭治郎は若干引き気味に了承するものの丁寧な説明口調で煽ってしまい桜花から渾身の張り手で八卦符を貼り付けられ桜花の術によって記憶の一部を改竄されてしまう炭治郎

「桜花さん！煉獄さんの指示通り俺達は鬼の対処に行きましょう！」

杏寿朗の話桜花と共に聞いたと改竄された炭治郎は桜花にそう告げると顔を押しながら疼く痛みを堪えていた

「さっきの揺れで顔をぶつけたのか？顔が痛い」

「そ、そうだよ！煉獄さんの踏み込み凄かったからね、きっとその時に顔をぶつけたんだよ！絶対にそうだよ！」

炭治郎の眩きに慌てて誤魔化す桜花はその場から逃げるように走り出すと

「猪っちゅ!!？聞こえてる？猪っちゅ!!？」

大声で伊之助を呼ぶ桜花、そんな桜花の呼びかけに伊之助は

「うるせえ！聞こえてんだよ！あと俺は伊之助だ！猪っちなんで弱そ

うな呼び方すんじやねえ！」

そう叫びながら返事をする伊之助、その声は車両の真上から聞こえ炭治郎は伊之助が上にいると判断した

「ギョロギョロ目ん玉に指図された！でもなんか・なんか・なんか凄かった！腹立つう！！？」

伊之助は杏寿朗から指示を受けて先頭車両方向へと走っているが杏寿朗から感じる強者の圧に凄みを感じると共にその強さへの憤りも感じ叫び出す

「伊之助!!？乗客のみんなは煉獄さん達に任せて『わかってるわあ！そして俺は見つけてるからな！既にな！全力の漆の型で！この主の急所！』・・・そうか！やっぱり前方だな？」

「そうだ前だ！とにかく前の方が気色悪いぜ！」

そう会話する炭治郎と伊之助、その会話に桜花も加わると

「私も前方車両、特に機関車両の方から濃い気配を感じるよ！あの車両は無限列車の一番重要な車両、鬼さんの急所があるのはやっぱり」
「機関車両？石炭が積まれてる車両ですね」

「そうだよ」

「分かりました！行きましよう！前へ」

炭治郎は桜花にそう言うのと桜花と共に機関車両へと駆け出していく

（総悟さんや煉獄さんが乗客達を守ってくれる、伊之助や桜花さんは敵の急所を見つけてる、善逸や禰豆子も戦ってる、俺も役に立たなければ皆を守らなければ）

そう意気込む炭治郎、そんな炭治郎の頭にそつと手を乗せる桜花

「桜花さん？」

桜花の意図がわからず思わずそう言うが桜花は炭治郎に何も言わずに優しく微笑むと炭治郎より先に車両の屋根へと登り機関部へと走り出す

「オオリヤアア」

一足先に機関車両へと辿り着いた伊之助はそう叫びながら機関室

への扉を屋根ごと斬り飛ばすと一目散に飛び降り機関室へと侵入する

「怪しいぜ怪しいぜ！特にこの辺り」

伊之助の感覚が鬼の急所の場所を見つけると、その場に桜花も駆けつけてくる

「うん、今までで一番濃い気配がこの辺り特に床の下から感じるよ、猪っちー！」

そう告げる桜花、突如侵入してきた二人に運転していた運転手は驚き二人に怒鳴り出す

「何だお前達は！でっ出ていけ！．．．いや、貴方はもしや桜花お嬢様では．．．た、大変失礼しました！お嬢様がこのような場に来るとは夢にも思わず」

運転手は途中で桜花がいた事に気付くと態度を改めて桜花に謝罪を申し入れると桜花は自分の事より鬼の討伐が優先とばかりに伊之助と共に急所の場所である床を斬りつけようと日輪刀を振りかざす

「運転手さん．．．この列車に乗る大勢の人達の命が失われるかもしれないの．．．邪魔だけはしないでね」

桜花は運転手に殺気を含めながらそう告げると殺気を当てられた運転手はまともに喋る事も出来ない程怯え小刻みに震える体を摩りながら首を縦に振ると邪魔にならないよう隅に避難しようとする

その隙に伊之助は桜花の指摘があつた床に亀裂を入れる為に日輪刀で斬り掛かろうとすると機関室から魘夢の肉塊が溢れ出し無数の腕を生やすと桜花と伊之助目掛けて掴み掛かって来る

それを機敏な動きで躲しながら斬り刻んでいく桜花、伊之助も斬り刻んではいるが手数が多さに徐々に押され始め終いには頭部を掴まれてしまう

「しまった」

焦りながらそう告げる伊之助、桜花は伊之助を助けようと動き出すがその直後、頭上から炭治郎が飛び降りてくる

――水の呼吸 陸の型 ねじれ渦――

炭治郎は陸の型を使い伊之助に絡み付く腕を纏めて斬り裂きなが

ら着地すると床の下から濃い鬼の匂いを嗅ぎとり桜花と伊之助に振り向きながら

「伊之助！桜花さん！真下だ！この真下が鬼の頸だ！」

そう告げる炭治郎、そんな炭治郎に伊之助と桜花は

「そんな事既に知ってるわあ！」

「キモい肉の塊が邪魔してるんだよ！三人揃ったし一気に決めて終わらせるよ」

そう炭治郎に言う伊之助が日輪刀を振り上げ

――獣の呼吸 式の型 斬り裂き――

二対の日輪刀を交差させながら振り下ろす伊之助、その斬撃が床に走ると大きな亀裂と共に床の下から魘夢の急所、頸の骨が現れ炭治郎はすかさず飛び上がると

――水の呼吸 捌の型 滝壺――

水の呼吸の中でも強力な威力を誇る捌の型による一撃で頸の骨を断ち斬ろうとする炭治郎だったがその一撃は頸を守ろうとする魘夢の肉塊によつて阻まれ断ち斬るには至らなかった

――術式展開 八卦・不動の陣――

炭治郎の攻撃が塞がれた直後、桜花は八卦符を周囲に展開、術式を構築すると機関室一帯の肉塊が時が止まってのように動かなくなってしまう

「桜花さん何を？」

「さすが俺の子分だ！」

不可解な現象に驚く炭治郎と上機嫌な伊之助、桜花は二人にドヤ顔になりながら

「言っただでしょ？一気に決めて終わらせるって！邪魔するなら動けなくすれば後は簡単♪さっさく♪炭治郎君♪君の刃で終わらせるよ♪」

そう告げる桜花、炭治郎は機関室に乗り込む前に桜花が自分に見せた無言の微笑みを思い出しその時の意図を理解すると

（桜花さんありがとうございます！父さん守ってください…この一撃で骨を断つ！）

炭治郎は心の中でそう呟き、呼吸を水の呼吸からヒノカミ神楽の呼吸に切り替えると

ーヒノカミ神楽 碧羅の天ー

体を回転させながら下方向に円を描くような斬撃を繰り返す炭治郎、燃え盛る炎を纏うような強力なその斬撃は列車ごと魘夢の骨を断ち斬ると

列車から魘夢の断末魔の咆哮が轟き始める

「ぎいやああああああああ!!？」

断末魔をあげる魘夢だったが列車全体が魘夢の肉体だったのが災いして桜花の術式の効力が列車全体にまで浸透し、のたうちまわる事も出来ず

列車は動力である車両を失った事で次第に速度を緩めやがて完全に動かなくなってしまう

「ガハハハ！主に勝ったぞおお！」

「断末魔が聴こえた時は列車が暴れ回るかと思いましたが何も起きませんでしたね」

「あははは、そこまで考えてなかったけど結果オーライ♪列車が脱線とかしたら後が大変なんだよ、まあ処理するのは私じゃないけど」

「乗客達が怪我したら大変ですからね」

「列車は分断されたけどね」

「すすす、すいません!!？まさか列車まで斬れるとは思ってなくて！」

「凄い一撃だったね♪」

「はい・・桜花さんありがとうございます！」

「ん？何の事？」

「鬼の頸を斬る役目を俺に譲ってくれた事です、あの時桜花さんは俺の気持ちを見抜いて『さあ？どうだろうね♪ほら♪煉獄さん達も降りてくる筈だし合流するよ♪行くよ炭治郎君、猪っちゅ♪』」

「あ、はい！桜花さんありがとうございます」

「子分が命令すんじゃないやねえ！それと俺は伊之助だ！猪っちゅって呼ぶな」

桜花達はそう会話すると車両の外へと進み杏寿朗達と合流しようと歩き出す

そんな桜花達の後ろ姿を見つめる魘夢、既に肉体の崩壊が始まり再生出来ない魘夢は

（体が崩壊する再生出来ない！負けたのか？死ぬのか？俺が？馬鹿な・・・俺は全力を出せていない！人間を一人も喰えなかった、汽車と一体化し一度に大量の人間を喰う計画が台無しだ！こんな姿になつてまで！これだけ時間と手間をかけたのに・・・アイツだ！アイツのせいだ！二百人の人質をとつていたようなものなのにそれでも押された、抑えられた、これが柱の力！アイツ、アイツも速かった術を解ききれなかったくせに！しかもあの娘鬼じゃないか何なんだ☒鬼狩りに与する鬼なんて何で無惨様に殺されないんだ・・・くそお！くそお！そもそもあの奇妙な術を使う娘が現れてからケチがつき始めた、あのガキもそうだ！俺の術を破られた、アイツらが悪い！隣の猪もだ！俺の急所を当てやがった！殺してやりたい殺してやりたい！特にあの娘！妙な術で俺の動きを抑えやがった！あれがなければあんなガキなんか斬られる事はなかったんだ！そして無惨様を裏切ったあの鬼！あれは何なんだ？何で斬られた箇所が再生しなかった☒あの柱と同等！いやそれ以上にヤバかった！あの鬼を相手にする事が間違つていた！おかげでかなりの戦力を削がれた！負けるのか、死ぬのかあ・・・ああああ悪夢だああ悪夢だああ！鬼狩りに殺されるのはいつも底辺の鬼達だ！上弦、ここ百年顔ぶれの変わらない鬼達、山ほど葬っている鬼狩りの柱さえも葬っている！上弦の壺は俺達最大の天敵黄金騎士牙狼さえも葬っている！異次元の強さなのか、あれだけ血を分け与えられても上弦には及ばなかった、ああああやり直したいやり直したい！なんとという惨めな・・・悪夢だ・・・）

何が悪かったのか？何がいけなかったのか？最早止める事も出来ない身体の崩壊に魘夢は敗因を思い出しながら遥かに格上の上弦への羨望を抱き、やがて完全に崩れ去りその生涯に幕を降した

「うむ！竈門少年も猪頭少年もよくやった！どうやら目立った負傷はないようだな！感心感心！」

「炭治郎おおお！伊之助ええええ！…ぎいやあああああ！！？列車が！列車が斬れてるよおおお！鬼☒鬼が潜んでるの☒もう絶対鬼の仕業だよねえ！もう嫌！早く帰りたい！！？」

「むー♪」

「この金髪の小僧ホントに鬼狩りか？さつきからピーピーうるせえ！」

停止した車両から降りてきた杏寿朗達はそう言いながら炭治郎達と合流すると鏖鴉を呼び鬼殺隊本部へと報告を入れようとする

「あ！煉獄さん！！？列車の処理や乗客の対応は私達の方でやるから」

「なるほど！四ノ宮はこの列車を運営している元締だったな！頼む！」

鏖鴉に報告事項を伝える杏寿朗に桜花は事後処理は自分達の方で受け持つ事を伝えると、杏寿朗も隠の範疇を超えるであろう事後処理だと理解していたので桜花の提案に賛成し任務達成の報告だけに留める

「皆の奮闘のおかげで下弦の壱の討伐と乗客達の命を守る事が出来た！」

「実にめでたい事だ！」

報告を終えた杏寿朗は任務終了の締めとして炭治郎達にそう言う

「総悟！！？」

「この場面で来るかよ」

斬吼狼の首にかけられてる魔導輪アルヴァは何かを察知して斬吼狼の名を呼ぶと斬吼狼も察知して嫌気を刺しながら呟く

それと同時に杏寿朗達から少し離れた場所に何かが落ち轟音と共に土煙が舞い上がる

突然の出来事に斬吼狼を除く一同は土煙の中に潜む何かを凝視すると放たれた気配が鬼だと察知し、そのあまりにも重厚な気配に今まで葬ってきた鬼とは格が違々と杏寿朗、桜花柱両名は即座に警戒対戦

に入る

やがて土煙がおさまるとその場から杏寿朗達を見据える鬼の姿が見えてくる、細身だが鍛え抜かれた筋肉質な体、紅梅色の頭髮に藍色の文様が全身に入ったその鬼は柱を前にして不敵な笑みを浮かべ余裕の表情をしていた

「上弦の・・・参☒」

そう呟く炭治郎、その鬼の眼に施された十二鬼月の証である刻印、右眼には上弦左眼には参と施された鬼、上弦の参 猯窩座 〃は杏寿朗達を値踏みする様に見渡すと一気に善逸へと踏み出し拳による一撃を振り下ろす

――炎の呼吸 弐の型 昇り炎天――

――牙の呼吸 漆の型 荒狗鷲――

猯窩座を警戒していた杏寿朗と桜花は猯窩座からの攻撃に反応すると両者とも下方からの斬り上げによる斬撃で猯窩座を迎撃する

杏寿朗から繰り出された斬撃は猯窩座の拳から腕を縦に斬り裂き桜花の斬撃は猯窩座の顎を捉え顔面を縦に斬り裂く

猯窩座は咄嗟に後退し距離を取ると負傷した傷を即座に完治させ腕から流れる血を舐めながら

「いい刀だ」

そう言いながら杏寿朗と桜花を見つめる

（再生が早い・・・この圧迫感と凄まじい鬼気、これが上弦）

（上弦の参：凄く重い気配だけど上弦の弐のような得体の知れない不気味さを感じない・・・煉獄さん、斬吼狼と連携すれば勝てる）

「俺は女には手を出さないんだ、邪魔だから下がれ」

猯窩座と対峙する二人はそう考えているとふいに猯窩座から桜花は邪魔だと言われ桜花は思わずしかめ面になると猯窩座に反抗し始める

「何で私が鬼さんの言う事聞かないといけないの？」

「隣の奴は柱だろう？俺はそいつと話がしたい」

反論する桜花に猯窩座もそう答えると杏寿朗が話し出す

「君と俺が何の話をする？初対面だが俺は既に君の事が嫌いだ」

「そうか、俺も弱い人間が大嫌いだ！弱者を見ると虫唾が走る」

話す事などないと言わんばかりの杏寿朗にそう答える猗窩座、両者の間に流れる重苦しい空気の中、斬吼狼は杏寿朗達とは違う方向に振り返ると魔戒剣を抜刀し剣先を突き出す

「こうして貴様とあい見えるのはいつ以来か？」

「さあな、そんな事覚えてねえよ」

「斬吼狼・・何故あの方を裏切った」

「裏切るもなにも最初からお前達の仲間じゃねえからな、それにお前に言われる筋合いはねえ！裏切り者の巖勝さんよ」

「人間とは実に脆く脆弱な生物だ、あの方は私に無限の命と人間など足元にも及ばん肉体を与えて下さった、あの方に仕えるのは当然の事」

「はっ！四百年前と同じ事言ってるじゃねえ！」

杏寿朗と猗窩座が対面する反対側では魘夢を通して状況を見ていた無惨から斬吼狼の処分を任された黒死牟が現れ斬吼狼と話をする
と腰に下げた鞘から刀を引き抜き戦闘態勢に入りだす

炭治郎達は上弦達に挟み撃ちされた形になり二人の上弦から放たれるあまりにも重苦しい気配に体が震えその場に膝をつく

「はあ・・はあ・・あれが・・上弦の壱！煌牙さん達を殺した鬼」

「ヤベエ！アイツは一番ヤベエ奴だ！俺じゃ勝てねえって事が嫌になるほどわかる」

そんな様を見ていた黒死牟、黄色い頭の善逸や猪の皮を被った伊之助は十分目立つがそんな事などどうでもいいと思う程の衝撃が黒死牟に走る

「小僧・・その耳飾りはもしや・・忌々しい！何があるかと貴様だけは生かしておけん！」

炭治郎に目を向けた黒死牟は炭治郎の耳につけた耳飾りを見て激昂し絶対に生かしてはならないと刀を握り締めると炭治郎に殺意を飛ばす

それを感じてか禰豆子は炭治郎を庇う為に炭治郎の前に立ち塞が

り黒死牟を威嚇する

「鬼でありながら鬼狩りに与するなど言語道断！あの方への侮辱に値する！貴様も葬ってやろう」

黒死牟はそう言うのと禰豆子から始末しようとして刀を振りかざす

――呀の呼吸 参の型 刹那の呀――

禰豆子を守ろうと咄嗟に動き出した斬吼狼は神速の踏み込みで敵を斬る参の型を瞬時に駆使して黒死牟の刀を食い止める

「俺がいる前でそう易々と殺せると思うなよ」

そう言いながら斬吼狼はその場で回転し勢いをつけた斬撃で黒死牟の刀を打ち払う

「上弦の壱・・煌牙とカナヲちゃんの仇・・」

そう言いながら斬吼狼と黒死牟の間合いに入り込んできた桜花は事前に仕込んでいた術式を構築し八卦符を数枚投げ飛ばす

――術式展開 牙の呼吸 陸の型改 龍穿牙・焰――

術式を展開した桜花は陸の型を繰り出すと八卦符が激しく燃え上がり巨大な火炎竜巻となつて黒死牟を飲み込む

「牙の呼吸の剣技に炎を混ぜるか・・そうか貴様が上弦の式を退けた鬼狩りか」

「斬吼狼！私も一緒にやるから！」

陸の型に飲み込まれた黒死牟の着物は竜巻と火炎により所々がボロボロになっていたが肉体は既に再生を始め何事もなかったようにそう言う

桜花は黒死牟と話す気はないのか無視して斬吼狼と共に戦うと告げる

「あれが上弦の壱・・四ノ宮を負かした十二鬼月最強の鬼」

「四ノ宮？・・ああ、牙柱の名がそんな名だったか、ソイツとも戦つてみたかった」

「君は戦う事が好きみたいだな」

「お前も好きだろう？」

「好き嫌いで戦っているわけではない！弱き者を守る為に俺は戦つて

いる！」

「弱者を守ってどうする？強者は弱者を踏みにして更に上へ目指すべきだ！」

「俺と君とでは物事の価値基準が違うようだ」

「そうか、では素晴らしい提案をしよう！お前も鬼にならないか？」

斬吼狼と桜花の二人に黒死牟を引き受けてもらおうと杏寿朗は猗窩座と対峙し猗窩座から鬼への勧誘を受ける、杏寿朗はそんな勧誘に表情を変える事なく即答で

「ならない」

そう答えるが猗窩座は更に勧誘を続ける

「見れば解るお前の強さ、その闘気練り上げられている、至高の領域に近い」

「俺は炎柱煉獄杏寿朗だ」

「俺は猗窩座、杏寿朗何故お前が至高の領域に踏み入れないのか教えてやろう！人間だからだ！死ぬからだ！鬼になろう杏寿朗そうすれば百年でも二百年でも鍛錬し続けられる強くなれる」

そう自慢げに話す猗窩座、炭治郎はそんな話を聞きながら

(総悟さんと桜花さんが戦っている上弦の壺の次に鬼無辻の匂いが強い！俺も加勢しなければ)

そう考える炭治郎、焔牙との特訓の成果と魘夢との戦いで体の負担が少なかった炭治郎はヒノカミ神楽の呼吸を使っても以前のように動かなくなる程の負担がなく杏寿朗の助けになろうとしていた

「老いる事も死ぬ事も人間という儂い生き物の美しさだ、老いるからこそ死ぬからこそ堪らなく愛おしく尊いのだ、強さというものは肉体に対してのみ使う言葉ではない、この少年達は決して弱くはない！それぞれの心に確固たる信念がある！どれだけ打ちのめされようとも決して折れる事はない心の強さがある！彼らを弱者とは言わせない！何度でも言おう！君と俺とでは価値基準が違う、俺は如何なる理由があろうとも鬼にならない」

そう力強く話す杏寿朗、炭治郎達はその言葉にグツと顔を引き締め猗窩座を睨む

「そうか」

猗窩座は杏寿朗の完全否定の言葉を聞きそう言うと自らの血鬼術を発動する

――術式展開 破壊殺・羅針――

足元に雪の結晶を模した力場を展開しながら手を突き出し徒手空拳で戦う構えを見せる猗窩座

「鬼にならないなら殺す」

そう言うや猗窩座は勢いよく杏寿朗に飛びかかる

――炎の呼吸 壱の型 不知火――

猗窩座の襲撃に合わせ杏寿朗も壱の型による踏み込みで突進、炎柱として戦ってきた杏寿朗の鍛え抜かれた体から踏み出す突進の速さを目で追う事が出来ない炭治郎達、杏寿朗と猗窩座二人の強者がぶつかり合う光景を眺めるしか出来ないでいた

「今まで殺してきた柱に炎はいなかったな、そして俺の誘いに頷く者もいなかった、何故だろうか？同じく武の道を極める者として理解しかねる、選ばれた者しか鬼にはなれないというのに！素晴らしい才能を持つ者が醜く衰えていく、俺は辛い！耐えられない！死んでくれ杏寿朗、若く強いまま」

――破壊殺・空式――

宙に飛んだ猗窩座はそう杏寿朗に言うとき空から拳を打ち出し拳圧を杏寿朗にぶつける

――炎の呼吸 肆の型 盛炎のうねり――

それを迎撃する杏寿朗は自身を中心に渦巻く炎を打ち出すように周囲を薙ぎ払い猗窩座の攻撃を相殺する

（虚空を拳で打つと攻撃がこちらまで来る、一瞬にも満たない速度、このまま距離を取って戦われると頸を斬るのは厄介だ・ならば近付くまで!!?）

そう考える杏寿朗は着地体勢に入る猗窩座に飛び込み肉薄すると両者の激しい攻防が始まる

「この素晴らしい反応速度、この素晴らしい剣技も失われていくのだ！杏寿朗!!? 悲しくはないのか!!?」

「誰もがそうだ！人間なら！当然の事だ!!？」

凄まじい斬撃と殴打の応酬を繰り広げる杏寿朗と猗窩座、両者とも一歩も引かぬ戦いに炭治郎は気圧されるが少しでも力になればと、その重い足を動かし加勢しようとする

「動くな!!？君とこの鬼とでは実力差がありすぎる！待機命令!!？」

そう大声で炭治郎に告げる杏寿朗、その怒声に炭治郎は体を強張らせ立ち止まると

「弱者に構うな杏寿朗！全力を出せ！俺に集中しろ！」

炭治郎達を気にしながら戦う杏寿朗に不満な猗窩座はそう言いながら渾身の一撃を杏寿朗に放つ

――炎の呼吸 伍の型 炎虎――

――破壊殺・乱式――

まるで燃え盛る虎が咬みつくかのように斬りつける杏寿朗に対し、重い一撃を幾重にも重ねるように乱れ打つ猗窩座、剣技と拳技両者の技がぶつかり合う衝撃で周囲に土煙が舞い上がる

「わつとと！危な！今の危なかつたよ！」

「今のを避けるか、なんとも捉えづらい娘だ！小賢しい」

「はっ！自慢の血鬼術も当たらなきや意味ねえな！」

杏寿朗と猗窩座の激戦が繰り広げられる中、桜花と斬吼狼も黒死牟から放たれる斬撃の嵐を掻い潜り激しい戦いを繰り広げていた

「牙の呼吸を使う者は皆そうだった、鬼狩りの中でも特に小賢しく鬱陶しい存在だった……だが私の前に立つ者は全て葬ってきた、先代牙柱こそ逃したが黄金騎士である四ノ宮焯牙は私の手で殺した」

「……へえ」

――牙の呼吸 伍の型 猛虎爪襲牙――

過去に渡り牙の呼吸の使い手とも戦った事のある黒死牟は過去を振り返りながらそう話し、焯牙を殺した事も話すと桜花は殺意を込めた冷たい目線で黒死牟を睨み付け伍の型を繰り出す

――月の呼吸 弍の型 珠華の弄月――

殺意を込めた桜花の初動から頸を狙っていると察した黒死牟は式の型による斬撃で桜花の斬撃を迎撃する

猛る虎が爪で引き裂くかのような鋭い風を纏った桜花の左右二連撃と斬り上げるように正面に三連撃を放つ黒死牟、鋭い風が爪となり黒死牟の放つ血鬼術の月輪を斬り裂きながら互いの剣閃がぶつかり合い激しく火花を散らす

「斬吼狼!!?」

「ああ」

――呀の呼吸 壹の型 絶空の呀――

互いの型がぶつかり合う中、桜花は斬吼狼の名を呼ぶと斬吼狼は既に型を放つ構えに入っており返事をするところ場から跳躍、体に回転をつけ斬撃の威力を増した横薙ぎで黒死牟の頸を狙う

――月の呼吸 伍の型 月魄災禍――

斬吼狼を迎撃した際に桜花に隙を与えたくない黒死牟は刀を振るう事なく無数の斬撃を生み出す伍の型を放つ事で双方を迎撃しようと型を繰り出す

――術式展開 八卦・地爆陣――

肌に突き刺さるような感覚に桜花は身の危険を感じ咄嗟の判断で術式を展開、足元に構築された陣から後方に跳躍すると術を発動させる

術の発動で構築された陣が爆発するとその爆風により桜花はより後方に飛ばされ黒死牟の斬撃から完全に逃れる

「桜花！やり過ぎだ！」

桜花の術に巻き込まれそうになった斬吼狼は影を纏うとその影に自らの体を沈め爆発から難を逃れる

「朔弥から術の構築式を学んだのは良いが使い方が大胆だな！」

「なんかヤバそうだったからね、咄嗟に発動した」

「俺も巻き添えくらいそうだったかな」

「うん、それはゴメン」

そう話す二人、その爆発の直撃を受けた黒死牟は

「細工を仕掛けるのは構わぬが私の頸を斬り落とさなければ意味はな

いぞ」

そう言いながら爆炎の中から現れた黒死牟、爆発の衝撃で上半身の着物は吹き飛び黒死牟自身も所々焼け焦げていたが瞬時に再生が始まり何事もなかったように佇む

「桜花、攻撃を躲し続けられるか？」

「それだけに集中すればイケる」

「上出来だ！」

斬吼狼と桜花はそれだけ話すと桜花は素早い身のこなしで動き回り黒死牟を攪乱する

「黒死牟！いや巖勝!!？四百年前の借りを返させてもらおう！」

そう言いながら斬吼狼は魔戒剣を頭上に掲げ召喚陣を描くと九字護身法の構えをとり鎧を召喚、瞬時に斬吼狼へと装着される

「幻影騎士 〃吼狼〃」

斬吼狼は称号の名を言うのと踏み込み黒死牟へと突進していく

紺色の狼の鎧を纏う斬吼狼、日本刀に似た魔戒剣 〃幻影剣〃を逆手に持ち替えると鎧の耳が変形し爬虫類を彷彿させるバイザーを展開、背中から巨大な翼を広げ吼狼が飛翔する

――呀の呼吸 肆の型 絶咬・散斬雨――

飛翔した吼狼は上空から黒死牟に向かって斬撃を無数に飛ばし雨のように降らせる

「小賢しい真似をする」

黒死牟はそう言いながら刀を振るい吼狼の攻撃を迎撃する

――月の呼吸 陸の型 常世孤月・無間――

月輪の刃を生み出しながら縦横無尽の斬撃を上空に放つ黒死牟、吼狼の斬撃と黒死牟の斬撃がぶつかり合い相殺される

桜花は黒死牟が吼狼に気が向いている隙に遠距離から魔導銃を六連射して攻撃を仕掛けると、吼狼の迎撃で対処が遅れた黒死牟は右腕と脇腹に炸裂弾を撃ち込まれてしまう

その炸裂弾が破裂すると黒死牟の右腕と脇腹が破裂し肉体が欠損するほどの傷を負うと

「このような傷幾らでも治るが……小賢しい娘だ！貴様から先に葬って

やろう」

そう言いながら憤怒の表情を浮かべる黒死牟、傷を再生させると七支刀のような長尺の刀に変化させ桜花に向かって型を放つ

――月の呼吸 捌の型 月龍輪尾――

その長大な刀から繰り出す巨大な斬撃を桜花に向ける黒死牟、斬撃が迫り来る桜花は

「わ――!!?」

緊張感の欠片もないような叫び声を上げながら上体を反らし紙一重で躲す桜花、本人は必死なのだが余裕で躲せますと勘違いした黒死牟は険しい表情で桜花を斬り刻む事にムキになり追撃として更に型を繰り出す

――月の呼吸 漆の型 厄鏡・月映え――

――月の呼吸 玖の型 降り月・連面――

地を這う斬撃を飛ばした黒死牟、桜花が躲す事を想定して更に斬撃を上から降らせ退路を塞ぐ

「わ――!」

またもや緊張感の欠片もない叫び声を上げながら桜花は人並外れた体の柔らかさを駆使して斬撃の僅かな合間を軟体生物のようなクネクネとした動きで掻い潜り難を逃れる

「貴様!先程から巫山戯ているのか!!?」

そう怒号をあげる黒死牟、桜花本人は攻撃密度の高い黒死牟の斬撃を必死に避けた結果珍妙な動きになっただけなのだが、黒死牟には桜花が余裕で避けれる事からわざと巫山戯て躲しているのだと勘違いする

「はっ!ニメエの前に立った奴は全て葬ってきたんじゃないのか?未だに擦り傷一つ負わせてねえな!十二鬼月最強さんよ」

上空からそう言うって黒死牟を挑発する吼狼、黒死牟程の猛者ならば見え透いた挑発だと思にも返さないのだが桜花の振る舞いに冷静さを無くし始めた黒死牟には効果覲面らしく血管が浮かび上がる程の憤怒の形相で吼狼を睨みつけると

――月の呼吸 拾陸の型 月虹・片割れ月――

上空から地面に向けて三日月のような斬撃を複数振り下ろす黒死牟、吼狼は即座に回避しながら黒死牟に向かって急転直下、真上から黒死牟に幻影剣を突き刺そうとするが黒死牟はそれを後退して躲す。吼狼はそのまま地面へと落下するが地に影を作り、その影に潜り込んで姿を消すとその後、黒死牟の背後に影を作りそこから幻影剣を黒死牟の胸部を貫通するように突き立てる。

「貴様!!?」

「はっ！冷静さを失って対処を誤ったな！」

怒号をあげる黒死牟にそう言いながら斬吼狼は吼狼の鎧を解除する、飛翔形態に変化した事で制限時間が20秒減少し制限時間が迫っていた事から奇襲による戦法で黒死牟との戦いに終止符を打とうとしていた。

――呀の呼吸 捌の型 天狼滅牙――

――月の呼吸 拾肆の型 兇変・天満織月――

鋭く斬り裂く風を纏い舞うような運びで高速の八連撃を繰り出す型を幻影剣を突き立てたまま繰り出す斬吼狼、流石に不味いと判断した黒死牟は突き刺さる幻影剣に身を斬られようとも構いなくその場で反転し拾肆の型による反撃を試みる。

「チッ！流石になり振り構ってられないか」

「貴様が相手では私も手を焼く、致し方なし」

胴体の一部と左腕を斬り落とされながら黒死牟は長大な刀から繰り出す幾重にも連なる巨大な斬撃を斬吼狼の至近距離から放つ。

――呀の呼吸 拾の型 星薙――

至近距離から放たれる斬撃を回避不可能と判断した斬吼狼は捌の型の勢いそのまま拾の型による斬撃で黒死牟の斬撃を迎撃する。

斬吼狼の放った拾の型、牙の呼吸拾の型の上位互換ともいえるその型は夜空に輝く星々を薙ぎ払うかのような巨大かつ無数の斬撃を瞬時に放ち

周囲一帯を微塵に斬り裂く

双方似たような斬撃がぶつかり合い衝撃で周囲の大気が轟音と共に揺れ動き土煙を巻き上げる

上弦の鬼と戦う斬吼狼と桜花、杏寿朗の戦いに手も足も出せず見守る事しか出来ないでいた炭治郎達は双方から巻き起こる激しい衝撃に不安を隠せず悲壮な表情で戦いの行方を見つめていた

「腕を上げたな斬吼狼、昔のお前ならここで終わっていた」

「そいつはどうも、お前に褒められても嬉しくないけどな」

土煙がなくなり両者の姿が見えると双方共に全身から夥しい鮮血を流しながら睨みあっていた

「斬吼狼、お前程の鬼を失うのは惜しい！再びあの方に忠誠を誓え私も口添えをしてやろう」

「あ？何言ってるんだお前、魔戒騎士舐めんな！」

「鬼同士の戦いなど不毛だと思わぬか？」

「俺は鬼だが鬼としてじゃなく守りし者として戦っている！それに魔戒剣ならお前を殺せる」

「そうか・・・だがお前には私の頸は斬れん」

「俺だけじゃねよ！俺と牙狼がお前を斬るんだよ！」

「おかしな事を言う、牙狼である四ノ宮煌牙は私が葬った」

「はっ！そうかい！そいつは良かったな」

そう話す斬吼狼と黒死牟、その会話に桜花は

「斬吼狼！どうゆう事？」

「桜花・黒死牟は俺に任せてお前は炎柱の援護に行ってやれ、当代のお館様からアレを預かってるんだろ？」

「・・・アレが必要な時が来るんだね！分かった!!？」

斬吼狼は桜花にそう話すと桜花は斬吼狼の意図を察して杏寿朗の元に走り出す

「私が易々と見逃すと思うか小娘」

斬吼狼の幻影剣による斬撃を浴びていた黒死牟は未だ癒えぬ傷を負ったまま桜花にそう言う

――月の呼吸 壺の型 闇月・宵の宮――

桜花を見逃す気はない黒死牟は桜花の背後に迫りながら刀を横薙

ぎに一閃する

一方桜花は黒死牟が大人しく見逃す筈がないと考え走り出す直前に術式を構築し、型を放てる準備をしていた

――術式展開 八卦・鏡花水月の陣――

――術式展開 牙の呼吸 拾の型改 星牙一天・流星雨――

背後から桜花を斬り裂く黒死牟だったがその桜花はまるで鏡のように碎けパリンと音を立てて消え去る

その一瞬の出来事に黒死牟は目を見開き驚くが瞬時に立て直し警戒するも型を放つ動作に入っていた桜花が黒死牟の背後、上空から既に日輪刀を振り下ろそうとしていた

意図せず背後を取られた黒死牟は桜花の気配を察知し振り返るが型による迎撃は間に合わないと判断し咄嗟に後退し攻撃後の隙を狙っていた

桜花が繰り出す拾の型改、上空から繰り出した無数の斬撃と展開した術式によって構築された炎が融合した流星雨のような炎の斬撃が黒死牟へと降り注ぐ

後退したとはいえ広範囲に及ぶその斬撃の射程圏内から完全に逃げきれなかった黒死牟は斬撃を浴びながら炎に包まれる

「んじゃ！後は任せたよ斬吼狼」

着地した桜花はこの隙にさっさと離れようと黒死牟の様子を伺う事なく走り出し斬吼狼にそう告げてその場を去っていく

その頃上弦の参猗窩座との攻防を繰り返していた杏寿朗は

「死ぬな杏寿朗」

互いの技と技がぶつかり合い激しい攻防の末、猗窩座は杏寿朗にそう告げる

その杏寿朗本人は、先程の攻防で猗窩座から手痛い攻撃を貰い左眼の損傷と肋骨と内臓を負傷し息を切らせながら立ち尽くしていた

(煉獄さん・煉獄さん・煉獄さん)

(何でだよ・あの人は柱だろ・強いんだろ・上弦の鬼はそれ以上に強いのかよ)

(隙がねえ．．入れねえ．．動きの速さについていけてねえ．．あの二人の周囲は異次元だ、間合いに入れれば死しかないので肌で感じる助太刀に入った所で足手まといでしかないとわかるから動けねえ)

杏寿郎の後ろではその戦いの行く末を見守っていた炭治郎達が悲痛の表情を浮かべながら呆然としていた

「生身を削る思いで戦ったとしても全て無駄なんだよ杏寿郎、お前が俺に喰らわせた素晴らしい斬撃も既に完治してしまった。だがお前はどうか、潰れた左眼、砕けた肋骨、傷付いた内臓、もう取り返しがつかない

鬼であれば瞬きする間に治る、そんなもの鬼ならばかすり傷だ、どう足掻いても人間では鬼に勝てない」

そう言いながら猗窩座は杏寿郎に無情な現実を突き付ける

(手も動く足も動く体も動く！だけど動けない!!？動けば煉獄さんの負担が増えてしまう！助けに入りたいのに)

体は健常、戦えるのに戦えない助け入りしたいのに入れないそんなもどかしさを噛み締める炭治郎、悔しさに体を震わせると

「むくむく」

「禰豆子．．」

震える炭治郎の肩にそつと手を添え杏寿郎を見つめる禰豆子、悔しい気持ちは同じだとそう伝わる禰豆子の行動に炭治郎は

(煌牙さん．．)

自分達を助けてくれた信じてくれた、禰豆子と一緒にこれから証明すると誓った、そんな思いを馳せながら炭治郎は立ち上がり杏寿郎に再び目を向ける

「むむ」

そんな時禰豆子は何かの気配を察知して森の方へと一目散に駆け出していく

「禰豆子どうしたんだ禰豆子！」

禰豆子の突然の行動に炭治郎はハッと驚き禰豆子に呼びかけるが禰豆子は炭治郎の呼びかけに反応する事なく森の中へと消えていく

炭治郎は禰豆子を追いかけようとしていたがその時、杏寿郎から迸

る熱気を感じ引き寄せられるように魅入ってしまった

その杏寿朗は日輪刀を両手で握り肩に担ぐような構えで闘志を漲らせ

「俺は俺の責務を全うする！ここに居る者は誰も死なせない!!？」

そう力強く宣言し、渾身の型を放とうとする杏寿朗

(一瞬で多くの面積をえぐり斬る、炎の呼吸奥義！)

杏寿朗は炎の呼吸の奥義を繰り出すべく己の闘気を高め感覚を研ぎ澄ます

「素晴らしい闘気だ・・・それ程の傷を負いながらその気迫その精神力 一部の隙もない構え！やはりお前は鬼になれ杏寿朗!!？俺と永遠に戦い続けよう！」

杏寿朗の高まる闘気に武を志ざす者として歓喜に打ち震える猗窩座は杏寿朗にそう言いながら自身の技をぶつけようと突進してくる

――術式展開 破壊殺・滅式――

――炎の呼吸 玖の型 煉獄――

自身の力を最大限まで溜め込み通過した地面が抉れる程の力強い突進をしながら渾身の一撃を叩き込む杏寿朗と一撃に全てを込めた猗窩座の強力な技がぶつかり合い激しい土煙が再び巻き起こる

「煉獄さーん!!？」

そう大声で叫びながら戻って来た桜花、あまりにも激しい激突に桜花は不安げな表情で戦況を見つめ炭治郎達の隣に立つ

(止まった☒土煙で見えない・・・煉獄さん煉獄さん)

杏寿朗を心配する炭治郎、土煙で状況が分からなかったがやがて土煙が晴れ杏寿朗の姿が見えてくると

(見え・・・ああ・・・ああ!!？)

炭治郎達が見たその光景はあまりにも衝撃的な光景だった

「むくむくむく」

「そうだな、今のは危なかったな。でも煉獄さんは無事に・・・煉獄さん・・・あんた・・・無事じゃねえ!!？え？何？あんたその傷で玖の型使ったの☒」

「お兄、炎柱様だよ？」

「あの人はそんな人だった・・・」

「兄さんと同じだね」

「ハツキリと言わせてもらう、俺と煉獄さんを一緒にするな！俺はあんなに暑苦しくない！」

「そうですねよ！焔牙様は熱意のある方です！凄く熱い想いを心に秘めた暑苦しい方です」

「零余子！それ褒めてねえだろ！暑苦しいって言っちゃってるよ！」

「お前に褒める所なんてないだろう？」

「愈史郎君？珠世さんにあの事言っちゃうよ？ねえ言っちゃうよ？」

「焔牙！お前は凄いい！お前は偉い！お前は凄いい！」

「ふっふっ♪焔牙ちゃんは凄いいんだから♪ふっふっ♪ふっふっ♪」
そんな会話を繰り返り広げる焔牙達、杏寿朗と猗窩座両者が激しく衝突する直前、一瞬で両者の間に割り込んだ焔牙は猗窩座の突き出した腕を両断し杏寿朗の援護をしていた

そんな焔牙を追って来たカナヲ達、カナヲは炭治郎達を見つけると手を小さく振りながらニツコリと笑いかける

一方杏寿朗の一撃は猗窩座の左半身を抉り斬り猗窩座はその身に深い裂傷を負うと即座にその場を後退し距離を取ると突如現れた焔牙達を凝視する

「久しいな！四ノ宮！お前が生きていると信じていた！実にめでたい」

「いや・・・まあ色々あったけどさ・・・うん・・・ホント色々あった・・・とりあえずこうして今は生きてる・・・煉獄さんは無事じゃないからめでたくはないぞ！あとは俺に任せて煉獄さんは治療な！」

「焔牙ちゃん！煉獄ちゃんの治療は私達に任せて、愈史郎ちゃん！零余子ちゃん！気合い入れて治すよ♪」

「四ノ宮・・・俺は柱としての責務を全うする！引くわけにはいかない」
「・・・煉獄さん・・・アンタは何のために戦っているんだ？自分の命と引き換えに鬼を討つ為か？違うよな、アンタ言ってるだろ！強者として生まれたのなら弱き者を助け守るのが使命だと！母親と約束したんだろ！だったら生きろよ！生きて約束を果たせよ！自分の命と引き

換えに助けられてもな、残された方は喜ばないんだよ！煉獄さん．．．
アンタのその覚悟は俺が引き継ぐ!!？俺は．．．俺は魔戒騎士四ノ宮
煌牙！黄金騎士牙狼の称号を受け継ぐ者!!？」

杏寿郎は煌牙との再会を喜びながら猗窩座を睨み柱として責務を
全うすると煌牙に告げると煌牙は杏寿郎を死なせたくない思いを爆
発させながら杏寿郎の覚悟を引き継ぐと宣言する

「煉獄さん．．俺は一度牙狼の称号を失ったんだ．．．牙狼の称号を得
て俺は強くなつたと皆を守れると．．．だけどホントに守っていたのは
自分の心だった．．俺は弱い！そう思う自責の念から逃れる為に俺は
戦っていた．．誰かを守る事で昔の自分とは違うと．．．その結果俺
の心に闇が生まれ俺は守りし者としての使命を見失った．．牙狼が俺
を見限るのも当然だよな！そんな奴誰が認めるんだ？だけど．．俺は
一人じゃなかった．．カナヲが．．妹がずっとそばにいてくれた．．
俺を支えてくれたんだ！カナヲだけじゃない！瑠花！朔弥！総悟！
零余子！珠世さん！愈史郎！皆が俺を支えてくれた！助けてくれた
！そしてザルバ!!？」

自分の命と引き換えに俺を助けてくれた！死を迎えるだけだった
俺に自分の命を与えて俺を．．．」

「四ノ宮．．．そうか」

「俺は覚悟が足りなかった．．本当の意味で牙狼を受け継ぐ覚悟が！俺
はこの想いの力を未来永劫へと繋げていく！煉獄さん！煉獄さんの
その想い、俺に託してくれないか？」

「．．．四ノ宮．．．帰ったらお前の作った美味しい飯が食いたい!!？」
「さつまいもご飯とさつまいもの味噌汁、あとは鯛の塩焼きだろ？腹
いっぱい食わせてやるよ」

「うむ！それは楽しみだ！」

煌牙の想い、煌牙の覚悟を聞いた杏寿郎は煌牙に全てを託すと朔弥
達の元で怪我の治療を受ける

「煌牙ー!!？」

「桜花．．ゴメン！心配かけたな」

「信じてたから．．煌牙が生きてるって．．私信じてたから」

号泣しながら焠牙に飛び付く桜花、キツく抱きしめる桜花をあやし
ながら焠牙は心配かけた事を謝り桜花は涙を拭いながら笑いだし焠
牙を信じていたと話す

「焠牙！お館様がコレを焠牙につて」

そう言いながら桜花は魔法衣から一振りの日輪刀と純白に焠く口
ングコートを焠牙に手渡す

「桜花、これつて」

「うん♪初代牙柱暁大牙の日輪刀とロングコートだよ！白いロング
コートは歴代の黄金騎士達が纏ったロングコートなんだつて♪焠牙
もこれで正真正銘誰もが認める黄金騎士だね♪」

「誰もが認める黄金騎士か・・・その名に恥じない騎士にならないとな」

「うん♪焠牙そのコート着せてあげるよ♪」

「桜花悪いな」

そう話すと桜花は白いロングコートを焠牙から受け取り焠牙が着
れるように準備すると焠牙は袖に手を伸ばし白いロングコートを羽
織つていく

「うん♪焠牙カッコいいよ」

「おうー！」

白いロングコートを羽織った焠牙を見て桜花は微笑みながら感想
を言う　と焠牙は一言返事を返し猗窩座の元に歩いていく

「待つててくれたんだな！色々と話し込んで悪かった」

「黄金騎士牙狼、生きていてくれて俺は嬉しい！俺はお前とも戦つて
みたかった」

「そうか・・・俺は四ノ宮焠牙！お前の名は？」

「猗窩座」

「猗窩座か」

「焠牙、お前も鬼にならないか？」

「鬼か・・・」

「そうだ！鬼になれば傷など一瞬で治る、死ぬ事もない！お前は永遠
に黄金騎士としてその力を振るえるんだ！どうだ、素晴らしい提案だ
ろう

「お前も鬼になって俺と永遠に戦い続けよう」

「そうだな・以前の俺ならちよつと悩んだかもな」

「今は違うのか？」

「ああ」

「虚しくはないのか？お前達人間は永遠の存在じゃないんだ！お前がこれまでに守って来た人間もお前の仲間もいずれ死ぬ、鬼こそが永遠の存在なんだ」

「確かに人間はいずれ死ぬ、俺もそうだ！永遠の存在じゃない！だがな遙か昔から今に至るまで沢山の想いを俺は背負っている！その想いの力を俺は未来へと繋げていく！この想いこそが永遠だ！」

「・・・鬼は永遠の存在じゃないと言いたいのか？」

「・・・ああ！」

「そうか・・・ではお前を殺してその永遠とやらを終わらせてやろう！」

「猗窩座・・・お前の陰我！俺が断ち斬る!!？」

焯牙と猗窩座、両者の思想がぶつかり合い反目すると猗窩座は戦闘態勢へと入り焯牙も大牙の日輪刀を抜刀して互いに睨み合う

「焯牙さんが・・・焯牙さんが生きてた！善逸！伊之助！焯牙さんが生きてた!!？」

「本物だよね☒幽霊なんかじゃないよね☒」

「・・・あれは本当にオーガのヤローなのか？前みたいに肌に突き刺さるような気配がまるで感じられねえ！ありや牙を抜かれた狼だぜ」

「そういえば匂いが以前と違う、前は重くのしかかるような匂いだっただのに今はまるで陽の光に包まれるような暖かい匂いだ」

「音も前とは違う音だ！前は鈍い金属がぶつかり合うような音だったけど今は純度の高い金属がぶつかり合うような澄んだ音がする」

猗窩座と対峙する焯牙を見ていた炭治郎達、喜びながらももうそう話すとかナヲが炭治郎達の元に駆けつけてくる

「炭治郎！善逸！伊之助！」

「カナヲく!!？良かった！無事で良かった！」

「むーむー♪」

「彌豆子ちゃーん！急に走り出すから心配してたんだよー」

「彌豆子、もしかして煌牙さんの気配を感じて走り出したのか？」

「むーむー♪」コクコク

「ぬああにいいいいいい☒彌豆子ちゃんと煌牙さんの間に何か芽生えてるのおお!!?いいいいいやああああ!!?」

「煌牙さんが彌豆子と結婚したら煌牙さんは俺の弟に：兄ちゃんの方が嬉しいなあ」

「ちよつと!!?ちよつと待つてえええ！え？何？炭治郎は俺と彌豆子ちゃんの仲を『……』何か喋れよおお!!?俺と彌豆子ちゃんの仲を認めないなんてなんて炭治郎だ!!?」

「善逸さん相変わらず煩いです！」

「溜花ー!!?」

「お姉!!?」

「溜花ー！良かった良かったよー!!?」

「うん、お姉にも心配かけちゃったね・お姉ゴメンね」

「うん♪罰としてお姉ちゃんに甘えなさい♪」

「うん」

「ねえ溜花？上弦の式からどうやって助かったの？」

「……総悟に裸にされた……」

「……は?」

「裸にされて影に沈まされた」

「……よし！あの六つ目共々葬つてあげるよ♪桜花ちゃん必殺の型で」

そんな会話が続く中、その光景を見ていた杏寿朗は

「四ノ宮がいるだけで場の雰囲気が変わったな！張り詰めていた緊張から解き放たれたような、だが油断は禁物だ」

「そうね、とりあえずアンタはその傷を治しなさい！ほら、この実を食べて」

「君は下弦の肆か・何故君が俺達の手助けをする」

「償い・・・人の命を奪って来た私が命乞いなんて虫の良い話だけどね！
今まで奪って来た命の数以上に私は人の命を守り、私は鬼じゃなく
人として死にたい！私を信じて助けてくれた煌牙様と共に歩いて行
きたいから・・・」

「なるほど！君は四ノ宮に恋慕の情があるのか！甘露寺がいたら騒ぎ
出しそうだし！」

「ちつ違っ！そうじゃなくて!!?その・・・あーもう!!?さっさと食べ
ろ！」

杏寿朗は傷の介抱に付き添っていた零余子にそう話すと零余子は
手に持っていた実を杏寿朗の口に放り込み無理矢理咀嚼させる

「むっ☒これはむかごか、塩加減が良い塩梅だ！」

「私の血鬼術植物を操るの、そのむかごは栄養素を凝縮させてるから
！傷を治すのも体力を回復させるにもまずは栄養を取らないと」

「・・・なるほど！四ノ宮が君を信じたように俺も君を信じてみよう！」

杏寿朗は零余子が本気で杏寿朗を心配し、償おうとしている事を理
解し

零余子にそう言うのと零余子は驚いた顔をした後に杏寿朗を見て優
しく微笑んだ

「ふっふっ♪さあ煉獄ちゃん、治療を始めよう♪」

そうご機嫌な口調で朔弥は杏寿朗に擦り寄ると顔を至近距離まで
近づけ杏寿朗の潰れた左眼を両手で優しく包み込むと朔弥の両手が
淡く光り輝き暫くしてそつと手を離す

「煉獄ちゃんどうかな？」

「見える!!?潰れた左眼が回復するとは！よもやよもやだ」

「朔弥さん何をしたんだ」

「ふふふっ♪愈史郎ちゃん♪視力の交換♪私の視力を煉獄ちゃんに
譲ったの」

「は?それじゃあ朔弥さんの視力は」

「私鬼だよ?失った視力も元通り♪これぞまさしくWin—Winの
関係だね♪」

「・・・煌牙の治療を見た後じゃもう驚かないからな」

「利用出来る物は何でも利用する！まさか黒死牟も自分の腕が煌牙ちゃんの治療に役立ったとは夢にも思わないだろうね〜♪」

「珠世様の研究も飛躍的に進むから反対しなかったが、失敗してたら煌牙は死んでたんだぞ」

「元老院付き魔戒法師の実力を舐めちゃいけませんな〜♪」

杏寿朗の左眼を回復させた朔弥は愈史郎とそんな話をしていると

「煌牙様の話は後からすれば良いでしょ！先に治療を終わらせないと」

杏寿朗そつちのけで話し込んでいた朔弥と愈史郎に痺れを切らした零余子がそう注意すると

「あっ！煉獄ちゃんゴメンね〜！とりあえずコレを飲んで」

そう言いながら朔弥は慌てて鞆から取り出した小瓶を手にし杏寿朗へと手渡す

「朔弥さんそれ・煌牙を治した鬼回復増進剤スパルタンXじゃないだろうな」

「違うよー！ホラ、前に炭治郎ちゃんを治した時に渡した薬、クレオソート丸EXだよ」

「クレオソート丸ってただの胃腸薬だろー!!?」

「・・・飲みやすく！飲みやすく改良したから!!?」

「改良しても効果は変わらないだろ！炭治郎が飲んだ時もあの薬は効果なかったのか?」

「・・・ベストマッチって言ったかったの・・・術だけで回復は出来たの」

「まさか・・・煌牙に飲ませたアレも・・・」

「いや！アレはマジ！術だけで回復なんて間に合う範囲じゃなかったから！私も必死だったでしょ?」

「・・・まさかいきなり人工呼吸しようとするあたり必死だったな」

「私もあの時は焦ってたんだよ、まさかカナヲちゃんが本当にやるとは思ってなかったけど」

「それ煌牙は知っているのか?」

「知らないし絶対教えない方が良いよ!」

「アンタ達!!?」

再び話し込んで杏寿朗の治療をすつぽかす朔弥と愈史郎、零余子から再度注意をされようやく杏寿朗の治療が開始されるのだった
ちなみにクレオソート丸EXを杏寿朗は飲まなかった

時を同じくして斬吼狼と黒死牟は

「・・・馬鹿な！何故奴が生きている☒奴は私があの時！」

「あの時？はっ！テメーの斬撃が当たる直前に俺の作り出した影に沈めたとしたら？」

「だとしても奴は既に虫の息、死ぬのは時間の問題だった筈だ」

「いやゝ鬼の体って便利だよなー！上手く利用すれば死にかけの体も治るなんてな」

「斬吼狼・・・お前の血を分けたのか」

「まさか！俺より鬼無辻の血が濃い奴がいるだろ？」

「・・・!!？私だと言うのか」

「お前、焠牙に右腕斬り落とされただろ？去り際にアレ貰ったおいてやったぞ？」

「斬吼狼！貴様!!？」

「まさかテメーが殺しかけた相手がテメーの体で完治するとはな！随分と間拔けな話だ！なあ？そう思うだろ？黒死牟さん」

「斬吼狼ー!!？」

桜花から受けた傷も癒えた黒死牟は斬吼狼と対峙しながら猗窩座達の戦況に目を向けると殺した筈の焠牙が生きている事に気付き驚く

焠牙の生存に動揺を隠せない黒死牟、斬吼狼は生存の真相を黒死牟に言いながら挑発をすると黒死牟は今まで以上に激怒して斬吼狼に斬りかかろうとする

「怒りで周りが見えなくなると足元すくわれるぞ」

そう言いながら斬吼狼は黒死牟の足元に大きな影を生み出し黒死牟はその影に呑み込まれていく

「斬吼狼!!？許さぬ！貴様と黄金騎士は必ず私の手で葬ってやる！」

「そうか・・・一つだけ言っておくが今の焠牙は前より強いぞ、舐めて

かかるとその頸斬り飛ばされるかもな」

斬吼狼の影に呑み込まれていく黒死牟はそう言いながら斬吼狼を睨みつけると斬吼狼も黒死牟に言い返し、影に消えてゆく黒死牟を見送る

「出口は無限城だ、無惨に言い訳でも考えるんだな」

そう言いながら斬吼狼は煌牙達のいる場へと歩き出していった

「カナヲ・・煌牙さんは上弦の参に勝てるのか？」

「どうして？」

「上弦の鬼は俺達が戦ってきた鬼とは比べ物にならない強さだった！煉獄さんでさえ致命傷は与えられてないんだ！」

「そう・・炭治郎、兄さんを信じてあげて・・炭治郎の信じる心が兄さんの力になる！心はどこまでも強くなれる、私達の想いが兄さんと共にある限り兄さんは誰にも負けない!!？」

猗窩座と対峙する煌牙を見つめながら炭治郎はカナヲに不安からくる疑問をぶつけるが、カナヲはなんの迷いもなく煌牙を信じ、信じる心が力になると炭治郎に告げると煌牙は誰にも負けないと力強く宣言する

カナヲの迷いもない発言に炭治郎も煌牙を信じて戦況を見守る

（何なんだコイツは、闘気のカケラも見当たらない！煌牙は柱じゃなかったのか？黄金騎士じゃなかったのか？これではただの虫ケラ同然、俺は黄金騎士と滾る戦いがしたかったんだが・・さっさとコイツを殺してまた杏寿朗と戦おう！）

煌牙と対峙する猗窩座は煌牙から闘気を全く感じない事で煌牙への興味を無くし再び杏寿朗と戦おうと煌牙を殺しにかかる

――破壊殺・乱式――

煌牙に向けて幾重にも重なる乱れ打ちを連発し始末しようとする猗窩座

（大牙さん・・ありがとう！）

心の中で先代牙狼暁大牙に感謝の気持ちを込めて礼を言うとう刀を

鞘に納め深く息を吸い込む

その呼吸音がゴオオオオと音を立て煌牙は居合斬りの構えと取る
と左親指で鯉口を開き

――輝刃の呼吸 瞬火終刀――

それは一瞬の瞬き、日輪刀を納刀する音だけを認識出来た猗窩座、
その音を認識した瞬間、猗窩座の胴体は突き出した両腕と共に横一閃
に両断されていた

時は遡り二週間前

「斬吼狼ちゃん！ここって」

「懐かしいだろ、四百年前俺達が拠点にしていた暁邸！今は俺の根城として使ってる、朔弥！お前の根城とこの屋敷を繋げ！」

「いいけど急にどうしたの？」

「煌牙はもう死にかけの状態だ！朔弥頼む！煌牙の命を繋いでくれ」

「煌牙ちゃん×煌牙ちゃんがいるの！ねえ！斬吼狼ちゃん！！？」

「俺の影の中にな！時間がない！朔弥急げ！」

「わかったよ」

斬吼狼に引き連れられた朔弥と零余子は影を通じて斬吼狼の拠点である

暁邸、かつて暁大牙達が住んでいた屋敷へと足を踏み入れると斬吼狼から煌牙の助命を託されると朔弥は慌てて自分の隠れ家と暁邸を術式で繋ぎゲートを構築していく

「珠世ちゃん！！？愈史郎ちゃん！！？煌牙ちゃんを助けて！！？」

ゲートから自分の隠れ家へと足を踏み入れた朔弥は共に研究をしている珠世と愈史郎の二人にも協力してもらおうと焦る気持ちを隠す事なく叫び、その声が全ての部屋に響き渡ると奥の研究室から珠世が出てくる

その珠世は朔弥の慌てた様子にただ事ではないと察し可能な限りの医療器具と薬品を早急に用意するのだった

「四ノ宮さん程の人が危険な状態になるという事は、相手は十二鬼月それも上弦の鬼というわけですね」

「黒死牟！煌牙ちゃんは上弦の壱黒死牟と戦って：どんな状態かわからないけど今にも死にそうだって斬吼狼ちゃんが」

「四ノ宮さんをこちらに！事態は一刻を争います」

焦る朔弥とは対照に珠世は落ち着きを払った態度で煌牙を連れてくるように言い渡すとゲートを超えてきた斬吼狼が現れ影の中から煌牙とカナヲを引きつり出すと煌牙を診察台の上に運び込む

診察台の上で眠る煌牙、既に心肺は停止、脈も呼吸も止まっている煌牙の体は全身に深い裂傷を負っていて誰が見ても手遅れだと思ふ程だった

「煌牙ちゃん!!? 煌牙ちゃん!!? しっかりして! 煌牙ちゃん!!?」

涙でくしゃくしゃになりながらも必死に呼びかける朔弥、焦るあまりまともな思考も出来ない状態の朔弥はどうにかして煌牙の命を繋ごうと人工呼吸や心臓マッサージをする動作に入ると

「朔弥! 落ち着け!!? お前は元老院付きの魔戒法師だろ!!? お前にか出来ない事がある筈だ!」

「朔弥さん! 四ノ宮さんの細胞組織はまだ完全に死滅していません、私が絶対に繋ぎますから! お願いします! 貴方は貴方の為すべき事を!」

「・・・分かった!!? 斬吼狼ちゃん! 手伝って!!?」

「任せておけ」

そう話すと朔弥は涙を拭い、自分の研究室に斬吼狼と共に入っていく

「愈史郎、四ノ宮さんの衣服を剥いで止血を」

「はい!」

「私も手伝うわ!」

珠世は愈史郎にそう指示を出すと愈史郎は止血に取り掛かろうとするが

その様子を不安げに見ていた零余子は煌牙を救う為に何か出来る事はないかと名乗り出ると

「下弦の肆☒どうして十二鬼月がここに☒」

「私はもう十二鬼月じゃないわ! 信じて貰えなくても構わない! でも今は煌牙様を救う為に私にも出来る事をやるだけよ!」

ほぼ絶望的な煌牙の容体に気を配っていた珠世は、零余子の気配を察知する余裕もなく、零余子が声をかけるまで十二鬼月がこの場にいると思っただけだったので驚くが、零余子は自分の事より煌牙が優先とばかりに

止血剤を煌牙の傷口に塗りながらそう淡々と話す

「鬼無辻を裏切るつもり？」

「もう裏切り者になってるわ、仮にそうじゃなくてもあの御方：いいえ！鬼無辻無惨が許すはずないわ」

「・・・どうやら本気みたいね、鬼無辻を裏切る覚悟がなければその名は口にしないもの」

「呪い・・・あ！私名前を口にして！」

「大丈夫よ、この場所は空間を遮断して作られた場所、鬼無辻は貴方の居場所を特定出来ないし呪いが発動する事もないわ」

「・・・死ぬかと思っただわ」

「・・・貴方名前はなんというのかしら」

「零余子よ」

「零余子さん、これから四ノ宮さんの延命措置にはいります！手伝ってくださいませね」

「勿論よ」

そう話す珠世と零余子、鬼無辻の名を呼んだ事で零余子を信用しようと考えた珠世は煌牙の措置をしながら零余子にも助力を要請するのだった

「斬吼狼ちゃんどうしよう！術式と回復増進剤を併用しても間に合わない！煌牙ちゃんの命が本当に消えちゃう！」

「朔弥：黒死牟の腕がある、上弦の壺の血と細胞を使えばなんとかなるかもしれないぞ」

「なる！黒死牟の血と細胞があるなら私が絶対何とかする!!？」

「問題は煌牙だな、血が変質しないから鬼にはならないと思うが無惨の血が最も濃い黒死牟の血と細胞だ、全く影響がないわけじゃない」

「それでもやらないと煌牙ちゃんは死ぬ！」

「・・・だな・・・朔弥頼む」

「うん」

煌牙の命を救う為黒死牟の腕を差し出した斬吼狼、先程まで弱々しかった朔弥の目はその提案で強く輝き、早々に煌牙の治療薬の精製に

取り掛かるのだった

その頃煌牙の延命措置をしていた珠世達、その隣で気を失い寝かされていたカナヲが目を覚ますと辺りを見渡し煌牙に目を向けると珠世達に目もくれず煌牙の傍に駆け寄る

「兄さん!!? 兄さん!!? 嫌だ! 死んじや嫌だよ!!? 兄さん!!?」

そう叫びながら泣き出すカナヲ、煌牙に寄り添い体に触れると

「..... 兄さん!!?」

カナヲは煌牙の心拍や脈が無い事を悟ると迷う事なく人口呼吸による救命措置を施し、必死に煌牙を助けようとする

「アンタ、何を☒」

カナヲの突然の行動に驚く零余子、カナヲにそう言うのとカナヲは煌牙の救命措置を施しながら零余子に

「何って救命措置、やり方は昔教わった事あるし、兄さんは絶対に死なせない!」

そう零余子に返すカナヲに珠世は険しい表情で

「四ノ宮さん程ではないにしろ貴方も浅くはない傷を負ってるのよ! 無茶をしたら貴方も危険よ」

そうカナヲに告げる珠世、命の灯火が消え掛かる煌牙に手一杯でカナヲの治療にまで手が回らなかった為、カナヲの肩からは大量の血が流れ出していた

「私の事はいいの!!? 兄さんが助かるなら私の命が消えてもいい! もう兄さんがいなくなるのは嫌なの!!?」

そう力強く叫ぶカナヲ、その迫真の表情に零余子は何も言う事が出来ずにいたが医者である珠世はカナヲの発言が許せなくなりカナヲを叱り出す

「私は鬼ですが医者でもありません、貴方がお兄さんを助けたい気持ちには痛い程分かりますが貴方の命と引き換えに四ノ宮さんが助かっても四ノ宮さんは喜びますか? 貴方は四ノ宮さんに貴方を死なせたという枷を背負って生きて欲しいと願っているのですか? もう一度言いますが私は医者です! 四ノ宮さんも貴方も死なせたりしません!」

怒ったとはいえカナヲの助けたいと思う気持ちを尊重し、諭すように叱る珠世、それを聞いたカナヲは

「でも．．でも！兄さんが．．お願い！兄さんを助けて」

祈るように泣き崩れ珠世に懇願するカナヲ、珠世は処置を施しながら頷くと煌牙の指にはめているザルバが喋り出した

「お涙頂戴の兄妹愛ってやつか？俺様にはよくわからんが嬢ちゃんの覚悟が本気だつて事は俺様でもわかる．．嬢ちゃん．．いやカナヲ！煌牙を支えてやれ！他の誰よりもお前がコイツを支えるんだ！お前さんなら信用出来る！」

「うん」

ザルバにそう言われてカナヲは頷きながら一言返すと、ザルバは眼を光らせ始める

「ザルバ何々何々」

「俺様と煌牙の契約は知ってるな？」

「うん」

「煌牙との契約はこれで終了だ！俺様の命を煌牙に返せば時間稼ぎにはなるはずだ！まだまだ半人前のヒヨッコ魔戒騎士だが俺様はコイツを気に入っている、助けてやってくれ」

「ザルバ!!？」

ザルバはそう言いながら自分が保有していた煌牙の命を煌牙に返すと沈黙し、カナヲは悲痛な叫びをあげ沈黙してしまう

「ザルバ．．ザルバが繋いでくれた兄さんの命、絶対に繋げるから！ありがとう！ありがとうザルバ！」

沈黙した後カナヲは目に力を宿しザルバへの感謝を込めてお礼を言う

珠世と零余子に向き直し

「ザルバの想いを無駄にしたくない！兄さんは絶対助ける」

そう言うカナヲに頷く珠世と信じられない物を見たとき口を開けて放心状態になっていた零余子、カナヲは零余子の目を見て

「貴方の事も信じてるから．．」

カナヲにそう言われて零余子はハッと気を取り直し、三人で煌牙の

延命措置を施すのだった

「焯牙・・聞こえてるか焯牙！」

「・・・ザル・・バ？俺・・あの後どうなったんだ」

「お前さんは上弦の壺との闘いで死の淵にいる、カナヲ達がお前を救おうと必死になってるぞ」

「カナヲ？・・そうだカナヲは無事だったのか☒」

「無事とは言えないが命に関わる怪我ではない、お前さんの為に無茶をしなければな」

「今すぐ辞めさせないと」

「無理だな、焯牙お前を助けたいと思うカナヲの意志は強いぞ、止めたいのならお前がカナヲに生きる意志を示すしかない」

「でもどうやって・・俺は死の淵にいるんだろ？」

「焯牙・・そろそろお別れのようにだ！お前さんから貰っていた命を全てお前に返還した！焯牙、必ず生き延びろ！」

「辞めるザルバ!!？そんな事したらお前は」

「友が助かるのならお安い御用だ！」

「ザルバ!!？」

「お前さんと過ごした日々は退屈しなかったぞ！」

「ザルバ・・辞めてくれ・・」

「・・焯牙・・強くなれ・・お前なら大牙を超えると信じてるぞ」

焯牙に命を与えたザルバは別れ際に焯牙の思念に語りかけ、そう焯牙と話すと徐々に意識が消えてゆき焯牙との繋がりが完全に消滅する

「ザルバ！ザルバ!!？・・・また守れなかった・・・俺は・・」

己の弱さ故に大切な繋がりが消えたと嘆く焯牙、そんな焯牙に追い討ちをかけるようにもう一人の焯牙が現れ焯牙を馬鹿にし始める

「結局何も守れないなお前は！そりゃそうだよな！自分の命すら守れないお前が誰かを守るわけがない！なあ？誰かを守る必要なんてあるのか？他の奴等がどこで死のうと俺達には関係ないだろ？俺は

生きる事を邪魔する奴等を屠る力があればそれでいい！その力が牙狼だ！」

そう告げるもう一人の焠牙、焠牙はもう一人の焠牙を睨み返し反論しようとするが顔面を驚掴みにされそのまま叩き伏せられてしまう

「認めるよ？お前も強くなりたかつたんだろ？力が欲しかったんだろ？」

「お前はあの時力を求めたじゃないか！」

焠牙を組み伏せたもう一人の焠牙はそう言つて焠牙を説き伏せると

「まあいい！今はお前が起きる事が優先だ！生きる意志があるならさっさと起きろ！」

もう一人の焠牙はそう言いながら闇に消えていくと

「生きる・・・俺は・・・まだ生きたい」

焠牙は心の声を搾るように呟くと、視界が暗転し暗黒の世界から白一色の世界へと切り替わる

それと同時に焠牙の意識は何かに吸い寄せられるかのように溶けていき

眠ったままの焠牙の体に意識が重なり出す

「兄さん☒」

驚きながらそう言うカナヲ、未だ眠ったままの焠牙だがカナヲが握り締めてる焠牙の手、指先が僅かに動きカナヲは焠牙に必死に呼びかける

「兄さん！兄さん！！？」

カナヲが呼びかける中、冷静に処置を施していた珠世は

「四ノ宮さんに声を掛け続けて下さい！恐らく貴方の声が一番四ノ宮さんに届く筈です」

「はー」

珠世からそう指示されたカナヲは勿論だと言わんばかりに返事をして焠牙に声を掛け続けていると

「皆もう少し！もう少しだけ時間を稼いで！！？」

そう言いながら慌てて出てきた朔弥はそれだけ言うともた引き返し回復薬の精製に取り掛かると珠世達はあと少しと目に決意を宿し処置を続け出す

「斬吼狼ちゃん！黒死牟の血と抑制剤が上手く反応したよ！」

「よし！ならば後はアレだけか」

「うん！アレの調合はもう少し掛かるから、斬吼狼ちゃん！先にコレを煌牙ちゃんに投与して」

朔弥と斬吼狼は回復薬の精製の末、完成したその薬を見てそう会話すると朔弥は一足先にその薬を煌牙に届けるよう斬吼狼に促し、斬吼狼はその薬を煌牙へと届けに歩き出した

一方煌牙に出来る限りの処置を施していた珠世達は

「愈史郎、カナヲさん、零余子さん、四ノ宮さんをお願いします！」

「珠世さん」

「朔弥さんがやろうとしてる事は察しがつきます、アレを使うつもりでしょうから私も手伝ってきます」

珠世は煌牙に出来る限りの処置を施すとカナヲ達にそう言い残し朔弥の元に向かい始めると時を同じくしてやって来た斬吼狼が煌牙の元に近付くと血のような液体の詰まった注射器を煌牙の首筋に刺し薬剤を注入していく

「お前が煌牙の妹か！はっ！そんな心配そうな顔するな！」

「貴方は・・・鬼？どうして鬼が兄さんを」

「どうしてって・・・まあ俺は魔戒騎士だしな、鬼だろうが人間だろうがやる事は昔から変わっちゃいねえよ」

「☒」

「まあこつちの話だ！気にすんな」

「それ何の薬？」

「これか？・・・上弦の壱の血を混ぜた回復薬だ、一時的にだが煌牙の体を鬼に近い体質に変換させて自己回復力を高めるんだ」

「え☒・・・兄さん鬼になるの☒」

「鬼にはならねえよ、そもそも血を与えて鬼にする際は血の性質を変質して血を与えるからな無惨の野郎、とはいえ上弦の壱の血は無惨の

血が最も濃い鬼、少なからずその影響は受ける筈だ！危険な賭けだがやるしかねえ」

「危険なの☒」

「仮にも鬼に近い体質になるんだ、細胞の急激な変化に今の焠牙が耐えられるかだな」

「何でそんな危険な事するの☒」

「やらなきゃ焠牙は死ぬぞ？どのみちもう薬は打ったんだ、一応抑制剤も混じってるから後は様子見だな」

「兄さん」

「焠牙妹、信じてやれ！お前の兄ちゃんだろ？」

「言われなくても兄さんの事はずっと昔から信じてる！あと私の名前カナヲだから」

「ははっ！確かにそうだ！カナヲだな？俺の名は斬吼狼：まあ総悟でもいいぞ」

「なら斬吼狼で」

「おう！（そっちかよ）

「兄さん鬼になつても元に戻るよね？」

「いや！鬼に近い体質になるだけだって！別に鬼になるわけじゃないし」

「万が一の時の為にアレを調合してるからな」

「アレ？」

「ヴァランカスの実、紅蓮の森に住むグラウ竜から取れる実があるんだよ」

「ヴァランカスの実？紅蓮の森？グラウ竜？」

「あく悪りい！分かんないよな」

「うん」

「ヴァランカスの実はホラーの血に穢された人間を浄化する力があるんだよ！ホラーと鬼の血は別物だが、無惨や上弦の壺の血とヴァランカスの実を上手く適合出来れば体内の鬼の血も完全に浄化出来る筈だ」

「そんな事出来るの☒」

「朔弥はな、見た目も態度もあんな感じだが薬学や魔導具関連で元老院付きの法師になった奴だ！それにさっきの珠世と蟲柱と共同で研究してるからな！出来ないわけがない」

「それがあれば鬼になった人も人間に戻れるの？」

「戻れるのは間違いないがヴァランカスの実は希少でな、大量生産とかは無理だろうな」

「そう・・・なんだ」

「つとそろそろ薬の効果が始めそうだな」

未だ眠る焠牙の様子を見ながらそう話すカナヲと斬吼狼だったが焠牙の体を駆け巡る血の変化を感じとった斬吼狼はカナヲとの会話を切り上げ焠牙の容体の変化に集中し始める

未だ眠る焠牙だったが、体を駆け巡る血と投与された薬剤が反応を起こし焠牙の肉体は徐々に鬼に近い体質へと変わり始め、その兆候が焠牙の目覚めと共に現れる

「があああああああ!!?」

そう咆哮をあげながら起き上がる焠牙はすぐそばにいるカナヲに気付くと獯猛な目付きでカナヲを睨むと斬吼狼が焠牙とカナヲの間に入りカナヲを守ろうとする

「よお！気分はどうだ？」

そう焠牙に話しかける斬吼狼、それに対して焠牙の反応は

「あー気持ち昂揚して暴れ回りたい気分だ！カナヲを見て襲いかかりたくなりそうだった、最悪だ!!?」

そう返す焠牙、鬼に近い体質へと変化した焠牙は精神面もそれに近づいており焠牙としてはそれは気分が良いものではなく斬吼狼にそう返したのだが斬吼狼はそれは当然だというような反応を見せふと溜息をつき

「今のお前は鬼に近い体質へと変化してるからな、まあその反応も当然だがその割にはお前落ち着いてるな」

「鬼☒：あーどうりで・・・いや、暴れ回りたい気分はあるんだがな!・・・

は☒鬼☒は☒」

「いや冷静に受け止めた後で狼狽えるなよ」

「いやいやいや！鬼ってなんだよ？俺鬼になったのか？」

「鬼に近い体質になってるだけだ！鬼の自己再生力を利用してお前の傷を治す為にな」

「そうか・傷の治りがやけに早いと思ったらそうゆうことか、ホント鬼の再生力って凄いやな」

「まあな」

「んで！俺の体って元に戻るのか？」

「まあ一時的に変化してるだけだし、時間が経てば徐々にお前自身の細胞が再生される筈だ、万が一の時の為の薬も作ってるし大丈夫だ」

「どんな薬なんだ？」

「体内の鬼の血を完全に浄化出来る薬と言えば分かるか？」

「そんな薬があるのか☒」

「まあな、魔戒騎士とはいえお前は鬼狩りだけしか知らないからな！」

「そうだな・・・なあ？斬吼狼？お前初対面の時と雰囲気違うよな」

「ああーあの時は無惨側だったしああいう態度だったただけだ」

「そっか」

「んじや俺もう行くわ！お前の傷も塞がり始めたし後は朔弥達に任せ
るわ」

「行くってどこに☒」

「お前にはまだ教えねーよ！ゆっくり休んでろ」

斬吼狼からの言葉に衝撃を受ける煌牙は心配するカナヲをよそに
斬吼狼に色々と質問を繰り返していたが煌牙の傷が塞がり始めた事
から斬吼狼は後の事を朔弥に任せ自分の用事を済まそうとその場を
後にする

「兄さんが目を醒ましてくれて良かった」

「カナヲ・さつきはゴメンな！それにあの時も泣かせてしまったし・
ホントにゴメン!!？」

「いいの！兄さんが生きてくれただけで私は・・・でも少し怖かった・
あの時、牙狼が凶暴な姿になって兄さんが兄さんじゃなくなるよう
な」

「カナヲ・謝っても許される事じゃないけどあの時の俺は魔戒騎士の

誇りより自分の感情の赴くままに暴れ回った、あの姿は哀れな俺の成れの果てだ」

「兄さん・もう辞めよ？牙狼になるのもう辞めよ？牙狼が危険な存在だったなんて私知らなかった」

「カナヲ・俺はもう牙狼にはなれない！聞こえないんだ！牙狼剣の声があ！あの時の俺を見て歴代黄金騎士達は俺が牙狼には相応しくないと判断したんだろうな」

「……私もそれがいいと思う、兄さんはもう戦わなくていいから」

「……カナヲ・お前も早く手当てしてゆつくり休んでろ」

「兄さんはどうするの？」

「怪我也完治してないしどうにも出来ないな、大人しくしてるよ」

「うん・兄さん・もう戦っちゃ駄目だからね」

斬吼狼が去った後心配していたカナヲは不安と安堵の入れ混じる複雑な表情をしながら煌牙の様子を伺い会話をするが、煌牙もカナヲもお互いにぎこちない雰囲気になり煌牙は怪我をしているカナヲに手当てを促し

一人になろうと考える

カナヲが心配する気持ちは分かる、誰も喜んで身内を危険な鬼狩りの任務に送り出したくはない、自分もカナヲには鬼殺隊としての生き方より別の生き方をしてほしいと願う気持ちもある、だけど本人の意志で決めた以上口を挟むのはカナヲの意志を否定してるようなものだど煌牙は考えていたがカナヲは違った

過去に一度煌牙を失い心が壊れたカナヲ、胡蝶姉妹との出会い煌牙との再会を機に再び自我が芽生えてきたが、煌牙を失うというトラウマは未だカナヲの心に根付いており此度の戦いで煌牙を失いそうになったカナヲは煌牙を失いたくない一心で煌牙が再び戦う事を拒絶し、煌牙は自分自身の意志とカナヲの願いの間で葛藤しこれまで事、これからの事を考える為の時間が欲しく一人になろうとしていた

そんな中、煌牙が目覚めた事で話しかけたくて仕方がなかった零余子と愈四郎は話に入り込む余地がないと黙っていたがカナヲの治療が優先だと会話が終わると共にカナヲの治療に勤しみながら時折煌

牙の様子をチラチラと伺い時が過ぎていく

一方でヴァランカスの実を使った浄化薬を精製中の朔弥達の元に斬吼狼がやつと来ると斬吼狼は煌牙が目覚めた事と自らの用事を済ましてくる事を朔弥達に告げた後、気まずそうな顔付きで朔弥達に話しかけてくる

「朔弥、治療ついでにコイツの面倒も見てくださいないか」

そう言いながら斬吼狼は影を展開しその影に手を入れると影の中から意識を失いかけた溜花を引き摺り出す

「溜花ちゃん☒☒溜花ちゃんは上弦の式に：斬吼狼ちゃんが助けてくれてたの？・・・でもなんで溜花ちゃん裸なの？」

「いやな、童磨の野郎をバラバラに斬ったのはいいがコイツ喰われる寸前だったし童磨だけを斬りつける余裕がなかったんだよ！」

「良かった・・・私達あの時溜花ちゃんは上弦の式に喰べられて死んじゃったんだと思ってたから・・・良かったホントに良かったよ」

「まあな、んじや後は頼むぞ」

「うん！・・・ねえ？斬吼狼ちゃん!!？」

「あ？なんだよ」

「私達の計画に煌牙ちゃん必要？」

「必要だな！俺やお前が鬼になったのも俺が無惨の元に付いたのもその為だろ」

「うん・・・鬼殺隊の皆はどうするの？」

「奴らに教える必要はないだろ？むしろ邪魔だ」

「・・・そうだね・・・私達の計画は知られちゃいけないよね」

「ああ、俺もう行くわ！」

そう会話する斬吼狼と朔弥だったが斬吼狼は計画の内容を知らせるわけにはいかないと促すと朔弥もそれに同意し斬吼狼は部屋を後にする

そんな折、二人の話を聞いていた珠世は朔弥に

「あの？朔弥さん？計画を知られちゃいけないって言ってましたが私はいって良かったのですか？」

そう珠世が疑問に思うのも当然だが朔弥は珠世に対して

「珠世ちゃんは私達の計画に巻き込むつもりだから」

朔弥は珠世にニヤリと笑みをこぼしながらそう言うのと溜花の手当てをし始める

(二人の計画って何かしら？ 鬼殺隊に言えない計画・良からぬ事を企んでなければいいけど)

人知れず計画を進行する二人に珠世はそう疑問を抱きつつ朔弥と共に溜花の手当てをするのであった

「煌牙ちゃん！目が覚めたんだね！大丈夫？ヴァランカスの実は必要ない？」

溜花の手当てを終えた朔弥は完成した薬を携えて煌牙の元にやって来るとそう言いながら煌牙に擦り寄ってくる

「んー高揚感以外は別になんとも、傷も大分塞がってきたし」

そう言いながら煌牙は体中の傷口を見せると朔弥は魔戒筆を取り出して

魔導文字による印を描き始める

「まあそれは仕方ないよ、にしても黒死牟の血は効き目が凄いいね♪」

魔導文字を描いた朔弥は術を発動し光球を生み出すとそれを煌牙の体に重ねながらそう言い出す

光球が煌牙に重なるように浸透すると煌牙の体は薄く発光し傷口の再生速度が増すとやがて傷口は跡形もなく完治してしまう

「やっぱり！術での回復速度が桁違い♪どう煌牙ちゃん？」

そう言い出すドヤ顔をする朔弥に煌牙は

「いや治った事は素直に嬉しいけどさ・俺の体に黒死牟の血が流れてるってのが・正直言って複雑な気分」

鬼の回復速度は凄まじい、上弦の壱ともなれば他の鬼とは比肩しようもない速度だろうそれを利用して傷が治るのは悪くはない、だが煌牙にとっては先程まで死闘を繰り返していた敵、自らの怒りに吞まれ暴走したがその原因を作り出した張本人の血が流れてる事に複雑な表情を見せる煌牙はそう言いながら朔弥に視線を移すと

「うーん・・・目には目を歯には歯をつて言葉があるでしょ？」

少し悩みながら言葉を綴り出した朔弥、焠牙はそれを聞いて頷くと朔弥は話の続きを語り出す

「鬼にやられたなら鬼の力を利用して回復する、利用出来る物は何でも利用する！それが私の持論！魔戒騎士の鎧や魔戒剣の原料となるソウルメタルも元はホラーなんだし」

そう説明する朔弥に焠牙は驚きの表情を見せながら

「ホラー？ソウルメタルが？」

そう聞き返す焠牙はまさかソウルメタルの原料がホラーだとは知らず呆気にとられるも朔弥は

「ソウルメタルはね、ホラーの死骸と噴火したマグマが混ざり合って凝固した物質を加工して出来た特殊金属なの」

朔弥は遠い目をしながら焠牙にそう話すと焠牙に抱きつきながら

「焠牙ちゃんは彌豆子ちゃんを認めたよね、大事なのはその心！焠牙ちゃんもそろそろ自分自身を受け入れてもいいじゃないかな？」

そう話すと朔弥は焠牙から離れ焠牙の反応を伺いながら様子を見てると

「考える時間が欲しい、色々あり過ぎて気持ちの整理がつかないんだ」

黒死牟との戦い、怒りに吞まれ心滅した事、心の闇が生み出したもう一人の自分、ザルバ、カナヲの気持ち、自分の体に黒死牟の血が流れてる事、ソウルメタルの原料がホラーだった事、色んな事が焠牙に押し寄せ気持ちの整理がつかない焠牙は俯きながら朔弥にそう告げ一人になりたいと一人部屋を出る

「ふうく・・・あのさ！一人になりたいんだけど」

部屋を出た焠牙は溜息を吐くと振り返りそう話しかける

「嫌！兄さんと一緒にいたい」

と焠牙の願いも虚しく一緒に付いてきたカナヲ、焠牙は実の妹に邪魔だと言えるような人間ではない為、どう言って一人になろうか考えていたが

「邪魔しないから！兄さんが一人になりたいって分かってる！でも！兄さん一人だと全部背負い込んでまた無茶しちゃうから」

そうカナヲに言われ断る事も出来なくなった焠牙は

「じゃあ俺が無茶しないよう見張つてろよ!とは言つても牙狼剣も日輪刀もないし何も出来ないけどな」

少し不機嫌ながらもカナヲにそう言いながら一人歩き出す焠牙、カナヲは不機嫌な焠牙にバツが悪そうな顔になりながらも後を追いかけると

焠牙はふと立ち止まりカナヲに振り返ると

「やっぱり一人で考えるのは辞めた!」

焠牙はカナヲを見ながらそう話しかけるとカナヲは首を傾げ不思議そうに焠牙を見つめ

「兄さん?」

カナヲの呼びかけに焠牙は申し訳なさそうに頭を下げると

「カナヲさつきはゴメン!カナヲは俺の心配をしてくれてたのにきつく当たってしまった、ホントゴメン」

そんな焠牙にカナヲはあたふたとしながら

「いいの!私が一緒にいたいって言ったから」

カナヲは焠牙にそう話すと多少強張っていた表情が和らぎ焠牙に近寄ると

「なあカナヲ・・話さないか?今までの事そしてこれからの事を」

そうカナヲに話しかける焠牙、カナヲはそれに頷くと

「うん・・私も兄さんに聞きたい事あったから」

カナヲはそう返事をする二人は暁邸の屋上へ向かい出した

「屋上からの見晴らして良いよなあ、カナヲもそう思わないか?」

屋上に辿り着いた焠牙は周囲の景観を眺めながら隣に佇むカナヲに話しかけると

「うん・・でも周りは森ばかりだし夜だからそんなに良いとは思わないよ」

と正直な感想を焠牙に告げるカナヲは

「兄さん体の方は大丈夫なの?」

そう心配するカナヲだったが焠牙は

「そうだな・・うん!大丈夫みたいだ!」

体を軽く動かし動作確認をした焠牙はそうカナヲに話す

「でも病み上がりだから無茶しちや駄目だよ？ 兄さんはそうゆうところあるから」

そう言いながら焠牙をジト目で睨むカナヲ

「わかつてるよ・・今回の件で嫌という程痛感したからな」

そうカナヲに話しながら焠牙は苦笑いをする

「結局は昔と何も変わらなかつたんだよ俺は・修行して鬼と戦える力を得ても魔戒騎士として牙狼に認められても四ノ宮焠牙という人間は今も昔も同じ弱い人間だったというわけだ」

そう言いながら自らを乏し始める焠牙、カナヲはそんな焠牙に

「心はどこまでも強くなれる！ 兄さんが私に言ってくれた言葉忘れちゃった？ 私はね？ 兄さんは変わらなくていいと思うし弱くてもいい！」

兄さんは弟や妹達の事を引きずりすぎてるんだよ！ 炭治郎は前を向いてるよ？ どんなに辛くてもどんなに打ちのめされても前を向いて歩いてるよ？ 兄さんは死んじゃったあの子達の想いは受け継いでいかないの？

ずっとあの時のまま立ち止まって歩かないの？ 兄さん、もう自分を許してあげよ？」

そう話しながら涙目になっていくカナヲ、焠牙はそんなカナヲを見ながら

「罪って許されるのか？」

そう一言だけカナヲに尋ねる焠牙、そんな焠牙の問いかけにカナヲは

「分かんないよ、試した事ないし」

そう焠牙に返事をすると焠牙はフツとカナヲに笑みを浮かべると

「そうか・・それにしても今日はよく喋るなカナヲ」

そう話す焠牙だったがカナヲはジト目で焠牙を睨み付けると

「茶化さないで！ 私は兄さんを心配して」

焠牙を心配するカナヲだったが焠牙は先程までの重苦しい表情が和らぎ

どこかスツキリした顔になると

「カナヲありがとな！」

そう言いながらカナヲの頭をポンポンと優しく叩くと焠牙は

「悪いカナヲ！ちよつと用が出来たから話はまた後でな」

そう言いながらその場を後にしようとした焠牙だったが

「私も一緒に行きたい」

とカナヲが言い出したので焠牙はバツが悪そうな顔をして

「そうだったな・・・カナヲ！俺を支えてくれないか？」

そう焠牙がカナヲに話し出すとカナヲは嬉しそうな顔でコクンと
頷き

二人一緒に歩き出すのだった

そんな二人は朔弥の元に訪れると

「焠牙ちゃんなら必ずここに来ると思ってた。焠牙ちゃん：自分と向き合う決心がついたんだね？焠牙ちゃんの心の闇・・・陰我を断ち切る決心が」

そう静かに話しかける朔弥、心配そうに焠牙を見つめるカナヲだったが言葉が発さずに焠牙の返事を待つと

「俺は・・・強くなりたかった。強くなって皆を守りたかった！だけど牙狼に認められ柱になるにつれ、その想いは次第に重荷へと変わっていった。かつての家族を守れなかった俺が牙狼や柱で良いのかと・・・その重荷はやがて自らを弱者としてより強さを求めるようになって・・・馬鹿だよな？家族を失った奴なんて俺以外にもいるってのにさ？何自分の世界に閉じ籠って悲劇の主役気取ってんだって話だ！どんな辛くてもどんなに打ちのめされても立ち上がって前を向いて歩いてる奴がいるのに俺はそいつを知りながらもちゃんと知ろうとしてなかったんだ・・・俺強くなりたい!!？今度こそ本当の意味で強くなりたくない!!？だからこそ俺はもう逃げない！今までの自分から目を背けたくないんだ」

決意に満ちた表情でそう宣言する焠牙、それを聞いたカナヲは
「兄さんはまた戦うつもりなの？私は兄さんに戦って欲しくない」
そうカナヲに言われた焠牙だったが

「カナヲ！俺が牙狼になりたいって思ったのはカナヲを守りたかったからなんだ！魔戒騎士でもなく鬼殺隊でもなく四ノ宮焠牙として一番守りたかったのはカナヲなんだ!!? だからさ！俺にお前を守らせてくれないか？」

カナヲの両肩に手を置き顔を近付ける焠牙はカナヲにそう話すと「ズルイよ兄さん」

そう言つて頬を仄かに赤らめるカナヲ、戦つて欲しくないという気持ちはあるものの焠牙にそう言われてその言葉を否定出来ないカナヲは

「じゃあ・・・背中では兄さんに預けるから兄さんの背中では私に預けて？」

私も兄さんを守りたい!!?」

そう力強く宣言するカナヲ、その瞳は決意に満ち溢れ全く焠牙へと向けられると

「はい！そこ!!? 兄妹でイチャつかない!!?」

もうお腹いっぱいですと釘を刺してきた朔弥は

「とりあえず二人共病み上がりなんだし今日はゆっくり休んで」

そう言いながら二人を自室から追い出した朔弥、ふうくと溜息を吐くと

「予想外の出来事起きちゃったけど計画の範囲内、焠牙ちゃんには頑張つて貰わないと・・・ごめんね？辛い使命を背負わせて」

そう密かに呟くのだった

それから一夜明け鬼の力をもって傷も完治し全快の焠牙は「ようやく力を求める気になったか」

ここ暁邸に鎮座する修練の間で内なる闇と対峙していた

「ああ」

焠牙は内なる闇であるもう一人の自分にそう返し

「俺は本当の意味で強くなりたくない！」

そう力強く宣言する焠牙だが

「本当の強さ？力こそが本当の強さだ！敵を捻じ伏せ蹂躪する圧倒的

な力こそが本当の強さだろ？鬼がそうであるようにな」

そんな焠牙を説き伏せるような発言をする内なる闇、焠牙はそんな発言に一度頷き肯定すると

「それも強さではあるさ、弱かった俺が求めた強さがそれだったからな

「けどそうじゃなかった！本当の強さは・・・お前も分かってるだろ？」

「お前は俺なんだから」

内なる闇、焠牙の心の弱さが生み出した心の闇だがそれもまた焠牙の一部であり半目してるとはいえ焠牙の心情の変化を感じ取っていた内なる闇は焠牙の発言にフツと薄い笑みを浮かべ

「ああ！俺はお前でありお前は俺だ!!？だがそんな決意だけじゃ何も変わらない！お前は牙狼にはなれない」

内なる闇は焠牙に非情な言葉を浴びせ現実を突きつけようとするが

「昔、慎寿朗さんにも言われたなあお前なんか牙狼になれる訳ないってな！ふぎけんな！なれるなれないじゃないんだよ!!？俺が牙狼になるって決めたんだ!!？カナヲを守る為に!!？」

「そう力強く反論する焠牙、内なる闇はそれを聞いて

「なんだ。ちゃんと分かっているじゃないか！俺達が何の為に強くなるうとしたかその原点をな！ならこれ以上の問答は無用だな！来いよ！お前の言う本当の強さ！俺に見せてみる!!？」

「そう言いながら手首を翻し手招きして挑発する内なる闇、焠牙はふうくと深く深呼吸をすると戦闘態勢に入り

「はあっ！」

掛け声を掛けながら内なる闇に突進する焠牙、それに対し受け身の構えを取った内なる闇は上段蹴りを繰り出してきた焠牙の右脚を腕で防ぎながら絡め取り投げ飛ばそうとする

「まだだ！」

「そう言いながら焠牙は右脚に渾身の力を込め強引に蹴り飛ばそうとするが踏ん張りを効かせ食い下がる内なる闇、力が拮抗し埒があか

ないと判断した焠牙は軸足となる左脚に力を込め全力で後方宙返りを試みる

踏ん張りを効かせていた内なる闇も宙に向かう方向には抵抗出来ず焠牙の右脚ごと宙を舞うと焠牙は身体を横に捻り右脚ごと内なる闇を地に叩きつける

「がはあっ!!?」

焠牙の右脚を絡め取っていた事で受け身を取れなかった内なる闇は苦しそうな声を漏らすすがすがさま立ち上がり

「面白い!」

そう言つて獰猛な笑みを浮かべると

「力つてのはテメエの中で順応させ昇華して使いこなすもんだ!!?今の俺みたいになあ!!?」

内なる闇はそう叫びながら一瞬で焠牙の懐に入り込み

「この体に流れる鬼の血もそうだ!順応させ血肉になればより強くなる!!?鬼のように強く!!?呼吸も使える!十二鬼月最強の上弦の壱と同等の存在になれるんだ!欲しくはないか?この力が!!?」

焠牙の顔を驚掴みにし叩き伏せた内なる闇はそう叫びながら獰猛な笑みを焠牙に向ける

その獰猛な目はまるで鬼になったかのような雰囲気を漂わせており

内なる闇はその力を振るわんと焠牙を引つ張り上げ腹に強烈な蹴りを浴びせ蹴り飛ばすと

「テメエが俺に吞まればどのみちこの力は俺の物になる!鬼の力と呼吸の力!牙狼の力が合わされば俺は誰にも負けない最強の存在になるんだ!!?」

そう言いながら蹴り飛ばした焠牙に歩み寄る内なる闇、強烈な蹴りを腹部に受けて倒れ込む焠牙は口から血を吐きながらヨロヨロと立ち上がり

「いらねえよ鬼の力なんざ!そんなもんに頼らなくなつて強くなれるさ

本当の強さつてやつを思い出したからな!!?俺が一番最初に求め

た力は俺が欲しかった力は・・・誰かを守る力だ！たった一人でもいい明日へ！その先へと繋げていける力だ！守りし者として戦いを・・・俺も!!?」

そう内なる闇に話すと煌牙は

「カナヲが待つてるんだ!!? 例え俺自身であつても負ける訳にはいかないんだよ!!?」

そう叫びながら煌牙はカナヲとお揃いの鈴を右手に握りしめ内なる闇へと走り出す

「つたく世話の焼ける奴だ・・・もう俺を生み出すんじゃねえぞ・・・」

そう小声で喋る内なる闇、その顔は嬉しそうであり寂しげな笑みを浮かべながら煌牙を見つめると内なる闇も煌牙に向かって走り出し

やがて両者の右拳が互いの頬に届くのだが・・・

チリーン

煌牙の拳が内なる闇へと届いた瞬間、右拳から鈴の音が鳴り響き煌牙の拳から金色の波動が解き放たれる

チリーン

「きゃっ☒・・・何? どうして鈴が鳴って・・・それにこの金色の光は」

一方修練の間の外で煌牙を待っていたカナヲと朔弥、煌牙の無事を祈り手に握りしめていた鈴が突然鳴り出して鈴の音と金色の波動に思わず驚くカナヲはそう言いながら鈴を見つめていると

「大牙ちゃん・・・縁壺ちゃん・・・見てる? 破邪の奏鈴が共鳴したよ・・・二人の願いが届いたよ」

隣に立つ朔弥は密かにそう呟きながら涙を流していた

「今のは一体☒」

突然の出来事に呆然とする焠牙、拳を開き鈴を見つめるが鈴は何の反応も見せずにはいたが

「見せて貰ったぞ？お前の言う本当の強さ・心の強さってやつをな」
そう焠牙に話しかけてきた内なる闇、その体は金色の波動の影響と焠牙を認めた事で存在意義を失くし消えかかっていたが最後に伝えたい事があると焠牙を見つめ

「カナヲを頼んだぞ！黄金騎士四ノ宮焠牙」

そう言つて内なる闇は静かに焠牙の前が消え去っていった

「任せておけ」

焠牙は誰もいない空間の中そう言いながら振り返り

「俺は必ず牙狼になる」

決意を宿した焠牙はそう言つて修練の間を後にするのだった

「兄さん!!？」

「焠牙ちゃん!!？」

修練の間の前で焠牙を待つカナヲと朔弥、そんな二人の前に扉を開き修練の間を出てきた焠牙が現れると焠牙に駆け寄り

「・・・兄さん・・・だよね？」

「・・・うん♪間違いなく焠牙ちゃんだよ♪私が保証するから大丈夫大丈夫♪」

一目で焠牙本来の人格なのか判別がつかなかったカナヲだったが朔弥は今の焠牙が本来の人格の焠牙だと見抜きカナヲにそう告げると

「アンタの保証なんて信用出来るのかね？」

そう皮肉を言いながら苦笑いする焠牙、朔弥はムスツと頬を膨らませ

「保証出来るよ!!？だって私は焠牙ちゃんとカナヲちゃんの・・・魔戒法師だからね♪」

そう言いながら慌てる素振りを見せる朔弥は

「ホントはね！魔戒騎士が内なる闇を克服して試練を乗り越えると新

たな力。魔導馬が召喚出来るの！牙狼の場合轟天という黄金の魔導馬なんだけどこの世界に来てから召喚出来ないみたいなんだよね」

そう焔牙に説明する朔弥は

「だから焔牙ちゃんが轟天を召喚する事は出来ないの！」

そう話して申し訳なさそうにする朔弥だったが

「そっか、まあ出来ないもんはしようがないさ・俺も今牙狼になれないし」

苦笑いしてそう話す焔牙、朔弥はキョトンとした顔をして

「あくそっか・今牙狼剣がないもんね」

「いやそうじゃなくて！俺牙狼の資格を失ったんだよ」

「……ふえ☒どどどどゆことお☒聞いてないよ！知らないよ！ア
ンビリバー!!？」

「黒死牟との戦いで怒りに任せて心滅しちやってさ、んで心の闇に呑まれて心滅獣身したんだよ」

「……それで牙狼剣の声が聴こえない……という訳か……なるほど……
まあ大牙ちゃんは認めないだろうね」

「だからもう一度認めて貰う!!？俺は必ず牙狼になる」

そう会話する焔牙と朔弥、カナヲはその様子を見ていたのだが

「兄さん」

真っ直ぐ焔牙に視線を注ぐカナヲ、焔牙は軽く笑うとカナヲに近付きポンとカナヲの頭に手を乗せ

「色々心配かけたな、もう大丈夫だから」

そう言っ頭を撫で始める焔牙

「うん」

その言葉に安心して安堵の表情を浮かべるカナヲに

「はいそこ！兄妹でイチャつかない!!？イチャつくなら私も混ぜて!!
？」

そう言っ焔牙とカナヲの間に飛び込んできた朔弥は焔牙とカナヲの二人の手を握り締め

「二人共色々ごめんね？いっぱい苦労かけたね！ホントにごめんね」

そう言つて突如泣き出した朔弥、煌牙とカナヲは何の事？と顔を見合わせ首を傾げ

「兄さん？この人が何言ってるのか分からない」

「うん！何で謝られてるのか俺も分かんない」

そう話していると

「煌牙ちゃん、とりあえず英霊の塔に行こ？大牙ちゃんや歴代の黄金騎士にもう一度認めて貰お？」

泣きながらそう煌牙に話しかけてきた朔弥、煌牙はそれに頷くと

「斬吼狼ちゃん！！？帰つてきてるんでしょ！！？」

大声で斬吼狼の名を叫ぶ朔弥、それに反応した斬吼狼が不機嫌そうな表情で現れ

「煩い！！？大声出さなくても聴こえてるつっくの」

そう朔弥に文句を言つて

「煌牙・心の闇を克服したからつて大牙がそう簡単に認めるとは思えねえ！」

斬吼狼が煌牙にそう話しかけ厳しい現実を突き付けると

「分かっているさ！そう簡単に認めて貰えるとは思ってないし、だからといって諦める気も更々無い！！？」

煌牙は斬吼狼にそう言い返すと斬吼狼はフツと笑みを浮かべ

「覚悟は出来てるつてか？んじや行くか！！？大牙が眠る英霊の塔へ」

斬吼狼はそう言つて足元に影を作り出すと

「何か有耶無耶になつてるけどさっきの鈴の音と金色の光つて何だったの？」

とカナヲが先程の出来事を口にする

「あつ！それな！俺も気になつてたんだよ！」

煌牙も先程の出来事に反応すると

「今から向かうつてタイミングでコイツら・・・全く誰に似たんだか」
そう言つて呆れ返る斬吼狼はチラツと視線を朔弥に向けると

「血は争えないつてやつね総悟」

と斬吼狼のパートナーであるアルヴァが喋り出すと

「それは破邪の奏鈴の共鳴だな・・・本来は二対で一つの魔導具だが

お前らがそれぞれ持つてるって事はそうゆう事なんだろう
と斬吼狼がザツクリと説明すると

「詳しい事は大牙本人から聞いてみな！」

そう言つて斬吼狼はサツサと影の中に飛び込み

「よーし♪私達も行くよー♪煌牙ちゃんカナヲちゃん♪」

煌牙とカナヲの手を握り影の中に飛び込もうとする朔弥は

「アーイ！キヤーン！フラーイー！！？」

そう言つて影に飛び込む朔弥

「いや！飛んでねえから！！？影の中に沈んでるだけだから！！？」

「この一連の流れについていけない」

煌牙とカナヲはそう言いながら朔弥と共に影に消えていくのだつ
た

「うっわ！！？改めて見たら戦闘痕エグっ！！？」

斬吼狼の血鬼術で再び黒死牟と戦つた場に戻つて来た煌牙は自身
と黒死牟の戦いがいかに激しかったかを痛感し

「ここで俺は心滅し黒死牟に負けたんだな」

と戦闘痕を見つめながらそう呟く煌牙だったが

「負けてない！！？兄さんは負けてない！！？」

とカナヲが強く否定すると

「そうだな！黒死牟の目的は煌牙の抹殺、だがお前は生きている！な
ら

お前は負けてないんじゃないか？」

とカナヲをアシストする斬吼狼は

「まあ勝つてもいないがな」

と付け加えカナヲから白い目で見られる斬吼狼は

「んな事より急ぐぞ！日光は駄目なんだよ」

焦り気味でそう話す斬吼狼は全速力で英霊の塔へと駆け出し塔の
中に駆け込むと

「うーん・・・斬吼狼ちゃんダサイ」

と割と辛辣な感想を述べた朔弥、焯牙はそんな朔弥を見ながら

「日光浴びて平気なアンタが異常なんだよ!!?」

とツツコミを入れると

「待ってるよ・・・必ずお前を引き抜くから」

戦場跡に突き刺さったままの牙狼剣の元に歩み寄った焯牙は牙狼剣を握り締めそう呟くと

「さあ行こう!」

そう言つてカナヲと朔弥を引き連れ英霊の塔に入っていくのだつた

そんな焯牙達は先に入った斬吼狼と合流し英霊の塔最奥、英霊が眠る英霊の間に前に立つと

「ふうく・・・行くか」

深呼吸で気持ちを固めた焯牙は重く閉ざされた扉を開き英霊の間へと入ると

『帰れ!!?黄金騎士を受け継ぐ資格無き者よ!!?』

英霊の間からそう声が響き渡り焯牙はその歩みを止める

入室早々痛烈な言葉を浴びせられた焯牙、覚悟していたとはいえ直接言葉にして言われると堪えるものがあるのか表情を曇らせ

「例え今すぐ認められなくても俺は必ずもう一度牙狼になる!絶対に認めさせてやる!!?」

と英霊に宣言すると

『いいだろう!お前のその覚悟がどれ程のものか私が確かめてやろう』

そう声が響くと一つの光が英霊の間に現れ、その光は段々と人の形となりやがて

「こうして対面するのは三年ぶりだな四ノ宮焯牙」

そう焯牙に話しかけてきた英霊「暁大牙」は焯牙の後ろに待機していた

カナヲ、朔弥、斬吼狼を見渡すと

「お前達と対面するのは実に四百年ぶりだ!久しいな!総悟も鬼に

なつて生きていたとは驚いた！だが嬉しくもある！」

と朔弥と斬吼狼に話しかけた大牙はカナヲに目をやると

「名は何という？」

とカナヲに名を聞くとカナヲはまさか話しかけられるとは思わなかったのか少し驚きつつも

「栗花落カナヲ」

と大牙に答え

「・・・そうか・・・良い名だ!!？」

少しばかりの沈黙の後大牙はカナヲにそう言う

「思い出話に華を咲かせるのも悪くはないが・・・」

と大牙がそこまで言いかけ

「四ノ宮煌牙が牙狼を受け継ぐに値するか確かめねばな」

英霊の間に響き渡る程の声で叫ぶと一振りの剣を煌牙に投げ渡し大牙自身も一振りの剣を手に煌牙の前に立つ

「四ノ宮煌牙!!？お前の覚悟を私に示せ!!？」

大牙はそう言つて剣を構え煌牙を見据えると

「俺の覚悟・・・暁大牙！アンタに見せてやるよ!!？」

そう言つて煌牙も剣を構えると両者の間に緊張感が走り

「はああつ!!？」

「ふんつ!!？」

両者共に走り出すと互いの剣戟がぶつかり合い火花が飛び散ると

煌牙と大牙共に目まぐるしく動き回りながら互いに剣戟をぶつけ

合う

「凄い・・・あの人・・・兄さんよりも強い」

「暁大牙・・・先代牙狼であり初代牙柱だしな・・・今の煌牙より強いのは当然だろ」

「でも煌牙ちゃんはきつと大牙ちゃんを超えていく・・・今は無理でもいつかきつと」

二人の戦いを見守る三人がそう話していると

「どうした？四ノ宮煌牙お前の覚悟はその程度か？」

「くっ！」

両者一進一退の攻防を繰り返すが大牙の力量差は顕著で徐々に

押され始める煌牙、大牙はそんな煌牙に手を抜く事なく

――日の呼吸 烈日紅鏡――

煌牙に向けて高速の左右二連撃を繰り返す大牙、煌牙は咄嗟に後ろに飛び退きながら剣で大牙の型を防ぐも凄まじい剣戟の威力に弾き飛ばされてしまう

「くそっ！やっぱ滅茶苦茶強え！それに今の型はヒノカミ神楽の」

そう言いながら立ち上がる煌牙、自分との力量の差は明確だがそれでも諦めない煌牙は大牙に目を向けると

「いない☒・っ！上かっ!!?」

――日の呼吸 碧羅の天――

大牙の姿を見失った煌牙だったが上空から大牙の気配を察知すると咄嗟に転がり大牙の繰り出した円を描く斬撃をかるうじて躲し

――牙の呼吸 参の型改 閃空鳴御雷――

渾身の踏み込みで大牙に肉薄する煌牙、そこから更に体重移動を利用し緩急を付けた動きで大牙の背後に回り込み斬撃を繰り返すそうとすると

「ほう！参の型を改良したか！だが!!?お前の動きは把握している!!?」

その場で跳躍し空中回し蹴りによるカウンターで煌牙を迎撃した大牙は

煌牙にそう言う

「柱としては及第点・だがその程度で上弦を相手に渡り合えると思うな!!?」

と煌牙に厳しく意見する大牙、大牙が想定した上弦の鬼は黒死牟で

あり
かつて戦った事のある大牙は今の煌牙では勝てないと指摘するのだが

「……ヒノカミ神楽」

立ち上がった煌牙はそう小声で呟くと

ゴオオオオオオオ

と呼吸音が変わり大牙はその変化に僅かながら笑みを浮かべ

「それでいい．．．そこからは始まりだ」

と小声で呟くと

――日の呼吸 陽華突――

切っ先を煌牙に向けて全体重を乗せた突きを放つ大牙

――ヒノカミ神楽 幻日虹――

体を強く捻りしながら大牙の型を躲す煌牙、避けた際に残像が生み

出され大牙も一瞬だが残像に気を取られ

――ヒノカミ神楽 炎舞――

大牙が見せた僅かな隙を見逃さなかった煌牙は斬り上げと斬り下

ろしの上下二連撃で大牙に斬りかかると

「はあああつ!!?」

そう叫びながら渾身の横薙ぎで煌牙を払い退ける大牙、体勢を崩さ

れた煌牙は一旦距離を開けようと後ろに跳び退がると

――日の呼吸 日暈の龍・頭舞い――

龍が舞い踊るような流れで煌牙に斬りかかって来た大牙、反応速度

に優れた煌牙といえど大牙のこの追撃は捌き切れないと守りを固め

るが

ザシユツ

大牙の振るう剣が煌牙の脇腹を捉え煌牙は斬り捨てられてしまう

「兄さん!!?」

戦いの行く末を心配しながら見守っていたカナヲは煌牙の現状に

そう叫び煌牙の元に駆け出そうとするが

「これは黄金騎士としての大牙と煌牙の戦いだ！気持ちは分かるが水

を差すな」

とカナヲの肩を掴み制止する斬吼狼

「どんな結末が待ってようと今ここで煌牙ちゃんを止めたら駄目!!

?

煌牙ちゃんの牙狼になるという決意．．誇りを傷付けちゃう」

今にも飛び出したい気持ちを必死に押し殺しながらカナヲにそう

告げる朔弥、カナヲはグツと唇を噛み締めながら焔牙を見つめると

「兄さん!!? 兄さんは絶対牙狼になれるよ! だって兄さんは: 私希望だから!!?」

そう大きな声で焔牙に呼びかけるカナヲ、脇腹を斬られ倒れ込む焔牙は

剣を再び握り締め何とか立ち上がると

「希望か: だったら絶対負けられないな!!? カナヲが託した希望、想い俺はそれを紡ぎ未来へと繋いでいく!!?」

痛みを堪えながらそう話す焔牙、決意に満ちた目をしてるが先程の一撃は焔牙にとって致命的であり脇腹からは大量の血が流れ立っているのが精一杯なのだが

「...そうか...」

その言葉を静かに聞いていた大牙はそう一言だけ話すとズブツ

「どんな覚悟があろうが! どんな想いを紡ごうが! それを成し遂げる力が無ければ意味は無い!!?」

そう言いながら焔牙の胸に剣を突き刺した大牙、焔牙は血を吐きながら胸に刺さる剣を握り締め

「アンタの言う通り力がなければ何も成し遂げられない! だけど力だけじゃ駄目なんだ: 想いなき力なんか俺はいらぬ!」

剣を握り締める手から血が流れる事も厭わずそう大牙に告げる焔牙に

「それがお前の出した答えか: なるほど」

そう言つて大牙は焔牙の胸に突き刺した剣を引き抜くと焔牙の胸から大量の鮮血が溢れ出て焔牙は思わずよろめき倒れそうになるが

「お前の覚悟はわかった: だが! 今のお前を牙狼として認める気はない!!?」

そんな焔牙を抱きとめそう告げた大牙は

「総悟!!? お前に任せるつもりだったが気が変わった! 四ノ宮焔牙は私が引き受けよう」

そう斬吼狼に話す出す大牙は

「総悟・・・その娘を・・・カナヲを頼んだ」

大牙からそう言われた斬吼狼は頭を掻きながら

「ハッ！しょうがねえな！お前の頼みだし引き受けてやるよ」

そう大牙に返事すると斬吼狼は

「カナヲ！俺達は帰るぞ！！？焯牙の事が心配だろうが大牙を信じろ！

悪いようにはしねえさ」

「嫌！私は兄さんから離れない！離れたくない！！？」

そう言って頑なに焯牙から離れる事を拒否するカナヲだったが

「兄妹の絆か・・・カナヲ・・・兄を想うお前の気持ちは痛い程分かる

だが今はコイツを・・・四ノ宮焯牙を信じてやれ！！？」

そうカナヲを諭す大牙だが

「兄さんの事はいつだって信じてる！でも！」

それでも心配だから離れたくないカナヲはこの場に留まろうとするが

「お前焯牙なら牙狼になれるって信じてんだろ？だがな！焯牙が再び牙狼になつたらそれで満足か？お前はどうかんだ？焯牙の横に並び立てる程強いのか？焯牙の背中を任せられる実力がお前にあるのか？ハッキリ言わせてもらおうが俺は焯牙の背中を任せるなら桜花だと思っている！」

斬吼狼にそう言われたカナヲは悔しそうな表情で斬吼狼を睨むが斬吼狼が言っている事は間違つてはいないので反論出来ないでいたカナヲは

「私だつて強くなりたい！今の私じゃ兄さんの足手まといにしかならないのは分かつてる！！？でも・・・でも！！？私も・・・ううん・・・私は桜花さんよりも兄さんを支えられる存在でありたい」

そう決死の思いを斬吼狼にぶつけたカナヲ、斬吼狼はカナヲの答えに

フツと軽く笑みを浮かべ

「いい覚悟だ・・・と言いたいが魔戒法師でもある桜花に並び立つのは容易じゃないぞ？」

「だとしても・・・私は私だから！私にしか出来ない事がきつとある」

と斬吼狼の問いかけに自分の意志を伝えるカナヲ

「焯牙！お前の妹がここまで言ってるんだ！お前も期待に応え：って寝てるし」

大牙との激しいぶつかり合いの末致命傷を負った焯牙は大牙の腕の中でいつの間にか気を失っていたのだが

「・・・朔弥・総悟・コイツの体に鬼の血を注入したな？それも鬼無辻の血の濃い鬼の血を・上弦の鬼といったところか」

「うん・黒死牟の血と細胞を抑制剤と調合して回復薬に混ぜた薬を焯牙ちゃんに打ったの、そうしないと焯牙ちゃんは死んでたから」

「そうか・やけに止血が早いと思ってな、呼吸による止血だけで止まる傷ではなかったからな」

「驚かないんだね大牙ちゃん・それに怒られるかと」

「お前という前例があるしな、それにそうしないと駄目だったのだから」

何より朔弥、お前が焯牙の事を想って決断した事だ！私が口を挟む事ではない」

そう話し出す大牙と朔弥の二人を見て斬吼狼は

「あー悪いけど俺先に戻ってるわ！カナヲ！焯牙が戻って来るまでの間俺がお前を鍛えてやる！少なくとも今の焯牙に並び立てるよう厳しく指導するからな、覚悟しとけよ」

「・・・兄さんはどうなるの☒」

「大牙と朔弥がいるんだ・アイツらに任せとけ」

「・・・信用できるの？」

「俺にとつちや400年来の仲間だしな、誰よりも信用してるぞ？それにアイツ等は・・・ああ俺の口から語るのは野暮だな、それよりもだ！

焯牙よりも自分の事を考えろ」

「斬吼狼が鍛えてくれたら兄さんは私に背中を預けてくれるの？」

「それはお前の資質と努力次第だな、でもまあ少なくとも今のお前よりは確実に強いお前にしてやるよ」

「・・・うん・私強くなりたいたい」

「なら今から俺の事は師範と呼べ」

「それは嫌!!? 私の師範はしのぶ姉さんだから」

「ハッ! 義理堅い奴だな! なら総悟兄さんでも」

「それも嫌!!? 私の兄さんは兄さんだけだから!!?」

「お、おう・・・手厳しいな」

「総悟さんよろしくお願いします」

「・・・おう・・・悪くはねえな・・・んじや俺達先に戻ってるわ」

「斬吼狼ちゃん!!? カナヲちゃんをよろしくね!!?」

「総悟任せたぞ」

そんな会話の後、斬吼狼は振り返ると大牙と朔弥に挨拶がわりに軽く手を上げ英霊の間の扉を開き

「ああ!!? そういやもう一人いたわ!!? 不可抗力とはいえ裸にしちまったし詫びにチビガキの面倒も見てやるかな」

あっ!!? と溜花の事を思い出した斬吼狼はそう言いながら影を作り出すと

「総悟さんって小さな子供に興味あるの?」

斬吼狼が誰の事を言ってるのかまだ分かってないカナヲだったがチビガキを裸にしたと聞いて蝶屋敷にいる三人娘も危ないんじゃないかとドン引きするカナヲ、斬吼狼はそんなカナヲの対応に

「おい☒待てカナヲ! ジリジリと後退するな! アイツだ! 煌牙の妹のチビガキだ! アイツ童磨に捕まって喰われる寸前だったから俺も焦って童磨だけ綺麗に斬れなかったんだよ」

と必死に説明する斬吼狼

「それで溜花ちゃんの服だけ綺麗に斬って裸にしたって事? 凄く器用だね斬吼狼さん」

そう言っつて更に後退するカナヲ

「俺にそんな趣味はねえ!!? しかも総悟から斬吼狼に戻ってるし☒そもそもそんな趣味持つてる奴はアイツだろ!!?」

と必死に話す斬吼狼は大牙に向けて指を差すと

「うおっ☒危ねえ☒大牙急に剣を投げつけるな!!? 事実だろ!!?」

「私もそんな趣味はない!!? 私が好きになった人がそうだっただけ

だ」

「はいはい、言い訳はいいから」

「ほう!!? 私にサバツクを挑みたいようだな、相手になるぞ」

「いや・・俺忙しいからもう行くわ!」

と斬吼狼は慌てて影の中に逃げ込むと

「あつ×総悟さん・・あの! 兄さんの事よろしくお願いします」

先に影に逃げた斬吼狼の後を追うカナヲはふと立ち止まり大牙と朔弥に煌牙の事を託すと影に飛び込み英霊の間から消えていくのだった

「・・・朔弥・・いつ間にかこんなにも大きくなったのだな」

「うん・・煌牙ちゃんもカナヲちゃんも立派に成長してるよ・・親は駄目駄目だけどね・・」

「そうだな・・理由はともかく我が子を捨てる親に親を名乗る資格などないだろう」

「そうだね私もそう思うよ。でも! 何かしてあげたいって思うのは悪い事かな? 大牙ちゃんもそう思ってるからこんな回りくどい真似したんでしょ?」

「私は不器用でな、こんなやり方しか思いつかなかった」

「知ってるよ? 大牙ちゃんの事は私が一番理解してるよ」

「そうだな・・朔弥、話は変わるが黒死牟は気付いたと思うか?」

「うくん・・どうだろう? あれから400年経ってるし・・仮に気付いたとしても手遅れじゃないかな? だって私達の願いは届いてるんだし」

「願いか・・叶うのなら今の代でこの不変の歴史を終わらせ悲しみの連鎖を断ち切って欲しいものだ」

「出来るよ!!? 煌牙ちゃんなら!!? カナヲちゃんと一緒なら必ず出来るよ!!?」

だってあの子達は・・私達の子供なんだから!!?」

「そうだな・・私も子供達を信じよう!」

「うん!」

「朔弥、煌牙に投入した黒死牟の血と細胞の効果はいつまで保つ?」

「恐らく二週間つてとこかな？」

「そうか・ならばこの二週間という短期間で焠牙を徹底的に鍛え上げる、通常なら死に追い込まれる程の極度の負荷だが幸いにも鬼の力を有しているから死にはしないだろう」

「そこまでやるつもりなの☒」

「焠牙が生きているという事実が明るみになれば黒死牟は確実に焠牙を殺しに来る！だからこそ焠牙には今より強くなってもらわねばならん!!？」

「少なくとも奴と渡り合えるだけの実力を」

「大牙ちゃんの気持ちは分かるよ・・分かるけど・・私は」

「稀代の魔戒法師といえど人の母、お前の気持ちは分かる。出来る事なら私が生きている間に奴を・・鬼無辻を討ち果たし子供達に鬼殺という過酷な道を閉ざしたかったのだが」

「うん・大牙ちゃん若くして死んじやったから・・痣の発現の代償が寿命を縮めるって縁壺ちゃん言ってたし」

「だからこそ私に出来る事はこれしかないのだ、過酷な道を歩む息子に

過酷な運命に抗う力を！」

「私は・・私はどうすればいいかな？」

「お前は今まで通りでいいのではないか？魔戒法師として魔戒騎士と共に戦い母として子供達の行く末を見守ってやってくれ」

「大牙ちゃん」

「大丈夫だ！焠牙が私との修行を終えた時焠牙は再び牙狼に!!？四ノ宮焠牙しかねない焠牙だけの牙狼になれる筈だ!!？」

大牙と朔弥が焠牙とカナヲの實の両親だという事実が判明するが当の本人達は知らぬまま時は経ち、焠牙は朔弥のサポートを受けながら指導という名の命がけの死闘を大牙と共に英霊の間で繰り広げ、カナヲもその後目を覚ました溜花と共に斬吼狼を相手に激しい鍛錬を積んでいた

くそれから二週間後く

「うわああああ!!? お兄! お兄いい!!?」

「瑠花!!? 良かった! 瑠花が生きてくれて本当に良かった」

修行中朔弥から二週間前の出来事、妹の瑠花が童磨と交戦の未死亡、後に斬吼狼が直前に救出していた事を聞かされていた焔牙はこうして再会出来た事を喜び泣きながら飛びついて来た瑠花を優しく抱きしめると

「総悟! 瑠花を助けてくれてありがとう! 本当に感謝してるよ!!
? . . . だが裸にした事は兄ちゃんとしては許せんなあ!!?」

「焔牙待て!!? マジで喰われる寸前だったんだって!!? . . . スマン!!
?」

「だってよ! どうする瑠花?」

「恥ずかしいからその話は辞めて!!?」

と赤面しながら会話を強制的に中止すると

「焔牙様!!?」

そう焔牙の名を叫びながら物凄い速さで近寄って来たのは

「あれ? お前下弦の肆じゃん、何でここにいるんだ?」

「そんな!?! 焔牙様が言ってくれたじゃありませんか! 俺に仕えろって」

「いやそんな事言っていないけど」

「そんな事よりお体の方は大丈夫なんですか? どこか痛めたりしてませんか?」

「それは良いけど . . . 何でサラツと流してんの」

「あら、そんな事言っではいけませんよ焔牙さん! 零余子さんは貴方の怪我を治そうと懸命に頑張っていましたしこの二週間不在の貴方をとても心配していました」

「 . . . そつか! ありがとな! それと珠世さんもありがとう」

「おい!!? 焔牙!!? 珠世様の治療を試みたいに言うな! 珠世様に失礼だろ!!?」

「おっ! 愈史郎さんじゃないですか、差し入れありがとなく良いもの読ませてもらったよ」

「ん？俺は書物など持っていった覚えはないが」

「○月×日今日の珠世様は『くたばれクソ煌牙アアア!!?』」

と零余子、珠世、愈史郎を交えて会話する煌牙はキレた愈史郎に追いかけられながら逃げ回っていた

「何遊んでんだ☒煌牙は」

「でもあんなに楽しそうな兄さんを見るのは初めて」

「よくし♪私も煌牙ちゃんに混じっちゃおうかな♪」

「そんな事してる場合ではない！」

『その通りよ！耳飾りの少年が今日から任務に復帰、柱も動くみたいだし一筋縄じゃいかない相手よ、十二鬼月・上弦の可能性もあるわ』
「・・・ザルバみたいに喋ってる」

『ええ!!?私はアルバ総悟のパートナーよ！それよりあの阿呆魔戒騎士を何とかしなさい!!?今は夜、貴方達の仲間が既に鬼と交戦してる筈よ!』

「うん・兄さん!!?炭治郎達が任務復帰みたい！愈史郎も巫山戯てないで真面目にやって!!?」

煌牙と愈史郎の追いかけてこを呆れながら見ていた斬吼狼と大牙に対しカナヲと朔弥は満更でもないようだが状況が状況なのでカナヲにしては珍しく大声でそう叫ぶと

「おう!!?ハハッ！愈史郎怒られてやんの」

「何で俺だけなんだ！お前も同罪だろ！」

「お兄も愈史郎も五十歩百歩!!?争いは同レベルでしか起きないだよ！」

「俺とコイツを一緒にするな!!?」

「黙れ!!?」

「あい」

子供のような掛け合いを続けていた煌牙と愈史郎だったが業を煮やした大牙の一喝にビビリシユンと大人しくなると

「四ノ宮煌牙・お前は二週間という短期間で以前より強くなった。だがそれで終わりではない!!?人の想いが明日へと未来へと紡がれていくように守りし者としての戦いもまた紡がれていく！俺は戦って

死ぬなど甘い事は言わん！いいか!!？四ノ宮焯牙!!？必ず勝って帰って来い!!？お前を待つ者達の為に！お前が守りたい者の為に!!？紡がれし全ての想いがお前の力になる！そしてそれこそが!!？」

『黄金騎士牙狼』

大牙の激励に応えるべく焯牙もまた牙狼の名を叫び同調すると

「俺行くよ！大牙さん!!？ありがとう!!？」

そう言つて焯牙は英霊の塔を駆け出し牙狼剣が突き刺さる地に向かうと

カナヲ達も焯牙を追つて走り出していく

「朔弥・焯牙は私と縁壺の想いを紡いでくれたよ」

「うん・後は焯牙ちゃんに託そう、今の焯牙ちゃんなら金色の刃も」

「そうだな・さあ朔弥！お前も焯牙達の元へ行きなさい！息子が牙狼剣を引き抜く瞬間に間に合わなくなるぞ」

「あつうん！そうだね!!？行かなくちゃ・・・大牙ちゃん・・・またね・・・大好きだよ」

「ふっ・私も愛している」

こうして朔弥もまた焯牙達の元へ向かい一人英霊の塔に残る大牙は

「黒死牟・四百年前お前が取り逃した私の息子がお前の頸を必ず断ち斬る・・今の焯牙は縁壺並みに強いぞ・覚悟しておけ」

そう言いながら大牙は英霊へと戻り焯牙達の行く末を見守るのだった

その頃焯牙達は

「兄さん」

「お兄」

「四ノ宮さん」

「焯牙」

「焯牙様」

「焯牙ちゃん」

「・・・」

牙狼剣の前に立つ焔牙を見守るカナヲ達、焔牙は一度皆の顔を見渡し一度頷くと牙狼剣をジツと見つめフウ々と深く溜息を吐くと牙狼剣の柄を両手でグツと握り締め

(牙狼剣よ！もう一度俺に伝えてくれ！俺は・俺は!!?)

心の中でそう思いながら耳を澄ましている

心の中でそう思いながら耳を澄ましていると

キーン

牙狼剣から澄んだ音が焔牙だけに聴こえると

「うおおおおおおお!!?」

そう叫びながら渾身の力を込めて牙狼剣を引き抜こうとする焔牙、そんな焔牙に応えるかのように牙狼剣もまた地に突き刺さる刀身が姿を現していきやがて焔牙の手によつて完全に引き抜かれる

その様子を見守っていた一同は喜びを露わにし焔牙に駆け寄ろうとすると焔牙は牙狼剣を天高く突き出し牙狼剣を見上げながら

「俺は！魔戒騎士四ノ宮焔牙！黄金騎士牙狼の称号を受け継ぐ者！」

そう力強く宣言する焔牙とその様子を見ながら嬉しそうに笑うカナヲ

実の息子の晴れ姿に涙を流す朔弥、表情は崩さないものの僅かに口元が緩む斬吼狼、兄の姿に見惚れ呆然とする瑠花とその様子を見守っていた珠世達だったが

「焔牙！復帰早々で悪いが鬼殺の仕事だ！」

『鴉の情報によると無限列車という汽車で四十人以上の人が行方不明、現地向かった隊士も帰ってこないみたいで柱が動くそうよ、貴方のお気に入りの方やも一緒よ』

「俺は一足先に向かうからお前達は準備が整い次第合流しろ」

斬吼狼アルバ両名がそう説明すると

「運行中の無限列車にどうやって合流するんだ？お前がいないと影も作り出せないんだろ？」

と聞き返す焔牙だったが

「安心しろ！無限列車の走行路線上の各地に朔弥の術式を書き込んだ

八卦符を事前に貼り付けている、後は何とかしろ」

そんな適当な斬吼狼の回答に

「何一つ安心出来ねえ!!?」

と突っ込んだ焠牙をよそに斬吼狼は後は知らんと言わんばかりに「じゃあな」

そう言つて一人先に無限列車へと向かい影に飛び込むのだった

「お兄大丈夫だよ！無限列車の運行予定と路線は把握してる！現時刻から換算して一五分後にトンネルを通過する筈だよ！」

「さすが溜花！ありがとな！なら十分で準備して待機しよう」

そう打ち合わせすると

「はい！皆の隊服だよ！霊獣の加護を施してあるから前の隊服より丈夫になつてるからね」

そう言いながら朔弥から手渡された隊服を受け取った焠牙は時間があまりないのでその場で着替え始め、恥ずかしながら着替えるカナヲと溜花は珠世の気遣いで着替えを見られる事なく事なきを得たのだが

「あれ？俺の魔法衣は？」

「ないよ？隊服の一部に使っちゃったし、溜花ちゃんの新しい魔法衣として再利用したから」

焠牙達に新調された隊服の素材に焠牙の魔法衣が使用されてる上に溜花の新しい魔法衣は焠牙の魔法衣を溜花のサイズに合わせて直し新調してるので今の焠牙には魔法衣が無かったのだが

「お兄のおさがり・・・大切にするからね」

と嬉しそうに袖を通し出した溜花を見て何も言えなくなり魔法衣を諦めた焠牙は

「仕方ないな！まあいいや！とにかく早く合流しないと」

そう言つて朔弥に術式を構築するよう促し一同は炭治郎達がいる無限列車へと向かうのだった

――そして現在

緊張が支配する中焠牙と猗窩座の激突を見ていた炭治郎達、猗窩座

の放った破壊殺乱式に肝を冷やしていたがそれでも焠牙の無事を信じ固唾を飲んでいたのでが

「……何が起きたんだ・俺には焠牙さんが何をしたのか全く分からなかった」

「一瞬・ほんの一緒だけど鯉口を切る音と鞘に刀を仕舞う音がほぼ同時に聴こえた」

「スゲエ・やっぱアイツスゲエ!!?山の王を名乗るだけの事はあるぜ」

「前から思っていましたでしたが山の王って何ですか!?お兄が凄いのは最初から知ってますが」

と炭治郎達が話していると

「抜刀から納刀までの一連の動作を一瞬で：牙の呼吸と似ているが剣速も威力も今の方が格段に上だ!」

「ん?参の型と式の型の掛け合わせたのかなあ?」

とほんの僅かだが焠牙の動作に反応出来ていた杏寿朗と桜花の二人が考察すると戦況を静かに見守っていたカナヲが視線を焠牙に向けたまま

「今のは抜刀から切り返しの左右二連撃：初撃で鬼の両腕を斬り飛ばして切り返して胴体を両断したの」

そう二人に説明するカナヲ、人一倍動体視力に優れたカナヲだからこそ今の攻防が見えていたのだが

「四ノ宮妹!今の四ノ宮の動きが見えたのか!俺や四ノ宮妹でさえ視認するのも難しかったが」

とカナヲを称賛する杏寿朗だったがカナヲは杏寿朗に視認を移し困惑した表情を見せると

「私も桜花さんも四ノ宮妹で一括りにされたら分かりづらいです」

と杏寿朗に指摘するカナヲ、杏寿朗はそれもそうかと納得した顔付きになると

「そうか!それは済まない!!?」

そうカナヲに謝るが反省はしても改善はされないのだろう、半端諦めた眼差しで杏寿朗を見るカナヲに桜花が

「じゃあ年の順で私が壹号！カナヲちゃんが貳号！瑠花が参号って呼べば分かりやすいね♪」

と意味の分からない事を言い出した桜花、カナヲはそんな桜花を見ながら隊服から銅貨を取り出し指で弾くと

「裏・・・とりあえず無視する」

裏が出たので無視する事にしたカナヲ、因みに表が出ればツッコミを入れると決めていたがこれはこれで面倒臭い事になりそうなので裏が出て正直ホツとするカナヲなのであった

(・・・何をした!?？アイツは今何をした!・・・アイツの動きは感知しなかった!それなのに何故俺は斬られてる!?!?)

煌牙に胴体を両断された猗窩座は仰向けに倒れたまま狼狽えつつ何故斬られたのか記憶を辿るがその答えは見つからないままでいた

だがそんな隙を見逃す筈もなく煌牙は猗窩座の頸に斬りかかると猗窩座はハツと目を見開き両腕と下半身を瞬時に再生と同時に拳を地に叩きつけ土煙を巻き起こす

目眩しと僅かな時間稼ぎにしかならないがそれで充分、すぐ様起き上がり後退し体勢を整え反撃に転じようとする猗窩座だったが

――輝刃きばの呼吸 牙龍天晴――

土煙の中から空気が割れる音が轟くと同時に土煙が吹き飛び重い衝撃が

猗窩座の体を突き抜ける

それによって猗窩座は後方に激しく吹き飛ばされながら転げ回り、ようやく立ち上がったと思いきや胸部に激しい痛みを感じ目をやると胸には大きな風穴が空いており猗窩座は強者と戦う高揚感も鬼故の余裕も忘れ

焦りを見せ始めていた

(何なんだ!?？アイツは！何故俺の血鬼術が感知しない!?)

こちらを静かに睨みつける煌牙を見ながらそう考える猗窩座、土煙

で姿を認識出来なかったが自身の血鬼術破壊殺・羅針で相手の闘気を感知すれば対処出来る筈なのに感知しない

(・・・！アイツは最初から闘気が無かった・闘気の欠片も感じられない程弱い存在だと思っていたが対峙して分かる、アイツは杏寿朗と同等・・・いやそれ以上！なら何故闘気が無い？)

不可解に思いながらも構えをとり再度戦闘態勢に入る猗窩座、下手に近づくより遠くから攻撃し出方を見ようと考えた猗窩座は跳躍し拳を握りしめ

――破壊殺・空式――

拳で虚空を打ち凄まじい拳圧が衝撃波となって煌牙に襲いかかる

(右肩、左脇腹、鳩尾)

肉眼では捉えられない空式に対し煌牙は聴覚による音、すなわち空気の振動で直撃箇所を察知し攻撃を避けていく

(当たらない!?？攻撃箇所を読んでいるのか?)

空式を避けた煌牙に少し驚くが、ならば避けきれない速度で手数を増やせば良いと猗窩座は拳の回転速度を上げ空式を乱発していく

「凄いな！上弦つてのは」

流星に全てを躲しきれないと悟った煌牙は、改めて上弦の強さに感心し

フツと軽く笑みを浮かべると

――輝刃の呼吸 牙龍天晴――

牙の呼吸陸の型と同じ要領でX字を描いた煌牙はその中心目掛けて日の呼吸陽華突を繰り出し、竜巻のような螺旋ではなく圧縮された空気の塊を撃ち出す

その際に空気が割れるような轟音が響き、衝撃波となって猗窩座の空式とぶつかり合う

虚空でぶつかり合う衝撃と衝撃、数で上回る猗窩座の空式と一撃の重さで上回る煌牙の牙龍天晴は結果拮抗し両者の間で空気が爆ぜ凄まじい突風が巻き起こる

それを合図にしてか、二人は互いに走り出し一気に距離を縮めると剣撃と拳撃の激しい応酬が始まり戦いは激化していく

だがそんな攻防も長くは続かない

「まさかとは思っていたが、やはりそうか！焠牙！お前は既に至高の領域に達しているな！アイツと同じように！おかしいと思っていた！杏寿朗と同等以上の強さを持つお前が何故闘気を発していないのか」

そう言いながら徒手空拳を繰り出す猗窩座、だが凄まじい速度で放たれる拳撃も一撃で死に至らしめる凶悪な蹴りも全て焠牙に届く前に斬り落とされ擦り傷すらつけられないでいた

「素晴らしい!!？焠牙！お前は素晴らしい!!？よく人間のままその領域に辿り着いた！俺の攻撃を先読みし反応する速度、剣術だけでなく体術も一流の技術、俺はお前程の人間を見た事がない!!？お前は絶対鬼になるべきだ!!？」

そう言つて喜びを露わにする猗窩座、流れは明らかに劣勢な筈なのに余裕を崩さないのは鬼というアドバンテージがあるからなのか饒舌に語りかける猗窩座に溜息を吐く焠牙は

「さつきも言つたけど俺は鬼にはならないぞ？ほら！見てみるよ！お前達の苦手な太陽が見え始めたぞ？俺は太陽の下を歩けなくなるのは御免だね」

そう言いながら焠牙は後方の山を指差し猗窩座はハツと山の方向に目をなると空は薄らと明るみ始め時期に夜が明ける事を理解する

焠牙が来た時点で夜明けは近かったのだが互角以上の強敵を前に昂っていた猗窩座はそれを忘れ戦いに没頭していたので今更ながら時間がないと焦り始め

「焠牙！お前とはまだ闘いたかったが時間切れだ！今度こそお前は鬼になり俺と永遠に闘い続けよう」

そう焠牙に言い残しこの場を立ち去ろうとする猗窩座、すぐ近くの森に逃げ込めば陽光は差さないと急いで走る猗窩座だったが

――日の呼吸　日暈の龍・頭舞い――

ここで大人しく猗窩座を見逃す筈もない焠牙は猗窩座を斬り裂き退路を断つと

――破壊殺・滅式――

この闘いに終止符を打つべく全身全霊の一撃を放った猗窩座、その拳が煌牙に届く瞬間

――輝刃の呼吸 灰塵炎・迦楼羅――

牙の呼吸漆の型荒狗鷲と日の呼吸炎舞を掛け合わせた上下二連撃で猗窩座の両腕を肩から斬り飛ばした煌牙、滅式が通用しなかった猗窩座は咄嗟に飛び退き煌牙に眼を向けると

「黄金騎士・・・牙狼」

そう呟いた猗窩座の目の前には金色に輝く黄金騎士牙狼の姿が
そして牙狼は猗窩座へと一步、また一步と歩み始めると

――破壊殺・碎式 鬼芯八重芯――

牙狼の接近を許さない猗窩座は両腕を再生し牙狼に向けて左右八連の乱打を打ち込み牙狼の鎧ごと煌牙を砕きにかかるのだが
ドンッ!!?

強烈な踏み込みで猗窩座に近づいて来た牙狼、猗窩座の放った鬼芯八重芯の直撃を受けて尚勢いは止まらず猗窩座の間合いへと入り込むと牙狼渾身の右拳が猗窩座の顔面に吸い込まれていく

（砕けない☒確かに俺の攻撃は煌牙に直撃した！なのに何故鎧を砕けない！俺の力を持ってしても煌牙には敵わないというのか!!?）

牙狼に殴り飛ばされた猗窩座はよろめきながら立ち上がり牙狼を
睨み付け

（このままだと俺は死ぬ！攻撃速度が恐ろしいまでに速い上に闘気も感知しない！煌牙に殺されるのが先か太陽に焼かれるのが先か）

自らの死期を感じ取った猗窩座は焦りとは逆に落ち着き、冷静になると何故か思考が軽くなり体の感覚がより洗練されていく事に気付く

（今まで闘ってきた中でこんな感覚はなかった：煌牙を超える為に余計な物を削ぎ落とせ）

そう考えながら神経を研ぎ澄まし、感覚を全身に張り巡らせていく
猗窩座

鬼という優位性を保ち常に優勢で闘ってきた猗窩座、強者との闘い

においてもそれは変わる事はなかった、だが煌牙との闘いで自らの優位性さえも危うく更には太陽という最大の弱点も重なり初めて命の危険を感じた事でその局面を乗り越えるべく生存本能が、武人として更なる高みへと猗窩座を押し上げる

日の出まで時間はないが更なる高みへと至るきつかけになった煌牙に内心感謝しつつ早期決着をつけるべく猗窩座は感覚を研ぎ澄ませ自身のもてる最大の技を煌牙へと繰り出した

――破壊殺・終式 青銀乱残光――

ほぼ同時に無数の乱打を繰り出し圧倒的な手数と絶大な威力で牙狼を仕留めにかかる猗窩座、そんな怒涛の攻撃を躲しきれないと判断した牙狼はその攻撃ごとまとめて斬り飛ばすと決意すると咆哮を上げ

――輝刃の呼吸 極光蓮華――

それは光の帯、幾重にも重なる超高速斬撃の軌跡がオーロラのような輝きを放ち猗窩座の青銀乱残光とぶつかり合う

一瞬の間に百を超える斬撃と拳撃のぶつかり合いは激しい火花と轟音が響き煌牙達の闘いを見守る炭治郎達にはそれがまるで花火や蓮の花のように見えていた

そんな激突の末競り勝ったのは牙狼、全ての拳撃を弾かれただけでなく両腕さえも斬り落とされた猗窩座、自身の最大の技さえも真つ向勝負で押し負け驚愕の表情を浮かべる猗窩座、その瞳に映る光景は「猗窩座！お前の陰我を断ち斬る！」

この闘いに決着をつけるべく飛び込んできた牙狼の姿、金色に輝く雄々しき姿が、真紅の眼の獣が喉元を噛みちぎらんと迫る光景だった（煌牙の動きが・黄金騎士牙狼の動きが止まったかのように感じる：死期を感じた瞬間時の流れが緩慢になったが今はそれ以上だ・俺は更なる高みへ、至高の領域に辿り着いたのか？）

時としては一瞬、だがその時間を長く感じる猗窩座は思考を駆け巡らせ

反撃の一手を模索すると

（腕が再生しない☒・いや再生はしている！だが遅い！遅すぎる！時

の感覚を考慮してもこの再生速度は異常だ！)

牙狼に斬り落とされた両腕の再生が追いつかない猗窩座、牙狼剣の特性である再生速度の阻害が効力を発揮し反撃の一手に踏み出せない猗窩座だったが

(ならば脚式で・・・っ！脚が動かん☒何故だ☒何故動かん！動かなければ！動かなければ!!?)

即座に脚技による迎撃を試み猗窩座だったがその脚さえも動かない、このままでは反撃するどころか避ける事も叶わず頸を斬られるを待っただけなのだが

(俺はこんなところで死ねない！何の為に強くなった！何の為に鬼になった・・・何の為に?)

ふとよぎる自身の存在理由、何故鬼になったのか何故強くなったのか

だがその理由が分からない、だが駆け巡る思考の中で一つだけ理解した事がある

(そうか・・・俺は負けたのか・・・剣術と拳術、技と技のぶつかり合いで俺は焠牙に負けたのか・・・認めるよ四ノ宮焠牙、お前は俺より強かった

・・・完敗だ)

それは自身の敗北、駆け巡る思考は走馬灯、頭では理解出来ていなかったが体が理解していた、故に動かない

ー牙の呼吸 壺の型 断空の牙ー

漆黒から赫く変色した牙狼剣が、想いを紡いだその刃が猗窩座の陰我を断ち斬るように軌跡を描き不変の歴史が動き出す

煌牙と猗窩座の闘いはあまりにも激しく怒涛の展開だった

そして痛感させられる上弦の異次元ともいえる強さ、杏寿朗との闘いでえ目で追えない展開だったがそれ以上の展開だ

炭治郎達は蝶屋敷での実戦訓練を経て柱の実力を、煌牙の実力を体感し理解はしていた。理解はしていたがそれは自分達との実力差であり稽古である以上命のやり取りはない

つまり四ノ宮煌牙の本気の闘いを知らない、鬼と対峙する柱の真の実力を知らない炭治郎達はこの無限列車での闘いで初めて柱の実力を思い知らせる

機能回復訓練を、実戦訓練を経て強くなった、常中が出来るようになって確実に以前の自分より一步前に進めた。だが杏寿朗と猗窩座の闘いで淡い希望が砕かれた

ようやく乗り越えた壁の向こう側、その先には越えられない大きな壁があり杏寿朗はその先にいる、そんな杏寿朗でさえ上弦という壁に苦戦している、果たして自分達はそこまで辿り着けるのか？その壁を登れるのか？不安に押し潰されそうな心を奮い立たせるがそれでも不安が消える事はない

だがそんな炭治郎達に僅かだが希望が訪れた、その希望は杏寿朗でさえ苦戦していた壁を易々と壊し炭治郎達に一筋の光を照らし出した

それは決して楽な道ではない、果てしなく遠く険しい道だとしても一步踏み出せば前に進む、ならば前に進もうその先に希望の光が待っているのだから

それがこの無限列車での闘いで得た経験と道標、炭治郎達は改めて強くなろうと誓うのであった

その炭治郎達の決意の少し前、煌牙と猗窩座の決着だがまだ完全に終わった訳ではなかった

鬼は日輪刀で頸を斬れば死ぬ、これは魔戒騎士の武器魔戒剣も同様だ

だが頸を斬っても斬られた鬼は即死する訳ではない、ないのだが確実に死という終着点へ向かう

鬼は死の間際に人間だった頃の記憶を思い出す

どんな鬼でも元は人間、死という生物の呪縛から解放された時、鬼という呪縛からも解放されたのか定かではないが人間だった頃の記憶が蘇る

牙の呼吸壺の型で猗窩座の頸を斬り落とし決着を付けた牙狼だがこれで終わりではなかった

牙の呼吸壺の型で猗窩座の頸を斬り落とした牙狼、その猗窩座の頸に牙狼剣が通った直後反響する金属のような音と共に周囲に広がっていく金色の波動が猗窩座から放たれていく

その波動を一身に受けた牙狼、赫き牙狼剣の刀身が一瞬だけ金色に輝くが輝きが消えると赫い牙狼剣の刀身もまた本来の漆黒の刀身に戻り牙狼はこれ以上闘う事はないと鎧を送還し猗窩座に視線を向ける

(猗窩座・・・)

その煌牙の表情は辛そうで、上弦の参を討ったという喜びなど一切感じられなかった

頸を斬り落とされた猗窩座はそんな煌牙と視線が合うと

「勝者が辛そうな顔をするな・・・お前は幾人もの柱が討てなかった上弦を討ち取った強者だ・・・堂々と顔を上げろ」

負けを認め死を迎える猗窩座はそんな煌牙を讃えるが煌牙の表情はそれでも晴れない

「俺の事はいいから・・・お前はもうゆっくり休め・・・狛治」

猗窩座の頭の前で膝をつき猗窩座の頭部に触れた煌牙はそう言つてフツと笑みを猗窩座に見せると猗窩座は眼を見開き

(狛治☒・・・煌牙は何を言ってるんだ☒俺の名は猗窩座・・・猗窩座？

・・・狛治・・・狛治・・・猗窩座・・・狛治)

煌牙の言葉に思考を駆け巡らせる猗窩座、狛治という名を呼ぶ度に

脳裏に浮かび始めた記憶、親しげに話しかけてくる人物が脳裏に浮かぶが未だ誰なのか分からない猗窩座、戸惑いの表情を見せる猗窩座だったが

「さっき金色の波動を受けた時、お前が人間だった頃の記憶が俺に流れ込んで来たんだ・・・あの金色の波動は破邪の波動、鬼という呪縛を浄化する光だ」

そう言いながら猗窩座を見つめる煌牙、煌牙の言葉通りなら狛治という名は人間だった頃の名前、おぼろげながら必死に記憶を辿り出す猗窩座は遂に自身の人間だった頃の記憶を思い出す

狛治という少年が貧しい生活の中病気だった父親の薬代を得る為に盗みを働いていた事、捕まり奉行所で罪人の烙印を刻まれた事、そんな息子に重荷を背負わせたと息子の為に自ら命を絶った父親の事、荒れて喧嘩三昧だった狛治を拾い弟子にしてくれた素流道場の師範の事、その師範の娘が病弱で看病していた事、そしてその娘恋雪と結ばれて夫婦になった事、思い出さなくもないが隣の剣術道場に師範と恋雪を毒殺された事

自暴自棄になってた時無惨に鬼にされた事、弱者を嫌い強さを求める修羅の鬼猗窩座になるまでの半生の記憶が蘇り

「そうだ・・・俺の名は狛治・・・俺は・・・俺は大切な人を守れなかった
一生を懸けて守ると誓ったのに守れなかった」

そう言いながら涙する猗窩座、その記憶を共有する煌牙も猗窩座のあまりにも酷い半生に俯き

「俺もそうだった・・・俺も家族を守れなかった」
そう呟いた煌牙に

「お前も鬼に家族を殺されて鬼狩りに」

鬼殺隊のほとんどは家族を鬼に殺された者達、その復讐の為に刃を振るうと認識していた猗窩座はそう問いかけるが

「俺の家族を・・・弟や妹を殺したのは両親だよ・・・別に両親だとは思っちゃいないが」

と猗窩座に返した煌牙

「・・・そうか」

思わぬ返答に返す言葉もない猗窩座、その頭部は既に灰になりつつあり

猗窩座が消えるのも時間の問題だった

その時だった

『何をしている？猗窩座！』

猗窩座の頭に響く無惨の声、その声の影響で狛治としての記憶が狛治の人格が抑え込まれそうになると

『猗窩座!!？殺せ!!？四ノ宮焯牙を!!？何故目の前にいるのに殺さない!!？猗窩座!!？猗窩座!!？』

次第に怒号に変わっていく無惨の声、それに呼応するかのよう沈黙したいた猗窩座の胴体が動き出し少しずつだが失った両腕と頭部が再生し始めていく

(辞めろ!!？辞めろ!!？俺はもう闘いたくない!!？焯牙を殺したくない)

埋もれていく狛治の意識が必死に抵抗するが無惨の支配力には叶わず

猗窩座の肉体は再生を続けていく

だが焯牙は何をするでもなくただ再生していく猗窩座を眺めていると

焯牙を助けようと杏寿朗や桜花が駆け出して来た

「煉獄さん！桜花！動くな!!？」

そんな杏寿朗達を制止する焯牙

「猗窩座の陰我は断ち斬った、俺を信じろ!!？」

そう力強い眼差しで言われ足を止めてしまう杏寿朗達

そうしているうちに猗窩座の肉体がほぼ完全に再生し焯牙に肉薄すると右腕を振りかぶり焯牙を貫こうとする

(辞めろ!!？辞めろ!!？辞めろー!!？)

必死に抵抗するが自分の意思とは裏腹に体が言うことを聞かない
もうどうにもならないのか？そう思っていた時だった

『狛治さん』

そう狛治の名を呼ぶ声が聞こえ狛治の右腕を優しく握る一人の女

性

狛治は思わず振り返り

「・・・恋雪さん」

狛治の眼に映ったのは狛治が守りたかった最愛の人、守りたくても守れなかった恋雪が狛治を繋ぎ止めようとしている姿だった

だがそれを無惨が許さない

狛治の精神に介入した無惨は狛治の頭を乱暴に掴むと

『強くなりたいのではなかったのか？お前はこれで終わりなのか？猗窩座』

そう言つて強引に支配しようとする

「そうだ俺は強くなる！頸を斬られたからなんだ？勝負？そんなの関係ない！煌牙を殺す」

無惨の支配で再び修羅の道を歩み出そうとする狛治、そんな狛治を真正面から受け止め優しく抱き込む恋雪

「狛治さんありがとう、もう充分です。もういいの、もういいのよ」

恋雪からの言葉に涙を流し無惨の支配から抜け出した狛治

恋雪をキツく抱きしめ返すと

「ごめん！ごめん！守れなくてごめん！大事な時傍にいらなくてごめん！

約束を何一つ守れなかった、許してくれ！俺を許してくれ！頼む！

許してくれ！」

号泣する狛治を優しく見守る恋雪は

「私達の事を思い出してくれて良かった、元の狛治さんに戻ってくれて良かった・・・おかえりなさいあなた」

そう言いながら泣き出した恋雪

『女！お前は私の邪魔をするのか？貴様がいるから猗窩座は』

そう言いながら恋雪の頸を絞め出した無惨、無惨は猗窩座が死ぬのを許さない、厳密に言えば自分の手駒が自分の意思に反する事を許さない

故にその原因たる恋雪を排除し狛治を再び支配下に置こうとするのだが

「恋雪さん!!?」

愛する者に手を掛けた無惨を許す筈もない狛治は無惨に殴りかかるが

無惨は恋雪を盾にし

『貴様自身の手で女を排除すれば貴様はもう戻れ』

そう狛治に言いかけた無惨、途中で言葉を遮ったのは恋雪が手元から消えたからだ、自分の腕と共に

「いやなんかもう凄く良い感じだったから邪魔しないでおこうと思っただけど、空気読めない糞野郎が邪魔してきたから俺も糞野郎の空気読まずにお邪魔しました〜」

と少し申し訳なき気味に話しかけてきた煌牙、その脇には恋雪を抱えており恋雪は何が起きたんだと煌牙と狛治をキョロキョロと見比べていると

「煌牙!!?何でお前が俺の精神に☒あと恋雪さんを離せ!今すぐ!!?」

と捲し立ててきた狛治、煌牙はそつと恋雪を解放すると

「さつき話した金色の波動、破邪の波動なんだけどき、あれ共鳴作用あつて俺の精神とお前の精神が共鳴したんだよ」

と説明する煌牙、朔弥からそう説明されていたがまさか本当に共鳴するとは思ってなかった煌牙もこれには驚いていた

『金色の波動だと☒四ノ宮煌牙!!?貴様はやはり危険な存在だ!だが貴様は何故生きている!!?黒死牟が殺した筈だが』

そう煌牙に話しかけてきた無惨、それに対し煌牙は

「黙れ!話しかけんな!!?空気読め!!?」

初見で無惨の事が嫌いな煌牙は狛治との会話に割り込んで来た無惨に辛辣な態度を見せると

『貴様!!?』

青筋を立て目が血走る無惨

「ブッフ」

そんなやり取りに思わず笑ってしまう恋雪

『貴様アア!!?』

笑われた事に怒りを覚えた無惨は恋雪に手を掛けようとするが

——破壊殺・碎式 万葉閃柳——

恋雪を守ろうと狛治渾身の一撃が無惨に炸裂すると狛治の拳から金色の波動が広がり無惨の精神体が一瞬で消滅する

「狛治さん!!？」

そう言いながら狛治に飛び込んで来た恋雪

「狛治さんはちゃんと約束を守って下さいました」

嬉しそうな顔で狛治に話しかける恋雪、狛治も満更ではないよう
で穏やかな笑みを恋雪に向けると

「煌牙！ありがとう！恋雪さんを助けてくれて！煌牙のおかげで俺は無惨の呪縛から解放された・・あの時お前が言っていた陰我を断ち斬るってこの事だったんだな」

晴れやかな表情を見せてそう話しかける狛治

「どうかな？俺はそのつもりだったけど最終的に陰我を断ち切ったのは狛治だろ？狛治が大切な人を守りたいと思うその心が、その心の強さが自らの陰我を断ち切ったんだよ！強いよお前は！」

そう言いながらフツと笑う煌牙

「心の強さか・・今までの俺は純粹に力による強さを求めてきた・・もし心の強さがあつたら俺はあの時鬼にならなかつたのかもしれないな」

そう言いながら過去を振り返る狛治、そんな狛治に笑顔を見せる恋雪は

「狛治さん！昨日を振り返るより前を向いて明日を目指しましょう!!？」

病弱だった私の未来を見てくれた狛治さんみたいに私も未来を・・もう死んじやってますから来世を目指します！ですから狛治さん!!？生まれ変わったらもう一度私と・・夫婦になつてくれますか？」

そう狛治に来世のプロポーズをする恋雪、煌牙は邪魔しちや悪いと狛治の精神世界から離脱しようとするが

(あれ？狛治さん？何で俺のコート掴んでんの？俺が空気読んでるって事察して?)

煌牙をまだ逃すわけにはいかない狛治は煌牙のコートを掴んだまま

「恋雪さん…もう一度約束させて下さい!!? 俺は生涯をかけて貴方を守ります!!?」

来世での約束を交わした狛治とそれを間近で見せつけられた煌牙
(コイツ良い事言ってるけど俺のコート掴んだままだと台無しだよ?)
いやホント良い事言ってるけどさ)

もうお腹いっぱいですと言いたげな表情の煌牙は心の中でそう思っていると

「煌牙…いつか生まれ変わった時またお前と逢えたら俺はお前と戦いたい!!?」

といきなり話しかけてきた狛治

「いや、来世でもお前と闘うってなんか嫌だ」

互いに敵同士だったが闘いを経て分かり合えた煌牙と狛治、折角仲良くなれたのに来世とはいえまた闘うのは嫌だと拒否すると

「煌牙…闘いではなく戦いだ! 今度は真正面からじゃなくお前の横でお前と同じ方向を向いて戦いたい! 敵としてじゃなく仲間として友として」

お前と一緒に戦いたい大切な人を守るために!!?」

鬼と鬼狩り、今世では敵同士だったが来世では仲間や友として戦いたいと話す狛治

「想いこそが永遠そう言っていたな…煌牙、お前に俺の想いを託したい! この想いを明日へ、未来へと繋げてほしい」

そう言っつて煌牙に想いを託す狛治

「私も! 狛治さんと一緒に想いを託したいです!」

と恋雪も狛治と一緒に想いを託すと言おうと

「煌牙さん! 狛治さんを救っていただきありがとうございます!」

この御恩は一生忘れません!」

と煌牙に頭を下げる恋雪、煌牙は一生も何ももう死んでますけどと内心思いつつ突っ込む事も出来なかつたのでただ苦笑いするしかなかった

「焠牙さん！貴方ならきつとこの悲しみを終わらせる事が出来ると思
じています！だからどんな事があっても・私と狛治さんは焠牙さん
を応援します！」

グツと両手で握り拳を作り焠牙を見つめる恋雪

「ありがとう！だったら絶対負けられないな！」

そう言いながら笑う焠牙は

「じゃあ俺そろそろ戻るわ！狛治！恋雪さん！またな！！？」

そう言つて焠牙は狛治の精神世界から離脱し現実に戻っていくの
だった

「黄金騎士牙狼・凄い奴だったよホントに」

そう焠牙に対する感想を漏らす狛治、その狛治に迫真の顔をした恋
雪がグツと顔を狛治に近付けると

「狛治さんも負けていません！！？焠牙さんが狼なら狛治さんは狛犬で
す！犬も狼も大して変わりません！！？」

と恋雪なりの激励を狛治に送ると狛治は拍子抜けた後プツと笑い
出すと

恋雪もそれにつられて共に笑い合いながらゆつくりと消えていく
のだった

「焠牙ちゃん！！？」

猗窩座が放とうとしている一撃に思わず叫び駆け出した朔弥、焠牙
を助けたいと思う気持ちに背中を後押しするかのように加速し焠牙
と猗窩座の間に割り込んできた朔弥はそのまま焠牙を抱きしめ我が
身を盾にして焠牙を守ろうとした

その猗窩座の一撃は焠牙でもなく朔弥でもなく猗窩座自身に向け
られた

猗窩座の意図を理解出来ない朔弥は呆然と猗窩座の行動を見てい
ると

「焠牙・上弦を討った事で鬼無辻はアイツを解き放つかもしれん・
気を付けろ・アイツは・あの逃れ者の鬼は・・・正真正銘の化け

物だ」

そう焠牙に忠告した猗窩座、その体は崩壊が始まっており完全に消えるのも時間の問題だった

だがそのまま消えてゆくのを黙って見てられない焠牙は猗窩座に拳を突き出し

「狛治」

と名を呼びながら握り拳を解き

「たなごころ掌、俺達はもう友達だろ？敵として拳を突き合わせたけど友達なら握手だ」

焠牙の言葉の意図を汲み取った猗窩座はフツと笑みを浮かべながら握手を交わし固い友情を確かめながら崩れ去っていくのだった

そして日が昇り陽光が辺りを照らし始めると

「……朔弥さん悪い……もう限界だわ」

猗窩座の最期を見送った焠牙は抱き付く朔弥にそう言ってその場に仰向けに倒れ込んでしまう

そのまま一緒に倒れ込んだ朔弥は今にも泣きそうな顔をして焠牙の顔を覗き込み

「焠牙ちゃんどうしたの？何処か怪我したの？何処か痛いのか？」

そう焠牙に尋ねると

「眠い」

とだけ答え焠牙はようやく闘いの緊張感から解き放たれるのであった

「うん！うん!!？そうだね！そうだったね!!？焠牙ちゃんずっと頑張ってた！この二週間の間ほぼ不眠不休で大牙ちゃんとずっと闘い続けてた!!？」

「疲れたよね？辛かったよね？……焠牙ちゃん……お疲れ様……ゆっくり休んで良いんだよ？」

大粒の涙を流しながら焠牙の頭を撫でる朔弥はそう焠牙を労うと

「なんだろうな……凄く懐かしい気がする……凄く落ち着くというか安心できるというか……アンタに抱き着かれるのはちよくちよくあるけ

焠牙は仰向けに寝たまま牙狼剣を伊之助達に差し出すと

「上等だ!!? そんなもん楽勝だぜ」

フンスと鼻息を荒くして気合充分な伊之助が善逸よりも先に牙狼剣を受け取ると

ドスン!!?

「フンガー!!? なんじゃこのクソ重え剣は! 上がらねえ!!? おい! 紋逸! 権八郎! お前らも手伝え!」

見た目で裏切られた牙狼剣のあり得ない重さに耐え切れず伊之助は牙狼剣を落としてしまうが再度持ち上げようと必死になるが牙狼剣はピクリとも動かず炭治郎と善逸の三人がかりで挑戦するのだが

「上がらない! 全力で持ち上げようとしているのに全然上がらない!」

「はああああああ何なのコレ! 何なのおおお! 馬鹿みたいに重たいんですけどおおお!!?」

「フンガー!!?」

三人がかりでも牙狼剣は微動だにもせず悪戦苦闘していると

「よし!!? 俺もやろう!!?」

と杏寿朗も興味を示し今度は四人がかりで挑戦すると

「うむ!!? 全く動かん!!?」

そう言つて焠牙に視線を向けると

「四ノ宮!!? 言いたい事聞きたい事が山程あるがそれは後でいいだろう!!?」

上弦の討伐見事だったぞ!!? そして何よりも!!? よく無事に帰つて来た!!?

今はゆつくり休め!!?」

そう言つて焠牙を労う杏寿朗、焠牙はその言葉に甘えそのまま眠りに就こうとするのだが

「陽光が! 陽光が ああ!?!」

と騒ぐ零余子の叫び声が聞こえハッと飛び起きた焠牙、零余子の事をすっかり忘れていたので陽光が差す中まどろんでいたのだが

「桜花!!? 米吉を飛ばして鬼殺隊本部に伝令を」

「もう飛ばしてるよ〜♪」

「ならば後は隠が合流して後処理するだけ・・・じゃ済まないよな？」
「ごく一部を除いて乗客の皆は今回の件と無関係だからね、四ノ宮財閥の方で保障しないと」

「だな・・・朔弥さん悪いけど皆を連れて先に戻っててくれ、俺と桜花は後処理するからもう少しこの場に残るよ」

煌牙と桜花がそう会話すると

「お兄！私も一緒に残る！」

と手伝いを申し出た瑠花

「兄さん！私も兄さんのお手伝いするよ？」

とカナヲも名乗り出ると

「煌牙さん!!?俺にも手伝わせてください!!?」

「まあ朝だし鬼と関係なさそうだし俺も手伝えるなら手伝うけど」

「ガハハハ！親分に任せとけ！」

と炭治郎達もこの場に残ると煌牙に話すと

「四ノ宮!!?俺もやろう!!?このままだと柱として皆に顔向け出来ん!!?」

杏寿朗までもが煌牙達を手伝うと言い出したので煌牙はフツと笑みを浮かべ

「うし！なら皆で終わらせて皆で一緒に帰りますか」

そう皆に向かつて話す煌牙は、あつ！と何かを思い出した様子を見せると

「言いそびれたけど、皆心配かけてゴメン!!?それとただいま!!?」

そう言つて煌牙は皆の顔を見ると皆嬉しそうな顔をしていたので

煌牙はこれをもって任務終了とするのであった

「じゃあ私達は先に戻ってるね煌牙ちゃん、なんかもう可哀想だし」

と言いながら朔弥は森の方を指差す、その先には木陰に隠れてこちらの様子を伺っている零余子と煌牙に向けて親指を下げブルーイングしている愈史郎、こちらに背を向け木にもたれ掛かりカツコつける斬吼狼が目に入る

「・・・うん・・・零余子は可哀想だな！零余子は」

斬吼狼はともかく自分にブルーイングしてくる愈史郎をあえて外し

た煌牙

「朔弥さん悪いけど戻るなら師匠の所に戻ってくれないか？心配してるだろうし帰って安心させてやりたい」

と朔弥に話し朔弥もそれに頷くと

「んじや終わらせて来ますかね」

そう言っつていつの間にか持ち上げる事を諦め放置されていた牙狼剣をヒョイと持ち上げる煌牙

「はああああ何で馬鹿みたいに重たい剣を軽々と持ち上げてんのおおお馬鹿なのお柱つて馬鹿なのおおお!!?」

驚きのあまりかなり失礼な事を言い出した善逸、杏寿朗を含む四人がかりでも持ち上がらない牙狼剣を軽々と持ち上げる煌牙に驚くのも無理はないがそもそも先の鬪いで牙狼剣を振り回していた事を考えれば今更驚く事ではないだろう

その隣にいた伊之助も善逸のような反応はないものの衝撃的だったのか鼻から汗が噴き出しワナワナと震え狼狽していると

「お兄の事馬鹿つて言うな!!?」

と煌牙を馬鹿呼びわりされ怒り心頭の溜花が善逸の脛を蹴り飛ばすと善逸は悲鳴を上げながら転げ回りそれを見た炭治郎が顔を痙攣らせ自業自得だなど思っていたら

「魔戒剣は心の在り方で羽のように軽くもなるし大木のように重くもなる、だから単純に重たいって訳じゃないんだよ」

と説明する煌牙の言葉に頷く炭治郎は

「じゃあ俺もその剣を扱えるようになれば牙狼になれるんですか?」

牙狼に興味津々な炭治郎は目を輝かせて煌牙に聞くのだが

「え?・・・ああ、うん・・・まあそうだな・・・頑張ればいつか炭治郎にも扱える日が来るかもな・・・うん」

と少し困惑気味の煌牙だったが炭治郎は尚も食い下がり

「どうすればなれるんですか!!?俺、もつともつと頑張つて強くなります!!?」

と気合い充分な炭治郎、煌牙はふうくと溜息を吐き

「まずは呼吸無しで鬼と戦えるようになるうか?鬼殺隊士と魔戒騎士

は本来戦うべき敵が違う！最低限呼吸無しで鬼と戦えるようにならなければ魔戒騎士としての道は開けない」

自分自身も同じ道を辿り魔戒騎士になりそして牙狼になった為、その道を炭治郎に示すのだが

「だがその前に炭治郎にはやるべき事為すべき事があるだろ？魔戒騎士を目指したいならその後だ！まずはヒノカミ神楽・いや日の呼吸を炭治郎は知らなくちゃならない」

と炭治郎に告げる焔牙

「呼吸無しで鬼を☒・え☒・それって桜花さんが言っていた・いやそれよりも！ヒノカミ神楽！焔牙さん何か分かったんですか☒日の呼吸って☒」

と興奮気味に息を荒げていく炭治郎、そんな炭治郎にちよつと引き気味になった焔牙は

「ああ・まあ・色々とな・後でゆっくり教えるからまずは俺達がやるべき事を先にやるぞ」

と言いながら無限列車へ振り向くと炭治郎も無限列車へ振り向き

「はい!!？まずは乗客の皆さんを助けましょう!!？」

気持ちを切り替えた炭治郎は気合い充分な表情で無限列車へと駆け出していくのだった

そして一足先に戻った朔弥達を後にして焔牙達は無限列車の後処理や乗客達の保護をやり始める

その後米吉から報告を受けていた鬼殺隊本部から派遣された隠が合流するのだが焔牙が生存、無限列車に合流し上弦の参を討ち取った報告はまだされていなかった為驚愕のあまり暫く機能しなかったのは仕方ないのだろう

そんな展開がありつつも焔牙達や隠の尽力、桜花が要請した別の列車での車両の牽引と後処理がひと段落ついた頃、日は正午を過ぎており列車に同乗した焔牙達は駅で降りしてもらおうと

「焔牙さん寝てますね」

「うむ、四ノ宮の家に帰れば騒がしくなるだろう！それまでゆっくりと寝かせてやるべきだ！」

連日の疲れが溜まって列車内で爆睡していた焔牙、駅に着いても起きる気配はなく隠が焔牙を背負おうとするがここで一悶着が起きた

誰が焔牙を背負おうのか

誰も焔牙を背負いたくないから揉めた訳ではない

むしろ逆だ！鬼殺隊の中で柱というのは誰もが尊敬し敬意を表する存在である。その中でも焔牙は柱最強の呼び声や黄金騎士という他の柱にはない特別な力がある。加えて死んだと思われた焔牙が生存し上弦の参を討ち取ったのだから隠が騒ぐのも無理はない、特に女性の隠は顕著だ

焔牙の容姿が優れているだけでなく四ノ宮財閥の息子、そんな超優良物件を放っておける筈もなく

「四ノ宮様は私が背負うのよおおお」

列車内に響き渡る隠女性陣の咆哮、獣のようにギラついた眼に隠男性陣は口を挟む事も出来ずにいたが

「兄さんは私が背負うから・・・邪魔しないでね」

爆睡する焔牙に近寄って来たカナヲがそう言って笑顔を向ける。だがその表情とは裏腹に滲み出る威圧感、寝ている焔牙を起こすなど言わんばかりの圧に隠達は縮みあがりただ頷くしかなかったのだ

そんなやり取りがありつつ四ノ宮邸を目指す一行、焔牙を寝かせる名目で歩いて帰ってたので四ノ宮邸に着く頃には日も暮れ始め

「カナヲちゃん、焔牙重くない？私が背負うよ？」

「別に重くありません！兄さんを背負うのは妹である私の役目です」

「それなら私も焔牙の妹なんだし私の役目でもあるよね♪」

「大丈夫です!!？兄さんは桜花さんより私に背負ってもらう方が嬉しいに決まっていますから」

「んんん？どゆこと？」

「だって桜花さんより私の方が胸ありますから」

「・・・は☒今なんて言ったのかなあ？もう一度言ってくれないかなあ」

「二度も同じ事言う必要ありますか？傷口を抉るだけですよ？」

そう言つて睨みあうカナヲと桜花、桜花としては単純に気を遣つただけなのだが桜花に対抗意識を燃やしているカナヲは桜花の提案を受け入れず険悪な雰囲気になつてゐるが

(煌牙さん!!?起きてください!!?寝ている所申し訳ないけどカナヲと桜花さんを仲裁出来るのは煌牙さんしかいません!!?寝ている所申し訳ないけど)

桜花に胸の話は禁句それを知つてゐる炭治郎や善逸、杏寿朗は下手に刺激しないよう黙つていたのだが

「二人共喧嘩しないの!!?お兄が起きちゃうでしょうが!!?お姉!カナヲさんはお姉より胸があると云つただけでお姉がどうとは言つてないでしょ?カナヲさん!!?逆です!!?お兄がカナヲさんを背負う時、背中に胸が当たるから胸がある方が嬉しいんです!!?逆だと意味がないですよ」

と二人の仲裁に入る溜花だったが本人の声が一番デカいというオチがついたところに

「耳元で騒ぐなよ・・・おかげで目が覚めた、おはよう・・・もう夕方だけど」

と目を覚ました煌牙が喋ると

「煌牙は胸が大きい娘より控えめの方が好きだよね?」

「控えめよりある程度ある方が良いよね?兄さん」

と矢継ぎ早に質問する桜花とカナヲ、寝起き直後に脈絡もない質問をされ思考が停止する煌牙に

(鱗滝さんがいたら判断が遅いつて煌牙さん叩かれそうだな)

二人の矛先が煌牙に向かつた事で割と他人事な炭治郎はそんな事を考えてゐると

「質問の意図が分からん!!?という訳で一連の流れを知つてゐるであろう炭治郎達に答えて貰います」

と矛先を炭治郎達に向けた煌牙、桜花とカナヲは炭治郎達にクルリと顔を向けると

「よし!!?四ノ宮邸まであと少しだ!!?走るぞ!これも鍛錬だ!!?」

と杏寿朗が大きな声で叫び走り出すと炭治郎達も『はい!!?』と大

きな声で返事をして全力で走り出した

つまり逃げたのだ

という事はその矛先は再び焠牙に向けられる事になるのだが

「は？嘘だろ☒・・・せめて俺を担いで逃げてくれよ炎柱ああ」

と悲壮感漂う焠牙、逃げたくてもカナヲがガッツリと抑えているので降りる事も出来ない焠牙は

「カナヲそろそろ降ろしてくれない？」

と頼んでみるも

「嫌！兄さん逃げる気だから絶対降ろさない!!？」

と拒否するカナヲ

「その通り！逃げたら捕まえて押し倒して絶対離さないからね」

とカナヲの意見に同調する桜花

「お姉の考え方なんだか危ない人みたいだよ？・・・いや元から危ない人だけでも」

そうツツコミを入れる溜花、今の焠牙にとって溜花だけが唯一の味方だったのだが肝心の溜花は焠牙の助けに入る事もなく

「んで？お兄はどっちが好みなの？私は今は控えめだけど将来的に大きくなる予定だし？どっちでも良いかなと思うけど」

そう溜花にまで質問された焠牙、血を分けた実の妹、義理とはいえ実の家族だと思っっている妹達の際どい質問に本気で困る焠牙は

「俺・・・彌豆子ちゃんみたいな妹が欲しい」

と一言、焠牙の心情を省みればこう思ってしまうのも無理はないのだが

「むー♪むーむー♪」

ここで素早く彌豆子になりきる桜花、突然の変わり様に呆然とするカナヲと溜花だったが焠牙は

「四ノ宮財閥の令嬢の素がこんなんだなんてお偉いさん達は知らないんだろうなあ〜」

と呆れる焠牙、そんな焠牙に向けて桜花が

「あつ☒そう言えば今度大東亜重工を筆頭に関連企業との会合があるってお国のお偉いさんが言ってたよ？何でも向こう側の会長の孫

娘も同席するから焠牙には絶対来て欲しいって言った」

と喋り出した桜花、話の流れが変わったのは良かったのだがその内容も重い、鬼殺隊としての活動を主にしている焠牙だが四ノ宮家の長男としての立場もあるのでこのように表社会にも顔を出さなければいけないの

だ

「うっわ・・・それ絶対面倒なやつ！要するに俺と向こうの孫娘を引き合わせるのが一番の目的だろ？四ノ宮財閥と大東亜重工を結びつける政略結婚つてのがあちら側の狙いなんだろうな」

「だろうね！国が軍備拡張してる時だからこそ軍需産業の需要も増えるわけだし！だからこそ貿易や国内の運搬を一手に引き受ける四ノ宮財閥と懇意になれば供給も捗るし拡張も容易になるからね」

「四ノ宮財閥も異国の企業と取引して石油や燃料、化学製品を国内に流通させているし軍需産業に全く関わってない訳ではないけど積極的に軍備拡張を推奨してるつもりもないし」

「そもそも鬼殺隊にいる以上明日の命の保証は出来ない訳だし、将来性を見据えた話をされてもなあ」

「だよね〜！というか四ノ宮家の次期当主とか財閥の後継者とかお父さん達どうするんだろうね？順当にいけば私達の誰かなんだけど私達鬼殺隊だし絶対がないわけで」

「私達以外を考えるなら辰巳兄とか春姉？でも二人とも鬼殺隊だし：確実性を取るなら修也君とか小沙夜ちゃんとか？」

「どうだろうな？現当主の師匠が最終決定権持つてるけどこういう話は四ノ宮一族の承認も必要なわけだし」

「あく四ノ宮家って一枚岩じゃないからね、焠牙を養子にする時も猛反対してみたいだし！」

「でもお兄が牙狼になつた途端に掌返して持ち上げたけどね」

「牙狼は四ノ宮一族の象徴だったからね、その牙狼に認められたら誰も文句は言えないよ！反対してた人達も今じゃ焠牙こそが四ノ宮一族の頂点にふさわしいって言ってるし」

「お兄！大出世だね！良いか悪いかは知らないけど」

「全くだ！・・・出世・・・そういやそんな事を言ってた奴が鬼殺隊にいたよな？確か同期で」

「ああ！私が那田蜘蛛山で蹴り・・・助けた人だね！」
「蹴りってお姉・・・何してんの」

と四ノ宮三兄妹で内輪話が始めると話に入れないカナヲは一人オロオロしながら様子を伺っている

「あっ！カナヲ悪い！話についてこれないよな？」

カナヲの様子に気付いた煌牙がそうカナヲに声をかけるとカナヲはコクコクと二回頷き

「兄さん結婚するの？」

「は☒・・・いやしないぞ？そういった話を断る前提で話してたんだし」
「でもこの話は別として煌牙ってそういうの興味なさそうだよね」

「興味無いって訳じゃないぞ？ただ俺は人並みの幸せとかそんなのを求めちゃいけないって思ってたからさ」

「兄さん・・・でも今は違う・・・ちゃんと前を向いて歩く・・・だよな？」
「ああ」

「ほほ〜う♪煌牙に聞く事が増えましたなあ〜♪帰ったら今までの事色々聞くからね〜♪」

「今聞かないのか？」

「帰り道で長々と話されても困ります、嫌がらせでしょうか？」

「急にしのぶ口調になるなよ！しかも無駄に声真似が上手いぶんなんか苛つく」

「えっへん！容姿端麗才色兼備品行方正全てを兼ね備えた完璧美少女だからね!!？」

「社交場ではな！お前に羨望の眼差しを向ける娘や好意を寄せてくる野郎共を見ると可哀想でしょうがない」

「だよね〜♪でもさ！将来は親の後を継いだり何かしらの理由で人の上に立つ立場になるんでしょう？だったら外見だけで人を判断したら駄目じゃない？その人の本質を見抜く資質がないと！煌牙も彌豆子ちゃんを鬼という外見だけで判断しなかったでしょ？」

「桜花・・・お前って阿呆だけど馬鹿ではないよな！」

「ちよつと刺があるけど褒め言葉として受け取っておくよ♪って話ばかりしてないで早く帰ろうよ?」

「ああ」

と立ち話で時間を食ってしまったが日が暮れる前に帰りたいので一同は急いで四ノ宮邸に向けて走り出すのであった

但し焠牙は未だカナヲに担がれたままである

「・・・煉獄さん・・・」

「なんだ!」

「ここは村の入り口・・・じゃないですよ?」

「そうか! 竈門少年達は初めてだったな! ここが四ノ宮の家の敷地だ!!? 俺も初めて来た時はよもやこんなにも広いとは知らず驚いた」

広大な四ノ宮邸の敷地に啞然とする炭治郎達だったが杏寿朗は慣れた様子で話し四ノ宮邸の敷地に足を踏み入れると

「あつ☒辰巳! 帰って来た・・・はい☒」

「・・・炎柱あああつ!!? 違あああう!!? 申し訳ないけど! ホント申し訳ないけど!!? アンタじゃなああああい!!?」

焠牙達の帰りを待ちわびていた辰巳と春の二人は敷地の入り口でずっと待っていたのだがやって来たのは杏寿朗、思わずそう突っ込みガツカリすると

「それは済まない!!? 四ノ宮達を待っていたのだろう! じきに戻る筈だ」

と杏寿朗が話していると炭治郎達もやって来て

「ん?・・・これまた凄いのが来たな、派手な髪色少年に裸猪・・・いや何で猪☒」

「いやそこも気になるけど何で上裸なの☒寒くない?」

と善逸と伊之助に目が留まると

「寒くねええわ!!? 風邪も引いてねえ!!?」

と伊之助が叫び出すと

「こんばんは!!? 俺は竈門炭治郎です!!? 突然お邪魔してすいません!!?」

二人の話題にも上がらなかつた炭治郎が名乗りだし自分の存在をアピールすると

「綺麗なお姉さん! 俺は我妻善逸で〜す!!?」

と善逸も春相手に名乗り出ると

「ああ…うん炭治郎君と善逸君ね…うん? 炭治郎君?」

「ああ! 噂になってた鬼の妹を連れた奴か!」

そう話す春と辰巳の二人、炭治郎はハツとしながら禰豆子の安全性を説こうと話しかけようとする

「ああ! 分かっている分かってる! 焠牙達が認めたんだろ? だったら俺達がどうこう言う必要ないから安心しろ」

「そうそう! 焠牙は人を見る目は確かだし、私達は焠牙を信じてる! その焠牙が信じてるなら私達も君達を信じるよ!」

「まあ本当なら焠牙関係無しに俺達自身が二人を信じてやりたいが初対面だし二人の事をよく知らないから! てことで今後とも宜しくな」

「うんうん! 信頼と努力は日々の積み重ねってね! という訳で宜しく」

そう話しながら炭治郎に握手を求めてきた二人、炭治郎は二人から感じ取った匂いに嘘偽りが無く心の底から焠牙を信頼している事を察して嬉しくなり満面の笑みを浮かべ

「はい!!? 宜しくお願ひします!!?」

確りと握手を交わした炭治郎達を微笑ましく見ていた杏寿郎は

「竈門少年! 俺は君達を信じよう! 裁判では君達ではなく四ノ宮を信じて受け入れたがあの時、無限列車で血を流し身体を張って乗客を守る竈門少年の妹を見た!!? 人を守る為に戦う彼女は誰が何と言おうと鬼殺隊の一員だ!!? 俺は君達を信じる!!?」

と炭治郎に熱く語り出すと自然と涙が溢れ

「はい…ありがとうございます…良かった…禰豆子!!? ホントに良かった」

溢れ出る涙を袖で拭いながらそう語る炭治郎、炭治郎と禰豆子の処遇を巡る裁判では反対の声も上がってはいたが半数以上が容認しお館様の判断もあつてお咎め無しで幕を閉じたが、その容認自体が焠牙への信頼で成り立っている事は重々承知していた、禰豆子自身が実弥の誘惑を跳ね除けた事実はあるがそれだけで信頼を勝ち取ったとは思えない

容認してるとはいえ辰巳や春の二人もまた禰豆子自身じゃなく焠牙を信頼してるからといった間接的な信用であり直接信用されているわけではない、だが杏寿朗は無限列車で禰豆子を見て炭治郎や禰豆子を直接信用し鬼殺隊の一員だと認めたのだ

その事実が堪らなく嬉しい炭治郎の心からの涙に貰い泣きした善逸と豪笑い飛ばす伊之助、それを微笑ましく見守る杏寿朗和やかな雰囲気にも包まれていると

「わああああ♪一日ぶりの実家だよおお♪」

「凄い、たった一日でこれだけ喜べるなんて！それなら私とお兄の喜びはそれ以上だよね？だってもう二週間以上帰ってないんだし！」

「まあ・それはそうだけどき・溜花お前覚悟しといた方がいいぞ？」

師匠もおやっさんも溜花は死んだと思つてた訳だし無事に生きて帰つて来たという事は？」

「・・・お兄・お願い！私と一緒に逃げよ？どこか遠くに！誰も知らない所で二人で一緒に暮らそ？」

「それは駄目！私も兄さんと一緒!!？だから三人で」

「いや二人共何言つてんの☒そもそも溜花は実の娘なんだし師匠やおやっさんが溺愛するのも無理はないだろ？諦めて受け入れろ」

「焠牙こそ何言つてんの？まさか自分は関係ないとか思つてない？」

「いや・そんな事はないけど」

そんな会話をしながら帰つて来た焠牙達、桜花は辰巳達にチラリと視線を向けると辰巳達は苦笑いしながら一度頷き

「なら覚悟してた方がいいよ？」

桜花はそう言つてニヤリと笑みを浮かべると

「焠牙ああああ」

そう叫びながら焔牙に駆け寄る辰巳と春、カナヲはちよつと不味いと察知し焔牙をその場に降ろして数歩後ろに逃げると

「心配したんだからなああ」

「帰って来てくれて良かったよ」

そう言いながら焔牙に飛びついた二人、焔牙の正面に辰巳背後に春という構図だが

「春！極まってる！焔牙の首に関節技が！」

「え×・・・あつ！焔牙ゴメン!!？」

「ゲホツ：死ぬかと思った：帰って早々春に殺されそうになるとは：覚悟してた方がいいってこの事か？」

「いや！違うからね×」

「ある意味こつちの方がマシ？少なくとも俺は屋敷の中にいたら死ぬる自信があるわ！ははは」

「いや屋敷の中で何が起きてるんだよ×あと暑苦しいから二人共離れて？特に春！胸が当たってる！」

「役得だろ？堪能しとけ！ははは」

「当たってるんじやなくて当ててるんだから当たり前でしょ？」

「少なくとも男に抱き付かれるのは役得じゃない!!？」

そう言いながら離れる気配のない二人、長年共に修行し気心の知れた仲だからこその振る舞いだがそれを面白くない面持ちで眺める者が二名

「へえ〜当たってるんじやなく当ててる・・・私への当て付けかな？」

「ふっざけんなよおおお!!？朝から色んな女の子とイチヤイチヤしやがって!!？それなのにその嬉しくないような顔おお！おっぱいをいっばい堪能してお腹いっばいだよって言いたいのかあああ×こつちは暑苦しい野郎共に囲まれ辟易してるってのになあんだその顔はああああ！謝れ！今すぐ俺に謝れ!!？」

理由こそ違うが共に嫉妬の感情を露わにする桜花と善逸、桜花の冷やかな視線に僅かな威圧感こそあるが大したものでもなくスルー出来たのだが

「善逸・・・ゴメンな」

謝った・・・煌牙は確かに謝った

だがその顔に反省の色は一切なく、寧ろ善逸に対する憐みが滲み出ていた

まるで上から目線・煌牙の態度は善逸の嫉妬に更なる拍車をかけ「ああああああああああああああああああああああああああああああ！！？」

汚い高音を撒き散らし嫉妬に狂う善逸、そんな善逸に冷やかな視線を向ける一同だったが

「あー！ー！！？凄く煩い叫び声が聞こえたと思えばあ！！？まきをさん！！？雛鶴さん！！？見て下さい！！？煌牙君ですよ！！？煌牙君！！？やっぱり死んでなかったんですねえええ！！？」

「アンタ！！？言い方に気を付けな！！？失礼にも程があるでしょうが！！？」

そんな叫び声が聞こえ振り向く一同、振り向いた先には三人の女性がこちらに向かって走って来ていたが

「生きていてすいませんでした！！？」

そう言つて土下座する煌牙、それを見た三人は青ざめた顔になり

「アンタ！！？なんて事言ってくれたんだい！！？柱に土下座させるなんて！！？」

「ああ！もう私達だけの問題じゃ済まされないわ」

「すいませんすいませんすいませんすいません！！？ワザとじゃないんです！！？決してワザとじゃないんですうう！！？生きていてくれた喜びが爆発して私の頭も爆発しちゃったんですうう！！？」

必死に謝り許しを乞うが柱に土下座させた事が許される筈もないと思ひ

更に青白くなつていくと

「ぶはっ！須磨さん相変わらず面白っ！久しぶりに良い反応が見れただけで帰って来た甲斐があったよ」

笑いながらそう話す煌牙、その反応に少し安心して表情を緩ませ

「じゃあ許してくれるんですね！！？」

そう言い出す須磨、それに対する煌牙の反応は

「は？許さんが？」

「そう言い放つ焠牙に」

「そんなああ!!？」

「そんな焠牙の言葉に絶望する須磨だったが」

「いや！間に受けすぎだろ☒冗談だって気付く筈だけど」

「焠牙君は冗談を言うような子じゃないと思ってたわ」

「私もだよ！それに顔が本気だったからね！」

「マジか☒あく！からかった俺が悪かったよ!!？全部俺の冗談だから三人共落ち着けよな」

「ホントですよ!!？普段冗談を言わない焠牙君が冗談を言うから本気だと思っただじやないですかあ!!？もう全部焠牙君が悪いんですよ！

反省して下さい!!？」

「だからアンタ！余計な事言うんじゃないよ!!？」

「口は災いの元ってこの事を言うのね」

「はは！．．．んで何で三人がここに来てんの？天元さんは？」

「天元様は屋敷で待機してるわ、柱の皆やお館様も集まってるのよ」

「柱だけじゃなく元柱のカナエ様や鱗滝様、元炎柱の慎寿朗様も集合してたわよ」

「．．．は？．．．いや．．．は☒．．．はああ!!？」

「そんな会話を続けていると理解し難い話が飛び出し困惑する焠牙」

「だって焠牙君無事に生きて帰って来るだけじゃなくて上弦の鬼までやっつけたんですもん!!？皆さん集まりますよ!!？」

「あ．．．いや．．．それはそれで良いけど何で今!!？しかもここなわけ☒お館様何してんの!!？柱の皆暇なの!!？」

「焠牙がそう言うのも無理はない、生きて戻って来た事や上弦を倒した事は後日鬼殺隊本部に招集、緊急柱合会議という形で報告するつもりだった」

「まさか当日に本部ではなく四ノ宮邸に集合してるとは夢にも思わない焠牙は頭を抱え」

「桜花お前この事知ってただろ？」

「うん♪米吉が教えてくれたよ？焠牙は寝てたからね」

「俺も当日に集まるとは思わなかったから驚いた！本部ではなく四ノ宮の屋敷にお館様自ら足を運ぶとは、よもやよもやだ!!?」

「……あくあ、帰ったら煉獄さんの飯作ろうと思つてたのにこれじゃ飯は当分作れそうにないな」

「む☒それは困る!!? 四ノ宮の作る飯が楽しみで今日は何も口にしていない!!?」

「だろ☒俺も腹減つてるし……あくもう!!? 柱合会議マジで面倒臭い!!?」

手つ取り早く終わらないかな?」

「焔牙♪私に任せて♪私も柱合会議面倒臭いと思つてたし♪」

「なら桜花に任せ……ん? 柱合会議が面倒!!? ……え? 桜花柱合会議出た事ないだろ?」

「あれ? 私焔牙に言つてなかったけ? 私は今牙柱代理なのだよ♪だから焔牙不在の時私が緊急柱合会議に出ただけどホント面倒臭かったよ」

「煉獄さんマジ?」

「うむ!!? 四ノ宮妹の言つてる事は事実だ!!? お館様の前で実際に面倒臭いとも言つていた!!?」

「はははは!!? 桜花お前スゲエわ! もうそのまま牙柱やってくれていざぞ! お前はもう牙柱引退するわ!!?」

そんな会話をしていると焔牙の発言に驚いた炭治郎が

「焔牙さん柱辞めちゃうんですか!!?」

目を丸くしながらそう質問する炭治郎、炭治郎だけじゃなくカナヲや瑠花達も驚き焔牙の反応を待っていると

「はあく……お前等真面目過ぎ!!? さつきもだけど俺だって冗談位言うぞ? まあ今の発言は半分本気だが」

溜息を吐きながらそう話す焔牙、正直なところ桜花が柱をやつてくれたら楽になるからやつてほしいと思つてはいたが柱引退は認めて貰えないだろうと諦め半分の焔牙は

「とりあえず屋敷に帰ろうか? ここで話し込んででも仕方ないしさ」

そう言つて焔牙は重い脚取りで屋敷へと歩き出し、そして屋敷の扉

をゆつくりと開け開くのだった

そしてその扉を開いた時だった

「焔牙様ああああ!!?」

いの一番に出迎えたのはいつも玄関で焔牙の帰りを待つ執事のゴンザであり今回のような状況でも自らの仕事を全うするゴンザの姿に変わらぬ日常に戻って来たのだと、そう思う焔牙はゴンザに笑顔を向け

「ただいま!!?」

そんな焔牙を見て歓喜の涙を流し始めるゴンザ、だがすぐさま白地のハンカチで涙を拭き執事としての使命を全うしようとする

「二」焔牙様ああああああ!!?「二」

ゴンザの後ろで待機していた四ノ宮家のメイド一同が泣き始め

「申し訳ありません焔牙様」

これじゃ仕事にならないと思うがメイド達の気持ちは痛い程理解出来るゴンザは咎める事も出来ず代表して焔牙に謝ると

「俺の方こそゴメン!!?皆に心配をかけて不安にさせてしまった、そんな俺の為に泣いてくれてありがとう!!?」

そう言つて焔牙はゴンザやメイド一同に深くお辞儀をすると

「顔を上げて下さい焔牙様・私達は鬼殺隊ではありませんが焔牙様の日々の努力をこの目で見て参りました。鬼殺という過酷な使命、確かに努力だけで必ずしも良い結果が生まれる訳ではありません・ですが私達は信じているのです!諦めない限り道は続いていくのだと、どんなに険しい道だとしても諦めず一歩また一歩と歩みを止めない限り道は続くのだと!それを教えてくれたのは他でもない!焔牙様です!だからこそ私達は信じていました!貴方は絶対に生きています!そして貴方は私達が信じた通り生きてこの場所に戻って来てくださいました!私達はそれだけで十分です!胸を張って下さいませ」

焔牙に絶対の信頼を置くゴンザの優しいげな笑みに絆され感極まる

焔牙

涙腺が緩み一筋の涙が零れ落ちる瞬間

「わああああ!!?ゴンザさん!!?ただいまああああ!!?」

少し遅れて屋敷に入つて来た桜花一同、久方ぶりの帰宅と慣れ親しんだゴンザの姿に喜びの声を上げる溜花

「おおお！溜花様！お帰りなさいませー！このゴンザ溜花様のお帰りを心よりお待ちしております!!？」

と満面の笑みを浮かべ温かく迎え入れるゴンザ

「ただいま♪今帰ったよ♪」

温かい空気にご満悦の桜花がそう言う

「お帰りなさいませ桜花様」

そう言いながらぺこりと一礼するゴンザは

「この度の任務大変ご苦労様でした」

そう言うのとゴンザは玄関の後方にいる炭治郎達に目を向ける

「洋風の屋敷が珍しいですか？」

ただでさえ広い四ノ宮邸ましてや洋館に上がる経験など全く無かった炭治郎達は物珍しきでキョロキョロと周りを見渡し驚いていたがゴンザの呼びかけでゴンザに振り向くと

「あつ！その・・・ここが煌牙さんの家なんだなあつて」

「フツ、左様ですか」

そうしみじみと言う炭治郎に温かい笑みを浮かべたままのゴンザは

「申し遅れました、私は四ノ宮家で執事を務めさせて頂いてる倉橋ゴンザと申します。竈門炭治郎様今後とも宜しく願います」

丁寧な物腰で炭治郎に自己紹介するゴンザは隣にいる善逸と伊之助にも目を配り

「我妻善逸様、嘴平伊之助様も大変ご苦労様でした！重ね重ねで失礼ですが私倉橋ゴンザと申します！」

「ガハハハハ！俺の事は親分と呼べ！」

「ちよっ×馬鹿！失礼だろ！・・・すいません！この裸猪が失礼しました」

ゴンザに対し尊大な態度の伊之助とそれを諫める善逸だったが「では伊之助様は今後親分さんと呼ばせてもらいましょうか」

と割と乗り気のゴンザ、それに気を良くした伊之助が

「ならジジイは今から俺の子分だ！」

と鼻息が荒くなる伊之助、失礼にも程があると慌てふためく善逸と伊之助を諫めようとする炭治郎だったが

「はあくゴンザは私の執事だよ？言うなれば私の子分！勝手に子分にしないでくれる？」

「うるせえ！ジジイが親分と認めただから俺が親分なんだよ！」

と桜花と伊之助の間でゴンザの取り合いが始まり双方睨み合いが始まると

「そうなると僕はゴンザの大親分って事になるね！つまり伊之助君！君は僕の子分って事になる！」

そう言いながら話に割り込んで来たのは

「おやつさん！」

「お父さん！」

「旦那様」

煌牙、桜花、瑠花の父親でもあり元雲柱だった四ノ宮財閥会長、四ノ宮泰三が不敵な笑みを浮かべながら玄関先のロビー、二階へと続く階段から降りて来たのだった

「大親分だと誰だテメエ！なんで俺がテメエの子分にならないといけねえんだ！親分は俺だ!!？」

と泰造に牙を剥く伊之助だったのだが

「僕かい？そうだねえ・・・まあどこにでもいるような普通のおじさんってとこじゃない？」

あくまでも普通のおじさん、自身の立場をあえて主張せずのらりくらりと躲す泰三だったが

「この御方は鬼殺隊の中でもお館様に次ぐ立場の御方だ！それに加え雲柱として鬼殺隊に名を馳せた歴戦の勇でもある!!？」

「いや杏寿朗君さあ！回答が早すぎないかな？確かにそうかもしれないけど僕普通のおじさんって言ったよな？そこは空気読んで欲しかったんだけど・・・まあ言っちゃったもんは仕方ないか」

「これは失礼しました！」

そんな会話の中苦笑いの四ノ宮兄妹、元々掴みどころのない雲のよ

うな飄々とした性格の泰三だがまがりなりにも四ノ宮財閥の会長、地位も立場も格上の人間が普通のおじさんな訳ないと言いたいが、泰三は元からこういうった性格なので事の成り行きを見守るしかない煌牙達だが

「はああ△んなもん知るかああ!!? 親分は俺だ!」

「伊之助! いい加減にしないか!!? 匂いが普通じゃないだろう! 実力も格も全てにおいて伊之助より優ってる! とにかくこの人は普通じゃない」

「炭治郎おお!!? お前まで喋ると余計ややこしくなるから! ねえなんで△なんでお前煽ってくるの△馬鹿なのおお△」

と騒ぎ始めた炭治郎達

「面白い子達だね! まあ君が親分でいいとして・・・子分はどこにいるんだい?」

「子分ならここに在るぜ! 権八郎に紋逸、オーガは山の王だから別として桜花にチビっ娘、カナミに新しく子分になった女四人と野郎一人とそのジジイだ!」

誇らしげにそう主張する伊之助だが勝手な事を言うなどばかりに反感をくらいプンスカと怒り出す伊之助、そんな伊之助を見て笑い出した泰三は伊之助の両肩をグツと掴み顔を近づけると

「伊之助君、君が本当に親分としての自覚があるなら感情のままに暴れるのは良くない! 親分というのはただ偉いだけじゃなく子分達を率い道を指し示さなくちゃならないんだ! その親分がちよつとした事を取り乱すような事があればその親分について来た子分達はどうかなる? そんな親分についていきたいと思うかい? 少なくとも僕はそんな親分を親分とは認めたくないね! だから伊之助君! 君が本当に親分としての自覚があるならもつと周りを見て冷静に! 何が最善なのか良く考えるんだ!」

日本全国に展開する四ノ宮財閥の関連企業、いわば大勢の子分を率いる泰三の助言に反論の余地もない伊之助は真摯にその言葉を受け止め

「やっきはゴメンね」

先程の発言はちよつと横暴過ぎたと自ら反省、炭治郎達にしつかり向き合い謝ると

「うんうんーやれば出来るじゃないか伊之助君！あつ！因みに僕の子分達は日本各地に数え切れない程いるよ」

満足げな泰三だがちよつとだけ自慢したくなつたので伊之助が分かりやすいように子分という言葉で自慢すると

「うおおおッおっさんスゲエ!!？認めてやるぜ！おっさんはスゲエ親分だ」

「ははーまあ僕はあくまでも普通のおじさんなだけだね」

まだ言うか！そんな視線を飛ばす四ノ宮兄妹、その視線に気付き煌牙達に目を向けた泰三は

「やあーよく帰って来てくれたね溜花！愛しい愛娘がこうして帰って来たんだ！今すぐにでも宴会を開きたいところだね」

「旦那様！お気持ちは分かりますが産屋敷様がいらっしやってる最中ですので」

「まあそうなんだけどね、僕って鬼殺隊の裏方担当だし？正直なところ柱合会議とか関係ないからなあ・・・というかさあ？なんで産屋敷一家と柱が全員集合してんのッって感じなんだよね！僕が鬼無辻なら鬼殺隊全滅の絶好の機会だし上弦全員引き連れて総力戦で潰しに掛かるよ」

泰造の話す通り四ノ宮邸には鬼殺隊の中枢が総集結しこの場を全滅させれば鬼殺隊は事実上の全滅となる、この場にはいない隊員を含め鬼殺隊関係者など上弦には及ばないそう見立てた泰造の意見に深刻さを覚えた一同だったが

「とは言ったけど迂闊に攻め込む程馬鹿じゃないと思うよ、鬼殺隊が初めて上弦を討ち取ったという事は鬼無辻側にしてみれば初めて上弦を失ったという事になる！この状況で無策で襲撃を掛ける程愚かではない事は奴がこちら側に情報を掴ませない事から察する事が出来るし仮に襲撃するにしても状況のまとめ、対策を立て実行するにあたって昨日今日じゃ実現不可能！って事で僕の言った事はそんな可能性もあるのかあ程度で受け取ってくれて構わないよ」

と言う泰三だが、その可能性は鬼殺隊にとって最悪の可能性であり場の雰囲気为重くなる

「僕が言うのもなんだけどそう深刻にならないでよ、まあ本当にその可能性が実現されたならさ・・僕が戦えばいいだけの話だから！」

思ったより深刻な雰囲気になつてしまひ取り繕うように話す泰三だが

「その時は皆助けてよね！僕つてば普通のおじさんだから一人じゃキツイからね！まあ臨機応変でいこうよ」

そうあつけらかんとする泰三だったが

「深刻な話を長々と話しといて一人で勝手に自己完結してる！お父さんつて昔からそうゆうーとこあるよね？」

「よく言われるよ！最悪の状況を想定しそれに対する策を練つて最善を尽くす！でも案外間違つちやいないだろう？・桜花」

「おやっさん！その最悪の状況なんだけど、もしかすると俺達が想定する以上に最悪の事態になるかもしれない」

「ん？どうゆう事だい？」

「狛治が・・上弦の参が消える直前に俺に教えてくれたんだ！鬼無辻は逃れ者の鬼を解き放つかもしいないって！上弦の鬼に正真正銘の化け物とまで言わしめるその鬼が解き放たれたらどうなるんだろうつて」

「・・・参つたね！上弦が討伐されて吉兆の兆しが見え始めた途端にそれ以上の凶兆が現れるとは！・・気が変わったよ！僕も柱合会議に参加させてもらうとするよ！いや今回に限つてはこの場にいる鬼殺隊員全員が参加するべきだ！」

焔牙から知らされた内容に絶句する一同、上弦の鬼をようやく一体討伐出来たというのにその上弦から化け物とまで言われた鬼が存在するとは想定もしていなかった事で泰三は緩やかな顔付きを引き締め真面目な雰囲気でお館様含め柱が待つ応接間に向かうと決め

「ゴンザー！濟まないが皆を応接間へ案内してくれないかい？杏寿朗君！今回の任務の報告は君達でやってくれ！僕はちよつと焔牙と桜花に話があつてね！悪いけど焔牙と桜花は少し残つてくれないかい？」

キリツとした態度で指示を出した泰三、その雰囲気には呑まれ一切の反論もなく頷く一同はゴンザの案内で柱達が待つ応接間へ向かい出すと

「ちよつと場所を変えようか？」

そう焔牙達を促し泰三は自室でもある執務室へと歩み出すのだつた

「お父さん！お館様はほつといて良いの？」

「無限列車での報告なら杏寿朗君達で問題ないよ！どのみち後で合流するんだ！焔牙からの報告はその時でも大丈夫だし気にする事は無い、問題はさっきの焔牙の言った内容だ！」

「上弦以上の化け物って話？」

「まあね！実は君達が帰って来る前に朔弥さんや斬吼狼君と少し話をしてね、僕達だけで話したい事があるんだってさ」

「鬼殺隊を交えない話って事？その逃れ者の鬼が何なのか知らないけど良くない話だったのは何となく分かるよ」

「・・・多分・・・鬼じゃない」

「え？焔牙何か言った？」

「いや・・・詳しい話は合流してからで良いだろ」

執務室へと続く長い廊下を歩きながらそう会話する焔牙達、泰三はふと立ち止まり焔牙と向き合うと

「焔牙・・・今更だけどよく帰って来てくれたね！それに・・・以前の焔牙に比べて一回り、いやそれ以上に成長したように見えるよ！」

「だよね！というか焔牙前より強くなってるよ！なんか呼吸も違うし型も牙の呼吸の型とは違うし」

「うん・・・ただいま！呼吸については後で話すよ、皆にも聞いてもらった方が良いしさ」

焔牙はそう言うで一足先に執務室へ歩き出し

「焔牙どうしたのかな？」

「後で分かるさ！僕達も行くこうか」

そう話すと桜花達も執務室へ歩き出し朔弥達と合流するのだった

「あつ！煌牙ちゃん桜花ちゃんおかえり♪」

「よう！帰って来て早々で悪いな」

泰三の執務室に入った煌牙達を待っていた朔弥達はそう話すと辺りを見渡し

「花蓮ちゃんまで不在だと怪しまれるからね、とりあえずこの場に集まった騎士と法師だけで話を進めていくけど良いかな？」

と朔弥が話を進めようとする

「お館様や柱を交えて話す事出来ないのか？」

と疑問を口にする煌牙、折角屋敷に集まっているのに何故？と疑問に思う煌牙だったが

「煌牙ちゃんがそう思うのは分かるんだけどね、最悪妥協して輝哉ちゃんだけには話しても良いかもしれないけど柱や他の隊士達には話しちゃ駄目!!？絶対に駄目だからね!!？」

そう強く念を押す朔弥、普段見せない迫真の表情に鬼気迫るものを感じた煌牙は

「せめてカナヲだけには話しておきたい、アイツ絶対心配して首を突っ込んで来るからさ！ちゃんと理由を話した方が安心できる」

「ふはっ！アイツ桜花に対抗意識あるからな！寧ろアイツだけには知らせておかないとな」

煌牙の考えに同調する斬吼狼がそう話すと

「何でカナヲちゃんが私に対抗意識燃やしてるの？」

当然ながらそう疑問に思う桜花、煌牙もえ？そうなの？と目をパチクリさせ斬吼狼に視線を移すと

「煌牙を支えたいんだとさ！んで！煌牙を一番支えているのは誰だ？」

そう話す斬吼狼の質問に煌牙と桜花は顔を見合わせ

「ザルバ」

と答えると

「あ、いやーそうじゃなくてだな！」

「総悟・私ってば総悟の役に立ってないの？」

斬吼狼の中では桜花が現状で煌牙を支えている構図だったのだが煌牙桜花両名の答えはザルバ、実際煌牙の相棒としてこれまで共に戦ってきたのだから二人がそう答えるのも理解出来るがこの場に置いての答えは桜花、それを前提に話をしていたので斬吼狼は狼狽するのだが斬吼狼の相棒であるアルバが追い討ちのように寂しげな雰囲気醸し出しながら斬吼狼に話しかけて来る

「役に立ってるよ!!?・・はあく・・お前等魔導輪は勘定に入れるな！」

溜息を吐きながらそう話す斬吼狼、魔戒騎士の相棒として常に共にいる魔導輪まで勘定に入れるとややこしくなり話が進まなくなるので

「ザルバを抜きに煌牙を支え続けて来たのは誰だって話だ！」

斬吼狼がそう話すと煌牙達は再び顔を見合わせ

「カナヲ（ちゃん）」

と斬吼狼に告げると斬吼狼は拍子抜けしたかのような顔付きになり

「桜花じゃないのかよ!!?」

思わずそう突っ込んでしまうが

「私も煌牙を支える魔戒法師だっと思ってるよ?でもね?煌牙が魔戒騎士として、鬼殺隊として戦う根幹・始まりはカナヲをちゃんを守りたいって想いなんだよ・その想いが煌牙をずっと支え続けて来たんだよ

だから煌牙を誰よりも支えているのはカナヲちゃんだよ」

「なるほどね・そりやアイツも喜ぶわ!だがいいのか?煌牙を誰よりも支えているのは桜花お前じゃなくて」

「ん?それって大事な事?誰が煌牙を一番支えているかって競う事なの?そりや私も小さい頃に煌牙と約束したよ?私が黄金騎士を支える魔戒法師になるって!まあお父さんがよく言う適材適所ってやつだよ!

カナヲちゃんが煌牙の根幹を支える存在なら私は法師として黄金騎士を支える!それだけだよ」

そうあつさりと話す桜花、桜花には桜花なりの信念があると斬吼狼はそれ以上追求せず話を本題に戻し

「とりあえず当代の産屋敷当主とカナヲだけには教えるとして・・・朔弥！話すぞ？俺達の計画を！」

「うん・煌牙ちゃん！桜花ちゃん！泰三ちゃん！心して聞いてね！これから話す事を」

そう話すところの場の空気が張り詰め煌牙達はコクンと頷き言葉を発する事なく朔弥達の開口の時を待つ

「まず何故俺が鬼になったか・・・そこからだな」

「うん・煌牙ちゃんは知ってると思うけど、斬吼狼ちゃんは昔黒死牟に負けたの・・・当時は死んじやったと思ってたけど鬼となり生き延びて今に至るんだけど何で斬吼狼ちゃん・総悟ちゃんが鬼になるのを受け入れたのか・・・それはね」

「裏切り者を殺す為だ」

「斬吼狼ちゃん」

「大牙を含め俺達は元々違う世界にいた！鬼がいるこの世界とは違う別の世界だ」

「分かりやすく言うとね！煌牙ちゃんがこの世界に鬼なんかいないりや良いって思うとするよね？もし鬼がいなければ鬼殺隊も必要なかったし誰かが殺される必要もない！そんなももの世界！空想上の話だと思うけど本当は実在するの！」

「そのもしもの世界が本来俺達がいた世界、確かにその世界には鬼はいなかった」

「うん・鬼はいないけど鬼よりも厄介な敵がいた」

「それが俺達魔戒騎士や法師の敵、ホラーだ」

「私が残した文献にホラーとは何か書いてたから煌牙ちゃん達も少しは知識があるとは思うけど」

「俺達は元老院からの指令であるホラーを討滅する為にホラーを狩る日々を送っていた」

「ホラーの始祖、鬼で例えるなら無惨ちゃんみたいな存在かな？そのホラーの始祖メシア・・・そのメシアの涙って呼ばれる古のホラー」エ

イリス」を追い詰め最終的に討滅はしたんだけど・・・ね」

「そのエイリスってホラーは別の次元を開く力を持っていてな、簡単に言えば俺達の世界とこの世界を繋ぐ扉みたいなものだ」

「そのエイリスを討滅したからその扉は消えて問題無く指令を達成出来る筈だったの」

「だがそこで問題が起きた」

「ある一人の魔戒法師：いやホラーが俺達を裏切り俺達は次元の狭間へと飛ばされた」

「それで私達はこの世界にいるって訳」

「そしてそのホラーはこの世界で無惨と邂逅し鬼となった」

「でもホラーはホラー！元より人間じゃない！人間を鬼に変える無惨ちゃんの血もホラーからしたら自らを強くする為だけの増強剤、故に無惨ちゃんの支配も受けない厄介な鬼が生まれた」

「そしてそのホラーは人間を食べる事を辞め鬼を食べ出した」

「鬼も本質は人間、だけど無惨ちゃんの血の影響で人間より鬼の方が満足するみたいで・・・稀血みたいなものだね」

「そしてそのホラーは無惨と取り引きをした」

「人間を鬼に変え食糧を寄越せと、その代わりお前の敵は片付けてやるからね」

「自らに指図をするホラーを許せない無惨は取り引きに応じずホラーはその姿を消した」

「私達からしたらホラーが無惨ちゃんを食べてくれたら鬼はもう生まれなかったんだけどホラーにとって無惨ちゃんのご馳走を生み出す道具みたいなものだからね、食べる訳にはいかなかったみたい」

「そして無惨は自分の命を狙う俺達や鬼殺隊、ホラーの脅威から身を守る為に十二鬼月を作り強力な配下を従えた」

「そしてその十二鬼月の鬼、黒死牟に総悟ちゃんは負けたの」

「黒死牟は瀕死の俺に鬼にならないかと提案し俺はその提案に乗った、無惨からすればホラーを討滅出来る魔戒騎士を手駒に出来るのは嬉しい誤算だろうし俺ははずれ接触するホラーを討つ機会を得る訳だし互いに利があったからな。」

「それから大分が時が流れて再びホラーが無惨ちゃんに接触する事があったの」

「より無惨の血の濃い十二鬼月や俺を食う為にな」

「でも上弦全員と斬吼狼ちゃんを相手にホラーも一筋縄ではいかなかったみたいで」

「最終的にそのホラーは俺が討滅したんだがな・・・ホラーとはいえ元が魔戒法師、最悪の置き土産を残していやがった」

「ホントにね!!?置き土産さえなければ斬吼狼ちゃん人間に戻してあげたいんだけどね」

「全くだ!・・・って訳で俺は鬼になったという訳だ」

斬吼狼と朔弥の二人で総悟が斬吼狼という鬼になった経緯を話し終え煌牙達の反応を見てみると

「なるほど!斬吼狼君が鬼になった理由は理解したよ:だがその後無惨を斬らなかったのは何故だい?その置き土産とやらが関係してるのかい?」

「さつき煌牙が言っていた正真正銘の化け物ってその置き土産?」

「それも気になるけど引つ掛かる点が一つ!!?朔弥さんが鬼になった理由が語られてない!!?」

とそれぞれの疑問を口にする煌牙達

「さつき話したのは俺が俺になった理由、ここからが本題だ!お前等の疑問もじきに解けるさ・但し!煌牙の疑問はこの件とは全く関係ない!!?どうしても知りたきや朔弥に無理矢理聞くんだな!!?」

「え☒いや教えないよ☒例え煌牙ちゃんのお願いで絶対教えないよ☒」

必死に否定する朔弥だったが

「斬吼狼が話す本題ってやつも気になるけどさ、それよりもなんでアスタが鬼になったのか凄く気になる!多分今のまま話を聞いても心ここにあらずというか」

「え!?!駄目だよ煌牙ちゃん!!?乙女の秘密を暴こうとしちゃ!」

「乙女?・・・乙女ってこゆうのも乙女っていうの?」

「ちよ☒こゆうのって扱いが酷くない☒私そんな子に産んだ覚えは

ないよ！……って今のは無し!!?」

「安心しろ！俺もアンタから産まれた覚えはない!!?」

「……えう……ひつく……ふええ」

「ちよ!??何で泣いてんだよ!」

「あー焠牙が泣かしたー!」

「焠牙、泣かせるのは良くないよ」

「今の言葉は朔弥に効果抜群だな……焠牙が悪い訳じゃないんだがな」

「うん……急に泣いちゃってゴメンね……ひつく……焠牙ちゃんは何も悪くないの……悪いのは私の方だから」

「いや、俺も悪かったよ!朔弥さんってなんか親しみやすいっていうか遠慮なく言えるっていうか……ホントゴメン!これからは気をつけるよ」

「ううん……いいの!焠牙ちゃんはそのままでいて?……ゴメン、ちよつと頭冷やしてくる……斬吼狼ちゃん後はお願い」

「ったく!世話の焼ける奴だ!後は俺の方で話しとくからよ!顔でも洗ってこい」

「うん……ホントゴメンね」

そう言つて朔弥は執務室から逃げ出すと

「焠牙……お前も行って来い!」

朔弥を見かねた斬吼狼は焠牙に後を追わせるように言う。焠牙も朔弥が気になっていたので速攻で執務室を出て朔弥の後を追いかける

「朔弥さん!」

「焠牙ちゃん……どうしたの?斬吼狼ちゃんから話聞かないの?」

「聞かなくても大体分かるさ、俺の特異体質知ってるだろ?」

「触れた人や物に宿る記憶が声となって聞こえる……あつ!そうゆう事か」

「ああ」

「あの時私焠牙ちゃんにべったりくっついてたからね……そっか……あの時にはもう知ってたって訳か」

「でも詳しくは知らない……ザルバもないし……」

「そっか・・・」

そう言って沈黙する二人、先程の件で気まずい雰囲気になり上手く会話が出来ないでいたが

「朔弥さんーさつききはホントにゴメン!!?」

「さつきから焠牙ちゃん謝ってばっかだね・・・焠牙ちゃん何も悪くないのに謝って・・・私が悪いのに謝られて・・・もう分かんないよ・・・私どうしたらいいか分かんないよ・・・」

そう言って大粒の涙を溢す朔弥、焠牙は堪らず朔弥を抱きしめると「何か抱えてるんだろ? 誰にも言えないような大きな悩みを・・・今もこうして触れてるけど俺に聞こえないよう必死に隠してる・・・俺朔弥さんに何だかんだ言うけどホントは凄く感謝してる! だからさ!俺も朔弥さんの為に何かしてやりたい! 朔弥さんさえ良かったらその悩み俺に聞かせてくれないかな? 俺に朔弥さんの想いを託し欲しいんだ!!?」

そう焠牙が優しく語りかけると

「ズルイよ・・・焠牙ちゃん・・・そんな事言われたら私・・・ホント誰に似たんだか・・・」

そんな焠牙に絆され朔弥もまた焠牙を抱きしめ返すと

「私の想いもう焠牙ちゃんに託してるよ? 誰よりも先に誰にも負けな強い想いを私は焠牙ちゃんに託してるよ」

焠牙の胸に顔を埋めそう話す朔弥、張り詰めた緊張が解き放たれたかのように必死に隠していた朔弥の想いが表面化し焠牙の中に流れ込んでいく

「・・・何だよコレ・・・巫山戯るなよ・・・」

焠牙の中に流れ込む朔弥の遠い過去の記憶、産まれたばかりの赤子を愛おしく抱く朔弥の姿とそれを優しく見守る大牙の姿、時が流れ両親の愛情を注がれスクスクと育つ幼児と新たに妹として産まれた赤子の姿、幸せな家庭を築く朔弥の記憶が流れ込んでくるがその幸せな記憶は突如崩れ去る

暁大牙、当時の黄金騎士であり鬼無辻が最も恐れた剣士、呼吸を用

いず鬼と対等以上に渡り合う人間などこれまでいかなかった、始まりの呼吸と言われる呼吸法を用い自身を追い詰めた剣士も恐ろしい存在だが暁大牙という人間はその剣士以上に恐ろしい存在だった

自らを完璧に近い生物だと自負する無惨、その無惨からして理解不能な異形の化け物ホラー、擬態能力で見た目こそ完全な人間だがその捕食性は鬼すらも超越し人間はおろか鬼でさえも捕食する脅威的な存在、そんなホラーを討滅する力を持つ魔戒騎士は自身の命を脅かす鬼殺隊より恐ろしい存在であり警戒していた時、大牙は始まりの剣士と邂逅した

ただでさえ脅威的な存在だった魔戒騎士が呼吸を用いて更に強くなる事を危惧した無惨は始まりの剣士と言われた継国縁壺の兄、継国巖勝と接近し鬼にする事で戦力を増やし魔戒騎士や鬼殺隊に対する対抗手段を増やし続けていった

当時の鬼殺隊の戦力は魔戒騎士である大牙と総悟を除くと始まりの剣士と言われる縁壺とその兄巖勝が最高戦力でありその巖勝が鬼殺隊を裏切り無惨の元に着いたのは相当の痛手であった

更には呼吸を極めた剣士達に待ち受けていた代償、身体能力がより飛躍的に上昇する痣の発現が寿命を大幅に削り齡二十五まで生きられないという致命的な問題が露見し鬼殺隊は混迷を極めていた

そして大牙もまた痣の発現による代償で寿命が縮み長くは生きれない事が分かり次代の黄金騎士の継承者を息子に託す事を決意するのだった

だがそんな決意も虚しく悲劇は訪れる

鬼殺隊の戦力低下と黒死牟という戦力増強を機に鬼殺隊全滅を目論んだ無惨は黒死牟の情報で当時の産屋敷当主の屋敷を探し出し奇襲を掛けたのだが、巖勝が裏切ったという事はいずれ襲撃があるだろうと読んでいた産屋敷当主の采配で大牙と総悟が無惨を迎え撃つ事になるのだが無惨の最大戦力である黒死牟の姿が見えない

違和感を感じる大牙だったが無惨を討ち取れば問題ないと判断し無惨を討つ事に集中するのだが、その判断が悲劇の幕開けだった

大牙達の前に姿を現さない黒死牟、その黒死牟が現れた先は

朔弥達がいる暁邸だった

確かに暁大牙という人間は脅威的な存在、だが人間である以上寿命という呪縛からは逃れられない

味方であった時は頼もしい存在だったがそれ以上にその才能が妬ましかった

その大牙が数年もせず死ぬ、黄金騎士という鬼さえも超越する力も数年経てば消える、だがその後継者がいるならば話は変わる

ならばその後継者が育つ前に殺してしまえば黄金騎士は現れない
かつては仲間として共に過ごしたからこそ知り得た情報、敵である以上かつての仲間である大牙の息子といえど殺す事に躊躇いもない
黒死牟は

その凶刃を振るい朔弥達を襲撃する

だが朔弥とて無抵抗であるはずもない

まだ幼い息子と産まれたばかりの赤子を守る為に必死に応戦し抵抗を試みる

だが相手は黒死牟、強烈な斬撃と血鬼術の嵐を前に厳しい戦いを強いられた苦しい展開に陥っていく

元老院付きの優秀な魔戒法師でもある朔弥、薬学や魔導具関連の実力は突出してはいるが実戦となるとやはり魔戒騎士や肉弾戦を得意とする法師達に比べると遅れをとる朔弥、低級ホラーや雑魚鬼ならば朔弥単独でも対処可能だが相手は鬼の中でも最強格、朔弥一人であるならば術式構築や法術を駆使して足止めは可能だが黒死牟の狙いは子供達、幼子二人を守りながら黒死牟の相手は到底不可能であり子供達が殺されるのは時間の問題だった

勿論朔弥自身も殺害対象ではあるが優先順位は子供達、特に息子を執拗に狙う黒死牟に決死の覚悟で朔弥や立ち向かう

子供達を見捨てて生き延びる考えなど微塵もない朔弥は自分の命と引き換えにでも子供達を守ろうと術式を構築し結界を張ると僅かな時間だが黒死牟相手に時間を稼ぐ事に成功する

その僅かな時間の中で激しい葛藤と自己嫌悪を重ね、朔弥はある決断をする

術式を多重構築し開いたゲートに子供達を送り込みこの時間とは違う先の未来へと子供達を逃す

最早賭け、先の未来で子供達がどうなるかは分からない、だが今の場から逃さないと子供達の未来はない

仮にこの場を凌ぐ或いは違う場所に逃したとしても一時的な時間稼ぎにしかならないだろう、執拗な無惨の事だ今回のように黒死牟じゃなくても鬼を送り込み子供達を殺す事を諦めない筈、それは子供達にとって死ぬまで命を狙われ逃げ続けなければならない壮絶な人生となる

加えて大牙の余命も数年余り、子供達の未来の為に子供達を手放す事も含め朔弥にとって最愛の家族を失う辛い選択だが無情にも悩む時間すら与えられない現実、自然と涙が零れ落ち声を上げて泣きたいが泣いたところで現在は変わらない

唇をグツと噛み締め必死に我慢すると血が滲み出る事すら厭わずに術式を構築し始める朔弥、子供達の周りに五芒星の描かれた陣形が構築され

ると五枚の八卦符を五芒星の五点に配置し魔導筆で術式発動の印を描き始める

子供達、産まれたばかりの赤子はともかく息子はある程度の認識が分かるようになっていた為、不穏な空気や母の悲壮感溢れる雰囲気恐怖気付き継るように母に寄り添う……のだが発動し始めた術式の影響で触れる事も叶わず次第に泣き始めてしまう

そんな息子を見て大粒の涙を流しながらただ見守る事しか出来ない朔弥、そこへ時間は掛かったが結界を斬り裂き子供達を亡き者にせんと近付いてきた黒死牟が朔弥の背後から刀を突き刺し襲い掛かってきた

奇妙な術を使う厄介な女、朔弥にたいしてそんな認識をしていた黒死牟だが術者を殺せば術は発動しない事は理解していた為先に朔弥を殺せば術は止まる……そう思っていた

子供達に視線を移した黒死牟の視界には未だ発動が止まらない術式と子供達を取り囲む光のカーテンが先程より輝きを増し術は今に

も完成する

そう感じ取れた

このままでは

黒死牟は焦りながら朔弥から刀を抜き子供達に斬り掛かるのだが、子供達を包む五芒星の陣の内側は既に現在の時間軸とは異なる領域触れたたくても触れる事も叶わず、斬りたくても斬る事すら叶わない。ただ目に見えるだけの存在、そんな子供達は更には輝きを増した光に覆われ姿が見えなくなり・・・やがて光が消え去るとそこに子供達の姿は一切見当たらなかった。

この不可解な現象には黒死牟さえも狼狽えてしまい、必死に思考を巡らせ自分の理解出来る範疇で考えを纏めようとするがそれでも理解が追いつかない。

一つだけ理解出来るのは朔弥の術により子供達は消えた、だがそんな事は黒死牟でも分かる。問題はどこに消えたかだ。

黒死牟は足元に転がる朔弥を無理矢理引き摺り起こし子供達の消えた先を問い掛けるが朔弥は答える気もない上に殺しに来た相手の質問に答える義理もないので沈黙を貫くのだが朔弥の態度に激昂した黒死牟は刀を朔弥の腹部に突き刺そうと突き立て再度質問をする。

朔弥は暫しの沈黙の後、深い溜息を吐き

『羅号』と呟くと朔弥の魔法衣が靡き魔法衣から四足の獣型の魔戒獣が飛び出し黒死牟に喰らいつく。

ほぼ零距离に近い奇襲に対処が遅れた黒死牟は羅号の襲撃をまともに受け手傷を負うも自らの血鬼術で羅号を退け朔弥を睨み付ける。

その瞬間黒死牟の頭部を貫く一発の弾丸、羅号が奇襲を掛けた隙に愛用の魔戒銃を手にした朔弥から放たれた一撃で僅かに怯む黒死牟。

質問に答える気は全くない、この一撃でそう判断した黒死牟は最早生かす価値無しと深手を追っている朔弥に引導を渡すべく刀を振り降ろす。

その凶刃が朔弥に迫り来る中、割り込んで来た羅号が刀に喰らいつき斬撃を食い止めると朔弥から二度目の銃撃を頭部に受けまたしても怯んでしまう黒死牟。

だが朔弥の追撃はこれだけで終わらない

子供達を守ってあげる事が出来なかった非力さ、子供達を襲撃して来た黒死牟、かつての仲間達を裏切り鬼となった巖勝、様々な怒りが混ざり合い一心不乱に魔戒銃を連射する朔弥、貫通された刀傷から流れ出る流血も厭わない朔弥の追撃に痺れを切らした黒死牟も銃撃を浴びながら強引に斬りかかるがそこへまた羅号が邪魔に入り先に羅号を始末しないと面倒だと矛先を羅号に向ける

そして黒死牟の振るう鋭利な斬撃で羅号が斬り伏せられ動かなくなる

朔弥に目を向け・・・たその瞬間弾け飛ぶ黒死牟の頭部

魔戒銃を黒死牟に向ける朔弥、だがその手に持つ魔戒銃の姿が変わっていた

拳銃サイズの魔戒銃が一回りどころか二回り以上巨大化しておりシンプルながらも無骨なデザインだった魔戒銃は羅号を模した意匠の魔戒銃へと変貌しており威圧感を放っていた

『悔しいけど私の力じゃ貴方を滅する事は出来ない、でも時間を稼ぐ事ならいくらでも術はある！ねえ？根比べしようよ？陽光に焼かれて貴方が先に死ぬか私の命が先に尽きるか』

変貌した魔戒銃を連射し肉片と化した黒死牟の残骸を屋敷の屋外へと吹き飛ばした朔弥は新たに術式を構築し始める

朔弥の放った銃撃は絶大な威力を誇るが鬼に対し決め手になる訳でもなく黒死牟はその身体を再生させていくと

「先程の奇妙な獣が銃と一つになったか。お前は以前から不可思議な術を行使していたが・・・やはり一筋縄ではいかぬようだ」

旧知の仲故朔弥の実力は知ってはいたが、鬼となった今の自分の足元には及ばないと認識していた黒死牟、だがまだ知らない手札を切ってきた朔弥に黒死牟は改めて警戒心を抱くのだが

警戒するのが遅かった・・・黒死牟が再生をしている間に術式の構築を終えた朔弥、黒死牟を中心に八方に術式の陣が展開されそれぞれの陣から計八本の鎖が飛び出し黒死牟に絡みつこうと迫っていく

その鎖を刀で、血鬼術で斬り払う黒死牟だが幾ら斬り払おうが延々

と向かって来る鎖が鬱陶しくなり苛立ちを隠せなくなった黒死牟は睨み殺す勢いで朔弥を睨み付けるとその視界の先にはこちらに銃口を向ける朔弥の姿が

幾ら死なぬとはいえ肉体を容易く吹き飛ばす強力な攻撃を何度も受け続けるのは愚かと迎撃の優先対象を鎖から朔弥に切り替えた黒死牟、だがその黒死牟の判断は朔弥の思惑通りであり八本の鎖は何なく黒死牟に絡みついていく

全身に巻き付いた八本の鎖によって雁字搦めにされた黒死牟だが無策では無い、例え刀を振るえなくとも身体から月輪の斬撃は放出出来る

仮に鎖を斬れなかったとしても少なからず拘束は緩む、後は自らの身体能力で引き千切れれば問題無いと鬼である事や血鬼術に絶大な信頼を寄せる黒死牟は伍の型を放ち鎖を断ち切る・・・筈だった

黒死牟の放った血鬼術、その力をもってしても鎖を断ち切る事は叶わずそれどころか鎖が緩む事すらない、自らの予想を裏切る形だが冷静に策を講じる黒死牟は全身から無数の刀を生やし無理矢理鎖の拘束を緩めると

またしても朔弥の銃撃を浴び肉体を大きく損傷する黒死牟、生やした刀も銃撃の衝撃で折れ再び拘束され身動きが取れなくなるが朔弥もまた度重なる強い銃撃の反動で傷口が悪化し出血多量の影響で意識が朦朧とし倒れ込んでしまう

このまま朔弥が命を落とし術が解ければ黒死牟は解き放たれるが夜が明けるまで朔弥の命があれば黒死牟は陽光に焼かれて死ぬ、ならば一刻も早く朔弥を殺し拘束から抜け出したい黒死牟は再び抵抗を始める

「このまま・・・死ねる訳ないでしょ・・・」

朦朧としながらも必死に生き延びようとする朔弥は魔導筆で術を発動し治癒の効果を持つ術で延命処置を施し夜明けまでの時間を稼ごうとすると、それに焦り出す黒死牟は激しい怒りを露わにしながら伍の型を放ち朔弥を攻撃するが鎖の拘束もあって間合いが届かない

互いに動けない中刻一刻と時間だけが過ぎやがて闇夜の空が薄ら

と明るみ始めていく

夜明けが近い事を察するも未だ身動きが取れない黒死牟、朔弥を怨めしく睨むもその朔弥は僅かながら息はあるものの意識はすでにない状態だった

このままでは時期に夜が明け陽光によって焼かれる、自分より才の勝る弟でもなければ鬼狩りの剣士でもない朔弥、鬼とはいえ剣術の実力に絶対の誇りを持つ黒死牟は陽光という手段で命を落とす事が堪らなく屈辱であり憎悪を膨らませながら朔弥を睨み続けていた

「朔弥!!?目を覚ましてくれ!」

「こりや相当の重傷だな」

ふと声が聞こえる、辛うじて命を繋ぎ止めていた朔弥が目覚ましたのはあれから数時間後、日は完全に昇り陽光が煌めく中臙げながらも薄らと目を開ける朔弥、意識がはつきりしないながらも目の前にいる二人はどちらも見知った顔だと安心すると再び微睡みにつこうとするが

「・・・っ!!?黒死牟!!?黒死牟は☒」

意識は未だ朦朧とするが休んでる場合ではないと気力を振り絞り起き上がる朔弥、朔弥の夫でもある大牙はそんな朔弥を支えながら「私達が戻って来た時にはもう黒死牟の姿は見当たらなかった、遺留品が無かった事を察するに黒死牟は逃げたのだろう」

「そんな・・・あの術からどうやって・・・」

「それは分からないが・・・とにかくお前が生きていてくれて良かった・・・上弦の壺が襲撃したと聞いて気が気じゃなかった」

「大牙ちゃん・・・ゴメン!!?ゴメンね!!?私・・・私!!?子供達を・・・皆まで言うな・・・状況を省みてそうするしか出来なかったのだから・・・この場に居合わせなかった私がお前を責める事など出来はしないわい」

「うわあああああああ」

大号泣する朔弥、自らの手で子供達を手放した自責の念に駆られた

朔弥は泣き疲れて再び眠るまで涙を流し続けたのだった

その後目を覚ました朔弥は研究室に閉じ籠り研究に明け暮れる日々が続き数日後、研究室から出て来た朔弥は

「大牙ちゃん!!? 私決めた!!? 私は鬼になって永久の刻を生きる!!? そして未来に飛んだ子供達を探す!!? 親として失格な事をした私だけど・・・何の贖罪もしないで生きるなんて許せない!!?」

数日間悩みに悩み抜いた朔弥が出した答え、自ら鬼となる事で永久の刻を生き未来に飛んだ子供達を探すという決意を大牙に話すと

「それを聞いて私が賛成するとも?」

「まあしないだろうね! 鬼殺隊にとって鬼は滅する存在、自分から鬼になる奴なんて黒死牟くらいしかないだろうしね」

「自ら裏切り者の烙印を押されて鬼になる必要はないだろう」

「じゃあどうしろっていうの? 私には嫌だよ!!? それに私達の本来の敵は誰? 鬼なら鬼殺隊がいれば対処出来るかもしれないけどホラーは違うよね? あれは私達しか対処出来ないよね? でも大牙ちゃんはいなくなっちゃおう!!? 総悟ちゃんもいつかはいなくなる!!? だったら誰がホラーに対処するの?」

「.....」

「大牙、俺は朔弥の案も一理あると思うぞ? それに鬼殺隊に加わってるのは利害が一致してるから加わってるだけで忠誠とか誓ったわけでもないしな! そんなに義理堅くなる必要もないだろう?」

「総悟」

「大牙、俺達は魔戒騎士! 本来ならば人間社会の出来事に関与しないのが掟だ! ホラーではないのなら例え鬼が人間を殺そうが俺達には関係の無い事だ」

「掟ではな」

「まあここには番犬所もなければ元老院もない! 掟に縛られて目の前

の人間を助ける事も出来ないのは胸糞悪いしな!!? だがな!!? 例え掟を破ろうが使命は忘れるな!!? 俺達はホラーを狩る魔戒騎士!!? 鬼狩りとの情に絆されて本来の使命を見失うなよ」

「……好きにしろ」

「だそうだ朔弥」

「うん……大牙ちゃんごめんね? 総悟ちゃんもありがと」

朔弥は再び研究室に閉じ籠り数日後、鬼となって大牙達の前に姿を見せるのだった

「……その……煌牙ちゃん……謝って許される事じゃないけど……ごめんなさい」

朔弥の過去を垣間見た煌牙、その衝撃は計り知れないもので朔弥の問い掛けにも応えず終始無言のまま時間が過ぎていった

その後話が終わった桜花達が煌牙達に合流するも湿っぽい空気を察し

どうしたものかと思案していると

「ねえ? そろそろお館様達に顔見せないといけないんじゃない?」

炭治郎達が先に報告を済ませるとはいえいつまでも待たせるのも悪いと合流を促す桜花

「とりあえずお父さん達は先に行ってよ、煌牙は私と一緒に残ってね」

何か考えがあるのか桜花は合流を後回しにして泰三達とその後で別れ

「煌牙♪お腹空いたから何か作ってえ〜♪」

「は☒先に合流するのが優先だろ」

「え?」

「いや、え? つてなんだよ?」

「あんなお通夜みたいな辛気臭い空気でお話? 怪談話ならまだしも

長々と報告なんて面倒臭いじゃん！」

「いや、それはそうだけどさ」

「それに皆ご飯とかまだでしょ？どうせ後からご飯にするんだから煌牙と中山さんのフルコースで立食パーティーしながら説明したらいいじゃん♪煌牙の復帰と上弦撃破のお祝いも兼ねてさ」

「悪いけど上弦撃破については俺個人としては素直に祝えないな、鬼殺隊の観点から見れば快挙なんだけどさ」

「そうだね、最期煌牙と握手してたからね・・・闘いを通じて何か分かり合えたんだよね？」

「うん・・・人間だった頃の記憶や大切な想い人との再会、そして未来での再会と想いを俺に託してくれた」

「そっかあゝ・・・なら尚更祝ってあげないと」
「？」

「鬼として囚われていた魂の解放と新しい人生への旅立ちを祝ってあげないと♪友達になったんでしょ？だったらちゃんと祝ってあげないと駄目だよ？」

「・・・そっか・・・そうだよな、桜花ありがとう！」

「どういたしまして♪んで？何を悩んでるの？さつきからずっと塞ぎ込んでるけど・・・まだ仲直り出来てないの？」

「いや・・・それは大丈夫だと思う・・・けど」

「けど？」

「いや何でもない・・・気にすんな」

「煌牙って阿保じゃないけど馬鹿だよな？」

「はは、自覚はあるよ」

「笑い事じゃないよ？ねえ・・・煌牙の悩みって私にも話せない事なの？」

「話せない・・・というかどう話したら良いか分からない・・・気持ちの整理というか状況を呑み込み切れていないというか」

「それって斬吼狼が話してた事と関係・・・てか朔弥さんから話聞いてない？」

「いや、有耶無耶になって結局聞いてない・・・が何となく分かってる」

「何となくじゃ駄目だよ!!?ちゃんと知つとかないと!!?」

「そうだな」

「じゃあ私が話すから焠牙も悩みを打ち明けてね」

「いや!だから」

「お兄ちゃん!!?お願いだから一人で背追い込まないで!!?」

「桜花・お前」

「普段面と向かって言わないけど焠牙は私のお兄ちゃんなの!!?私の大事な家族なの!!?焠牙が悩んでるの知つて何も出来ないのは嫌!!?焠牙は絶対に負けないって思つてた・・・心のどこかで牙狼という力を絶対視して焠牙自身を見てなかった・・・上弦の壺が現れた時何で私焠牙の傍にいなかったんだろ・・・何で一緒に戦わなかったんだろ・・・私・・・約束破っちゃった・・・牙狼を支える魔戒法師になるつて約束したのに・・・肝心な時にいないなんて・・・ゴメンなさい・・・お兄ちゃん・・・ゴメンなさい」

「桜花・・・よし!!?美味しい飯作つてやるからもう泣くな」

「お兄ちゃん」

「ほら早く行くぞ!!?」

「うん」

泣いて謝る桜花に困惑する焠牙はそう会話を切り上げ厨房に向かうと四ノ宮家の専属シェフの中山さんと共に調理を始めるのだった

それから数刻後、数々の料理を作り終えた焠牙は料理の配膳をメイド達に頼むと賄いで作った特製おむすびを持って桜花の自室へと足を運び

「お前まだ泣いてんのかよ☒・・・いいか?桜花、確かにあの時お前と一緒にいればまた違う結果になったのかもしれない。けどな、あの時の敗因は俺自身にあった、俺の心の弱さが自らを敗北へと誘つたんだ。

次は負けない!絶対に勝つから!!?その時は一緒に戦つてくれよな!」

「うん・・・うん・・・お兄ちゃんとずっと一緒にいる・・・もう離れない

から」

「お、おう……てかいつまでしよげてんだ、お前がお兄ちゃん連呼するの違和感しかないわ」

「……馬鹿」

「ほら！腹減ってんだろ？おむすび作ってきたから一緒に食べるぞ」

「なんのおむすび？」

「ひつまぶし風おむすびだ」

「うはあく♪賄いなのに手間がかかるやつきた〜♪」

「肝吸いもあるから最後は茶漬けつてのもいいよな」

「もうふんだりけつたりだね♪」

「だろ？」

「……え？」

「ん？……ああ！それを言うならいたせり尽せりだろ」

「……私が言うのも何だけど煌牙も重症だね」

「そうかもな」

「もう全部吐き出しちゃえばいいよ」

「……なあ……桜花にとって家族ってなんだ？」

「家族……ん〜そうだねえ〜大切な存在ってのは当たり前だけど、言葉にすると難しいよね」

「そうかもな」

「朔弥さんと何かあったの？」

「……俺とカナヲを捨てた両親、アイツら本当の両親じゃなかった」

「……」

「あの後朔弥さんと話したんだけどさ、その時朔弥さんの過去……家族の記憶が俺に流れてきたんだ……俺とカナヲ、二人の産みの親それが朔弥さんだった……父親は暁大牙……400年前黒死牟から逃す為に術式で未来に飛ばされたらしくてな」

「……」

「俺もまだ赤ん坊だしカナヲもまだ産まれて間もないから何も覚えてなかったけど、多分その後でアイツらに拾われて捨てられて俺は桜花

達にカナヲはしのぶ達に引き取られて今があるんだが……まあその……
朔弥さんが実の母親って分かってこの先どう接したらいいか分から
なくてな

」

「……なるほど……それでお互い気まずい雰囲気だったって事ね」

「驚かないんだな」

「知ってたからね」

「何で桜花が知ってるんだよ」

「それは私が話す事じゃないよ……とりあえずさ……おむすび食べよ
うよ」

「いやそんな気分じゃなくなったからいいわ」

「じゃ全部貰うね♪食べ終わったら煌牙に見せたい物あるから着いて
きてよ」

すっかり食欲の失せた煌牙をよそにベッドの上でおむすびを美味
しそうに頬張る桜花、感情の変化と共に表情がコロコロと変わる桜花
に溜息を吐きながら食事が終わるのを待っている

「ご馳走様でした♪じゃ行こっか？」

「で？何処に行くんだ？」

「宝物庫」

そう言って桜花は煌牙の手を握り四ノ宮邸の地下に続く隠し階段
を降り煌牙を宝物庫へと案内するのだった

「なあ桜花ここ何があるんだよ、俺に見せたい物って」

「ちよつと待ってて、封印解くから」

薄暗い地下通路を進む煌牙達は通路の奥に構える頑丈な扉の前に
立つ

扉には魔戒法師由来の封印式が施されており魔戒法師がいなけれ
ば扉は開かないらしく桜花は魔導筆を扉に向けながらその封印を解
除していく

「俺宝物庫に入るの初めてだ……何があるんだ？」

「四ノ宮家の歴史というかそういうの」

そう話してるうちに扉の封印が解け、桜花はその扉を開けると煌牙と共に宝物庫へと入るのだった

桜花は宝物庫の奥、一番嚴重に保管されていた赤い封筒を手に取りそれを煌牙に手渡すと

「はい！これは煌牙宛だよ!!？読んでみて」

「ちよつと待つて、コレ俺達が勝手に読んで良いのか？嚴重に保管していた大事な物なんだろう？」

「そうだよ？四ノ宮家が400年近く大切に保管していた大事な物、これを開ける時は新たな牙狼が真実に辿り着いた時つて四ノ宮家で言い伝えられているの！」

「なら師匠やおやつさんが一緒にいる時に」

「言ったでしょ？私は煌牙の真実を知ってるつて、勿論お母さんとお父さんも知ってる！それに煌牙や牙狼の事は私が一任されてるしお母さんからも許可は貰ってる、だからいいの!!？」

「・・・そうか・・・」

桜花の説明に納得した煌牙はライターを取り出し魔導火で赤い封筒を燃やし始める

すると煌牙達の前に魔導文字が浮かび上がり煌牙は

「なるほどね、暁大牙・・・の愛弟子であり二代目牙柱四ノ宮蓮花からの伝言つて訳か」

魔導文字を読んでいくうちに伝言の主が大牙の愛弟子であった四ノ宮蓮花だと知る煌牙

「えーと・・・これを読んでいるという事は貴方様は牙狼を受け継ぎご両親の事も既に存じているのかと思います。私の名は四ノ宮蓮花、敬愛する暁大牙先生と朔弥様から師事を受けた魔戒法師であり二代目牙柱を拝命しています。さて、この伝言が未来のいつ読まれるのか私には分かりませんが私達四ノ宮一族は総力を挙げて大牙先生の正統なる後継者、貴方様を必ずや探し出し支持する事を誓います。それが亡き大牙先生の願いでもあり私自身の願いでもあるのです。先生は死の間際牙狼を受け継ぐ後継者がいない事を憂っていました。どう

かお願いです、ご両親を大牙先生と朔弥様を恨まないで下さい。貴方様のご両親は決して貴方様を見捨てた訳ではありません!!?先生と朔弥様は貴方様と妹君をととも愛していました。ですがとある悲しい出来事が起き朔弥様は決死の思いで我が子を未来に送り出したのです。受け入れろとは言いません、ですが貴方様のご両親は貴方様を愛しているという事だけはどうか覚えていてください。貴方様が紡ぐ未来が幸せである事を願って。・・・だそうだぞ?桜花」

「うん」

「そつか・・・桜花達四ノ宮一族は400年もの間俺を探し続けてたのか」

「うん、私達四ノ宮一族の悲願だったからね」

「・・・そつか・・・ありがとう・・・俺・・・ちゃんと愛されてたんだな」

「うん!!?朔弥さんいつも煌牙の事好きって言ってたじゃん♪」

「そうだな、ちよつと過剰だとは思ってたけど」

「ねえ煌牙?今すぐ答えを出す必要はないんだと思うよ。煌牙とカナフちゃん、朔弥さんは血の繋がった家族なんだから!家族の絆はこれから紡いでいけば良いんじゃないかな?」

「そうだな・・・まあそうなんだろうな」

「勿論私達も家族だよ?」

「当たり前だろ?・・・ってそろそろ俺達も合流しないとクソ面倒な会議終わらないんじゃないか?」

「そうだね、面倒だけど皆と合流してご飯にしよう」

二人はそう会話を切り上げると皆が待つ応接間に向かいその扉を開くのであった

「ただいまあゝ♪ねえ?面倒臭い会議終わった?まあ終わっても終わらなくてもどつちでもいいけどお腹空いたから皆でご飯にしよう」

入室するのも束の間会議なんてお構いなしの桜花、予め会議の予定が入っているならまだしもその日突発的な会議の上まさかの自宅、会議に全くのやる気を見せない桜花の発言に一同は驚きを隠せず目を見開き呆然としてしまう

「お前この面子を前によくそんな事言えるよな？ある意味スゲエわ!!」

「まあ気持ちは同意見だが」

煌牙も桜花と同じく面倒臭いと思っていたがお館様を始め柱の面々や元柱まで集まっているこの場でそんな事言えないので、そんな桜花にある種の感心を抱いていたが煌牙もまた桜花と同意見という発言をしていたので

「お前等!!?揃いも揃って会議が面倒臭いだと派手過ぎるにも程があるだろ!!?」

「それよりも何故お前達は遅れてきた?煉獄と共に来るのが常識の筈だが何故お前達は遅れてきた?意味が分からない。それに何故この場に柱でもない隊士が混ざっている?俺には理解出来ない」

「うっさい!!?任務終わって事後処理して帰った来たら緊急会議だよってそりや面倒臭いに決まってるじゃん!それに何で遅れてきた?常識?」

「は?私達には私達の事情があるの!別に知る必要もないし教える気もないけど蛇さんの常識と違うからってそこまで非難される覚えはないよ!」

「あと何で柱でもない隊士がいるかって?別に産屋敷家で会議して訳じやないし皆今回の任務の当事者なんだから別に異論はないと思うけど?」

「それに煉獄さん達の報告で知ってると思うけど上弦以上の鬼がいるって聞いてない?十二鬼月の他にも厄介な鬼がいるんだから柱以外の隊士にも情報の共有は必要だと思うけど?いたずらに生存率を下げたいなら別だけどね!!?」

「そ、そうか」

「・・・悪かった」

天元と小芭内二人の言い分は鬼殺隊に所属している立場上間違っ
てはいないのだが捲し立てるような桜花の言い分に押されこれ以上
何も言えない二人、桜花は分かればいいんだよとドヤると

「今回の任務の報告は煉獄さんがしてくれたんでは?私達が報告す

る事も同じ内容だしこの場での会議はもう終わりで良いんじゃないかな？

あとは皆でのご飯食べながら煌牙の話を聞こうよ！ね？お館様？良いでしょ？」

「そうだね．．．そうしようか。だけど今どうしても伝えたい事があるんだ。もう少しだけ話しても良いかな」

「少しだけだよ？」

「ありがとう」

いつの間にか話の主導権を握られていた輝哉、誰もがその展開に啞然とし呆然としていたが

「二人共お疲れ様、既に杏寿郎から報告は受けているから君達から改めて話を聞く事はしないよ。私は今とても嬉しいんだ、鬼殺隊の歴史において初めて上弦を討ち取った事、そして何より煌牙！君がこうして無事に帰って来てくれた事が私は何よりも嬉しい！おかえり煌牙」「うす」

「はい!!？お館様の締めも入った事で会議は終了!!？煌牙も空腹が凄くて語彙力がなんかこう．．．凄く凄いつてくらいおかしくなってるし早くご飯にするよ!!？」

俺の語彙力がおかしいって何だよ!!？と突っ込みたい煌牙だが今ここで話すと余計に長引くと悟り

「皆、俺にご飯作りました．．．え〜と凄く頑張つて凄いので凄く美味しいです．．．だから皆食べてね？」

とりあえず桜花の言ってるように話してみる煌牙だが普段そんな事を言わないので

「あの！．．．煌牙君無事に帰って来たって聞いたけど．．．ちよつと頭が無事じゃないようなく？」

「そうですねー頭が無事じゃないから作った料理も美味しいって言ってるだけで実際はクソ不味い料理かもしれないですなー、まあ蜜璃にクソ不味い料理なんて食わせられないしお前飯抜きな!!？」

「煌牙君ごめんさ〜い！何でもするから、何でも言う事聞くから煌牙君のご飯食べさせて〜!!？」

「言質取ったぞ」

「四ノ宮！甘露寺に何をさせる気だ！俺は認めない容認出来ない」

「うわっ！面倒くさいのが来た」

「いくらお前達が旧知の仲だとしてもお前の発言は目に余る」

「いや俺まだ何も言っていないけど」

「そもそもお前は甘露寺に何をさせようとしたんだ？大方甘露寺の弱みにつけ込んで卑劣な事を考えていたのだろう、そもそもお前には胡蝶がいるだろう？何故甘露寺に手を出そうとするのか俺には理解出来ない」

「おお☒好き勝手言ってくれるねえ、俺も反論させて貰うけど俺はただ何も言っていないからな？つまり蜜璃の弱みにつけ込んで卑劣な事を考えてるのも手を出そうと考えてるのも伊黒さん!!？アンタの妄想だ！アンタの中で蜜璃はそういう対象だって事でいいんだよな？」

「俺にはお前が何を言っているのか理解出来ない、何故俺が甘露寺に卑劣な真似をする必要がある？」

「その言葉そのままアンタに返すよ伊黒さん」

「はい!!？嫉妬で煌牙に絡まない伊黒さん!!？煌牙と蜜璃ちゃんが仲良いからって言いがかりにも程があるよ！そもそも蜜璃ちゃんがあるんな事言い出したのが原因なんだし蜜璃ちゃんにも何か言う事あるんじゃない？」

それを無視するって事は蜜璃ちゃんの発言に何も問題がないわけ
で煌牙も何も悪くはないよね？だって煌牙は何も言っていないだし
！好きな娘を庇いたい気持ちは分かるけど状況を把握した上で真実
を捻じ曲げてまで庇うのはどうなのかな？この場にはお館様を始め
柱や元柱もいるんだよ？心象が悪くなるのは煌牙なのか伊黒さんな
のか・・・この場合伊黒さんが庇おうとしてる蜜璃ちゃんまで悪くなる
かもね」

「・・・四ノ宮済まなかった」

蜜璃の発言を引き金として煌牙と小芭内が揉め始め見かねた桜花
が仲裁に入った事でそれ以上悪化する事はなかったが

「はあく今ので更に疲れた、なんかもう飯とかどうでもよくなったし後は皆で好きにしてくれ、お館様申し訳ないけど俺はこれで失礼します」

本来ならこの後食事をしながらこれまでの事を話し皆と再会の喜びを分かち合った筈なのだがそんな気になれない焔牙は皆に頭を下げてそう言うのと足早にその場を去って行くのだった

「おい待て焔牙！勝手に失礼すんじゃねえ!!？」

そう言つて焔牙の後を追いかけようとする実弥、だが

「不死川さん、私が追いかけますよ」

笑顔を見せながらそう話すしのぶ、だがその笑顔から感じる般若のような威圧に実弥も

「お、おう」

と頷くしなかつたのである

「それじゃ皆さん私はこれで失礼しますね」

そう言つて颯爽と退出したしのぶ、本来ならお館様がいるこの場に置いて大変失礼な振る舞いだが焔牙達、特に桜花のせいでグダグタになっていた今の状況ではさして大した事ないと判断したのだが

「嫁が追いかけたなら焔牙は派手に大丈夫そうだな」

「しのぶちゃんが焔牙のお嫁さん？あら〜これは政財界が揺れるわね」

天元の発した言葉に乗つてきた花蓮、四ノ宮本家の長男としての顔を持つ焔牙は政財界でも知られており、そういった話は日常的に舞い込んできたりするのだった

話が焔牙の結婚話へと移ろうとする雰囲気だが

「そういえば下弦の肆ってどうなったの？」

と割と重大な案件を思い出した桜花はそう質問すると

「赦されたとは言えないけどとりあえず私達の協力者という形で様子を見る事にしたよ桜花、先の任務で深い傷を負った杏寿朗を介抱し焔牙の治療にも貢献したと報告を貰ったしね、彼女の罪が簡単に消える事は無いけどその罪を償おうとしているその機会を鬼という理由で奪うのは正しい行いとは私は思えないしね」

「ふくん・・・お母さんが力説したんだね」

「そうだね、確かに花蓮の嘆願もあるけど杏寿朗もまた彼女の助命を嘆願したんだよ」

「うむ!!?彼女が鬼であるという事実は消えないが罪を償おうとする事も事実だ!!?何より彼女は四ノ宮に恋慕の情があるみたいだからな!!?」

「あらあら♪煌牙君も隅におけないわ」

「何か動機が不純な気もするけど・・・まあいつか」

少し腑に落ちない点があるが煌牙の事だしと妥協して話を締めた

桜花

「とりあえず今この場にしのぶちゃんがいなくて良かったね、いたら大変な事になってたよ?煌牙が」

そう話す桜花の言葉に各々が煌牙がどうなるか想像し、しのぶはあの時退出するのが正解だったと納得するのであった

「煌牙さん!!?」

「ん?ああしのぶか、どうしたんだ?俺に何か用か?って用がなきやわざわざ抜け出したりしないよな!どうしたんだ?」

「どうしたんだ?じゃありませんよ!!?」

「何?説教でもしに来たわけ?」

「・・・ふざけないでよ!!?私がどれだけ心配したのか分かってるの☒煌牙さんは生きているってそう信じていても・・・私は」

「心配かけてゴメンな!でもちゃんと約束通り帰って来ただろ?」

「そ、それはそうだけど・・・そうじゃない!!?」

「しのぶ、お前素が出てるぞ?ハハッ!やっぱり今のお前の方がお前らしくて好きだわ」

「なっ☒・・・余計なお世話よ!」

「そうだな・・・じゃ!悪いけど俺色々と話したい人がいるからまたな」
「え☒話したい人って、皆集まってるんだから一緒に戻れば良いん

「じゃ?」

「ああ、俺が話したいのはそうゆう事じゃないんだ!それはまた後で話すけど今話したいのはまた別の事でその人もここにはいないんだ」

「・・・誰よその人」

「・・・俺の本当の父親・・・暁大牙さ」

「・・・え?・・・ちよ☒待つて・・・意味が分からないんだけど」

「だよな!俺もさつき知ったばかりだし:だから話を聞きたいんだ!

本人の口から直接な」

「でも先代は・・・あ!英霊の塔だったかしら?以前焠牙さんはそこで先代と話したつて」

「ああ!そしてこの二週間、俺はそこで暁大牙と修行をしていた:..つて言つてもほぼ不眠不休で闘い続けてただけの地獄だったけど」

「・・・突つ込み所満載ね!!?なんかこう!!?色々とおかしいわよ!」

「しのぶ・・・語彙力仕事しろつて言いたい」

「煩い!!?殴り飛ばすわよアンタ!!?」

「はは、それだけ元気になれば大丈夫そうだな」

「誰のせいよ!!?」

「あらあら♪痴話喧嘩の最中だったかしら♪」

「痴話喧嘩じゃない!!?」

「そうかしら?2人とも息ピツタリだったわよ?」

「そういう姉さんはどうしたのよ?」

「だって私柱ではないのだから別にいなくても良いかなあつて、それに焠牙君やしのぶの痴話喧嘩の方が気になるじゃない」

「だから痴話喧嘩じゃないつてカナエさん!!?」

「そうなの?なら良かったわ」

「姉さん?」

「だって私、焠牙君の事が好きだから」

「はい☒」

「私もこの気持ちに気付けたのは最近の事だったわ、異性の中で一番親しい仲だったけど弟のような存在だと思つてた、でも焠牙君が上弦の壱に殺されたと聞いた時私の中で焠牙君の存在がいかに大きな存

在だったかって・・・もう煌牙君に会えなくなると思ったら悲しくて涙が止まらなかったもの、でも煌牙君が生きているかもしれないって密かに聞かされた時、私は直ぐにでも会いに行きたかった抱き締めたかった。私の心は煌牙君でいっぱいなの」

「ね、姉さん」

「しのぶごめんね？ 応援したかったけど私も自分の気持ちに気付いたから・・・ごめんね」

「なんとなくだけど姉さんはそうなんじゃないかって思ってたわ、まあいいわ！ これで姉さんに遠慮しないで済みそうだし」

「あらあら♪ 私だって負けるつもりはないわ」

「あの？ そうゆうの二人だけの時に話してくれませんか？」

「はあ☒この流れで出てくる感想がそれって貴方の神経おかしいわよ」

「いや、普段ならありがとうって言いたいけど今日は色々と情報過多過ぎてな」

「一体何があつたのよ」

「・・・俺の本当の両親の事、今度のお見合いの事、鬼無辻側にいる最悪の敵も含めて色々さ」

「え☒☒」

「驚くのも無理はないよな」

「煌牙君・・・お見合いってどういう事かしら？ お姉さんにじっくりと教えて欲しいわ」

「そ、そうよ!!？ 他の事も割と重要だけどお見合いってどういう事よ☒」

「どうもこうもって、てかカナエさん怖いって☒笑ってるけど目が笑ってない!!？ アンタそんな人じゃなかっただろ☒」

「乙女は恋をすると変わるものなのよ煌牙君♪」

「乙女って・・・ああ余計な事は言わないでおこ」

「それが懸命ね♪ふふ♪」

「怖っ！」

「それで？ お見合いってどういう事よ！」

「ああ、ほら四ノ宮家って政財界と繋がりがあるだろ？今度国のお偉いさん主催の会合があつて、大東亜重工の会長の孫娘も出席するから四ノ宮財閥の俺を出席させろと要望が来てるらしくてな。まあ軍備拡張を今より容易にする為の政略結婚ってやつ？俺はそんな話お断りだが流石に出席しない訳にもいかないしな．．とそんな訳で面倒臭いんだよ」

「それは難儀な話ね、まあそれは仕方ない事でしょうけど相手側のお嬢さんを見て気持ちが変わるって事はないのかしら？」

「それはいけないわね、煌牙君の気持ちが変わらないように私達が唾をつけておかないと」

「だからカナエさん怖いって」

「まあそれはそれとして煌牙さんの本当の両親、父親が先代の牙狼だという話も気になるわね、それってつまりカナヲの父親でもあるのだから」

「あらまあ不思議な話ねえ、じゃあ煌牙君とカナヲのお母さんって誰なのかしら？」

「．．．．年齢詐欺の天然魔戒法師」

「え嘘朔弥さん．．いや実年齢は知らないけど見た目は溜花ちゃんと同じ位の．．．え？本当に？」

「俺の中に記憶が流れ込んできたんだから真実なんだろうな、さつき桜花と話してある程度割り切れた所もあるけど流石に急過ぎてな」

「確かにそうね．．じゃあ煌牙さん達が両親．．とは思ってないでしょうけどその二人は一体何者なのかしら？」

「さあ？今じゃどうしてるかも知らないけど過去は過去だ、アイツらを気にしてもしょうがない」

「それはそうだけど．．カナヲには話すの？本当の両親の事」

「しのぶとカナエさんはどう思う？俺はカナヲには話すべき事だと考えているが大事な事だからな、二人の意見も聞いておきたい」

「私は煌牙さんがそうすべきだと思うなら反対はしないわよ」

「私も反対はしないわ、私としのぶはカナヲにとって姉のような存在だけど親にはなれないもの！だからカナヲにとって親というのはそ

の二人が親になるわ！だからこそカナヲを愛し想ってくれる本当の両親がいるのならちゃんとして教えてあげなきゃ駄目だと思うわ」

「そうだな、その通りだ！二人共有難う！！？」

「じゃ！そういう訳だから俺は」

「おい！！？大事な会議を放つたらかして何処へ行こうとしてんだ！！？」

「うわあ〜熱血親父まで来たよ！！？」

「あああ〜♪人気者ね煌牙君♪」

「おっさんに人気あつても嬉しくないんですが」

「という事は綺麗な女性だと嬉しいと！そういう訳ですね」

「その質問に答えるとまたお前拗らせるだろ」あと急に丁寧口調になると二重人格だと思ふから気を付けろよ？」

「拗らせるって何よ」それに二重人格じゃないわよ！！？アンタ戻つて来てから失礼な事言い過ぎよー！」

「だつてお前機嫌が悪くなると葉盛ってくるだろ」あの笑顔滅茶苦茶怖いからな」

「おい！！？痴話喧嘩なら余所でやれ！！？」

「痴話喧嘩じゃない！！？」

「あああ〜♪やっぱり息ピッタリね、少し妬げちやうかも」

「．．．．」

「あら？富岡君も来たのね♪」

「よっしゃ！！？富岡さんいい所に来た！！？胡蝶姉妹と慎寿郎さんの相手は任せた！！？」

「．．．．は」

「だつてアンタ口下手じゃん！その拗らせ姉妹と熱血親父相手に会話の練習した方がいいって！！？絶対！うん！マジでそう思う」

「四ノ宮（胡蝶姉は四ノ宮妹同様に少し頭が緩くて理解し難い上に妹に関して俺を目の敵のように皮肉を言つて来るんだが．．お前が言うように拗らせてるのは理解出来る！そして元炎柱は圧迫感が凄い！とてもじゃないが会話など出来そうにない！双方の理由で俺には無理だ」

「誰が拗らせ姉妹ですって?」

「熱血の何が悪い!!?」

「じゃ!後は宜しく富岡さん」

長々と話していると場が混乱して後からやって来た義勇に後処理を押し付けて煌牙はその場から逃げ去るのであった

「待ちなさいよ!!?話はまだ終わってないわよ!!?」

「あらあら♪追いかけるのも楽しそうだわ♪」

「煌牙!!?お前には言いたい事が幾つもある!!?逃さんぞ!!?」

と胡蝶姉妹と慎寿郎も煌牙を追いかけた

「……夕餉を食べる場所を聞きたかった」

一人残された義勇は静かにそう呟くのだった

藤襲山く

「お兄ちゃん早く逃げて!!?」

「駄目だ!!?お前を置いて逃げる訳にはいかない」

「でも!!?」

鬼殺隊が最終選別を行う藤襲山、藤の牢獄に閉じ込められ鬼達が蔓延るこの山中で逃げ回る兄妹がいた

「僕は小夜子のお兄ちゃんなんだ!だから何があっても一緒だ」

「お兄ちゃん」

この二人が何故この山にいるのか、それは定かではないが鬼に追われ危険な事は間違いないだろう

「ギヒツ!!?追いかけてここはもうお終いか?」

「何があっても一緒だ!だとよ!安心しろ!二人纏めて俺が喰ってやるから何があっても一緒だ!」

「どけっ!!?コイツらは俺の獲物だ」

二人は鬼達に追い詰められて絶命絶命の危機に瀕していた

「鬼達が争っている隙に逃げよう」

と妹の手を引き再び逃げ出した二人

だがそれも長くは続かない

「逃げてても無駄だ!!? お前達人間は走ればいつかは疲れる!!? だが鬼は違う!!? 捕まるのも時間の問題だ!!?」

人間と鬼、ましてや子供の体力で鬼達から逃げ切れる訳もなくあつさりとおぼつかすてしまふ修也と小夜子の二人

「いいね!!? その今から喰われるという絶望に満ちた顔!!? 俺はそんな顔をした人間を喰うのが好きなんだよ!!?」

無慈悲なる鬼の牙が二人の体を貫き四肢を挽ぎその肉を咀嚼する

「ぐえええええ何だこのクソ不味い肉は☒とてもじゃないが食えたモンじゃねえ!!?」

どうやら二人は鬼の好みじゃないらしく食べ掛けの途中で投げ捨てられてしまった

「クソ!!? やつと人間の肉が食えたと思つたら!!? この山に人間が入ってくるまでお預けかよ!!?」

と不満を漏らす鬼・・・の背後で蠢く二つの肉塊

「ねえお兄ちゃん、漸く私達も食べられるね」

「そうだね、前はいい所で邪魔が入ったからね」

そう声をして慌てて振り返る鬼が見たものは

「何で・・・何で生きてやがる☒手足を挽ぎ肉を食らつた筈・・・何で再生してやがる!!? お前達は鬼じゃない筈だ!!? 何で☒」

手足を挽ぎ取られ喰われた筈の二人が何事もなかったかのように立ち鬼を不気味に見つめている姿だった

「何で? だって私達人間じゃないから」

「でも僕達は鬼でもない」

「ねえお兄ちゃん!!? あの鬼とっても美味しそう♪」

「そうだね! 喰う側から喰われる側になつた気分はどう? 僕達は希望から絶望に叩き落とされた魂を食べるのが大好きなんだ」

「うん♪人間の魂より鬼の魂の方がより濃厚で美味しいんだ♪だからさ!!? いただきます!!?」

その言葉を聞いたが最後鬼は肉体ごとその魂を二人に捕食され消滅した

「フフツ♪ご馳走はこの山にまだいっぱいあるから沢山食べなきや
」

「そうだね、僕達の同士もこの山に集まって来ている！饗宴といこう
か!!？僕達魔導ホラーの宴の始まりだ」

この日、藤襲山から鬼が一人残らず消え去った

煌牙達鬼殺隊が集う最中、鬼殺隊の怨敵鬼無辻もまた配下を集め此度の報告を聞いていた

だがその空気はあまりにも重く張り詰め召集された上弦達も無惨が放つ圧倒的な怒気に圧され緊張が走っていた

「お前達は何故集められたのか？理解出来る者はいるか？」

その言葉の真意は無惨にしか分からないが

「無惨様！青い彼岸花は絶えず搜索しています！何卒！何卒！」

そう無惨に赦しを乞う上弦の伍「玉壺」

だが無惨の真意と違う発言をした事で無惨の怒りを買う

「私は何故集められたのか？と聞いた筈だ、私は貴様に赦しを乞えと言ったか？貴様は私の質問に答えもせず何故貴様の都合を話す？何故だ？言ってみろ」

「申し訳ありません！申し訳ありません！」

無惨の怒りを買う必死に謝る玉壺だが火に油を注ぐ行為、更なる怒りを買う玉壺から血が大量に噴き出していく

「ぎいやああああ!!？無惨様！お許しを！お許しを！」

自らの配下にも容赦ない無惨を前に戦慄する上弦の鬼達

常に余裕を崩さない上弦の式でさえも失態を責められる恐れがある為

口を塞ぐ程今の無惨は機嫌が悪かった

「お前達上弦の鬼は百年以上も顔ぶれが変わらない選ばれた鬼達、鬼狩りの柱共を葬る事さえ容易な筈・・・何故だ？その上弦の鬼！それも上位の鬼達が揃いも揃ってこうも失態を犯すとは!!？そうであるう？黒死牟童磨」

「.....」

「.....」

「下弦共を黄金騎士に差し向けた時私はお前にも黄金騎士を殺せと命じたな。そしてお前は私にこう言った『黄金騎士四ノ宮煌牙を始末した』と！では何故四ノ宮煌牙は生きている？お前は私に偽りの報告を

したのか？昨夜もそうだ、下弦の壺が柱共に殺された時私は猗窩座に柱共を殺せと命じた！裏切り者の斬吼狼が関与する事も考え私はお前にも命じたな？だが結果はどうだ？殺した筈の四ノ宮煌牙は生きていてお前も斬吼狼のくだらぬ策に落ち間抜けにもこの無限城へと帰って来た！そしてその四ノ宮煌牙の手によって猗窩座は死んだ!!？百年以上顔ぶれが変わる事がない上弦の鬼が！たった一人の人間によって死んだ!!？黒死牟、お前が確実に四ノ宮煌牙を始末していれば！斬吼狼の策に溺れなければ猗窩座

は死ななかつた!!？まさか上弦の壺ともあろう者がこんな失態を犯すとは・・・失望したぞ黒死牟」

「.....」

「童磨、貴様もそうだ！相手が元柱だろうが人間!!？上弦に位置する者があわや頸を斬られる寸前まで追い込まれるとはな!!？それだけではない、貴様の前には太陽の光を克服した鬼擬きがいた！私が長年探していた太陽の光を克服する可能性を秘めた女だ!!？何故貴様は柱共をさつさと始末してその女を連れてこなかつた？魔戒法師とかいう奇妙な術を使う小娘に現を抜かし遊んでいたのか？」

「.....」

無惨から失態を責められ返す言葉もない黒死牟と童磨、無惨の言う通り人間を相手にそれだけの失態を犯した自覚はあるので黙っていたが

「無惨様!!？上弦の参が殺されたと言うのは本当ですか☒」

まさか上弦の鬼が、それも自分より格上の上弦の参が殺されたと俄かに信じ難い上弦の陸 堕姫 がそう無惨に尋ねると

「堕姫、私の嘘を言っているとお前は私にそう言いたいのか？」

「いえ!!？申し訳ありません無惨様!!？」

「それに誰が口を開いて良いと言った？私はお前に発言を許可したか？」

「」

「いえ!!？」

「ならば黙っている!!？今の私は機嫌が悪い!!？」

「はい」

無惨の顔は血管が浮き彫り目が血走っていて相当機嫌が悪いようだ

「四ノ宮煌牙!!?あの忌まわしき金色の鎧と日の呼吸を使う化け物が!!?貴様が余計な事をしなければ猗窩座は!!?」

猗窩座の呪縛を解放した煌牙を忌まわしく思う無惨

「上弦が堕ちたとなれば仕方ない、私とて不服ではあるが奴を解放するしかあるまい!」

その言葉に動揺する上弦の鬼達

「お待ち下さい無惨様!奴は逃れ者の鬼、素直に我等に協力するとは思えません」

「案ずるな童磨よ!奴の目的は黄金騎士の系譜の断絶!私に従わないとしても利害は一致する!」

「...上弦の弑よ...我が主がそう望んでいる、私はそれに従うのみ」
「黒死牟殿」

「殊勝な心掛けだな黒死牟...いいだろう!これからも励むがいい」
「...御意」

「お前達も心せよ!上弦だからと驕るな!隙を見せたら奴はいつでもお前達の喉元を噛み切るぞ」

無惨は上弦の鬼達にそう忠告すると

「鳴女よ、奴の元に案内しろ」

無惨の呼びかけに応え鳴女が琵琶を鳴らし血鬼術で無限城の構造を変えていく

そして無惨は無限城の最深部、奴と呼ぶ鬼がいる場所へ向かうのだった

「ねえ?本当に上弦の参は死んじやったの?」

「ヒョヒョ!久方ぶりに呼ばれ、もしや猗窩座様がと思っただけですが、まさか本当だとは」

「恐ろしや恐ろしや!金色の鎧の鬼狩りが恐ろしい!!?儂なんかすぐに殺されてしまうじやろう、恐ろしや恐ろしや」

「ねえ!お前達ちよつと黙っててくれない?俺は今まで感じた事もな

い憤りってやつを感じてるんだ！これが俗に言う怒りってやつなのかもしれないな」

「……」

「黒死牟殿？」

「……この雪辱は必ず晴らす！もう二度と遅れは取らん！……四ノ宮煌牙」

「それを言うなら俺もだよ黒死牟殿……あの一族特に桜花って娘にはしてやられたからね、俺の手で殺さないと気が済まないよ！それに食べ損ねた娘もいるからね！」

黒死牟と童磨、それぞれ因縁の相手に殺意を剥き出していく

その濃厚な重圧に他の上弦達も圧され冷や汗を流しながら二人に視線が移る

その時無限城の最深部、無惨が向かった場所が爆ぜ激しい衝撃が上弦達を襲う

そして奥から放たれるあまりにも重く禍々しい重圧に他の上弦のみならず童磨や黒死牟までもが戦慄しその奥を凝視する

すると奥からカツンと足音を鳴らしながらゆっくりと歩いてくる一人の鬼が現れた

「ほう久しいな！黒死牟、それに童磨！あいつも変わらず……いや童磨は上弦の陸から式に上がったのか！後は……猗窩座はどうした」

「猗窩座殿は死んでしまったよ！」

「そうか……それは残念だ」

「無惨様はどうした」

「鬼無辻が心配か？黒死牟。案ずる事はない！特に殺す理由がない」

「それは理由が出来れば殺すと？そう言いたいのか？」

「それはお前達次第だ！」

「それはちよつと聞き捨てならないなあ？いくらお前でも言い過ぎじゃないか？元上弦の参殿」

「今の私に上弦の階級など無意味だ！文句があるなら相手になるぞ？元上弦の陸！久しぶりに肩慣らしをしたいところだった」

「いやいや！俺は鬼同士仲良くしたいだけだったんだ！」

「・・・下らん」

そう言つて元上弦の参と言われた鬼はその眼を赤く光らせ

「・・・食事の時間だ!!？私はこれで失礼する」

と残しこの無限城から消えようとするが

「・・・猗窩座を殺した鬼狩りはどんな奴だ？」

去り際にそう質問すると童磨が

「四ノ宮煌牙という鬼狩りの柱だよ」

「・・・そうか・・・覚えておこう」

その答えにあまり興味無さげな反応を示しながら元上弦の参は消えていくのだった

そしてその重苦しい重圧から解放された上弦達は息を切らしながら

「な、なんなのよ！アイツ!!？元上弦の参か何か知らないけどすつごく偉そう!!？」

「ああ！堕姫は知らなかったね、確かに奴は元上弦の参だが正直言つて化け物だよ！この世に神なんていないけど悪魔っているんだなつて俺はそう思うよ」

「え×」

「これは堕姫が鬼になる前の話だけど、自らをホラーと名乗る鬼がいたんだよ！その鬼は無惨様に接触し利用しようとしたんだけど当時の上弦達と裏切り者の斬吼狼殿でその鬼を倒したんだ!!？だけどそれが間違이었다!!？その鬼は自分の死を鍵としてある者を蘇らせたんだ！そしてその者は当時の上弦の参の体に乗っ取りその魂を喰らった！」

「た、魂を×食べる×ぞ、そんな事鬼でも!!？」

「そうさ！そんな事鬼でも無理だよ！俺は人を喰らう事でその魂を救っているけど魂そのものを食べたなら救いも何もない！だからこそ悪魔なんだよ!!？」

「でも！たった一人なら私達が協力すれば殺せるはず!!？」

「無理だよ？それが出来るならとつくにやっつてるからね!!？というか

昔それで返り討ちにされてるからね！ここにいる上弦達は」

「そんな☒」

「最悪だろ？もう笑うしかないよね！なら最悪ついでにもう一つ教えるけど奴の同類が他に五人いるんだよね！！？」

「・・・は☒」

「これがもう最悪でさ！！？普段は人間として社会に溶け込み人間として生活してるんだぜ！俺達鬼が喰らう人間が実は鬼すら喰らう悪魔だったなんて笑えない冗談だろ？まあ笑うしかないんだけど！」

童磨の説明に言葉を失う上弦の陸 堕姫 ”

「その辺にしろ童磨よ！下らぬ事を言う暇があるなら青い彼岸花を探るか産屋敷一族を探せ！」

そこへ戻って来た無惨が童磨に一喝

「ああ無惨様！ご無事で何より！俺は貴方が心配で胸を痛めておりました」

なんとも表情が読めない顔でそう話す童磨だが

「・・・解散しろ」

これ以上話す事はないという無惨の一言で即座に撤退していく上弦の鬼達、童磨も従わないわけにもいかなかったので仕方なく撤退すると唯一撤退しなかった黒死牟に無惨が

「黒死牟・私はお前を信用していない訳ではない！ただ私は奴を四ノ宮焯牙を確実に殺したいだけだ！猗窩座の眼から奴を！黄金騎士を見ていたが私は奴が恐ろしい！今にも頸を斬らんと喉元に飛び込んでくる黄金騎士が！あの獣のような真紅の眼が！脳裏に焼き付いているのだ！

思い出すと今でも震えが止まらなくなる！あの鎧は・・・私達の理外の力！だからこそ私は奴を！あの逃れ者の鬼を利用するのだ！」

「・・・御意」

上弦で最も信用の高かった黒死牟にそう話す無惨、黒死牟は無惨の話に肯定の意を示すが本心は納得し兼ねているようだ

四ノ宮焯牙を殺すのは自分であり逃れ者の元上弦の参ではないと考えているのだろうか

そんな黒死牟も上弦の召集が終わった事で無限城から撤退すると
「斬吼狼・・そして黄金騎士牙狼！お前達は奴を前に絶望するだろう！
あの全てを喰らい尽くすような暗黒の鎧を前に」
そう不吉な言葉を残す無惨だがその表情には自身にもまた脅威だ
とそんな感情を匂わせる顔をする無惨だった

藤襲山く

「ねえお兄ちゃん？そろそろ帰らないと家の皆心配するよ？」
「そうだね！鬼が出る夜に子供が歩き回るのは怪しまれるからね！」
「俺からしたら夜に子供が歩き回るのは好都合だけだな！行方不明になっても鬼の仕業だと言えどもなるからな」
「まあ本当は私達が食べるか人買いに売るかのも二択だけだね！どっちにせよ私達夫婦にとって子供は利益を生む道具ってとこさね」
「まあ□貴方達は下品極まりないですね！でも、人間は利益を生む道具という点については理解出来ます」

この藤襲山に集まった五人の人間・・いや正確には人間ではない異形の怪物達

その怪物達は藤襲山にいた鬼達を一人残らず食い尽くし集まっていた

「そういえば貴方達は今どこに住んでますの？前に住んでいた家族は鬼に食べられたみたいですが」

「あくあの人達も良い人達だったよ？お姉ちゃんなんか私達を庇って逃してくれたもんね」

「そうだね！本当は逃げる必要もないんだけど人間として生活してる以上は弱い人間のふりをしなきゃいけないしね！ハハッ！あのお姉さんも僕達を庇わなければ無駄死にしないで済んだかもしれないにね！ホント人間って愚かだよね」

「クハハハ！お前ら人の心がねえのかよ！」

「そういうアンタも笑ってるじゃないか」

「え〜？おじさん達だって子供達を痛めつけたり殺したりしてるんでしょ？人の心なんてもつてないじゃん」

「馬鹿！俺達は恐怖に凝り固まった魂を食う為にガキ共を痛め付けてるんだよ！！？あの魂は人間でいうところの甘味ってやつだ」

「でも中には精神が壊れちまつて食えもしないガキ共もいたけどね」

「ああ！そんな奴もいたな！まあそんなガキでも人買いに売りや二束三文の金にはなるー！」

「そういえば私達に最後まで反抗的なガキも一匹いたね！」

「そんな奴いたか？・・・ああ！いたな！すっかり忘れてたわ！クハハハ！！？」

「ハハッ！そもそも僕達は人間じゃないんだし人の心なんてあるわけないじゃないか！ああ、さっきの質問だけど僕達は今お金持ちの家に住んでるよ？」

「うん！私が鬼に食べられるって時にサツと現れてスパツと鬼を斬ったんだよ！！？もうね！ホントに！！？良いところで邪魔するな！って思ってたんだよ？」

「ハハッ！小夜子話が噛み合っていないよ、まあでもそれはそうだね！でも結果的に前より良い暮らしが出来てるから許してあげてるけど」

「うふふ♪私の家もお金持ちですよ？なんでもこの国でも顔が利くらしくて・・・今度お爺様が私に会わせたい方達がいると！そう仰っていました」

「クハハ！お金持ち様ってのも面倒だなあ！！？」

「人間として生活している以上私達も多少の我慢はしないと！ですよ」

「アンタの言う事は分かるけど、私達って鬼みたいに太陽が駄目だから

鬼を殺す連中に殺される心配もないんだし、もつと暴れても良いんじゃないかい？」

「ええ！！？貴方が仰る事は重々理解しています！ですが油断してはなりません！私達を変えた者、アレはとっくの昔に殺されていますので」
「僕達を殺せる存在がいたんだね！気をつけないといけないね」

「お兄ちゃん私怖い！」

「クハハハ!!?俺達は鬼さえも喰らう最強の生物だぞ!何者か知らんが喰い殺してやればいいだろ」

「坊や達は心配し過ぎさね!」

「その油断が足元をすくわなければいいのですけど」

そんな会話を交える怪物・魔導ホラー達

彼らは元よりこの世界の人間、魔導ホラーへと変貌したが古より続く魔戒騎士とホラーの戦いの歴史など知る筈もない

故に警戒しても立場は圧倒的に此方が有利だと信じていた

そんな時だった

「ホラーは古より魔戒騎士の手によって葬られ続けてきた!己の力を自負するのは構わんが見誤ればお前達も同じ流れを辿るだろう」

魔導ホラー達にそう忠告しながら近付いて来る一人の男

「お待ちしておりました!我等が主!!?」

と貴族令嬢の魔導ホラーが男に畏まると

「随分とまあ遅かったな大将!この山の鬼は俺達が先に食ったぞ」

「こういうのは早いもん勝ちさね!」

「私我慢出来なかつたんだもん!ゴメンなさい」

「そうだね!僕達も悪いとは思ってるよ」

他の四人も男の前に集まっていくと

「そうか・・・それは残念だ!」

たいして残念では無さそうな男がそう言う

「お前達は今まで通り人間として社会に溶け込み、必要とあれば人間の魂も捕食しろ」

「承知しました、我が主」

「私は鬼の方が好きだけどおじちゃんがそう言うなら人間も食べるよ」

「小夜子、おじちゃんは失礼だと思うよ?だって彼の見た目は鬼なんだから」

「つまり俺達は今まで通り好きにやれって事だな!なあ大将!」

「アンタがそう言うなら私達は好きにやるさね!」

その男からの指示に従う姿勢を見せる五人、話はこれで終わりだとその場で解散をするのだが

「我が主、あれで良かったのですか？」

特に具体的な指示もない事に疑問を持つ貴族令嬢はその場に残り男にそう質問をするのだが

「アレ達は加減というものを知らん、ならば好きにさせるのが私にも好都合というものー!」

「承知しました我が主」

「さて…この鬼の姿というのも少々目立つ、私も人間へと擬装して世に溶けようか」

男はそう言うのと怪しげな薬瓶を取り出しそれを一気に飲み干すと

「素敵な殿方になられましたね、我が主」

男は鬼という人からかけ離れた見た目から好印象を与える容姿の整った人間の男へと変化して爽やかな笑みを見せると

「龍崎駈音だ、これからはそう呼ぶと良い」

「承知しました、駈音様」

龍崎駈音と名乗る男は配下である貴族令嬢と共にこの場を後にして常闇に消えていくのであった

その頃四ノ宮邸では

「待て煌牙!!? 私の話はまだ終わってないぞ!!?」

「まだ何も話してないぞ!!?の間違いじゃ?」

「喧しい!!?…全くあいも変わらず口の減らない奴だ!」

「それで?話というのは?」

「うむ…まずは…煌牙、お前がこうして無事に帰って来てくれて良かった!鬼との戦いは常に命がけだ!上弦となると尚更死を覚悟しなければならぬだろう!だが!それでも!無事に帰って来て欲しいと私はそう願っている!そして…ありがとう!杏寿郎を助けてくれて!!?息子が!こうして無事に帰って来てくれた事を親としてこれ程嬉しく思う事はない!!?煌牙…本当にありがとう!それと、おかえり!!?」

「うん．．．ただいま慎寿朗さん！」

結局のところ熱血親父のしつこい追跡に根負けした煌牙、絶対怒られると思っていたが出てきた言葉は感謝と温かい言葉だった

一瞬戸惑いはしたがそう言って貰えて嬉しい煌牙だったが

「その温かい言葉、ちゃんと息子に伝えなよ慎寿郎さん」

「当たり前だ！我が子を労わない親がどこにいる？」

「そうだな．．．まあ俺も一応？．．．親に労ってもらったし」

「一応とはなんだ!!？泰三殿と花蓮殿はお前の親だ!!？誰がなんと言おうとな!!？」

「ああ．．．いやそうじゃなくて!!？その．．．師匠やおやっさんの他に俺達を捨てた奴等がいるって昔話しただろ？だけどさ、そいつら俺達の親じゃなくて．．．本当の産みの親がいたんだ」

「何☒お前達兄妹の本当の親がいたのか☒だが何故お前達を捨てるよくな真似をしたんだ？その産みの親というのは」

「捨てられた訳じゃない．．．ただそうするしか選択肢がなかったんだと思う」

「．．．込み入った事情がありそうだな」

「まあ、それも含めて話を聞きに行こうと思うんだ！俺の父親の所に」
「今からか☒」

「まあ．．．歩いて十五分つて所だし」

「意外に近いな．．．よし！私も一緒に行こう！ガツンと一言言ってる!!？」

「お、おお！元炎柱が初代牙柱にガツンと一言．．．絵面が凄いな」

「．．．はあ☒初代．．．牙柱？煌牙、お前は何を言ってるんだ？」

「いや．．．気持ちは分かる!!？普通に考えれば何を言ってるんだ☒と思うけど．．．父親なんだよ、初代牙柱暁大牙は!!？」

「．．．．意味がさっぱり分からない!!？」

「その意味が分からない事実を唐突に突き付けられたんだよ！俺は!!？」

「．．．そうか．．．いや！お前も大変だな！それで、初代牙柱が父親と
いうのは本当なのか？」

「逆にここで嘘を言つて得られる利があると思う?」

「ないな!!?」

「だろ? んじゃ俺は話を聞きに行くけど・慎寿郎さんも一緒に行くんだろ? ガツンと一言言いに」

「馬鹿!!? 歴代の柱の中で最も偉大だった初代牙柱にそんな事言える訳ないだろう!!?」

「ええく・さつきまでの威勢はどこにいったの? いや、まああのおっさん怒れば滅茶苦茶怖かったし余計な事は言わない方が良く思うけど」

「ま、まあ私の事はともかく話を聞きに行くのは機を見てからの方が良いと思うぞ?」

「え? なんで?」

「お前・本当の親がいたという事実をお前だけが先に知って後から妹に話す気か? いいか? 家族というのは辛い事も嬉しい事も共に共有し乗り越えていくものだ!!? 妹が大事ならその家族の輪から外すような真似をするんじゃない!!?」

「・・・ゴメン慎寿郎さん!!? それとありがとう!!?」

「いや、大事な事を思い出させてくれたのはお前だ! 礼を言われるような事はしていない」

「それでもだ!!? 俺カナヲの所に行つてくる!!?」

「ああ」

元炎柱煉獄慎寿郎との会話を切り上げ煌牙はカナヲの元へと走り出していった

「煌牙、初代牙柱は遥か昔の人間! お前の話が本当だとするなら・お前は一体何者なんだ?」

事情を知る由もない慎寿郎はそう疑問を残しゆつくりと煌牙の後を追うのだった

「わああああ☒これ美味しいです!!? 凄く美味しいです!!?」

「アンタ!!? もう少し落ち着いて食いな!!?」

「柱の皆様も同席してるのだからあまり失礼のないようにね」

「だって凄く美味しいんですもん!!? 沢山食べないと勿体ないですよ!!? それにほら!!? 恋柱様と炎柱様を見て下さい!!?」

「・・・まあ・・・あの二人は・・・うん」

「一人で既に十人前位は食べてるわね」

「あれだけ食い意地が汚いんですよ!!? 私が沢山食べても問題ありません!!?」

「アンタの発言の方が大問題だよ!!?」

一方四ノ宮家の大食堂で既に御馳走を食べていた鬼殺隊の面々

市場には滅多に流通しないような珍しい食材や高級食材、専属シェフや焔牙が腕によりをかけた数々の料理に舌鼓をうつ天元の三人の嫁達や炎柱、恋柱を筆頭とする大食い自慢達が料理を食い漁り本来なら上品な食卓は混沌と化していた

その中で一番まともというか最も上品なのが四ノ宮家と産屋敷家が困うテーブルだろう

食事の際の礼儀作法を重んじ丁寧に料理を口に運ぶ姿は上流階級の育ちが表れていた

「おい!三太郎!!?なんだこの茶色いドロドロしたやつは☒まるで腹を下した時に出るやつみたいじゃねえか!」

「汚ねええええ!!?伊之助お前!!?飯食ってる時にそんな話をするなあ!!?」

「でもなんだろう?見た目は確かに伊之助の言う通りだけど口に入れてみると辛くて刺激的で凄く美味しい!!?」

「炭治郎!!?お前なんでそんな感想言いながら食べてるんだよ☒」

一方で炭治郎達はカレーという初めて見る料理に興味津々だったが

伊之助の不用意な一言で善逸が食欲を失くし、炭治郎はあまり気にしてないのかカレーを口に入れ味の感想を話している

「これはカレーという異国の煮込み料理だよ。異国ではナン?とかいうのと一緒に食べるみたいだけどこの国だとお米と一緒に食べるらしいよ?」

カレーという料理だと炭治郎達に教えるカナヲ、さっきの話を聞いて内心ドン引きしてはいるがそれを顔に出さず自分の持つ皿に乗っている料理を口に運ぶと

「カレーというのか、初めて知ったよ！カナヲが食べているのは？凄く美味しそうだけど」

「ん？これはオムライスという卵でご飯を包んだ料理だよ？凄く美味しいよ？」

四ノ宮家に並ぶ料理は大正時代では贅沢品の洋食が並んでいて金を貰っているとはいえ普段食べる機会も少ない柱達も数々の品を更に乗せ舌鼓を打っていた

そんな中扉を勢いよく開けて入ってきた煌牙

「ちよい!!？カナエさんアンタ近いって!!？」

「でも煌牙君も男の子だし抱き付かれたら嬉しいでしょ？」

「アンタあざといな!!？」

その煌牙に引っ付きながら一緒に入ってきたカナエと嫉妬からなのか青筋を額に浮かべた笑顔のしのぶが一同と合流すると

「わあくお!!？流石の桜花ちゃんもこの展開は予想してなかったよ♪

となると？しのぶちゃんとカナエさんの煌牙争奪戦が始まっちゃう感じかなあ？」

「ちよっとお姉！なに呑気な事言ってるの☒お姉もお兄の事好きなんでしょ？このまま黙って見てるわけ？」

「あら？桜花も煌牙の事が好きだったの？でもお母さんはちよっ複雑かしら？」

「僕の意見を言わせて貰うと桜花の気持ちは尊重出来ないかな？四ノ宮家の長男と長女として表社会に顔が割れている以上近親婚は推奨出来ないね」

「あれれ？いきなり話がブツ飛んでるけど私の煌牙に対する好意は家族愛なんだけど・・・ちよっと頭がお花畑過ぎないかなあ溜花！流石の桜花ちゃんも引くよ？」

「溜花は真面目で賢い子だけどそういった事は疎いからね！お父さん

としては非常に安心だよ」

「お母さんはそんな溜花が大好き!!?」

と煌牙本人そっちのけで話が盛り上がる当家族達

「煌牙!!?魔戒騎士の継承は基本的に血縁者が受け継ぐ事が多い!だから魔戒騎士は次代の後継者を残す為に子孫が必要だ!という訳でそこのおっとり美人な姉ちゃんを受け入れてやれ!!?」

「子孫を残していないお前には言われたくないな総悟!!?」

「あ?喧嘩売ってんのか煌牙!!?」

「そういや初対面の時いきなり斬り掛かってきたよな?先に手を出してきたのはそっちだぞ!!?」

「面白れえ!!?その喧嘩買ってやるよ!!?」

「はい!!?アウトオオ!!?魔戒騎士同士の私的な戦いは御法度!!?掟を知らない訳じゃないでしょ?」

「ならサバツクだ!!?それなら問題はねえだろ?」

「ならいいよ!!?って私が言うだけでも?煌牙ちゃんは疲れてるんだよ?」

「いや・俺は総悟と戦ってみたい」

「煌牙ちゃん」

「強くなったから力を試したいとかそんな玩具を与えられて喜ぶ子供みたいな理由じゃない!!?俺と総悟は魔戒騎士!!?これから共に戦っていく仲間だ!互いの実力や手の内を知らないで連携も上手くいかないだろ?だからこそ俺は総悟と戦ってみたい」

「ハッ!!?そうきたか!!?なるほど!!?確かに煌牙の言う通りだ!!?互いに交戦の意があるんだ!止めるなよ朔弥」

話の流れで煌牙と総悟が戦う流れになりオロオロとしながら煌牙を心配する朔弥

煌牙の側にいたカナエやしのぶもまさかこんな流れになるとは思わず

「ちよ!煌牙さん!!?貴方ちよつと前までこんな好戦的じゃなかったでしょ!どちらかというとのらりくらりと躲してたじゃない!」

「私も煌牙君が心配だわ!総悟さん?だったかしら?初代牙柱様と双

壁を成した魔戒騎士って聞いたわ！」

総悟と戦うと言い出した焠牙を心配するしのぶとカナエだが

「面白いじゃないか!!? 皆も思わないかい? 上弦を倒した焠牙、彼は牙の呼吸と型とは違う呼吸と型を使ったと杏樹郎君から報告を受けていたよね? だったら口で説明するより実際に見せて貰おうよ! その呼吸と型を!!? それに総悟さんの実力も鬼殺隊の皆に知ってもらいたい機会だと僕は思う!!?」

少し興奮気味の泰三だが彼の言う通り今の焠牙と総悟の実力を知るには絶好の機会、当初は焠牙が皆に説明すると言っていたが百聞は一見にしかず実際に見た方が理解が深いのは間違いないだろう

そしてここまで静観していた柱達だが、焠牙に引っ付いていたカナエに面食らった事もあるが下手に茶化すとしてのぶから新薬の投与という名目の人体実験に付き合われそうと誰も喋らないでいたのが泰三の話で漸く話に加わる事ができ、皆が肯定の意見を言うこと

「泰三の提案は私も賛成だけど、どうせなら柱の皆も参加したらどうだろうか? 焠牙の言う通り連携をより強化するには直に体感した方がより理解を深められると思うんだ」

「お館様のお許しが出たのなら、俺も今の焠牙と刃を交えたいと思います!!? そうゆう訳だ!!? 焠牙!!? 俺とも戦え!!?」

輝哉の提案に好戦的な実弥が真っ先に焠牙と戦う構えを見せると

「あの!!? …俺も焠牙さんと! ああ、いや!!? 戦いたいとかそんなつもりじゃなくて! ヒノカミ神楽について分かった事があると言っていたから…その」

「え×炭治郎お前…安心しろ!!? 骨は拾ってやるからな!!?」

と申し訳なきそうに参加の表明をする炭治郎と参加する気が全くない善逸

「オーガの戦いを見て分かった事がある…今の俺じゃ歯が立たねえ!!?」

「いや、それは見なくても分かる」

焠牙と自分の実力差を冷静に比べ歯が立たないと素直に認める伊之助に

ツツコミを入れた善逸・・・は伊之助に関節技を極められ撃沈した
「だったら俺達も参加しようかな！一応俺達は焠牙の兄弟子だしな!!
？」

「一応って!!？言ってる悲しくない？というか俺達って私は参加しないよ?。」

「え?。」

「え?。」

「ここで辰巳も参加を表明するが春は参加する気はないらしく思わ
ずすれ違いが生まれてしまう

「だって焠牙疲れてるんだよ?それで何人かと戦うんだよ?それも同
格の柱達と!!?気持ちは分からなくもないけど自分の気持ち優先で
焠牙に負担を掛けたくないかなって」

「そりやそうだ!!?つい流れで俺も参加しようとしたが焠牙の負担を
考えたら春の意見は至極真つ当だな!!?ハハハ!!?。」

「でしよ?。」

「お館様!!?柱でもない俺が意見を言うのはおこがましいのは承知で
言いますが焠牙の負担を考えて戦う人数を絞ってみてはどうですか
?まあ発端の総悟さん?は別として柱達は・・・勝ち抜き戦で勝った
方が代表して焠牙と戦うとか?まあ焠牙も疲れてるし連戦するなら
柱達も連戦しないと条件は合わないと思います!!?まあ自分に有利
な条件じゃないと焠牙と戦えないとか言う腰抜けは柱にはいないと
思いますがね!ハハハ」

焠牙の負担を考えれば自分は参加すべきではないと考え直した辰
巳

兄弟子ではあるが親友でもある焠牙を蔑ろにしない辰巳は輝哉に
そう提案するが言い方に刺がある

「上等だ!!?他の柱をブツ潰して俺が焠牙と戦ってやる!!?。」

辰巳の発言にいの一番に噛み付いてきたのが好戦的な実弥だ

腰抜けと言われて黙ってられないのだろう

「ハハハ!!?こう言えば柱の方々も否定的な意見は出せないってな」

敢えて刺のある言い方をしたのは辰巳の思惑のようだ

柱達と抗議するのは流石に気が引けるので先手を打つ方が楽だと考えたのだが

「俺達柱が腰抜けとは随分と派手な事を言うな」

実弥はまだしも他の柱達は腰抜け呼ばりされた事に憤慨して辰巳に詰め寄り・・・辰巳は柱達にしばかれた

「あのさ!!?俺総悟と戦ってみたいとは言ったけど鬼殺隊の面々とも戦いたいとか言っていないぞ?何か勝手に話が進んでるけど」

確かに焠牙は総悟と戦ってみたいとは言ったが柱達とも戦いたいとは一言も言っていない

自分の意思とは裏腹に話が拡大したのを良く思わない焠牙は

「まあ柱同士の稽古だと思えば反対は別にしないけど俺の意思も聞かずに話を進めるのはどうかと思う!!?俺、鬼殺隊の都合の良い道具じゃないんで!!?」

この話は焠牙を中心とした話なのに肝心の焠牙の意思は反映すらされていない

敢えて辛辣な言葉をぶつける焠牙は

「辰巳、春ありがとな!!?俺はお前達が親友で本当に良かったよ」

「まあ俺はそんな褒められたもんじゃないけどな!!?ハハハ」

「最初戦おうかなって言ってたからね!!?」

と和やかな会話をする焠牙達だが

「誰も道具扱いなんてしてねえだろうが!!?」

焠牙の辛辣な言葉に憤慨した実弥が噛み付いてくる

柱達は誰も道具扱いなんてしてるともりは一切ないので当然の反応だ

「ああ・・・悪い!俺も言い過ぎたけど、俺とどうこうする話なら俺の意見も少しは聞けつて事だよ!!?柱なんだから自分達の判断で決める事もあるしそれはそれで大事な事だと思う!!?でもさ?人の意見も大事じゃん?」

人と人の繋がりは自分の思いだけじゃなく相手の思いも汲まないと繋がらないよ?不死川さんも思うところあるだろう?」

「・・・あ?弟の事は今関係ねえだろうが!」

「まあ・・・そこは兄弟同士で話し合っただけでほしいというか」

と実弥と会話している煌牙だが

「ねえ？煌牙良い事言ってるけど煌牙も一人で抱え込んで相手の想いを汲み取らないよね？特に人の好意とか？繋がらないから一方通行だよ？」

人に偉そうに説教するなら煌牙も人の好意を受け取らないと！その辺煌牙はどう思う？」

「えええ・・・まあ・・・はい・・・そうですね・・・これからは善処するという方向性で前向きに検討する事という事で」

「あらあら♪じゃあ私も好意も素直に受け止めてくれるのね♪嬉しいわ♪」

「ちよつと姉さん☒食い付きが早過ぎるわよ！この朴念仁の言ってる事は拒否よ!!？当たり前障りのない都合の良い拒否よ!!？ダラダラと言葉を並べてるだけの拒否よ!!？」

「おい！三回も言うなよ!!？前向きに検討するって言っただろ!!？」「ええ！確かに言ったわ!!？でも言っただけで実現するかは怪しいのよ!!？そもそも人からの好意に全く気付いてないでしょ！」

「気付いてないというか今までそんな余裕が全くなかったというか：牙狼や柱という重責と俺自身の弱さの葛藤がな・・・その・・・なんだかなだ言いながら俺は今だけしか見ていなくて未来を見てなかったんだなって」

「その言い方はズルイわ!!？文句言えなくなるじゃない」

「悪い・・・だけどこれからは俺も誰かと一緒にに未来を見てもいいんじゃないかって思ってる!!？まあ鬼殺隊の将来性は不確定過ぎて安易な約束はしたくないって気持ちはあるが」

「まあ、今はそれだけ聞いたら充分だわ!!？だったら尚更鬼無辻を倒して

平和な日々を取り戻さなくちゃ!!？」

煌牙の発言にヤル気充分といったしのぶ、煌牙もちよつと肩の荷が降りた中ホツとした表情を見せると桜花を一瞥

これ以上拗らせたらややこしくなるから黙ってろと眼で訴えると

「はいは〜い!!? とりあえず話を纏めると柱達の中から勝ち上がった人が焠牙と戦うって事でいいんだよね? 焠牙もそれでいい?」

「それでいいよ!!? まあ脳筋僧侶が勝ち上がりそうだけだな」

「ああ☒俺が勝つわあ!!?」

桜花が話を纏めだして焠牙も了承、だが岩柱の悲鳴嶼が勝つだろうと予想すると実弥が闘志を燃やしヤル気充分といったところだ

そんなやり取りがありつつ一同は庭に出ると

「カナヲ後で話がある」

「話? うん、分かった」

「朔弥さんもいいよな? ・先代牙狼暁大牙を交えて話したい」

「焠牙ちゃん☒それって!!?」

「まあそうゆう事だ!!? んじゃ!!? 総悟と戦ってきますわ」

そう言つて焠牙は肩を回し準備運動をすると

「じゃあさっさと始めますか!!?」

「ああ、言っておくが手加減はしないぞ?」

「おう! 負けた時の言い訳に使われたら情けないからな!!?」

「はっ!!? その言葉そっくり返すぞ」

そんなやり取りをしつつも両者共に即座に戦闘開始出来るよう警戒態勢を怠らず

「はっ!」

先制攻撃として総悟が瞬時に間を詰め寄り奇襲を仕掛け焠牙の隙を生み出そうとする

——日の呼吸 幻日紅——

それに対し焠牙は日の呼吸の型の一つ、幻日紅で急速に回避

残像を残し回避した焠牙はその勢いを利用して総悟の真横から蹴りを放つ

総悟も一瞬とはいえ残像に攪乱され反応が遅れたが焠牙の蹴りを腕で防ぎ脇腹の直撃は辛うじて避け初手の攻防は一進一退といったところだ

そしてこの攻防で互いに火が付いたのか互いに剣撃や格闘術を織り混ぜながら激しい攻防戦が始まり

「ハッ!!? 流石は黄金騎士様ってか? 中々やるじゃねえか!!?」

「まあな!!? そうゆうアンタも結構やるな!!? 流石は歴戦の魔戒騎士ってか?」

剣撃と剣撃がぶつかり鏝迫り合いの最中互いに憎まれ口を叩く焠牙と総悟

互いに獰猛な笑みを浮かべ剣を弾くと

「ー呀の呼吸ー」

とある型の構えをした総悟が顔を顰め

「・・・チッ!とうとう出てきやがったか!!?」

突如戦いの構えを辞め視線を彼方へ向けた総悟

突然の行動に勢いを削がれた焠牙は総悟に疑問を持ちつつも総悟の唯ならぬ雰囲気を感じ取り

「何かあったのか?」

そう言つて魔戒剣を鞘に仕舞い歩み寄る焠牙

「ああ! 焠牙!!? 俺に着いてこい!!?」

何があつたのか話す時間もないのだろう

総悟は足元に影を作り出すと焠牙に着いてくるよう促し先に影の中に飛び込むと

「皆ゴメンね!!? 大事な用を思い出したからちよつと焠牙ちゃん借りにてくね!!?」

朔弥も慌てて飛び出し鬼殺隊に模擬戦が中止になる事を謝罪して

「行こう? 焠牙ちゃん」

そう言つて朔弥も影に飛び込み

「花蓮!!? 僕達も行こう!!? ここから先は僕達も無関係じゃいられない」

「泰三さん・・・分かりました! 私と共に」

普段は飄々とした泰三からは見れない真面目な態度に何かを察して共について行く事を決めた花蓮

「お館様並びに産屋敷家の皆様!!? そして柱達!!? こうしてお集まりになられたのにこのような形でこの場を去る事をお詫び申し上げます!!?」

四ノ宮家現当主として鬼殺隊関係者に非礼を詫び花蓮は泰三と共に影の中に飛び込んで行った
すると

「え☒ちよつと桜花さん☒」

何故かカナヲを担いだ桜花が影に向かって走り出し

「出遅れちゃつたらカナヲちゃん置いてけぼりになっちゃうよ？大好きなお兄ちゃんと離れるの嫌でしょ？」

「いや！いきなり過ぎて理解が追い付きません」

「大丈夫だよ！私もいきなり過ぎて、事態を呑みこめてないから」

「それ、大丈夫じゃないやつですよ？」

そんな会話をしながら二人が影の中に飛び込むと

「じゃあ！皆悪いけど今日はこれでお開きな！！？あとは飯食うなり泊まるなり好きに過ごしてくれ！！？ゴンザさんに言えば大丈夫だから」

後の事をゴンザに任せ煌牙も影の中に飛び込もうとすると

「お兄！！？嫌！！？私を一人にしないで！！？」

家族総出でいなくなる事に危機感を覚えた溜花は慌てて煌牙に飛び付き

「うおっ☒いきなり飛び付いたら体勢が☒」

勢いよく飛び付いた事で体勢を崩した煌牙は

「あっ☒やばい！！？このまま影の中に落ちる」

体勢を整える暇もなく煌牙達は倒れながら影の中に落ちていくのだった

「この屋敷の当主一家が皆消えてしまったね…こればかりは私も予想出来なかったよ」

流石にこの展開までは予想していなかったお館様、どうしたものかと思案していると

「普通ならこんな展開予想出来ませんよね！まあアレが四ノ宮家の日常茶飯事なんで俺達はもう慣れましたよ！！？ハハハ！！？」

「それって暗に私達も普通じゃないって意味なんだけど？まあ慣れてしまってるから否定出来ないのが悲しいけども」

四ノ宮家と共に暮していればこんな事は日常茶飯事だと笑う辰巳と普通じゃない事を嘆く春

柱達を差し置いて先にお館様に話しかけるあたり彼等も普通の感性ではないのかもしれない

「まあそれを言うならあの少年も普通じゃないけどな！」

辰巳は消えゆく影を見ながらそう呟くのだった

そして総悟達はどうと

「一足遅かったか・・・奴の反応が消えてやがる」

そう呟く総悟に

「奴と言うのは君が話していた例の奴かい？」

「例の奴？泰三さん、私は話が見えないけど何があったのかしら？」

「お母さんはあの時いなかったからね!!？いや!!？私も驚いたよ!!？」

「桜花さん降ろして下さい!!？」

「・・・せめて何か痕跡か手掛かりでも見つければ、奴等は反応しないし探す事も困難」

そう話す泰三、花蓮、桜花、カナヲ、朔弥

総悟は彼等に視線を移し

「焔牙、お前何やってんだ☒」

呆れた目で影から出てきた焔牙を見ると

「榴花も一緒に着いてきた」

着いてきたものは仕方ないと割り切っていた焔牙はそう返すと

「だけじゃねえだろ!!？後ろ見ろよ!!？」

そう言われ皆が焔牙の後ろを見ると

「すいません!!？俺も何か出来ないかかって思ってた」

何故か炭治郎も着いて来ていた!!？

「おい!!？これは遊びじゃねえんだ!!？何か出来ないかって？何も出来ねえよ!!？だから鬼狩りは俺達の計画から除外してんだ!!？」

「総悟ちゃん!!？だからってそんな言い方はないよ!!？私達の敵がど

んな奴か知らないんだもん!!?仕方ないよ」

カナヲはともかく話の中に入ってなかつた瑠花と炭治郎という予定外の人間が来た事に激怒する総悟とそれを宥める朔弥

「計画?鬼狩りは除外?どういう事かしら?さつきから話が見えてこないし、私達の敵というものが分からないわ?鬼じゃないのかしら?」

さつきから話が見えない事に疑問と憤りを感じた花蓮の発言に

「そうだね!!?ちゃんと話すべきだね!!?私達魔戒騎士や法師が倒さなきゃいけない本当の敵ってやつを」

「えっ☒本当の敵?鬼無辻無惨じゃないんですか?」

「それは鬼殺隊にとっての怨敵!!?私達が倒さなきゃいけないのは...魔導ホラー達と闇に堕ちた魔戒騎士!!?暗黒騎士、呀!!?」炭治郎を始め鬼殺隊は鬼を狩る為に戦っている、故に倒すべき本当の敵は鬼無辻無惨であり当然疑問に思うだろう

だが朔弥が話した内容は全く聞いた事もない未知の敵だった

「それはホラーの気配をしているわけではない、夜になると動き出す訳でもない、普段は人として紛れ込んでいる特殊なホラー、それが魔導ホラー!!?」

「人として☒普段は一般人として人間社会で暮らしているって事ですか☒」

「そう、鬼のように姿形や気配で判別出来ない!!?隣の隣人が異形の化け物だったとしても誰も知らず気付かず人の営みが行われているの」

「そしてホラーは人の魂を捕食する!仮に集団失踪があっても鬼殺隊は鬼の仕業と判断して真の犯人には辿り着かない!!?」

「そんな☒...そんな化け物がこの世に!」

「そしてホラーを倒す事が出来るのは魔戒騎士や法師だけ!!?鬼が日輪刀じゃないと殺せないように、ホラーは私達だけしか倒す事が出来ないの!!?」

「それで鬼殺隊は計画から除外するって...でも!!?それを知って何も出来ないのは悔しいです!!?」

魔導ホラーの存在を知って尚、何も出来ないのが悔しいと嘆く炭治郎

「まあ、あれだね！適材適所ってやつさ！僕達はどんなに頑張っても出来る事は限られてくる！だから皆が必要なんだ！互いに補い合い一人じゃ出来ない事も皆がいれば出来る！！？だから炭治郎君！君は君が今出来る事を頑張ってくれたらいい！！？それが巡り巡って皆の役に立つ！！？だから何も出来ないと思ふ必要はないさ！！？」

そんな炭治郎に彼なりの持論を話して炭治郎を励ます泰三

「ありがとうございます！泰三さん！！？」

そう礼を言つて頭を下げる炭治郎、彼は頭を下げた後焔牙をチラ見して焔牙から何か言葉を貰えたらと期待を込めていると

「炭治郎は凄いなだよ！！？炭治郎はね！心が凄く強いのだ！！？兄さんも炭治郎は凄いつて認めてたよ？私も頑張るから炭治郎も一緒に頑張ろ？」

と焔牙ではなくカナヲが割り入つて炭治郎を励まし

「うん！！？ありがとうございます！！？一緒に頑張ろう！！？」

炭治郎と同じく騎士でも法師でもないカナヲ、同じ立場から共に頑張ろうと意気込み炭治郎もそんなカナヲの言葉に同調して共に頑張ると決意する

「なるほど！朔弥さんが残していた文献に記されていたホラーが実際にいて私達はそれを戦うと！！？」

「そうゆう事になるね花蓮、僕達守りし者が本来戦うべき敵！とはいえ僕達はその魔導ホラーを見つける術がない！難儀なモノだね」

「まあな！！？俺が今まで鬼無辻を斬らなかつたのはそこに理由がある！！？」

「ああ、僕が君に質問したやつだね！まあ理由はもう察したけど」

「そうか」

「そうだね、不可解な失踪は鬼の仕業として鬼殺隊は動く、だがそれが鬼じゃないなら？鬼無辻なら鬼の動向を把握している筈、鬼かそれ以外か？それを見極める為に鬼無辻を斬らなかつた・・・いや斬れなかつたの間違いかな？」

「アンタの推察通りだ」

そう話す総悟達、その傍らずっと沈黙していた焔牙は「ねえ？焔牙？さつきからずっと黙ってるけどどうしたの？お腹痛いの？」

「いや、俺は魔導ホラーよりも暗黒騎士の方が気になってな！闇に堕ちた魔戒騎士って何だ？」

魔導ホラーも勿論気にはなるが魔戒騎士として闇に堕ちた魔戒騎士という言葉が引つかかる焔牙、その問いかけに

「暗黒騎士、その名の通り自らの闇に堕ち守りし者としての使命を失った騎士！焔牙ちゃんも知ってるけど鎧は制限時間を過ぎて尚使い続けると自らの魂を侵食する！そして最期は魂を鎧に喰われ消滅するのが心滅獣身の果て!!？だけど!!？その心滅を克服して再び鎧の制御と人の姿を取り戻したのが暗黒騎士!!？でも鎧を構成するソウルメタルはよりホラーに近いデスメタルに反転して凶々しい鎧になってるの!!？」

「暗黒騎士は守りし者としての道を外れた裏切り者!!？生かしておけば必ず災厄を引き起こす!!？だから俺達の手で討たなければならぬ!!？」

そう説明する総悟と朔弥、その説明を受けて深く考え込む焔牙

「自らの闇に呑まれた魔戒騎士か」

そう呟いた焔牙に

「さつきからどうしたの？焔牙？」

とちよつと心配そうな桜花が尋ねると焔牙は

「まだ皆には話してなかったけど俺が上弦の壺、黒死牟に負けた夜俺はあの時自らの怒りに呑まれ心滅獣身になったんだ!!？そして己の闇に堕ちかけ俺は・・カナヲに手を掛けようとした」

そう話す焔牙に皆が固唾を飲み続きの言葉を待っていると

「でも!!？兄さんは踏み止まった!!？だから兄さんは闇になんか堕ちてない!!？」

そう口調を強めて話すカナヲ、闇に堕ちた魔導騎士は討たなければならぬと聞かされカナヲは焔牙はそうじゃないと必死に庇いたい

のだろう

「カナヲちゃん、分かつてる!!? 煌牙ちゃんは闇になんか堕ちてないよ? だから煌牙ちゃんは牙狼なの!!?」

闇に堕ちた魔戒騎士が再び牙狼の鎧を受け継ぐ事は絶対でない!!?

それは十分過ぎる程理解している朔弥がカナヲを諭すと

「心滅獣身かあ、アレを解くには腰の紋章を突いて強制的に鎧を解除するしか方法はないけど・・・総悟ちゃんがやってくれたんだね?」

一度心滅獣身と化したら腰の紋章を魔戒剣で突き鎧を強制的に解除するしか方法はない、あの時煌牙達を助けた総悟が心滅獣身を解除したんだと判断した朔弥だったが

「いや・・・俺が助けに来た時は煌牙はもう鎧を解除していたが・・・待て
☒だったらどうやって鎧を解除した☒」

総悟が煌牙達を助けた時、煌牙は鎧は纏っていないなかった

だったらどうやって心滅獣身から煌牙は解放されたのか? 当然疑問が生まれる

「あの時どうやって鎧を解除したのか俺もよく分かってないんだ、ただあの時カナヲの声と鈴の音が聴こえた! あの時の鈴の音が怒りに呑まれた俺を繋ぎ止めてくれたんだ!」

実際の所煌牙はあの時の記憶が曖昧で詳しく憶えてはいない

だからそう説明するしか出来ないでいたが

「・・・煌牙さん!!? あの!!?・・・俺はあの時いなかったから上手く言えないけど、その・・・きつとそれは煌牙さんを想うカナヲの想いが・・・兄妹の絆が煌牙さんを繋ぎ止めてくれたんだと・・・俺は思います」

そんな煌牙に煌牙を繋ぎ止めてくれたのは兄妹の絆だと言う炭治郎

「禰豆子が鬼になった日、最初は禰豆子も鬼の本能に呑まれかけていました。だけど!!? 禰豆子は踏み止まってくれました!!? だから、その・・・煌牙さんも禰豆子と同じなんだろうなって」

言葉にするには上手く出来ない、だが心の中では確信に近い絆とでもいえる繋がりを感じた炭治郎はそう話すと

「そつか・・絆か・・そうだといいな」

焠牙は彌豆子が人の心を持つていると分かっている、故にその理由が炭治郎の言う絆なんだと察し自分達もそうだったらいいと炭治郎の頭を割と強く撫でた

「総悟ちゃん」

「ああ」

何か思う事があるのか深く考え込む朔弥と総悟

「まあ、ここで話し込んで仕方ねえ!!?先に進むぞ」

そう言つて先に歩き出す総悟、それを見て

「そういえばここって藤襲山?なんか既視感があつたんだよねえ」

そう呟いた桜花、皆が今いる場所は鬼殺隊の入隊試験が行われる藤

襲山

総悟が元上弦の参、龍崎駈音と名乗る鬼の放った強烈な邪気を感じ取り追いかけて来たのだが既にもぬけの殻

この場の誰一人として鬼の気配すら感じずにいる事を不審に思っている

「魔導ホラー共、この山の鬼達を一人残らず喰らい尽くしてやがる」

そう言い放つ総悟の言葉に戦慄する一同

人を喰らう捕食者が喰われるという事実は鬼殺隊にとってにわかには信じ難い出来事だろう

「あの?そのホラーっていう怪物は鬼も喰らうんですか☒」

そう質問した炭治郎に総悟は

「ホラーが喰らうのは魂、それは人間だろうと鬼だろうと関係ない!!」

そう話す総悟の言葉に思わず萎縮してしまう炭治郎

人間を喰らう鬼さえも喰らう捕食者、しかも鬼のように鬼殺隊で対処出来ないとなると仕方のかもしれない

「焠牙さん達は本来鬼じゃなくこんな怪物を相手にしなきゃいけないですね」

そんな怪物を相手にしなければいけない焠牙達を不安そうに見る

炭治郎

「まあそうなるな！今まではこの力を鬼殺隊で使っていたが、本来使うべき相手が出た以上俺達がやるしかないしな」

そう炭治郎に話す焠牙はまだ見ぬ未知の敵を見据えると

「闇に堕ちた魔戒騎士・・・か」

誰にも聴こえないくらい小さな声で呟くのだった

そしてとある街道では

「ねえお兄ちゃん？鬼いっぱい食べたけど全然強くない鬼ばかりだったね？」

「そうだね！血鬼術だったかな？異能の鬼が食えたら良かったけど贅沢は言ってもらえないからね!!？」

そんな話をしながら帰路につく二人、辺りは人の気配すらなく不気味な程静かな山道を近道として歩いていった

「ねえ？お兄ちゃん？この山道なんだか不気味だね？鬼が出そう」

「そうだね！こんな山道で鬼に襲われたらひとたまりもないね」

そんな話を淡々と話す二人、その顔は恐怖に怯える顔でもなく不気味な雰囲気不安な顔でもなくまるで獲物を待っているような顔だった

「ほう？童達は鬼の存在を知っておるのか！まあだからと言って妾には関係ないがの！」

そう言いながら二人の上空から炎を纏いながら落ちるように現れた鬼、まるで燃え盛るような真紅の着物を着た女の鬼は二人を舌舐めずりするような眼を向け

「炎を操る？異能の鬼ってところかな？」

「あはっ！お兄ちゃん!!？私アレ欲しい!!？」

「そうだね！じゃあアレは小夜子の物にしようか？」

炎を操る血鬼術を持つ鬼、そんな鬼に怯えるどころか寧ろ興味深々の二人を見て

「童共！さつきから何を言ってるのじゃ？まあ良い！妾は妾達を喰らい再び十二鬼月へと返り咲くのじゃ」

「そう言つて二人を喰らう為に飛び掛かると

「ねえお兄ちゃん？この鬼、眼に数字が入ってるよ？おじちゃんみたい」

「そうだね！十二鬼月がなんの事か知らないけど他の鬼よりも強い鬼なんだろうね」

襲い掛かる鬼の事など気にする素振りも見せない二人、そんな余裕の態度に

「妾は元下弦の壺、紅ぎやああああ!?？」

「ああ、名乗らなくて良いよ別に！これから喰われる奴の名前なんて知つても意味ないし」

名乗りを上げて四肢を斬り裂こうとした鬼を肉体を変化させて作り出した歪な剣で真つ二つにした修也、名乗る必要はないとたいして興味もなく

「な、なんじゃ☒貴様等は一体何なのじゃ☒」

明らかに人間ではない修也に怯え震える鬼に

「そうだね・・・」

そう言つて修也はまるで山羊を模した骸骨のような魔導ホラー体に自らの肉体を変化させ

「僕達は魔導ホラー、これから君を喰らう者だよ」

そう話す魔導ホラーを見て涙を浮かべ這いつくばりながら必死に逃げる鬼、人を喰らう鬼とはいえ元が人間、生物としての存在が違うホラーを前に鬼が怯えるのも無理はない

「ねえ？泣き別れた下半身放つて何処に逃げるの？」

そう言いながら逃げようとする鬼の前に立ち逃げ道を塞ぐ魔導ホラー

「わ、悪かった!!？妾が悪かった!!？もう関わらないから許して!!？」
必死に命乞いをする鬼だが、捕食者にはそんな行為は無意味だと言わんばかりに

「もう関わらない？随分と都合の良い事言うね？まあ君に選択肢なんて最初からないんだけど!!？逆の立場だったらどう？君は人間を見逃すのかい？・・・なんて御託はいいや!!？小夜子喰べていいよ」

「うん!!?・じゃあ!!?・いただきます!!?・」

未だ這いつくばる鬼に近づき捕食しようとする小夜子、鬼も喰われまいと必死になり

「血鬼術!!?・ 燎原大紅蓮!!?・」

自身の炎を操る血鬼術で小夜子を炎上させ難を逃れようとするが

「うん!!?・凄く熱いけど私ホラーだから意味ないよ?・というわけではないでございます!!?・」

燃えてる事など気にもせず鬼の魂を体ごと吸収した小夜子は

「ご馳走様でした!!?・」

そう言つて体を焼き続ける炎を操り鎮火させた小夜子

「じゃあ早く帰ろうか?・僕達の家」

「うん!!?・私達の家に戻ろう!!?・」

そう言いながら二人は四ノ宮邸へと向かうのだった